1

複製

許

複製不

明 治四十 二年六月十五日發行

明明

治 四 十 二 年六月 1

月一日印刷

編輯代表者

發行者

右

代行

表

者

印刷者

印刷所

東京印刷株式會社

東京市日本橋區兜町二番地
神 谷 岩 次郎
東京市日本橋區兜町二番地
村
館
雄株式會社隆文館
東京市京橋區南鍋町壹丁目貳番地
古 城 貞
吉
(肥後文獻叢書第一卷奥付)

六九四

六九三

流るをしひてさりつる弓にこそ強き心の程は見えけれ

衣川消えぬ水なわや荒いその海路遙かになかれ入りけむ

東てふ國の名にこそ芳しきおと立花の香は残りけれ

おくつきに立埴輪の立物は千代に立てつる功なりけり

いか斗り神の息吹と風なれは残る舟なく仇は沈みし

源義經朝臣

身にしめて誰か見さらむ舞の手にいさ~匂へる花の姿を

詠史

い(薬誰かは外に求む覽すます心のうちにある物を

妓女

朝にけに汲上る水の新なる心を人のころさもかな

心靜延壽·

笛なれや柴人なれや松風の響とのみは聞をなされぬ

眞葉負かよくる賤か世渡りは重さも軽き物にさりげる

安けにも柴ふる人の通哉枝突てたになつむ山路を

樵笛聲幽

えの山焼畑の末遠く立てるは君かいさをなりけり

寄水雜

靑姿をかりそめならぬ恵ゆゑふき身にも人の代りら

平信長公

樵柴を里に貰りてそ山樵はおのか伏屋の煙たてける

たの原浪の入日の影きへて豊はた雲の色そくれ行 手向つる忽ち引し海潮はみたむ願ひのしるし也けり

樵夫

武蔵野の嵐の風に鎌倉の松の木立ははやくしをれし

新田左中將源義貞卯

いかばかりなれし筏の下流の岩間をさしもたかへぬ 咲花を主にしつる旅人のしられぬ名こそ世に薫りけれ

杣川の瀧つ岩間に差なれし筏の棹もあからめなせそ

平忠度朝臣

杣川筏

荒海に鰹つる舟家わすれ身もたなしらす鰹つる舟

吹荒る風をやはにくさひに浪掛をへて漕踊るらん

吹ふタへの風やかさふらん聞へ聞えぬ鐘のおさかな

沖つ風風き渡りぬる海原のはら~に浮ふあまの釣舟

いつ方のたかすむ峯の寺ならむ夕ゐる道に鐘の音をする

松風の同心に調へしは髮らぬ音にも思ひしかなむ 釣の糸の心細さも知ぬ身や舟を家にて世をわたる覚

晩鐘幽

朧かに引なすさひそ千早振神のみ言もこふてふ物を見るか中に浪路隔て~酒舟にふりけんひれの昔を思ふ

琴をかりてかへすさてさいふを題にて

釣舟

(さし

行客舟已遠

蜘蛛のひとひは果集れは百ちの事をよしといふ物を

口惜くのり乘遅れけり渡舟又酒よする程もさほきに

吹風に絶ゅれは結ぶの網のいかに引出る糸にあるらん

岸頭待舟

狩人の矢さきにさても通れぬを相高くも登る猿かな 球摩川の岩瀬を下す早舟のにとる梶のふけに見ゆ

蜘蛛

惣角かほしけに仰木の實をはもりはむ猿の吾は顔なる 沖津浪高く打よする浦なれや踊る釣舟引をあける

買らに梢を猿のつたふかな鳥の翅もあらぬものゆゑ

河舟

峯高き梢をつたふ心には人にまさると思ふらんやそ更る夜の窓静なる雨の音にねふれはねふる燈火の影

樹頭猿

浦舟

夕凪はよする磯への浪もなし只白鷺の立てるのみて 降雪にかけ軒の玉簾まして花にはまして月には

雨夜燈

釣舟の歸る入江の蘆まより立ちてねに行く鷺のむら鳥 幾度かくれぬと思ひし雨の日の限り知る~入相の鐘

白鷺立汀

雨中晩鐘

六九二

よしさらは憩ひて待たむ渡舟よふさも今はさしもか六九一

竹

里ちなき野へのかりねと思ひしを明行方に鳥の音をする

過しのみ何か云らんめの前のけふの現も夢にやはあらぬ

遠村

夢をしもうつに誰か頼むらんうつも夢の世の中にして

たれかすむ田中の庵なれて遊ふたつの千年を我物にして

世路如夢

鶴

暁のねのあとに見る夢は同と思ひに結ほ打群れてしほひに漁るたつのさもゆほひかに見ゆる浦哉

曉更夢

海邊見鶴

深きよの夢は跡たになかりけり枕にさはくなくも誘へるよはの嵐哉
嬉しき夢も見えける物を蘆たつの脛を枕に騒くなるからねの磯に潮やみつらん

鶴聲近枕

風破夜夢

松經年

磯山をこめると思ひ浪の音は松ふきのほる嵐なりけり

くめられぬ物は世中の人の心の水のみなそこ

何にかくこふる都そしかりとて立も出へき山ならなくに 吹すさふ嵐の音に浪かけし昔をしのふすみよしの松

寄水述懷

よる浪をゆの手になして面白く風の調ふる琴の浦松

海邊松風

山家思都

名所松

庵めて我みならす山の井のみつよっ山家井

窒前竹

住そめしをりをもちぬの山家經年

いつのまに竹の庭とは成でけむ一本こそは移しうゑしか

世にあらはこそ年も數へめ

つくられし琴に笛にも面白く風のしらふる窓の呉竹

二つ魚もすみけり

さもあらはあれ消えぬる窓の燈火は音さやかなる風のむら竹

物をのみ思ひっかれし心にはねふらぬ間にも夢を見えける

ねぬるよの心いかなる心にてあらぬ事のみ夢に見ゅらん 枝茂みおほふる日影のかつらおひてさも年ふかき谷の松かな

山風の音

~れつ~

田家見分迷ふ野末に聞も嬉しきは里の調へのにはこの整

さもこそは見えぬ浮ねの愛ならめうたてますから騒浪哉

柴の戸をきち葎や人もこす我も立いてぬ心しるらん

旅舟開

幾世へて穿ちし浪の跡ならむ下潜り行磯のいはむら

離れそにたてるいはむら打こゆる浪のまに瀧そ落ける うき旅のさこそならひの袖ならめ拂ひもあくすおける露哉

閑居

客衣露重

磯巌

夢にのみ僅に通故郷のはかなの旅の心なくさや

旅宿夢

磯やかた枕に響く浪の音にみちたるしほの程をしるかな

海邊波近

そほち来てかりつる宿ももる雨にみのしろ衣ほしそわつ ちふ

旅宿雨

夜もすからふれとも袖にもらぬあめる枕の山のたきつせの音

瀑近夜疑雨

陰深き松の下道碑のしるしの寺やいつこなるらん

道もな人も通はぬ山なれや木深き鳥の聲斗りして

草深き野路の澤路渡る駒のそきに水をしるかな

澤水

松多不見寺

林幽不逢人

池

いか斗り水の心の清からんうきを聞き耳ならの池

遅れぬ急きて來にし我こそは歸りて人をまつの下道 奥深き竹の中道たれか世を隔てはてたる住家なるらん

行路待人

竹徑通幽處

谷深み友よひかばす鳥もなししたたる水の音はかりして

我庵は人とるらめや木間もる月斗りこそこらはしるらめ

谷水音幽

林下幽居

むさひ暮山雨

山深幽居

六九〇

いかにせむ里さへ遠き深山路に雨さへふりて日さへくれぬる

の棺を傳ふ脛をのみ雲のとさしの内に聞つ~

おぼつかなさきにゃ行き此道なこちにてこそ契りおきしか

道たへぬいか~はせまし薪こる音も聞えぬ谷の杉むら

鳥啼不見人

さりけり

雑

たえ(に通ふ千鳥の路にのみなくさの濱の慰めよさや

乗馴れて晝さへとする妹か門駒は人めもおもは馬上戀

寄名所慧

寒けさに寄添の埋火をひしき人とおもはましかは

まきらはす脛よ鼠の穴にさへ隠れ入へき心こそすれ

人逢被鼠鳴戀

寄爐戀

浮名のみ早く世には流れるの流れよるへき物ならなくに

さもこそは手にかひなれや鷹ならめすうる程なくそりばてし哉

引放逃戀

あはて目をふる川の立杉の美しくも二もこにして

寄藻戀

櫻花いさをりさらむ山守の許すまたは風ちこそふけ

欲盗戀

流れての人の心を白川の瀧のしら糸みたれてを思ふ

寄杉戀

れてもひときはやま水のすましもあへぬ我心かな

山家戀

みくさるて影たに見えぬ人を思ひよるへのみつからそうき

明ぬとも今朝は帰らてあひきてふたにたてむ辛き報ひに

寄瀧戀

夏やせにかとちし戀は秋風の寒く吹てそあらはれにける 小山田のしたひの水の下にのみ流れててふる心しりきや

終夜固辭慧

見せはやな春の詠めのさみだれて露に時雨にくたす袂を いなつきの光の程に見るとても宵々たらぬ契りなりせは

秋顯戀

寄水戀

三人ぬる習ひたらせは二人ねて濁りぬるを懸さらましを月分は懸かりけり玉簾おろしとめてや今はねなまし

四季戀人

寄稲妻慧

ことかたに打よせけりな大よとの恨みてかへる浪見えしは朝床のうつ上に残る移り香に夢ならさりし夢そらる~

寢人戀人

寄月戀

移香戀

恨回他人戀

老に老にけらしな見てしよりのみはさながらにして

人遠逢戀

思出舊女戀

さりとると頼みしよばのかひはあれと鳥より後にあふはあふかは

年ぶれは岩にも跡のあらばれて一人は浪のたけぬ物を

及曉遂會戀

片戀

そこさえもほのめかしつる月影の行衛やいつと村雲の空

心のみ通ふ山路は中々に分ゆくよりも苦しかりけり

教居隱戀

遠戀

あやなくもさふさに風の騒哉しつえの櫻をりもあ～な～に

こよろきのいそきてよせし夕浪は沖にあるへき心を見る

他行時來戀

被嫉妬妻戀

ともし火を學びの窓にかけても心は妹が家にのみこそ

入もせぬ人にさほそをあけし哉閨の思はむ事もはつかし

來不留戀

替うらをはべてそこらむ思ひ川人の心の深ささは

戀學問戀

うきふしばいどくひけりさきのそかひに寐つ あかすよに

海人たににもかつきはしらし海ならぬ人の心の深さ淺さは立出てんどふうらのかひなきは逢見む事のかたきなり見

並床不逢戀

みちのくの奧をかねつ~契りてるねそたのまれぬ人の心を 今はと思ひははてし人心通ひてこそは夢に見にけり

眞僞何由識

ト戀

夢後增戀

疑行末戀

といへは空しき名さくたつものをあひ見後はさもあらばあれ

たのみこし舟流したる思ひ川思ひ斗りもえこそわたさね

不惜名戀

央中人戀

いつかいかにも人字戀

六八八

更ゆけはまつを今宵と書つやと我さへも疑はれつ~

見返事無こひ渡る浪路外にありそ海のあらぬ浮寢に夜を明しつ~

互惜別戀

の心を白濱にふめる千鳥の跡もなくして

また相見て共に歸さまし入れかはしたる袖の魂

六八七

冬山

送書待戀

から猫の尋ねて當る程もなし雪けの空を洩る~日影はいかさまに書流してか水莖の深き心を人に見すへき

くれて行年の急きはさもあらはあれ長閑聞かむ鶯の聲

立歸るあしたよりこそ待たましか年のこなたに来なく鶯見るも獪ひま行駒の心地して幾世はかなき契をそしる

冬日

慧書

思ひきや昔我せしかねここをよその契に聞む物とは

僅見戀

歳中

聞談與人戀

休らはて暮る~年哉來む春はいそく心もあらしもの故思ふ事心に籠めしほとはあひなたのみも有ける物を

春漸近

ほの見ても人ゃ心にかちるらん怪しく知らぬ歎きせらる~

春の来て残る嬉しと思つる年に暮れ果てぬめり

言出後悔戀

初戀

降雪は雪になせても咲花の花を知らせて薫る梅かな

年のうちに春たちこしはすのつもこりに

あせめやは険し梅の匂ひ香は花と雪の降り冬衣

咲く梅の冬籠りせぬ花ゆゑは下なく窓もされさり鳥 総角かまろはす見た老か身も心は雪におり立たれつち

雪中早梅

冬興

今もかる使たつちしみていざはやも咲ぬる梅か踊り咲く棺の花と思ふはかり冬人事

早梅

降る雪の箸の竹を埋火によりても寒し下をれの聲散はてし木々の紅葉の後瀬山つもらん雪の花をこそまで

くらの十のみさき八のみはかに

降雪も花と見て見舞姫の五たひかへす袖のけしきに

に

ほどもなく咲出る梅をしら糸の後には花・無しさいひけり

降り積る雪を凌きて咲く梅や春にしられぬ春の花

かくすとも

鎧きし昔思へはさゆるよの薄き衣も寒からなくに

戀

鶯の鳴へき梅は咲にけりいつこまでかは春の來つらん

雪中爐火

松雪

風に雪もみたれてさもあらはあれ消えし夜床の燈火る理む火桶の火たに残らは

面白ききねか堤の片おろし吹おろす風に雪もみたれて

撓みなく炭さし添へる埋火の翕も冬をしらぬよは哉

竹もふと松も埋れて自つからつくれる庭の雪のむら山 梅か香を燻らすよはの埋火に春の眠りの夢や結はん

神社雪

鞭打て分行よりも棹さして見るこそ雪は静けかりけれ寒き日に問ひくる人のあるしにはまっ埋火をさしてこそ

庭雪深

夜埋火

乗る駒の口をしとめかつ拂ひかつ見る雪の面白きかな 疲れたる鷹をも猶そあはせつる夕日の岡の色とたちに

船中雪

爐火

岡鷹狩

降つもる雪の竹むら燈火の灰めく見れば人はすみけり

の中哉

馬上雪

雪中燈

つむをやかて上荷に折そへてなつむ驛の雪友舟もあらこのさそふ雪の江に心ひく釣の糸かな 風吹かぬ森の白雪ちり行は塒の鷺のたつにそありけれ

驛路雪

明る戸を待ちてさくらをおりつれて漁りかねたる雪の鶏

冬來れはみな自妙になれるかな老にけらしな雪の山眉 埋れ雪の戸さんは明たれて打拂音もせぬかな

獨釣寒江雪

雪中

雪と見月の光は搔き暮れて降しく雪を月と見えける たか庭も同けしきに積りけむくる人遲今朝の白雪

山雪

後をのみ厭ふさ人の思ふらんひとり見るへき斑の雪かは

暮ぬへきけしきも見えぬ高砂の尾上の雪に鐘響く也 暫しこそ吹もはらひし白雪の底に成ぬる風のこゑ

夜雪

依雪待人

松は音たになかりけり雪の上ふく谷の朝かせ

夕雪

六八六

埋れしのりなへていさ分行かむ吹雪くる風のみたらを雪の白影

六八五

河千鳥

家をたに朝清めせて見る哉積もる雪にちりやかえるさ

荻の葉は枯にし宿にくれ竹のひとりさやきてふる霰哉

竹亭聞霰

風寒みさらても夢に疎きよを竹の葉さやき霰ふる也 しらみ行雪の光や明ほの空にさきたつ明ほの空

頼みつる閨の埋火きえ果て~のこる夜寒ふるなり 降雪に縮の竹もうつもれてつくらぬ山を作る庭かな

竹霰

曙雪

さらてたに影すさましき冬の夜をまして荒れてる庭の面の月積れもまたちの枯葉たに隠れる果てぬ野への白雪

深夜霰

深雪

秋はた袖にのみこそ宿しけれ身にさえとほる冬の夜の月

雪の色に紛ひて雪の色よりも寒けき冬のはの月哉 遅~明るよその門さへ憂きものは雪降もあした也けり

古庭冬月

淺雪

初雪

冬月冴

舟近く浮へる鳴は釣の糸の外にひかれぬ心しるらむ

夜もすからさやきし風のあと見れば氷に立てる池のかれ芦

水鳥馴舟

しほみたぬ堅田の池の芦の葉 見ちくすくなる枯る~多哉 山川の氷のひまを行をしのつれなき妻を恨みかほなる

山姫も冬は氷にむすばせて雲こそいてね瀧のしら糸 また薄き芦まの池の朝氷あされる鴨のむな分にして

池寒蘆

一鳥過寒水

瀧水

ひらに夜だと鳴くや水鳥のつらとのまくら夢もむすばし

朝見水鳥

山川の岩の氷これもまた風の掛たる水のしからみ

河上水

夜水鳥

橋もなき川瀬の氷同しくは踏渡るへくこちも重ねよ 打よせし浪はこほれる山川の堰を越えて千鳥なくなり

さえ!し閨のとほそを曙の空におどろく四方の白雪

朝雪

見える山も紅葉はなかりけり散は庭の棺のみかは冬の來て岩まれる山川は水こそ水をせきさめにけれ

結

落葉隨風

さもあらはあれ枯にし草もおき渡す霜の花野の冬の曙

もみち葉のあたら錦をよるたちてよる行風の心なになり しさくなく聲も寒い冬枯の荻の葉しろき野への朝霜

風の吹く山の下水はもみちくる音ばかりして 冬の野の萩の古枝にゐるもつの鳴く音も寒霜の曙

夜落葉

枯野霜

手も觸れてわか見る庭は掃く風散する風の木々の紅葉葉

吹あくる嵐の末のもみち葉はしくれぬ空の時雨 杉むらの日影隔っ逢坂は朝ゆふ霜のきゆるまそなき

落葉深

野霜

山霜

落葉

吹送る磯山風におく舟の手向のぬさと散るもみちかな

山風に残る紅葉は散はてし梢よりけに哀れなりけり

谷風に散かひくもる紅葉葉は流るや水流れぬや橋

なりけり

紅葉殘梢

舟中落葉

水くみに通ひと賤か跡なれゃ一筋れ谷のもみち葉

時雨

逢坂を越えつる雲の一むらは都にはらふ時雨搔暮し軒に夕日の影さえて木葉はかりそ晒しくれ皃

落葉無行路

時雨晴

吹きまよふ嵐を分る深山路は紅葉の錦きつ~ぬきつ~

定めなく軒に時雨のそく夜は夢さあやなみく見えすみ

路落葉

六八四

嵐ふく梢に残る紅葉葉のはかなの秋の忘れかたみや

落葉埋橋

散りつもる紅葉はかりや幸ならむ夕風ある浦の釣舟

氷初紅葉はをさらて止め風ならめ散しくをさへ誘ひ行哉

明では染たる雲の色の消えるも惜き風のもみち葉 吹風にうかぶ木葉の動かぬやけさよりこはる庭の池水

木落見他山

河水

野分ふく空も近く成ぬらん風の姿になひくむらくも

さらてたに寂ひ行野への秋の色を霜さにこそ置きやつしけれ

秋雲

ざるそばもみちぬ松の枝なら染めしをさに隔つくしゃは

暮秋霜

もみぢ葉の染めるを見れは松山るよきては降らぬ時雨なり見

松隔紅葉

潮風の吹ぁくる浪を時雨にて磯邊の紅葉染め渡すらん

松間紅葉

谷川の水も匂ひぬうへも名の高をの山の紅葉なりけり

海邊紅葉

見し春の花も忘れつ嵐山松さへ匂ふ木々のもみちに

高雄山にて

植しこそ色こかりけれ紅葉はも早くしくれし秋篠の里

あらし山のもみち見に行て

秋篠里をとひて

染渡す紅葉の山の村時雨めくりし斗りめくりてを見む

九月の末つかたやまとに行ける時

交り行紅葉の色は露霜の秋の日数のそめるなりけり

紅葉遍

六八三

春めきてたつも鳴つる朝雲の空搔くらし時雨ふるなり

夜時雨

鳥の音に白むと見と大空の又掻くらし打しくれつ~

朝時雨

松風の響き斗りを時雨にて降もなしにふうき雲

曉時雨

紅葉にも問ふ人はなき我宿にまたぬ冬こそ早く来にけれ

時雨雲

冬の來て時雨る~空のさなからに雲に成行み山への里

閑居初冬

りなく嶺の紅葉をさそへるは冬を現は嵐なりけり

初冬雪

定めなき時雨の冬に成にけり嵐の空にまよふうき雲

初冬嵐

初冬

温むる酒も有らぬを山陰の紅葉の林ひたきなくなり

時雨すは紅葉見にとも思ひしか村雲はやし秋の山風

秋

秋時雨

紅葉逐染

さえ渡る光にまかふ白髪になれこし秋を月もしろらん いとはやも来て見つ哉立田川潜りそめたる水の しほ

初雁

月

は

そめはしめたる馴れて見てし思は~行末の齢ともなく立田川のもみち見に行けるにやうく

れなくに故郷の懸しさ増る秋のよの月

俤の浮ふはかりやうかふらむ故郷こふるよはの月影 すみ渡る月より外の色もなしいつ~籬の白菊の花

月多秋友

月前

然りとて背か移

竹亭月

酔なから千世もへぬへと咲く花の匂ひをくめる菊の盃

菊花

いと~しく玉やしくらん呉竹の臺にあゆる露の月かけ

賤のめかさきあらひ衣さめるよの月の色に染めて打けん

賤かもるかひやの烟消えぬめり田面さやけき秋の夜月 打しきるか砧はさゆるよの月の氷を砕くなりけり

禁中月

焚き捨てしかひの烟やるらん明る田面の霧の一むら

浪の上に落つるも惜き月の影山のはそのみ何恨みけむとみ草の花や咲くらん立こめし朝霧かをる小山田の里

田月

月前擣衣

海上月

田家朝霧

ゆきはかつ伴ふ水の月影は川傳ひにて見るへかりけり

天津鴈なきて渡れる大空のひとりはすまぬ秋のよの月

もなき谷のした水

河月

月前來

哀れにも尋ねて月のすめる哉汲む人空高くいにしほたるや告けつらむ秋吹く風に渡る雁金

谷月

瀧口の鳴らすゆづるもさやかなる雲の庭の秋の夜の月

隠れかの世を隔てたる竹むらる月にとはる~暇そあり鳥

羈旅見月

来ても見よ盛の庭の菊の花色をも香を知るも知らぬも

菊初開

植しみきりの菊の花咲ぬけふや千年の初めなる覽

秋の夜のころなりけれ*一

待人の心は山を越ゆれる月はえこそきそばさりけれ 鳥鳴きて白むと思ひ山のはに影仄かなる月を出てける

惜まる~山の彼方の月影せとなたに待つを知らすやある覽

曉出月

待月

秋風の幾夜磨きし空ならむ凄さはかりにすめる月影

空に澄む影さへあひに逢坂の山たちいつるもち月の駒

秋深月明

駒迎

晴渡る月の空にそ知られける暗からさりし秋の雨夜は

夢覺賤や引らんさる鹿のになるこの音つ~くなり 胃の雨にいをね人や知らさらむ月爽かなる有明の空

田鹿

洩出る月の光のさやけさに恨みもはてぬむら雲の空

さ

吹迷ふ嵐よしはしたゆまなむき雲間に出てし月影

浮雲の絶間さやかにもる月の折々人をおとろかしつ~

こちにありさいはぬ斗りに月影の差出て又雲隠れぬる

雨後月

の妻とひまさる整すなり嵐も寒き山のはの月

月前鹿

いつの間に出し高根の月ならむ麓は今そいりあひの鐘

小萩原むな分にするさを鹿は何の花の妻をふらん

雲間月

鹿交萩

秋のよは更けにけらしな鳴く虫の聲るこほる~露の月影 むら鳥にかくる整のうちに早くも空は月になりぬる

眞萩原盛り爭ふ秋の虫のこそよるの錦なりけれ覺束なども にまち 出て見むといひと月は高く差登りたる

月前

夕出月

いかならむあたら月夜のよたしとてやりし使も未ヶ歸らぬ

虫聲滋

對月待客

鷹人の帰るかた野にふりいて~鳴くやをふさの鈴虫の聲明でこそ枕はさらめ夜半の月いらぬにいか~閨へ入〈き

終夜見月

野虫

さもあらはあれ暮る~日影に鳴く虫の聲の千種に變はる花野は

折伏せてねたる小萩の花妻に今朝の別 小鹿鳴くらん

身にしみて眠れぬよはの月の影うこそ鹿の鳴き明しけれ

風吹は猶招きけら我門の一もごす~き人もこなくに住の江の松をつくして吹風の秋にこたふる浦なみの音

薄風

海邊秋風

さを鹿の起きて離れ野くなれ露に萎れしか花つま

野となり里の夕を来て見れは庭も籬もた~秋の露

朝萩

故郷露

淋しさをさこそはしめし宿ならめ絶えすも戰く荻の風哉

荻の葉は隠れすみか吹通風はかりと知らはるらめ 秋くれは庭の木陰朝なこぼる~露は雨にまされり

庭露

幽居荻

人すまて哀れ幾世に成ぬらん露さへ深き苔の板しき

苔露

荻の葉の末打なひ降雨のそれさへ秋の整を立てつ~

軒の荻のよはのともすり

雨中荻

女郎花花の色白く匂はすはよるとは知ら野への月影

徒らにそほつと思ひ秋の野の露わけ衣花を匂へる

秋風は吹撓むまもなかり風底萩

月前草花」

秋風のよなく草花露深

おきそはる露をは秋と思ひけり下に花さく草もありしを

いつのまに寝覚の秋に成ぬらん始見草花

風打そよく軒の下荻

荻知秋

萩か花咲るを見れは吹風の知らする秋は遅くそ有りける

山里は茂るの糸先秋

乙女子か手向る糸にたなはたの長きりや結ひそふらん 花薄吹のみ靡く秋風は野へにさへこそ浪をたてけり

山家七夕

秋の野は吹風白く成にけり穂に出ぬるらしこの”をすべき

残りぬる夏も限りの空なれや夕風くもり村雨をふる 花薄打なひくらし打靡くあさ霧ろし野への秋かせ

乞巧

野外薄

*

草花薄さなから星のたむけにそする

寒く吹なくに裏さひまさる荻の音かな

夏夜待風

早秋雨

闇の中に鳴らす扇のす~しさや秋にしられぬ秋の風 おかるへき闇の扇恨むらん通ひ初めぬるよはの秋風

閨扇風

早秋

いつの間に秋の色には澄みぬらん西吹く風の夕月の空

夕顔の咲る軒端に日くらしの鳴きてもくれぬ山陰のいほ

初秋月

山家夕顔

夏にも夏はなかりし瀧川のまして秋たつ浪の夕風

夕顔の映るかきねに涼みつ~笑みの眉を我を開きし寄る浪の響も秋になりにけりすまの入江のまつの夕風

立秋

夏山の木葉さやきし夕立のやめはつかる~蟬のむら聲

秋雨後蟬

隠れ住に虫のねの仄めくきけは秋は來にけり

そへても嬉しきは蛟るなき宿になれるなり鳥

歸れかの荻の葉さやき吹風の思ひ限なく来たる秋哉

閑庭秋來

幽栖秋

鵜川たつ夏の盛になりに見落つる夜もなくさす篝かな

蚊遣火

鵜川

五月雨を佗にし空にゅふ立の又こひしくも照る日影哉

夏野は茂りにけりな漁りこし駒さへ草に身を隠すまで

祓川流せる罪に哀れわか積もりし老をたくへましかは

夏草深

夏日

夕立の雨を残せる竹むらの雫を分けて月をさしくる

六月晦日によめる

夏月透竹

暑さにそむけし窓の燈火に消台はかりの風もふけなむ

ふきやる涼しさは風こそやかて蛇遣なりけれ

鳴く蟬の聲の雫となりにけり一むら過きこもりの夕立

のこと跡はかりこそ見えにけれ拂は庭の草の上の露

秋になる景色もしるし葎生の昨日はあさき庭のしら露

水邊夕顔の映る山本卯花にさひし垣ねのそれかあらぬか

晴れぬべき景色はかりに幾度か人はかるらん五月雨の空 風の音の涼しさ添更くる夜の月影なひく窓のわか竹

郭公なくにきほひて遠近のくほ田あお田に早苗る也 暮る ちより夏を流せる川浪のことをせにこそ月 澄みけれ

五月雨久

竹間夏月

河夏月˙

かきたりし小田の水泡の衣はさてやけふも早苗さる覧

暑さを忘れてに月のよの顔で秋になりなましかは

いつまでも人苦しめの郭公鳴かすどもなし鳴くこともなし

早苗多

涼しくも澄みぬる月の光哉照し日影の空はいつらは

郭公稀

夏月

郭公行も歸るも分れつ~なきてや空にあふさかの山

尋ねこむ人にあけたる月の門さても叩くは水鶏なり鳥

我のみと思ひしものを郭公なかぬ里なし聞かぬ人なし 五月雨の時間の月の珍らしく水鶏さへにも庭に鳴く也

郭公頻

降雨に待れし宵のほこ~きす晴れゆく月の空になく也 五月雨は名残はかりに成りにけり緑の空にまよふうき雲

郭公逼

月前水鶏

消え残る雲雨けはなかりけり五月の山のゆふ月の空

雨後郭公

五月雨の雨には濡れて姉ちめと前の棚はし浮きぬさいふら

五月雨晴

郭公なく音木ふかく聞ゆなら雨打けふる谷のまつ原

雨中郭公

五月雨のまさるみかさのこえてみ谷の松浪の下折

郭公なく音はかりそ残りける月はかくる~峰のうき雲

梅雨留客

雲間郭公

溪五月雨

しはなきて郭公さく惜む夜は傾く月もをちかへらなん

五月雨の山郭公はる~夜の月に翅やほしてなくらん 月も日かくし果てつ~降りしきる雨や五月の日かすなる覽

連日五月雨

月前郭公

六七八

六七七

卯の花の盛りの里は白妙の浪もてゆへる籬のみして 暁の一むら雲にかくれ行月に代りてなくほどきす

卯花

暁郭公

散るま~にやかて縦になる枝は花に隠れ若葉也

郭公聲の盛りになりにけり奥にはぬとはきかぬ夜をなき

花落枝緑

連夜聞郭公

夏も分か山路は白かしの枝もとを~に茂り合ひつ我心よその山新樹

遙聞郭公

遅櫻匂ふやいつこ鶯の聲する谷も青葉なりけり

時鳥今はなかなむ待たる~をさこそならひの音なり共

餘花何在

久待郭公

さもあらはあれ暮にも春も藤の花夏に掛りて喉し匂は けふもなかすもある哉郭公雨けの雲の空頼めして

昨日かも根芹つみつる澤水に螢とふへくはやなりに帰るとも家路は暮む宿りしても尋のお山ほさいます

首夏藤

待郭公

鶯のなく音も夏に成にけり若葉の山の木々のむら立郭公一聲もせぬ山路にはつけしさへうたかはれ見

首夏水

遠 郭公

首夏山

尋郭公

夏

郭公忍ひもあへぬ聲すなり月もほのめくむら雨の空

鶯にさはれぬ宿も匂ひくる音をわけて春をしめつ~

郭公

汲酒にゑへるも同心のさけさの春に遊じめ宿なか 山里の垣根のうつき咲おほふ花をよきては道なかり鳥

家々春

卯花隱路

懐かしき花の匂ひをねやにいれてひとりはふかぬよはの春風 若葉さす木のまに咲花の白きを見ればば夏は來に見

~

薄きこき若葉の山の夏衣さくら重ねに劣らましやは

隈もなく茂る青葉の山櫻折てかさし~花はいつらは

空まであくかれてきくとはしるや山時鳥

人傅にきかぬりそ郭公ねたくもよその里になく哉

軒近くなきこそ渡れ郭公月のよすから雨のよすから

春風夜芳

住吉の春の海へに打いて拾ひ暮らすや家忘れかひ

いたつらに音をなく哉呼子春の歌の中に

歸らめや妹は待つとも鶯にかりつる宿の花に別れて

暮春鳥

夕野遊

夕霞立もそふ哉行春のほたしさたにもならぬ物ゆゑ

けふは又華摘みてそ歸らまし昨日は厳をり暮らしつる

幕春霞

風も無く凪たる春の大空にこれみたる~糸や何なり

野遊

うへしこぞとみてあてなる花ならし疊む匂ひの限りられぬ

牡丹

散る花をきも止めぬ物故に長き日くらし糸遊ふらむ 見る人の心さへにもまつはる~松の梢に藤なみの花

ふかみたる枝をもかねてをしむ哉さけは嵐のさそ櫻に咲かす谷の川橋いつこさもいはぬ色なる山吹の花

遊絲

松上藤

残りなく誘と思雨風のはるまちし花ちあり 乙女子か遊春野に花咲ききての色ににつ~しの花

花有遲速

歎冬藏橋

そはて咲ける嬉しき花櫻さこそは我も人におくれし 紫に袖句はして乙女子にあらそひつめる華おもしろ

雨後殘花

躑躅紅

櫻花ちりしく春は人をまつ庭をさへにも清めさり見 百千歳めの春に漁りては憂 嬉しさ思ふらんやそ

翫殘花

摘菫

櫻ちる川瀬の小鮎花なから汲みとる賤かしわさおもしろ 暮かての春の夕日の山のはよ入しとやするいれしとやする

花時不拂庭

桃のもとに牛をり

河落花

さる筆の疲れやすのに出て見る春の日影は高くして

ふむもし踊ら道の一すちの花ふきわけよ春の山風

春日遲

六七六

鳥暮行く春をよひもかへさて

六七五

ぬらん

花埋路

我門に馬の音すなり櫻花咲ぬ告けし人や来花誘ふ尾上の嵐吹にけり霞の中にきゆるしらくも

絕間なき松絕間の見ゆる朽木のまの櫻咲きゃ勧めけん 立こむる山の霞咲花の散り際もなからましかは

依花客來

大殿の御階の櫻榻ににほひあふまて散らすもあらなん 散る花の昨日の嵐けふの雨あすは何にか心(たかむ

双林寺なる西行塚のもとにて

花隨風

僅かなる朽木の櫻花さきし春やいくよの昔なるらん 誘ひ明くる棺の櫻吹たゆむ風の末にや雪とふるらん

松間花

霞中落花

暮残る花の棺をしるへにて夕こきかへる浦のつり舟 神の音もきほふ春の雨花陰に隠れもあへす騒く諸人

禁中花

花日々落

淀川堤の花見に行ける日にはかに雨ふりて雷

おどろくこうなりぬ

水

海邊夕花

塵にのみちるを櫻の盛にて山を嵐の名におほせけむ

咲きと咲く花を堤につきあけて誰かせくらん春の川衣をぬふかそ見る

難波なる梅宮の花盛に

春風の庭の白雪けふもなほきえぬ匂ひに花見えつ~

咲花の木の間に落つる瀧あらし山にて

あらし山の花盛にさなせの瀧を見やりて

かさつ~老をは吾は隠せ共花は面をふせつと思はむ

せきあけぬ川瀬の浪のつ~みより餘は花の盛なり見

落花

河花

誘はねは人誘ひ来て咲花の野山をあかぬ日そなかりける

櫻咲く庭の池水浪あやに花のにしきをおりかさねつ~

花插頭

はるのしらくも

池花

來ませ人今盛なり迎ふるも送るも庭の花の木のもこ

谷深(咲ける櫻や鶯のつけし古巣の花時不閑

溪花

の糸は雲の木陰行く春ふらし

風ましり雨はふるとも山櫻ゆきて見む簑笠にして

雨中花

逢樵夫問花

いかはかり咲績きたる花ならむ雲は絶間もあり霞中花

花の相やいつ~春の野は霰のみこそ打かをりけれ

山路を

樵路花

花間待月

花滿山

籠にみたぬ野への蕨はさもあらはあれ初花櫻折りて歸らは

花映日

春の日に照りかはしたる花の色に霞もえこそ隔てさりけり

家つとの野への早蕨まつ人を驚かさはや櫻かさして 峰高きいはねの櫻のる駒を杖にかへてもわくる哉

木の本にけふも團て盃に浮ふる花の影にゑひつ哀れてふ事を集め庭櫻うへこそ八重に花の咲けれ

尋蕨折花

山花

八重櫻

思ひのみ優るやいかに散る花の待て事もきかぬ物故

月にめて雨に見はやす櫻花まして曙ゆふくれのいろ 類ひなき花の色哉雲と見え雪と見えはよそ目也島

蝶にそひ鳥にたくひて終日に木傳ふ心花さしらすや

長き日の風も通はぬ花の枝にしつ心な(蝶の飛ぶ哉 濕やかに降て晴しは遅れたる花を咲せし雨にさりける

花

はる日の光りに匂ふ山櫻雨に萎れし花かあらぬか

近花

あこかる心の春の花盛り姿へにもわかえましかは 春雨の雲たちふ嵐山松もさくらもけふりあひつ~

花の歌の中に

雨後花

六七四

なけならぬ夜の櫻の花蔭にまして匂はむ山のはの月

雨のふる日あらし山の花見にゆきて

咲匂ふ山の彼方やいかならんこなたは花の限なり鳥

山路皆花

折添へて歸る柴人散らさしと思ふ花とも重荷なりけれ

心嘗ての花を問つる柴人のこたへ嬉しき峰のしら雲

花盛に鴨川の堤を過て

のお原女折添眞柴も花の香に匂水もなき岸迄上る舟ならは花の林にこきもいれけん

見花忘老

六七三

ひなは遠さかりなむ櫻花木陰に舟を繋きすゑてん

青柳も妬しさ思はむ紅のうす花さくら糸をたれつ~

舟中見花

ぬひつへき柳の糸は染かけぬ櫻の錦はやもおらなむ

尋花

我心止りはてぬる花の枝うへこそ蝶も打ねふりけれ

終日に吹もこぬかな花にやとす心を風やしるらん

難波なる鶴寺の糸櫻見て

人のめつる詞の花をさへ重ねて匂ふ山さくらかな

待花

青柳花

さもつけぬ山より薫りくる風と花の使ひ也けれ

靜見花

花開風香･

たれかまた浪の浮ねに慕ふらん海路遙に歸る雁かね 分け上る峯はまたしき櫻花父も麓にくだりてを見る

雲雀

朝床に聞こうくひす聲絶えて軒はの竹に春雨をふる 嬉しくも咲たるけさの庭櫻夢に見えや花のたましひ

海上歸雁

山花半綻

はねぬれて来なく鶯降さしもしられぬ雨をしらせ顔なる 山里の使をまたは櫻花咲出しけふのいろは見さらむ

朝春雨

花初開

れも嬉しき

渡る花の色々鳥の聲々

春雨

蕾より我見し庭の櫻花今はしばしさもあらはあれ惜しむ一夜は明もめかれさらまし

百鳥のそはるなり山まちえら花やな夕雲雀はてもなく音の消ゆる迄あかるは空に床やしむらん

立をはる霞の空の夕雲雀見えみ見えすみ猶上りける

待遠の櫻ゆゑには移り行栴をさへにも嬉しそと思ふ

花の香をかぶ風に吹かぬ哉山は霞のほたしのみして

まつ見むと思ふ花には柴人の分ぬ山にも分を入ぬる

いつ方に喉隠れたる花ならむ迷山路 誰ならなくに

初花

の綠の風を今朝よりは花の香にして身にしむる哉

薫りあふ風につけてそ遠近に咲き花を花ち知るらん

映ぬいかにしてぬきさめし露の玉ならむ末結は青柳の糸 立こめし花の匂ひらあらはれて霞をいつる山のはの月

柳色雨中深

春曙

春に吹風の心を青柳のひぎりしめても打ゆらくかないかはかり霞める春の空ならむ月夜ともなき月のよは哉

柳露

春山月

百千鳥今や相になきたむ花の匂ひにしつむ月かけ

きく花の錦ぬふへき糸なれやまつ染かくる春の青柳 ふけ渡る月は霞にねふれ共ねまくの惜しき春のよは哉

柳靡風

霞中月

柳垂糸

深夜春月

をりそへて踊る柴人早のおほき所をわれに敢へよ

青柳のしなひに匂ふ梅か香花をさへにも貸なしかば

心なく人に見るさも梅の花香をのみしめて帰らましやは

梅香移

樵路早蕨

見すて~ほえも行やらぬ早蕨の多かる山路日々暮れぬ共

折梅

鶯ちをる一枝はゆるすらんなきてをしへし梅の花

見え夢の背覺えて懐かしき池のつ~みの春のわか草

路早蕨

山家皆梅花

梅花さきこそつ~け山里は垣根に二木軒に一もこ

朝けだく同し軒はのそなたのみ深き烟りは柳なり

池邊春

あせめやは春をへても乙女子か夢に語ら花の契は

遠村梅

にすむ水の鏡に青柳のひらくる眉を映してを見る

隣家柳

鶯の木ったふかたや花ならむ色は一つの雪の梅かえ

毎春

水邊柳

薫る雪からぬ花の梅枝は雪花このまかふなぁ見 さもあらはあれうつろふ梅 青柳の色優り行軒の春雨

六七二

さく梅の匂ひのうちに入れてほこ遠し春の山里

春日の道行ふりの何はあれさをり面白き野への早蕨

六七一

たちこめん霞をくらき花梅

しるし鶯の聲

霞中鶯

懐しく薫るよ床の梅か香や夢に見ゆへき乙女なるらん

暁の鳥より後に一ねふりさますもうれし鶯のこゑ

夜思櫻

朝聞鶯

のとけさの春の心の何はあれとまつあらはる~鶯の聲

朝鶯

さく明てねやにいれたる梅か香にたくふるうれし鶯の聲世人のうさきすみか

世人のうさきすみかも鶯の囀る春は門をされぬ

しらみ行く梅の梢に有明の月をのこして鶯の

春鶯呼客

曉鶯

さもあらはあれ歸らむ人は鶯の軒端の竹に塒しめなは

落ちそむる雪の玉水また寒むき朝日の窓に鶯のなく

遙々さ霞わたりて浪の花さかぬ海にそ春は見えける 鶯のする方に行道は花の陰こそこまりなりけれ

早春鶯

木のもさに來に物から鶯の数へし花はえこそ手折らぬ

鶯爲友

海上霞

鶯聲誘引來花下

朝凪にあひきやすらむ立渡る霞のそこののよひ

さく花の春のにしきは鶯のの糸してぬへるなり見

海邊霞

花間鶯

薄くこく重なる春のむら山は霞の衣た~むなりけり

さくらたにのこらぬかの山里に昔なからの鶯の

志賀の山うへにて驚きくて

山霞

敷渡す霞を見れは野に山に到らいたらぬ春なかり亮 浪花咲そふなへにうひすの聲も打いづる谷の春風

霞添春色

谷鶯

朝凪にいつる海人見ればば立渡る霞の海はんはひ也泉

鳴きかはす花のした道鶯の聲の林に入るこ~ちして

朝日さす窓の梅かえ鶯のなきてうつろふ影も見えつ~

山陰も明くる夜さらてたに打出ぬへき春の野に人をいそかす鶯の聲

鶯有歡聲

殘雪半緑をめ霞の衣大空をおほふ袖をもたむとすらん

早春風

霞始聳

長閑なる粒中

鶯のつけぬを何かいひつらん春をしらふる糸竹の聲

しかは

子日

春風は野にも山にも吹にけり氷なかれぬ川水もなし

春到管春風春水一時來

深雪ふる春の~若葉雪中若菜

山川の氷は跡もなかりけり春風しろき瀬々の岩なみ

ぬ鶯早く来なかなん後れし春の道いそくへく

春色從東到

曙の空にほのめく春の色を出る日影や四方に敷らん

岩かねに結ひし氷さけにけり今朝くり出る瀧の白糸

梅は咲年こそ踊りけれなけや鶯春た~すさも

十日に春たつといへるむつきのつきたちの日

によめる

春風に吹渡りけりこほりゐし昨日の池のけふのさ~波

春風解氷

氷解

静にも明る年の旦かなさわき市の人はいつらは

長閑にも明し空哉うへしこそ年も立けれ春も立けれかけかへし軒の
に朝こちの風を入てもしむる春哉

むつきのつきたちのあんたに

惜しと思ふ年も残りて嬉しさは下待春のたる也島冴歸りふる白雪も
待えたる心の春はうつらさりけり

正月元日春たちけるに

東風暖入簾

大空は冬に曇りて降る雪の積らぬ庭に春を見えける

早春雪

しのすたれ第七集

長閑にも吹くる風の鶯のなかぬ限りの春をしらせて

六七〇

舊年春立

春の色の至りもあへぬ空なれや折々さえて雪を打ちる

こほりるし山の瀧つ瀬吹風の春に答ふる聲響くなり

見るかうちに浪の綾をもおれる哉氷を吹池の春風

散る花を分て摘も共思は春野の小松鶯の音なからに引こ~ちして

さまされり雨もふらなくに

あふみのそふく風はけしかるらし宇治川のみか

川

きのゆきたにあかぬけんきを

野に山にむかへるやとはいかにかあらましほさもな

六六九

いひつかはしける

さもあらはあれ窶れて衣も故郷に心の錦着でし歸らは

る日人雪ほ

善悪き衣によりてよきあしき人を分らん人の愚かさ

よし花つまの名にはおふさも

寄衣雜

をりふせて一夜はわれも野へにねなましさをこかの

過る世を長閑にのみも思ふ哉歸らぬ水の心しらすて

野萩

寄水雜

りをこめて〜めむ

たつみさやき世々の古を傳へ語るも楽しからすや 青柳のいさのかきりをむすひて春野行人のかき

幸逢太平代

夾路柳繁といふことを

御恵の空に滿たる君か代は怪しき星の影にも見す

せとう歌

うつみの世の長さ向ひゐてけふのお酒をいく藥なる

寄星祝

此よっても待橋の上のきぬるかひなく明渡りけ

まつはしのうへのきぬ

沖つ島ほるや黄金の萬代に人の齢もつきしさを思ふ

岡崎某か祖母の百歳の飴をはきけるむしろにて見まくほりゆきてもかひはなけれ共思絕てはあられさり兒

ゆき あられ

佐渡國人の七十賀に

物名

神事と現はに事のわきたのを思ふも奇し脚のみ業 我心わか身の外に出すあらは老てふ物も来らさらまし

神祇

立強く心ぇなくは世をへても浪の皺には溺れさらまし

君想ふあさくなれるも悲しきをはかりも何に結けん

心静延壽

を見て

燈火青木永章か庵しめむさてをかしき山陰に興遊日暮

遙なる西 空にも帰る哉此壁にこそ誰もまちしか其名のみ世に陸奥の摺今は昔をしのふつまにて

六六八

柴垣

さあらかじめゆひわたしおきたるか身まか

りていくほさなくあればてぬるを早くからけよ乙女子か舞の姿もあかぬ夕へを

燈火をかくるまであらためて又面白くめくる盃

のもとに六六七

く身まかりしをかなしみて

釋迦

雲を分海をし退て傳へしも哀れ儚なきよはのかね言

親の親の思ひに付て知らる～は子の子の親の欺なり兒

いかにせむ辛き鏡の影王昭君

宇治山摘てふ春のこのめり道につけても偲 君哉

入れす落し心の花の色にいつ染かへし昔のころもそ

還俗尼

茶をこのみ人なりけれは

二月十六日山際質弘か七めくりの忌によめる

限りなき身の憂舟よ末に何嘘の浦にさし止むらん

春雨の一そ きせん花の顔へむ色香を何か待へき 何にかは雪をも待む踏み分で先見む君のあらばこそあらめ

遊女棹舟

かみな月の十日青木永章の霊祭しける時多懐

さいふ題にて

美人出浴

塚の上の劍ならねこ誠をはこれも違へぬ印しとそ見よ

をすの内に心引れしから猫はからき懸路の綱手也梟

竹取翁人々の詞をつたふかくや姫物思ひをり

に信友身まかりにけれは其子信近につかはす

さて

女三宮の繪に

樵夫

いか斗り神の息吹し風なれは殘る舟なく仇は沈みし

釣の糸の垂れる心と年をへて魚より外にまつ物をなき

史

漁翁

いかさまに遊ふみ分て巖にも跡をとめけん雪の山人

詠良雄の引けむらのゆ力を残るの手ほこに見る

山深くこるや妻木の妻も子も同仕業に世を渡つ~

伴信友よりから人にものか~せてよさあつら

へおこせるか~せておくらむさせしほさ

末に雲に蹴る身ならすは何かは人をよそにとも見む

高野興善かうまこをうしなひてなけかんとお

やの心をおもひやるおやのころをおもひや

らなんとよみて見せけるに

ならてる人もあらぬ憂身を

楊貴妃

臺寺の黄泉法師江戸よりかへりてほさもな

鎮西八郎

心さへ嵐の空に迷ふかな聞もさためぬ鐘のひきに 手向れは頓てしるしありとほしろき君か詞を神もめつ覧

中燈

よみてたむけせられけるかたかけるに

鐘聲何方

何方の誰かすむ峰の寺ならむ夕ゐる雲に鐘の音をする

すめ神の導きまし~大御船うへ國中に涙はいたりき

晩鐘幽

長帶比賣命

琴の手の中に有りける松風を軒にたえぬあやなくも心をち~に砕く哉昔を今に思ひあつめて

人の琴ひくをきょて

ます鏡向ひそあへぬ我乍らうたてゆ~しき老の姿に

引さして暫し打おく爪琴の己れ調ふる風もなつかし

懷舊非一

ひけむ

箏

懐

寄鏡述思はなん心もなくて射あてつる其返し矢の早報いを聞知む人もなき世は思ふ事我に語りてわれそ答ふる

ある夜の暁かたに

よせたつるま弓の弓弦つまひけは老のね覺も心さやけし 何方に世をは遁れむ山に住む人もなけきをこるさいふ也

箭

獨述懐

酔みてる心の富の豊けさは黄金も玉も思はさりけり 疲れたる足休めには待程の久しき舟も嬉しかりけり

弓

述懐

渡待舟

酒

かきこちり誰すむ庵の窓ならむ竹の隙もる燈火の影

かまきりのの振上て立向ふ心を何か憎みはつへき

六六六

さてもよに止らむ事は蝸牛家を負ひつ~いつち行らん

わひ人の住かは夜も隠れならゆかめる窓の燈火の影

古のよたけの琴にすけし緒はいかなる節に調なしけん 様々にうつる思ひの末消てはかなき物はね覺なり見

船木もて造り琴の調へには浪の響やまつ通息と思ける哉

貫之ぬ馬のやみたるにありとほしの神に歌

六六五

藻

虫

谷深き水を隔て呼かはす脛は近かしかふせ庵 猿にも立舞業はなするのをよくふへしょく習ふへし

家毎にわくる寛も水上は一ついはねの昔のしたり乗きほひ来かへてこそはに馬のぬ其名を世に残けれ

山家隣

猿の舞するかた

あすも漕出るにはやなからまし枕をする浦浪の音 いかなれは己の身に添月影に厭習の名はおひにけん

山家水

馬

野に山に片敷やつす袖を又吹はすはあらしなり見 年ふかき森のみ立めくる杉より外に玉かきもなし

旅船開浪

熊

打解&旅のまろねも故郷に通ふはかりの夢は見えけり

嵐ふく松かね枕故郷にわたしもはてぬゆめのうき橋 寄浪をゆのねに
なんて面白く風の調ふる琴のうら松

露中風

杜杉

名所松

旅宿夢

故郷はえる人もなく成にけりまつも昔の姿かばりて

日をふ松の五百枝の深緑これや名におふ衣笠の岡

宿

友のみ頼める杖をつくく思ふも遠し故郷の空

いさしくいこそ寝れね暮果て借つる宿の心知ぬに

旅行友

海邊松

別る何か歎かむ盆良雄の名をたてつき旅にはやはあらぬ

雲深きろをよみてよさ人谷のした松吹おろす風に答っていくよへぬらん

岡松

のいへりければ

古松

所思在功名澗底歎さいふからうたのこ~

一日たに止めま欲き人故は降をふ雨も嬉しかりけり 浪の上に浮び上りて蹴る~や底の玉藻の落葉なるらん

離別何足旅荒磯の松かね高く成にけりのめさんも下くる迄

故郷松

旅行人のわかれをしみける夜雨ふりければ

出入の月にたくへる大海の潮のひそばかりられぬ

くる春を向ふるみちの旅衣羨ましくも思ひたつかな

しはすはから江戸へゆく人をおくりて

宿るへき里は麓に見えなから下れは遠き岩のかけ道

海に落るえそか島ねの大瀧は引上し船のまほかとそ見る

名所河

やよやまて共に宿らん分くらす同野原の末の旅人

旅行山

瀧

野旅

鈴の音も稍亂るめり岩かねになつむか駒の足柄の山

膝を入る藁屋に事はたりぬくしありばてぬべき世のすみからは

不破の山夕越くれ旅人やわさみか原に庵さすらん かくつちの洗ひはいつとなきるのを誰かたくみに家造るらん

驛路鈴聲

木つきの來つ~漁れる音をのみ深き木立の中に聞つ

家

名所原

落葉かく里の熟角木隠れて住人ありさ入にかたるな

仰き見し雲の中には入ぬれて踏のほる末そ遙けき

行へなく成ぬ人や思ふらん八重立雲の奥に住身を

山路

林下幽居

我と我心にさひて分るかな深きはやしの苔のほそ道

遠近に残る家居のいくほこも嵐吹野成やはてなん

林幽不逢人

深山幽居

見るか中に消る畑や浦人の焚きもけぬ藻屑成らん

沖つ波静かに風のおふ時は船路の憂も思はさりけり

海村烟幽

涯もなき常世の海路舟は天つ星こそ知へなりけれ

故郷風

中々に歩みよけにもなれる哉雨ふりしむる濱の眞砂路

海さかを堰しはてすは今もなほ龍の都に通はんものを

海路

徑雨

六六四

雨降れは流る~川と成にけり岩ねを傳ふ山のほそ道

いかにせん命と頼む杖たにも突止かたき岩のかけ道

て見れは昔戀とき玉島の此川上にたれかすむらん

海

六六三

寄繪戀

見るか中に變れる雲のたすまひ上も常なき世の景色哉

寄帶戀

空のうみの嵐もけさはなきぬらし立さしもなき雲の謎

妹かぬふ衣の針目細やかに思ふ心を知らせてしかな

雲

寄衣戀

雜

よそにぬる人の心の上莚あやなく何に敷のふらん

夏夜の涼みの床のたかふしよきにさへ人の懸しき 戀しさの絶ぬ眺めの秋にも涙は残りありけるものを

涙盡断さいふことを

寄莚戀

燈火も今は掲けしょをへつ~並へぬ影のやさしきものを

我床は涙の海成にけり積れる塵をうきしまにして

言の葉を忍にまねふ鳥もあらは敢へて妹にやらましるのを

つれもなき人の心の浮草は誘水にもまかせさりけり

寄鳥戀

愛人にかき捨られて塵塚のさや途に身は朽ぬへき

女ともし火にむかひをり

寄塵戀

あふ事の淀みからなる中川は身のうきそりをひねる 移り行人の心は止めあへしかなへを上る力ありこも

宿木のさも睦ましく茂るかな思ふ中さへ離れ行世に 待人のこぬ夜重なる闇の内は咲かひもなし燈火の花

寄蘋戀

寄鼎變戀

寄々生戀

よるも猶包む袂の涙には燈火をさへそむけてそぬる

涙川清水はてぬる埋木のかひなしうき身朽果ねた~

寄燈戀

寄埋木戀

我戀はゆもとりあえぬわれ舟の涙のみをに沈み果てなむ

散そむる桐の一葉や人心うつろふ秋を驚かすらん

寄舟戀

寄秋木戀

戀しさを見つ慰さむうつも繪の顔て言をも夜さましかは

事の片山松にある鳩の下なきにのみなくさ知らすや

帯のさ~この錦更々に結ぶ心はとけしこそおもふ 吹く風も限り有けりはやく行雲より上の雲の静けさ

けちわひぬ人の心の間山むなしき空にくゆる畑を

けちわふる思ひ故にはふしのねの絶し烟も羨まれ

流れ行みそらの星の夫さへもに浮名を立すゃはある

寄烟戀

わりなくも宿る月かなふくる夜の露に紛へて拂ふ涙に

寄星戀

むし衾なこやかしたに解ゆくは人の心の氷なりけり

寄月戀

人心つら~の涙さえまさる夜を重ねてもねよさや

冬逢戀

雪霰蹴る庭に今宵さへ太刀の精解てあかせさや

冬不逢戀

涙川こほらぬ水のわひらきは袖の柵冬ちこえつ~

冬夜戀

の夜を短き物さいひなさは獨寝ならぬ程やられん

冬戀

心さへさみだれに見掻幕ていて身を知る空の景色に

待々て長き春日の暮る戸をさ~ぬ轉寢誰か爲にかは

夏戀

つむ片山岸のはたつ り積りにけりなあはぬ月日は

いかにせむ身の憂にしも生をひて下這麓のき思を

寄木戀

忘るなよまた裏若きさるたつまぁひ先遠く結ぶ契を

寄芦戀

雲のゐる峯に心をかけ橋のふみ通はさむ道 たにるなし

寄草戀

結ひおく契よ何の心にてはやくも人をわすれ井の水

寄橋戀

奥山のみつちすむてふ淵よりも深き思を知人そなき

寄井戀

我戀はいひはなたれぬ池水の思こめてや世を盡すべき

寄淵戀

はかりなき思の山に比へなは星も麓のつむれならまし

寄池戀

うしや人今は誰か墨染の夕の空をかたみにはして

寄山戀

人戀る袂よいかに草むらの露も書きは有けるものを

寄書懸

六六二

鳴神のさけぬ中をも避ぬるはいかにはけしき人の言はそ

人もさは同亂れ白糸のはかなく何に思ひけん

被妨人戀

人心うつろひやすき月草の露の契りを何結ひけん

絕互悔戀

世の塵を拂はん宿に思ひきや人こひ草の茂るべしとは

生憎にこえま欲さの增る哉許さぬもしの關さみる。

閑居增戀

いか斗の世に流れつる末ならむ我聞知りてなけく浮名は

見書增戀

遠さかる人の心や有し夜の夢をまここの夢になすらふ

名立懸

後朝の袖につきぬと思ひしをまた消歸る今朝の白露

別れてけさえも更に敷く哉さまる心にそはぬ憂身を

會不逢戀

月は獪かこちよすへき有明にたて急かす鳥の整哉

後朝戀

別戀

花の香を誘ふ夕への春風は思ふ方より吹く心地して

六六一

浮雲は絶ても暫した~よふを名殘たになき人の心か

春戀

つれなくはさてもありなん何にかく憂水莖の跡を見すらん

絕戀

唐國の眠り薬をすきてたに戀の病をしは癒やさん

披書恨戀

敷妙の枕にたにも知られしと思ふは同思なる物を

難忘戀

今は我手をたに觸れて掻なせは其琴のねの戀しきものを

誰識相念心

いつのまに淵と成けん思川絕々にこそ流れ來にしか

觸事思出戀

苦しさの半を分て愛人を思ひになすよしもかな

初疎後思戀

はかなくて昔語りと成し名を再ひ何に立てむとすらん

堅からぬの戸さしの嬉きは昔こえつる逢坂の山

片戀

み隠る人よ磯への草ならに潮ひむ時も待まし物を

舊戀

なくになくも露の契りをなに結ふらん

なすさて

行止宿なら思事を打出てぬ今更にうさくや人の聞も旅宿逢戀

今そしるつれなかりしは我心試みるまの心なりけり

優しやなけなる人の言のはに掛止られて露の玉のを自つからさけたる紐は今宵か結ぶ契のしるしなりけん

馴不逢戀

逢戀

あやなくも打欺く哉忘られむ後の思ひを腐りも限りありやさ思ふまにねぬよ空しくかさねつる哉

疑行末戀

連夜待戀

よそに又思ひ掛てやうき檻の中の絶まも恨みさるらむ

たのめしは一夜斗りの欺りを我と重ねて何恨むらむ

中々に欺りこもや思はれん餘り事よくいひな過しそ 待明す習ひにや身の成ぬらん雨降夜さへいこそ寢れね

疑戀

我と我心に今ははつせ山登るしるしも見えぬ憂身は徒にふるまふものと思へとも心に掛るさ~かにの糸

誹戀

毎夜待戀

不憑待戀

祈空戀

月待さいひつる空は曇りさぬ戸口を何によそくむ

祈りても行あふ事はかたときの男はかなき身を欺きつ~

忍待戀

祈難逢戀

ことならばよせすやはあらぬ沖つ波立も止らぬみつの濱へに

かくなからむらてはやまし魂の在かをさへも尋ねやはせぬ

來不留戀

繰返しい!たひ斗り水菜の跡はかもなき心しるく あし分の今宵さしらは難波江の何かはよせん蟹の釣舟

尋戀

夢のうちの夢さやいはむ夢よりも儚なく見えし暗の現はいかにせん 靡きよりにしなよ竹の折へくもあらぬ心強さを

悦偽戀

行不逢戀

六六〇

事のをうけぬ神ならは忘る心はやもつけなむ

皆人をねよさの鐘に我もねてした待心いかて知せむ

あらましにして

憑詞戀

六五九

しはす二十日あまりはかり春たちければ

玉垂のをすのすけのほのかなる見るめに人を思ひ掛つ

白地戀

M

見戀

しに

衣手しはすつこもりの日永追さくる鬼に比へてうたてある我老楽をやらはましかは

見戀

鬼やらふ脛をきくにも総角の昔こひしき年の暮哉 今さらに何打出むとはれつる昔もこめて過と思ひを

きもの枯れるを見てしはすの末つかた

松の葉もに紅葉てあはれなる焼野の原の年の暮哉 大方の世をうことのみ欺く哉戀に痩たる身を隠すべて

除夜に

忍久戀

忍戀

我宿は春の急きの業もなし幕行年よしはしやすらへ 風すさふ軒のむら竹雪ちりて夕くれさむし家鳩の聲

火の事ありて家ともおほくやけ~るのち木高 戀

衾薄きるいほし 冴るよに御衣ぬかとつるためしゃばな 中々にあた~かけにも見ゆる哉水打けふる冬の朝川

閑中歳暮

冬鳥

山鴉からも白く降雪にいさ~こひしき故郷のそら 老人のひなたほこりのかひもなく雪けの雲の立迷ひつ~

冬川

多雲

は

雪ふれは榊か枝のゆふしてを空にまかする神の宮人

久しくたひゐこける里にて雪のいたう降けれ 春はとく立にしものを今更に何に急きて年の暮らん

持囃す人も少なき年の内にあたらのさけき春の色哉

十二月十八日春ちて其つこもりの日に

榊雪

章かもとよりあたらし

き四のすけて花鳥の春まつ外にいこなみも

なしさありにすれるまほりの夫ならてめにつきそむる人をいかにせん

中々に思ふ心の無りせはまほにも人を見るへき物を

僅新らしき四の精琴の調へにはまつ鶯そ誘はれぬべき

嵐ふくみそらははれて山松の梢よりこそ雪は降けれ

いつのまに降積りけん立雲間に白き雪のむら山

松雪

風や雪雪や風共わかぬ迄吹ひつ~ちりみたれつ~ 磨きあふ庭の村竹
ふる雪のかつ飜れつ かつ積りつ~

山雪

村雲の隙洩る月のさやけきに雪さへ散て面白の夜や風の音も静けき
松の下庵にさこそ心の雪をにらめ

雪散風

竹雪

月前雪

はしける

かきくらし降雪いかに積るらん風静かにもなれるよは哉

雪ふりける日茶を好める人のもとにいひつか

夜雪

葎枯にし後はたく柴の畑はからに夕くれの色を見せたる雪の山里

山家雪

手も觸ぬ落葉か上に降敷きて深雪を庭の朝清めける

朝雪

なつむ共獪分見ん乘駒のあふみつくまてふり積る雪

降雪にかへる釣舟辿るらんおもり深雪

八

君か打と昨日の事をせる水の江の里

幕村雪

重

しける

こしふりければいひつかは光輔かもさにて人々慕うちけるまたの日雪す

漁村雪

降雪の光をかつそへて雲間をいつる有明の月 白雪はふり積りけり浪の上に浪を渡せるさの船橋

雪ふらむけしきりにさえくて晴るは惜きうき雲の空 先立てる人はいくらも隔てぬを跡見えぬ迄ふれる雪哉

月前初雪

橋雪

深きよの夢は跡なき間の上におのれ砕けてふる霰哉 白雪の積り積らぬ程こそは高さ短かき山も見えしか

待雪

行路雪

六五八

見ゆる哉深雪斑のけさの山のは

荒熊の棲めるうつほを隣にて雪に埋れる木曽の山人

閑居雪

降埋む雪こそ宿の戸さんなりけれ

散浮ぶ木葉を分山の井にけさは氷を砕きてそくむ

ひまもなくおろす筏にくたかれて氷ちはてぬにふの杣川

井水

行水に氷のくさひ打頃は朽木の橋もゆるはさりけり

河水

もみち葉にせかれてけさは又氷にたゆる山川の水

橋下氷

浪の池のこほり吹しく朝風に枯葉の芦のさやきつく

氷初結

箱にむすほ〜れたる芦の葉の香るさひえの浪の夕風

寒蘆帶風

終夜さやき風の色なれや竹の葉しろき庭の朝も

江寒蘆

そよさたにせぬ風も寒けきは小笹か原のこもの曙

竹霜

よの程にふりし霰もしみつきて朝霜寒しにはの玉笹

漁りして跡をつくみの中々に淋しさ見ゆる庭の朝霜

篠霜

さえまさる星の空にも知れけり曉深き霜のけしきは

閑庭霜

六五七

明渡るうちの川波いろさえて網代の床にきゆる篝火

霰驚夢

たく床へ氷る夜嵐のはやせの網代もりや佗ふらん

名所網代

瀧の糸のなかき契りや結らむねをさらぬ鴛の番ひは

網代寒

くるりいる人やなからむ川隈に群ゐる鴨の裏安けなる

瀧邊水鳥

浪の音は還さかりぬるしかの浦の氷の上に千鳥は鳴く

水鳥

吹しきる嵐やなれもから泊うきねわひしく千鳥鳴也

湖千鳥

沖つ風寒く吹らし浪間と見ゆる小島に千鳥は鳴く

泊千鳥

秋よりもさやかに月の澄める哉一時雨せし山風のそら

島千鳥

十月のなかは山寺にあるひてかへるさに

一村の雲より降し薄雪の色もさやかにてらす月かけ

霜氷さえ通りたる闇の戸もさくまく描きよはの月哉

冬月

冬曉霜

稲畑の晩ての掛穂はしもあへすけふる時雨の小山田の里

霜をへて匂ふ白菊同は梅さく迄に散するあらなむ

田家時雨

殘菊

白むへき闇の板間はつれなくてめのみ覺村時雨哉

山里は降積木々のもみぢはに人間こぬ冬を見えける

雨

夕日影再ひさくす成ぬめり時雨なからにくるる山のはもみちばのちりのみ積る山里は雪より先に道たえに見

夕時雨

山家落葉

明て向朝日の窓にわりなくもさよ時雨降やみぬらし夜落葉

さよ更て降そ木葉落葉時雨過

交雨

暇もなくくる雲かさらてたに冬とはしるき四方の嵐を吹くる嵐に見れは散つもる木葉の下も木葉なら島

あやにくにくるる空か薪こり冬かまへせむ時に成しを 紅葉はのあらはに成にけり過行風の色を見まに

初冬時雨

落葉深

山家初冬

何方より散てきぬ枝に見え色に勝れる庭のもみち葉

冬の来てすなはちたてる落葉

初冬雲

ね覺さへ長くなるよの侘しきに霰こきませ時雨降也

十月のなかはに

唐猫も日影をこめてふす斗り秋風寒く早や成にけり 思ひきや時雨の雨にかつきこし袂に梅の香をしめむとは

秋獣

たきものに梅香をしたりけれは

山ふしの曉おきの袖寒松ふきのほる谷のあきかせ

かみな月のはじめつかた人のもとに行けるに

六五六

浮雲ややかて時雨の空となるらん

濡るまもなくて過にと時雨故あやなく道を急きつる哉

朝時雨

まかひつる雨や誠の雨に成けむ

吹入風の横時雨かな

散か~る木葉の音の輕(成ぬる

閨時六五五

秋曉山

乙女子か負せる綿のそれにさく千歳をこむる花にやはあらぬ賤の女かさき洗ひ衣打しきる秋のよ寒し霜やおくらん

菊露

もみち行梢を見っと暮らす哉けふも時雨をふ人にして

秋霜

飛ぶのはおこのみこそ聞えけれ月影白きぬなのふし原

閑居紅葉

潮風やはやく夜寒に成ぬらん衣してうつよしの里 露霜の深みたにの村もみちひもしらぬ秋の色かな

身にしめて誰か衣をうつさなくふりにし里の秋の夕風 晴渡る嶺に色そふもみち葉は掛りし雲や時雨なりけむ

里擣衣

澗底紅葉

定めなき時雨さこそは思ひしか染残したる山なかり見

さやかにも澄める月哉衣うつ音さへ空のものと聞く迄 染めてけ 深山の紅葉時雨(笠さへ色に匂ふはかりに

故郷擣衣

遠樹紅

ふね

月

遍

露霜の下そめしてるもみじ葉は一時雨してちしほ也島

水や霧々や水さもわかぬかな心してさせ秋の川水路霧

まで這ひとつはれて松をさへ紅葉せさする蔦かつら哉

浪の音はしたに騒きてくるよの霧静なるきその山川

紅葉

なれて見て思は~行末の齢ともなく秋の夜月

河霧

ほろくさあゆる栗のみゑまほしく爭拾里の總角

月多秋友

栗のみをわらわこものおさすところ

松の葉をみ空になしてすむ庵の月に隠れて月をみる哉

菊の花より落つる白露は千とせの数の餘るなりけり

松月幽

月清み高き棺の雲のへにかくる露さへ見ゆるよは哉 有明の影をのこせる菊の上におく白露や月の落ち水

紅葉月前露

明方も近く成ぬと思ふ夜のいよくねまく惜しき月かな

風清きのきはの竹はてる月の光にそよく心地こそすれ

終夜見月

すむ月に心かはせる秋風や夜すから雲を吹はらふらん

月前竹風

待つよりも惜む彼方や優るらん出かてにする山のはの月

待月

月前風

空の海に浮へる月のみ船には心を乗せぬ人なかりけり

小山田はほに出ぬちし揚巻か鳥追聲のまなく聞ゆる 八束穂を苅積む秋はのをも心たりよの月や見るらん

見る人もあらすなるこの風ふけて月影寒し小山田の里

いかにせむ野山の露にやつれこし衣の關路秋風そふく 横雲のたなひき初むる山のはに白みて出る有明の月

八月の末つかた山ふみして

深夜月

さ~くりの落つる山路を分くろば夕風寒みもすそしは鳴く 静かにもすめるよは哉たれかまた我こと月におき明す覽

秋田

田家月

なにしかも止てまつらん蟋蟀同夜さむの露の枕を あかほしの光はかりの光りにて山のはつかに出つる月影

關路秋風

八月の末つかた曉ふかくおきいて~

曉出月

虫聲近枕

不知夜月

何處にか行止るらむ松蟲のよりこえにうつる心は馬の音はよそにのみこそ過炒めれひとり見まくの措き月夜を

月前蟲

照る月に影さく見て来る雁はさへにこそ爽けかりけれ 晴渡る今宵の空を初めにてかくこそは見め月の盛を

尋蟲聲

對月待客

日のよ人のもとにて月を見て

月前雁

六五四

八月十鳴く虫の聲はかりこそ聞けれ更渡りぬる秋のよの月

きそのよに暫し遅月影や待たれて出る初なるらん

さぼそ明けて獪ふす床に吹いる~村雨す~し秋の初風 荻薄ほに出にけり今よりは涼しく風も吹かむさすらん

六五三

はるよの軒は涼しく通也月のかつらの秋の風 あやなくもさまる心か花薄なへての人をまねく袂に

新秋雨

七月の末つかた庵にて

野秋萩

初秋月

荻の葉のおひ隠したる我宿は風より外に知る人もなし

更くるよの秋風そよく荻のはに宿りもあ幽居

荻の葉の戰くを聞けは秋風の宿らぬ興もそこほる都にはまた聞きしらぬ音ならし草のの秋のはつ風

聞荻

道もなき庭の蓬生夕露に埋もれ果てむ秋は來にけり 棚機は天の川原のな~ふすけ今宵かりてや枕ゆふらん

幽栖秋來

七夕草

秋

ほこもなきたさひの水を空の海になそへて星の影を見る哉

夏衣通りし汗もかはきけりなみ木の松の風のした道

日くらしのなく音も嬉したな機のあふよ近つく夕風の空

行路夏衣

七夕水

乙女子か飼し桑子のにひ繭引出る糸の色もさやけし

待七夕

夏糸

る桐の一葉に散

まつら川々瀬す~しき夕波に駒うち入水飼ふやたれ

桐の一葉かきたる縮に

夏獸

月草の花さきそめておく露も秋の光になれる野へ哉

新秋露

爪の音にさへたつる夏蟲は深き思ひ入れる成へし

夕風のおさせぬ窓も秋を知らる~

七月のはしめつかたに

~

へす行螢哉

三日月の仄めく見れは夕暮の山のはよりそ秋は立ける

山のはの入日は秋も見えぬとも名殘涼しき夕月の影 宮城野のもとあしの小萩乘る駒のむな分にして見る人や誰

七月のはしめつかた月を見て

薄

れてなければ

氷室

もし火のあたりに飛來たりし蟲の琴の緒にふ

受たむる道の立葉傾きておのれさくたく露のしら玉

卯月の末つかた人のもこにて歌よみける夜さ

結ひてもかぬ此頃鳴暮す水こひとりの心を思ふ

山からの変の穂からを焚すまふ烟ややかてかやりなるらん 夏も住む
あその峯まの水鳥は神のめてます生き貢かも

蓮露

山里にものける時

夏鳥

たつ塵も静まる雨に涼しさのいさ~身に必む夏の夕風

夕顔の花に立よる賤かやにく蚊遣かな

蚊遣火

畑もせにする瓜を思ふ事なりぬさや見るこまの里人

あけまきか心も秋近からむさひ行きたる慕ふちなし

夏風

野への蟲とて音なしに妬く人の行て見哉

螢火秋近

瓜

音になかぬ夏の日をわすれて向ふいは水は心の中に流れ入らむ

よへ螢見に行人のいひければ

泉忘夏

燈火をかくる窓もなかりけり盛りの川つらの里

の絶きに遠き篝火はいく瀬にきほふ鵜舟なるらん 妹か手にならす扇は仄かなる風の末に懐しき哉

暑けさに目をさましたる闇の中にまっとる物は扇也け

あゆはしる盛もしるく川波のことを瀬にさす鵜飼船哉 秋風も今や吹らん日暮しのなく音涼しき岡のへの松

遠近鵜河

六五二

夏野も朝おく露は深からし草かりわらは袖絞るめり 風寒き氷室の山をもる人は反りて夏や懸かるらん

船に鶏のゐるかた

遠夕立

疲れ鵜を休むるほこや夏川の瀬に伏す鮎の命なるらん 伊豆の海は夕立すらし浪のよる沖の小島の雲隠れぬる

瀬鵜河

晩夏蟬

にさも

*五一

夏草露

いふせしや眞柴ふすふる軒はより烟に似たる雨を降いる ゆふかけに咲きはれるや朝露にひもときのこす撫子の花

船中五月雨

瞿麥

五月はかり山里にて

山里樹陰夏月

五月雨の雲ふみあたし鳴神さ聞は流の響なりけり 若竹の靡くひまより洩り來れは月のためにも風待る~

山家五月雨

竹亭夏月

いふせんさいひはくたさし焚物の薫身にしむ五月雨の空 夏川のぬるき流をよる)は氷になしてすめる月影

瀧五月雨

河夏月

吹風の打烟りつ~窓の中の書さへしめる蝙蝠の風にたよふ姿さへ涼しく見ゆる夏の夜の月

五月雨

夏月

郭公尋れてきつる山里のをりにあふちの花もなつかし

明わたる野澤の芦の葉隠れた夜を残してもなく水鶏哉

曙水鶏

雨後早苗

うつきさく垣根を傳山水の音もさやかに水鶏鳴なり

手もすまに取るとばすれと盡せぬは幾千町田の早苗なるらん

早苗多

水雞

たちはなに匂ひかはしさへも盛過ぬる郭公かな 朝ひらき酒出と思ひ嬉しさは夢なりけりな五月雨の空

言ってむものなくなくに郭公そなたの空に鳴でゆくらん 五月雨は雲の浪さへ立添て朝開きせん船にはもなし

郭公聲老

旅泊五月雨

早苗さる賤か衣は五月雨のはる~日にこそぬれとほりけれ

置露の光見え行けほの~山田の原に水鶏なく也

蝉の羽の袖にさしくる月影は身にとほる迄涼しかりけり

五月雨の空

葺をへし軒はや又も朽ぬへき小歌まるなき五月雨の空

は花の便に見人のいさ~こひしき五月雨の空

日をさふる陰には薄き片岡の木立嬉しき夏のよの月

ほ~きすをきくて旅なる人をおもふ

雪ならは駒にそ道は任せまし野へ白妙に咲ける卯花

郭公離する方に引のほろつなてかなしきの川ふね

卯花隠路

船中郭公

我宿の卯花咲きぬほどきす待程久にあらしさを思ふ なほさりにたれきすてん時鳥都の空は心してなけ

卯花は庭白へに咬みちておのか青葉も雪のした草

子雀の青葉隠れになく聲もまた裏若き軒のならしは郭公はや鳴しきれ待人の聞おくれたる恨みなきまで

卯花

都郭公

郭公いまはこまつの下陰にさかりなる花を見る哉 五月雨の空に出てなく聲はほざきす早苗されてか

新樹

郭公未逼

五月雨に田う~る所郭公なく

山松のいかにへる花なれは夏さへ風にしられさるらん

郭公いつ迄忍ふ聲ならむ聞つとかたる人たにもなし

枧陰餘花

未開郭公

たちかへて涼しく見ゆる衣手は心の夏になれる成けり

郭公こなたかなたに尋ねつ~聽かすは何を家苞にせむ

更衣

尋郭公

花鳥の色音をくめる盃に長き春日を酔ひくらしつく思ふとちまごのてむかふ月影のかたふく軒になく郭公

夏

る夜ほさきすをきくて

心静酌春酒

しめつ~

くめる酒ならす小琴に春を浮へ春を調宿なかり見 いつしか心にかけ葵草けふは簾の物となしつる

このたれも掲けてかをる梅なく鶯の春を簾葵

家々阮春

谷深み藍を花盛かけぬ日もなさ小車の漢卯花

春

六五〇

うしさや春を思ひわふらん

湛へしいは淵の水さへしろくさける卯花

四月十日はかり人のもとにて酒のみあそひけ

六四九

めちもなく霞罩たる春の野の覺束なしやもすの草々

口なしの色に咲たる山吹の思ひ有けに露そこほる 朝戸出に聞ものとけし春霞たな引山のかほこりの聲

の衣をたちはて~躑躅のあかも今を続ける

夕日影入にし後もくれなゐの躑躅の岡は狩照しつ

山吹露

春鳥

沖つ島花険ぬらし靭なきの浪の上さほく蝶渡る見ゆ

重けさほ姫に櫻夕風

躑躅紅

蟲

毎日の浮れ心や背々の夢のこてふさなりてとふらん

夕蛙

春夢

朝床のゆるふ眠に春夜の短かくなりし程を知らる

苗代の時来にけらし小山田の柳のさ枝きり下すめり

苗代

来て見た昔の庭を春野にて摘めるやたか子なるらん

春床

色見へぬ人の心の鬼薊花やかへりてうたて思はん

46

故郷春

たるを佛には奉らさなりなさいふに内心如いつのまに頼むのは踊りけむ燕飛かふみよしの~里

夜叉をすくひ給はすやあるさいふ人もあれ

華さく垣ねの春に成ぬれ問人もなしすむ人もなし 花の香を誘ふ風に燈火のまた~く窓もさくれさり見

鬼薊さいふものをわらはへのたをりてもて

春里

去年の春巣立し軒のそれならは来たるは歸る燕ならまし ねてより下に立きて花の香を移しや置む夏の衣に

閑居菫

春風

のとかなる春の雲るの庭つ鳥かけあほすめる遊ひ面白ろ春風の凪たる浦の岩根には藤波のみそ咲きか~りける

燕來

更衣漸近

浦藤

鶏はせのに

いつしかさ門田の蛙なきそめて神寒からぬ春の春なる

宿りせん花の露にやそはちけむけさ飛蝶

あかなくに誰も枕を夕雲雀おのか菫の床やかふらん

木の間より匂ふ月にそしられける人を止めし花の心は

野遊

櫻花咲やそふらん陽炎のゆふへのこかにかをる春風 吹風に春は浮名を立田姫いかになくして花を止めん

花下見月

のさかなる春の雨けの朝曇いさ~はえる花の色哉 行方なきものとも らて吹風にはかなく花のたくひそめけん

夕花

寄花神祇

春雨の注櫻は枝ことにすかる露さへ花見えっ~ 大空に遊るよ心あらはちり行花をぬきてさ~めよ

朝花

櫻のいみうちるを袖にふ女あり

花の色いはんかたなし

惜花

花のもとに弓いる

櫻花ちらぬ限りは島影におろす碇もあけしこそ思ふ

る人に任せてそ見る山櫻いつれを宿の花さしめねは

舟中見花

心のみ残して人は踊るらん我は身をさへやさす櫻に

花下忘歸

ひま有てけふ見るこそは嬉しけれ花にも身にも厭山風

風のやまひいさ~かおこたりぬる日すたれか

かけて

山家花

おほゐ川影も一つの花の色はおろす筏水を見せける

山櫻こなた彼方に身を分て盛過さす見るよしもかな

河上花

それさへも朽果ぬるかなき人のかたみに見えし庭の櫻木 花誘ふすまの山風をきに見浪うちこゆる關のあらかき

盛花

斯て老の身を哀れなる花も若木の咲かはる世に 春野に遊ぶ心のいとゆふをつなきさむるは櫻なり見

もと木はくちたるに

關花

野花留人

たるま~に初櫻の花見に行て

六四八

二月の末つかたなにかしの樓にて酒のみける 立向ふいくはるみだす散花は風や櫻にまつあたるらん

に雨ふりて六四七

河春雨

永章身まかりて又の春子の永古かつけおこせ

淋しさをしめたる宿も淋しさのたへぬは春の雨の夕暮 月よりも懐かしき哉さく花の中にか~くる春の燈火

閑中春雨

もに

春雨の晴しけしきも朝床のまくらにしろき百鳥の聲

見に行て夜ふくるまて酒のみあそひて

あした

軒深くこむる霞と思ひしは雨なりけりなおつる玉水 山櫻まつひもとける一枝に驚かされて険やつくらん

散浮ぶ花にやいさ~曇るらん霞む入江の水の月影 帰り来て共に見るへき櫻花今年はかりはおそくさかなむ

春雨

初花

春江花月夜

朧月

淋しさを慰めかねっ庭櫻まつほさのみのひとりと思へと

花

柴人に打つれ歸るあけまきか春の重荷は蕨なりけり

待花

樵路

百鳥にあらそはしさや大空の霞の中に雲雀なくらん

哀れにも萌いつる草の哉春きたりとも知ら雲雀

閑庭若草

なく聲のきゅる空迄したはる~心もしらす雁の行らん

池水をゆする月にて春風は柳の髪をくしけつるらし

柳

水邊かに

みなせ川山も霞む夕暮の流れしっかにそ~く雨かな

歸雁

春月

草むら外山の霞梅か香のもりくるはかり月も洩りつ~

りくるはかり月も残りつと

ちる花の風にあまきるよはなれや霞を闇き山のはの月

いつ迄かしらす顔なる山櫻花催ほしの空のけしきを

さけばきゅ風のつらさをかねてより思櫻咲かてにする

獨待入ぬやと思ひょはの月影は深き霞の底にありけり

二月七日故郷にしばしかへらむとするに永章

かもさにいひつかはしける

二月のはじめつかたある櫻花咲やそむらんあらし山木ふかき松の色をすきぬる

二月四日玉園山の初櫻盛なるに人々と、

吹風も凪たる春の空の海に朝みへしほは霞なりけり 深くなる霞のうちに青柳のしなひを傳ぶ露おもるなり

嶺樹霞

六田川霞わたりてふる雨の一つにけふるきしの青柳

さほ姫の霞の衣朝な春の日かすにたち重ねつ~懐かしく薫る梅哉闇の夜の見えぬ色さへ面影にして

朝霞

雨中柳

つみぬべき若菜やいつら春の野はまた白雪の隈たにもなし 多乍らさえとほたる風ならはかばかり身にはしまさらましを

震

夜梅

岩床とさえ氷もこけにけりさほのかはらの春の風

厚氷吹きとく谷の春風に水の冬さへのこらさりけり 鶯もなきて出にし谷の戸にいつ迄雪のきえ残るらん

若栗隱雪

餘寒

谷殘雪

春風解氷

搔分てつめる若菜に白雪の下の春こそ現はれにけれ

いつしかさ花催しの朝曇りかきねのさかに鶯のなく

長閑なる春を待得て思ふには急きし年も嬉しかりけり

長閑にもけふ吹渡るあすか風昨日の冬の名残になし

初春

雪中若菜

正月のなかは鶯のなきければ

だって思ふ心の長閑きに向ふ空さへ打ちかすみつ~ 山里の竹のはやしの奥深く春を入れるうくひすの聲

暮残る年の日数を春の中にけさは霞のたちやこむらん冴かへり雪はふれても鶯の鳴音の春はけたれさりけり

立春のこゝろを

竹裏鶯

舊年立春

春

久方のあまきる霞打なひき春風わたるみねの松はら

しのすたれ第六集

海邊霞

六四六

夕凪のおちゆくほに引かへて浦霞立みちにけり

雪中鶯

六四五

浪速なる ふち原の利貞

今の世に歌よみ文書人はいとおほかめれて我まなひの親みつ栗の中島のうしはかりこ~ろ詞みやひにしら

へたかくめてたきはまたなかりけりかれこののてふ歌はり(にかきつめて梓にのほせられをし

へ子どもにわかち物せらる~なるをこたひまた其六巻にあたれるをかけあけて例のさまにして人にも見

すへんさあなるかいこうれしくよろこほしきまに(一ふて書そふるは文久のはじめの年六月の望はかり

夕浪に紛ひ沖の釣舟はいさりたきてそ現はれにける

夕凪に酒出舟の數みへて浪につらなるのいさり火

遙望漁舟

鮎落つる秋は來にけり 芳の川やなせにつたふあたの里人

漁 舟

梁

行もの~父も帰らぬ理りを流る~水を思ひしらする

寄水雜

暁のたかゆめたえし床ならん影ほのかなる窓の燈火

我にそ有ける

中燈

神垣に榮ゆる榊いつの世にねこにこしてうゑし榊を

社頭榊

哀れこは誰そうたての老人と驚く影はむかひて

神祀るきねか皷に調へあひて松の風さへかたおろしなる

社頭松風

深きよの枕に落る鐘の音を嵐の空にたさりてきく風ふれて己れ調ふる琴のは手馴人やなれも懸しき

對鏡知身老

神 祇

なるらん

鐘聲何方

題にて

暁のはかりに聞ゆるは何方の鐘の響き年深水のとこなめ長しへに緑の女

尾をひくめる

追ひ風に湊入する大船は帆を下してもはしりけり

山畑の畦に草はむことひうし道さまだけ湊 に誰つなきけむ

舟

六四四

遊 今宵又たれにあふみの海ならん朝妻船の淺きりは

このみて琴ひきける人の一めくりの忌に琴を

鏡とを思ひしらすれ齢には若しさいひし人のいつはり 天地の祠をひて治まれる國御手振おほにな思ひそ

久しく鏡を手にもふれさりしにゆくりなく打

六四三

獣

鳥は驚かすとや思ふらん先たちてのみ覺る眠りを

曉眠易覺

腹皷それさへならす成ぬらん雨ふる理打しをつ~

寐覺して思ひく事は父起いて~後の夢成にき

あした

今を昔の夢を語るまて嬉しき世にもはや成ならん

つかはしける

松風似雨

遁れても猶浮世さかよしさらは塵を塵共思はさらなん

名はかりにして」とありしに

打かけし浪のむかしを吹風の響きにのこす住吉の松

まてかうき世の塵にまるらんのかれらはた

名所松

何をかはありと頼まで水の泡の廻るほどなき人の世の中

青木永章かもよせうそこのおくに「いつ 山本の竹の一むら一筋の道奥ふかしたれかすむらむ

漚

世にあはぬ我身よいかに時くればほひの船も浮び出る哉

庭 竹

寄舟述懐

みかくれし魚のふもとや荒ぬらん川瀬の玉藻けふるかる也

河藻

あすの日を頼む哉徒らにけふもくれ行空を眺めて

夕述懐

世の人にふませぬ庭は敷わたす苔のも塵なかりけり

しるとなけれ老ぬれは願ふ節なく成も行哉

庭 たる事を苔

ともすれはさかりの人に遅れしておもふも怪し老の身にしてこきよせし芦の葉蔭に潮みちてむすばぬ夢そ浪にためたふ

孤舟夢

世中はとらふす野べにあらねども尾をふみわたる恐れはなき

浮世水上年深く茂れる庭の呉竹に三の道たにのこらさりけり

山舘竹

罪にあたりてさほき所にありける人によみて

あるふしのねの深雪おろしにそなれきて幾世に成っ三保の松原

さよ深き軒の松かえ吹風のをやめはやむ村雨の音

馬

母の脊をかろくこゆるに千里行駒のおひさきしるく見えけり

理雨にぬれたるかた

述 懐

も浮ぬる 竈守る田伏の翁幾年のひちにみなわに身を任せけん

山家

て

田家老翁

月たにもありやすかりん苫船のねん方もなき夜の雨哉

賤かすむ山田の庵のあり傅で見渡しよりもみち遠し蓬

碇綱おろす響きの久しきをまくらに聞も ほそしや さして行をちの山本里見にて中々迷小田のほそみち

泊雨滴別れこし都はいざ~とほつあふみ濱なの橋をけふ渡りつる かけて見る夢の浮橋都にもわか山里に打はたすらむ

旅 泊

田家路

さもこそは入にし山のかひならめ餘りに人のとは幻庵哉

故郷に通ふ夢路の名残に浪の枕にいくよあかしつ わくらはにさはれぬと思ふ人影は柴刈賤か過るなり鳥

旅人渡橋

山家夢

中露

問人のかへる送りて珍らしくはれさへわたる谷の岩橋

山家鳥馴

けふるなほそぼちゃのかむ雨のふるみのしろ 衣ほしもあへなくに

中雨

山家橋

山家松

曉

夢さめていさ~戀しき故郷の聞しに似たる暁のかね

旅人はさよの中山越わひよこほりふせり草川の里 我のみと思ひ入に深山へにまた庵占る人もあり兒

旅宿

山家雲

六四二

旅なから心落ゐて嬉しきは早く借えし宿りなりけり 都人なかめし空のものなれや軒はにかへる夕暮の雲

さて草は結はぬ御代もなほやすいせられぬ旅宿りかな

旅宿故郷をこふる涙も落そひぬ草引むすふ露のまくらに

中泊

山の奥のかは落葉かく童のみこそ人めなりけれ

世の外にすめる心は漁りくる山の鳥とを早く知りけれ

山家人稀

よるの雨の滴たる苫の下にねて浮ねの枕又旅行山

嬉しくも追くる風かあけと帆の打ちるまで凪き海路に故郷の住憂かりしも懸しきは宿さひわふる夕暮の空

朝海路

海路風

宿とはむ里は麓に見えなからなほ分まよふ山の細道

何方をさしてこくらん沖っ船まゆ斗りなる山浪路に

海路遠

大土を頂き物ともしるとはめくる船路のあれは成亮

旅

海路

毀れ雨

海

軒の柴窓の下水我ならてこる人もなしくむ人もなし

清風拂世塵

山水にすましてこそは知られけれ浮世の座に染みと心は

水

深山幽居

いほしめて誰か汲える山蔭のいは井の水のき心を

山猿のかけそしてふ猿橋も駒引わたす世とも成ぬる

名所橋

閑居

いかにせん命と頼も杖たにもつきとめ難き岩のかけ道

夕風の追手に走る船人はくる 海路もしらす顔なる

山路

井

年深き緑の中に白たへの雪もときはの色をみせつ~

夜をこめて漕出し湊けさ見れは浪間遙に山を残れる

松のひまよりふし見ゆるかた

海路暮

千歳ふる雪のしたにや消ぬらん空に燻りし星の畑は 追風にはしる海原船人の朝けたくまに遠くすき來ぬ

堰入る~川さの樋口さんとよ田面の水はあせてえぬめり

瀧

山姫の織出す布をさなからに藍にそめたる瀧のいは壺

名所世の塵を拂ふ心は吹通風より外にだれかえるべき

古寺松らの海浪も領巾が朝嵐に漕出し船を沖にたゆたふ

年をへし

てもる雨にかけかねたる法の燈火

夕いかにせむ道も方々わかれたる夕の野へにあふ人もなし

旅 行

立高千穂の山

寄蟲戀

山

人を思ひ焦る身にはきさ貝ほうむきの貝もしるしあらめや

浮名の世にはたつひの貝もなきちになさかおり立にけん 山鴉おくれて踊る一聲を入相の鐘のなこりにそきく

隅田川船まつ岸の傘やとり一村雨をまつわたしつる

幽夕

寄貝戀

嘶なかは人知りぬへき妹か遠く避けても繋く駒哉

古渡雨

唐國の多き獸の象すらも引には寄れる物にやはあらぬ降すさふ雨の中に残りけるくれゆく峯の松風の音

寄獸戀

暮山 雨

長鳴の名におふ鳥のうれたきは逢夜短くなせるなり鳥

暁のや聲の鳥に驚かていつかはさめむわか一よつま入日影沈むに見れば山もなしむかふす雲をあらふ白浪

寄鶏戀

岩淵に隠れてふたり棲む鴛の離れぬ中にならはましかは

袖をこそ朝夕浪にくたすらめ心は蟹のたけしものを

寄鴛戀

月清き梢を廻る夜鴉のよらむかたなき懸もするかな

寄心戀

寄鳥戀

天

誰にまたあひは見る覽愛ちゃ人との手柏のふた面にして

戀

爭てかは夢に見斯くさたにえも岩水のいかにして世に洩れあやなくも思ひ深めて懸ふる哉人の心のあさ~はの水 秋の田の稲葉にすたくいなこまろいなさもうともいひばてよ人

*四〇

出し思ひなる覽

寄木つれなきをいつまて思ひ山鳥の尾上隔て~音のみ鳴らん

寄夢戀

ゅらん現にはさしもつれなき人の心の

寄海人戀

剣たち研し心もうらさひてつれなき妹をこひわたるかな

雑

あしかひの燃上りけん其世より天つみ空は緑也けむ

海上雲遠

妹か見るあして歌繪の中に入で思ひしみにもなりなましかは

あもります神のしるへと大空にそり六三九

被嫉妬妻戀

寄水戀

思出に見へつる夢の戀しきは思ひよりそふ思なり鳥朝床のうつ”に残る移り香に夢ならさりと夢そらる〉

立かくり今一言やいひてましまた鳥たにも鳴かぬわかれを中々に思ふ人にやつ~むへき友さかたらふ慈の心は

夢後増慧

移香戀

夜もすからしぼりと袖をめくらはに重ぬおるへは東雲の空 疎からすかはす袂の外に亦重ねまほしき袖や如何なる

深夜歸戀

談合友戀

問來つるしるしの杉の甲斐もなき三輪の山に我や迷はん 濡つ~も問はましものを假初の傘宿に許さましかは

及曉途會戀

寢人戀人

叩きつる門はくひなに成はて明るもうしや東雲の空 年にし其の懸しきにさらかへりてもあひ見てし哉

敎居隱戀

雨中戀

また宵に怪しく人の来るかなふかして誰をとはむとすらん つれもなき人の心の何處をは我身にしめて戀渡るらん

立門空曙戀

思出舊女戀

秋たいぬ物とはいかて頼むべき人の心の行すゑのそら川水の増される知らて雨をのみ身をしるものと妹嘆らん

他行時來戀

片戀

再びはかきもやられぬ水の夜空しき名を流さむ しるらめや行交ふ舟の言傳も浪のよる砕く心は

疑行末戀

隔河戀

見るからにまさる思ひゃ何ならん嬉しきふみにあらはこそ有め 人戀る心はたつの駒なれやまなく雲を行き通ひつ~

送書待懇

隔海路戀

渡の得と思ひる同と思ひ川ひさめつ~みを中にへたて假染のすさひさしも恨むらん移らふ心あらばこそあらめ

見書增戀

遠懇

冬里

共忍戀

冬深きかた山小田の溜水びつちを籠て氷りにけり 厭ばれんものさしるく思ふ事いひしゃ何の心なりけん

言出後悔戀

よしの川みわたの魚も冬籠る時きにけらしょしつけて見

冬田

なれてく打ち向ふ窓の文机

冬河

閏十二月

霜氷り寒きあしたも起むしふすまなこやかしたに聞てたに寒ちゃ嵐椎柴の音

新嘗の神の祭の月たちぬ大宮ひさやいさまなからむ

き物かをり合軒はの梅の花も咲つ~

十一月

冬朝

冬風

埋火に薫る冬興

けふもまた冴暮すやと思ひしを暖かけなる雨に成ぬる

冬の夜の嵐や空を磨くらんきらめきわたる星の影哉 冬夜の長きの侘しきは思ふかひなき思のみして

冬雨

打きらふるにつけてもなくて雪見の老の身を歎く哉

いくつ寝て春には成とうな子に問れて又もおよひ折つ~凩のはけしき山のむく鳥はひるも塒に籠りてそなく

しばすのつこもりの日に

霜寒き草の縮を傳ひきて朝戸のかけに飛さきかな

けふをさへなす事なくて暮す身の過月日を何をしむらん 霜枯のの薄もすのなく聲さへ寒むし冬のあけほの

つこもりの夜によめる

冬

年は今暮はてぬらし大路行く人音絶えて鐘響くなり 山影の落葉をつる霜の上にほのかに残る鹿の爪かた

冬星

冬懐

世間の急きをよその旅にても幕行年はをしくやはあらぬ秋にも寝覺わひしき松風の夜寒の里に冬は来にけり

漸春近

冬 鳥

六三元

餘りぬる此一月の嬉しきは惜み止めし年かとそ思ふ

六三七

旅歳暮

降積る雪の重荷にかへるさの車もうしのやわふらん さもこそは早月日の坂ならの冬をおきても暮る年哉

雪中獸

に

車中雪

立春は正月十一日なりさいふ年の~れ喫梅に疎人を思ひけり雪ふみ分るころえらすて 市人の急かはしけにふみしたく雪にそっても惜む年哉

雪中客來

歳暮雪

しばしこそ風も拂ひしくれ竹のに雪の山となりぬる

よしさらは惜まて年をこころみむ我身のよそに暮て行やさ

雪竹

歳暮

夕風に雪打ちりて家鳩の鳴く音も寒し庭のくれたけ 降雪もかくそあえぬさく梅の春に先立っ春のにほひば

竹雪

雪中早梅

闇の埋火の何れか先に消むこすらん

せめきつる老木の松の風絶てあたちかけにも積る雪かな燈火もまた

雪埋古松

爐火欲消

吹く風にしつれて山松の蔭しも深く積る雪かな雪を待つをちの山のは炭竈の畑のみこそ立まさりけれ

松雪

降雪にもみちぬ松もすみ竈の烟さなれる色 そばかなき

春をまつみきりの櫻雪ふれは花にとられぬ花咲ける

炭竈

雪庭樹花

狩人はくるる日影惜むらん疲れの鷹をあはせつ~

ふみ分てこのませる瀧口の音高し夜半の白雪

禁廷

ふみ分む人の跡をも雪中述懐

風ぁれて雪ふり迷ぶ冬のよは門守る犬もふしやわふらん

閑居雪

よそに見て問日數も積りけり末野の雪に深草の里 埋火を離れぬ猫妻に降り積む雪の軒ったひして

懸るかな淋しさ積る庭のしらゆき

降積る雪を見るにも佗ときは集めしかひもなき身なり見

夕鷹狩

遠村雪

降積る大路のみ雪跡降雪の晴るに見れはわたの原浪立越えぬ島山もなし

霜にのみさえに月をめつらしく今宵は雪の上に見る哉

朝雪

島雪

寄浪の色も一つにふきたて 浦傳ひする雪のあさ風

霜枯は庭の見るめもなかりしを嬉しく積るけさの雪哉

月前初雪

浦雪

時雨ふる朝けの窓に打向ふ雪めつらしきをちの山のは 道たえはいかにかせまし一夜とて結ふ假寢の野への白雪

ふみ分で問とはるへき契りのみ雪より先に積る冬かな 分かねて宿りし野への假庵に雪も日數もつもる旅かな

初雪

旅宿雪

老の數積れる身こそくるしけれ昔は家に見ても雪かは降雪を吹く風のあらち山さささぬ開にとまる旅人

待雪

雪中旅

夕嵐寒き川瀬を鴛鴦のいつち行らんつまなしにして嵐吹くすまの浦浪かきくれて後ろの山に積る白ゆき

雪

關路雪

の旅人

山雪

遊べる

一鳥過寒水

眞柴焚く烟を雪の下に見てのきはふこしはなち飼ふ里のあひるも一つにて垣根の小川鴨を積雪

打むれて遊べる池の水鳥もつかひになほわかれつ 中々に松か枝白く見めるかな風吹雪のやまもと

水鳥馴

おく霜を拂ひあかして朝日さす汀にねふる池のを鳥 朝風は吹なこほしそ降積る枝おもしろき木々の白雪

樂けに遊べる池の水鳥は浮たる世を知ずやあるらん

夜雪

堤行く人は稀なる冬川の水のむら鳥かすそはりつ~風たへし夕の空に降いて~更る夜白くつもる雪かな

水鳥多

風前雪

六三六

もなし我こそはまつ打出にけれ

六三五

かけ

水鳥

いかはかり霜もふる木の皮さえ通のたる夜半の月冬の夜の嵐の空にすむ月の落たるかけは氷なりけり 吹おろす嵐を分てさほ川のいや川のほり鳴く千鳥哉

冬月冴

さよ千鳥鳴音も遠く成にけり氷やすらむしかの浦波

寒夜千鳥

秋ならは何處迄かはあくかれむおり立っ霜の深き夜の月

霰降る音につけても思ふ哉老たる親の床のよさむを

冬月

世中のからかましさにかへて聞くの音のさやかなるかな

はふ鷲の紅葉も散て冬深き緑を見するをかの松か枝

いと寒きよに故郷をおもひて

寒松

閑居霰

水も氷に閉て風わたる芦の枯葉のおとそすくなき

おく霜にうら枯せて見と秋の面影とほしまの~かや原 深き夜の窓打叩く霰には時雨になれし夢もさめつ~

池寒蘆

長き夜の待る鐘は音もせてのみこそ窓を打けれ

花ゆゑも問れさりける庭なれとかちるはをしき霜の下草 木葉散る嵐の庭は宵々の月はからこそ問まさりけれ

原寒草

深夜霰

あはれにも落來る雁かひつちさへ霜に枯る冬の田の面に 霜かれのみ山の林狐なく聲さへさむき夜半の月かけ

寒草

閑庭冬月

夜を寒み早く氷りて山里は覚はかりの音なひもなし 山松の葉分の霜を吹拂ふあらしの上に出つる月かけ

殘雁

山冬月

寒き山のいさら冬來れは氷の外にむ水もなし さよ深く結ひし夢はあともなき枕の霜にさゆる月かけ

懸樋氷

月出寒山

冬曉月

風寒させりゐの清水ひさこもて冬を汲むるけさの薄氷

笹の葉に降し霰のしみつけるも寒き夜半の月かけ

柴人はこりしつま木をゆふ霜の寒き山路今帰るらし

ぬらん曉寒き星月夜かな

樵路霜

風の音は松にのみこそ響きけれしかの浦浪氷りはつらん

湖水

おきわたす霜や野山にみち白浪の岩根のたちひたちかさねくつれて
落る香のはけしさ

菊の花匂ひうすれぬ山里は紅葉の後も人を問ひける

曉霜

瀧邊氷

山家殘菊

うは氷解では結ひむすひてはつひにとけするなりし池かな

氷滿池

かき分ていたゐの清水(みしまに宿も落葉の下に成める

落葉埋庵

宿りつる影にならひて片破の月のかたにも氷る池水

池水半氷

散積る紅葉こほれてさを鹿の渡るもをしき谷のひははし

橋落葉

すむ鳥も池の心や恨むらんうきの床をつる氷に

嵐吹くたきつ山川きてみれは只もみち葉の流をけり

河落葉

夜凍

行小夜時雨降やみぬらし軒は打木葉の音の輕く成ぬる 水鳥もむれ分にして通ふめり結ひもはてぬ池の薄氷

散まかふ紅葉なからに浮雲の色も暮れ行く夕風の空 夜嵐に答へと浪のおともなしこほりゃはてこやの池水

夜落葉

薄氷

夕落葉

氷・

浮雲は時雨もあへぬ山風の空に亂れてふる木葉かな

落葉

閑庭の霜

何嘘より散て來つらん枝に見と色に優れる庭のもみち葉

しとなく整斗りして置渡す朝霜寒し庭のさえはら

今朝も亦庭の落葉の霜の上にあっくみのっち漁れる

木枯降くらしたるもみち葉の夜は時雨聞なされつ!

路小夜史ぬくれ道の溜水氷ふみしたく音斗らして

池水

六三三

秋ゃあらぬ夕やかはる哀れいかにもろく成行老の涙そそ~やさてとりきし簔を吹すさふ時雨の雲の跡の山風

秋祝

立寄り松の下蔭露たにももらて過ぬるむら時雨かな

物思ふ秋の長夜は白み行閨のひまこそいのちなりけれ 紅葉せん櫨の一むら散はて時雨淋しき小山田の里

秋述懐

行路時雨

とふる心を千々に砕くかな我身一つの秋のたひねに浮雲は嵐の末にた~よひて名殘時雨る~松のした露

秋枕夢

嶺時雨

秋といへは枕物を思ふらん夜なく見る夢の悲しさ柴人のそほちて踊る袖見れは高嶺の雲は時雨成けり

田家時雨

苅はてし秋の田面の淋しさは稲おほせこりの脛はかりして惜みてし秋の名残の夢をさへ、冬にさまして降る時雨哉

秋

夜時雨

同じ野にふす豬の床やさを鹿のか花妻かるもかくら 星月夜さやけき空に一村の雲かきくらし打時雨つ~

秋旅

時雨過

時雨告冬

秋

さもこそは待つる冬の空ならめあわただしくもふる時雨哉

霧深き竹の葉山の朝ほらけこほる~露は雨にまされり

初時雨雨

我山は紅葉染たち月見にさ問こし人や又もとひこむ 萩の葉にこもれる宿も冬の来て更に驚く風のおさ哉

秋竹

紅葉にちあけぬほそを打叩く嵐は冬の来るなりけり

山家秋

閑居初冬

さのわたるけしきも秋さひぬ紅葉散しく峰のかけ橋

冬

いつの間にかさのいさらゐ汲水の手のうら寒く秋は成けみちたれる
御代の光や露霜の秋のなかばの中空の月

秋橋

雨中紅葉

夏を秋さ過し~池の釣殿は秋來て冬の心地こそすれ

秋の歌の中に

つき深くも匂

絕間も有けるものを

秋野

屋

笹の屋のあれまかくしの蔦蔓秋は紅葉を葺かこそ見る

せめ老對

茸狩にいさ分いちむ打ちかほる露なつかしき秋のまつ山

秋山

置く露や霜さなるらん白菊のにほひも寒き秋の夕暮

夕菊

かきりなくすみたる秋の4空かな嵐や雲を吹つくしけむ

人の心も絶し秋はけふ初瀬の寺の入ぁひのかね

夕 くれ薄吹しく粟津野のあらしの底にうつらなくなり

野鶉

秋天

なつかしく匂ふ紅葉の袂かな緑の松にしたかさねして

はてし田のものの水はれて飛かの影もかくれす

れ

澤田畯

山寺秋暮

もつの鳴向ひの岡に色深く匂ふやはしの紅葉なるらむ

月影にすめる礎の音にこそよた~おきるの里は知ら名所擣衣

紅葉透松

磯山も見えぬ夜霧に漕舟のこそ泊りと打きぬたかな

常磐木にまる櫻は秋もなほもみつる色に現はれに見

泊擣衣

岡紅葉

島原なる赤嶺山のさくらのもみちを見て

唐衣長き夜すからうつ聲にねられぬ床の露を砕くる 露霜の早く染たる紅葉をおのか色にて降しくれかな

山家搗衣

紅葉留人

六三二

うちかはすきぬたや誰と思ひとは我山ひこのこたくなり尋ね来て家路思は紅葉はいくしほそめる心なるらん

すむ人も嵐と思ひし山の奥に秋の夜ふかくうつ聲・

きつる我身の老もしら菊の花こそ千代の友にそ有けれ

疎狩人の分るけしきも面白き萩か花野の秋のゆふつゆ

水邊秋

糸竹にあそはぬ宿もなかりけり都の空の秋の夜の月

みつ潮の入江靜かに入魚の浪さへ見ゆる秋の夜の月

花洛月

假寝してたれか見るらん眞萩散るあたの大野の秋の夜の

江月

月の中の桂さしはしなりにけりさしのほる峯の松の一本

野月

山深みまきの葉しなひ露によすから月の影したたる

立迷ぶ雲を浮世の隔にてさやけき峰の月を見るかな

ささにて月をまちて

月にふくみそらの嵐早からしかりもあへす過る浮雲

深山月

横雲の一すち靡く山のはに出るもほそき有明けの月

月前

おり立し夕庭のさなからに待こそいつれ山のはの月

曉出月

雪々に澄み行く秋の大空は月の光のつもるなりけり

立待月

きのふより今宵まされる月影のあすいかはかり照むとすらむ

秋夜月

朝立し旅人いかてわたるらん霧深き木曽のかけ橋

六三一

色深き山田のいなは打磨き秋風遠くわたるかりかね

梯上霧

山風もまた吹かぬ朝霧をいかに分か雁の来ぬらん

田邊雁

我門のわき田の上を過ぬなりこやさき立てる雁の一つら

霧中雁

月をのみ問人にする我宿は心のすまぬ秋なかりけり

哀れと月も見るらん月を見る秋の積りて老となる身を

初雁

天雲のむかふす海の涯までも照つくしたる秋の夜の月

月夜秋友

おきそはる露のむら竹打靡き夜深き月の影そこほる~

月前遠望

諸共に宿れる露の草まくら月むつましき野へのかり庵

月前竹

初瀬山ふけ行月の霜の上にさえかさねたる鐘のおさかな

羈月

古寺月

古寺秋夕

逐夜月明

茸狩にくる人待てけふるまた紅葉折たき酔つくしてんさんかはす光清玉うきに幾夜の月を浮へ来つらん

草紅葉手ことに折るさの山路を送るさをしかの聲 燈火も反けさっとよもすからすます心は月そしるらん

山家秋興

月

入日さす豊はた雲の色消てうす霧なひく秋のうな原 むつましむ心のひとつさかな一人を月は見るへかりける

秋興

對月

を鹿山田の末に色ときゃ苅残したるおくてなるらん 心あての松をあまたに打向ふ峯の何處に月は出らむ

秋眺望

見月

待月

露深き眞萩折しく秋の野にあひやとり旅宿鹿

關駒迎

すみ上る月。光を見し夢の霜になしてや鹿のなくらむ 萩の花尾花葛花ふみしだきいくあはせんつうつろふの鷹

電

深山鹿

初瀬山ひはらを渡る秋風のおともさひゆく入相の鐘

山路秋行

朝霧の時間に匂ふ野への萩分行く鹿の影も見えつ~

鳴明す草の枕のきりすす夜寒は旅の我やまさらむ 高砂の松にも秋の色見えてゆふへ悲しき鐘のおさ哉

野鹿交萩

六三○

秋風はや~肌寒く吹くれて越れは暑しいはね松かね

鳥たにも鳴ぬ深山の霧の中に一人悲しきさを鹿の聲

山深みまたき夜寒の秋風にたへすや鹿の妻を戀ふらむ 夕風のさそふ山田の露の間も宿り定めぬいなつまの影

月すめる嶺にたてん

小鷹狩

して鹿も鳴也

眞萩咲く野への假寢はさを鹿の聲を枕にゆふ心地して

秋望

嬉しさや駒も思はむみや人にけふ逢坂の關のへは

武藏野をぃっかたち野の駒ならんけふ逢坂の關路越るは

六二九

旅店蛬

萩のおこを何かいひけむ秋風は松に響くも悲しき物をなれて聞くや幾夜の蟋蟀枕の露の霜さなるまて

朝野分

萩の葉のそよく夕の秋風は身を吹通す心地こそすれ 夜も更ぬさのみばいか~とゅかも道もさほちの野への松虫

草も木もまた色かへぬ秋風にをる物は心なりけり 枕上蟲

風よけは杉の下葉の雨さのみふるの山の秋の夕つゆ 女郎花手ことに折て帰る野に恨みかほなる蟲のこゑ!

秋風

遠蟲

女郎花匂ふやいつら有明の月かけしろきの朝露 淺茅原ふけ行く月の影見れは雪の中にそ蟲は鳴ける

山中露

八月のなかは野へにあそひて

鳴く蟲の聲うつもれし蓬生はすむ人さへそ露の底なる 蟋蟀むらきぬいくら渡るらむくる~夜毎につれさす聲

野草露滋

月前蟲

花のよるの錦 かくれなく月おしてれる秋の野へ哉 荻の音のためむ軒はに響くなり外山の松の夜半の秋風

露

七月のなかはに

秋夜の露やいかなる露なれは物思ふ袖をまたき染らむ 秋風のそよ吹ま~に鳴まさる蟲の音涼し夜半の月影

露深

分てしも吹かぬ嵐を苅萱のおのれ亂てかこち顔なる 蔭深き槇の下道ふきおくる浮雲早秋の山かせ

桔梗

海邊秋風

言の葉にかけぬよいかに置露の深き匂もありのひふきを浪の音も開打越る心地しぬ須磨の浦の夜半の秋風

月前草花

遠近秋風

風寒き秋の末野の花す~き入日を招く袖かこそ見る山のはに匂ふ朝日もかけろひて野分吹なりちふの露原

苅萱

深山秋風

七月靈まつりするに

はしたなく吹く野への嵐かなさらても露のもろき薄に

打つけに手折る憎しと女郎花まる薄の手を切けむ

妻むかへ舟漕出ましかは

七夕祝

薄隨風

天漢又も名にたつゆふ浪に閏七夕

女郎花さこそは多くたてりともゑひ伏す人を止むしゃは

織女は恨をのみやかさぬらむあふ夜程なき後朝の袖

いみじうゑひたるかありしかは

織女恨曙

八月のなかは人とともに野へにあそひつるに

一年の心にのりて我戀し今宵の舟出たゆたふなゆめ 仇なりこなれも見るらん女郎花花のまに 移る心を

一年に一度きます妻の調へあふ夜は明すもあらなむさを鹿のぬき置ける玉と見ゆる哉の小萩に靡く朝露

七夕舟

女郎花

萬世にさこそは絶ぬ中ならめ年に一夜とちきるへしやは獨りすむ身はならはしの淋さも絶ぬ夕への荻の上風

たらひの水に梶葉うかへたる處

荻似人來

乙女子 今宵手向くる言の葉ややかてねかひも水莖の跡 春たにも訪れぬ宿を今更に思へはそよく荻の夕風

七夕琴

萩露

柴の戸を明る朝風かをるなりかきねのわざ田ほにや出らん おふかたの草木にはまた吹たらぬ秋風しろき荻のともすり

七夕

獨聞

かつきの寢覺の袖に吹くるもまたほのかなる秋のはつ風はふ蔦の松にかしたる秋の色をあやなく風の誘び行哉

早秋朝

荻知秋

ほそあけてなほふす床に吹入る~ 村雨涼し秋の朝風 年毎に數そ人のなきたまをありて祭るも哀れいつ迄

早秋

蔦風

六二元

同時薄にて手を切りつさいふ人あるに

一年に一夜さいへと織女のおいすしなすの契幾夜を

新秋雨涼

六二七

荻の葉に風吹立てゆふ日影のこる籬の夏をきえゆく

なん

夏夜雨

蜩の鳴く音くれ行山かけの荻のかきに秋風そふく

新秋風

けふたにも照日の暑さ忘れましあしたの雨よ降くらさ朝風になびきたる白雲の色もす~しき秋のそら

五月雨に濕りし書を曝すには初秋月

祓川なかすすかはの早瀬に神の受たるしるしをを見る

夏日

おつる~風のほそを夜にあけて秋立をむる空と見る哉

初秋

立秋

吹風の涼しさしめて踊るかなはらひし罪の名残だき身は

秋

朝風の吹とす露の涼しきは垣根の野へに秋や來ぬらん物うさの我にてしりぬ夏日はうへこそ人も訪こさり見

夏袱

おり立てむすはぬ水の涼しさを船につたふる木々の夕風る筆もものうき夏の文机に所を得てもつもるかな

野亭秋近

來客夏稀

とめてするむ大路はひろこれる柳の眉もなつかしき哉 さく起て涼む心は朝顔の露よりほかにしる人もなし

瓊浦に船よりすくみて

夏木鳥

夕されはみつしほはなによる魚の躍る。涼し瓊の浦なみ はし鷹や空に飛らん夏山の茂きか中に落つるむら鳥

風來水樹間

夏塵

夏朝

柳蔭納涼

照る日嬉しき六月の空

夏雲

鳴門はまたおさせねこ立上るけしきかしこき峰の村雲

夏雨

涼しさを竹の葉風に先立てくるるのきはに村雨のふる

吹風も身にしみそめて霞々の月の光を秋になりゆく

山家初秋

夏の夜のまたき明ぬる闇の中に残れる月は扇なり見 松にふき竹にそよきて涼しさの袂にあまる軒の夕風

閨中扇

立ぬる~衣手涼しわかくぬき靡くはやまの風の下露

許すも何處にくつを踏入れむ露ふかけなる山の瓜はた

納涼

瓜

待とほに思ひ秋は山蔭のいはゐの水にかねて澄けり

か軒の夕顔これも赤みのなりはひの一つならむ

泉邊秋近

けふも尋ねて人のこしは垣白く咲たる夕かほの花

夕顔さきたる家

いは水の松かねあらふ山蔭は夏をなかせる處なりけり

夏の日を隔てはてたる松山の岩かね寒きまし水の音

かた山の松のした道涼しさの風もおくあるいは水の音

松下流水

.垣夕顔

かやのやつれかくしに咲か~る色なつかしき夕かほの花

松影に雨たちやめて行人の姿も涼し野路のゆふかせ

秋風の吹たつ空や近からむうらさひ渡る蝉の聲かな

晩夏蟬

松下杲

夕立時

峰傳ふ照射の影を五月雨の雲間にあゆく星かごそ見る ぬれて行野路の旅人夕立のかきり見えたる空や頼める

乙女等か我ゆつりける川の瀬にさすなりますらその友 鳴神に柴つみ車音をへて夕たちきはふをの~山みち

照射

野夕立

六月の照日の色も名残なき夕かけ草に露そこほる~ 濕り行土のかをりも涼しけに一むらそ~く夕立の雨

鵜河

山路夕立

夕風を待とる袖にうつり来て月影をよく軒のわかたけ 蔭深きみ山のひ室多をさへこむれは籠る物にさり皃

夏草露

夕立

夏月透竹

六二六

氷室

夏虫を優なしさこそ思ひとか鹿・照射に身をまかすめり

日をさふる蔭には薄き我宿の木立嬉しき夏の夜の月

六二五

かな

瀧邊螢

樹蔭夏月

飛まかふ螢盛りの河水は何影ともわかれさりけり 世離れて心すしき山里は月きへ夏の外に澄みけり

飛 燃る思ひの中々に涼しく見ゆる水のかけ五月雨にくちゆく軒の下草ややかで螢となりて飛ふらん 六月の照日にぬるむ川水もよるは氷と見ゆる月かな

水上螢

山家夏月

遣水に螢飛かふ夏の夜は月なき庭もなつかしきかな 夕立のあらひし空の涼しさはおなし影と見えぬ月哉

雨中螢

河夏月

うちしめる衣手寒し五月雨の雲よりおろす嶺の松風 夏の夜は紐解けて欄によるほさもなく明る月かけ

暗夜螢

雨後夏月

飛螢消え行影もさもあらはあれ月すみ上る夏の夜の空

五月雨に茂りし山の珍らしくけさ見え渡る雲の叢消夕立の一洗ひせし庭の面を秋になしてもすめる

松風五月寒

下しつる簾上るも涼しきは入日にかはる夕月

夏月

船中五月雨

さて静かにくたせ水鶏なく聲面白きよるの川船

橋五月雨

草取し賤も踊りて静なる夕への小田に水鶏なくなり

一人住む草の庵の静けさは螢も窓のうちに飛ひつ~

焚柴の烟りも雲も一つにてさみだれくらき山の下庵

山家五月雨

夕水鶏

五月雨は入相の鐘を聞てこそまことに暮る空はしら夏山の滝の白糸くるとよりぬきあへぬ玉さちる螢哉

るれ

五月雨

閑居螢

五月雨に増る水嵩の浪越てゆるきの橋や下に崩る

船中水鶏

葺苫も数々朽てる雨のうきねは幾夜五月雨のそら

五月雨晴

郭公のふの山のこのひ音も現れそむる夕月のそら 入日影隠る迄にきはへるはけふ植ゑはつる早苗なるらん

郭公のふ心や弱りけむそほふる雨の夕れのこゑ

ひしてやけふばとるらん早苗草千町の小田にきほふ聲々

夕早苗

夕郭公

有明の月はいさよふむら雲になく音あけ行く山郭公

採早苗

待たゆむ人はきかしな郭公明け行く空になる一聲賤の女唄へる聲も珍らしく今日植をむる小田の若苗

郭公枕におつる一撃に夢ものこらぬこの~めのそら 打しめり薫る橋たちぬる~袖なつかしき雨そき哉

曉郭公

早苗

郭公なく晋さやけき山松の梢よりこそ月もいてけれ 郭公歸るみ山の里人はのちの音といまや聞くらむ

郭公驚夢

雨中盧橘

老

郭公

吹たつる貝の音高野母の海の鰹釣船かへるらし

ふししはにかこふと見つる山里は卯の花のなら 朝風の谷明のほる雲の中になくやはつせのやま郭公

卯月の末つかた野母の浦にやさりて

五月雨の八重だっ雲も郭公なく聲もらすひまは有けり

社頭郭公

かきほなき草の庵も夏くれは卯の花白く咲かこひつ郭公なかめむ方もなかりけりた~一聲のゆふ闇のそら

里卯花

雲間郭公

卯花廻庵

郭公のふる頃の一聲は洩す空さへそこはかとなし

郭公何方

夜もなほ匂ふ卯の花これもまた學の窓の光にやせむ

六二四

神垣になく音をぬさと手向くるは旅の空なる郭公哉

郭公桙有明の月もほのめく山松の木のまたちくきなく郭公

三輪の山とふらひ來つるしるしあれや杉の梢になく郭公欄に匂ひかはし~聲さへも盛り過ぬるほど~きす哉

月前郭公

郭公歸山

六二三

春の夜のよふかき鐘の響には夢の枕の花そちりける

谷深き青葉に踊るは浦しまの子かこ~ちもやせむ

卯花似雪

谷鶯迷新樹

春風にきほひて揚くるいか幟いかに楽しきすさひなるらん

人事

茂りあふ若葉涼しき夏木庭樹緑滋

野飼して重荷負せぬ春の日はうしても身をは思はさる例

花盛り野山へに乗なへて駒疲らさぬ日もなかり見

飛蝶に心かけてやから猫も春は園生の花になるらむ 茂りあふ梢の青葉吹風の洩しかねたる夏の夜のつ

葉隠れにめしろさへつる整す也椿こしりの春のみ山木枠のにくけなる葉もわかさしそふ色は懐しけにて

春獣

夏くれは茂る青葉に木かくれてありこも見 山本の里

新樹妨月

たさぁえて霞の内にほの見るも覺束なしや春の山のは山深く尋ね來て見る遅櫻わかれ春にあふ心地して

春木

新樹

春風や吹ゆるふらん天津空のさけき雲のた~すまひ哉 春木々の若葉に降雨は人の心をしつめかほなる

春山

殘花

春雲

首夏雨

遠近の相茂り三月盡雨

夏首

散花の空に霞み面影もはつかに成り夏

暮春月

咲花を尋ぬる春のたつか杖つかぬ日もなし野へに山へに

藤浪の匂ふかきりはくれすあれな花のためなる春にやはあらぬ

春雜

ぬあり明の月

降しきる雨にもしばし止らぬはいかにわりなき春のわかれそ

けふのみに成にし春のあやなくに夕へを急く雨の空哉

て山はたのむきふのほたち色付にけり

卯の花にましる岡への岩躑躅さすかに春の色も残れり

春立ち來4月はさもあらはあれ

れはてはたか名はたし藤の花はひまつばれて春を止めよ

華の筵しきたへの枕ゆひても野へ哉

さきごさ

春藤

野菫

藤波の花険しより哀れてふこさをも松にかけて見る哉

夕月はまたほのかなる山のはの暮行をしき花の色かな

松上藤

栗山春望

思と遊春野は長き日をくらすに安き物にさり水邊

長き日はあくかれ渡る春の野に道さへ面白きかな

迷道さへ面白きかな 苗代のみつの水上來て見は杜若咲く野澤なりけり

野遊至暮

杜若

野遊

ゆひこめて誰かは春雨風に砕く心も花見つ~遊へる御世縮歎冬

木は老てそ色の優けるふりにし人のか~らましかは

寄花神祇

懐

山松の緑の露のいかにしてそめし躑躅の花のくれなゐ

松下躑躅

櫻花散くる時は吹きあくる風にまかせてを見る

春深き宿のに飛ぶ蝶のはねすの花を今さかりなる

落花入簾

唐棣花

何處より吹來る春の風ならむ花の散との日もなかり見

花ならぬ人の心やなからまし花の都の花のさかりはいつしか水寒からす成に見青み渡れる小田の苗代

落花風

いつのまに雀隠れに成ぬらん昨日か蒔小田の苗代

都花

六二二

苗代

寄花述思ふ事いはぬ色しも哀れなる妹か垣根の山ふきの花

となつ彦いかにならして櫻花のさけき色を他迄は見む思ふ事八重に重なる山吹のそれさへいはぬ色に咲つ~

寄花祝

のすさびならすや

を止むらん籬もために咲ける山吹

ける

およひつ~折るも危ふと谷川に咲か~りたる藤なみの花

なはしろにせきよこめたる山水ののどかに見ゆる花の色哉

六二

主もなき花とはこれと山稷思ふばかりはえこそ手をらね

月前花

山櫻咲の盛になりぬらしひまあらはなる嶺の松はら

水邊花

花

嶺櫻花をてかさきそ老の心はわからへりける

て

花慰老

浦上里なるなにかしの家のうしろの花のもこ

花見にと乗ならしたるわか駒止にもこ~まりにけり 春はた~花の處をさひくて友なき身

花爲春友

ちれはかつ咲く花に今日も亦同し處を来ても見る哉 人は皆歸りし木陰静かにていよ!花にそむ心かな

馬上見花

山櫻あかぬ木陰のから枕まつらん妹もさもあらばあれ

見花

歸

花盛なりに廿日のよ雪ふり出て廿一日もかき 百鳥のおき出聲咲花の匂ひにむせふあけほの;空

たれふりぬらん

朝花

鶯の輝き~そめし嬉しさは何ならさりきけさの花 春雨の名残の山に色かへて立をふ雲やさくらなる覽

二月十三日はかりより庭花咲そめて十六七日

曙花

呼子鳥此方彼方によふの道はしき春の山かけ 花かと外をこむる朝霞薄る方ににほふしら雲

初花

雨後花

白み行く霞の空にあり明の月影高くひはりなくなり 春の夜の霞いさよふ月影に晴れ曇りする花の色かな

山呼子鳥

霞中花

庭櫻盛りの梢風さえてむつの花さへ咲きかさねつ~ 長閑なる朝けの空か櫻花露もこほれす香に匂ひつ~

み山木の中なる櫻たま に見つけて見るそ嬉しかりける

下忘に酒のみあそびさく花を主になしてあるしせぬ花の主を心ありける

折花

さんにさす山住みの春のよころの嬉しさは朝い許さぬ鶯のこゑ春の雁かへる田のもの澤水にとまらぬ影を何映すらむ

淋しさは誰かいふらん鶯のにこもれるはるの山里

雲雀

鶯の鳴く音あまねく成にけり 春告殘す里やなからむしかりさて壁はかくれぬ物故に春の夜深く雁の行らん

山家鶯

歸雁流水

浮ひ出て已か舟をや辿るらん霞む浪間にかつく人 月花の匂ひる深くかすむ夜に天津雁さへなきて行くなり

鶯告春

夜歸雁

先たち人はいつこに遊ふらん深くも霞春の野へ哉 立こめし棺の霞雨になる山へさひじき入ぁひのかね

海上霞

歸雁

暮山春雨

野霞

出る日は峯の霞にかけろひて月白しあけほの空

朝なく霞む山のは打向ふ心の春もふかくなりつ~

山霞

降積るみ雪なからに霞めるや松の縦の春のはつしほ 大空になきし雲雀も落はて~ほの見える夕月の影

春夕月

春にあふ今朝の心ののとけこはあの行身ごもおほえさりけり

早春松

おなし野にきたりてそしる藏をりを過さぬ人の心は

いけるあした

友

梅花人のために折る枝香は我袖のものにさりげる

春

梅花やかてしみぬる匂ひ香は立寄人の袖やまちけむ

柳隔隣家

梅香留袖

しのすたれ第五集

*二〇

正月元日によめる去年春立ければ

きのふまて冬にきれの色の今朝現はれて立霞かな

春立を楽し柳のしなひくり行隣をかしき春の山ささ

折瀧遇やよひはかり朝ごくものへ行みちにて

六一九

ともいやしくさとひたるかおほかめるはおほかの人にめてられむことをおもひしひてめつらしきをもご

めこさまなる事をよみておのつからさはくたりこしものなるへしし
かあるわか園翁のよみ出る~

歌は打おもふまのまこゝろをのへて今のさまにもそむかぬものから
さまいやしくさえひたるふりをはな

れてこふろみやひにすかたのさやかなるはもはらいにしへによりて
しらへをむねさせらる~かゆゑなるへ

しさるはいさたかくすか(しきこゝろもてかけられしこのしのすたれ
の巻のかすさも今はいとおほく

成ぬるを人々はかりて又もさくら木ににほはせむとす明るは萬延と
あらたまりし年のやよひの末つかたな

りけらかれいこようこほしきあまりにおふけなくも其はしつかたに
一筆かきそふるは津の國のみかけの里

なる 伊勢有観なり

いにしへまなひおこりて歌のさまもいにしへにかへりぬるをやうく
にまたくたりもてきて近きころはい

志能數多禮第四集終

汲水もうつはによりてことなるを世にすむ人と友にらひせよ

はかり軽き身をたに吹風に任せてぬる世の中そかし

寄水

荒海を四方にめくらす日本は神。固めし御なりけり

寄風雜

仇しあればいふ沸はす神風のいかしき稜威疑ふなゆめ

寄國祝

人の世は見はてぬ夢よそれならは又の眠もあらましものを

神祗

みな人をねよさの鐘を文机に我打向ふはしめなり見

浮世短如夢

嬉しきも憂きも昔の老の夢語り出さも誰か聞くへき

夜學

木のはしと人に言れて入れす花に袂を觸むさすらんくる日に書きしまるのさなからにた~っくをしみ夜を明しつる

醉美人

獨思往事

しかりさて起もせなくに暁の眠りよ何に覺めならひけん 小波も立ぬ心の池水は濁る世もなしあする世もなし

覺束な一人寢覺の夜の床鳥の鳴きけん鐘やなりけん 雲に入り海を分つ傅へも哀れなき夜半のかね言

曉眠易覺

心静延壽

曉寢覺

楊貴妃

猪

舟さしてふた~ひめてし言の葉に面影ふ浪の上の月 誰の手にえられも哀れ也富士の裾野の夜のい

面影はうつさすとてもさやけさの鏡に恥心なりせはなく整にまかひし浪も吹風の思方に立かへりぬる

赤壁

曽我五郎

思ふ事しるし止めて百年の後の人をや今はまつへき 水馴棹さしも定めぬ遭瀬にも蘆分小船障りのみして

寄録述懐

源氏君

さしもなさよきにはは人の口とちてあしき名をのみ言流覧 鮑玉千尋の底にはは藻鹽焼よりからくそあらまし

獨述懐

船中遊女

のかれむと思ふ心を徒らに過し行身の哀れ世のなか

治まれる世に住むかひもなかり兒人の心の下のあらひ 柴人の重荷も何か思ふらむ安き心をやすし思は~

ある世にも有哉をあらす聞なす人のみにして

海人

おのかすむ野へのむら草かり初に世を渡る身を安けからまし

樵夫

船にては行さも知ぬ海つちの早くもうつる浦の松原

述懐

いさ~しく花のあまひの海路眺望

數や添けん

こはるちは露の玉とき早に水のけしきはさす棹のたわむにしるしふの河船 荒磯のいはねにはへるか根の下より見める沖津島山

世の中を遁れはてたる庵には咲かひなしや燈火の花浪の上を離れて島の見ゆる哉沖津潮路は凪にけらしも

竹間燈

薄くこく浪の色かわる海原に吹行風の跡を見へける

燈火の洩る光りに呉竹の世を隔てたるすみかをそえる 吹風も解けき海の眺めには心の乗らぬ舟なかりけり

河舟

海邊眺望

海眺望

老ぬれは昔は夢のうちなりし鐘をかそへぬ暁もなし 夕凪の浦おもしろく見ゆる哉きほひて踊るすとき さ釣舟

閑居燈

夕眺望

あひきする大海の原暮はて~舟打ならす音を残れる

曉鐘

日影沈浪間に見ゆる帆は夜舟にやおはむさす覽

*漁船

行(川の水汲みある水車廻らす水のめくらされつ

浪荒き磯わの浮寢友綱のむすぶ程なくさくる夢かな

望遠帆

は咲かわる黄金の花の色に見え

枕

疲れたる足休めにには待程の久しき舟も嬉しかりけり

船中夢覺

移り黃金

渡待舟

*一六

思ふなるへ

子を負て走る山猿哀れくそをたにせ狩人のこも

太刀

をえまし~大御心のつるもふつの御霊のちはひすや

高木をつたふ心のさるこらに人に優ると渡舟

行世々のけしき夢にさへ世の憂事を見つ夜は我枕さへつらくも有哉

水車

待もあべす岸さし出し渡舟のへなく何に急來つらん

舟よはふ人のたえまに渡守書の夢や繋きさむらん

さす棹の安きわたりは舟人に折々かわる里のあけまき

待て聞く暁こさの鐘の音に頭の霜やおきそはるらん

鳥の音もましらさりけり立迷雲より奥の嶺の松風 青淵のみつちとるべき丈夫や虎てふ神をなつけては乗る

片山のふきすさぶ風の中に時の鳥のそたへ行く 里もなき野への假彩さ思を明る枕に鳥の音をする

深山松風

虎

誰かすむ調ふる琴もほのかなる竹の葉山の道のすち長閑にも鳴かわす哉妹か島田鶴るかたみの浦つたひして

薄暮松風

遠村鶏

うこきなきのきたる衣うへ世をへても迷はさり兒 打群てあさる野澤の清水には幾らの千世のうつるなる覽

竹徑通幽處

鶴

吹拂ふ風もさやけき苔むしろこや仙人のあそふさこ 長閑にも鳴なる田鶴か紅の朝日の色をいたときに見

苔爲石衣

澤邊鶴

鶴

巖苔

山かつの夕けの煌くれわたる林木ふかき鳥の一聲

山近く結ぶ庵はのかれむと思ふ心のふもとなりけり

は木深き槇の林なり見

暮林鳥宿

麓庵

つまておろす谷の水上來で見れ花楓つけし昔の山かつをいまは隣りの人になつ~ 分くたる山は麓になりぬらし松より下の松のむら立

山家夢

遁れてはこれもみ山の友として耳馴にけり耳つくのさ~波のしかの浦風浪ふけはまつ聲たつる唐崎の

山家友

麓松

獨りわか拾ふ枯葉を薪にて安くも世をはすきの下庵 生たれし棺のかつら山松の年の尾なかきしるしを見る

山家

名所松

山家杉

松經年

よそになる瀧の音にはあらねども馴れは夢も結ふ庵かな

いほりせむ木蔭もとむるをりしもあれ里のしるへの鐘響也 家ことに流す寛もみなかみは同し岩根の苔のした~り

日數へて短くなれる杖にこそ長き旅路の程はしらるれ尋ねくる人こそなけれ峰の庵岩かき登る道はあれとも

旅行夕鐘

山家水

宿借らむあたりやいつこ吹送る夕風遠き野路の松原行くれて道とふ家もなかりける山へうれしき燈火の影

旅行

山家路

ぬものそ有ける

旅松風

山家旅行

遠路に疲れこし身旅といへはやすおせられ旅

山家

山蔭の人すみけなき古寺は古たぬきのみ来て眠りけり まころまぬ浮寝の床に恨みきてよに成ぬ浪風の音

たつ雲の雫も雨ふる寺に誰か~くらん法のともし火 舟はてこれや何處の浦ならん枕に近きのさへつり

山寺

旅泊重夜

尋來て古りにとを語らすはかたみに知らぬ翁とや見ん 沖つ波静かに風のおふきは舟路の旅も心ゆきけり

古寺

旅泊

雨妹が手に任すべき

故郷草

中衣

尋ねこし折しも雨の故郷にあたる宿の程を知る哉 郭公きて都はいてにを雪ふりにけり白川のせき

故郷雨

一夜には乾きもあへぬ 雨衣ぬらしそへてや今日もゆかまし

中關

雨

旅宿六一四

打寄する浪の響をゆの手にてに調ふる琴のうら波

百重浪千重浪よせてみま野の浦の濱ゆふ風さわく也

狐ふす蔭とや今は成ぬらむすみこも里のこの~をするき

舊里尋友

にのみあらひきにける旅衣いつかは馴てたに獪物すこきいほりかな松の夜嵐ふくろふの聲

*一三

名所浦

有明の月を清水に止めおきて越るも惜しき逢坂の關 行けく猶末遠し長濱の深き眞砂路足もするまで

驛路鈴聲

沖津風吹や變りし朝ひらき出し舟の浪にたゆたふ

風ふかてをり(落る杉の實の音も淋しき谷の下水 梶やめて眞帆引上を舟見れは追手になりぬ沖津汐風

曉關路

濱沙

澗水

海路風

富士の嶺に打向ひては天の下山なしさこそいふへかり見

梶取のうたふよ脛もゆたかにて追風じる浪の音かな

不盡出

山高み落くる瀧の水けむり移る日影に虹そたちける

人

賤の女はかつく眞柴をおかさにて雨にもぬれ大原の山

雨後山水

時にけり一村雨の峯の雲おちそふ瀧に音をのこして

いか斗り砕流の浪ならむあたりの木々に村雨のふる

瀧水亂系

降しきるゆふへの雨に一筋の流よりくたる峰の柴越えてやら早くも宿をかるかやの開路佗しき夕暮の雨 -

樵路雨

雨なれや舟うつ浪のおこしけき枕におつる苦の雫は

舟水

關路夕雨

かへし磯もさゆする白浪におろしたるあまの釣船

いかはかり登り峰そ四方はみな雲斗りこそたなひきに見

浪聲混雨

山路雲

行きめくる野路の小川のさくなかれ一つ棚橋幾つ渡れる

あか星の光は空にさやかにて横雲白むみねのまつ原

磯浪

にかえるしら雲

曙雲

鈴の音もやをたのむなり岩かねになつむる駒の足柄の山

風もなく凪たる空の色見えて同處野徑橋

小

山姫のいかに繰出す糸ならむ岩根のたまり影もあへぬは

海路`

うき人を偲ぶの衣したにのみ思亂れてきる由もなし

雜

寄衣戀

沈めるは苦しき物をよしやさは阿武隈川の名に流れなん

荒磯の巖につけるしたゝみの下にそ早く思つきにし

寄名所慧

敷妙の枕もよそに敷くよは夢にも人を見る由なき

結ひつる契よいかに紐鏡のさかに人を見る由もなく

寄枕戀

寄舟戀

わか寄海人戀

劍太刀枕にさきていつしかも我思妹を身にそ添へき

寄車懸

一番たちも離れぬ鴛鳥のさてこそ世にはすま〜ほしけれ

引ま~にあら木の弓もなれ行くをいつまて強き人の心そ

寄繃變戀

寄太刀戀

寄弓戀

暁の入聲の鳥に驚かていつかはさねむ我こもり戀

戀

寄琴細川の瀧つ早瀬をたす木のわれても人に逢よしも哉 一筆頼むる跡のなかりせは我命毛絶へやはてまし

寄筆戀

寄柚木戀

六一二

寄鳥つま

老行雲井のたつの夫よりも得難き八さいかにしてまし

人知れす焦る 思ひ夏の日の水こひ鳥に劣らましやは

遠さかる人の心よ時鳥おちかへるとも今はたのまし

寄鴛戀

暇なき戀をも我は須磨の浦のめかり鹽やくならなくに

寄涙戀

さしかへ名残と思へは我袖の我涙さへしほりつる

寄鏡戀

獨居て我かきならす爪琴のしたひに籠る心しりきや

琴の音を聞けは懸なわきる子か搖る手さへ御にして

戀の重荷つみなは特牛の力車もたへしこそ思ふ

心から野の舟の早くより焦る~かひもなき身也見

人心深さ淺さる知らぬ世にうきみをつくし何思ふらん

寄貝戀

・六一一

せきらあへす落そふ袖の涙川みをしる夜の雨の景色に早き瀬の浪にたゆたふれ藻のしつ心なし我戀らくは

何そこも問れぬ袖にいつ迄かかけては懸ひむ露の白玉荒まさる人の心と草ならばかき拂ひても見てましものを

寄雨戀

寄藻慧

ふしのねも絶へぬときくを下むせふ思ひの烱忘れいつ迄心にもまかせぬものを徒らに思ひかけひのみつからそうき

寄露戀

寄草戀

寄懸樋戀

かたく眞柴の煙しはしたにけつひまもなき我思ひ哉

うき人のさし隔てたる心には明門にもれいらさり見

寄烟戀

寄門戀

夜にしていつこに人のあくかる月は入し極の戸口を

荒しほの浪の渦巻まきもねぬ妹にうき名の立さわ

ぬ夜半哉

寄月戀

逢坂の山路にも迷ふかな關守人のありさとるく

いさせめて歸す衣の恨しく夢にも人寄浪戀

寄關懸

我床は涙の海と成にけり積もれる嘘をうきしまにして

我戀の積れる山に比へなは星も麓のつむれならまし

涙せく袖は湊さ成ぬれ棹さしよする舟たにもなし 散ひちて数ならぬ身は山のみ積る思も知人をなき

積りぬる思ひの山のかひなきは分ても人のいらぬなり見

寄山戀

戀ふといふるなけらの事とおもふ覽なすらひならぬ賤か心に

やする憂身やさしき闇の中は書をも夜にさし籠りつ~

戀自我下人

寄書戀

はかなくも結ふ契か故郷の夢より外の夢の手まくら

旅戀

寄朝慧

枯果つる軒端の荻吹風のおこりはしは訪ふものを

さくおきて梳る朝髪中々にひとりねならぬほどや見ゆらん

の見え冬恨戀

さく歩む駒さへけさはいとはれつ引かさると心地のみして人心さへる世もなきさむしろに涙の垂むすほくれつく

名立戀

獨のみしほりし袖の名残には重ぬる夜半もを乾かぬなきて月影さむき秋の夜を獨なかめてなほ明せさや

歸戀

冬戀

あはれも今はいはなむ宵々にさわる言つて聞を古りぬる 明けなからぬるよ涼しき槇の戸に月より外の人をいればや

逢戀

秋戀

祈りこし腕も見へぬ戀故に神さへ厭ふ愛身を知る 出て見よつれなき月の影たにも遙に送る有明のみち

不逢戀

夏夜戀

月前歸戀

祈空戀

いつのまに人は積けむ忘草我は名をたにきかしとそ思ふ

かほり行袂の色をいかせむ漏るは露にかこちよすさも

被忘戀

間に我身におひて歎くらん苦しを聞惷の重荷を 逢はぬ夜をとばかりこそは思ひらか心さへにも隔て行哉

忍涙戀

隔戀

戀のこゝろを

涙身を沈めて中々にしたの思ひは燃まさける

戀

切戀

積む雪の松の下折

故郷の夢路もいこ~冬かれぬ結ひかねたる草の枕に露分袖とも人にいふへきをねたくも色の變りぬる哉

開もなき山路にけふも宿りけり降かさね もこそさゆれわさも子かやは肌ならぬ夜の衣は中々に事なしひつる言の葉に懸ふる心やしるく見えけむ

冬旅

依涙顯戀

山猿の鳴かな子を思ふうつほの床に雪や穢れる 人心にたてる仇波を袖にかけても歎くころかな

冬衣

顯戀

行年の關となるともくる春の道をなさへそ四方の白雪 うちさけていつかは鳴む霜こほる冬の垣根にかよふ

山家歳暮

冬獣

て行一年毎に短かさのまさるや老のまさる成る覧 霜白き洲崎に立るかさ~ぎのすかたも寒【宇治の川風

歳暮雪

冬篇

冬鄉

はかなくて又くらしつる一年の老の重荷と成も行かな

さても明むともせぬ冬の夜は音をのみや鳥の鳴く覧

歳暮

冬夜難曙

行年を送る仕業も波の上に明る海路の春をこそ待て

ふりまさる老の靴も有るものをつれなく年の暮て行らむ

無欲暮

船中除夜

故郷に歸らむ春を待ち急(旅には年も惜まさりげり

降る雪を花にはからしさや早くも梅の匂ひ出らむ

雪中早梅

心のみまつ背きつる花鳥の春を浮世の外にまたなむ

旅宿待春

明けはてぬ槇の戸口に匂ひくる梅か香寒冬の朝風

早梅

れて待さしもなき花鳥の春」 有りに

又同人の「世をそむくあらましにのみ急か

消えにける罪やなる子におひなましいたくな酔ひそかなしの酒

玉をふる庭火の光りまさやかに引連ねたる本末の袖 こむ春は共に枕も結ひてむうき世の外の花の木蔭に

佛名

思ふ心ものさけかり鳥」とありし返し

神樂

寢覺しておこしつる火の更に又tらむ程にそ夜も白みぬる

白妙に雪降積みて波の越るも見ゆる末のまつ山

曉埋火

歳暮松

夕霜のさちし心も埋火の上に解け行く冬の夜かたり 來む春の急きる
知らぬ山里は行こも年を思はさりけり

思ふ事かたらふ儘にあさそちて共に寄添ふ埋火のもこ

永章か許より「こむ春は浮よの外の花見むと

爐邊閑談

暮ぬへきけしきる見えぬ高砂の尾上の雪に鐘響くなり

たゆみなく炭さしそふる埋火は冬のまさるの主なり島

かきばかり落葉の上に降り積みて深雪を庭の朝きよめせる

薄暮雪

降積る棺の雪もすみ色に烟りくゆらす小野の山ひさ

埋火

朝雪

炭 烟

かきくれ昨日の雲のあと見れば残る峰なく雪降りに見

霜さゆるをの~薄のほつ鷹を放ちて競ふ良男の友

連峰初雪

鷹狩

M

名所雪

かきくらしけふ時雨と思ひつる空めつかしく降れる白雪

簑をかさはらすを見れは雪深きをの山路る人かよひ見

初雪

中行客

小山田のひつちおし波おく霜の寒き朝けに雁なき渡る 降積もる深雪やふかくなりぬらん松に静まる夜嵐のおと

ぬれくしつばさややかてこぼるらむ異の空に渡る雁かね

松雪

殘雁

さへくらし雲の中にやつもりけむる高嶺の今朝の白雪

もりそばる時雨にふきものやをあらしをかほにもふる哉

遠嶺雪

打拂ふ霜さへ寒き衣手のたなかみ川に網代もろらし 大空はくれゆく雲の色見えて四方にさやけき雪の山のは

屋上霰

暮山雪

ひな淵に浮びて友彩するをしの思やいかにふかけむ

淵水鳥

夜雪

山川のいばか淵にむつましく妻をこめてもるをし哉

名所網代

闇の戸にをり(風のふきかけて夜降る雪の音を聞くかな

音もなく降りつむ庭の白雪を日になるさ、、、、

人やとふ我や間はんと思ふまにきゆるもおしき妊の初雪馬さへもなつむ夕をかちよりは誰れか小幡の里の白雪

埋火に寄添ふ老も初雪の降れるあしたはをすか～けつ

置く霜を拂ひ馴れ氷留流水

れる白雪

雪中水鳥

さほ川の氷くたくる音す也夜深く誰か駒わたすらむ

朽ち残るあまの捨舟水鳥深夜氷

中々に散にし蔭と安けなる椎の葉山に騒く木からし 冬かれぬ玉藻の床にぬる鴨もつら~の枕やさゆ覧

霜かれの入江の蘆の葉に残るも寒き風の音かな漁りする千鳥は見真砂路に我のみ跡を付へき哉

木枯

水鳥

招けこも止らむ人に篠薄おのか枯野の冬をしるらん 浦波の帰りしひまにおり立ちて走る千鳥の急かしけなる

江寒蘆

千鳥

千鳥

原淺

枯野

り

薄もいは寒る夜にみそぬかしつるためしやばなき

閑庭霜

夕樵の山路の霜を踏したき幕てそかへる冬の柴ひと

散積る庭の紅葉に置く霜は鳥より外に踏む人もなし

樵路霜

寒流帶月

湖上冬月

しかの浦や氷の末に立つ浪の光りも寒き冬の夜の月

笹の葉のさやく山路は夕越える袂も霜に結ほ~れつ~ 引捨しひるのふる朽なから冬は氷に結ばれにけ

凩の騒山より流れおつる水はみなから紅葉なり ひまもなくこほれる冬の川隈に繋かぬ舟も流れさり見

山霜

冬田氷

散積る木々の紅葉や逢坂の關の清水の堰となるらん 山川の岩きり通す流さへ冬はこほりに堰れはてぬる

落葉滿流

永駐舟

小夜深く越ゆるはゆまの鈴か山鈴の音高し霜や置く覽

寒る夜の月に砕く 川波はこほれるよりも寒けかり見

うすき寒夜食

しさとなく霜はかりして置渡す朝霜寒し庭のさ~のやすみ處となれる冬かな

たる水鳥の麺もたゆく降關路落葉

秋更て色つく見れは片岡の松のあなたは山田なり

秋眺望

終夜時雨洩らぬ槇の屋は木の葉斗りや降か~る覽

明て見む棺は色もなからましよた~木葉の窓叩く哉

けふ迄は秋の空でも眺めけん夕日時雨る~峯の浮雲 さよ深く軒の木の葉の散る音は枕に積る心地こそすれ

雨中九月盡

夜落葉

長きよの思をさしもつくしきて別をさへに歎く秋哉

一夜と疎らにふきし草の庵と思ひくまなく降る時雨哉

九月盡

旅宿時雨

稲機にうつる夕日の影消えて秋風寒し小山田のささ

山廻る時雨にけふも逢ひに見つま木濡して歸る柴人

山本の紅葉の色もほの明のそほ舟漕渡る見ゆふしの山立も登らぬ浮雲や雪より下の時雨なるらん

田家晩秋

白露のおくての稲も苅はて~霜こそ結へ小田のふせ庵 朝日影さすをおそして思ひつる篠屋の軒に時雨降きぬ

海邊紅葉

山時雨

晴れてそ松の露はおちける

時雨るもけしきばかりの浮雲にまた暮はてぬ秋を知らる~ 小夜時雨静かに音の成ぬるを木の葉斗りや降残る覽

暮秋霜

朝時雨

暮秋時雨

風誘ふーむら雲の夕時雨暮れぬ間に霜さやならん野への露はかなの秋の忘れか時雨過

暮秋露

露寒き野への鈴蟲うら枯る己か聲にや冬を初冬

閑居紅葉

冬

秋深き雲の雫や染つらんはやく色こき峯のもみちは 鶏鳴小萩啖散る秋の野を旅ならすして分なましかは

深山紅葉

六〇六

秋旅

染るよりそむる心は紅葉はの外に又える人なかり見

知るらむ

たみや

蟋蟀なきよる壁のあなたにも夜寒しらせて衣つ也 朝霧のつる峯のもみち葉は明けてもよるの錦なり見

六〇五

長き夜をおきるの里にうつ磁上こそ音の撓まさり 昨日けふ松の緑にわかれ行棺いくしほ染めむとすらむ

隣擣衣

霧籠紅葉

絶えに響く礎にたか里の夜寒をおくる嵐なる覧 大宮に愛そめまし古をくむもかしこき菊のさかつき

里擣衣

紅葉淺

風も寒くなるの浦人は浪に衣を打ちあはすらむ 白菊の下水にぬれて折られぬ花の春をもとめてき

遠鄉擣衣

重陽宴

菊久盛

たか宿も盛なる菊の花見るとて人の今日も誘へる

秋風の關吹越ゆるあざ見えて夕霧なひく野へ寒みなれも妻をや思ひ草尾花か本に鶉なくなり

菊花盛

海邊霧

須磨の浦波

野鶉

鳴て行く雁いかならん 旅の空宿りてたに心細さに 朝風の霧吹拂ふ片岡のはこの立枝にもすそなくなる

曙山霧

深夜

千町田の穂波吹く秋風に薄霧なひき渡るかりかね 月影に澄めに碪の音にこそよた~おきおの里は知られ

旅宿聞雁

百舌鳥

里の子か落穂ひろひ擣衣

名所雁なき渡る

て帰り旅る夕の田面大空は明初ぬらしいつしかすそこになれる峯の浮霧數へつ~今宵も更ぬ露寒き垣根の小田の鳴のはねかき

霧の中に鴉なきたつ脛はして山の端暗き秋の明ほの

獨寢の夜寒とこそは思ひしか何處の里も衣うつなり

衣うつをしるへに山里をよるふものは心なり見霜をへて匂ふ白菊同しくは梅咲迄に散らすもあらなん

海邊擣衣

水邊消

田邊雁

すみ上3月 木の間をもりのうちにきぬか鼓の音を更行

思ふ事かなふよは哉晴れわたる月のみ空の雁の聲

社頭月

月前雁

宿ことにかけて見る月の光りも花の都なりけり

白雲を吹くよはす秋風にたくふやいつこ初雁の聲

花洛月

初雁

舟出して誰か見るらん葦北の野坂の浦の秋の夜の月

長夜の限り知られてすむ月の光のうちに鐘ひ~く也

浦邊月

月見れば怪しく袖そしほれけるか~ればこそはいむといふ覽

わくるしかの浦舟跡もなき氷は月の光りなり月前鐘

たる

湖水似氷

月催涙

涼みつる夏は昨日の川つらに秋の夜寒き月を見る哉 庭に出て里の乙女かよる糸のよると、見えす澄る月影

蟲のねにまかふ水の君さめくれは細き流に月+澄み大空に遊ぶ魚も思ふらん水の底まて冴ゆる月夜は 嶺高き風の響もあらはれて松よりのほる秋の夜の月

水邊月

月前

あか星の光にしはしさきたちて尾上をいつる有明の月さし登る月にや松を譲るらん宿る鴉のなきて止める

水中月

月前松風

月のすむ空立いつる浮雲は人の心にまつか~りけり 昔誰か玉のうてなに眺めけむ野となる里の秋の夜の月

山曉月

月宿松

故郷月

吹送る嵐をはやみ照る月にか~りもあへぬ雲の一叢

深き夜の月より落る風なれや軒はの松に脛のすめるはるよの鐘の響も高砂の尾の上の月や霜さなるらん

月前

あれ果てし峰の古寺奥深くさん入る月や法の燈火

古寺月

月前風

六〇四

けり

* 三

月前鹿

心あての山もわかわぬ月代に現はれ初る松のむら立

あすは又漕出て海の上に見む今宵は野への月に明しつ

妻戀に身をはすてちゃ狩人のいる野の原に男鹿なく也

暮行かは吹やまさらん 天津空浮雲はやしあきの夕かせ

日にそへて破る庭の芭蕉葉に秋吹風の跡を見えける

鹿

未出月

天の原斗りなる雲もなき今宵の月に誰かいねむ

うき秋の思ひ添いかてかはすめる夜頃の月を見さらん

月

草も木もまた色見えぬ秋風に萎れはてぬる心何なり

蛬草の枕を離れぬはなく音をさへやむすひこめけむ 嬉しくもごもなふ月の光哉花は山路を送りやはせし

秋風

山里は早く夜寒に成にけり枕の下のこほろきのこゑ 老となる物は云はし憂事も忘れて向ふ秋の夜の月

旅店

秋月勝春花

わたる秋の花野は鳴く虫の聲と千種に喉變はりぬる 月影のうすく成ぬと見る程に籬の荻に雨のおとする

山家虫

月

露分けてふかひもなし吹ふ野風に宿る松虫の聲 秋來てそ白髪の数もまさるらん心をつくす夕れの空

夕虫

秋雨

露にひつ袖を幾度とほる覧はてなき虫の聲を分つきまはき原おきそふ秋の夕霜に花つまかれて小鹿啼也

虫聲何方

秋夕

月清み高き梢の雲の井にすかる露さへ見ゆる夜半哉

野邊は皆月の光に成にけり露にうもる~八千種の花 夕暮の山路の楓踏わけて下れはくだるさをしかの聲

遠尋

晩秋鹿

山行伴鹿

月前露

今宵さへ妻にあはてや有明のつきぬ恨に鹿のなく覧

栽萩

霧はる 旦の原におく露の白きを見れば秋更にけり

初尾花靡(篠原入みたり小鷹かりするますらをの友

AA

くらはに結ぶ夢をも覺す哉よかき風の荻の友摺

深夜

秋露

手すさひに植ゑこうなる子起で見朝目さやけさ朝顔の花

網むすふ海その糸を引かけても今宵は星祭るらん

海邊七夕

小鷹狩

星祭る庭の燈火また~きて更る夜す~秋のはつ風さく起て我はく庭は朝顔の花見からのすさひ也島

彦星の渡る今宵は天の川石ふむはかり水もおちなむ 八千草に匂へる見れは秋野の盛月の盛りなりけり

七夕風

朝顔

いつこにか夏は残らむ夕風に村雨靡く庭のをきはら 折て見る匂ひもあかぬふちはかまたれくまなきを打拂らむ

七夕

月前草花

そむる蟋蟀の聲花薄ほに出ぬらしかつまたのぷりにし池に餘る白波

新秋雨

蘭

露の秋に成行く草叢にほのめきお

ほし佗しあつさやいつらさよ更で北吹いる~窓の秋風 夕風に招くと見は花薄露けき袖をはらふなりけり

早秋

池邊薄

風はまた吹もおよはぬ武藏野に秋をしきたる露の白玉澤水にこれうつして女郎花なまめく影といかに見る

早涼到

薄

夕月の光ほのめく大空や秋にすみ行はしめなるらむ 小男鹿の渡る山水秋萩の花のか~みの影くもるらむ

初秋露

水邊女郎花

笠人の引よする網のめに見えて今朝立初むる浪の秋風 移しうる庭の秋萩さのみゃは野遊の小鹿の妻となすべき

初秋月

萩對水

六〇二

海邊秋來

吹風の袖に涼しく通哉秋立つことはこれを嬉しき

蝙蝠の翅いさよふ大空の夕風はやく吹きおろさなん 涼しさに覺せらる~暁や秋立風のはしめなるらん

夏雨

夏風

立秋

唐崎の浦のみそきはてにけり松に吹たつ秋風の聲

秋

晝たにも夏はなかりし池水のましてタの風のさ~浪月影にすむ夜頃は暁の鐘をねよさの整にき~つ~

家々納涼

來客夏稀

苔清水した~る山の木陰れは夏さへ寒き夕風そふく朝顔の露のま垣に立よりて濡る~も涼しふたあゐの神

夕納涼

夏鐘

涼しさは解はなちつる紐さへも夕風わたるみつのおわしま 庭鳥もまたきさくらに入に見餘りに長き夏の日影に

樹蔭夏風

夏衣

夏の日のたへぬ暑さのいきのをに結ぶも涼し松の下風 夕立の過行空も涼しけに入日うつろぶにこの松はら

水風晩涼

夏鳥

暑き夜も我身一つに吹風は手ならす閨の扇なりけり 逢坂の關の清水は行人をとゝむる夏の名にこそ有けれ

泉避暑

夏名所

ならしつ~かつ見つる哉夏の夜の夢や扇の風に籠れる 涼しさに起出てはくわか庭のつくよふ人もかな

閨中

夏關

港舟むやひの綱をゆふ立のけしきやるき村雲の空 風の上に迷ひし塵も静まりて大路涼しくそ~く雨哉

夏曉

家毎に涼しさしむる松風の夏こそい~よしの里した~きもとはす成行夏の日や同と心に物うかるらん

湖邊夏帳

眞菰草茂る澤水五月雨にしつまぬ橋も見えす成ぬる

村雨のそ~~蓮葉荻の葉に先たつ秋の聲を聞くかな

港夕立

水草隱橋

朝またき起出て向ふ心さへ共にひらくる花はちす哉

秋聲帶雨荷

川風の戦くけしきも涼しきに浪さへ洗ふ根白くる萱

中々によるの雨にやるらん照日にたへし撫子の花

水邊夏草

賤の男は蛟遣焚すて寢にけらし篠屋の煙薄く成ゆく

夏の野の草の茂みの中々に哀れを見せて喉ける瞿 蚊遣火の煙りの下に打臥て心やすけき賤かふるまひ

雨夜撫子

打戰く竹の葉風に先立ちて涼しさもらす夕月のかけ 夕顔の花さきてこそしられけれ青葉に籠る山蔭の庵

瞿麥

蚊遣火

蛟遣火も焚や捨けむ山樵の伏ささやけき夏の夜の月さもこそは疎き學の窓ならめよそになしても行螢哉

夏月透竹

夕顔

たにも夏はなかりし山川の玉ゐる水にすめる月影 心ありて問ひくと見えはよもきふの露を尋ぬる螢なり鳥

山家夏月

螢過

月影にたくひてかたる夏夜の浮寢すしき淀の川船 難波江の芦間を照らす螢こそよる漕船のみをつくすなれ

河夏月

閑居螢

山鴉うかれてなく思ひとは明るなり鳥夏の夜の月 池水にうかひ初めたる蓮葉の露もあらはに飛ぶ螢哉

水路夏月

江螢

槇の戸を明てぬる夜もふは夢も許さぬ水鶏なり兒 梓弓引掛てよるほくし共知らてや鹿のめめはすらむ

夏月

水上螢

水鶏驚夢

照射

蔭暗き木の間傳ひに行水の音もほのかに水鶏鳴く也

五九九

夕早苗

林中鶏

雨ふらぬ野邊のせ~らき濁る也遠の山田に早苗取らし 五月雨のひまなき頃は浦波におろさぬ蟹の舟もくつ覽

埋もれて身をや盡さむ時鳥朽木を出て鳴わたる世に 五月雨時にけらしな夕立のけしきに變はる峰の浮雲

早苗

浦五月雨

郭公開つ~のほる淀川の夜舟は夏そのるへかりけり 五月雨に軒端桁行き~の家のふし所なくならんとすらん

寄纒述懐

五月雨晴

さやかたの沖漕くれは時鳥瀬戸の入日の空になく也 珍らしく日のめ見えしは立かはる雲間成見五月雨の空

船中郭公

ともすれは立さ雲の五月雨を幾度暮ると空と見つ覧

いつかまたれては啼郭公おのか皐月の空にやはあらぬ 咲けはかつ懐しき哉樗原花さいふ程の花ならねこも

海郭公

五月雨

時鳥またれし月の薄くもりふり出る雨に空に啼なり 玉のみみ契りける宿も今日は菖蒲の草に葺やつす覽

郭公未逼

て見むと思へる心さへ箏はれぬる駒くらへ哉

雨中時鳥

一はせに先だっ駒や乗りとりの隠しの鞭のしるしなる覽

待客聞郭公

千町田にうつる夕日の影きえて遙に成ぬ早苗さる聲

薄暮早苗

人傳郭公

郭公人にきかせて聞岸にうとく成にし耳そらる~

待人も問來る道に聞つらむそなたのそらになく郭公

月前郭公

さなへとも千町の田の面菅笠の色斗りこそ暮殘りけれ

競馬

時鳥なく一般にさみたる~雲間をいつる有明のつき とく行水深き沼田の早苗とりに賤か板舟漕わたすめり

水春船

郭公一聲なのれ雨~くわか葉の山のゆふ暮のそら

桑の葉を摘取る斗り成に見里の乙女らこかひむらむ

を分たる月夜なり見

夕待郭公

春人事

中垣のあなたに映る卯の花は宿隣家卯花

いつのまに頼むの雁は踊りけむ燕飛かふみ芳野の里 卯花のしたに流る~谷川は雪解の水の心地こそすれ

花鳥に分れて春にさへおくれむ旅の宿をそ思ふ 卯の花は喉にけらしな夏の來て又打出る谷の白なみ

春里

卯花似雪

さきかる棺の藤や山松の緑のほかのはるの一しほ 卯の花をなべてに夕れもしらす顔なる山本の里

旅宿暮春

卯花初開

啖つ~く井手の流は山吹の露よりほかにくむ水もなしかそくさく花も青葉に吹なして春を残さぬ風の色哉

松上藤

卯花

新樹風

櫻花さをひつくして山吹の影をふかむる春の川なみ

河欸冬

更衣

藤波の花見る程は分れにし春さほからぬ心地こそすれ

首夏

杜若

楢の葉の吹返さる首夏風

さほ姫は櫻のきぬをたちはて躑躅の赤も今そおりける

の葉はまた障りなき難波江の霞を分くる器の釣舟

夏

てくまりの神の心を引しめの苗代小田に雨そくなり

五九八

かきつばた花さく影も懐かしきか垣根の淺澤の水

山吹

思ふ事いはぬ色とて枝さへも打しなひたる山吹の花

~音たにもまたうら若き夏の朝風

卯花の袖にさき出し心地して今朝珍らしき夏衣かな

さほ姫の春の手業やならふらん霞をさらす玉川の里

雨中苗代

五九七

春雨のふるやの軒に行かへり子を澄とふ夕べる程やなからまし澤田の蛙なくねそひぬる

隙行駒も止るこそ思ふ

燕

長き日の夕へ告くる鐘の音に答へても散る山桜哉

夕蛙

人もこぬかの春の長閑さは懐かしき野邊の小草の哉何處を今日の筵にはせむ

閑中日長

さるこそは風にまかせし花ならめはても知られず誘で行哉

よしさらは高嶺の嵐吹おくれ花なき里も花に飽きて

夕落花

鶯の囀つる野へのいつこまて誘はれ渡る心なるらむ

を

野遊

随風

心おそく誘ひつる哉先立ちて花の木蔭に人はありし花下逢友

垣越えて咲ける櫻の花故に宿たかへんて人も問けり白くなる庭の面見れは月影の暗きは花の散れる也

櫻咲く春に人の問こぬに溢れ山の深さをそえる 山川の岩根の櫻風吹けはわたらぬ袖に浪をかける

山蔭の朽木に身をはなしてこそ心は深く花にそみけれ

落花多

折人にまかせてそ見る山櫻いつれを宿の花としめねは けふも誘ひくて山風のはてはものうく散る櫻かな

隣家花

月前落花

はつ瀬山霞もしらむ鐘の音に眠りし花の色を覺ゆく 懐かしき春野の一夜わかねての朝けの花の色はも

山家花

花浪

菫菜

古寺花

櫻江上春望

瀧花

いははしる響やいつこ山櫻花よりほかの瀧波もなし

櫻花盛りの山の瀧津瀬は雲より雲におつるなりけり

散る須磨の入江をこく舟の綱手かなしき春の夕波

風たへ春の入江の夕霞こくさしもなき舟を浮べる

朝思ふ燕濡てなく也

とならは霞める月夜明晴らせ誘ふ嵐の花も見るへ

落花春の野に遊馴花

むすひさむるは櫻なりけり

野花留人

春雨の雲のかへの風もなく晴花の色そのさけき 緑子のゑめるか如き櫻花山ふさころにうへも咲けり

春雨の一しめりして喉花のさのみは人を待せさり見

山中花

花初開

花故に欺むく雲も僧からてけふも山路を分暮しつ~

夜花

家つさに折らむと尋花

今はこて遊ひ人も踊るめり雲雀落くる野への夕暮斧のえにあらぬ杖をも下すへ吉野の山の花の下蔭

の野の霞拂ふ朝風にあかりかねてもな

もなく雲雀哉 春夜の明行色は咲みてる花のにほひのしらせなぁ島

夕野雲雀

花下忘歸

雲雀

櫻花咲にけらしな春雨のはる~高嶺にか~るしら雲

春雨の名残の雲の色かへて匂ふや峰のさらなる覽

春來れは霞に籠る朝つまの片山雅子なかぬ日もなし

曙花

若草のねよけに見ゆる春の野に結ぶは駒の心なり皃

雨後花

ぬるみ行野澤の清水いつしかと 燃ゆる芦毛の駒いはゆ也

春駒

木の下に来て見よさてや春霞花のよそめを立隔つ覧

朝霞はる~み空を行く雁やはなたの紙に書ける玉章

霞中花

歸雁似字

あかなくに折一枝も咲花にゑへる心のすさひな鳥

我宿の待人にせし鶯の聲さへたへぬはるさめのそら

折花

閑中春雨

世中にありのすさひもなき物は花になっさふ心なり見

五九六

遙々と分る野末に咲き匂ふ花そ霞のみをつくしなる

思ひし深山路の花我身を宿しつる哉

ゆけ花こそ見えね山樵の折出しや何處なる覧 櫻花険の盛は春の夜のやみの色さへなつかしきかな

ふ心の糸遊を青柳末もむすはぬ糸なれやのけはこほる~霧の白玉 大空に鳴し雲雀もおちはてぬ野への霞や雨に成けむ

五九五

立こめし霞や雨に成ぬらむ夕風おもる軒のあをやき 窓をりひらきて鶯のなく音に向ふ春のあけほの

柳露

野春雨

曙の霞のうちに吹くかせを靡く柳のしなひに見る 月影は行術も知らぬ春のよるかすみなからにあくるのめ

霞中柳

閑中春曙

打なひく春の色さへ姿さへまつらる~は柳なり亮 山里の春の月夜を只ならぬ花見に来る人も宿りて

柳靡風

春

春になる園の朝風吹にけり紐きそむる梅のはつ花霞む夜の浪に映らふ影見れはさひ江は月の名にこそありけれ

柳

山家春月

~

春江月

苑中梅

天津空たつねて月を見る斗り春の夜深く霞こつ隈もなく誘ふ風かな
梅さかぬ里にも梅の打薫りつ

梅遠薫

夜の霞のたれこめて更け行く空に月のねむれる

春

梅かをる春の夜頃は月影を入戸口もされさ兒

深夜春月

月影のしらむ山へに梅見えてほのかに薫る春の朝風 乗る駒の手綱ゆ
るへて若草に漁らせ行も面白の野や

夜梅

折々はあたり離れし埋火に又さしむかふ如月のや裏若き色も懐かし
さるたつま妻も籠れる野への筵は

朝梅

行路春草

落をはるしつり斗りや春ならぬ雪に閉せる松の下庵 春にすむ水の鏡に青柳のひらくる眉やまつうつすらむ

餘寒

若草

水邊柳

山家殘雪

春の海に朝漕いつる八十船の引あくる帆は霞なり鳥 筑波山いたり至らぬ春見てこのもかのもの雪のむら消

野を雪の積むにも任せたる哉

殘雪

しかの浦春の夕風吹たへてつりするの袖そ霞める

霞隔行舟

若葉尋ねて来る春の雪中若菜

柴の戸をた~かて人のた~すむは心あるらし鶯の聲

震

春風や吹淀むらん立わたる霞も深さしかのおほわた

崔上霞

柳間黃鳥路

盛なる梅の下窓鶯のなく音をいれぬあけほのもなし

鶯呼客

いつしか雪けの空の色かへて霞になひく春の白雲 さよ深き閨のひまもる梅香の白むと思へは鶯のこゑ

子日

港入の船も長閑けしみつ潮の浪に吹きし春の風人くてふをしるしに鶯の名におふ開朝戸あくらん

早春雲

梅近聞鶯

朝またき明る戸ほに長閑なる春をいれたる鶯の聲 若菜つみかへる春野の夕霞ほのかにのこる鶯のこゑ

春風來海上

關路鶯

さらてたに早く暮=行一年を日數をこめて春は來に 草も木もまた色見えぬ庭の面を春になしたる鶯の聲

立春鶯

夕鶯

舊年立春

いつ迄かつれなかるらん鶯なれ故にこそ春待しか

鶯告春

春來鶯遲

しのすたれ第四集

五九四

風寒みださりし春を鶯のなく一般におもひさためぬ

霞しく春野の小松ひかれこし心の限りひきて歸らむ

薄霞匂べる雪に大空の春を見せたるふしのしばやま

湖上風による柳の糸のたてぬきにあやおりみたる鶯の聲

五九三

たきわさなるを中島翁はそのみつをみなからかねられて長歌文集を世にほこらし家集はた榲園集三巻よ

はじめての熊さいふをも三編あらはされたるはたくひまれなるさえひざなりけりこたひ又四編をも難

波人のこへるま〜に板にゑらせむさせらる〜かいともめてたくおほゆるまにくそのはしつかたにひさこ

こそふるはいさきよらに装をきたるあて人にひたひはけたる冠いた〜かせたるたくひならんかしかふいふ

は伊勢の國人梛園のある佐々木弘綱

みしか歌にたくみなるは長歌につたなく長歌にすくれたるは文詞におごる物にてそをかねるはいざ〜か

食にあれも出なは人妻に人もほりせむあたら女を

なほ

深緑松をしめはなしてうつくしくめくしくもあるかそこをもよ

ろしみおもひ里ぬちにむかへすゑつ〜あひむつひ妻

となすさも日を送るたつきやなけむたなつものをす

よしょらにこひうのかしらつ〜しりひつしまろ

の乳をすとろひてうつそみの命つくさふえみしをみ

花も〜みちも何かおもはむ

へてい見住の江の前の神にぬさまつり祈る海土早くなきこそ れなひくまでにおひのほる松の木立に何をかもたく

かへりの花さへきて千萬のよはひをかさね白雲の

五九二

つなみはやくなきこそにはもさやけく

松によせて人をいはふ歌

船のまかち引をり沖つしま浦かくりゐていつしかも

こきわたらむこさもらふに日の重なればうらさふる

心さまねみせむすへのたときしらに磯山にのほりて

みれは沖つなみ雲井にたちていさりするあま舟もな

し浦ったひいゆきかへらひ拾ひさる眞玉しら玉家に

やらむつかひたになししなつひこまひはしてまし沖

春ことに雲見るまて野に山に花はさけても秋こ

ににしきなすまて山に野にもみちにはへと風ふけは

ちりこそすれ雨ふれはうつりそはつる吹風に壁を

すまして降雨に色を深めておきさおく霜にもあせす

つみさつむ雪にもかれす深みとりいやさかえつ~十

紅毛婦人戲作歌

わたつみのそきへの國の赤かみのえみをみない何

しかもわたり來ぬらむ日本のやまどの国の人ここ

よしと聞つきをす國にすま~くほりかはろくにわ

たりまみこし赤髪と名にはおへれて其おもわたわら

はむいつれをかなそへても見むかくほかりめ

てたき松のときはなすみとりにあえて萬世をかさね

む人は年のはにいやさかえなむ十かへりの花さきに

ほふ松か枝のこさ

たる心には五九一

の夢にさけるうれた 朝はふる浪をかしこみゆふはふるあらしをいたみ大

旅泊作歌

草まくら旅のやこりのさなからにわきへへにこさあけたらわかさもはわかさもさちこむつ

たまのあへるまにくさくら花咲にほふ春ほこ~き

すなきわたる夏月影の照そふ秋しらゆきのなからふ

る冬をりくにいよりつさひて酒みつきゑらきあそ

ひおもひのへ心やれるもをさまれる御世のためしそ

しつけかる時のしるしそいくばくもいけらぬ命いく

はくもありへぬ此世もをりてさかしらせむゆ酒の

みてあそふにしかす今ゆのちいけらむかきりかくし

こそたぬきをへめたまあへるも

思ふこち打ちと遊ふたぬしさのはへむ命限りしらすも

旅家鶏といふことをよめる長歌みしか歌

は

うま人はうまくさちいつこはもいっこざちさいにし

天つ空雲にみたれてをちこちの友よひかはし啼たつ

のおのか八千世をのさかなるすかたに見せて山松の

たかき棺にねくらしめすたつひなの八十つきは

るけき末もなれを見るへき

いかはかり長閑からまし蘆田鶴の千歳を遊ぶ心詠

しほひれは浦わにあさりしほみてはあしへにさわき

いさ子供かけそしは鳴く起きょくけふ行道も近からなくに

あき

らめし海を此うみ

詠宴遊歌

くもM

ねは旅ねして聞くこ~ちこそせね

けし船を行かふへ見れはしらなみさわき浦ことにあ

まそつりするそこをしもおもひぁやしみ磯つたひ行

かへらへは聞ことしほもみちひすかきむすひのみ

てしみればいひしこさからくもあらすまさやき水に

有けるあやしくもたちへし海かくすしくもよさめ

る水か高えるや天のみかけあめしるや日の御陰の水

にしあるらしさ なみの大津の宮の御心を見しなくなるとりかくやしくもさめつる夢か立いて

むやさはいそくさふみゆかむ道はさほくと今しはし

やすいしなしてあたらゆめ見もはてましをころな

きかけのうれたき鳥かも妹にあひ夢のなこりのご

りのなんつ~妹

か手をまきぬおもふにはつとりかけそしはなく

おどろきてかきさくれるに妹もなきまろねの床の家

にあらぬ旅のやとりの時のまくになかにた~へし海はう

跡はしけたをやめのおもひたくみて何もかもこ なしほのみちひもなくからほのからくもあらすさ

さ~ひをへむ翁なすおもひうつもれ何しかも家には 人みなのいひつらへるを沖見れは島山かくり眞帆あ

ふしのねに登りてこそは天地の廣き心を思ひ知るへき

南の海船酒めくる夷らも仰きかしこむ神たかねはや

詠湖歌

ぬはたまの夜床を寒み朝戸あけてわか出て見れは天

神のます國の姿は天の原不盡の高嶺を見てそ知るへき

五月雨のふる屋の軒の佗ひさしは雨洩そはる音はかりして

雪をよめる

いにしへの人のみぬれてほりぬれわひとみさ窓もやり戸もさしこめ

てわかる庵さちこめてわかふすやとひるさへもよ

るをなしつ~文机にむかふよしなく筆こりて物をも

かすせむすへのたさきなけれさしかすかにひるに

しあれはこもし火をかけむもうしいかにして此さ

みたれの日ころくらさむ

にかしこみまつるたふさみまつる

五月雨をよめる長歌みしかうた

風まり雨ふりしきり雨ましり風吹あれですかた~

馬なくていさ打行かかる家に在て獨の見っと雪ならなくに

詠不盡山歌井短歌

かきりなくのさけくもあるか櫻花さきの盛の鶯の聲

らむおいすしなすて

あらむおもふさち馬うちなへて野に山にふれる大ゆ

きいさゆきて見む

五九〇

うらなる春の盛にさくら花險を~りつ~鶯のなく

鶯のなく

聲しけ世間の常かくならはとこしへにたぬしくあ

ことはにかきりなくいひはやしつ~

たくひなくた~へあけつ~萬代にあふかひ來つる神

山の(すしき高嶺さらに何さかいはむ今さらにい

かにかたへむ日本のやまのは千萬の國の大王

千萬のくにの御親其國のしつめこなれる神山のくす

しき高嶺千萬の山のおほきみ千萬の山の御親二つな

きの山のそらたから御主天のはらふりさけ見

つ~さこしへつそら雲たちきらひあわ雪のなからへきたれをちこ

ちの木ぬれこさく咲を~る花しめつらしたてぬき

の大路おんなへうつもる~色しさやけしふみわけむ いは~しのあふみの國の五八九

長 歌

またあれさも鶯にしく整あらめや神のます玉園山の

寄る浪もさやかに澄みてわたつみ四方の貢のたえぬ御代哉はこ~らあれとも櫻にしょく花あらめやなく鳥はあ

二葉にそ見る

四海清

しもいつはあれともうらくなる春にはしかすさく花

末遠く榮えむ色を雪のうちに生出る松のたる人のもとに

三月朔日玉園山の花見に行てよめる長歌み

かうた

大御代はさまめく蟹もなかり思はなん隠れて人のなす業もさやかに神のみそなはす世を

祝言

徒に過さむものか降雨に野への遊ひは思ひたゆさも

短歌

神祇

永き日すから心やりてん

一人だに悲しきものを餓を人のさはなりごきく邊りいかにそめ小琴かきなし酒のみておもひのはへふる雨の

天保八年いひうゑけるに西の國はや~そのう

れひかれにある日ものへ行きける道の

川つらにふしたる人のある人にこへはうる

人なりといふに

鐘の音鳥の入聲にさきたちて何に驚く眠りなるらん

袖觸れて岸の埴生に匂はしょりやいつこ住みの江の浦 はたてねこのきはよりおちそふしつく池水のあやお

曉眠易覺

る浪におのづから雨は見えけらおもふさち馬さへゆ

きてひばり落る野のへのすみれき～すなく岡へのわ

見るからに涙を落っる秋の月澄みはつましき此世と思ふに 百千鳥なく音しつけき窓の戸をおしあけ見れはち

海邊壞舊

こちの相もわがす立こむる春の霞のほのかにもおこ

詠春雨歌一首幷短歌

長月のなかははかりひとり月を見て

らひをりはやしつみはやしつ~むらきもの心やらむ

ちきりしもけふにやはあらぬあやにくに降そふ雨

かよしゑやし野へのあそびばすへなくて思ひたゆさ

もいたつらに過さむ物かあはれその友問こは引さ

鳥四方の浦浪ちゃ静かにて

しはすばかり子うませ山はしもいつくはあれこ神のます山にはしかす時は

亂れ世を忘るなよ人晴日にきて過す虫も有けん

身きく煙と成りにける哉

鷹人の笛にはかなく謀られて網におち入るむら雀哉

雀

老果て~える踏たてぬあし舟の流し捨へき身となりに見

旅宿鶏

後朝に恨みし鳥をいつしかと待ちて朝たっ旅やさり哉

貝拾ふのさねりに先立て潮ひの浦にたつ漁る見ゆ

人のあやしみければ

鶴洲にたてる事

唐土の船寄すらむ大ちかやちかの島へたつ鳴き渡る

島

引つる~雛もあまたに幾千歳たち重ぬらん鶴の毛衣

年高き沖つ島松潮縄のこりと世よりやねさし初めけむ 思ふ事験しなくこそ儚なけれ我世の後の人を待つとて

鶴のむれたるかたひなもあり

樺島の浪風にうきめ見し後おもはすなる事さ

ものあるに

宿の林さいつか成りにけむ隣りにうゑしいさ~村竹 夜のみは人もありげに見ゆる哉竹あむ窓の賤か燈火

獨懐

いほしむる片山陰のおみの木に友睦ひして遊ぶ斑鳩 大殿の宵の護りと瀧口のつま引く弓弦音さやかなり

竹

窓中燈

山家

ק

遁れては水くむ道さなりに見花に紅葉にさめえかね栖人のた~へあけぇむ御剣はいかにさやけき焼刀なりけむ

山家路

五八八

一度は海のみ屑と成りし身のうき世の事を何歎くらん

久しき服のやまひ蛭かひの療治にていえぬる

におもひよりて姫磨さいふ名ををり(かく

大鹽某か難波の町をやきけるよしをきくて光

輔か玉も石もごもにやきしはますらをのい

かにもえけるおもひなるらんさよめりしのち

ほどもなくつみなはれぬるよこをきて

ふみふ道の末野を己れ焼て五八七

小舟いさりあかして踊るへと眠りもやらね浪枕哉

繋きたち解きし心も裏寂ひてつれなき妹をこふる何なり 船人は急く心も浪の上・幾夜馴れてかやすいのみする

寄心戀

旅泊

浮寝して上る淀川ひく綱のよるも憩はぬ旅路なり見

琴のねを聞けは懸しなわきもかゆする手へも俤にして

寄琴戀

羈中舟

うき旅の心なくさはのる駒の口とる賤友となりつ~

ゆふはたの袖衣めにつきて我思ふ人にいつか馴れまし

中友

關越えて宿らむと思ふ箱根路にあなあやにくの雲の鎖しや

寄杜戀

[中關

宵々の宿と頼む深山路の雲を離れていつかねなまし

吹風になると見えて山松のとはにつれなき色や何なる

寄松戀

空にすむ鐘の響きもこらむなり高野の山の有明の月

山路旅宿

降雨にかつきしよりも佗しきは辛きに絞る袂なり見

寄雨戀

古寺曉鐘

三日月の影に向ひて偲ぶ哉まゆねかくらむ妹か思ひを

束なみやまの林ふみわくる木葉の音もわれはかりにて

寄月戀

林幽不逢人

よもすから思ふ方より吹風のいこ~身にしむ浪枕哉

かくしつ~人も家路を忘れてや此山陰に庵結ひけむ

旅泊戀

草庵忘歸

年月をすきの門とも敢は思ふしるしもなき身なり 小舟さし物うるか聲たえて湊しつけきよはの雨哉

覺束を雲のいつくに宿るさも知らぬ月をは空に懸ひつ~

湊雨

不知栖戀

あふにしもかへし命の何にかく残りてたへぬ物思覽

いかにせん千枝に茂我思ひのたの杜の忍び難きを

寄衣戀

逢増戀

涙川つきぬ流れをいつまてか袖の柵せかむとすらん いさはやも世に流れる涙川袖の柵せくさせらまに

共忍戀

顯戀

久忍戀

さもこそは障の多かる中ならめ忘るはかりに逢ひも見ぬ哉

稀戀

もりやせむ人に思ひをかけむる涙になれぬ袖理』の恨を知らはなれにわかいひ限の人につたへよ

初戀

人傳恨戀

白雪のけふもふるきのかは衣上にとりきて凌く冬哉 思ほえす今宵人をはみる月の眉ね書つる驗しあり鳥

雲はる沖の八十島雪ふりて海原黒き冬のあけほの契りおきし夕の空は入相の鐘よ後もくれかてにして

冬衣

逢戀

浦浪の響よりけに寒さかなのかれ葉をわたる夜嵐 變らしの言のはのみを頼みつふよる知らぬ身は古りに鳥

冬海

契待戀

契久戀

冬浦

いかにせむ思ひは胸にみつかきの久とき祇神も受けぬを

よしの山入に人やいかならんあられ吹まくよはの凩

祈難逢戀

身に積る年も忘れ酢のうちに春さく立て面白の夜や あふ事はいつとも知らぬみしめ縄長き命に朽ち果てまし

冬夜山

祈久戀

しばすのつこもりかたあす春た~むさいふ夜 貴船川祈る驗えやこれならむほのかに通ふ水莖の跡

これかれ酒のみあかして

こそ旅にある身のかひは有けれ

祈戀

世間のけふの急きに洩れて忍ふらん同じ心を思ふにはてはて過るもえこそ恨みね

旅にいてしばすのつこもりの日に

の柵

また知らし我袖たにも此頃の抑ふる涙懸のゆゑさは

おい人の惜むはかりはあらねこも若きもよそに思年かは

五八五

雪中眺望

老少惜年

しばしこそ風も拂ひし呉竹のは雪の山と成りぬる 夕霜のごち心も埋み火の上にさけ行く冬の夜語り

松雪

歳暮

冬籠る薪にはくて積むものはふせやの軒の深雪なり 埋火の灰となるをもらさりつ心ぁひぬる昔語りに

雪埋竹

思事語儘にあこうちてさぁによりそふ埋火のもと

中々にさやけくもあるか降積雪に鎖せる松のした窓 寒き日は打をきて埋火の灰はかりをそ掻きならしける

山家雪

爐邊閑談

散りしける木葉の里の通路を今朝は雪さへ降隠しぬる 狩暮す野嵐には鷹のたふるひけく雪を打ちる

閑居雪

向爐火

はつ瀬山ひはらの嵐むせふなりあまきる雪の入相の空 山鴉の木々にふる雪を拂ひてやよはになくらん

里雪

雪中鷹狩

旅行雪

かき暮闇の夜白くなりにけり降積のぬる四方の深雪に ふみ分くる山路の深雪故郷に思千重の一重なるらん

溪雪

いかにせむ知るへに頼む駒さへへる雪の大木曽の山

明てこそ驚かれけれ槙の戸に音なく降しよはの白雪 吹ふ風のまにくちる雪の中にきえ行く峰の松原

夜雪

旅山雪深

谷深き松のしたいほふりおほふ雪を空にて過くる冬哉

しめりあふ岩ねのみす~埋もれて雪の下谷川の水 さきたてる端山のすまは聞ゆれ踏みわけ難峰の白雪

古寺雪

雪中鳥

葛散はて~より山松にかくれるものは深雪なり見事なくて過し思へは一年のくる~今宵も嬉しかり見

白浪のみえぬ梢もなかり見雪ふり積るかうらしま

うへしこを老のよここは冴えにけれ軒端眞白のけさの初霜月影の薄くもりてそ降しける雪の光は現はれにける

寒草霜

朝雪

りの池は紅葉のちりうく水の名にこそありけれ 都へはなほしくれてやさえぬらん我山里のけさの初雪

霜のふりけるあした

月前雪

夕日影移ろふ雲と見るはかり嵐の空にあるもみち哉 降しきる槙の板屋の霰には時雨になれし夢も覺めつ

池落葉

山家初雪

M

屋上霰

寢覺時雨

水鳥

風誘ふしくれの雲の下いほにはれ行く峯の月を見る哉

群千鳥整騷くなり夕湖のみつの泊りに船やいるらん

月前時雨

泊千鳥

さもこそは待ちつる冬の空ならめあわたしくも降る時雨かな

沖すくる帆影も早き夕風の松ふく磯に千鳥なくなり

初冬時雨

縮によみあはせて書ける

行秋をうむ心や通ふらんしくれかねたる浮雲の空 松風も氷をみかく整すなり山さえのほる有あけの月

九月十一日いなさの山陰にあそひて

汲む水にけさより交る薄氷った釣瓶にはさはらさり見

霧はる~苫屋の秋のそらすみてしつけき鳥の一般 朝風の吹く池の薄氷に水の冬こそ見えそめにけれ

暮秋雲

寒山月

遠近に通ふ山路も面白き紅葉ましりのしつか竹むら

五八四

田上わたりの山ふみして

人めよりまつ枯れはて~置霜の色も淋しき冬の庭草

氷初結

かつのほりかつ流れつ~山川の早瀬に漁る水の群鳥

さらになさ驚かすらん小夜時雨かねてさめたる老の眠りを 冴ゆる夜もこほりそはてぬ村鳥の立居ひまなこやの池水

落葉隨風

五八三

啼わたる雁の翅もしをるらむ八重の鹽ちの浪の秋風 限りなく行けとる同と林にて紅葉に明くるたらの山道

羅の山ふみして

海上雅

いつる日にさらす錦は村時雨よはに染めたる紅葉なり見

月しろの匂ふ空よりほのめきて山の端越ゆる初雁の聲

雨後紅葉

つれなくに人は來に兒月夜よき宿の景色やしるし見えけむ また知らて山路なかばに踊りなは斯かる紅葉の色を見ましや

山初雁

今暫しかくても見はや山のはの松にいさよふ秋の夜の月 むら紅葉打ちる山の夕風に岩根の菊の花そかをれる

依月客來

尋紅葉

置く露にうつらふ見は秋のよの月とも野への草葉なりけれ 鶉なく軽をちこちに聞ゆなり夕霧なひくまの~萱原

月前松

山莉

夜半の薄雲 唐衣打つ音高しいたつらにぬる人もなき秋のよの月

月前草路

月前擣衣

さやかなる光を誰にをしむらん折々月の雲隠れつ

吹まさる風 夜寒の秋のやさやまの里に衣うつなり

空によく秋のよ風の色なれやすみまさり行月の光は

月前雲

おくれたる旅人いかて渡るらん夕霧くらき木曽のかけはし

對月

しきみつむ袂やいかにそほつらん深き山路の霧の下露

河露

さし出む月の向山の端は心をつけぬ松か枝もなし

待月

曉霧

吹わたる松風たかく聞ゆなり峰の林のさしかの整

燈火もそむけて夜もすがらすます心は月そしるらん

月前風

綱手引船人の行く方もわかぬ朝けの淀のかはきり

梯上霧

月影に掛りてこそは知られけれさはるともなき吹風にまつおさかはる荻の葉の心や秋の心なるらん 秋の野に旅ねするよは虫のねを枕に結べる心地とそすれ

深夜荻

鹿在林

涼しさに寝さめせられて嬉しきは竹の葉戦く秋の初風 さよ中と夜は更ぬらしてほろきの鳴く聲白き野への月影

荻知秋

旅宿

松虫のなく聲たかくなりまさるかな

初秋

澄み上る月月前

幾度か飛入る虫にけたるらんあけなからふす窓の燈火 袖ふれはうつりぬへくも見る哉露の籬のつき草の花

秋

ゑへる日の名にお竹や移しうゑし宿をさめての後にしるらん 打靡(萩のほたちにまつはれて秋風戦(朝かほの花

夏燈

鴨頭草

夕立のそ~きし庭の棺よりぬれても袖におつる風哉 秋の野は道行ふりに折てたに手にこそ餘れ花の色々

夏竹

庭を見出して

かた岡の一本薄一もこもやこりのこさぬ秋の風かな

野草花

ほろきの聲

夏風

さらてたに露けき宿の篠薄水のあはれを何まねくらん

秋近く野は成りぬらし影薄きにかはるこおき渡す鯛のうけなは夕風の涼しさを待つ引きそよすめる

晩夏

舟よりすきみにものしける時海人を

さよ深き荻の葉風の己れさへ寢覺かほにも打ち戰く哉

雨中萩

荻風驚夢

夏のよは涼むまもなく明けぬくし吹きおろせ峰の松風

夏夜待風

入日影かくる~山の松風に涼しく残る日くらしの聲 秋のよの静まる程や待ちつらん戦きそめぬる荻の上風

五八二

やさひてあみひかしむさて

さをもとはぬ野原のよるの雨に思ひ萎れし萩か花妻

の光を樹陰夏月

よりもる~夕月の影

郭公聞きふるつるうた~戦の夢をさましてなく水雞哉 片山の松に残れる日くら

片山の松に殘れる日くらしの聲よりも

晩風聞蟬

水雞驚夢

暮山蟬

有明の月影すめる澤水のす~しさそへて水鶏なく也 しめり行く土の薫涼しけに一むらそ~(夕立の雨

朝風は吹きなこほしそ花さへも散りてたまれる露の蓮葉

曉水雞

夕立

旅泊五月雨

朝風にふきかへさる~蓮葉や咲きそ花の數を見すらん

引き止めて他かす語らふ人故は小やむをいざょ五月雨の空

梅雨留客

夏川のみくまのこすけよひくに咲ちる花は螢なり島

五月雨を佗びし空にには暑けさのまさる日影は嬉しさを思ふ 吹わたるよるの川風早ければ木隠れにのみ飛ふ螢哉

よしさらは夏の限とは五月雨と暑き日影も知らて過くへく 飛ひまかふ盛りの澤水は何れ影さもわかれさりけり

五月雨晴

河螢

五月雨の雨ふきいる風さへも懐かしきまて薫る橋 早き瀬の浪にたゆとふ篝火やのぼりかねたる鵜船なるらん

盧橘子低山雨重

照射

橘の實さへとをに降りしきる軒端の山の五月雨の雨 矢をはけて寄るとも知らすさを鹿はほくしにのみや目をあばすらん

五月雨久

水上

おしなべて薄緑に見ゆる哉うゑ果てぬらし小田の若苗 朝またき我起きいつる床なつは目覺草の花にそありける

盧橘薫風

鵜川

みしか夜の名残とられて朝雲のいさよぶ山になく郭公 夏の夜も落葉ころもと身にうつる月影涼し軒のならしは

早苗

庭瞿麥

五月雨は家にありてもわひらきを浪の枕に夜を重ねつ 螢とふ夕もほこやなからまし澤田の蛙聲そはりぬる

暮春老鶯

陽炎の燃ゆる春野のをちこちになかき日くらし雲雀なく也

夕蛙

皆人の華かたしきねたるよは野への雲雀床やかふらん

雲雀

花誘ふ嵐の庭は松陰のくまたにもなく雪そふりしく

野遊

暮れそむる空に惜しき春の日に思ひくまなくちる櫻哉

落花滿庭

吹きあけて霞の空に亂れ行く花こそ風の姿なりけれ

花ちなき宿に花の散るころは吹きくる風をまたね日もなし

夕落花

ちる花のあまひなす世の理りを遊ひ知らする春の山風

落花風

燈火をかくる毎に軒端なる花も咲きそふ心地こそすれ

落花

咲きさく花の匂ひやさほ姫の霞の神の春のそらたき

寄花燈

花香

嬉しくも驚かすかな郭公まちたゆみぬる闇の朝いを

やすいせぬ老の夜床と郭公仄かなる音も聞きそ洩さぬ

朝郭公

卯の花の咲きちる夏に成りぬれさなほ風寒し谷の水上

聞郭公

朝風にうちちる露も懐かしき若葉の山の木々の村たち

溪卯花

谷深くさける櫻は鶯のかへる夏をやまちてちるらん

新樹露

たちかふる衣のいろに偲ぶかな散りにし櫻険かむ卯の花

谷餘花

更衣

鶯の朝なく聲のなかりせは見はつる夢もあらましものを

夏

よるなみの同調へに響くなり琴の浦の春の松風

春夢

雲もなき春の朝けの空にこそなきたる風の色は見えけれ

春浦松

大あらきの森のなきふりて人もすさめぬ春のくれ哉

春風

五八〇

さしのほる月の影には中々にそむきてむかふ山櫻花立ちまよ春の深山の雲のうちに動かぬ雲や花の白雲

五七九

の日の暮る~を告ぐる鐘の音は散らぬ花にも怨めしき哉 山風の春の手向に散る花と惜しと見つ~も神やうくらん

夜花

花雲

ふる雨にゆるひくてはる~日の光に解くる花のした紐 長閑にも匂ふ山のき木の間にかさ隠れして

夕花

花手向

春にまた逢ひぬる老の嬉しさは花見るほどの心なり見

疲る~を何か厭にも行きめぐり花見るのみそ老の春なる かけしめし隣や嫉く思ふらむ花は此方を表なりける

雨後花

松間花

隠れて咲き匂ふ花にそ流の音はありける

隣家花

老

岩浪の元は春の野に遊びて帰る諸人のたらぬや花に宿るなるらん

瀧花

老見花

留人

いつしかさ待たれしよりもとき物に盛りに花のなれるなりけり

終日見花

杜花

吹風のたえたる日とを山盛りのうちの盛りなりけれ さく花の匂ひと見れは鏡山曇れる影もた~ならぬ哉

山櫻ちれるまたしき交らぬは言ひ合せて花の咲きけむ 帰るさの迎へかてらにこし人もともに宿かる花の陰哉

盛花

山花

分けいれは盛りもしるく薫るなりよそめの雲の峰の春風 陰とめて日をふる花の山ふみは散りはつるや家にまつらん

花盛

花留人

山路尋花

花下送日

百千鳥いて~塒に歸るまて木かけをしめて花を見る哉

手束杖つきなく人や思ふらん花に分け入る老の山ふみ

花慰神のます森の櫻の花盛しめ引きそへよ風よきぬへし

野花みえぬは

の

さきぬさて告けやる人はなけれともなに急かる~庭櫻哉

みやはすらん

麓早蕨

柴人つくくし

乙女子かめにつくく春の野の道ゆきふりにつ獨待花

いさ~しく懐き哉さいたつまつまも籠って遊ぶ春野は

六田川水のみとりの末さほく霞むや岸の柳なるらん はかなしや跡なき藻鹽水の上にかき連ねつ~かへる雁

若草

春待ち咲出し宿の梅さへも萎むはかりに山風をふく 百千鳥聲しめり行く夕暮のかた山はやし春雨をふる

水邊柳

歸雁浮水

また寒き竹のはやまの朝風を春になした黄鳥の夕暮の空かさ見しは降雨の色にさひ行く霞なりけり

餘寒

暮山春雨

鶯の名におふ糊のやこえる春の名のりなるらん 打ちしめり梅も薫りてふくる夜の窓静かなる春雨の音

竹裏鶯

霞中春雨

朝毎になきていつめる鶯の谷にはも残らさるらん 春雨のおと静かなる朝床に又も眠りの催ほされつ~

關路鶯

夜春雨

鶯の聲き~ならす嬉しさに朝いせぬ身となれる春哉 佐保姫の霞の衣おりたちてぬれすばらし春雨の空

鶯出谷

朝春雨

朝潮はみちにけらしな立ち渡る霞をひたす浦浪の音 立ちこめえ夕の花の色さへも霞をいつる山のはの月

毎朝聞鶯

春雨

うかひいて~己か船をやるらん霞にかつく春の麗人 手折ぁへすけふも麓に暮し皃峰の蔵は老やしぬらむ

海邊霞

春月

五七八

我はかり待人あらは櫻花さかぬ程より問ひもこましを

遙尋花

道やたかひけむ遙々来ても花の五七七

第二集終

海上霞

志能數多禮鶯のなくねはかりそのこりける霞こめたる夕暮の山

嵐山花のにほひもほのかなる霞にひ~く入相のか

暮山霞

あさなく霞む山のはうち向を心の春も深く成りつ~

ほこ杉の直き心あらませはよしや桂の薫りなくても 朝日影匂ふを見れば山松の春のみこりは霞なりけり

寄木雑

松風

朝霞

よし悪しのちりひちばかりなす業も積れば山とならすやはある 長閑なる色にもなひく霞かないつるきのふの峰の白雪

よしや身は谷の下草心にはしめさらめやは峯の世人にちはる神のにき御霊あらふる事はあらしとそ思ふ 春来ぬと思ふ心のゆたけさは霞る空も霞むこそみる

寄山雑

雪消山静

春生人意中

寄神祝

立ち初野山の霞薄けれて冬を隔てし色は見えけり

櫻木にさかせて匂ふ諸人の詞の花はちる世あらめや

寄書祝

早春霞

四方八方に廻って深き荒海は神の御國のぬみにそ有ける窓の戸のあくる光もあらためて心のさかに向ふ文机

正月元日のあした

寄海祝

待ちもあへす春は來に見をもこのみわか盃の廻るまに語り舊年立春

君の仇まつ打ちえたる山崎に世を思ふ心はやく見え見

宴遊

豐臣關白秀吉公

志能數多禮第三

祈りつ~ひき潮に軍人の心みちてや仇をうちけむ

あふ言葉の花も咲をはりつ~

思暫し休らへ

新田義貞

あすを頼む心のはかなさよ過くればけふの夕暮の空濁り行く世をうち川の岸にこそ汚れ老の浪はたてけれ

寄花述懐

朝凪の空も一つの海の上に浮くる帆影ゆくこともなし 大王の御枕近くたつかゆみやかてもまかを拂ひつる哉

薄暮述懐

源頼政卿

引のほる夜舟の綱手いそくらし枕の浪の音はたちぬ 夕暮の山路をく柴人はまつらん宿のつま木をや思ふ

望遠帆

源義家朝臣

沖っ舟遽かに帆をそおろしぬる一村雨の風のそはえにうち向ふくしけの鏡思ふ人に己れなりてや身をよそふらん

河舟

夕樵夫

妓女對鏡

舟

いさ~しく思ひそる燈火の影仄かなる花の笑ひに

燈火の油さしそへさし集ひひ~らき語るよはの楽しさ

夜見佳妓

酔ひな過しそ 世の外にすみの衣を思ひしは塵に染めたる色にそ有ける

燈下夜話

法師

飲むからに楽しき心くしの神ちはふ御霊のいちしるき哉

いつこにか今宵假寢をすか笠の色も暮れゆく野路の旅人

酒

かくばかり濁りなき世に山清水くみてのみやは身ををへぬべき

暮望行客

様々におるや詞のあや錦おもふ心をたてぬきにして

文詞

隱士出山

雲井より落ちくる瀧の水上をいかにこひてか上の行くらん 買人もあらぬ市路に立出て空しき名のみ恨むとすらん

ぬたのに今もあきふうき鯛はいか酔ひつる名殘なるらん

天雲に深く隠れてうつしゑの姿にのみや名をばたつらん 春しらて朽ち行く身こそ哀れた九老木の花は咲匂ふ世に

魚

寄市述壊

うきとの忘られぬるを限りにて狂ふばかりに五七五

隠れぬ深山の庵訪はるちは嬉しさやいばむくやしさやいばむ

山里を問でくる人は近るへき同心のあらましにして さく花の下に睡れるから猫の心は蝶の上にあるらし

野亭草

龍

猫

山家客來

犬の聲っちきし里も野となりて狐のみこそ今はなきけれ

溢れて共にすまむと思ふ人のほそは明けなからこそ

狐

世の事はきかぬ深山の家に怪しや何の耳つくの聲 さよふけてなくなるたつよなれるさは子を思ふ闇の空に迷くる

山家待人

雀

見せはやな昔の友に草の軒の柱のやすきすまひを打ちつれて同し塒に入りなからあなかまなにを騒く雀そ

尋も行く深山のいほり柴人の教へ道も絶えにして物すこき鳥のから響くなりひるもを暗き谷の松原

山家鳥

夜

ねてたにも海路の愛を忘れまし船うつ浪ょ暫ししつまれ 人言をあやなく鳥のまねふ哉便さたにもならぬもの故

山家路

林鳥

たゆたひし浪の浮寢の佗ときに嬉しゃ今朝のひかりある松かえの緑をひたす池水は千世を湛へし心地こそすれ

旅泊浪

雨にのみあらひきにける旅衣いつかは妹か手にはぷるへき 松風の軒にたえぬと思ひとは調ふる琴の中にあり見

旅泊

池邊 松

里もなき野への假寢と思ひしをほのかに鐘の音を聞ゆるむさ~ひやおちて来つ覽高窓の裾野の小笹音さやく也

露中衣

松風琴

行暮れて宿りし野へを今朝みれは露の底なるふしとなり鳥 じられしとすめる野へにはあらぬとる草こそ宿を生ひ隠れ

旅宿聞鐘

野篠

旅宿朝

ふはの山夕こえくれし旅人やわさみか原に庵さすらん

雨にきしみのしろころもほし乍らけふ行道は身も軽くして

名所原

雨後旅行

更に結ぶもやすき草の庵野への嵐に任せてそすむ

ふきしきる嵐の枕故郷にわたしもはてぬ野亭嵐

落葉かく總角たにもなかりけり鳥の音深き谷の松原 そよ吹く風にも夢のさむる哉さけても旅はねられさり鳥

風破旅夢

ふる雨にこもれる老の徒然と昔なりせは簑かさにして 白み行く道に煙れる松の火は先たつ旅の人やすてけむ

鳥啼人不見

朝旅

雨中忍昔

さもあらはあれ拂はぬ庭も文机の上に座のつらさりせば

よるの雨のふりそふ苫の滴りに浮寝の枕又うきぬめり

泊雨滴

庭

杉村の色もくれ行く山もとにしるしをかへてたつ煙哉 浪よせは流れぬへくも見ゆるかなかりなの器の浦の住家や

あやにくに吹きまさる哉日はくれて風隠れせむ陰もなき野に大空も一つ緑の浪の上いつかいつこに舟ははつらん

遠村烟

海村

蒼波路遠

野夕風

夜をこめて漕出しみなと今朝見れは浪間遙に山を残れる

雑

朝海路

空にのみ成り行く人の心哉月の都にいなんさやする

峰高く落ちくるの水煙うつる日影寄物語戀

水

寄鐘戀

世渡り苦しき道にたくてはとつなの橋もものならなくに

名所橋

早崎のせごこく舟の危ふくも心にのりてこふる人つま

五七四

瀧哀"又今宵も一人打わひてねよこの鐘に音をや添へまし

に虹そたちける

夢のうき橋

五七三

寄舟戀

戀

とひうしの力車も砕けはてなん

わか懸を見やるべきあたりそしらぬつれもをもひいる戀の故には丹塗矢の神のわさをも願ひつる哉

あふ事は浪まにかつ(鴉鳥の歎きてのみる過きぬく

寄車戀

果てし深山隠れのなけきには人の思ひもつかぬなり人ころ早くもよそになりかふる手はさむものと思ひける哉

寄鳥戀

寄矢戀

寄朽木戀

あくかる~我魂・玉琴に成りても妹か手にひかれなむ

厭はるみの木のこりすまにひかるち心何にしてまし

寄琴戀

憂におふる芦たにさてはくちせぬを我戀草そかる人もなき 昨日かもはひならひてし綠子の早く立ちぬる我浮名哉

寄木戀

寄小兒戀

なきをつくりし文もはらひすつ覧

寄魚戀

愛人の昔のめしくれのお席にのみ今は見えつ

寄草戀

おもふ事いつ迄人につみ井のみつから袖をぬらしそふらん

たにくのさわたる限り尋ぬともかちるこひよる人はあらしを

寄虫戀

隔て行く心につくる八重垣の妻とおりせむ由もあらなくに待渡る我は心もかはら毛の駒うくのみや人のなりにし

寄井戀

いか斗り思月毛の駒なれや心にのりてこひぬまもなき

寄垣戀

寄馬戀

あふ事のもはら絶えぬる中道は千引のやひきさへぬらん

一筋に思へる戀の道にしも何か鼬のまかけのみする

寄巖戀

いかにして岩間の水のつふく思ふ心を人にしらせん こひす身を損ひつく人心うしほをあみし兎ならねさ

さしよりて思ふ事をもえそいはぬはちふきぬべき人のけしきに

心あらきてやまくつれなきを思ひいるかのいつまでか涙の海に浮き沈む覽

なき人の行衛のもすの草莖

客獸つみつみなばこおもひきややつれきにける旅衣とき洗ふ妹もあらむ物はのちせ山後と契れる言のはよ遁る路にならするあらなむ

思貴人戀

ふけし夜も枕はとらし夢にたに逢はん頼みのあらはこそあらめ 涙のみ雨もり鳥山里のまやのうすふき薄き契りに

旅宿馴戀

寄山戀

人言の茂る草葉のわりなさは我かよひちのたゆるなり 藻鹽~浦わに行きて世をやくむ思ひの煙まかへはつへく

深夜戀

寄雨戀

山深くひさかくれなむ厭ばれて何かは同じ世にはすむべき人心いかにうきたる雲なればかりもあすよそになる覧

憚人絕戀

寄烟忍戀

人心よそになるみの浦千鳥かひなき跡を何に見す覽大空の星よりしけき我思ひにあゆかぬ人の心なに也

恨世戀

寄雲戀

よしさらは我恨をも語らなん人のつらきをつけ斗りに山のはの雲を離れて照月の現はに成りぬ我こふらくは

披書恨戀

寄星戀

ならぬ心に妹かのりとよりをるてふ事のあらすもある哉 ひま過くる胸を早めてしなむ浮名や長く世にとまるへき

人傳恨戀

寄月顯戀

川水の増れるしらてふる雨にさはるこのみや妹うらむ覧 なよ竹のなひきよるへき風の音のそよくひかて誠ならなん

不忘戀

戀長短

いかにせん思心に深き江の芦分小舟漕きなつむ身を 沖つ舟よするみなどはみつよりの繋きるさめぬ思ひのみして

隔河戀

似蒙芳言戀

ぬれてゆかむ道よりもけに濡る哉雨つちみしてこふる袂は心のみ花の遠さにかえりぬる下枝の身こそ苦しかりけれ

有妨戀

等思三人

五七二

五七一

見夢の名残戀しき朝床はかす衣をか雨中增慧

へしかねつる

逢夢戀

哀れて 言の葉草にひけとめていき亂露る~の玉のを

手折りてはこれも身にしむ花の色思ひかけつる枝ならねこもうつたへに色もはなたぬ言のははは心惑ひの種にさりける

人違逢戀

聞詞增戀

思川渡りを何に急きけむさなから淵に沈む身にして

はるに驚きそむる我戀よ早くも人はとりけむるのを

逢後切戀

顯戀

思ひかね夜深く一人小柴垣隔て~暫しあふはあふかは

心にてまたきにいかなのりそのみかくれ果てぬちきりなりとも

隔物會戀

隱名戀

中々に泣けにもある昨日よりいひそめ川のけふのあふ瀬はよし今は思ひ移りね其人にまかくてねしもちきりならすや

昨艷今逢戀

後朝の袖につきぬと思ひとをこは又いかにおつる涙そ

守の打ちぬるひまのかよひちは夢かさのみそおほめかれける

借人名戀

逢戀

歸來數行淚

思餘り立ちいててふ辻占のあふやと人をまちわたりつ~たち歸り今一言やいひてましまた夜は深き道芝の露

橋上待人

深夜歸戀

闇の戸も今はさけむいたつらに明さむよばのねたやはあらぬ

まことには思ひたえめやこの飾りしげきを暫しまて君

待深夜戀

非心離戀

入相は嬉しくきてねよごつく鐘には人の疑はれつく

なくさむる人の詞の中々につらきはなかの隔てなり見

契待戀

隔物談戀

かならずの今宵を過す人心あすの契りもえこそたのまね

延約日戀

旅宿逢戀

明るよををしむもはかな故郷の夢より外の夢の契りに

かけている神のしるしをみしめなばけにけらしな人の心も叩けとも聞きたにしらぬ景色哉心の門もさしやはてたる

蒙示現戀

ひかならむ思ひかねにて妹か門細めにたにも明けて入るへき

柔しくもいのるか神に心から人を思ひのくつをる~身を

不開門戀

依戀祇身

つれなくて過ぬとならは乗駒のあの音たにも聞かせさらなん

人とれす渡らまほしき沖っ島忍ひによせむ船人もかな

過不告戀

初尋縁戀

つけぬきしるしの糸の引きかくてあらたにみわの神や何なる

かへらやる人の玉章我方に待ちえしものと思はましかは

ひる來てよるとまらす

違女札得戀

ぬるよはも浪の濡衣いたつらにきせてる人のたちかへる哉

いかにせんひろひし人を尋ねなは我としられむ妹か玉章 きてもさしもかはさぬ袂める浮名をのみゃたち重ねまし

落返事戀

わか妻と見えしよいかに小夜衣袖さしかふる物ならなくに

たのましな一村雨の笠やとりはるまつまのなけの契りは

白地戀

さても猶をるへくもあらぬなよ竹の靡く景色を何に見す覽

來無實戀

引きちかへ過きし車のみするあらぬ有ぬ人逢戀

思ひ川思ひは淵人はまた知らぬ戀故よそなから見るをやさしさ思ふ何也

見戀

疑戀

くるしくも思ふは人をしかりとて言出てぬき懸にあらなくに

忍戀

思ひきやよそにもあらぬおきふしのうさくて世をはくなん物とは

きのふけふ包み一所戀

初戀

あふ事を祈るしるしのありし哉人には如何神の見えけむ

そめぬる我涙なれぬ袂やあやしと思はむ

行路見戀

に心を掛をむる哉

よそに又思ひかけてや浮橋の中のたえまも恨みさる覽

不逢戀

さ積り来て苦しや更に渡る瀬のなき

乍隨不五六九

梅告春近

梅か枝にふる白害のあさむかぬ花さきぬらし香に匂ふ也

雪さへもたくふ嵐に松の火をさる手も寒きよるの山こえ

冬夜山

いかはかり深き霜夜を埋火に向いてもうしろ寒きは雪ふるはなしに
立ちふ雲のけんきの寒き多哉

雪中早梅

そのやまは炭焼里の多からし煙のおくに煙立つ見ゆ 朝霜のさけたる
庭のかわくまる斜めに成り冬の日の影

寒夜埋火

冬雲

狩人のまたふみたてぬ鳥さへも驚くばかりふる哉 花鳥に遊ばむ春を思ふにはくれ行く年もをしからなくに

遠近炭竈

冬日

嬉しくも雪ふみわけて来たる哉厭へる道も人にこそよれくれて行く年よりもけにをしき哉あかぬまとおのふくる一夜は

狩場霰

待春

どくおきて明けたる門はひとり我みきりの雪のためならめやは旅のいほは春のいそきるなかり皀暮れ行く年は暫し休ちへ

雪中客來

歳暮夜話

松か枝の今もをるへき景色にて折々おつる深雪おもしろ立ちつとふ年の終りの市人は冬をは春に代るなり見

依雪待人

旅歳暮

わたつみのこれやかさしの花ならむ雪ふり積る沖の八十島いさ早るくる年哉たきち行く水るよと瀬は有てふものを

松上雪

市歳暮

立ょらむ木かくれもなき山路哉ふりしきる雪吹き迷ぶ風まつとの春になき身はいたつらに積れる年の歎きのみして

遠島雪

歳暮急於水

はなつとも駒も迷はむ下をれの松かえうつむ雪の深山路 わか宿の梅の花咲きにけり今いくかありて鶯の聲

山路風雪

惜歳暮

よしの川おちくる浪の夕千鳥妹脊の山の中になくなり 吹おろす嵐の雲にはつれ出つる光さやけき峰の白雪

山路雪

遠山雪

心なくたれともし火をか~くらむ雪ほのかなる夕暮の里

わかの浦の芦の亂れ葉浪こえてみちくる潮に千鳥なく也 さえ!嵐は雪に成りにけり松のは白き夕暮の山

河千鳥

夕雪

霜にのみ跡をつけつる板橋の今朝は深雪を踏渡りつ~

湖千鳥

橋上初雪

降りそめし雪ふみわけて行く道はあふ人さへも珍らしき哉

冬こもりのきばの竹にふる霰ぁなかしかましまなく時なく

竹亭間霰

初雪

多くれは汀の草もかるの池に漁る鴨のみ青はなり島

長 夜のまたる~鐘じ音もせて霰斗りそ窓をうちげる

除夜霰

山川の浮寝の床の睦ましく夢をならふるしの群鳥

池水鳥

さよ嵐霰ふきまく雲間まてらすもすこき山のはの月

野も山も一つ光にさゆるかなおきそはるしる照りまさる月 幾つかで
浮くる池のをしならむ數ふとすれば行きましりつ~

雲間冬月

水鳥多

霜夜月

ふる雪のふすまをさへや重ぬらむうき水鳥のこほるよ床に

冬のよの嵐の空にすむ月のおちたる影は氷なりけり

雪中水鳥

暫しあくる戸口も寒き冬の日にあたるさやけき月の影哉 川浪もこほれるよはの水鳥はいかにうき寐の床の山風

夜月冴

水鳥

冬月

冬の池の氷ふきく朝風に枯葉の麓のなほそよきつ五六八

~

あつふすま引き重ねても思ふ哉鎧もぬかてねふりけむ世を

朝つまのわたりをくくれ舟のくれ行くなみに千鳥なくなり

浦千鳥

五六七

月前落葉

寒芦帯風

蘆の葉もうらかればてつのこゃ淋しさの限りなる覽

さらてたねられぬよはの山風に木の葉も窓を打た~きつ

寒芦

夜落葉

M

草

落葉

さえわたる池の氷は月の月のときなす鏡なりけり

隅田川舟まつ岸の笠やさり時雨をさきに渡しやりつる

月光映氷

渡時雨

老人の日向ほこりの程もなく又かきくらしふる時雨かな 朝日さす庭の笹の葉けふる也よ深き霜のしみやさく覽

賤の女かときあらひだけふる又ほしてはぬらす村時雨哉

時雨晴陰

時雨ふる磯山影につなく船は紅葉を苦にふきやそふ覽

朝霜

かきくらしとくれよはのにはたつみ早くも月の影を宿れる

時雨易晴

船中落葉

冬来ぬとつけの枕に音たて~窓打ちしふく小夜時雨哉 さるこそは松にならはね色ならめ木のまを分けてちる紅葉哉

紅葉見て歸る山路のさくおそくぬれぬ人なき夕時雨哉 雪ならぬ紅葉にうつむ深山路にまかする駒もふみや感はむ

時雨告冬

松間落葉

落葉無行路

朝なたちてはきえし浮雲の邃にしくる空と成りにき

時雨

嵐吹く片山影のいさら井はちるもみち葉をくまぬ日そなき

いつのまに時雨の冬に成りぬらん日影も薄き村雲の空

水邊落葉

初冬時雨

照月の空にしられすふりすさふ時雨は木々の紅葉なり鳥

水鳥もらてはふぁに砕くらむ今朝より結ぶ池のうすらひ

寒夜嵐のさわきし棺ちりはて~庭こそけさはもみちしにけれ

ちりしきて後さへをしむ紅葉哉ふたひさそふ庭の嵐に 冬の野の尾花かるさに雨はれてともにかれ行く思ひ草哉

菊花曉香

冬たちし深山のほりとふ人も嵐のみこそ吹きしきりけれ

よひく嵐

初冬は照月の光を花にさけるなり

月前

冬

苅ばてつちは通ふ人もなしものさひしきの音のみして 草紅葉残れる色にあるものをはかなく秋のくれて行らん

さよ深く飛ひたっ鳴の跡見れは野澤の水月そいさよふ 紅葉の柵かけし川瀬にも流れて秋はさらさららん

田鴫

暮秋

打ちかはす砧や誰と思ひしはわか山ひこの答なり鳥 松陰に匂ふもみちのた~一木ひかに尋ねてそめし時雨を

澤鴫

秋不留

宿からの秋のよ寒と思ひしをいつこの里も衣うつ也 花にのみ何恨みけむはつせ山もみちの秋の入相の鐘

山家禱衣

紅葉一樹

我ひとり向ふさ思ひと月影のよ深き空に雁なき渡る 峰っちき深くも匂ふるみち哉花の絶間もありけるものを

河霧

海邊紅葉

立渡る霧の外には水もなしよはふやいつらうちの川船 漕きよするあけのそほ舟色もなし磯邊の紅葉匂ふは

古寺紅葉

夕暮の霧とひ分けてくる雁や翅にかくる露の玉つさ色こくもそめたる木々の紅葉哉今一時雨ふらはちりなん

月前雁

紅葉遍

寢せし夜塞の床に思ひしもとるかりけりな雁の聲

こむ秋を遠さこそは思ひしかけさ鳴渡る天っ雁かね 蟋蟀なきし涙の色なれや壁の中なるつたのもみち葉

夕雁

紅葉深

古屋

初雁

白菊の花もねふりやさめぬらんさやかにかほる暁の庭

五六六

に色をふ菊月見むと思ひ入りに山を月もうれしさ空を見

五六五

照月のよなくふれる庭の雪の書もきえせぬ光ならせは

在明月

榜いて沖つすさきの月も見む歸る釣船しはしかしてよ

月よ

連夜翫月

月

馬のおとはよそにのみ見て過ぬめれ月のすむみ山の滝の白糸は清き光をよれるなりけり

よるあらぬ秋の中はを

對月待客

照瀧水

せき入れ水に宿して見る月は大空よりもむつましき哉

ほのめきそむる峰の月ころ

連夜見月

水邉月

ともし火をつけてる向ふ哉秋の野の露分ころもひまもなく月の光をしほるよはかな

待月

露深

瀧っ瀬に鳴子の綱をまかせたる川そで小田は水面白き松の姿を見せかほになつさひのほる峰の月影

涙こほれぬ空の色哉

秋田

心あてに向山のはうれしくものにいつる月影

秋ならぬ夕になしてなかむさも月前松

なれや鳴子に近きさを鹿の聲

秋々

月前山

山田もる賤か眠りのほとあか星の光はかりの光にて月こそいつれ横雲の上に

鹿の分けてなくらん

田家鹿

すみ上る月おく露にふしたる野への秋野鹿交萩

にいさよふ薄雲のさばるとなしにきえばたしぬる

てる月にか〜りもあへす過くる哉嵐の空の雲の一むら

曉出月

月前

雨中鹿

我もさはなきや明かさむ蟋蟀おなしよさこの草の枕に さなからにあけ行く空の月影ををしみとめぬと思ひける哉

ひふる妻もつれなきよるの雨に身をしる鹿やぬれてなくらん

をねたそもりける

いかてかは枕さるへきてる月の幾獨り見まくのをしき野月月海邊旅店

きくおきてわかばく庭に一葉ちる桐こそ今朝の秋をつけ見 露深き尾花か本の思ひ草ねに現ばれて虫そなくなる

初秋月

露底虫

立秋

此朝け焦れて見えし雲の色のきえ行く儘に野分吹く也

野分風

なく聲の涼しさしめて夕風に我もふかる 蝉の羽衣

心からなまめく花の女郎花さてこそ人は折やつしけん

夏衣

女郎花

風清き 夏の山川筏おろす賤かしわさもうらやまれつ、

夏人事

軒近き荻の葉戦(風の音の暫しも夢を見せぬよは哉

野萩

月見つをするむばしは鳥の音も宵のものを聞きなされける

踏分けて誰かは出てむ柴人のあとたに夏のはやましけ山

夏雞

この葉に戰夜風の音きけはほかの草木は秋なかり鳬

夏山

星祭る夕の軒に引きかけておなら手向のささかにの糸

荻風

夏かけて縮のこはき咲きにけりいつかはきかむさをしかの聲

山家待秋

天の河影も一つにすむ水夕立の名残涼しき斑草にほのめきそむるこほろきの聲

のことにも渡せかさささきの橋

七夕蛛

晩夏

ともし火の日をさふる森の木影は六月の空にしられぬ風を吹ける

柔しき影も忘られて身をさく星に手向つる哉

水邊望天河

夏風

女庭に出てたなばた祭する事

夏なりと世を思ひしは岩清水とめてくまぬ程にそ有りける

夕月の光はのめく大空や秋にすみ行くはしめなるらん

避暑

五六四

樹陰をりふせし萩花野に我るねむさやは牡鹿の妻となすべき

五月雨はふり盡しけり大空の緑を見ゆる雲のむらきえ 琴の音のすみねる夜はの涼しさは流る水を引く心地して

五六三

ほの見え日影を隠す村雲の忽ちくらき五月雨の空 Hくらしに袂ひちぬる山清水月を掬て帰るへしやは

五月雨晴

泉入夜琴

やすからぬ民のしわさばみとふつきうる田にこそまつられけれ あつけさの晝寢の枕ひやかに雨ふきかくる風の夕立

五月雨

對泉待月

郭公聞きもふるさぬるの故になく聲うさぐ成りも行く哉 山里の夕餉の煙薄れぬはやかて蛇遣やたきつ~くらん

早苗

夕立

郭公なく音に心ひかれ行く綱手かなしき淀の川ふね もりし日をわひしはすちむ夜の月に嬉しき木のまなり見

郭公漸稀

夕蚊遣火

夏月

郭公數へて脛を聞つる郭公數聲

夏月透竹

山つさに語る音の郭公ねたと思ふ人を有りける さやけさのうかれ鳥と思ひしは明くるなりけり夏夜月

過きてこそ時鳥とはこられけれ夜深き空にもらす一聲 水雞なく聲懐しき澤水のひとりはすまぬよはの月影

郭公未遍

夏曉月

村雨のなこりの露に打はふきなく音をこぼす山郭公ねやの戸を人の叩くと見し夢はさむる枕の水雞なり見

郭公一聲

月前水雞

郭公なきしやいつこ夕風の空にたよふ雲の一むら 五月雨の畑の雨にふかれて戸させる窓のうちもぬれつ~

雨後郭公

水雞驚夢

雲外郭公

はまたうさかりん程にそ有ける

船中郭公

夕す~み庭のむら竹吹きわる風の色白と月や出つらん

樹間藤松

我こそはまつ聞そめて郭公人に語らむと思ひものを

思ふ事いはぬ色さて枝さへも打しなひたる山吹の花

人傳郭公

さふ人にけふもられぬ我宿の籬と頼む山吹の花 郭公所からそこ思ひしはわれにつれなき音なり梟

移居待郭公

かへるとも家路は~れむ山櫻分けゆきて花に宿らん

夏

花時遠行

花鳥の春をうかふる盃と千世にめくるもあかしこそ思ふ

忍ひにもたらしものを只一夜假は許せ花の山守

心靜酌春酒

花下言志

麗かに照せる春の日影哉うへも雲雀の空にあかれる

春日

ぬるかうちもくたくる春の心哉花のちるのみ夢に見えつけてこそ中々月は見えにけれ霞を拂よ

夢中落花

ちる花のともに別れし春ならは再ひものは思はし物を

春天

うたて吹よはの嵐かちる花のめに見すとてもをしくやはあらぬ

夜思落花

惜春

早く花の處にありけるを心おそくもさそひつる哉 郭公なきこそ渡れくれぬまのけふは春とも思ふみ空に

花見つ:遊ふ木陰と思事いふも等しき人のみにして鶯のけふなく聲の聞えぬは慕ひゃしつる春の行衛を

花下遇友

三月つこもりの日郭公のなくをきて

花下友

暮春

吹きすさぶ松のは山の風の中に風に知られぬ花そ匂へる

紫にわたせる池のそり橋は藤さく松のはひ枝なり見

松間花

水邊藤

何方にかうかれ行くき櫻花見むさてこそは庭にうゑつれ 花もなき山里さこそ思ひしか松の梢に藤咲きにけり

五六二

今はよしおるはし櫻さればこそ夢の中にもちると見ゆらめ

五六一

さきしより櫻か中に身をおきて花より外の世をしらぬ哉

交花

引とめてたれも見るらむ険花の仇には瀧花

馬上見花

朝日影うつろふ見れは櫻花にほひと月の色はものかは

明和む空見て花なれ花映日

終日見花

朝戸あけて向ふ 外山の櫻花さきぬと見ても夢をまさしき

山風よき程に降りてる雨のはれし哉ふ~みし櫻ひらけたる

朝花

靜見花

いつこにかまつ行て見むをりしもあれ野山の霞立をひて見らくすくなき花の色哉

處々花盛

雨後花

咲きいて~再び寒き花

花盛

來つ~見む末花半開

花間月

櫻花ひもときぬら高砂の松の木のまのしらけそめぬる 春の日のくれ行く色も見えさり花の棺は月夜なり苑

花の香のへの風ちはて人まさはしの野への霞や雲のみよそには見しか山櫻木ときに花の姿かはれる

初花

月前花

徒然の春の詠めもうれしきははれなはさかむ山櫻花 ふくつけく人のをる哉花櫻我はかさしのさえたばかりを

霞中尋花

近花

折花

雨中待花

も久しき櫻花咲きつるはかり残る蕾に

春風は花の日数をのふるなり

櫻花野守山守つくる盛りを

のふかね限りはさく花にやとす心もちらしこそ思ふ

さくれ行色はそらくはあらぬ

駒にかふ草もなし

さく花の中に隠れて隠れあへぬ匂ひも深し春の夜の月

さもあらは柳の枝にかられるも櫻か中にかすむ月影

霞中山櫻咲きにけらしな瀧の瀬の此方彼方にあまる白浪

庭花

よしさらはなかても雁の歸れから見送る空もわかぬ闇夜を 梅ちて柳綠に成りにけり今こそ櫻さかむとすらめ

静さをさこそはじめし宿ならめ降のみ暮す春の雨哉 さかは又ちらむなけきの花故に急くもあやなあたら 春日を

夜歸雁

漸待花

月影の霞はてぬと見し空は雨なりけりなおつる玉水 さかしらにこれほこらふから人もめをおどろかす花櫻哉

閑居春雨

待花

かすみつをふる雨暗く成りにけり長き 春日暮れむとやする

春雨夜靜

名山櫻花

いかはかり花のちるらむ春雨のふりふ山の入相の鐘

花

夕春雨

晴ては曇る空の色に四方の櫻の盛をそしる

櫻狩あかぬ山路の呼子鳥よひかへさなむ春の入日を

百鳥のなく音しつまる花の枝に匂ひかへたる春夜月

深夜春月

ふけにけり庭の櫻のひまくをもり盡したる春夜月

吹わたる風ほのかなる春の夜は月霞をもりやかぬらん 我のみと雲雀や空に思ふらん人の心もあかる春日を

鴬のよるてふ糸の青柳をあやなく風の吹みたるかな うへしこそ長閑に駒のあさりけれ人も心を繋く若草

春月

雲雀揚

梅か香のみてる闇のうち鶯におなし夢をも結ふへらなり 山のほの霞のひまにほの見えて入日の空を踊る雁かね

柳糸隨風

春駒

草はまた結ひもあへぬ春の野に梅からまくら一夜ねに見わりなくも
墓を心行雁のつひには見えすなれる姿を

梅香闉

歸雁幽

去雁遙

野宿梅

五六〇

呼子鳥

におへる水穂のみかは匂ふ花もたくへむ國なかり

一年にさけるいろ集めてもおよは春の鶯のしるへにやりし梅かに人
こそ来つれ庭の春風

五五九

雪中鶯

梅花薫風

朝ほらけかすみこめたる梅か香のこほれて匂鶯の聲

枝こそあれ香をやは人にをしむべきめくよ庭の梅の盛を

霞中鶯

梅花

春のきる霞の衣百鳥のなく音をさへもおりそ入れたる

ことわりの昨日の冬の寒けさはいかばかり身にゃしみぬる

はてもなくたてる霞か潮ならぬ海にも潮のみつ心地して山風に又 雪こそちりくめれ春たちぬてふ空はいつらは

霞春衣

我心ひかれて松に宿からは今宵そ野への初ねならまし 暖かにふりし昨日の一雨にはつかに成りぬ嶺の白雪

湖上霞

餘寒

朝風に響く瀧のお山かつの耳にも春を聞やわくらん鶯の聲する軒に立寄るは我をごはぬも嬉しかりけり

子日催興

殘雪

いかはかりあかぬ色香をぬるも花なくも櫻の春の鶯

池水のみさひをはらふ春風花鏡をかねてさくらん 鶯のなく聲たえぬ庭櫻花こそ春のさくるなりけれ

瀧音知春

鶯呼客

春水澄

梅か~のねふりさまし 朝床に又にほひくる鶯の聲

花間鶯

かきくらしふる白雪に鶯のなきつる春も嵐とそ思ふ

早春雪

のうちはまたさもしひものこる夜の枕さやけき鶯の聲

ゆたけさはいつも春なる大御代の花に遊びむ時は來に見

迎春祝世

有明の月は霞にしつみぬるさやけきうくひすの聲

朝

春

曉鶯

さえかへり雪はふれとも鶯のなく音の春はやつれさり見

志能數多禮第二集

ゑりて人々にあかちてんあるにそはいよき 志能數多禮第一集終

此一巻はわか父翁の御歌ともなり翁の歌集前篇

ははやく板にゑり後編は草稿にてつきく書

くはへもせらる~をそれはたほこもなくかた木

にものすへしさて此一さちは年ころおのかこひ

つるをりく懐紙短冊あるはせうそこの末なさ

に書てたまはれるなるを父翕常に長崎に旅居せ

られてまのあたり御敷を受る事いと~ほかれは

此御歌ともやかてわか師として常に見ならは

はやとおもふをおのれにひさしき風のをしへ

子たちおなしくは一巻となしてことさらに板に

あしすけを神の植しや萬代にさかゆく國の根挿なりける

寄國祝

嘉永とあらたまれる年のさつきのなかは肥のみ

ちのしりの國人中島廣しるす

寄星祝

事にこそやかてうへなひものしつるは父翁の

御ころにかなへりやかなはすやもし御かうし

もあらはおのれひとり其つみにあたらむものを

さて

社頭松

砕けては薪きるなる世間をよそにみやるの松そ木高き

過にしを思ふ心の様々に盡ぬは老のねさめなりけり

五五八

頂きて仕ふる臣はあかほしの赤き心を盡すなりけり

五五七

懷舊非▍

日暮

述懷

小夜深く枕さりても老は鳥の八聲にめを覺しつ~

故郷をひしさ何か思ひけむ嵐のまくら露のしたふし 鳥は驚かすさや思ふらむ待てのみ聞く老の寢覚を

中雨

一つきに憂さも忘れつ百ちの薬の親とうへもいひけりやきたちの常磐の上のそれよりもふみ江の瀧や常の道なる

羇旅

曉眠易覺

石の内にほめる程はなき流す涙の玉に見えけむものを釣の糸にも心やひかるらむ年をふる江に水は汲む身も

箭

船中遊女

ますら男のたけひて放つなりかふら響物をまつとほしけり 夕浪の聲面白くうたへるは何れの舟のたか一夜つま

酒

中

漕捨て~眠る浦の夕湖に蘆の一葉の夢をなかる 猿なく聲より奥に成にけりのかけ道うたふしは入

玉

漁翁

孤舟夢

いざ歌山

岸頭待舟

孔子

これのみや學の窓のとみならむ隣にからね燈火のかけ

行暮れて道さふ窓にさしよする光嬉しさもし火 うつしゑの跡にも浪のかる哉枕うきぬる浦のすみかは

君

窓中燈

枕~ひさ

たをおほふさま舟の思ひし程はもらぬ雨哉

源氏夜を深みよふに答へて渡り守猶眠るらむ梶のおともせず

だけの古きしらへも故郷に踊らさりせは踊らさらまし

樵わひしくも降しきる哉然りて雨つちみせむ旅ならなくに

旅中月花をつる心の様々に其あらそひもおもしろの世や

けふも亦行へき道は残りけり遠山てらの入相のかねことしあらはふみて打おき老か身も剣のたかみ取しほりてむ

旅泊雨

へす袖にも松の似たるうへも舞子の濱といひけり 激ときる何か厭はむよの中のうきにかへたる峰の嵐は

何處にて消えに松はともしつけむ行手の家は皆戸さしたる 峰き賤か庵をためるや心はかりの隣りなるらむ

濱

山家嵐

吹おろす風のおさ聞けは谷川のなかれば松の棺なりけり 山里に住みはなれたる暫しこそ夕淋しき折もありしか

夜路

山家

溪風吹樹

山家

金ほるわつか水

山

雑

早さきの瀬さのうつ潮漕船のいたてに成ぬ我戀ふらくはさもこそはすます成にし里ならめ野へになしても吹嵐哉

もどかしやいなどもうともいはぬ人とちまの鐘も打たぬるの故くみに来て暫し休ちふ賤の女は岩の水を鏡にや見る

寄舟戀

故郷嵐

遠く吹靡けたる浦風にやかぬ鹽屋もうち烟りつ~

寄鐘戀

井

寄注連戀

風たえ空に畑の立つ時は浦のはやの数は見え

屋烟

寄太刀戀

浪風の荒るひころは家毎に網を結ふやしわさなるらむ

つれもなき人をは思ひつき弓の引返されぬ心なに海村

寄弓懸

休らひて渡れて乾かぬ眺哉いつらは瀬田の長してふ橋

乙女子か簪によそふ赤玉のあから様にも相見てし哉

湖上眺望

五五六

なり

鹽剣たち諸の上をふみつさもあふにしかふる命なりせは

いつかたのしめ縄を引つらむ入かてになる妹か門哉 末住捨てし里はむかしの面影も嵐のみこそ吹拂ひけり

閑居山はあれこも我國の蜜は富士のたかねなりけり

なる岩間の水の滴りも一人汲むには猶餘りつ~

天かける龍のあきどの玉よりも得難き人の身をや碎かむ

五五五

にもあらぬ人の心か

春戀

寄玉戀

ひとはやる我をは人のふるす哉解洗ふへき衣ならなくに

ことならは俤さへにかはらなむありし繼戀

寄衣戀

面影は向ふ鏡にはちなから心を人になにうつすらむ

よし今は漕なわたしを渡し舟乗し心はおるへくもなし

思移媒戀

寄鏡戀

あやなくも人に心をうつし馬の引止難き戀もする哉

小夜衣打重ねつるかひもなくなほ獨の思せよこや

臥無實戀

何に人思ひさけてかさき竹のそかひにのみもほして見す覧

寄馬戀

千里行駒たにあらは宵々の妹か門にも繋かむものを

我戀はよなくよはﾞ川船の渡り守にやめらるべきなく涙竹をも色に染よさやつらき節のみ人の見す覽

隔遠路戀

寄竹戀

隔河戀

あやにくに明行で空が立歸り今一言のいはまほしきに

いかにせむ人に見えしさぬきかへし袂に又掛る涙を

さくまくら結ふ契りの一夜故露の命を何にかくらむ 此頃の涙と人や思ふらむつ~む袂はくちにしものを

歸戀

旅宿逢戀

打向ふ鏡にはつる朝ことの心なりせは人をこひめや

うつたへにつらくる見えぬ言の葉も慰む斗りあらば□□□め

寄朝戀

然りとてあひも見なくに人のとのみ繁しあなうわか戀 撓みなく吹風ならせ玉簾からけて入らむ人まきるへく

不憑戀

心雲のよそに成にけり天のさか手や今は打へき尋ねこし鶯よりも若菜つむ妹か聲こそ聞まほしけれ

顯戀

寄風戀

いさはやも世に流れぬる涙川袖の柵せくさせしまに

恨戀

白川の名に流れも降り積る雪にはくろき水の一筋 覺束な空にや人のためつる鳥鳴ぬへ~夜は來に見

島雪

深夜待戀

別のほるつな手や重く成ぬらむ雪降り積る淀の川舟

かくて忍ひそ果てむ今更に言出つるかひの有はこそあらめ

埋もれと風の響もあらはれて雪打ちけふる峰の松原 ひとしく憂き身の程を知られける忍ふに堪へと命長さに

河雪

久忍戀

深雪降る山田を見れは穂にも出てす枯にしひつち花険に見

風掛松雪

けふも汉打時雨つ賤の女かとき洗ひころも乾す暇そな

苅田雪

冬衣

小歇なく降れる白雪なつみつ 昨日迄こそ人を訪ひしかしみつける雪の垣根を行歸り夕影寒くしさ~鳴なり

照月の影の重なる心地して夜深き庭に雪を散り敷く いつこより吹入風を隙もなくさしこめてぬる冬の夜床に

深雪

冬鳥

朝またき誰叩くらか雪の門暫しは跡もつけしと思ふにほつ鷹のかな
繰落す鷺の毛を一つにほくさの夕風

月前雪

冬風

降そむる雪にそ多は知られける秋より冴る深山への里 轟の名におふ
橋も踏み渡る音なきまでにつもる雪哉

朝雪

鷹狩

山家初雪

降しきる雪の柵かけとめて浪にさやけきさの船橋

さえて霰をさそふ山風の再ひ夢も見せぬ夜半哉

橋雪

霰驚夢

足柄のよはの山風吹よせて雪を止むる關のあら~き

關雪

向爐火

五五四

淡路島雪降にけりわたつみの浪もてゆくる色も一つに

さゆるよは埋火にのみ向ふかななれし机も傍にして

三

起出て月に見むと思ひつる寢覺いかたし河冬月

寢覺時雨

冬

~

大空にまれなる星を白菊の花に見せても澄める月哉 枯はつる尾花本の草見れは思ひ隈なく霜はおきけり

九月の末っかた山ふみして

寒草霜

露霜の採たす色は山松の木の間よりこそ見え初めにけれ 置く霜に移ろふ見れは花薄冬を招きし袖にそありける

鳩懸菘

冬月

冬もまた足らぬに雪の山つくりあげたる白菊の花 朝日さす軒はの垂氷とけぬれさ懸樋の水は未たおともせず

月前

寒草

あくた~く烟るきえて月影のさゆる田面に牡鹿なく也 朝日影はし隔て~八橋のくもてにのこる薄氷かな

菊盛

懸樋氷

唐衣長きよすから打しきる秋も何の音なしのさと山川の瀬々の氷やもみち葉の後 たるかせの柵

田家鹿

橋下氷

賤の女か夜寒の衣うつは秋風よりも身にそみける 菊の花移ろふ見れは九重の雲の上にも霜はおきけり

里擣衣

氷留流水

薄吹く野風をはやみ狩人の分るも知らす鶉なくなり降か~る音静かなる木葉哉今宵は雨も交らさるらむ

禁庭殘菊

野鶉

夜落葉

蔦葛かれる松はうつたへにつれなくもあらぬ秋の色哉 山のほの雪より出て雪よりもさえ渡りぬる夜半の月哉

そめるを見れは松かえに懸る時雨も色はありけり

の窓は打時雨つ月さゆる氷の上にかけ見えて渡るも寒し冬の川はし

水鳥馴筏

の筏の外に心なき心やしれる瀬々のみつ鳥

五五尾花散るまの~入江の夕暮は浪の底にも鶉なくなり 秋のよの月にうかれて渡るには短かくりける瀬田の橋哉

江邊

寒く聞ゆなり入日の後の峰のあきかせ すむ月の影は止めぬものゆゑに音の大わた何だむらむ

橋上月

まわ

湖月

幕天初雁

箱根山夜を残したる霧の中に關の開く音聞ゆなり 長き夜の影をと~むる逢坂の清水ヶ月の關にそありける

さよふけぬ幾草むらか分つらむ限りしられぬ松虫の聲そむけてし燈火いつか消えぬ覽澄みまさりぬる夜半の月影

關路霧

吹ふ秋の野風に亂るはあやなしたれを松虫の聲 今よりは待ともつけし澄める夜の月にそ人は任すへらなる

遠尋㞢

對月

おきわたす露草葉にみちぬらん虫の音しろき野邊の曙 眞葛はふ野への夜風は照月の光をのみそ吹返しける

虫聲何方

依月客來

秋の月照らさ里もなかり見春咲花のか~らましかは

なく虫の整の千種によるも猶錦かくれぬ秋の野へ哉 吉野山する吹風にすむ月は花の匂ひもさもあらはあれ

露底

月前風

秋虫

くもはる空かな待かひもあらしさ思ひと月の夕に

我門に鳴そはねかく秋の夜の長き長夜も明むやする

秋夜

秋月勝春花

月

月になる秋の夕の空ならは慰む方も秋夕

明

海邊秋風

吹おくる嵐の雲のひま毎に影あらたまる月をみる哉

衣うつわらやも見えて一すちの秋風寒し竹の

見月

五五二

秋されは沖つ汐風吹荒れて浪も穂に出る伊勢の濱荻

あらましものを

雲收月照月の光や空にみちぬらむまた立ち迷ふ浮雲もなし

待竹路秋風

五五一

水かれし夏の山田の村雨は民の心にそ~くなりけり

ほに出る薄や何と思ひしは秋の哀れを招くなりけり

夏雨

薄

六月の暑さはあすに残るとも残らしつみはけふのに

さを鹿の渡過たる山水に散りて流る秋はきのはな

六月祓

水邊萩

都人すみかてらに来ても見よ堰入ておきす山の下水

おく露にひもとく草の花見れは野へこそ秋の初め成けれ

山居夏興

爭てかく身にはしむらむ宵の間に聞とも同じ荻の戰きを

月まちて獪も涼まむ岩清水暮なはなけの山の陰かは

草花早

ふ風そふく

向泉日暮

なきもばかれる荻の葉風哉訪來む人のあらはこそあらめ

深夜

涼しさも淀むと見えし池水に泡立ちてゆ水風晩涼

涼しさを分る人なき闇の中はならす扇も淋しかり蜩のなく音涼しき山陰は今いくかありてあきの初風 懐に臥並びつる唐ねこも夏は人まねまろねのみして

閨中扇

旅人のむしの垂衣吹まよふ野風にきほふ夕立のあめ 唐人の竹もて綴れる綾筵夏はいさこそほしょかりけれ

蟬聲秋近

夏獸

夕立の雨何處にかそ~くらむ日はてりなから風の涼しき 越人の雪にさらし~麻衣は涼しき夏のよそひなり見

旅立夕

夏筵

夏衣

いつ方の夕立ならむ稲妻に暫しおくれて神の音する

夏の夜の涼みの床の燈火は風より先に虫そけちぬる

遠夕立

夏燈

茂りあふ池のはちす葉風ふけは水にしられぬ浪そ立ける

荻似人來

見

打むかふ心も秋に澄める哉いつくは夏の夜の月影

こかれ出る朝妻舟をてらせるや同し思ひのなる覽

夏月如秋

分くれは螢のみこそ亂れけれ何れか露の光なるらむ

湖邊螢多

あけまきか打落したる水の上をしばし流れて飛ふ螢哉

螢火似露

夕風に蹴る~見れは草むらの露はみなから螢なり見

水上螢

五月雨にまさりと水もおちぬめり澤沼のあさ 花咲く

M

さもこそは秋まつ虫の宿ならめ餘りいふせき野への草哉

夏草花

五月雨はみをはやから高瀬舟はた打棹の音の隙なき

五月雨に押流さる~芥川かへりて詩くすまむとすらむ

夏草滋

村雲の中にある日の影見れはまた暮遠し五月雨の空

河五月雨

郭公をちかへりなく片山の麓の小田に早苗とるなり

五月雨

白露の玉ゐるはちす吹風は愛っる心をこぼすなりけり

荷葉藏水

蚊遣火を枕に置ける山樵の夢や煙りに結ほ~るらむ

蓮露

さもあらばあれもりこぬ月も夕顔の花さきおほふ草の庵は

蚊遣火

日暮しのなく山陰の小柴垣白く見ゆるや夕かほの花

疎屋夕顔

Lune

いやをちにさける籬の花の色はめつる心も常夏にして

秋風もせき吹越ゆる心地して月影すら須磨の浦浪

久愛瞿麥

鳴神のひきも遠く成はて~棺の露に月そうつろふ

浦夏月

くれぬさも踊らしは月影を今泉の底に澄むらむ

岩清水すむ月影をまつほとは山のはのみ手に掬ひつ~

雨後夏月

をなくすますすやはあらぬ夏の月向ふとすれば東雲の空

對泉待月

夏夜惜月

五五〇

五四九

卯花似雪

早苗

首夏卯花

郭公忍ふる聲は世の外の家よりこそ聞初郭公驚夢

卯花

山陰の木の上の闇は卯花の咲出ぬまの名にこそありけれ

遮漠のこれる花もかた山の若葉にそよく風の景色は

新樹風

郭公とほき壁には心をもこめぬ斗りにきなく頃かな

郭公數聲.

夏山に帰る鶯ちり残る花のありかをなきてをしへよ

殘花在何

事なくはなかすやはあらぬ郭公只一夜を隔てつ~

夏る

郭公稀

立ぬる~露も嬉しき花のえに着て虫の何すかる覧 郭公まつ夜重ねて何にかく尋るにさへつれなかる覚

咲花のあかぬ山路の習ひさて獪奥深くよふ子鳥かなす~しくもかけと二葉の葵哉三つ葉四つ葉の殿の簾に

暮の山路の末の呼子鳥よふにつけても心ほそしや

春河

曉郭公

心あてにくまはやくまむ山吹の花に一つの井出の玉水

喚子鳥

簾葵

は人の歸る山吹の花の盛りに成に鳥井出の玉水くますもあらなむ

樵路卯花

山吹

卯花に水邊おき餘る露は解そむる雪の雫の心地こそすれ

深山の卯花はおのか家路の月よなり見

郭公一聲高くなのるなり夏の夜今やあけむとすらむ

水の音も春に澄行まつら川我譲るへき程やちかけむ 郭公まちて一聲きくほとは曉ならぬ夜もなかりけり

尋郭公

郭公おほつかなきをさめはてし夢より後の一聲もかな

閑居郭公

めにけれ

夏衣かふさしもなき山里も卯花垣根しらかさねせり 郭公待つより外の心なきやさをは空にとれるなり見

松のみと思ひし山も喉に見遅れし花や今はなからむ 鶯の鳴くにも春はとまらぬを何に蛙の音をつくすらむ

さそひ行風にはあはてあるかひも勿来の闇の山櫻花 小山田に苗代水や引つらむふた~ひ寒き春のゆふ風

松間花

隅田川堤傳ひに見る花は馬よりもよ舟よりもよし花にぬる胡蝶なりせは中々によるはうかれ夢の魂

關花

苗代

からめぬさとのみちる花櫻哉

寄花夢

河花

さちこそはたむくる神の多花手向

咲花の陰暗からぬ庭の面はもりとぬ月もさもあらはあれ

月影はもらぬ櫻の木のもこも同じ匂ひに霞む夜半哉 終夜散かふと見夢をさへ今朝ふみしたく花の白雪

朝踏落花

吹風をこむる霞の袖ならは花におほふも厭はしもの池のおもひとつに花の散しきて水なき庭と成にける哉

花隔月

落花満庭

暫したに打そむかれぬ櫻花花に心やうつりはてけ 青柳のなひく風をもいふ哉同しさ枝と見ゆる櫻に

花慰老

いかにたちいかにゆふらむこき交せし櫻の錦青柳の糸

糸櫻

色も今を盛の嵐山花をのみやはめてはやすべき

靜見花

櫻柳交枝

風靜花盛

立ましりさけるを見れば松は花花は松にそ色をそへける

花交

我にのみまたせして櫻花盛を人は訪はむとすらむ

五四八

嬉しさや花も思はむ咬みてる枝に解けき風の心を 松の翁さ咎めむ人はさもあらはあれ翳す櫻に命のはへは

花見つ~遊へる春の常ならは老てふ物や世になからまし

霞中花

人のをしむ心の糸櫻ぬきてさ~めし花かさを見る

渡し舟のり遅れとも嬉しきは隅田河原の花の木の本

獨待花

五四七

暮る日もわか櫻の木のまより袖に匂へる春の夜の月

面影に見えこそまされ高砂の尾上の櫻今や咲くらむ

花間月

待花

花の色にくもれる空を思ひしは霞こめたる月夜也兒

移り行影たに見えぬ春日のいつ夕暮にならむさすらむ

שר

さえくし光霞みて長閑なる月の春にも成に日

日くらしに摘め共あかぬ菫哉上 雲雀の床をしめける

春月

鳴き交す野への雉の聲の中にけふも菫を摘暮しつ~

こほりゐしみ雪もとけて降雨の春に成行く深山への里

黄花

山家春雨

明るよのけしきも見えて春野の霞める月に雉鳴(也

春霞深き夕はさふ鳥もぬるるを雨さしらすや有らむ

野遊

春深海路の霞たなひきぬ朝ひらきせし舟はいつくは長き日の暮れは
つるまて春野にあさる雉の聲聞ゆなり

霞中春雨

立わたる霞も深し青柳のけふりを分るさほの川つら さく花の木の間
より見る大空の霞の中に雲雀鳴く也

震隔行舟

野外雉

住吉の春の海へはしき渡す霞を濱のまさこなうける なれ顔に今年も来たる燕哉しるしの糸はかけぬ物から

行路霞

雲雀

松の色も今やそふらむ高砂の尾上の霞たなひきにけり 花におくあしたの露や雁金のよばに別れし涙なるらん

海邊霞

燕

山の端はうつみはてぬる夕暮の霞や鳥のなるらむ 底深く霞める影にぬるみ行水の心も見ゆる月かな

嶺上霞

雁別花

河上春月

暮山霞

ける哉

朧月

遅嵐山松にゆるして見るものは花さかぬまの霞なり見

にさめにけり枕の山のうくひすの聲

朝

山霞

暁のねふりも春吹風は身にしみぬ柴の戸を明くる心は春になせとも

鶯の初聲にほふ朝ほらけきのふは何を春といひけむ

鶯告春

初聞鶯

うへしこそ風は紅のすそをり返し乙女子かけの澤に根芹つむ見ゆ

若菜

に残る白雪

庭梅

むらきえの山へのみ雪くる春の至りいたらぬ色を見せつ~

春日野の野守けふは遊ふらん子日の小松人にひかれて あらはる線はかりに春見えてほ雪寒しみねの松原

たと山の瀧の流れに春たちて浪の音こそまつわかえけれ

子日

打なひく春はこえけり足柄の知春

關のみさかに鶯のなく

殘雪

梅やなき梢もわかぬあけぼの~霞をつたふ鶯のこゑ

關路鶯

馬くるまはやく春めく行かひに柳櫻の盛をそおもふ

水解

世の中の春に心やうつりけむ谷にとまらぬ鶯のこゑ

都初春

霞中鶯

の簾高くかけて長閑なる風の春をそ宿にいれつる

すかの手の長き春日もくれ竹の奥に聞ゆる鶯のこゑ

ゆふ日影さくす成りに山もこの霞にのこる鶯の聲

鶯出谷

朝日影に隔てもこの霞のうちにうくひすのなく

法のすたれ第一集

夕鶯

五四六

和風報春

吹とかね隈やなからん谷風のとこほりなき水の音哉

瀧音さえけれ春霞たなひく山中々にうさきも人の嬉きはたらて見つる梅の初花

餘寒

五四 五

肥後國なるをしへ子たちのしわさにて海野翁にもはやく見せられしをかねて見めて聞めてし歌ともなれは

これいさよきことたまの浦の玉の光もかくてこそいよあらはるへけれわれはしかきしてむさいはれ

しほさに秋のゆふへの露とともにはかなくきえうせられこそいさもくちをしきわさなけれさてか

くいたにゑらしめられしはわか里あたりのをしへ子のためにも常に見ならふへきいとよき師にこそはお

なし心にふかくようこひおもふまに(つたなき詞を海野分のは書に加へていさかものつるもいこ

をこなるわさにこそ 嘉永元年しはすの末つかた肥前國島原の老樵中村大蔭

海野翁のいへらく古今集の序に六人の歌仙の歌もをことわり給ひてのちの御詞にこの外のひさ(其名

聞ゆる野へにおふるかつらのはひひろこり林にしけき木の葉のここにおほかれさ歌さのみおもひて其

さまらぬなるへんさあるは歌はこさわるものにあらすしてた~しらへにあることをのたまへるなりけり

今のよにして此さかひをしれる入香川景樹なくなりて後は中島廣足をおきてまたたれかはあらむわれいま

たしらすわれ廣足にふみかよぼす事は近き年ころのことなれと歌のうへにてむつたまあへるはふるき友に

もまさりぬといはれしことはわか友筑後國人船曳大滋か大江戸にありし時海野翁のもとに行かよひて常に

聞しごころなりまことにわか師の大人のつねにしらへをむねさせらる事をよくしりたる人は海野翁をお

きてまたたれかはあらむさそいひつへきかくて此一さちは師のまなこ廣徳ぬしのおく書に見えたるか如く

歌のよさあしさもさまありぬへしうめのことにほひ高くかをり来て見おこりのせらるもありやへさ

くらのふさやかにして遠目のおされるもあり又なたらかには見ゆめれて山ふきの妹に似なてこの兒めき

ておほさかならぬもあり其中には萩すきのかきかそふへきも有へけれと大かたは花もみちのはかなき色

をあらそふめるか多くしていつもときはなるへきなん世に稀らなるわか友肥の道の口長崎の津に其名くは

しき園のあるしの採出られたる此言の葉もよ家の名におふ熊かしかはのうち見こそははなくしくも

見えさらめこれそ此霜の後までふらゆくましき常葉にして色をも香をもしる人のうすにさすへき手ふりそ

かし天保の十させまりさせむ月のこをかの日よくうちよみておもふま~にしるす 橘 守 部

志能數多連序

五四四

でも唱和し給ひしもおほかりけるしかはあれどさ

るたくひはそのときにかいやり給ふのみにて

もとより草案てもし給はぬかおほけれはすべて

はみなつたはらすわつかにひとつふたつを残りけ

今此巻にものせし八十首あまりはおのかや~人

となりしより後の歌にてはやくよみすて給へるか

おほく鳥の跡のと~まらぬことを~さな心にもい

口をしくおほえてけれはかたはらにありけるほ

とに物し給ふを見もし聞もせんはひとつもはふら

かさしてかつ(かきこめおきし歌にもなりさ

れは獪残れるかたそさはなりける及すべてこの二

葉集の巻のついて一の巻は君のものしおき給

ひえ歌ともにてそれより次々の港のついてはそ

のかみはすべてかりそめの詠草のま〜にていく

よみかは

父君の世にましほ歌よむことをなもこよなく

このみたまひてかすみ立そむる春の空よりみ雪つ

きふる冬の末まで見るものきくものにつけて心に

おほしけるふしをなかめいて給へるあるはたまあ

ひし人々はいふもさらなり折にふれてはさなき人

宇野 東風校

古城貞吉重校

百枚もありけるをかくてはめてたきことの葉もい

さやすくやちりうせむさて母君の御心もてしかる

へきほさの物にしておき給ひしをひさ巻つ〜お

なさまにたくひをわかちてついてつるなりかれ

この巻々の序はおほくはよみ出給ひし年月の前後

にしたかふさしるへし然れさも此は何のさしか

の巻はくれさんのほさによみ出給へるなりさきは

やかにはさむへからすなむ 惟

夏山の峰の青葉に契りおく秋はもみちの錦きて見む

人傳に聞くより待ちし郭公今を高ねの雲になくなる

分入りし深山乍らも時鳥まれてはきかぬ初音なり見

まかてなんさして、青葉に書きつける、

澄む月の影を映して山河の浪のよるこを涼しかりけれ

郭公の啼けるよし、人の申けるに、程へて後

聞きて

行水の音なかりせは時わかぬ雪やみまし瀬々の白浪

月おもしろかりける夜、

夏山の若葉も涼し契り置きし春の花には遅れにしかさ

よるは浪のいさしろくみえければ、

若葉そふ峰の櫻は散果て~今は野面の花にこそみれ

北山のふもとにいたりつきたるに、みなわか

葉のみしけりければ、

紫もあけもはえある色なれや岩ねの躑躅松の藤なみ

道の邊に櫻草のおほくありけるをさりて、

か葉立ちそふ夏山のけしき、浪野の原の草の

みさりも、おなしさまにかきりなくさほくつ

らなりて、いはつ~し、藤なこの咲きまし

たる、こりくに見所あり、

二葉集抄下

五四二

卯月の十日はかり、花はみなちりはて、わ

五四一

浮雲のくるまちにそめそしてけふや千とほの峰のもみち葉

行水のけふの淵瀬もかはらすば又や深山の花もたつねむ

ほ色まさりみえければ、

なれは、めつらしくて物かたりなす、此こ

このわたりのものとも、おくりにさてまかり

なりさて、ふらひきぬ、あたし國の人

はかり 湯あみにさてまてきにけるか、つれ 朝夕の露よりほかに思ひおくころや木々の色をそまし

なにかしさかやいへる、十より

また、

みちに名こりのをしまれければ、

けふまてさ秋はいぬれと唐錦峰の紅葉よをるかわばりすな

なほあかねは、

草枕かりねをしてそ山里の秋の暮をは思ひらりぬる

また、

けふのみと思はぬ秋の眺めたに哀なりつる夕暮の空

夕暮のけしきもた~ならすおほえけれは

佐藤なにかし、此頃立ちよりける市の原むら

山里のけふの時雨にもみち葉を染盡してや秋の行らむ

残る日のかけばもみちの色なれやうつろふからにこさまざるらん

より時雨ふりいて、ひるはれたり、

夕日うつろふほさ、いみしくをかし、

かくて長月のつこもりにさへなりぬ、よなか

の長なんと、伴ひてまてきたり、下司讃岐、

司馬なさいへるも、ふらひきたり、三日と

いふに、宮の原の巫さもとあまてまてきぬ、

北里なにからは、この庄のこささたけるな

らし、おなしくさふらひまてきたりけり、さ

てさふらふほさに、そらのけしきもくもりか

ちに、風の音も物すこく、朝夕霜もさえまさ

りておほえけれは、かへりなんさするに、も

神無月朔日のころにや、此里の長さやらんまる

てきたりぬ、これはさえありて、文なんごこ

のみけるとかきょし、下さまのものにはやさ

しくこそ、筑後久留米といふの守につかふ見もはて~立ち帰りなはるみち葉の吾をや仇に思ひなさまし

まつれる竹中ろさはかりうちしくれけるにや、峰の棺のな

て、おの川の遊になみゐて、春はかなら

すなさ申けれは、

り、その夜かへりこです、山なれはにや、朝見せはやな峰にも尾にも唐錦おりたかへたる秋の紅葉を

ふ六日といふ夕暮に、ふみなこもてきたりけ

に、

此國にはまれなることになむ、宿をいて~け

此わたりのもみちのことなさかきけるついて

つ〜みておこせたりけれは、申つかはしける、

かねて頭のこさたしぬれはにや、まてき

さて、まてきたりけるに、そうな子の紅葉を

ればにや

きて、物かたりなす、宮原の凪つかさは、

けふの暮れつかた、すさとものうちかはりに

あしのけなれはみす、むろ原のなにかえは、

此わたりのこさわきまふるなら、ふらひ昨日より今日は色そふ紅葉のあすの棺をいかにとか見む

は、

そひてもみちの色ふかくみえけれ

別常の坊て、時雨をおろすべき雲のけしきも見えね、

さすかに相さもの色付きてけれは、

すをうなも、めでたくうたよみ、文かくこさ

の霧いふかし、日はうらかにてりまさり

五四〇

をはしけり、今はかることのきこえぬは、い

かにそや、世くたりては、 ましくも口をし

くもあるや、家のひむかしにあたりて堂あり、此頃の朝夕露やそめつらむ色みえる峰のもみち葉

雲泉瑠理堂さいふ額かけたり、さし入りて見

、よへは此所にとまりて、 けふは

いとままうすさてまかてぬ、歌のやうなるこ

さえけれさえかす、この夕くれ、橋より

しもに行きて見るに、魚なんとのところえか

ほに、多く水のうへにうかひいて~、あそふ

もをかし、あみしてんさいふこそいたくにく

けれ、日にるに、うたなにあまたかきつけたるも、め

ざまるはなし、此道は、いつくにもたえせぬ

ここはおほえける、夕さりつかた、川のほ

さり見めくて、うちはこのうへなこあり

くに、水の上下見わたされて、 いさおもし

ろくや、なほおもしろき所々あれさ、れいの

たりけり、

けり、満願寺別當の坊も、まてきて物語

す、これはうちさいふことをおこなへるにや、故鄉の庭のもみちよ
うつろはて我かるさをまてとつけなむ

五三九

夜ふかければねぬ、

れて、いさ興あるに、有明の月さへさし出て

たり、

むすばや、

つとめて、きのふのすさほゆ、からうして萩原やおらたにそこにう
ちおささされぬへくのみお 山河の岩にせかる 波の音を二たひ草の枕
にそきく

さもまかりかへるに、

文なさかいやりつ、例のたかさのに登りてう

ち見るに、また神無月ならねばにや、かねて

移ふ棺もみえす、 つまさふさをしかの聲もき

こえす、た~山河のなるのみかまひすしくて、

けにつきみにもまさりておほゆ、しら糸の瀧

は、やかて見わたさる~程なれは、

さかやいふ人里にたさ

りつきて、こえゆかむ道のほこたつねけれは

なほみねたかく谷めくれり、夕やみはいか

か過きさせ給ふへき、みちひき奉らんこて、

ひざりふたり松さりて出てけるにこそ、いき

たるこちばしてけれ、紫の露のゆかりにも

あらぬ賤のをの心はへも、いさやさし、いた

りぬへき里ちかくなりければ、むかへにさ、

松明あま穴からけ出てけるに、おのよろ

こひふことふたつなし、星のこさくてらし

て、初夜過る程にまかりつきぬ、まつけふ此理に旅彩のかきりめてよさや匂ひそむらむ白菊の花

のつかれやめてん、ゆあみんさて行きてみれ

は、かひくしくたか殿なんとまてつくりい

てと、岩きりこほし行水も、目の下に見おろさ

有明の月の光は石はしる瀬々の白玉かすも見よさか

山路のあやうかりつるなんとかたりいて~、

またこむ秋そのかみに結で置きてし白糸の瀧

宿の前栽に菊うゑ置きたるか、やうく咲出

つるほこなれは家あるしは、久留米さやらんに行きてなし、

太郎子のありけるか、あきらかなる日ことに

あみしてえさせつ、ちかきあたりのをのこさ

もたけなにさやうのものもてまうてきぬ、

物なとかつけつ、湯あみぬをり!)は、つれ

つれなるま~に、ふるきなさひきひろけて

見るに、いこ優にをかきことのみそおほか

る、むかしはかくしろめ、ひかきなさいふ下

きかたなくあはれなり、眞柴を一六山本にありたくらん策のけふり

村雨のなこり、夕くれの空のけしき、 いふへ

原ちかくなるま〜に、つまみのおさ笛のねな

かれいひなこうへけるに、よろこへるやう

にてあるししてけり、そこをも立ちて、宮の思ひやる心はかりや渡るらん峯のかけはし谷の川水

ふりいて~、みのなん

こもてさはくも、雨師みちを清め、風伯みさき

をおふにやさおほえてたふさし、はんたさや

らんいへる瀧の、くつれおつる雪かさみえた

るに、すささものなに山姫のさ、うちすした

るもをかし、つたなんさの岩ほのかたにか~

りたる、けにたちぬはぬ錦さやいふへからん、

なかれにしたかひてくたれは、山のすかた川

のけしき、こよなうをかし、おふせちにつか

るさなんいふめる、しかはあれど、年ころ難

波の海のあしのけにのみくるしみて、はりま

かたしかまのかちよりゆくこともかなはねは

くちをしくて

、

とまりぬ、やかて小雨五三八

深山路を獨り越ゅれはあしたつるわかためてや友をよふらむ

浪野の原、花みなおころへたり秋もはや末葉の露やさむからむみなからかると 野邊の百草

山々里々めなれたるこ~ちして、九重はそな

り、みつるねかひはかしこにやと、なかめつ

つ行くに、風清(日あきらかなり、合志何か

しかみやまの里よりかへるにあひて、しばし

かいかたふく、これは國のかみにつかうまつ

りて、あらゆるくすしををしへみちひくこさ

なん、うけたまはりけるにや、かねてなれぬ

れは、おなしうは諸友にさいひっとわかれ

ぬ、いちの原村の長さかやいふ家に立よりて

その聞えける、あやしう人にさひけれは、そ

こにまします 御神の御祭て、十日あまり

かりの屋にわたらせ給ひて、今なんかへり

まうてさせ給ふなるさまをす、行きあひ奉

らんもかしこけれは、しばし道のほとりにと

たくらん山

本のけふり、うしおへる賤の童のうたふ聲ま

て、もの心ほそし、そこよりはそはのかけち

いささかし、はしたなく暮れはて~、あやめ

もわかねは、そのこともまさひふためきて、

五三七

湯あむさて

やうくはれゆくま~に、 をちこちの峯、雲

まにあらはれて、浮遊はるかに田鶴の友よふ

脛もをかし、これは御神のめてさせ給へれは、

四の時わかすすみ侍るならし、あはれ、心あ

るかきりさもなひたらましかはなさ、おもふ

ここもおほかり

夏山のなほ深く分入る谷の川水に螢飛ひかふゆふ暮のそら

山の井の底なる影も暗からす幾代ますみの鏡なるらん 秋ふかき露分衣ほしやらて霧にしほる~岩のかけみち

はんたの瀧を見て

かやいふ山路分けのほるほど、霧いさふかし、

にイ

旅衣うへさえけら故郷へかへさの袖の急かれてさゆる嵐をわけつ~を行

錦此比は世にや出てけむ時鳥今そ高嶺の雲に啼くなる

數くてけふ此岸にこきかへりぬろ

道すから

春まては軒端になれ鶯や谷の古すに踊りきて啼く

わたの原浪の浮日鶴崎に着きて

鶯を聞きて

日數ふる浪のうきねん鹽なれぬ都をいてし暁の袖 我爲もしるしあらなん昔より名だる~里の出湯なりせは

秋の色もここにそ見ゆる時雨する磯への松に交るもみち葉

郭公なかさりければ

浦遠くこきはかへれさなほ残る船路の末の沖津白浪 此里はなほ山深郭公いかてなく音の聞えさるらん

海神の沖つ瀬にくれにけり浪の浮寢長月のそら

郭公の啼きけれは

白糸瀧又は琵琶さいふよしを聞きて

きて今こそかへれ故郷は山路しくれて紅葉散る比

秋風とともに立にし旅衣かへる袖にはうちしくれつ~ 百千筋たれくらためて四の緒に調合する白糸の流

し九重の山の高ねに雪ふりにけり

杖立の湯あみむとてまかりける道に宮原さい

ふ所にて鏡の井を見て

安永四させ、長月のはつかあまり、一日の

ころにやありけむ、北山のふもとなる湯あみ

にてさまかりぬ、朝さく立ちて、なかくらさ

木々の緑の岩根よりこうき落つる瀧の白浪

日暮れてたひのやさりにつくにまへなる谷川

に螢のさひかふをみて

雲の上も長開き秋の今宵と月もよに似ぬ光みすらん

位山のほりてみれはいこ~しく光ことなる望月の空 明石潟月の出しほの追風に光りをよするおきつ白浪

故郷も今宵の空を思ひ出てて千里も同じ月やみるらん 浦々の漁の光数をひぬのしわさもいさまなの世や

月もは秋の今宵の空とてや更行ま~に澄増さるらん時かぬ浪の上にも秋くれは色付きそむる沖津島山

岩清水神のみゆきを月にみていて~心や澄さるらん 都立出てもこれにてそしる浪の浮ねを

何にも眺めあかさぬ人はあらし空に雲なき望月の影日數ふる浪の浮ねに時雨きてなは鹽さけの片敷の袖

明の日雲出て舟をいたしぬ

さやけき

住なれし筑紫には似ぬ眺めかな雲井に近き望月の影 故郷へ急く舟路の追風を早ふかせなんわたつみの神

眺むれは難波の浦の夕凪に芦の葉分けていつる月影

難波江や朝みっ潮に浪こえて残るこもなき蘆のむら立

おな所に日数へしかは短策に書きて夕鹽に

海原になかける

亥のこの秋都にて望月を見てよめる

惟馨は男山の御祭をかみにそ行きたりける

咲き匂ふ野原の萩の錦着ていさ故郷に立歸へらなむ 夕暮は浪華の蘆のほのかなりたくもの煙あまの漁火

寛政二

またやみん難波の浦の秋の空月に行きか 千船百船

二十日鶴崎につく是よりは野路の萩原さかり

なるよしを聞きて

秋の空今宵ゆけは沖の島々波に消えて鹽瀬遙かにすめる月影

十六日雨ふりて空の氣色あして周防の岩

國さいふ湊の川内にこきよせてさ~まりぬ

河は錦川さいふにや

暮

にて

やみん千里の外も雲消えて都にすめる望月の影

五三六

夜もさまらすこよひも いさおもしろし

秋山の峰の紅葉のある比や錦の川の名には立つらむ

に似たる影なき都からにや月も澄むらむ

五十年餘なれし最中の月なれさ今宵斗りの影はなかりき

故郷の人に今宵の月影をいま見る斗りいか~語らむ

更けゆけは水の流も虫の音もさえ増さる望月の影

秋も又最中の空そさえ増さる月の光に霜やおくらむ

下りける時難波明らけき光りを花の都にてこよひそみつる望月の空

いつしかと待ち都の空晴れて秋の今宵の月五三五

八幡山思ひ乍らも登りえす足のけ斗り苦えきはなし

わたの原日影うつりて白銀の浪をそよする沖つ鹽風

おもしろ

かくておほき五のに立かへり又こそみつれ加茂河の流満く澄める月影 又やみん難波の海の秋の空浪の千里にすめる月かけ

十三夜今宵はいとくまなくさえたり

業のなきよそしる 押照や難波の浦に舟さめてうきねになる~浪の月影

十三日京につく

さよろしいつか舟出してんのみそ思ふ日

ここに河の面のみなかめくらして夜になれば

舟のうへにのほりて月のくまなきな見て心

やりにす

八日難波につくあしのいさしけりたる洗川移ろふ月の小夜風に浪のうきねも涼しかりけり

めくる

洗 川

此比はすべてにし風のみ吹きてのほりにはい

高砂の相生の松の木の間より昔なからの月そもふりにける昔をしらはかたらなんけふ相みつる高砂の松 天の川星の夜にわれもまた風待ちわたる浪の川橋

月のみや昔知らん高砂の松を再ひ生るさときく

このみそおもひ出つる

つめまつの葉なんさまてさりてあたへぬこ~風渡る難波の橋に舟さめて浪路涼しき月をこそみれ

ろさんのやさしさにつけてもいさ~むかしの

明の日も夕つかたはしのうへまてまかりいて

橋のほこりまてまかりて

よく見せつをま

六日いとあつけれは夕さりつかた舟にて難波

をてんして松の本にいたりて物語と松の岡まもり松花なこえさせみつ

を見て

今ち茂りあへるは難波江のあしかる加階太郎子もはじめ

て官階給りいからこまり悦ひて文月五日の

ころ舟にて難波まて下りぬ道のほと八幡に

てんと思ひたちぬれて例のやまひなれはえま

うてすなりぬることいと口をし

十四日朝より風出てたりとて舟をいたしてお

ふ淡路島のわたりおひ行くほと低いと心よく

日影清らかにてりわたりてこよなう暮れつかたはさぬきの海のあたりまで行きぬ

てみつ司いて~さま(

加階中に都にて思ひ立ちぬ卯月二十日あま

天明二

此岸に早こきよせよわたの原渡りおくれ波の友船

鶴崎に着きて是著に申ける

みか月の入江の浪に舟出してなほうら傳ふ有期の空

日数へて

今宵君いかなる浦にかちるらんと浪路隔で思ひこそやれ

津和の泊にて

諸友に同え湊は出てにしたいつの浪間に漕別れけむ

是著にこきわかれて

波分ていかなる磯に引きつらん室の泊の軒のあやめは

浪よする磯山松の風さえて雪にそまるむろの友船

おきつ島山

室にさまりて

五月四日室の泊につくあすは五日さにや家こ

こにあやめふきわたしたるわたつみにはひく

へきぬまもあらしこそおもふ

島々いさしろく見えければ

播磨潟雲の浪路の風さえて雪になりゆくあれて雪すこしふり出てけるに雲間より沖の

はりまのあたりこき行くころそらくもり風 沖津浪こき行く先かに守らせたまへわたつみの神

おもしろし

二十四日舟にのるけふは殊にはれわたり海の

けふこそは舟を並べてすまの浦や明石の迫門を酒渡つれ郭公なれも別れを慕ひてやこえ行〽峰に啼渡るらむ

淡路島

さ郭公啼きければ

是著に遺しける

五三四

而いさ難波にて入日遙に眺めつる淡路の島をけふそすくなる

海路にひさ日に門出す瀧室さいふ山路こえ行くほ

高砂は遠麗の物し給へる跡なれはみまほしく

てあらひ河に船よせてきて小船にのりてきし

につくそれよりらんよにのりてまつ尾上に詣

てぬよへの雨に高砂の川水ましてわたり一所

のみあり暮れなはわたりもこめぬへんさい

へはいさかふかみかねなんこみて心あ

はた～しければこよなう道をいそき高砂にい

たりぬれは日暮れぬまつ御社に詣うて相生の

松な見けるにふりぬるものとはみえすむか

しの松はわつかに残りて社司の家にありさい

へは其家にいたり五三三

津の國の難波につけて山城のとほにゃ君も思ひ出つらむ うきねする
すまの浦浪風さえて袖のこほりに宿る月影

人の許に申しつかはしける

須磨の浦にて月をみて

思ひ置難波のともさけぬればけふこそみつの恨たき世を

つかさくらたまはりて下りけるに難波にて

船なめていつとはすれさけふも亦元の渚に酒歸りぬる

立歸り又もたつねむ假寢せし軒端の松よ我を忘るな

かへりのみしける比おなし人に

旅宿の松に書きつく

舟すこし漕出つれて風あ~てあまたたひ

なれぬれは都も流石慕はれてけさは別れむ心ちこそせね諸友にこの浦船をこきいて~いつ故郷の空に向はむ

朝さく都をたつとて

東路の野への雪まをわけて又波の浮寝に袖やしほる、

八重垣の昔の跡を慕ふよりえてし硯や世々に傳へむ

またの日おなし人につかはしける

歌よめここひければ

思ひきやけふしも君をみつの浦難波のを語るとは

唐崎常陸介かもこめえたる八重垣のす~りに

あひて夜一夜物かたりなさして

はからさる網代さを見る

遙なる宮古の空を思ひやりて今宵の月を妹みるらめや

景隆か氷魚をおくりける籠にむすひつけ~る 難波潟数も限らずこきつれて出ている船のいまなの世や

井堰にもとまらさり兒大井川水 紅葉や誘ひはてけむ浪の音に打ち驚けはつのの難波の浦に浮寝して見

月あかりける夜故郷をおもひやりて

古里をみつともなくて難波なる芦の假寢の夢はさめにき

舟の出入りを見て

もみち葉の散果てぬれはこなせ川まかふ筋なき流の白糸 冬枯の難波の芦のよを寒み片敷きわふるみつの浦風

大井河

夜深く浪の音を聞きて

戸難瀬瀧

梶枕幾夜になりぬ難波潟おなし芦まの月をなかめて

もみち葉も今はおな所に風待ち嵐の山風の松にくる~音を淋しき

て日數舟にありける時

我方に多くのひとの寄りればこれをもうちのに橋があつまより帰りけるに

わくらはに君きまさすは浦浪のかえるや侘しからまし

山

はま

嵐 小浪やしかの浦風おきにのみ聞くよりこゆる辛崎の松 嘘の世の人は仮にも入れしや柴のほそをさして出けむ

鳩の海や小浪する浦風も松にそかよふ唐崎のきよし申ければ

辛崎にて

しかの浦波

涌法師か庵室をこちる花の折ならねこち漕船の跡と見古のさか野の宮は神さひて柴の坂ほをとぶ人もなし

なん舟の跡さ申けれは

これ

野々宮

山のいた~きよりのそみ見るに湖上に筋をひ 小倉山峰には秋もと~まらて麓の里につもるもみち葉

きたるやうにみえけるを人にさひけれはくるこて

麓にちりつみたるもみちをつ~みて故郷にお

珍らしく都の窓の初雪にまつふる里を思ひこそやれ 小倉山昔の跡を尋ぬれは松のあらしの音のみそする

志賀にまかりけるに山路にて

よそよりも分て時雨や染つらむ君か雲井の庭のもみち葉 水鳥の鴨の羽色のさまにうかへる影も大澤の池

神無月十日はかり東山に雪のふりけるをみて

小倉山

大澤池

御所のへをまかり過きけるに築地こしに紅山影の移ふ浪も澤の池のみきはにあさる牡鹿も

葉のみえければ

廣澤池

及ふへき雲井ならねば登りえぬ身をうしたにえこそ思はね

松のみや千代も双の岡ならむ秋の紅葉は枝に残らて

ける

双 岡

名こそてふなのみを残る昔た絶えて久しき流の流は小浪やしかの浦風さえぬ日もひらの高嶺に積る白雪

つかさのみ申ける比心のうちにおもひつ~

るはひらの高根と人の申ければ

名こその流

はるかに雪のいさしろく積りたる山のみえけ

今もえこそませ一夜松神の北野に生初めより

五三三

ふりしける巌の雪の花も見すまた多き志賀の山越

ゆれふらひけるに外に出てな

五三一

淺澤沼

北野社

住吉のきしかた遠く詠めやる浪幾重の路なるらむ あや杉の相も世々の霜をへて平野の宮は神さひに見

幾千世の松のしつ枝のおきつ浪かけて久しく住吉の神 清きみたらし川の秋のこゑ心もすめる賀茂のみ社

こしかたの舟路をなかめやりて

湊河生田のおくの秋風に今もなかなむさを鹿のこゑ 石はしる清瀧川の白浪も秋はもみちの色にいてぬる

住吉社に詣て~

賀茂社

湊河を過くて

高雄山谷の下行く清流のなみに移して峰のもみち葉

けふみれば生田の川は水もなしいかなる方に身をもなけぇむ

高雄山

生田川

立よりてけふこそ掬へ音羽川なに流れたる瀧の白糸

契りありてけふそ問ひける音にのみき~し生田の森の秋風

仕へこし我みのいつよりか神の園生に跡をたれけむ

生田杜にて

音羽瀧

更けてかくしはも晴る~月ならは明石の浦に旅ねせましを

祇園社に詣てけるに阿蘇宮のありければ

今はしもさやけかるらん明石潟浪の千里の望月の影 稲荷山けふこそみつの御社に祈るしるしの効もあらなん

れければ

稲荷社にて

高瀬さす淀のわたりの明ほのに同旅なる初雁の聲

ことも月のためうき村雲をはや吹き拂へすまの浦風

京へのほるに淀の渡りにて雁を聞きて

須磨浦にて

古の難波のこそこのはるたかつの宮の秋の夕暮

明石潟月の今宵の空晴れて浪のまたに光みせなむ

夕さり高津宮に詣て

かねてより明石の浦の月みんと思ふにたかる浮雲の空 あれにけり淺澤沼の杜若花咲くをりに尋ねてを見む

今宵しもすまの浦人あくかれてはれぬ波路に月々待つらむ

夜更けて兵庫の驛につきけるにそらすことは

わか待ちし故郷人の玉章をかけてやきつる天つかね

ついてに

人の題をこひけるに旅泊さいふ題を出しける

くもりければ

わたつみの底中表の恵もてはやちふかなむ浪の追風

十五夜明石浦を過きけるに今朝より雨ふりて

立おほふ雲の浪路の末晴れていつか都の空に向はむ 明石潟濱へに立ちて浪の上のみるめに近き淡路島山

便りある風待つ程に日数へて浮寝になる浦の友船

淡路島を見やりて

小夜中に思ふも苦し梶枕いつともわかぬ浪の浮寝をさやかなるいなみの海の秋の月あすは明石の浦に眺めむ

夜深く目をさまして

海つらの月くまなくすみわたりてみえければ

おな所に日數をこめて

湊吹く沖のなころも静かにて泊りにか~る室の友船

あと垂れ誓ひたかはて行末の舟路を守れ住吉の神

室泊にて

蔭高き松の緑も年ふり沿いつよりこ~に住吉の神 大島の灘のかけちの追風に都に急くかひもありけり

深江の住吉社に詣て~

古にその~えくちし濱へには白浪のうつとこそみれ

古の名のみ止めて鞆の浦の浪にゃくちし磯のむろの木

十六夜の月の光もみつ潮にさしてそいつる秋の浦舟

侍りて

今はなきよしまをしければ

て

都へのほりける時文月十六夜月のあかりけ 梶枕うきねをせすは鞆の浦の浪に移ふ月を見ましや

安永二

鞆浦にて月を見て

旅衣たちいてし袖も鹽なれぬ浪の浮寢に日数重ねて

るに舟にのるとむろの木のことをたつねに其所のみ佐賀關の白濱黑濱なと見めくりて

大島灘さいふ所を避けるに追風吹出てぬ舟

子どもの申ければ

も又浮ね津守の沖なれや浪にたゆたよ浦のさも友

八月十四夜播磨國印南野さいふ所を避けるに

折しもあれ綾なく月の曇りぬる明石の浦の秋の今宵に

荒磯の松ふく風浪の音うきねの床にき~そわひぬる類なく浮雲おほふ秋の空あかしの浦の月の名もをし

千代までの齢はたつに契りおく獪行末は神をしるらむ

宿近くむれるたつの諸によばふゃ千代のためしなるらむ

さらに双千年をかけて契るらし長く久しき宿の友鶴

寄祝

聲たえす萬代をしらふらし八十なれぬる宿の松風

鶴契齢 賀茂縣主保覺八十賀

行末を君に契りて松の葉のつきせすみゆる千代の数かも

寄松祝 西依成齋八十賀

古をためこまれなる齢にて狩行末の千代をはるけき

政輝七十賀に松遐年友

くれは緑添ひゆく松が枝の千代は心に任せたらなむ

高砂の松の千年も近から人の齢にかけをならへて

年ふれと色もかはらぬ呉竹や末のよ長きためになるらむ

人の七十賀に政輝

かねてより祈りおきては幾千代も心にかなふ齢なるらん

萬代の春の初にかくしつ~楽しきの数やつま

移植ゑて六十年はなれぬ宿の松幾千代の友と見るらん

我友と契れる松の枝ここにこもる千年の末を久き

七十の賀に凧の心を

六十賀に松延齢友

天の下道ある御代の初て恵みにもる~民草そなき

人毎に光をみかく玉鉾の道のさかえは世々に盡せし

今もえこそませ神代よりうけて傳ふる芦原の國

寄道佩..

旭峰か身まかりけると聞きて

白のおいせぬ色に契りてはうしろやすくも千代はへぬくし

人の五十の賀に消千年さいふ心を

思ひきや逢見し事も人の世も昔語りにならん物とは おひそめし松の二葉の若緑千代榮ゆへき春はきに見

世々をへし契のみかは君をさへ昔になして慕ふはかなさ

太郎子を得てそのさしのはじめによめる

いかはかりしれて君戀る泪の川に千鳥なくらん 露にぬれ時雨にぬれし椎柴の袖もはしあへす年そ暮ぬる

舊 戀

をむなしくし給ふそのさしのれによめる

かはりゆく飛鳥の川に鳴千鳥定めなき世ばなれる悲しき

秋のほとに兄身まかりて冬には國守朝臣

悲しき

なき人の俤そへてみる 夜はなほ明け易き月も恨みし

浦秋夕

みぬ世さ忍習ひの立花夏月

諸共にをしみし夏のよはの月おくれて濁りみるそいにしへにかはらぬ宿の櫻花諸共に見と春そこひしき

夏懷舊

山早春

五うち

十年餘馴こし事は昨日にてけふは昔の人と成ぬる

假初に思ひ立ちにし旅衣つひの門出となるそ悲しき

古ささに待ちし都の一言もきかて別れし人を悲しき

春懷舊

五二元

月日へは忘らるべきを中々に歎こりっむ身となりぬる

目に近く見る代なりせは年幕て春のくるをも急れやせむ

戌五月母君にお ける比人々するめて五十首

歌よみける常ならぬ世の憂き事を炊くまには山へに踊り來に見

春のくる山の霞を見ても君を忘る~時のまそなき

に獪忘られぬ袖の香そする

今 五月の雨のふることは只めの前にある心地して

思ひ出て音をのみそなく空蟬のはかなく見つる夢の昔を

忌日のれかたに

名残なくけふしも暮れぬあすよりは何につけてか君を偲はむ

思往事

常ならぬ歎きをすまの浦さひてなほ袖濡らす秋の夕暮

さらぬたにもの悲しきを昔のみ忍ふの浦の秋の夕暮 いつしかも三年に成ぬはかなくて別し事は昨日と思ふに

河千鳥

五二七

岩清水満き流は君か代を千世さやかねて結ひ置くらし

色かへぬそのかみ山の玉椿八千世は君か御代に栄えむ

君が代の千年をかねて祈りおく我神垣もさそ守るらし

瑞垣の久しきみ世をとことばにさすや三笠の山のもみち葉

明らけきみ代をみ室の十寸鏡君か千年は塵も曇らし

都にありける時蘆庵動かりさふらひけるにそ

の折しも歌の會にて歌よみてよさ申ければ落

盡閉花不見人といへる題を得てよめる

撫子の花ちりしより露のみのおき所なく物を悲しき

社頭祝世

五十鈴川流絕えせぬ御代なれば萬代までにすまんさぞ思ふ

淑子身まかりける時

東路や關こえはて~東雲の霞をわたるせたの長はし

やまさ言葉の玉の数々は世に類なき光を見る

おほく書付

て見せければ申遣しける

鈴鹿山開越えて~いせの海を今ふみ渡るあの板橋

東路の勿来の關も立かへり又やふみ~む松島のはし

にして

過關到橋

出てそむるのは文の道明らけきこひければ

はかなくも見しょの夢はり見辛さ斗りは元の身かたりを

正之崎毛の歌を今更に忍ふへしは思ひきや一夜の夢の昔代のためしそ知る

己かすむ水も緑のの上の大和島根は代々に動かし

君にやりおくらむ縦なる玉のみきりの龜の齢は

惟馨物學ひにて熊本にありしほさそのよめ

る詩歌また順槁なさ唱和せしなどやま城の木幡の開けふ越えて駒打渡す宇治の川橋

幾年かふるさ鈴鹿の丸木橋關路の末に渡り來ぬらむ

關こえてける打渡す鈴鹿河なかれふりぬるきりの丸橋からはかなくて四年の程の春秋をみとは假寢の夢にそありける

胸にみち心に餘る悲しさは思ひやれても行方もなし

朝夕に帰るを待ちし緑子の今は眠りの門出さそきく

手の中の玉とめてにし緑子を野へにすてけるけふの悲しさ

いつくしみおほし立つる人なくて昨日にかはる宿そ悲しき

撫子の露のはかなく消えしより起居につけて音をのみそ鳴く

今も夢かさのみそ思ほゆる別れし事も現ならねは

我か深く慕ふ心の通ひてや青々ことに夢に見ゆらむ

忘れむと思へはいこ~忘られて残る変身にそはる俤

踏分て更に訪ひ来る人もなし花は雪とそふる郷の庭 春霞立わかれにし袖にまたかさねてしほる夏の朝露

くるしくもふりくる雨かともしするほくしの松もつきぬ此夜に 結はてもあらまえ物を思草假寝の夢の一夜はかりは

ますら男かさもしやわふる夏山の木下の暗き雪の村雨 かく斗りよさみし物を思川などか一夜は渡りそめけむ

五月山燈すほくしの影消えて雨に成る夜を苦しき 結ひつる一夜の夢の跡絶えて空しき床に秋風をふく

つらしさやさつをの袖も絞るらん村雨きく峰の照射はうつとも夢も誰か定めまし一夜の儘の仇のは

なきをし鴨は氷の床に音をやなくらん

蘆ねはふ下の氷にこちられて鳴音も寒し池のをし鴨

蘆鵬の浮寝の床のいかならん氷さちたるこやの池水

池水も氷にさゆる冬の夜はをしの浮ねを思ひこそやれ

終夜うさねの鳥のすなり下の氷やさえまさるらん

漁りする入江の浪もこほる夜はいかに侘てやしのなくらん

をし鴨の玉藻の床の薄氷とけてねぬよの聲そ寒けき

蘆のよるなく壁を聞ゆさこそ氷の床のうからめ

初遇後不逢

にのみちらせる風の梅か香を結ひこめたる青柳の糸

花ならぬ柳の糸も春風の誘ふにつけて梅香をする

枝かはす柳の糸の打はへて風のまに匂ふ梅か香

梅か香の匂ふ方にや打はへて焼き初めけん青柳の糸

道のへの梅の春風おくらすは柳の糸は薫らさらまし

枝かはす軒端の梅の匂ひもて風やよりけむ青柳の糸

梅の花にほひを送る春風にみたれて靡く青柳のいさ

風渡る軒端の梅の花かつらかけて柳の糸そにほへる

照射厭雨

夜を寒み立空も千度うつ賤か砧になく虫のよはりゆく淺茅生の宿

まほにその間ゆる蟋蟀うちも撓まぬ夜半の砧に

虫の音も稀なる宿に誰秋の夜寒のうちしきるらむ

野へはいまむしの音よはる秋風に暁かけて衣持つ也

うちしきるよはの砧に撓むなり秋も末野の虫の聲

氷上水鳥

柳

難波かた入江になひく玉柳梅の匂ひを風をかける

人のもとより七首題をおこしてこれよみて紛れ

こありけれはすなはちよめる四十四首

梅香移脚や又契りおきけむ代々かけて途にもみらぬのを

寄松祝

擣衣自虫繁

みる儘にいや遠さかるわたの原酒行く船の跡の白浪

五二六

五二五

早 苗

海眺望

こにも待とはしらて時鳥忍びなれてや音を惜むらん あけはまた同し湊による舟も八十島隠れこきや別れむ

朝霞たちゆく雁や白雪のふりにし里に春をつくらむ 契りたに變らさりせはあま衣まとほなりともなほや頼む

待時

旅泊

そことなく霞めるよはそ思ひ出つる春や昔の袖の月影 末つひの逢瀬もしらて名取川うきにそ沈む浪の埋れ木

歸雁

寄衣戀

春 月

稀にけふ越えけるものを逢坂の別れをとむる關守るかな

五首

寄木戀

暦の六させ太宰府天満宮奉納百首のうち十

寄關戀

うかりける夕つけ鳥の別れより曉毎に音をのみそ鳴とはれにし跡へみえてふる程も循淺茅生の底の白雪

寄鳥戀

淺雪

分來つる錦の野への真萩原色なる露に月そうつらふ 萌え出てはつかにみえし俤の今はた残る霜の下草

露繁き末野の眞葛わけ侘ひぬいつくなるらむ松虫の聲天っ空めくる月日も限りあれはとまらぬ物と秋々行くらん

野徑月

振すて~誰かは越えむ鈴鹿山春の關もる花のした影もみち葉のちりそふ儘に山川の浪のかけぬ日そなき

尋虫聲

九月盡

けさ見れば烟そ末そ霞みゆくあその御嶽に春や立つらん 何故と思ひもわからぬ夕くれの袂にむすふ秋の白露

闕 花

川紅葉

初春

かきくらし雨はふりき菅原やふしみの小田に早苗さる他

秋夕

大御宮奉納五十首のうち五首

山家

山影や岩もる清水松の風浮世の外にすましてそきく

すへらきの西の御幸に二柱あらはれ出てしあその大神

阿蘇北宮

見るかうちに浦波遠く漕出て行衛もしらぬ蜑の釣舟

閑 居

のたく畑の末もほのこ浪間に霞む鹽かまの浦

阿蘇宮

所浦

小鹽山 御幸や遠くなりぬらむ神さひに眺望

名所松

々の野への草木も聲たてつ峰吹きおろす夜半の嵐に

慰めて月をそみつの泊り舟波のよるかはる浮ねも

風

旅泊

一筋にたえぬもくるし片糸の此方かなたに移る心は古郷は遙けき旅の宿にして月見る夜をあかしかねぬる

交通跡にたえて濱千鳥などこの風になくらん 沖つ浪たゆたふ舟の梶枕いく浦風にあかしきぬらむ

寄糸戀

羈中月

戀

旅

思ひわひ消えなむ後のたにせめてつれなき人に見せはや

寄烟戀

山深み誰にさはる~しるしとて跡なき門に杉たてるらむ

色かはる心の秋の村雨は袖にのみこそふり山家杉

世を厭ふ住家は山の淺けれ心ばかりは深く入りぬる

寄雨戀

五二四

まさりけれ

寄川このまは同と野原に宿りしをすても月の山に入るらん

せきもあへす袖にそ落つる涙川だきつ心をみなかみにして 野路の露浦の浪にしほりきぬかはる旅寢のよな!)の袖

寄烏戀

海 旅

海夕日さす沖つ小島もあらはれて雲の旗手にかへる釣舟

浦 船

けり峰のまつ原

名朝もよし北の宮居の春霞たてるやいつら二本のすき

五二三

我袖も遂に色にや出てなまし忍ひはつへき涙ならねは 嵐吹く空の浮雲消えやらていつまでか~々物思ふらん

歎顯戀

寄雲戀

これもみの憂に流れぬ涙川なき名すかむ方をしらねは

見せはゃな霜夜の床のさむしろにひざり片敷く袖の氷を

歎無名戀

冬戀

言のはも思ふ斗りは盡さぬを淺しさや見む水茎の跡 思ひわひ袖やすからぬ夕暮をいかにせよさか秋風の吹

怪きは我からとのみ音をそなく憂身の外に誰を恨みむ 今はまたあひみむことも夏衣薄き心に人ならひけり

通書戀

秋 戀

夏戀

いかなれは我身によらぬ浦浪の音のみきち袖ぬらすらん

戀つ~もまた見と風の音にのみ開くより外の慰めもなし 霞立つ淺野の雅子 今は又音にのみ鳴くとしらせてしかな

耻身戀

戀

かひなしやの藻汐火とりつみて我のみ下にくゆる姻は

思ひつ~古ゃにおふる忍草露かりこも人にしふるな

恨 絕

忍 戀

片 思

けふよりは思入る野の花薄亂れそめぬさしらせてし哉 今は只忘れむと思ふことをたに我心にも任せさりけり

難忘戀

初 戀

思ひわひきえはきえて露の身の何中々につれなかるらん

打出てむ春や待つらむ年暮れて氷につる谷の下水

切戀

歳暮澗水

つ～めこも我袖よりや落ちにけむ歸るあしたの道芝の露

浦浪の立ちも止らて行年の月日をいかすまの關守

題しらす

末つひに忍ひはつへき思ひかは見せはや人に袖の雫を

聞 逢ふことも今は浪間の海士小舟うらみとよりやこきはなれけむ

春 戀

關歳暮

沖つ浪干潟に月の影おちて千鳥なくなり明かたの空 宿毎にその営みやかはるらむくるは同し月日なれとも

家歳暮

現とも夢ともわかて徒に五十あまりの年そくれぬる

時雨つる軒はの山は雲はれて嵐に残るふゆのよの月ふる年の日數も雪も積りきてけふや別れの夕暮の空

瀉千鳥

山家冬月

歳 暮

夜を寒みねさめて見れは片敷の袖までこほる有明の月

寒月

片そきの冬神祇

山高みおつるこの葉の数見嵐にさゆる冬のよの月

まかひこし霜るまここに置いて狩影さゆる冬の夜の月 降積るあすは山路も絶えぬくしさゆ共越えむけふの白雪

雪中冬 月

旅行

待人のけふしもはようをふる雪に昔の跡を語らん

湊江の芦のよな!霜さえて枯葉による風の淋しさ 音さえし嵐も絶えて人をまつ心のま~に積るしら雪

依雪待人

枯野

埋もれぬ畑を里のしるへにて雪のそこなる遠の山もこ

遠村雪

散積る峰のこのはの霜の上に朝行く鹿の跡を残れる

清見潟明くる波間に見渡せは雪の下なるみほの松原

山里にまかりける時

海邊雪

初瀬山のへの嵐空はれて霜にさえ行く暁のかね

霜

すみ上る月のためさや拂ひけむ一葉残さぬ木枯の風 秋篠や外山の嵐さえくれて生駒のだけに雪を積れる

五二 二

冬山風の音もうかり秋の末よりや霜枯はつる野への多草

江寒芦

朝日さすかた枝は先にとけて空よりおつる松の白雪

なかむれは衣手寒し久方の月の光りに霜やおくらむ

暁行合の霜もよくをへて神にまさる住吉の松

神垣やみむろの山の榊葉に幾代かけきぬ雪の白ゆふ

落葉月明

五二 1

枯行くもそむるも同秋の霜いかて草木に結ひわくらん

滋賀の浦の浪に散かふもみち葉や長良の山の嵐なるらん

落葉

風にきにも秋は袖ぬらし見

秋視聴

神無月しくれぬよばも山風に誘れてふる木々のもみち葉

落葉

草枕かりねの野へののみか月秋旅

木の葉ちる深山の里の明方は時雨ならても袖ぬらし皀

おちかイ

峰越ゆる夕はわきて身にそしむ秋の色に風も吹くらん

しらす

冬の來ししるしをみわの神さひて時雨ちりぬる杉の村立

題山中秋興

ひきすてて残る奥ての只管にとくる小田の庵を淋しさ

名所時雨

秋深み木の葉みたれて吹風にのかきに鹿鳴きて紅葉かつちる秋の山里

秋 山

閨寒き板間の月はもりかへて風に時雨る~村雲の空

田家時雨

なき露のひかてそむらん

秋里

風前時雨

もみち葉を秋の錦とみる迄に色時雨告多

紅葉如錦

定めなき空とはいくと今朝よりは冬をつけくる初時雨哉

故郷に残る一木のもみち葉やまた秋はて色をみすらん

冬

故郷紅葉

おのつから流れてきまるもみち葉を誘ひなはて山川の水様々になかめ馴れにし峰の雲麓の野へも秋を暮ぬる

山家暮秋

紅葉浮水

鹿の音たかき夕暮の山

移りゆくこのはなからにさを鹿の聲吹きおろす峰の秋風

行路秋

~雲に眺むる秋山の尾上の月にさをしかの聲

秋

木末にて染あかすこや散積るこの葉の上にくるらん

曉落葉

夜湖上松の風の水のおさまても月にすみゆくあきの山里 葛城やまなくしくれて行雲のよそまてそむる秋のもみち葉

紅葉所々

見る

遁れ住む心にかなふ友もなし暫しな明けそ山のはの月 下葉には露も時雨ももりかねて梢を深き色は見せける

山家月

深淺

移ろはぬ秋をかさねて君かへむ千年も匂へ宿の白菊

浦舟

閑居月

菊花久芳

賤の女が麻の小衣うちつけに身にしむ風の夜寒をそしる

鏡山ちりも曇らぬ月影にこほりをわたるしかの白露の玉江の蘆のよ~かけて浪にみかける秋の月影

湖上月明

諸共に山を出て~やさを鹿裾野の原の月に鳴くらむ

て松風きよくすめる月影

江上月

前

淋しさもたれにつけまし牡鹿鳴(野原の庵の夕暮の空

遠くすめる月影

高砂のをのへの月の影さえてつもらぬ雪を拂ふ松風

野亭鹿

沖つ風雲井をかけて吹上のうらなみ海邊月

苅穂吹く稲葉の風に霧はれて伏見の田井にすめる月影

泉川川音すみて更くる夜に遠き月前松風

月影

河

月

田家ふみ分る庭の通路月影の雪にはあとも残らさりけり 高砂の尾上の嵐音更けて松の木のまに月かたふく

いかなれは傾く儘にさえぬらん同し空松間月

駒とめて水か影もわかぬまてひの隈川は霧こめて見曇りなき都の秋の空よりや月の光も四方にみつらむ

花洛月

河霧

五二〇

なる夜半のわたりの月さやけき

播磨潟いを打浪の音をひ月紅葉山深き松の嵐にすみまさる月を此世のものさやは五一九

夏夜

蓮霧の夕や秋の色ならむ眺むるからにものを悲しき

山陰楢の廣葉に風こえて夏なきさしさ蝉や鳴くらむ

秋夕

樹上蟬

朝なく露置きそひて花薄うゑぬに茂るふる里の庭

玉篠のしけれる岸の下水もさやかに見せて螢飛かふ

うき秋の思をのへに鳴く虫の千種の露に聲を蹴る～

故郷薄

一

樹陰夏月

裏枯人やまつ虫秋更けてあたの大野の露に鳴く也

いさはやも荻の上葉に音すなり露に先たつ秋の初風

末遠く空

早 苗

露底

早 秋

ほしわひて幾日かへぬる人の袖の浦の五月雨の五月雨

秋

有明の月影なから薫りきてまやのひまもる風のたち花

破するみわの川風涼しきや夏水無月のしるしなるらん

曉更橘

六月祓

里わかぬ月の光に郭公こゑのかきりやなき渡るらむ 破するしか唐崎のまつ陰にさ浪よする風を涼しき

郭公待につれなき忍び音をたかめし野の月に鳴らむ 分過くる神は夏野の朝露に思ひもかけ萩か花すり

郭公逼

志賀辛崎夏

時鳥はやもなかなむ夏の夜は只一聲に明けもこそすれ 松の嵐岩もる水にすみなれて夏をよそなる山の下陰

野郭公

草花先秋

穹のまはもらしやかぬる月影のふけて待ち見む山郭公出るかさ見明ぬる山のはの月程なき夜ををしむらん

夜郭公

夏山家

靡くも涼しうゑたて~秋まつ小田の水の若苗

夏深きこの下風に落ちてひまちる月の影を涼しき

見にまかりて

虫聲非しらせむ時鳥待つにねぬよの積る恨を

いかにして空に待郭公

毎山有春

庭前落花

郭 公

鐘の音にけふもくれぬさなかむれは花に霞める峰の古寺 ちり残る花や匂ふと夏山の青葉隠れの風そまたる~

首夏風

神かきや朝きよめする祝子の袖まで匂ふ花の春かせ 残る花の香あらばぬきかふるけふの袖にもうつれとそ思ふ

古寺花

櫻花咲初めしより高間山あらにかをる雲そか~れる

社頭花

夏

名所花

よしの川櫻なかれてゆく水のさまらぬ春はちなし

青柳の糸も解けき胃の雨に心花

池水の汀の櫻ちらぬまは花のか~みも曇らさりけり

暮春雨

暮山花

山のはの月待出つる春 夜

しかの浦や春に帰りて吹風にしらゆふ花浪霞める

たつ遠山櫻咲きぬらしあらしにはれぬみねの白雲

遙望山花

水郷春望

春もまた棺の花にうつもれて雪を姿のみよしの~山

咲花の光をそへて行水に千年もめくれけふのさかつき

花滿山

曲水宴

山里の花の主に身をなして幾春風をいさひきぬらむ

五一八

かけ近く宿りはしめむ眺めきて暮らせる山の花を主に

山の名は嵐の音も埋れて花にかすめるゆふくれの山

池上折しもあれ梅か香誘ふ軒の春風

峯高みちりもやすらむ櫻花見ぬ色匂ふ夜のはる風

ほそや春のゆくらむ

留春不駐

よしさらは庭に散敷 櫻花風のつらさも忘るはかりに

月ならてまたるものは郭込みやまを出つる暁の聲

なべてよに霞まぬ山の奧ちな恵あまねき春の光に

立ならふ花の枝ここに移り來て羽風薫る鶯の聲

呉竹のはやまの陰にすみなれて明くる朝けの鶯の整

花間鶯

天地の恵あまねき春をえもけふ摘みそむる若菜にそしる

たかしめし野へとるいはす淡緑霞む方にや若菜つまちし

朝 鶯

千代をくむ君か爲とそ移植うるけふの子の松の二葉は

若菜

春來れはまつ喉梅の匂ひより人の心を花になりゆく

子 日

いさはやも春立ち初むる谷風に雪の下水聲あはすなり

春生人意中

淡緑霞む方より吹初めて春たつけふの風を長閑けき

立春水

神代より天の岩戸を出る日の今も曇らぬ春は來に売

山かつら霞をかけて新玉の春に明ゆく空そのさけき

けふといへは霞む雲井の都より諸越かけて春や立つらむ

立春風

立

二葉集抄上

五一七

うきことの聞山の奥もなほ花に物思ふ春風をふく

花

険匂ふ花の盛りは思ひ出つる心やゆきて人誘ふらむ

見花述懷

さきぬやと思ふ心の幾度か花のあたりに行通ふらむ

見花戀友

見ても赤みまくほしきは櫻花日毎にあか出色やそふらむ

思 花

鐘の音は霞のよそに急けても狩くれやらぬ花の下風

逐日看花

夜の朧月夜の名残とやあけても花の色をかすめる

夕花

世は春に霞める山の櫻花いつまて人につれなかるらむ

朝 花

一かたに靡きもやらす相吹く風にまかする青柳の糸

さほ姫のかさしの露の玉柳亂る糸を風やよるらむ

待 花

ぬきさめし柳の糸の白露をちらぬ程の春風を吹く

柳糸隨風

風來楊柳邊

この歌まきは父君典の家集なりそを二葉集といふ

ここは君の名つけおき給へるなり父君は祖

母君のうみまし~まな子にはあらさりけれともみつ

からなしょにもまさりて祖母君の愛子になむましけ

るかくて父君歌よみそめ給ひし比より母君歌を

ものしおき給ひてよみ出て給ふこさにみつからひさ

つひとつかきしるし給ひその巻の名を二葉集とそつ

け給へりけるされはそのおきてのまに今四季戀

雑たかひをわかちて書つけて母君のもの給

ひま〜に名つけぬ

惟

二葉集序

五一六

玉山先生遺稿補遺

、

視之蔑如、當之無難、寛而不肆、栗而不局、師友無

益、姻親無簿、居喪六年、守忌終身、古禮久廢、世

無數人、居困而安、視窮而施、遭逢有幸、外內無私、

嗚呼先生、生此大藩、逢此賢君、藩固崇儒、君亦好

文、入侍問燕、出遊諸侯、從此俊髦、逼彼名流、清

鏡無底、水月似我、比之孰敗、居之自可、揮違婦人、措

筆息絕、國喪遺老、世乏英傑、本無城府、側容黃、

莫望不哭、莫聞不傷、不有敢隱不有敢增、後世史氏、

此石斯徵、

文字疑文字記

必、名立功從、功立名浴、鳴呼先生、登嶽報祥、

蘊着神、詩己盛唐、又亦先秦、百餘年來、豪俊如于五一 五

校

古 城 貞 吉

齊來、而附之生、生既敬事先生、

猶遇父事、且也然諾固有季布之風、於

是乎遂上諸梓、而公之于世焉、蓋雖有

隋珠和璧、苟無其人、則豈可耀之後世、

傳之不朽乎、鳴呼北圃生可謂其人也、

有寶有人、是不可不跋、安永三年甲午

夏四月、肥藩埜吉書龍口邸舍中

玉山先生遺稿十一卷、其孤子順兄弟、

輯散錄遺、窮日之力、考訂以成、而上諸

梓也、紀世馨爲之序、已既具于其中、

今且不贅矣、先生嘗遊於江都也、與南

紀北圃生親善、常時來往、開口謦歡、

予亦攘臂其間焉、先生沒後、子順兄弟、

以遺稿示予、託北圃生圖上諸梓也、予

深、功在所期、名非所

之年、

自銘其心、少長不改、造詣固逸生

敬如世子受業之禮、無何進秩爲侍讀、與俱適江都、

又命屢造子城南莊俄公即世、公子代立、使先生作誌

銘、除喪例當更名、先生又承命擬進、先生以舊恩故

進言莫有所避、公察其忠誠、待遇有加、居則在側、 嗚呼先生、志之斯立行之斯逐、斯繹其概、斯實有使豈

出則入講書于、大夫人、君夫人之宮、比歸國大夫人 無阿魯、祥由富嶽、聲加薄海、實存建學、自信其祥、

曰

肥後故侍讀時習舘提學秋山先生墓碑

進班比銃卒長、親書詩與之、先生豁達不修邊幅、然

先生諱儀、字子羽、其先備前牛人、中來豐後、居 中實小心以爲猥應優禮、念所以爲報國、在職無可為

鶴崎、爲鶴崎人、姓本村上、至曾祖考、冒中山姓、 者、建議興學校、薦俊選十餘人爲司業、公乃立先生

爲肥工正、祖考重勝、考諱定勝、毕襲其職、不調、考「爲提學、學成、講孝經、親帥卿大夫士聽焉、轉一階

取篠田氏、生三子、以弟號需庵者、後于秋山氏、業┤從上士秩、先生自始從靈雲公東、凡十餘行、所過莫

醫受俸、無子、出仲子爲之嗣、仲子先生也、先生於不希知名、 得其詩 其書爲榮焉、 被酒輒 日我不踐舊

是爲秋山氏、學方、邃博涉群書、晝夜不離儿、邑老生一轍者、其得之也以沉思也、蓋人知詩之蓋當世、而不

梅園叟、府文學屏山翁、偶見其發春秋微旨、歎日將 知行之高一時、豈亦不免爲才所使耶、寶曆十三年、

來不可測也、善詩精書法、凡百技藝一見悟其妙、莫|公朝江都、見老且衰、留視學政、駕發、構一樓于所

不出人意表、是時 肥靈雲公老嚮文學、換資爲生員、 居後、臨流負林、獨坐其上、吹笛以自娛、其冬十二

更養他子敢愍、以先生適江都、至則使就林氏塾、從是「月十一日、歳六十六卒、葬諸城東龍田山、所著玉山

譽日盛、至林公臨講席病作、使之代講、居十餘年、 集若干卷、遺稿若干卷、配衛藤氏、生二子長日遜、

靈雲公即世、葬畢、歸于肥、弟子受業者千人以上 字子順、次日仲、末冠、今茲安永二年、子順懼碑名

隆德公以爲肥於是乎濟濟、召賜金幣、開講前廳、盡、末成、同時輩流稍爲異物、以余先君子既與之交、又收

五一四

余于末年、致所撰狀與藪士愨墓誌、請余爲之、稱余

者、羽生澁井孝德、今見仕佐倉、知屬意重誼不容辭、

叙其首末、繫之以銘、銘君夫人每遣書信、必日秋先無恙否、贺五十都博士記、留觀曠B、勿見煎督、艸艸、

五一三

之惠、時座上客滿、即澆以足下之所貽、賓主皆醉、使

老夫得樽中不空者、非足下邪、申謝申謝、來詩皆佳、

唯釘餖甚盛、請少減之、輕鬆則可也、縷縷數百言、

微意所在、一一領之、唯老夫非秦少游、不能對客揮

毫、併期面晤、草草不悉、

食斗葉子玄

前日見過、因審靑既無恙、爲慰、今又重以長箋美酒

父與母氏、同宅於此既固、世世休美、

答千惻然、爲叙其

言、而係之以銘、銘曰、

惟夙夜慄慄´唯違遺訓是懼、今玄業雖未成乎、幸摳衣於「甚矣哉不佞之衰也、衣袴之命三申之、而尙猶遲慢、

先生之門、唯先生不吝片言、以不朽我先人、則死生 不能一介之便奉之左右、以至勞貴伻也、迺廉將軍善

同拜先生之賜矣、唯先生圖之、余聞之甲寅夏五月朔日也、圖、因賦得侵韻

已自有眞龍、

子、里人或賀之、君則怫然而日唯是一塊肉、祖先淸

白之遺、長得爲一窮措大飲千葉子玄宅醉題壁上

匣過附詩二首

中明月碧芙蓉、各自相携醉裏逢、休道葉公耽畫壁、

人間則足矣、豈可與區區守錢奴

邪、不可、一日疾革、迺執玄手、日玄乎、爾當讀聖

賢書、以立身揚名、毋爲財溺、乃父弟妹各二人、其餘

瓜葛六十家、則杉山氏之鬼無餒矣、唯千葉氏寥寥、

我死若宜冒千葉氏、而以玄爲名、母姓猶父姓、子奉父一芙蓉峰頂一登臨、歸後無人問此心、今日壁間看秀色、

字、所以繼父志也、遂卒、年四十有二、實享保十九年「知君白雪曲中深、

於是乎玄慎守遺言、不敢失墜、

復井子章

過訪千葉子玄、壁上有芙蓉是米肉十斤、亦復一食三遺矢矣、不亦可憫乎、足下

幸恕之、儒林傳得悉北肉先生巨細、即足下之三益於不

佑也不止一二則不佞就足下所著傳中所得、與不佞所

記合、裝搆爲數語、題諸書象之上還徵者、文之佳惡、

固在所不論、庶幾不盭諸先生行狀也、讚語附上、幸

見質正、承上已分愛雛戲、尊閫日夕經營、亦復化生

宜孑遺事、足下門楣之光、既巳兆於此矣、不佞與岡

生、即日乘閒往、潦倒於桃花白酒、綺羅紅傘逾之間

耶、則足下之性緩、亦焉得不罵廉將軍饕餮復發哉、

呵呵、玉山先生遺稿卷之十一

字多漫滅、町氏明旦將發、不遑別購好本、爲可恨耳、

凡讀書之法、自當別具一隻眼、即捨短取長、沙中

往往見金、百家五車、小說稗官、皆我胸腹百眼厨中

物、莫不給我用、左右逢源、即爲得也、且隨讀隨抄、不

期明日、手稍緩如鷙風飛電、轉眼即翻去不可復得也、

勞而無功、若嚼蠟然、何益脾養胃之有哉、愼之戒之、

古人云、讀書當眼到口到心到、是爲三到、余則云宜

加手到、更名為四到矣、盖心口眼三者皆屬虛、唯手

寫抄書爲實事、終身不忘、實係手到之功爲多、故曰

讀書不如寫書、汝宜記之、亦當以此語社中兄弟、文會

輔仁、古之道也、勉旃勉旃、暑稍熾、汝宜自愛、且

報小弟、勿令屋後壞岸乘凉垂釣、或至忘乘堂之戒、

至囑至囑、

解也、前書所求尺牘雙魚、今附守邸町氏歸使去、 玉山先生遺稿

是俗書、窮鄉寒士非無一助、汝勿輕視之、但紙葉甚薄

遜一日葉玄來、涕泣然而下、泣謂余曰、嗟乎玄生、四

歳喪母、八歳喪父、距今三十年矣、今玆寶暦十二年

壬午四月、改合葬父母於淺草清光寺別院智德精舍後

圃、尚無所記、後嗣何觀、玄幼時未有知、稍長所聞鄉

父老者、略狀其行、謹磨貞石、以煩先生、唯先生圖

之、狀曰、杉山君諱文明字玄甫、豆州田方郡人、家世

「業農、居恒嘆曰、人徒長七尺、食粟而已、辜負須眉

男子、唯青雲不可坐致、無已方技乎、寸匕肉骨、不猶

愈枯死隴畝間釋哉、耒耜來東都、讀軒岐之書盖歳餘、

有會於心、以此施治、所救活 甚衆、遂仕 某侯、未

幾辭去、不欲苟合也、君慷慨趨人之急、衣食貧困、

性又好潔、不茹葷肉、書策玩器位置必正、少邪不敢

祝、其燕居肅如也、娶千葉氏、生男玄、千葉氏、享

保十五庚戌九月十九日先卒、有富商無子、欲養玄

杉山君千葉氏合葬碑陰記

著

補遺

述輯男

羽

子

肥 秋 儀 五一 二

五一 一

湛水足下、神清骨冷、郊居出塵、後有伐石之山、前 老父平安、字與兒遜也、合家無事、欣慰欣慰、汝宜

有浣紗之泉、雷雨時行、蒼翠如洗、醒悟人耳目、足下於 薪水奉母、友于教弟、餘力赴館、孜孜切切、攻業匪

何况世間處寒熱之裸蟲乎、疫氣大行、病者如麻、唯

與兒遜

晝日售醜、迺敢摘埴索塗、狃指微瑕乎白璧、

技倆旣窮、宿疾復作、加之一奴患銕槌風、頭岑岑也、 亦唯恃足下虛襟有容焉耳、不佞恒言吾黨多士也、於

於是竈下無人、不作食累日、余正仰臥蒲團上、四支 熊冢二先生、則吾辟三舍矣、其餘則旗鼓相當、或偏

不動、氣如牛喘、蒼蠅嘬未死之人´唯目炯炯耳、足下視|師取之、惟於足下則免胄趨風、未嘗不嗒若乎其後也、

之、必當拍手呵呵大笑、余也出火宅之人、尙猶如此、 雖然其或射獲麋矣、則亦未敢不獻諸下執事云、

復湛水翁

蹄間三、方面將哉、人莫不謂其餘勇於藝圃也、而澤

消耶、抑針眼不能納須彌也、一粲、

與藪愼卷

與岡伯經

何、雖然人心不同如其面、不佞所爲雅、足下或以爲

俗、則自此以往、不佞之所未知也、區區杯名、從人所

好、中山亦可、持螯亦可、復奚擇哉、若以有趣乎、

則千里光近雅矣

是焉茶、於是焉基、左拍商老、右携玉川、與良朋二

三、日享樂于清凉園裡、可謂地靈人傑二幷夫、所

謂吉人天祐者耶、正悒鬱之間、忽辱回札、急破緘讀

之、清風倏然灑人發也宿疾頓愈、余笑而日湛水足下、

不止國手乎藥治、叉且高于基茶、是則三技國手矣、奇

足下攻業匪解、欣慰欣慰、愚父子無恙、玲也堅也、 哉奇哉、茶祖傳
謄寫、字如荆棘、實因患暑、還報之

從遊依舊、勿勞遐念、社中諸子窓課如何、豚兒仲也、吾|緩、實因病
懶、勿罪、不具、

伊簡諒、頗有習益耶、余旣託諸叔瑟、足下亦幸勿外之、

至屬至屬、玲也始染指於東道山川、日芙蓉未高、琵琶|不佞未嘗見虛
襟若足下其人、足下於文也、直轡獨上、

湖未潤、都下未富且庶、堅也屢調笑之、盖玲客氣未

山藻叙旣能取與人之誦矣、今忍辱肮十題、亦復陷然自

視、問道於瞽焉、非其襟虛也、焉能如此、儀也有靦

甚哉炎暑之毒人也、普天匝地、變爲火宅、一跳不出、 面目、光城市
風塵之氣、無甚義理、亦唯取字面雅馹有趣耳、如何如

履也、不知翩然從不伎、而

千萬保

唔健夜醒可爲杯名、古人好

叮爲杯名、古人杯名、鸚鵡竹根三雅夜

亦何謙遜בן

閉足下有樂正子春下堂之憂、不知其心既釋然也邪

與亦何言哉、雖然足下求待不已、僕或枝拇於二公焉耳、郇雲五朵、自合志氏所飛來、拆緘燦然照席、因審奉

頃者有人傳言足下駁冲默云云、有諸則不亦越専俎之一職匪解、退食委蛇之狀爲慰、承有人磨石决明裁作飲

類乎 是盖言語之微、不足深咎、惟微不伐、將用斧 器、請足下命名筐背、足下所命不敢自是、質諸不佼、

大城文卿

復子班

爾日上、國之彥也、僕所畏也、足下既不失所依、僕

家藪二公、儼然斗山、足下奚取秋生爲、是殆海上之|東都分手、無日不思、不知足下以月朔發耶、想當既

逐哉、然足信足下好學不啻葛豢也、益田生爲足下先「已還家、佳氣滿堂也、恭喜恭喜、不佞則初三日上途、

容者 有日矣、而今而後我 知曹丘之不 私季布也 夫、 二十有一日舟抵室津、翌二十有二日、寡君陸行至此、

僕棘人讀禮廢詩、僅護古處萬一、乃未免拘時制、接「不佞日與足下約、相見干此、因停橈瞻望久之,足下

子弟而訓之、豈足道哉、豈足道哉、唯是足下見素未至、宴君之舟既發、不佞勢不可已、亦復開帆、一

冠、其難過取乎、益信其好學不啻薇、昔范呂之賢、 瞬千里、徒回首於赤城霞標之間耳、五律一首寄憶、

而論者或非之、僕不肯將何地逃罪乎、家藪二公、卓一船上草草、布字不能覲縷、

復出時文

與赤國鸞

期以午前不敢後約、

往邪、

柯、足下奈之何、僕之爲斯言、亦唯信足下好學不啻

狮豢也、百書不如一面、僕願足下常常乎來也、故不

多言、

、與足下俱杖好問之之至此也、不传雖毦乎、一日之長、

莫隱乎爾、 悉吐鄙懐、 唯足下采擇焉、 足下 所名中

山持盤等、非不可通、只是與决明沒交涉、似未當、

且風味索然、若蛤蜊一啖便了相似、若以僕意請更名

千里光、千里光、即鯪魚一名、字面甚雅、頗有興趣、

之類五〇九

漆園之飲、三人潦倒、爲無町畦、豈可不謂傲吏哉、彼

聞君家先生、近病洞泄、豈暑蒸雨潦作祟耶、足下不 一時也、承明日足下製渾沌飯、將以享士騏、及不佳

解衣、善視粥藥、孝子之分宜爾也、勿解勿解、唯吉人 也、不佞雀躍而日、奇哉匡卿也、豈止裁五鳳樓、乃

天祐、起色有日、是則無憂耳、所朊詩皆佳、論巧 眞斡旋 造化之手耶、 不佞當挾士騏 急趨華筵、 迺以

拙、若其偏賴彼蒼許大業、雄文今已奪飛黃之句、則|渾沌一口喫却了、使許多五岳四瀆 名山大川 赤縣神

氣已吞宇宙矣、文則伸縮失度、難哉成體、足下其思|州之盡在腸胃之間乎、則人間世未曾有一大快事矣、

復池匡卿

復池匡卿

歲云動、絜榼一飲長嘯、悠然南望、便覺山翠飛來、紛紛

乎襟哀之間也、先生則歡甚、日今日之漉酒先生勝於昔

日漉酒先生一等矣、書此申謝、唯菊花一朶在我側、笑

誾誾也、

至、

復矢仲叔

諸、近歲都下才子寥寥也、斯立之後、唯見足下、足下

十日三逕蕭條、忽得足下之貺美酒好詩、於是先生色

是爲書家本色、若連綿艸則非本色、故又名之狂草、

且言懷素徵明其昌枝山足下所嗜、何其言之矛盾也、

至李卓老則奴書俗惡、豈足道哉、唯其人則畸矣、鄙意

如此、如何如何、獻芹之情、伏仰再敢、不佞從駕、

明早當發、行李從橫、來賓如林、不能盡報、客歲來

再書不奉一語、罪謂之何哉、是以一二略略奉報、萬

照亮、

果渥洼之產哉、蹄下千里、前程自愛、所命詩文筆削、

請以宅日塞責、不佞今日當先府君之諱辰也、終身之

喪、不事外事、是以不能爲足下構思盡心焉耳、草草

復田元章

則獨艸也、右軍以下諸名家、及明文徵明等、學之、

莫矣、昆玉雙美、靡不戩穀、惠物三事足、見深

|衷、鯨肉言其大也、鰯魚言其蓄也、朱提盖言欲令余朱

衣冠、而與古作者之左提右契相周旋也、豈貨之之云、

夫或貨之、則不佞雖赤貧乎、亦有所不敢受矣、亦唯

昆玉深衷、則不佞亦不敢辭云爾、佳稿正階、可謂雙

美、足使藤亞相驚嘆曰泱泱大國之風哉、果爾賣醬之

家生龍蛇、不啻深山大澤也矣、春風隔壁、乘和風惠

然雙一再見過、唯是不俟之朽木也、黑甜是耽、足下空」飲於澗中者則連綿草也、祝枝山之徒、學單字不屬者

臂下

復村太年

厚志所及、足以恥世之頑愚矣、草書說書法文法並高、

昨兩次見過、適不在家、欠展待、所登高註整齊、大

無有補於世敎、 比之足下之 嘉遯於

經、入則拮据、 無補於世敎、比之足下之

是合作、但蕭寺梁氏事、字帶富氣象、不如山寺之瀟「風塵之表者、霄壤不啻也、慚悳慚悳、晾學之命新下、

洒脫俗之爲佳也、醉字堆梁、改作淨、頗覺輕鬆、巳 足以興菊池氏廢焉、是則不佳所以消埃圖報我公矣、

有金界出座意、招隱詩非不當,唯是謠字有風味、結賢煒騻騻日上、匡卿文果粲然、鳴中宮商、鳳毛哉、悰

語磬聲與山寺句相應、否則一篇不見結裹、而是律家篇 川不墜家聲、支派清潔、可喜可喜、岡本源治、胎敢

法、不传潤色之意蓋如此、足下之作、近來一進、唯一一事、儀爲語足下之微意、其人潟藉如足下之言、開

所憾、過正乏蕭散耳、足下宜領此意、則不日刮目矣、 足下之說一爲動容、所以報厥祖翁如何哉、乃亦足下

待之待之、

復古明日塞責、承鎗翁有命、近夕必趨約、亦必挾朱陵、

餗

報艸�東門之役、

艸布字、

枚生七發、眞大快也、岡生留滯、盖戀東都正法院美

不誣也己、但恨不與足下令兄弟俱之耳、今日一雨蕭」歸、不佞豈能見周公乎彷彿哉、足下謂不佞門無郭有

然、體中小惡、視足下所贈、則銀瞵潑刺、若新出於「道也耶、慚愧慚愧、所睬石住甚、篆書之役、狃於售

波底也、於是乎擊鮮、澆以一太白、阿頭風頓愈、不啻 醜、所不辭也、噪是日薄虛淵、赤城主人疲困焉、請以

公酒三升耳、呵呵、江良生想既相見、此子邮氣既除、

頗有少年騎馬揚揚之態、足下兄弟亦當刮目、近日同

來、不佼小築、扁日梅石、即南郭老人書也、他芙蓉遊

記諸篇、種種色動、皆足以供令兄弟之觀也、使旋、

艸復岩謙齋

客歲辱諧、闕焉不報、儀也非人哉、罪其謂之何、今

復惠教、伏審足下卜居田間、浩然獨往、一名之力、

河潤九里、乃横目之民、得藉以免天札之患焉、可不

謂仁之術哉、不佞承乏文學、日夜孜孜、唯是出則抱

唯其論則不佞竊有疑焉、狂艸懷素所爲、如猿猴連五〇七

尊翁及諸詞客、盍簪于此、詠言成軸、不佞爲之序、

自今念之恍若夢幻、彼一時也、亡幾院主異物、笠翁 前日見過、立談草率、未交臂而失之、遺憾遺憾、今

亦逝、不佞雖殘喘僅存、髪已種種矣、顧搜篋中、 也使乎奉書至、聞令弟小鬼所祟、豈無誦子璋髑髏血

當時片隻字無復存者、使人益慨然也、何圖明日與 摸糊於側焉者耶、今附不佞書去、想當小鬼北入胡夫、

足下復會此院、是豈偶然耶、抑亦有數邪、開足下未識 近日霍然而起、雙雙來也、遲之遲之、不佞去秋拊髀

院丰之面、今院主亦猶故院主、想今院主之遇足下、 於芙蓉巓、服日華餐大古雪、即不佞雖孱乎既已着屐下

亦猶故院主之遇翁、硒將虐左而日來來、此是藪君 宇縣至高至峻之處、仲尼登東山小魯登泰山而小天下、

復田元章

昨分弟傳足下書、不佞時方講經館中、既卒業、仓弟一圖跋尾、大有真趣、不佞益信震菴先生有子矣、老拙

翩然下堂去、不遑布數字、不佞追及于階、卒卒致聲-狂潜、敢易數字、今附去、亦與不佞翁有舊也耳、

而已、勿罪、明日休假、從二三子將集臨流禪院、此詰朝足下與二三子欲、相雄伯、鞭弭周旋、旗鼓相當、

地饒泉石、頗有浴沂之趣、足下聞之、幸許見過、實 其勢未必減鄢陵之戰、加之以龍象縱橫、金翅劈海、

適吾願矣、向飲甲士謙宅、足下不來、殊覺缺然、忽」則豈不宇宙間一大壯觀乎、老夫少間憑軾寓目焉、遲之

得斯償不亦可乎、因記二十年前、辰值上巳、同足下「遲之

切如一、達士襟懷哉、前日所睬桃源

會于此、則不佞雖死不朽、亦將屍視焉、聚散有數、存

不投之溝中、以反邸合矣、鼾睡無夢、直到翌午、尙在「座也、即不啻院主善遇足下、凡山中水木禽魚、亦當

被中轉臥、日、快哉醉我也、日高幾丈、宿醒三日、 爲足下色動、爲之送迎如翁故事、明日之會、兒遜

恍然如癡、不省別時作何狀、則士騏嘲不佞糟丘之業 也亦與焉、唯是豚犬不得如孫仲謀、爲可愧耳、幸託

不能復圖霸矣、不知先生今之隱几者、猶昔之隱儿者「足下、足下行常弟畜之、令遜也知所趨向、藉分數十

也耶、鄙律附覽、痛斧削之、仲英君詰朝相見、不別作一年後、足下與我兒再會于此、亦猶今日不佞與足下相

復藪士厚

落落、豈不愉快有麥麴乎、不佞環堵漏濕、縮頭以坐、苔色上書帙黯|玉淑足下、都門之歌、歌呼嗚嗚、彼一時也、解携各

然也、而不佞之屐之齒老矣、脚又軟、乃不能蹣跚乎 天河山黯然、爲冬夏者、玉代謝于前、而行李往來、人

步、泥濘以候足下也是巳、足下壯健、唯窮亦類不佳、 相存問、獨足下之音寥寥之、玉淑忍心哉、不佳西旋

豈亡所藉於令巫馬期齎之具邪、不則何其恝然不見訪|丁父憂、百爾荒廢、加以屢空、綢繆自苦、杜門善病

之至此也、不相見十餘日、心旌搖搖也、不佞不同不數佞奉書是己、華州之喻云、足下綏履、與二三兄

病之憐耳、迺復欲因夢寐、忽上足下之堂、以叙十餘 弟日婆娑藻雅之林、豈能記海西菰蒲中故人髮種種也

日胡越者狀邪、則又夜有賊、鼓噪如雷、踰墻入臥内、 耶、何以無一字乎三年萬里之濶也、顧不佞之語別也、

勇夫重閉、猶且被創、不啻若芒刺在衣、亦何懾於群小|披瀝之極、有似怨言、是或乾 鯸 足下 者邪、則不按

雨潦十餘日、邈焉胡越、士騏足下、河魚腹疾、若何、

騏

「下堂三月矣、迺歐陽氏獨無憎賊者何耶、開足下不喜

與岡士藪君足下、所撰澤山藻叙、千段田十景詩、并引、皆 之甚至如此也我不能夢見士騏者由是、因憶大雄氏為

經緯霞煥、光彩奪目豈得窺其七襄之妙哉、不佞盖學 法割肉啖人仁哉叉澤國女子筋露不敢就有幃、難矣哉、

評其一二焉、則不葉莉菇、柾荥謬采、於其梏言不 難矣、不佞則中宵起、急用火攻殲之、久之稍寢、亡何

踵者、則亦諄諄然耳提分開之、以匡其不逮、豈不謂 餘賊復來即、特我角我、我輒嚇起之、一白羽扇、屢之

足下推愛河潤、誼甚高乎哉、雖然、足下所聞、不如」之不能却、且麾且罵、惘然達曙、賊亦解圍去、余仰

不佞所言者、時或有之、非足下也、不佞之不能出諸| 祝其醉飽者、病不能興、皆在壁上、若列釘頭、其腹

手指之罪也、故復有此答、和人心不同、有不可强、 果然、若血革囊可惜、可惜、余以手撲之、紛紛落地死、

一再往復、各行已志可也、惟足下仁人君子、能不劫 可掬也、豈不愉快哉、儻曾子千春值是賊、則亦將不

於誨、而叩空空於鄙夫、則永錫之義、爲實大矣、至

禱至禱、

五〇六

歐文、書此供唉、旦陳十餘日之澗若三歲者於知已之

前如斯、小晴一來、縣榻俟之、

與宇玉淑

五〇五

復藪愼菴

是心悸稍定、始善一飯矣、自此山行二百里而近、肥」昨見過訪、今朝又使命弟來、益觀足下致意於不住之

豐之交、犬牙相接、崎嶇不減信中、地勢又宵、李爾看 篤且也、欣抃何歇、咏燈詩、足下第一成、可謂探

之、阿蘇如淺間、猫嶽如妙義、忽疑有力之移地於此「得頷下珠矣、餘子未成、成亦當殘甲敗訢無完物也、若

耶、熟视之、迺悟其非、因謂造物者一手按刑模而出「不佞先成、則糠秕居前耳、慚愧慚愧、尊翁無恙否、菊花

之亦何巧也、人笑余誕、大暑時行、人馬卒痛飲谿水止「枕作、近來絕唱、不知金衣童子、增明於赤城主人耶、

渴、蔭崖樹以息、終日役役炎塵中、委頓亦極矣、六|謹此奉候、足下爲余致此語、吳松亭拙作、頗有更强、

月三日還我熊府、與家人相見栖未數行疾即大作、牀 併此錄去、餘附之分弟口頭、

與村大年

距府不遠、故人相識往往來、賀軀不爲巨魚餌也、

狀、僕恨無勝具、不得遍探、且追隊 隨行、晨 發昏、李之往來也、延頸東望、欲寄數字、援筆輒廢、途不

舍、擾擾不遑寧處、是以不得叶片言答山靈之寵、且能復作、何物二豎、種種愚弄人、一秦未亡、一秦灭

附之書中、以分獻勝於足下及都下諸君子、而獨享爲「生、僕近來瘾發臀、痛苦難禁、不得坐臥、兩手據地、

風雅一大罪人、焉能得如獨往飄然狎魚鳥寢煙霞者之「尻益高、如鶴俛啄之狀、家人盡笑之、時時血滴滴下、

爲哉、人事之爲羈也、可厭乃爾、蓋觸風雨衝雾露、跋「不知神之盡唇以赭耶、抑眞宰浸假化予之尻爲朱輪

涉一千餘里,僅得抵攝浪華津、五月十七日也、明日一也、足下聞之、當噴飯滿案也、頃得良膏、稍有起色、

浮海、霧雨不一、涉亦不利、有時陽侯大怒、一瞬千病間作此書、少謝契潤之罪、長者幸賜海涵焉、拙刻

里、風驅箭激、人皆船暈首疾、不飲而醉、不食而「適成、謹此附上、外小壺盧一顆、併供把玩、是物敝

飽、呻吟發於鯨波洪蕩間、末之儀也、不能倚船樓、 邑所產、可用盛烟、孰謂白雲不堪持贈哉、然不可盛

誦枚發以敵其勢也、亦何不壯之甚、風少軟即汎汎鳧「酒、僕懼足下視以爲不如吳中長柄種也、時涼暑雜至、

逝、如此十有餘日、始上鶴磯、鶴磯豐地、蒜吾焉 自愛、

蓐六十餘日、蒼蠅嘬未死之肉、唯目烱烱耳、每間行

筵、唯懼獲戾長者焉、恕之恕之、歸途搖搖、步不在

趾屢唐突路人、糟風揚於百步、路人皆以目、紛紛披

靡、視其鼻間栩栩然、僕則大罵曰、孰能皤其腹、而

御風輕舉如余者乎、衆告笑之、屢爲士騏扶起、幸得

而

復古公餗

伎倆、亦唯偃鼠之量、一敗如泥、醉態婆娑、非復初

足下既執牛耳、主盟斯文、則亡論已、且出其緒餘、吐

復田元章

今朝早起、眄庭柯欣欣怡顏、猶如秦苛政 萬態者、豈能辨此耶、臥遊一歌誦之、四壁皆響、山

後約法三章、民咸有喜色也、忽辱尺一、副以佳論、 水清音、何必絲竹、呪仲英君英英、與翁之水相映、

讀之字字挾風霜、則使祝融氏不得敢專其政矣、甜瓜|卮言交出、嚼之愈旨、使人自然玄遠乎、士騏間吐片

之惠、色如綠玉、芳馨撲鼻、嚼之凉骨欲仙、豈東海|語、不甚寂寞矣、杯盤交錯、漸入佳境至繼以燭、不

安期生所啖者邪、非邪、三伏忘暑、實雨師與足下惠、 知僕何幸得玆厚於足下令父子、唯僕貪飲外、無復它

以爲肝膽之誼矣、乃求全之致毀焉、不佞不敢以無罪 註家亦未目見古制以意解之、如轅端有二横木之說、

爲解也昔者不伎一寒綈袍戀戀者、非足下乎、不佞不足信也、許慎說軛轅前也、其與衡同物益明矣、他

何敢忘初、足下詩語未妙、盖亦觀吾趣焉、而足下稱「期面唔

不佞爲泰豆氏也、不佞雖不敢當、而私觀知己之亦何

恝然不識之疾也、河北巾軍、相爲不忘、朋友之交亦

復爾爾、不佞狂愚、湖海之氣未除、乃起居於足下者

如斯、亦唯披瀝之極、有似怨、言恐足下按劍於無因

至前也、時微和琴興何如、不知當時好音者、尙猶無

恙耶、

與服子遷

胸中墨五斗、染之毫端灑之壁上、意匠所運、腕無不隨、

即芙蓉白雪、宛在咫尺、豈不稱其孤高自賞哉、加之

箕瀑之雄、盡島之壯與彼信中崎嶇泉石之奇、皆來華于

一堂之上、足下盖謂一丘一壑、躬親過之矣、維其有之.

是以似之、咄咄逼真、人應酬不暇、苟非胸吞烟雲

一雨洗暑、不佞得併兼焉、篤矣篤矣、擬送阿倍仲滿詩六有唐音、

春藹哉、春藹哉、紫海明州、亦可謂佳對矣、使旋艸

~ 不盡、

蒙問衡軶義、實如足下所見、古今之制、應有異同、是天下之壯觀也、其它佳境異跡、不可殫

五〇三

與服子遷

形勝、口、

匡卿足下、閉門有桑弧之縣也、盖太孺人之喜而後可「墟、岐蘇川之歌、鵝湖之渺、吹笛盤石鳥居磨滅之峻、

知也、乃知太孺人裁五綵如鳳之衣、無無焉含飴撫之|其爽快人心胸、有如此者、小埜飛泉、雙劍倚天、浦

愛之、抱其懷而不知疾疲、自此以往、其子若孫、若一郎石牀、甘夢仙卿、是爲信中第一勝槩、其悅目有如

曾玄雲仍、繩繩其來、於是乎兆矣、然吉光片羽、高此者、關原惟美濃州、神祖一戎衣、食頃殲兇、創永

冲雲霄、桦協律呂、爲世之祥瑞者、亦皆在足下之敢永不拔之業於此、迺天地辮勃之氣之所鍾、厥草惟縟

之呱呱時、而成於風氣日上之後矣、是豈不可踊躍以「厥木惟碩、厥山水光麗以秀、至今父老披圖、指語其

陳所慶哉、海物敢表微忱、餘期面唔人、僕唯恐使足下有隋珠抵鵲之譏、豈不感愧交集哉

是月也、例 賜列侯藩、寡君以二十有八日發軔僕

唯寡君馬首是瞻、即治裝西旋、百端蝟紊、是以不得

繼見足下、必曰儀非人哉、斯數行、寡君取道信中、

信中自古稱至嶮難、棧道數所、若將階天、青谿百尋、

俯瞰無底、一行千騎、前不顧後、或魚貫而上、或猴

綴而下、其乘危有如此者、淺間妙義之奇、木曾氏之

先驅、豈可不謂祖逖之鞭哉、叔瑟連牀、情話到曉、眞剧

翩佳士哉、望日枝山詩、渢渢乎唐人口吻、匪解則逮古

矣、勉旃勉旃、但第十一句未穩、足下宜推敲之、

與池匡卿

聞有不可風之疾、藥餌保護、霍起惟祈、詩料收錄餒爲

予掩鼻而過之、足下損葉明詩、可謂已獲我心矣、

聞有寒疾、勿風自愛、老夫以豪飲當火爐、狂態如故、 子遷足下、鄉者聞足下浴温湯歸也、僕以四月二十四

勿勞遐想、喻云足下近來擯棄明詩、唯盛唐不可企及、 日趨謁相其氣益神益王、豈非玉笥名山仙液所澤

姑假中晚之調、所示寄大年詩、彷彿優孟衣冠哉、人 耶、愷悌君子靡不綏履、想當眠食日佳也、甚慰甚慰、

各有志學性所近可耳、詩云豈其食魚必河之魴、學盛 佳序之覝、光華拙集、使儀也得奮飛藝林者、亦唯足

唐固可、學中晚亦可、惟明詩不可學也、明詩臭氣撲」下之假之羽毛矣、片言至重、如名與器、作者不敢濫假

津津不休、則使人竦然飲襟、而興感焉、豈

不盛矣哉雨師斂陰、則詰旦必命屨矣、不佞未肯以羸爲解也、

數百武之外復古公鍊

復滕陽軒

嗚謝艸艸、

覽、則光彩燦爛、自紙上射人眉睫、與夫在天外 淳民足下、兩目喪明、猶能視牆一方之人、求診者麇集

蘇峰吐紫烟作花者、相照映不已、因疑縣象之天軍、 於其門、則天奪之外而與之内視矣、反視葆光、壽亦不

林林如白羽者、忽垂曜於草茅耶、則陋目之幾蝕之復 可測矣哉、不佞自三千里外歸、熊谷之寺、六彌太之

明也、均之執事之載錫之光矣、下存之寵、終身靡忘、 墟、朝日將軍之壘、皆既經歷焉、脚厭於崘、目飽於

肅此什襲、貽諸兒孫、謹用奉和三章、別作三首、獻|奇、信中之難、蜀道弗啻、唯生質麄笨、莫有勝具、

復村淳數也民

則一拳之技、庶報東門之役也、交選策未卒業、請以
明日返璧、校讐之役、事事旁午、塗鴉未得塞責、草
草布字、
五〇二
矣、儀竊謂赫赫縉紳君子、業已証其俘、破矩矱而
下賜卑賤矣、迺其暑賦未獻、何宜見譴責乎哉、山澤
之大、亦必納汚、則儀恃是以少寬焉、果爾假借日月、
罪從末減、經春涉夏、稍稍始愈、於是乎儀正襟潔指、敢
再披之左右、以擬負荆、外鄙文一道、近藁一册、應命貢上、
亦唯漁歌欸乃、奚足瀆嚴聽、伏冀執事命侍史一个展
前、試以玉如意帖之而已、則儀之榮幸萬萬矣、臨書
不勝恐懼之至、時徂暑、爲道自珍、仰祈電鑒不旣、
疇昔之飲、老拳毒手、相爲厭飫、唯是不佞人馬辟易、
不能當少年鋭氣、弗啻三舍也、足下之妙、在於指頭、
鍼術酒令、皆以是而精焉、天之賦物、秀氣之所鍾、
固不可測哉、菅社遊、宜擇良辰、二三日來、陰晴天
定、難豫訂約也、請重卜日、天若有意耶、風伯拂雲、
、時時代脚以籃輿、是以小埜瀑布、西行古
墳、鳥籠之山、不知之川、往往而脫之、遺憾遺憾、

浦島太郎神遊之地、水石奇麗、宛若智者所施設也、

信中第一勝槩、不佞躡巉嵓縋藤蔓而下數百丈、逐造

其所、足下若過焉、則既喪之明、烱然忽復、恨不合

足下觀之、亦復遺憾遺憾、不佞善飯善飲、亦饕餮類

耳、不任慚悳之至、胤大年、風氣日上、可謂百不

憂矣、又可謂足下之明途不喪矣、至祝至祝、惠酒陶

然謹領厚意、不佞固知其上池水釀也、神仙美祿不其

然邪、五〇一

直父子故、更推愛屋上之烏、重命益至傳儀也承乏一 研俱廢、如坐五里大霧中、是以不能細讀來美、虔圖所

奉和其瑤什、儀也凡庸、微若蟲蟻、何能敢當、唯逝 以奉酬、豐玉清府中物、不許人問輙窺之耶、愧忠銘心、

者不可復起、而存者實有叔姪兄弟之分、賜恩嘅如彼、 有俟差日、日夜念之、若芒刺在背、栗栗唯罪戾之至之

申命又如此、則無辭之以爲解也、則儀不能逃辟、敢 懼、舅益至年既七十餘、謹慎如石奮視子侄有過猶

奏薄技、盖亦爲益至及安直父子、謹奉謝其死生同感之「視己有過、每見儀之面、屢誰讓遲慢、對案不食、儀雖欲

萬一云爾、儀小長乎海濱風葦瑟瑟中、其所奏技、亦雖 勉強塞命乎、操觚則眯、視朱成碧、是以欲爲中止者

雅

王國寶器、德位竝崇、邈矣雲漢、階之弗及、何國地 頌之音、大振於朝廷之上矣、昇平奇瑞、何必棲梧之

上小臣儀條得是玉唾粲粲乎隨風而於執事哉、且駭且「烏、是亦足以鳴聖世之盛也夫、唯執事圖之、鄙之人、

喜、一信一疑、戰灼失指、不能定視、先是執事以安私竊有禱焉、儀也利既拜賜、即當奉報、唯時值目疾、筆

八月三日、陪臣肥藩鄙儒生、秋山儀、薰盥東鄉、九

頓首再拜、謹奉復書於羽林中郎將小倉藤公執事前

歳辱賑華牘、副以高作、幷既拜受諸徹舅益至槭中、

恭惟執事、

上羽林中郎將小倉藤公

漁歌欸乃類耳、豈足雜之鈞天廣樂間哉、迺執事謬無傾

述著

輯

羽

玉山先生遺稿卷之十一

肥後 秋 儀 子

遜聽、過加奬譽、且忘其貴、不鄙匹夫、自九天之上、千里

之外、遙眖手敢、以求拙文、雖由愛烏哉、是自軌事

風雅高誼矣、夫布衣之交、古人所難、烏有一如執

事好文下士、既竭其藪、而其餘至越海遠徵麼如

儀者所著述乎、執事則可不謂善誦緇衣君子哉、儀甞

讀懷風經國等編其時在朝鈪卯名大夫、皆能操唐剪、

而晁衡野篁、千歲稱特異矣、曁至近古、抑何寥寥希

開也、唯執事獨紘唐聲、鍾期是期何其慕前脩乃爾、

執事則可不謂晁衡野篁、而生於今之世哉、執事能

大倡雅道、使諸縉紳衣冠、間有所觀效而興起焉耶、惠書及詩、開足下爲瘧鬼祟五十餘日、所謂來把君子、

所以爲逆邪、今也復舊、吉人天祐、理故當爾、足下愈

益謹慎讀書、宜圖所以報天之與吉人也、不佞頃柳生

于咽喉之問、氣息奄奄也、不日幾爲異物、適有千金之

藥、以得免蟲臂鼠肝之化、猶在牀蓐、唯粥是恃、故不

能細讀來美、爲易片語也、足下姑俟之、陽烏之贈、大荷

厚意、儀也一縫掖、非雁門太守也、何以得食雁之美

乎、可不謂足下之惠也、謝謝、字號之託、揮灑之請、

皆當俟愈日圖報也、勿見煎督惟幸、病懶不具、

二日也、因憶昨年與足下會於此地、初見分郎、杯酒罄

歡、殷勤之情、中心藏之、何日忘之、即欲作一詩寄

之、只是儀也劣劣注船狠藉、呻吟發枕、不能把筆、

時時力疾延頸於赤城霞標之間、爲可恨耳、山叔瑟奇

士、果來弊邑、不传弟蓄之、分兒遥也同居、三同

志、又周旋之、足下幸莫勞遐想、逛也碌碌、雖不能

如孫仲謀、必比之士厚、則亦足以散懷抱也、小飄

顆、弊所產、謹獻左右、湖筆雙枝、幷供合郎揮洒、物

雖微也、志則厚矣、叱在惟祈、足下令春果從駕耶、前

期不遠、且舟人報日、風潮已應、燈下艸艸不悉、

復馬產車

港十有

貢物也、今願質之禪師不知禪師拈起蜜尾一爲破顔耶、

外律二首奉寄、臨書悵然、無任渴望、唯禪師照察、

復赤國鸞

合話、皆曰禪師住持大刹、薰領衆徒、法旆堂堂、魔外辟|尊者崇信尤至也、不也向爲羅漢作歌行"蘇老弇州、

易、不止三舍、不佞聞之、亦未嘗不茫然神往也、不佞則」有讚語、是亦似知崇信之者、唯不佞則否、非信也、

從駕東都、歲無虛歲、一東一西、來往如織、無何、靈雲「非不信也、有寓意存焉、不佞觀古人作、於畫龍鷹等

公、隆德公、相繼捐舘舍矣、及至於今公也、日夕侍|往往見之、盖爲其胸中髒勃氣、非假此則不能得泄也、

讀、亦復載筆依舊、歴事三君、東西來往、莫有休期、 不佞豈佞羅漢哉、亦唯愛其骨格巖巖如五峯秀出、望之

是以不能得裁一書奉問、乃至使禪師顧念不忘、以勞 眉宇間、有風雲飛動耳、是豈足當禪師之意哉、試錄其

垂示也、不传之罪、其謂之何、幸希萬萬海涵焉、今「詩謹此奉上、以污青蓮一盼、寧野不云乎、一偈不參、

也謹布數字、奉酬厚意、師豈聞老杜詩乎、不見晏公 饒有禪意者、世或號之、不佞於禪、亦不自知其合之不

三十年、封書寄與淚潺湲、不佞今日實類於是、因憶舊

遊恍若昨夢、噫護國海慧悟明師、既已薪盡矣、而二

巖師合吻陰陽、發公植公、巳蟬脫、唯隻履空存、鈴

音振空耳、吾友水斯立、是甞與禪師旗鼓一相當者、 客歲辱書、闕焉不報、歴冬至春、雖以足下之寬恕乎、

亦復化爲異物、豈不悲哉、三十年間、變化如此、禪 亦必謂儀也非人哉、律絕並佳、莫非琳琅、孰敢置啄

師豈不爽然一動念哉、彼一時也、此一時也、伏惟人「其間哉、伏審足下起居清嘉、令郎聞詩問禮、風氣日

天歸依、靡不仰止、卓爾獨遊、藤高德郡、伏冀自今 上、可謂百不憂矣、所賜形鹽、潔白如雪、既係貴邦

以往、愈益保愛、且宜使大千赤子、以有濡唇於法雨之

餘瀝焉、至祈至祈、若儀也者、五十髪已種種、食粟而

已、自與蠹魚枯管爲伍、萬言盈紙、亦蝸涎粘壁耳、禪

師豈不洒然一啓齒哉、頃者、有客持禪師所梓十六羅

漢圖來际之儀、伏讀讚題、令人起敬、因知禪師於諸

、小人不敗嘗、謹納諸寡君之厨、雍人薦之、而

其餘及儀也焉、乃一餐之、清溢齒頬飄然欲羽化、我

安知其非仙家玉屑哉、不知不佞何以得玆綢繆於足下

也、寡君述職以三月之朔發軫、五日抵豐大里、即日

上船、順風相送、一瞬百里、今辰過阪越、到室辱示、見借戴文進醉仙圖、此本今在公所、不得即呈|香不相問者、三十年于此矣、每聞有人自禪師會下而來

垂手之如此其至也、不佞初未弱冠、謁師於護國山中

也、日夜聚首、多蒙示敢、爾後禪師飛錫若州、雲水阻之

至、足下欲得其潑墨如雲、筆勢軒軒龍擧者、而我恐| 日者藩大夫藪氏、袖一詩來、朊儀、而日是永福面山

其未必得龍、而反得豬狗類也、則於昨遊又添一反矣、 大禪師之所託賜儀也、儀不佞即便盥薫歛襟誦之、分

呵呵、毛邊紙六葉領訖、三井氏河魚腹疾、不來、可卜|情溢紙、靄然盈掬、一片婆心、不遠千里、亦何戀戀

其非龍也、笑笑、

與面山和尚

之倒矣、足下之目之以狂也、不亦宜乎、今日三書家

臥、高於清風、郝隆之臥曬於盛暑、相如之臥、渴於

文園、少文之臥、神遊於名山水、而莊周則徐徐于于

昨一舉足、而天下之名士盡矣、洵如足下之言、眞大 於天地萬物之表矣、今僕之臥也、異乎此、亦唯懶以

快也、唯赤水之陰、欲探珠、而不得珠、而反得酒矣、 爲枕、病以爲衾褥、而眞爲之形軀食息馬、何必華胥洛

赤松之廬、欲避穀、而不避穀、而反得穀矣、昔葉公徒「川之之哉、是孫悟空、所不能窺也、唯足下者二人、

好盡龍不好眞龍、而今葉公覩足下者數人、頭角嶄然、時時見過、足下果欲爲漆園之蝶乎、抑臥爲槐安之蟻

而不恐懼還走、而反欣然就之也、豈可不謂三反耶、 也邪、二絕句亦皆佳妙、鄉書堆案、臥癖乘之、不能

唯老夫故態復發、痛飲傲笑、旁若無人、殆不知玉山|即和、恕罪恕罪、

與藪古賢契

足下必欲見醉仙耶、則前日潦倒乎赤松子之廬者、即

一幅眞醉仙矣、

爲恨、然文進所造、非眞醉仙也、是第丹青俗飾耳、

心緒萬端、紛冗所擾、終致空紙之誤、是則可謂仁者

之過耶、古人謂貪爲墨、廉爲清白、廼空紙見足下

之心淸白矣、寄兄詩、足觀友于之睦、孰謂之遁辭哉、

唯行列之行屬陽韻、當改千行字、孰若當作孰與、如

何如何、原溫夫想當行遠、昨日之飲、恍若夢境、再「足下者二君、
辱問臥也、袁安之臥、堅於大雪、陶潛之

會論心不知何年、悵然悵然、

二四九七

語、未及往見、美酒之惠、先施盛意、甚謝甚謝、目下

來客如林、賤事旁午、筆硯欲眩、不能多言、恕之恕

之、

復相滕陽軒

與藪士厚

法有原、洛神賦桃李園二帖、宛然晋人面目、洵不誣

足下題鳳者三、不佞則役役風塵中、未得一造謝門下、 此供笑、不佞
賤恙未除、枕上布字草草、徂暑尚甚、

不佞之罪、謂之何哉、恕恕、書學筌賜覽、信足下書「伏惟自愛、

不知斯老少年書打印、及至晩年、書法甚高、與平景瑞

之智、與墨魚等耳、書

足代鄙人之齒舌也、詰朝相見、今不縷縷、

雖無足下之言、不佞固當往弔朋友幾喪明矣、奈何白

屋靑燈、無人於老母之側、不能即馳至焉耳、韓公集中、

有慰賈生喪兒詩、天人之辨、可解憂愁、足下試誦之、

自謂宇

宙獨步、絕不打印、其自負乃爾、或打印、亦醉餘游

「戲、十百中一二耳、贋者不察、假印而眞之、其爲西

也益明矣、東海有墨魚、吐墨自蔽、漁者志其墨而捕

之、其自蔽即所以自顯也、贋者也、所朊學範、至其書論、則不佞何敢置喙其間 只是「士厚足下、盖宦遊三年矣、克梓先翁遺稿、繼志濟美、

一二文字、非無指擿、俟姑面罄、多胡碑帖既成見寄、 名動京師、京師人皆曰、明珠大貝、出西海隅、今也

考證確甚、則信足下不止於書法、其涉獵亦博、令人長 則稠載而歸、兄弟懽然相見、鄕里之人刮目觀之、

一格、所乞拙集爲友人借去、筐中無有、二三日後尋 莫不日孝乎惟孝、友于兄弟、震華先生有子也、一大盛

呈、萱洲有江湖之趣、知得足下而地亦益矣、乘間「事矣也、不伎舟船無恙、千里還家、豚犬團、剌剌

一過、得償夙志、俗事旁午、不悉、

聞足下柳生高粱、不知天忌足下之疾足、逐鹿於中原

耶、天道尙損、足下宜以退一步爲法、則應其有瘳乎所

朊雪山氏書十二張、贋物無疑、足下所見深愜鄙懷、 開封百遍、誤達空翰者、古人既有之、是盖眩於官途

末有南跨蒼梧北涉溟海之印、是實雪山氏物、沒後落 矣、足下則無之、心在蜚雁者、將有鴻鵠來、思彎弓

他人手、今也則有所歸、未審贋者如何竊取而印之、殊「射之者、古人既有之、足下則無之、足下念令兄之切、

何以消此秋暑流金之毒、足下幸不愛屋後一叢幽竹地、天乎、足下數喪兒女矣、聖人忘情、最下不及情、情

得借置叔瑟於其間、使不佞坐聽足下與叔瑟、揮蜜玄」之所鍾、吾知必於足下之黨也、孰謂懷抱中物、何足

言、清風相邀也耶、大願大願、足下宜掃榻而遲之、 累情哉、暮夜馳介、請不佞至、不知欲以譚論奪之邪、

山叔瑟至、唯是矮屋狹陋、妻孥團、如一座活地獄

性、傷性非與大城文卿

泡沫相濡、申謝萬萬、

今夕會池雲伯有手談約、足下有間幸來一戲、劉項勝

敗、全在垓下、

孝也、愼之愼之、若其碑文、則宜託之朋友熟

知翁者矣、至哀無文、孝子自銘其父碑、則我未之

前聞也、如改葬掩壙、則孝子自誌之、亦可也、徂暑

烈、自愛自愛、還家數日、來客如林、未及往弔也、

復吉子徵

魚災消、禍及轍鮒、忽蒙足下之書、無烟而焚、余讓其暴於秦政、所餘數卷、抱趨「不倚在東、盖聞尊翁微恙、不佞意謂吉人天祐、想當不

足下、是以足下之家爲桃源、不知足下具牛酒待之耶、 日而起也、廿一日還家、則足下儼然在縗絰之中,何其

呵呵、奇矣、風伯不助天爲虐、延燒不過數家而止、池|不淑之至此也、足下至性、我懼其毀療過制、或至傷

筐

與岡伯經

與井子章

貴伻至、因審佳呪爲慰、尚書註疏紺袱附還、横山

伎之軌豢龍氏之權者、豈非足下耶、謹此鳴謝、

復池匡卿

角、森然厥鱗、俾人欲飛動也、佳貺哉佳貺哉、使不一儀也秋屦色動、叔瑟亦已披襟待報矣、

昨日見過、戲塲失火、盖其氣畑以取之、唯以其密邇 氏無恙耶、請爲余致一語、不知竹眞亭既爲横山氏之有

弊邸也、戶外救火者雷轟、僕夫告急、足下則徐徐日 耶、此亭琅玕萬個 最宜飛雪、苟使横山氏得之乎、則

今且熠勿撲滅、恐傷人、與僕對局自若、想當謝傅讓僕與足下携手、戴小烏巾、披鶴整衣、掃瓊瑤於其間、

足下一子、亦何恬鎮雅量也、僕窃高之、兒遜也、病起「則勝往時北岡之游萬萬也、而主人亦着幽屐候門、以

未幾、不勝一匹雛、是夜力能負山、遇水火變者力倍、 聽余與足下之陽春相和焉、如何如何、祁寒自玉、

不其信乎、玲也近爲木野狐祟、囊裝索然、一賭數政悒鵲間、朶雲共稚龍飛來、視之猶見足下、蕲然厥

四九五

國鸞足下、近况如何、謝畫蘭詩、既已送上宇士侯、侯吟

哉再四、擊節日有是哉、幽谷之香、果勝於國香矣、

、

與赤國鸞

樓落成、昨夜米大夫病起見過、小酌罄歡至雞鳴而下

忽辱瓊報、即急折緘讀之、書詩並美、孰敢呈

覽、廼足下之爲曹丘不佞也則厚矣、抑何不爲不佞藏|使乎、奉書侵曉、馳十有餘里而至、加之以美酒鮮肴、

拙也、不依實耻之、盖公子飲不如詩、率率逃席未及 日餞余東遊之行、何其糁糙綢繆之甚至于此也、申謝

觀衆作之成、不佞殿成、瓦礫可知、謹此錄上、足下一申謝、唯足下令兄弟之屬心也、於衆有加焉、明日乘

或一誦之公子之前乎、則分公子必日儀也鄒夫狃於售|晴來移、則可以爲把臂面別、不佞延頸於白雲之間也

醜哉、亦唯技痒不已、致此唐突云、煦士厚詩、旣己一久矣、式古堂法帖、旣在足下握中、敬羨敬姜、水明

送達、俾取報而還、故不多言、

之、餘在面唔、

華柬復田子華

也邪、

侯屬儀也爲致意於足下、足下領之可也、侯又命儀也、

以十四日赴館、故郊行之約、未能遽果也、請姑弛期、

綠陰黃鸝、詩腸鼓吹、何必桃李盛開之候、是或有類

老妓彈琵琶於潯陽江上飛來、審多福至慰至慰、法帖康熙年中物、間有

梁唐筆迹、刻手佳妙可寶也二三日留觀惟祈、亦信本

臥碑下之意、足下莫深谷矣、東行日迫、雜事紛冗、

近日乘間幸來、書齋新成、水竹頗有風塵表之趣、請

與足下把臂於此中、遲之遲置喙、繪事

亦復殊絕、所貺二幅、居然引人於山水花鳥之間、足

下則可不謂多能哉、儀也、坐收隴蜀、貧兒暴富、不

知何以得玆厚於足下也、申謝申謝、昨三日寡君駕過

宇土邸第、實爲弊藩推恩別封也、第主擁帚迎寡君、宴

于鑒水之臺、置酒池上、流觴賦詩、是日也、松山公子

橘公公績、呂玄丈、及服子遷等咸集、儀也亦在群賢

之後焉、群公風流瀟洒、不挾高貴、山陰之會、未必

之過也、松山公子之詩先成、敏捷驚人、聞此君出自

足下之爐輔中、即如此五金成質、光彩奪目、可謂足

下則善鑄人矣、公子語屢及足下、曰足下謬以拙稿樓、宿醒未解、草草布字、前期在即、遲之遲之未幾、我先公實享茅土之封、而入立焉、五世及公、

尊信儒、再興學館、扁日時習、臣儀盖與有議焉´亦唯

微風難負大翼、弱水不任浮芥、承乏代匱、抗顏稱師、出

不得已、日夜栗栗、唯罪戾之至是懼、如今謬蒙過譽、

僕雖厚顏、負乘之罪、豈不自耻於心哉、承富嶽記賜覽、

唯芙蓉秀色、爲拙文污、不亦美人面上黑子乎、僕每

嚮蒙招飲、未遑往謝、唯得折簡請罪耳、鶯陶之間、

相去日遠、再遊之懷、何異足下、益不堪同病之憐、

如何如何、嗚呼九州斗大、擧翮觸隅、吾將與孰周旋

哉、僕歸、時時作短袖舞自慰耳、請足下努力加餐、

良緣未盡、亦當會面、臨書何任、至祝至祈、

重復劉文翼

即變、不可遠寄、恨恨耳、不知足下食指動否、足下「仰觀白雪千仞、峻極於靑雲之表者、而內省自愧焉、足

縱聞韶樂、此味未可忘、足下闻之、再遊之念、亦當下謂賦嶽者百數、而拙文爲之宗、僕何敢當之、服子

飛動勃勃也、蓋足下思吾黨、而及斯都、思斯都、而「遷亦嘗云、有天地來、始有此山、有此山始有此文、

及此味、足下豈徒懷土爲口腹累之士哉、我知足下之」不知僕何以得玆賞鑒於二兄也、二兄决不私所好、僕

戀戀乎吾黨也、夫貴府者、西山義公所經營、天下雄 亦以此自慰、拿州嘗登大和、嘆其瑰壯秀拔、日唯所

藩、宗室儀表、彰考之館、圖書之藏、不減天祿石渠、不堪者、游客填道、誦佛號振耳、作誚希福、不减長

其士大夫、質行如齊魯文藻如鄒枚、其民歌謠公之盛|安市乞兒、雖富嶽亦未免此弊、唯修小角法者、登陟

德、甘棠弗啻也、政蹟第一、古今無兩、是豈可與蕞 始自六月朔、至七月廿日而止、過此寒甚、不可復躋

爾侯國同年而語哉、開其土饒奇山水、足下試汎舟於 攀云、余以二十有一日登、是日也、天殊晴朗、風伯

仙波湖物色之、亦必有若漁父其人、與足下問答足可娛 掃道、雨師灑塵、佛子羽流、寂然絕跡、余獨擅登覽

者也邪、且足下躬爲國史總裁、抑裁狂簡、教育英俊、 之勝、如記中所云、故今不贅、由此觀之、嶽神之寵

實人生之一樂也、君子居之、夷狄可變、咒於天下雄|我、勝於大和之遇王生也萬萬矣、僕亦以此自負、貴

藩乎、足下亦少自寬焉、弊邑、菊池氏時、盖始建學、 府距都猶近、書札一月可取報、唯弊藩在天西隅、節

及至加藤氏也、荒廢不修、絃誦久熄、加藤氏亡國除、 彼蘇山、紫海阻之、行李往來、動經半歲、僕今將歸、

擊然、又似海水枯涸、數萬珊瑚樹、一時從地湧出之瞽史、妄言天道、足下可發一粲、唯所崇者、靈光巋存、

狀、余神王甚、歌韓文公陸渾山火歌而敵之、亦一大| 大疆無闕、蓋有百神而擁護焉、乃至貴邸及第、亦

壯觀也、居數日、解熱海到繪島、上天女臺望海、其觀「復人馬不傷、片瓦無損、即善慶所臻、自天祐之爲可

風濤與烟嵐相吞吐、雪山萬里、捲天來奔、層巖巨嶺、 賀耳、頃來新雨、輕塵不揚、土木車馬、相屬於路、斧

皆爲之動搖欲裂、亦足以雄我膽氣、歸途取道鎌倉、周 斤之風、開數十里、于喂之聲、遠近相應、焦土赤地、

覽霸迹俯仰弔古、歌臺舞殿、鞠爲茂草、無不悵然、唯一被以文繡、公輸規之、工棰削之、木材作山、鋸屑成

鶴陵宏麗、萬古若新、使人肅然起敬、亦何威靈赫赫 丘、虹梁畫棟、不日經營卓鄭之徒、傾囊巨萬、戲臺

也、途遍探相中諸谷諸刹之勝、賴此陶寫、聊以忘憂、 劇場、稍復舊觀、觀者填街、士女如雲、舉袂成帷、

恨不與足下携彰考館實紀來、共辯小說稗官家之妄也、 揮汗爲雨、三市九衢、貨別隧分、既應且富、於戲亦

餘勇未止、又欲遊金澤問遺籍、半途聞都下災、興盡而 盛矣哉、樂國樂國、孰謂信美非吾土哉、足下聞之、

返、不仁哉祝融氏、既赭伊豆山、又煽虐於都下、灰-再遊之念、亦當未遽止也、僕與士騏、時謁駒邸、樂

品海、燼深川、髡柳堤、童麻谷、八百八街、大半島 山公子屢言足下、口津津不休、曩者讚候奉使如京師、

有、老弱轉死溝壑、賢愚玉石俱焚、使人酸鼻掩目、 孝錫文輔父子皆在扈從隊中、鞍馬赫奕、照耀路旁、

明曆以來、亦未之聞也、吁亦慘矣、足下聞之、再游|亦吾黨之榮也、足下聞之亦當躍然、及候之進階拜恩、

之念、或當少熄也、開是夜有火烏數千、廻翔乎黑烟 歌鹿鳴而反也、寡君往賀焉、孝錫文輔及儀也坐、

中、不亦奇怪乎、吾聞高明之家、鬼必瞰之、繁華狹 酒闌、二候亦口足下又置、僕與孝錫交輔相顧而謂曰、

邪游俠諸窟、其氣燄以取之、故五百年之間、必有厄「今焉得縮地置足下於二候之側、見其豪飲無餘滴´劇談

會、若無兵亂、必有水火之災、無水火之災、必有饑饉疫 | 風生哉、菘魚關東佳味、色美如桃花、亦足下所、

癘之災、是自天道運數乘除、雖裨竈子產、亦將奈之 是日僕與孝錫文輔、以此下酒、灑然寒生齒頰、亦三

何、唯天道大、故或過期、或不及期、未可必期耳、余非人相謂曰、今焉得以一鸞薦之子聽前哉、唯是物經宿

能如此哉、獨恨足下去留有制、不得濡滯、忽逢忽別、 之間、既上途、春日載陽、有鳴倉庚、華木滿山、雲蒸

飄若驚風飛電不可把捉、未嘗不黯然消魂也、嗟乎、 霞蔚、同游三人、或躺或步、或先或後、行歌相答、

僕與足下、弱而合、壯而離、離而復合、合而復離、 如澤雉脫樊籠、不復知微官爲何物、恨不與足下同此

不知此一段因緣、何其天之屢假之屢奪之邪、其夢邪、道上之興、漸過小田原、左折而入、歷真鶴、渡石梁、

將非夢邪、離合循環、莫有窮已、果如老儈言周秦之一到土肥、皆治承中兵戈之地、杉山今犁爲田矣、農父

數邪、則不久亦當會面、唯足下視聽不衰、前途可期、唯 往往掘得古鐵鏃巨杉根云、有鵐窟者、即源幕府所若

僕則髮既皤皤矣、加之目有玄花、耳亦蟬鳴、僕非嗽 伏、相傳當時有鵐飛出、甚硐漢皇厄井遺事、盖英雄之

名士、又無牙後慧、不知天何如豁我齒乎、一齒既落、 主、天必助之、古今若合符契、何足怪哉、又有眞田

一齒又動、將動將落、落勢不已、其相推奪如霜葉待「俣野夜戰之跡、想見其單騎相當、翻轉相刺之狀、數

風、岌岌乎危哉、每食飯粒皆脫落盤間、醜老日至、 百載後、猶使人相視凜凜然頭髮上指、亦何壯也抵

人不飲餘、白日睡臥、足冷如鬼、五尺之軀、毫無完|熱海、日浴溫泉、靈液所沁、神骨俱爽、不覺疾之去體、

處、僕恐蒲柳之質、先秋而零、不與足下復相見也、所恃|暇日出游海濱、觀沒人捕魚、如探囊中物、屢沒屢出、

我舌尚在、能言所欲言、飮亦不減少壯、是則或可與「俄頃滿船、是以海爲囊、以船爲厨、浮家汎宅哉、余與

足下再會相敵也歟、死生有命、會散有時、真宰氏司 數錢得生魚數十尾、投之沙上、潑剌如銀花、即命從者

之、思之傷心、置之度外可也、蓋吾黨散在四方者、 擊鮮、坐巖石間啖之、屢引大杯、澆磊塊、借漁人船篷

非會斯都、不得相見、乃斯都爲天下英俊輻湊之地、 爲席、醉臥其上、一大快活也、恨不與足下共之、一

亦猶鼃魚之有龍門乎、故春秋朝覲、載筆從駕、不以一夕行人棄餘炬草間、誤延燒伊豆山、火不滅三日三夜、

跋涉爲勞者、吾黨以有此樂也、如今足下匏繫一方、裹「不可鄉邇、數十里間、大木巨石盡赧矣、余夜登旅館

˙足不出、相見無期、我知足下之悒悒不樂也、僕與足後丘望之、海風扇之、炎烟漲天、其勢如千丈金蛇、

下別來又作數日惡、新歲輿疾赴伊豆、將以取暢山水|振鬣回旋於山谷之間、又如天裂缺西南、雷公電母之相

間、眞大快也、雖以三君之賢乎、苟非足下高義孰

林、池魚

思故淵者、我知足下之惓惓乎吾黨也、僕少歲來東都

游大學、所友蓋不下數十百人、而相視莫逆於心者、唯

足下及孝錫文輔、寥寥三人耳、居十年、自整宇林先

鑒足下幸賜海涵焉、伏審合家安穩、令郎風氣日 也僕與足下皆老矣、生別惻惻、腸寸寸絕、盖劇於二

上、佳聲 滿堂、足下 倚脉 聽之、家庭之 美、不亦樂 十年前離群之悲矣、彼一時也、美惡周而復始、客冬

乎、僕客中非無興趣、唯出則橫經需問、入則逐臭者滿足下携閨秀來、婚姻孔云、水清玉潤、娛亦可知、僕因

座、八面受敵、客旣散則惰氣乘之、高枕是耽、鼾睡如「得復與足下相會、喜出望外、吹死灰尋寒盟、痛定覺痛、

雷、筆硯爲廢、動負高誼、罪我之由、天寔爲之、僕|若既絕復蘇然、益嘆人不可以無年耳、足下勉旃自愛、

豈敢飾辭爲之解哉、亦唯訴僕鞅掌自困焉耳、開足下「蓋足下意氣慷慨、聳動王族、故樂山公子讚埃及寡君

家庭之美、樂則樂矣、唯再遊之念、未忘乎懷、如有不皆慕其風裁、是以開足下之來也延爲上客、賜以清

釋然也、蓋足下少長於都下、所謂籠鳥戀故、

子聰足下、別後辱書者三、副以佳詩、及鱖鯢之貺、 率無虐歳、僕又自謂年年如此足矣、何圖數年前、有

謹領厚意、敢不申謝、唯僕之疎懶也、未有隻字以報「司趣足下還貴府、匏繫一方、裹足不復出於疆、此時

復越子聰

牘

亦反首拔舍西還、相去二千餘里、中間不相見、二十

生易餃、而我先公棄群臣也、兄弟星散、各仕一邦僕

述著

男

輯羽

子

玉山先生遺稿卷之十

肥後 秋 儀

逐餘年于茲、天涯比肩、香若隔世、魚雁义易浮沈、僕自

謂此生不得復望見足下顏色灰、何幸伯牙倚在、子期

未逝、僕復從今候來東都、得重會足下者於都下、雙劍

相合、斷紇再續、而杯酒握手、懽然道故、懽極泣數

行下也、從此而往、一東一西、來往如織、一聚一散湖之臺、披雲之閣、表海之樓、爭號席珍、授餐屢給、

攬轡愈恭、雖僕與仲錫文輔、以臭味之故、亦同蒙優待

焉、置酒高會、不責以禮數、使藐諸三布衣得吐氣得

霄漢翩翩當世佳公子邪、木下侯風流憐才、詩亦可觀、盖染 玉山先生遺稿卷之九

豈足挂齒牙哉、寡君亦觀其詩、口嘖嘖稱之不舍、豈非

橋南之飲、奇興奇興、銻袍戀戀、終身荷恩、服之無「也、即芙蓉名山爲拙記惡書之污、不亦美人面上黑子

戮、何日忘之、臨別換征衣、非唐人之詩乎、意內稱長哉、不佞則不堪汗背耳、然足下有力欲負之走于南海、

短、亦唯情之篤矣、樂山公子餞行之詩、深之其爲愛才 則上巨靈也遠甚矣、過訪之期、以十有二日若四日、過

也、微意所在、不佞盖知之、不欲盡言也、乃足下旣 此則念後二三日、亦唯在足下所簡耳、餘面罄不悉、

爲公子知、則千載一遇矣、浮雲變態、豈足挂齒牙哉、

足下潑墨

與越子聰

一日三秋不啻、足下思不佳、不传之於足下也、亦復

子以

至、足下欣然烹鷄酯、月下復飲、頗作少陵氏書堂

邀李尙書之態、豈不謂風流好客之篤乎、迺不連引

大白、轟飲自罰、醉墨從横、狠藉盈、其貽潮時彥、

亦所不敢辭也、二分姪聯翩嚶鳴、寧馨可愛、可知館

則稱其名焉、仲栗翁百不憂哉、東川叟早旣辭去、恨

不能親聽峩峩洋洋之妙、因誦諸君贈詩、餘韻冷然、

壁上衆山皆響、猶能使人有悠然之想、其人益可念也、

不佞潦倒殊甚、飄然而往、飄然而歸、是夜司天臺書

雲物者、必當觀一客星犯德星於華館之上矣、今朝念

之恍若夢中、拙作頗有更張、呵凍録上、波磔不如意

可笑也、

於附上、照數收納、艸艸、

復北仲温

四九〇

佞適相遇於塗、而察其興未盡勃勃也、即復拉二公子之朱之孔陽矣、寡君亦復黯然乎足下之行、有

詩代購、以足下之清之不欲貨之也、豈可謂非慕仁者

之風者哉、前日橋南交綏而退、請詰朝相見、雄飲决

戰、足下勿後期、則幸甚也、公子作及木下侯之贈、

此爾爾、忽獲來敢、因審近況、欣慰欣慰、承足下欲不佳

書芙蓉拙記、具紅絲欄界以待、何圖足下逐臭惡之至

于此也、雖書之惡、足下已爲海上之夫、何辭售醜之

爲、即當一揮塞責、但以邸中鞅掌、歸裝日促、未果也、

蓋賜列侯歸例在四月、今幸會有禪代事、故列侯歸藩

弛期、寡君發軔姑得濡滯、迺近日當過訪爲四八九

隅、神飈王不能遽奮飛耳、士騏子章 時餅逃席、不

之飢口也邪、書此鳴謝、史記五本附上、鄙詩稿爲人

與紀世馨

昨夜之集、今晨之乖、條款南北、縣旌之念搖搖也、 則俄爾而寤焉、不見足下、頻喚田生田生、家人皆失

則惠郁雲、副以西山之菜、欣然一餐之、芳潔流齒頰| 笑、日田郎去己久矣、想當足下不堪醋風之逆、欲嘔

間、何其足下篤於不传之一至于此也、不知足下以不」之掩鼻而去、今接尺一、叙予醉態、果然果然、左氏

佞爲身有清風者邪、不敢當、不敢當、唯不佞思足下「昭廿三年侍講公所、故不能即附贵价、俟之俟之、鷄

不已、怒如調飢、則似哉似哉、乃是物、足以療不佞 鳴曲點竄未成、適有座客、艸艸不具、

氏之國、鈞天鏘鏗、萬怪千奇、使人爽然而自失也、

耶、我爲足下耶、足下與我則必有分矣、遽然入華胥

耶、笑笑、恨淹留七日、未能大叶胸中萬斛墨藩也、 者足下之過不使也、不传醉自外歸、陶然而倒、其

足下有意、來春必再游、以大吐盡胸中奇壑怪也、 猶玉山之頽乎、方此之時也、萍祝萬物、塊看天地、

惟祈惟祈、江生書、昨日還答、尚有後便、附足下書」醉中時時與足下、舌本間作侏離之鳴、不知足下為我

眉宇、尚有清水彩翠氣、士騏業儒、不圖菩薩爲之祖

者數人痛飲

無巡、辭句成軸、亦神靈之所助矣、歸來猶有烟霞氣、 勉旃、紋銀照數領訖、市街銀價膭踊、審悉來意所在、

在我襟袖不失也、足下如何如何、士騏昨日來、視其「祠堂土木日興、落成有期、勿勞遐想、

欝欝輩出、則不佞將開一頭地、而避三舍焉、

在宇宙間、亦何快也、江生之莊、好山環華簡審起居、欣慰欣慰、兄井田論、簡妙可喜、諸

子之中、岩生馬生河楚中翩翩矣、其他大抵相伯仲

也、要之諸生近來文章大進、益有關乎國家運矣、不

二三年、供、烟霞皆

在軒楹間、歌于斯、飮于斯、持螯振翰、頗覺斯軀殼

輕輕如蟬也、研水墨峰、供我揮洒、筒峰供我遞郵、

龍原天狗嶺、皆佐我欝勃之氣、而與足下去、令兄無恙、近日雙雙來、至囑至囑、

奪去、別無副本、以俟宅日、

長至之會、薄夜趨約、非敢後也、樊雉舉翅、動觸四

足下左祖文翼文、亦何爲劉氏之至于此也、子迪豪氣 价至、悉足下近狀、爲慰、平山之游、江生爲之主、

未除、議論聳起、快士哉、僕則弄丸其間、欲使兩家 家 富、供酒 舗筆紙 如林、咒足下與士騏 爲之左提

之難得釋焉耳、其餘群彥、莫非駿物、唯儀非九方皐、 右挈乎、使不佞吐胸中奇、以放浪乎山水之間者、實

不能一一相於驪黃之外爲恨、唯出入飄忽、乘回風兮|足下士騏江生三人之力也、不妄自東都歸後、裹足抱

建雲旗者足下耶、語音朗然、聳人視聽、儀也惰夫、 影、不出戸庭、十四年于此、如籠中鳥、動觸四隅、

髮既種種矣、酒間思臥、動頽乎密座中、奄奄如泉下不能奮飛、恒髒髒也、斯行始有冲雲霄之懷、拊髀小

之人、亦復足下麾以大杯、即氣激昂如虹、即復起滿一岱絕頂、下視薩筑諸州、逖按巒巨嶼、振衣虛空、則

引一再、未敢落尉遲氏後、唯恨不能斬將于旗耳、髑 温山屛風多羅尾諸峰、參差低昂、浮出海上、歷歷可

髏杯行、嘗爲高子式賦、未及録示、子式奄忽化去、 接也、時日脚下射、烟波溶銀、一線霏霏、若存若滅、

子期逝矣、誰復聽者、是以悶而不出、數年于此、頃 而一葦往來其間者、一東一西如織也、是亦奇觀也、

搜敝筐中得之、頗有似雞肋、因更張數十字、稍似成| 日既頽矣、廼還鑰而返、佳木麗石、怡顔悅目、不知身

一反矣、劉文翼鯨吸百川、多多益辨、固偏師難當

曩者與足下飲崇古樓也、都下名士星集、主人子才有 過圓覺寺、試爲余誦之子式墓前、則子式當含笑於泉

坡老癖、乃自飲不能一蕉葉、而最善飲客、洒美如上 下、而回儀也我既先汝反兵、而與彼爲伍矣、汝猶爲

池水、又能察視人酒腸垣一方、下物時中、甘苦得所、 人、汝焉得知南面王之樂之勝於爾哈伍也萬萬矣哉、富

亦唯子才之舌、爲之權衡矣、是以客能飲斗斛、不至 嶽記、僕實有耻焉、併往、蓋芙蓉秀色、爲拙文污、

屢舞磋磋、不亦善乎、釋明子綽、靄然儒雅、風裁可|其猶使姑射眞人之施脂粉乎、大損其婥約者矣、亦恐

念、關子肅時稱草聖、温克徧妙、不欲如旭之顚、可謂 足下之視而睡之、不悉、

君脩足下、嚮蒙過訪、適不在舍、致失奉迎、至今中一篇、足下學詩子式、故此附呈、覽後宜轉致之藤子祥、

懐快快也、唯藩事鞅堂、未得往謝、足下幸容恕焉、 唯足下者二人、哲學子式、亦恐不忍多讀、他日足下

復田子華

四八七

與松君脩

、不能一扣松門、

時時矯首、望孤峰不白焉耳、不知石鼎茶沸邪、煨芋

熟邪、唯弱臂未斷、謹裁鄙律一章以表此心、伏乞一粲、

與服仲英

余益嘆人間世不可復烏子敏

與梅亭禪師

以窺東武文人所著耶、則黄中吾黨一右臂也、豈不可

乎是可以消釋別思矣、足下兄弟、及士騏僧知密、各

有贈言、爲佳、不佞政有構思、二三日後必來、欲相

商量也、聯題待二三後奉命、

曉雪霏霏、佳興如何如何、老懶攤爐出衆、別思殊深、唯使彼爲東道之主焉、而絲通其路、

比來秋陽爍金、矮屋中如坐鑊湯爍炭、昨同二三友人、

避暑本覺精舍、向晩雷雨一番、天地如洗、凉氣蘇人、

大如寬大長者入關、除秦苛政、新約法三章相似、豈

不愉快乎、唯是凡夫貪心未除、過飲般若湯數十鍾、夜

途泥濘、體亦肥笨、蹩躠歸舍、流汗淋漓、頭痛岑岑

喘如吳牛、解衣就枕、 一日之間、凉熱屢易、

常如此、僕人見余潦倒委頓之狀、乃

進以足下所貽燉煌瓜、余視之、團團如一大綠玉、急

命兒遜也呼刀割之、猩紅燁然照人、即起坐啖之甘如

曩者與足下會曾心亭也、朝雨新霽、林水動喜色、池「瓊液、豈非生料白虎湯哉、少焉酒腸白滌、快不可言、

荷欣欣迓人、大非人間興、呪大川上人今之支公、譚「於是乎清風駕我、肉身飛揚、引着兜卒天上、一彈指

亦霏霏、見其拈白拂、一座風生、使人不覺膝之前席、 頃、苦樂易地者、非足下之惠邪、足下蓋知老夫犯

病夫稍有起色、枚發陳檄、豈足比哉、伊蒲之供、非|毒熟也、贈此物以待之、足下之於技也、可謂見垣一

不芳潔、恨不適腥羶之口、是以般若之湯、吾黨易至一方人矣、申謝申謝、近作八首、非不佳、唯鍛錬未至、

撓敗、譬之漢兵之非不鋭、亦唯不堪胡地苦寒、動失水傷於率易、才子之詩、往往坐此、是古今之通患也、

艸之利耳、是日也、先過足下之廬、得一二新鮮、藉腸

而往、亦猶擁盾當矢石乎、故終日飲、不至潦倒、即

足下上策矣、及燭見跋、主客交綏而退、亦足下之惠

也、此語勿令上人聞、或恐其愕然吐舌也、一笑、

婆心痛加斧削、令知趨向、足下幸少留心焉、昨夜醉

歸、日出始起、報是以緩、勿罪、酷吏難逐、故人難招、

足下幸自玉、

聞四日之夜、與黃中道別、杯酒到雞鳴矣、之子文雅

足下、果以長塗泥濘不至耶、士騏有目疾

亦不至、僧知密不知何故、亦復不來、空分空腹高心

先生、兀坐一片青氈上落莫也、一雨如瀉、亭前數竹鏘

鏘然有聲、獨坐聽之、亦不減讀唐詩、只是欠知音者、

可恨可恨、史記領取、宅期面罄、

與田元章

寥濶哉子華遷焉耶、抑道人絕學無為之不欲求友也、必有以也、何

多日也、馳介是問、謹俟好音、

客冬與服仲英擬遊高刹、既白上人、適知事僧辭以歲「絆不臻、不佞則與士騏、昧爽洒掃、淨筆研遲之、而

事蝟紊、上人喩僕等曰、上人欲强濟事、彼作鬼魅之「足下則易期、日已午矣、則不佞與士騏、賦詩泄思、

態、因更卜以黃鸝一鳴之候、僕等聲聞果、敢不唯命一人轉懊惱耳、詩今附回使去、請與難兄和之可也、

是聽、彼一時也、今也陽和布合、鷹化爲鳩、則知鬼|後會敢以十三日、唯不佞將有雇崎之行、故不奉命焉、

魅亦當化作菩薩也、呪花木爭發、時鳥嚶其鳴矣、期請以來月七日爲期、黃鳥間關、百花如雪、足下勿負

已至矣、僕等杖屨色動、延頸日望、何其上人寥寥無一 七日之期也、

字報也、不知寺後之幽、祇林之喬、熠燿其羽、猶未

大川和尚

爲俗事

復田子華

時時火爐上晝灰自娯耳、

與四八六

寥寥間忽辱手札、得審住況、爲慰、四日足下昆玉無恙、爲慰、不佞尚在牀褥、二三日來扶杖始起、

猶學步小兒、未數步便休、可笑也、豚兒病氣喘、夜

間數作、荊婦氣積不善食、力疾侍湯藥、雖余之在臥

哉、時或出手保護相助、大丈夫爲造化小兒弄、幾半歲 雷霆收震怒、俄然火輪當天、奇雲律兀而四張、金石

矣、乃足下昆玉、時能存問、至篤之愛可知焉、士騏 亦將爍流乎大地之洪爐矣、言接華牘、得審佳勝、政知

自山鹿還、拍手談彼地山水之美、病先生則開口大笑、川亭水木、颯爾健人、而沈李浮瓜、又且俯觀游魚歷

曰士騏之口、愈於庸醫之藥遠甚矣、豆牙之䏶、便見「歷、與波跳躍、其尾搖搖然也、子華足下、嘉樂哉、

生意、佳哉佳哉、乘問一來、

四 五

狂、日是夫也簡傲絕物、則不佗門中之履迹、暮非朝|寒甚、足下佳勝爲慰、子仁篆書藏板三枚附去、照數

之人矣、唯足下昆玉、滾滾其來、不佞接之、亦不異「領納、但雪後增寒、研水凍凝、墨灌不和、打板不成、

酬它人、足下尚猶不尤、其或得一語耶、則曰浸潤髓|宜俟天氣渙而打之爲妙也、打畢早還尤妙、翁及弟

骨、江海不啻也、至目不佞以豫章之材、不佞實朽腐、 無恙耶、不佞老衰、口如凍鶯欲復止、是以詩筆皆廢、

復郤大年

鼠跡矣、是以久之、來問者皆翻然棄去、曰是夫也病

、令人殆有起

愛我哉、足下昆玉、不止能知不佞、亦能信於不佞焉、 色、陳檄枚發弗也、佳哉佳哉、病懶不能協聲律

不佞之病且惰也、每有來問字者、隱儿而臥、否則瞪目和未能、姑俟它日、別作古風一篇代答、价回急、草

不應、或以詩卷乞雌黄者、往往案頭成堆、而上常有一草布字、不具

復田元草

雙璧無恙、欣喜曷已、惰夫一臥累月、不能出游 風雲凄然

乎微茫之間矣、佇立南望、不能多言、

弟議後事、以酬知已、不佞患眼、不能即往弔也、為

憾、余爲唱楚些而招其魂焉、則大渡亭艸木不支一木、廼離足下之愛私不使也過實乎、要之非知

與田元章

變、使人酸鼻、之子酒態俠氣、翩翩燕市之豪「可點發、是不依所以諄諄於時也、足下之文、近來

也、而以斥逐非其罪也、一旦幽憤、發疾而死、大損 進、過此以往、殆不能知也、勉旃勉旃、賤恙近有起

吾黨顏色矣、命矣夫、之子無嗣、哀哀寡婦、爲能賦|色、幸免不勝喪之誚、勿勞遐想、惠物領謝、亦知足

者誰耶、唯足下兄弟、交誼至篤、足下其宜與二三兄|下愛我至篤矣哉、伏枕草覆、

不勝顔之忸怩耳、蓋有好事者、彫羅漢于名山岩壁間、

此

識者比之美人面上黑子、言可惜也、僕無乃得非類且信焉者、豈能有此言哉、知我哉哲昆、信我哉弟、

不佞觀它人詩若文、莫有可删潤者、其或一二支應、

亦出不得已焉耳、唯足下兄弟及士騏、都下無双、堪

子徵之所

謂三春行樂在誰邊者矣、佳哉君家兄弟、摛藻若春花、

求侶如黃鳥、時時投以好音、推枕讀之復田春登

篆刻之役、乃累歲月、以塞其責、石甚嘉、刀甚拙、僕

回急、草草、

與郈淳民

者、豈足道哉、豈足道哉、

爲群鼠所穴使

迫、王宰始肯留眞迹、是可爲知者道也、難爲常人道也、

今旣還扇、書此解潮、唯扇頭有朱陵畫、是狂生能知

不佞矣、足下其問之

子章

復沼子文

復之遇不虞也、世傳市虎恟恟焉、不桉獨不敢投杼出走、 春郁傳足下之書、日祝融用事、風媒是急、不要其字、

是深信師之淸操不可磨涅也、師乎師乎、勉崇德、吉 唯扇是求、余険日不崔子豈無扇乎、不佳則誠懶矣、

人天祐、浮雲自除、荆山之璞、剖將有時、不必汲汲乎 何足下不察之甚也、夫人各有性敝、故卽諶謀於野則

三獻也、夫宇宙一火宅耳、人實如寄居虫耳、捨一殼 得、謀於邑則否、故揚雄爰爰寂、太玄以草、司馬

得一殼、復奚戀戀舊殼乎哉、彼庸愚之夫、嚇乎區區｜遷足半天下、史記始成、青蓮一斗、少陵太瘦、是不

敗瓦毀垣、而師則去之脫然、掩鼻之不暇、不佞深信「可强也已、若夫不伤、則甘眠三月、始能與天爲徒、

其衷坦坦然不動矣、佳稿皆倍美、詩窮而工者不其然「官知止、而神欲行矣、唯帷下生日日蟻附、不能三日

乎、欲言者皆附玄律去、是日暑甚、汗流點、不能「臥耳、題字不果、是己、少陵不云乎、能事不須相促

盡言也、

終日、院主亦善遇之、不佞之喜、而後可知也、初師 足下日微余題字扇頭、受而未果、寒凉二代于前、

田昨日見托、同朋會業、品評鴻烈之書、凛然令人欲飛

揚、不復覺炎熱在身也、所謂字挾風霜者、豈不信哉、

鴻烈氏云、神仙可致、黃金可成、足下文章、超乘古 讀來詩、縣崖孤松、大是氣象、第惜千仞之表、良匠不

秦、亦何難之有、足下勉旃勉施、所惠酒滓一器、可漬瓜 斧、終難作棟梁之用耳、然六月清風捲雪濤於霄漢間、

茄、厨婦之榮也、唯不佞一年三百六十日齋、足下之「使人披襟聽之、爽然自失也、豈不愉快乎、閉戶誦書、

所知也、而足下以此貽之、豈知不佞有湘累之嗜耶、 謝絕雜賓、是自足下上策矣、如世之凡根俗柯、其下

則欲不传之餔酤歡醜、與世推移也、豈敢不拜謝、玉山先生遺稿卷之八

遜日惠兩書、既審清嘉、適不佞往鶴崎掃先壟、以故不

在家、不能即還答、深負辱愛、歸後不得驛使、恒以

快快也、今日何日、邂逅高弟玄律于販鹽街上、途同

過辛生之廬、而展一唔焉、因悉師之留錫久岩、咏言

與獨生師

寥寥乎、士騏足下、秋氣稍佳、短檠可親、不知讀書有

新功耶、不佞日翘望足下之履聲、鳴于吾水竹之間也、

唯不佞自新號分之下也惕然自警、飢餓是懼、廬如蚂

殼、拙政改圖、乃詩書皆有油鹽漿醋氣、足下恐之泉

氣衝鼻耶、何其不可過之久、一至于此也、前日天壽

至、談及足下、予約挾足下過彼廬也、白雲黃葉、可

洗吾穢、不知足下允之偕過焉耶、請卜凉日、重圖告

報、草草作此書、附翼之去、

與岡士騏

書牘

著

述男

輯羽

子

肥後 秋 儀

玉山先生遺稿卷之九

諸老杜、而志取諸邢子才也、樓三面無所見、唯一面

暢、俯臨、則長江縈紆、萬竿矗矗挺立乎其上焉、樓

獸莫猛於虎、虎下山百獸皆竄引

樓扁曰水明、又名萬卷藏、一言景、而一言志、景取

說

雜說

雪山先生書、文衡山、加以瑞圖、卓爲一家之法、

書家口訣跋

恬有風塵表之想、世因稱爲茶宗、獨恨今之「五日流螢、六曰明月灣、七曰蕉雨、八日小艇觀魚、

石´務出新奇、賞鑑是競、好事日熾、利休之風|九曰浴鳧飛鷺、十日雪晨、四時之賞止於是、不必貪

荒矣、藩茶博士長順著此編、詳嫡派、以矯流俗、其多、凡自今盟之後、毎值良辰、必與客會於斯、讀書

弊應有瘳乎、長順之統、出自宗圓、宗圓快婿千家、 於斯、賦詩於斯、又從而飲酒於斯、不須復談人事、

妙契婦翁意、故其傳真且正云、事在田夷長敘中、不一尚有渝此盟、非吾之徒也、宜坐之樓下、罰以大白、加

四八二

豐臣氏時、千利休精茗理、一把茅茨、庭内丘壑、葛|成之日、主人與客、修林下盟而落之、得十詠標諸楣

巾野服、以爲其政、蓬蒿市朝、海鷗王侯、居止肅樸、間、一曰梅石、二曰鶯啼、三曰菜花畦、四曰竹凉、

不

賛、長順徵言於余、余不解茶事、盖甞聞諸寧野氏、

曰賞茶、一客得清、二客得趣、三客得味、過此名爲

施茶、言弗韻也、是言可書卷後、

水明樓引

當世書家、皆出於其爐錘之中、可謂東海無雙矣、此

帖最是其得意之書、摸刻精妙、藤實厚之所爲也、皆

古能書家之存神、亦足觀其所原焉

之俾出童羖、客曰謹聽命矣、敢問讀書、曰不求甚解、

陶淵明吾師也、問詩、曰視不佳猶佳、吾於詩似孟施

舍哉、問酒、曰薄薄不辭、空空不拒、柳下惠其若人

之徒也邪、客曰善、然主人直腹便便耳、此中空洞無

物、藏書不過數簏、自稱萬卷主人、客笑我誕也

伏、不敢微露其形迹、

有妖狐、操弓矢人立當蹊間、虎望見以爲渠子且射已

也、即挺而走上林薄、狐不禁喜、大罵日未之於菟也、

雖猛焉能敵我哉、虎聞識其聲、反走而齧其喉、狐之

肉盡爲虎之餔、唯丘首存焉、故假人威者、暫則可、

久則敗、

四八一

、引人幽地、漸入佳境、尙雅之士或取焉、

表、亦唯臥盡被穿之所致、豈非慕好凝焉而道成者耶、

甞茶識別茗理正傳

鍾元常入抱犢山、學書三年、後果得韋誕法於不言之

魏鍾繇書跋

人、門人滕賓厚屡謂、而得敢一寓目、幷雙鉤焉、先

余簏箱中、有徐髯仙小篆一帖、盖此老以意擬秦碑者、 生書、筆法秀潤、氣韻高朗、宛如會稽王朝堂、軒軒

視之斯相、其方圓廓落、雖未能酷肖、然結構遒勁、 霞擧之狀、是以片紙隻字、爲世所重、海之內外、咸

時有鐵筋玉箸遺意、則可謂具體微矣、余又藏李西涯|慕而學之、戶摹家臨、刻本如林、唯坊間所行、真

王雅宜篆帖、第王頗怪奇、李乏老蒼、要之皆非本色、豈 相亂、何物豐坊、有醜面目、往往誤人、其害非小、

如髯之茂美絕倫哉、拿州云、子仁未免墨猪之誚者、 是不可窮詰也、識者患焉、今滕生所爲、窮日之力、

盖論其行艸耳、非論篆也、而端重有骨、則於篆書亦|精思以成、故若是濯濯也、辛未春、滕生割愛以余

復爾、子仁書行世最少、因門人滕實厚雙鈎翻、 行、余乃携來東都、遂命上梓、俞世襲燕石者、以有所

公諸世同好者、壬申春刻成、神采宛然、更自青水、

是不可不書也、

哉、

徐髯仙篆書跋

右文衡山先生眞蹟、余友溝口子帳中物、未肯輕出示

若夫發掘之說、則其爲誣也明矣、梁武帝評繇書、如

右唐人七言絕句一首、後有李氏小跋、余夏六月二十有八日、肥藩秋儀書於東都龍口邸舍之中

鳳城帖跋

雲鵠游天、群鳥戲海、良不誣也、今觀淳化閣帖、所

存僅僅晨星耳、不知經幾刻手、而精神煥發、千載如

一生、種種變化、莫不畢備、孰謂非至妙哉、滕南雅重

鐫、公諸世同好者、人能學之、筆道之妙盡於斯

虎山帖跋

秋風、亦何其句意之偶合也、豈不奇乎、寶曆十年庚辰

視之、筆墨

溫籍、妙不可言、盖趙松雪眞蹟無疑也、僧義璨得諸

販故者筐中、滕生摸之、與眞無二、予爲鑒定、且

賞其優孟衣冠、有若言貌惟肖云

云、今壬申、余將西歸、囊無一物、唯此一帖、

足誇鄉人、余且問滕生、不知余裝、孰與李廷珪墨

者清事維寶曆十一年、歳次辛巳、夏四月、不肖弟儀聞訃之「無二、宛如兩倩女、不可钽辨、可謂精鐫妙榻矣、是

翌、二十有五日、謹於逆旅設几筵、陳香火、用清酌 日暑甚、余坐北窓下展玩、詩亦眞率、讀之如屐其境、

菓餌之奠、泣血稽顙、敢昭祭于亡大哥佐賀關尹花來使人飄然欲羽化、巻初龍口巖臼、人間苦炎熱、仙山已

與真

祭亡兄花來浦九皐氏徑就余案上攫去、疾雷不及掩耳、余盖茫然久

公文

神理綿綿、後人何則、孰加駑鞭、視我猶子、教育

全、猶父未能、我涕漣漣、何其不淑、荼毒蒼天、旨 趙氏天冠山墨本、北圃生所藏、筆法秀拔、坊間罕見、

酒嘉栗、言陳几筵、有知亡知、譬顙告虔、嗚呼哀哉、| 余借觀數日、頗覺長一格、未肯顿出示人、一日青山

尚饗

天冠帖

弟浦公之靈、嗚呼、儀夙喪恃怙、唯頼我兄、今也逝矣、

維寶曆四年歳次甲戌、春二月朔干支、不肖甥儀開訃 儀何聊生、公之在世、至孝至誠、奉職匪解、廉而且

之明日、設位焚香、謹以清酌之奠、西鄉再拜、致祭 清、力疾從事、靡有不成、友于相愛、篤於同盟、唯

於亡舅習軒先生之靈、呜呼哀哉、悠悠天地、滔滔逝 室惟遠、濶乎送迎、匏繫各地、心若縣旌、呪儀今携

川、先生不止、閔訃罔然、逆旅萬里、駣綿無緣、感|兒、萬里東征、公未見兒、唯聞遜名、來夏將謁、期

念昔別、宛若目前、先生秉義、老而益堅、矩行蜆步、在歸程、天何荼毒、不察忠貞、公棄我去、奄忽殤彭、

祭習軒先生文

四八C

書星至、開緘愓驚、鶺鴒急難、鴻雁悲鳴、呜呼、

余不朝繡、焉能掃瑩、儀與兒遜、痛哭失聲、關山邈

矣、有髒佳城、西望落日、涕淚河倾、公也雖逝、既

爽且精、兹供薄物、虔告衷情、嗚呼哀哉、神其彷彿

來享、

題跋

前脩比肩、在官清廉、同列稱賢、既退于野、止足不

愆、治身以儉、數頃薄田、摘蔬釀秫、克奉厥先、閨

門之肅、朝典存焉、誘進子姪、可繼可傳、精良筆硯、

浸尋書編、種樹移石、經濟林泉、瀹茗會友、聊樂餘

年、豈圖羲輪、倏忽虞淵、賢弟妹、舍館蚤捐、今

也九原、想當周旋、不爲芝草、必化芳荃、先生則爾、

之、後數日九皐氏雙鈎翻刻、副原本見還、視之四七九

朋

明珠在握、中道而碎、盖侯憫然惜之、其友子駿黃中

以鬼事來屬予、予少時、與君被髪而遊也、而今千古

矣、哭而銘之、銘曰、嗟伯忠釆眞而游兮、息看造化、

渺茫之鳥兮、從其所駕、是耶、

祭文

臣於龍口邸矣、世子嗣立、是爲今公、方其縗絰儼然

守田君墓誌銘

及閣老復禮曹參判書、既成、擇門人善楷隸者分書之也、憫然賜之白銀若干爲資、無衣食之虞、將以固 友也、溫語孫辭、不立岸異、其進講於公前也、毋甚

其志獎成之、君愈益憤悱、卓爾日上、屢以林先生命、 高論、卑分可行、諄諄然善於指導、故君之歿也、朝

說經於大成殿東廂、聽者稱善、享保四年己亥、朝鮮 之士大夫皆泣曰、君而逝矣、其奈無人於繆公之側何、

使者來聘修盟、國子先生褎然率弟子特異者、詣賓館 余始與君同社共筆研、余時乘醉吹篷、君則按紇爲宮

相見、而君與焉、廼學士申維翰、及張姜成、諸書記 聲和之、盖忻然相樂也、其豈弟率如此、君妻長溝氏

以詩結驩、旗鼓相當、大張吾軍、當時縉紳先生、莫|無子、字門人名辨爲嗣、儀脚君之病革也、倒屣而往、

或是先、既而朝鮮使者反國、林先生奉教屬稿國書、 則哭聲聞於外、問之其人、則君既已瞑矣、乃揖熊先

生入、相鄉而哭、途以某月日葬于城東可半里、日上

河原者、以儀之同社諳其雅也、請爲之銘、銘曰、山

蒼蒼兮水漣漪、埋玉於斯、孔固厥宜、

、

而君又與焉、命賜白銀、人以爲榮、五年七月遂召爲

本府記室、既稟二十石、是時靈雲公方鄉文學、簪筆

之士、比肩於朝、而唯君與熊先生尤見寵遇、而至亡

狀若儀也者、亦獲從二公之後進退也、及儀行脩林先 守田君、諱之成、字伯忠、號松溪、東肥岡津人、性

生也、亦熊先生挽之、井上君推之、故能相知於心矣、好學、以善書仕宇土侯、諸體遒媚、墨色靄然、侯深愛

十六年九月、君以經明行修、爲國世子侍讀、同辛淳一之、君爲人謹厚、士大夫推之、實後進弁髦也、君生

美授經左右、頗有補益云、十七年六月、靈雲公棄群 某年月日、以疾卒于東都啼猿里第、年三十五、嚼、

見星行也、君倉皇拔舍從之、越十八年二月、賜君食

祿比百石、元文四年己未三月十有四日、疾卒干家、

距生貞享某年月日五十有六年矣、君性湛靖精理、其

讀書必正襟坐對、几案上微覺有塵輒拂去之、其攝其子孫竟流落民間云、君井上氏、諱有基、字冲嘿、

昌育、奧州森岡人、父祖皆以醫名世、官南部侯、君 號雪溪先生、祖諱淨圓、祖妣某氏、考諱理安、妣某

幼誦論語孟子、稍長知讀史、箕裘非其好也、南部侯氏、生君及女某于肥州埜田村、而卒、再娶長溝氏、

見而奇之、遂舉進士、行束脩于東武整宇林先生、先一二世皆微、君自幼穎悟好學、常自日丈夫不學則已、

生日可敎、館諸昌平學社、君爲人和易、不敢與人爭、 學則獲天下名儒君子者、爲之附尾、不游則已、游則與

潛心簡籍、唯業是修、終夕不敢交睫、天祁寒不敢就 海內賢豪士、而爲之左提右挈、焉能區區雌伏草莽、

火、日火人惰、其立志率如此、先生稱善弗已、嘗 與時師村夫子之下上其驅、以嘗吾技爲哉、則有長風

其友仲文輔疾、君在側、口誦柳子山水諸記、語音淸 千里之志焉、州文學藍田熊先生奇其言、迺挾往東、

徹、冷然若風、文輔狂呼日、我其靑石白雲之人耶、 爲通謁於其所師事朝散大夫國子祭酒林整宇先生、先

即日飮食復故、衆服其强識、居六年、羽毛益美、一 生者、蓋世泰嶽也、從之游者、亦皆龍躍鳳翔焉、君

日口寒疾死、先生慟之、諸生皆環而泣之、日寺君天喜曰、我得吾願矣、於是日夜孜孜、讀書不厭、正德

於學、旣斂、徐視其篋、遺文如面、是爲死而不朽、君一五年乙未、我靈雲公開其貧肄業社中、躬比舍人都養

寺君昌育碑銘

君之六世祖、蓋曰柴尾將監、世仕菊池氏、菊池氏滅、

井君冲嘿墓誌銘

室、孔固且深、

里許中尾山常住院中、院主題其墓、日止靜攝心居士、生于寶永丁亥五月二十五日、卒于享保戊申正月二十

法謚也、其孤伯經見予、而泣曰嗚呼、文也不宵、安「三日、年二十二、以某月某日客葬于武城南里許蕁悳

能不朽吾翁、唯先生能不朽吾翁乎、則逝者存者皆不「精舍、肥人儀於君相知也、儀歸肥、別君三年、再來

朽矣、唯先生圖之、予遂爲之銘曰、賢哉翁也、訓子一即就木矣、君兄玄仲因文輔來、以請銘、儀與文輔相

惜陰、遺家以經、侈於籯金、市井其跡、志則雲林、 嚮而哭、曰被蒼者天、乃喪斯人、皆失聲、然後得銘、

囂而不囂、古之陸沈、于焚子誦、止靜攝心、休焉斯|銘日、於子反眞宅,以我爲客、

四七八

嗚呼、望其石宰如也、吾友寺君息焉、君諱顯玄、字 四七七

夏六月初七日卒、年六十有五、卜某日葬於城西

是其家庭雅言也、則來章奉以周旋、不敢失墜、以比

之羹牆云、可謂約且盡矣、寶曆五年乙亥春、我公新

建國學、士大夫靡然嚮風、於是君置菁莪館於大阪邸、

延儒生講經其中、而使邸中子弟日詣聽受、有所豹式

焉、是豈賤有司所能知哉、十一年辛己春三月初四日、

疾卒于大阪邸、年八十有七、邃葬於大阪大雲寺中、

其易簀也、尙手不廢卷、苟非有道君子、孰能在潰膽

决疣間、自如不變其常者乎哉、平生所著述多散逸、

誦咨諏焉、寶曆六年、以老致仕、乃使其子來章襲爲大 西岡翁、諱榮長、稱善九郎、其先豐小倉人、寛永九

阪守邸、食祿如父、報父功也、君歷仕妙應公靈雲公|年壬申、妙解公自帶移封于肥、而翁之曾祖市左衛門

隆德公及今公、凡四世、奉職匪解、六十有一年一日-者從徙焉、逐爲肥熊本人、後有故辭祿、以處士老、

也、年踰八十、猶能御悍馬、旋風掣電、不異少壯時、 祖諱榮之、稱善七、考諱榮親、稱善右衙門、妣橋瓜

人無不日矍鑠哉翁也、則足以察其所養焉、君娶金子|氏、祖及考皆逐什一爲生、稍稍饒材、至翁復出仕、

氏、生男三人、女二人、君誨子以四、日忠孝正直、 名編士籍、然翁性沈嘿、不好紛華、謝絕雜賓、以焚

西岡翕碑銘

公夫人、公使某媵之、後又使君往代焉、居十年、元|筐中裁存文二十餘篇、詩三百餘首、君豈謂是土苴不

文元年、又轉爲大阪守邸、增賜職俸二百石、寬延元足傳也邪、噫、儀自幼辱知於君、則孝子來章泣狀其

年丙辰、進班五十名火器隊長、若在邸、邸事治、 行、千里馳書、問銘於余、余時在東鄰邸、開訃一哭、

筆翰如流、然未嘗以削職廢學也、常與人讀藝相、 而後得銘、銘曰、翁之未休也、既武且文、翁之既休

其游及盖綽綽然有餘地、人咸服其精敏、凡西諸侯之「也、突如厥墳、其中美而孔固、子孫繩繩分如雲、

臣、守大阪邸者、每有會議皆推君宿老長者、而必有所

爲事、謹樸恂恂、若深山幽谷人、室中無它長物、

石爐茶鼎蕭然也、娶吉井氏、生一男七女、男名文、

字伯經、受業於予門、蚤入國學、卓有俊聲、六女皆

有適、翁晚厭市井喧、不欲財顯、乃傾棠市響、

益授伯經使讀之、故伯經之業、有成彬彬也、於是翁

生日落、然翁不以為意、人咸稱其善貽厥孫謀矣、翁

生元祿十一年戊寅冬十二月二十二日、以寶曆十二年

壬午則不解裝、載酒往問焉、君則欣然起坐對酌、言笑如上士、賜采邑、邑入百五十石、凡四轉爲更番騎馬使、

平常、徐謂余曰來去有數、不久酒且絕、我將爲餐霞「享保十年、加賜職俸百五十石、初公女爲久我右府源

乳哺之、又從而噢咻之、則使斯民之熙熙若陽春、同躊|萱野翁、諱儀章、字可貞、一字市平、別號考澗、考

壽或者、君盖與有力焉、豈不謂功等良相矣哉、後四|諱昌的、妣石川氏、延寶三年乙卯秋九月十有八日、

年、以老且病辭職、不允、先後凡四辭、乃免、何賜|君生於肥熊本府、爲人質直、好讀書屬文、屢客京師

優給若干、老于家、君自喪明後、益精於音、好吹鐵笛、 東武間、故游道甚廣、凡海内知名儒雅、若徂徠先生

彈琵琶、別搆一室、顏曰天際窟、廣狹裁容植槽一面、蜕巖翁之徒、皆莫有不爲之通刺修交焉、其在藩、與

靜夜獨座其中、弄撥一再行、四紘冷然、與天籟相應、 塚退野藪慎菴、相視而善、皆國之望也、君練習北條

竹月娟娟窺人、其風韻高邁如此、君晚得膈噎之病”不「氏兵法、最善射、劍技鎗法、亦不落第二、人服其多

食三數月、惟酒是恃、余時自東都歸、開其若是也、 元祿十年、召爲藩親兵中士、寶永七年、始命為

我公之仁斯民也、既已

萱野君碑銘

民免於爲庸手刀腸胃矣、於戱、館之左右置武學、東日東榭、西日西榭、凡國之 至既反眞矣、實寶曆十年庚辰冬十一月十有三日、日

紘誦按藝之士皆造焉、邦內靡然嚮風、公日、文武之 南至前三日也、卜菜日葬於萬日山先瑩之側、復陽洞

學備矣、唯未有醫學、其如我赤子夭扎何、六年丙子」之稱、君盖宿知之矣、年五十有九、著復陽洞集三卷、

冬、朔再春館於角井、十二月二十有七日、有司擢君 藏于家、娶坂田氏、生丈夫子五女二人、男長杶、次

爲醫學教授、先是君既喪明、故得拜命於家、自是廩 松、次桂、次桃、次棣、皆有才學、門人受業於家塾

人給粟、轎夫從之于館、優老者也、君則日夕究思、 者六十餘人、與長子大年胥謀、磨貞石乞銘於儀、既

議定科條、以誘進諸生、嚴和並至、館中肅然從誨、 成、請盈上人而書之、皆君之石友也、銘日、其來也偶

盖三年入館者三百有餘人、軒岐家之言大明於國、而「然、其去也偶然、隱若此人兮、舍我而仙邪、

紳之間矣、寶曆五年乙亥春、我公新興國學、日時習之人邪、其不以生死介意如此、後數日、聞

也

四七六

館四七五

西岡橘公、而賜之序、於是乎君之文名、藉藉乎縉

人、本姓林田氏、菊池肥後守從五位下諱武時寂阿公

邨井君碑銘

一開一闔、奇在握中、

墓誌銘

清白爲質、揮揚仁風便面贊應人需

手兮遊圃、

酒器贊

多買燕脂、巧書牡丹、何如美酯、染爾朱顏、

酒厨贊

仲精、岡士騏友善、皆博强知名之士、君日夜切、上

纔有吾我、枯朽爲兵、禪秀派劒法贊

譬之承蜩、一累五丸寶藏院鎗法贊

之疑乏化

蘭猗猗兮幽谷、疇其搴兮比德、君子佩兮升堂、庶幾竹堂熊先生、慎菴藪先生游、與墨君徽、水斯立、加

揚兮國香、

群書、旁至天文算數律曆、莫不通曉、從固菴藤先生、

墨蘭爲蘇公倫題

雲中喬木、奚棲奚吟、唯吾與爾、空腹高心、

書蟬賛

三世與其潔、飲且啄、涅不緇、玄尙白、

之裔也、事具家牒、曾祖諱能長、祖諱能道、考

諱能敦、字知安、號容膝先生、妣江氏、君以元祿十

五年壬午夏四月十有三日生、生十一歲言詩、稍長讀

、實於不懼、發於無端

轉身一路、月白風清、

挹瓊漿兮吮玉露、携子、邨井君、諱能章、字見朴、一字淳民、自稱復陽洞眞

下其論、得失相貿、故特濯濯也、君業醫、然惡世方

技家專重 奮然獨以仁術自任、趨病家尊卑一親、不

爲低昂、人聞其履聲、即有起色、所全活不可勝數、

延享三年丙寅八月、西海道巡撿副使夏目公、至薩州

疾、隣國禮當使醫員往診問焉、適之其人、官使君代

其職行、往來踰月、莫有敗事、勞以白金、寛延三年

庚午、今公即位、公有疾、召見問治、應對得宜、公

亦尋愈、賜歳時之拜、於是乎君之醫名、大噪遠近矣、

君至性敦厚、不事華飾、文如其人、行如其言、聞人

之有善、喜躍不任、嘗録邦内孝名聞于官者、先後若干

人爲傳、名曰孝子記事、以山鹿郡孫二郎爲首、孫二郎

善事母名顯海内、京儒蘭齋傳之、重其錫類也、書成

録上、公覽而嗟賞久之、乃託之松山源公子、及大醫

北肉嘉遯、東邦儒先、質抱大器、派分冷泉、蟬蛻異、

喬木是遷、韓使奇相、前修比肩、門風高峻、群英萃

焉、進退無耻、孰如厥賢、

門、有交集行于世、

那波道圓堀正意石川凹、皆

脊山、因稱北肉山人、林

惺窩先生肖像賛 姚生姓藤源、定家十二世之裔、名肅字欽

鐵盾撞入、帳下風揚、屠狗之技、唐突楚王、嚼酒歌

肉、芬激劍硭、鴻門英氣、爲伍子房、

首陽之下、北海之濱、聖之淸者、古之賢人、

樊噲賛

卓彼先覺、耕于有莘、聖之任者、足稱天民、

伯夷叔齊賛

伊尹賛

中有靈物、物若九淵、有時一現、法雨彌天、

夜照萬卷、晝掛百錢、柳塘花塢、地行神仙、

杖莫如信、有立卓爾、可行則行、可止則止、

藜秋銘

滿腔春風、樂在此中

一聲何處、山谷風生、幽人未睡、松窯月明、

淡黑鷺爲大醫合橘公題

書虎賛

淵其嘿、神其德

南極之壽、南極之精、所愛何物、南溟之震、

壽老人愛龜圖

參軍主簿、合而化仙、長髯短軀、皆出自然、鳧脛何續、

雙舃朝天、鶴兮俛啄、高乎肩´瞻彼搖頭、匏瓠繫焉、

顛倒衣裳、玉皇案前、

壽老人雙手據案、兩脚朝天、掉頭作戯圖、應綾

部氏之需、

天地括囊、無不吉祥、

布袋圓滿、大腹圓滿、兜率天宮、明月圓滿、

大黑賛

玉人背面、無限春愁、萬呼千喚、不肯回頭、

題布袋禪師指月圖

天下亡羊、此子逐鹿、不見多岐、斷竹續竹、

背面達摩賛

菩提達磨賛

佩刀銘

人着勝地、勝地引人、能使人遠、能使人親

銘

上堂、余欣然從之、及至、唯見學士戴烏帽着紫袍、

骨貌不甚奇、威儀言語亦不足觀、而林先生及從

記亦不在座、唯見筆硯狠藉、旁有一二諸侯文學、及社

友偶語耳、而屏帷几席、禮不甚設、皆曰、外國之人

臣、我侍宜如此、余所見不如所聞、意甚不樂、桑名

侯文學松久徵在側、勤余通刺呈詩、余不欲之、乃索紙

筆大書山陰夜雪四字、付座人而出、時春睡始醒、花

影在聰、曙鼓鼕鼕也、

酒厚銘二首

常毫毛孔陽、升君子堂、

酒瓢銘

銘

大是盛事、余欲一見異邦人物、而館吏誰何、不得輒-染毫成雲、可持贈君、

入、在戶外徘徊久之、忽見讚州文學仲文輔出來、延余

圓硯盖銘

動政、不在扈從隊中、則往信天不假余良緣矣、一夕夢|潛在匣中、可當一龍

偶爾到鴻臚館、館外車馬鼎沸、聞諸侯文學在內唱酬、 研匣銘二首

使入京師、亦復參差、不得相會、今玆寶曆十三年癸一以短入長、倏忽飛揚、

末、聘使双至、期在季秋、屬館事繁、留余管轄學

余時年十七、不得從之、志氣勃勃、常以爲恨、寬元 間不容光、寸有所長、

年戊辰、朝鮮使又來、余從駕自東都還、在途中聞三

會靑泉學士張書記等於大阪本願寺、詩卷滿囊而歸

短劍銘三首

享保四年己亥、朝鮮使來、先師屛山先生及斯立、往一佩之衛身、消則不神、

其嘿如淵、玄之又玄、億萬斯年、

而圓、靜而玄、坤配乾、壽萬年、

朱筆滿所欲、屢空非好、

、禮儀具備、

四七二

記 夢

而吾諸滕無立錐地、半通之銅、猶不可得、呪大將乎、 忍別、摻其手而謠曰、有美人兮乘桂舟、汎容與分放

吾將掛冠退耕於野、唯懼妻子窮餓、無所餬口、是以「中流、懽未極兮其離憂、翩欲逝兮且夷猶、曲一肉、

杜門怏怏不樂也、因泣數行下、重兼曰無庸傷、臣策一滕公戀戀不去、內侍起舞、且謠曰、采芙蓉兮干中沚、

之熟矣、臣聞清盛爲人也、悅人媚己、若將加之其膝、 素波激兮濡羅綺、杳渺渺兮思公子、胡能忍分別千里、

是婦人之仁、易與耳、若從臣言、取大將易於俛拾地又送一日程、如之累日、逐誘致京德大寺館、飲燕極

芥、實定日若何、重兼日公盍姑游藝嚴島、以祈所謂 懽、厚賜金帛歸、內侍相謂曰、妾等隸平氏、今既履

神女廟者乎、初盛守藝、祈貴於神、夢神貺己雕戈|京地、豈宜不見我相公乎、邃往謁西八條第、相國出

一、既寤、得之枕所、銀箍其柄、狀如所夢、清盛葆「見、曰姬等何故至此、內侍告以滕公事、相國笑日京

器而藏焉、於是乎爵位日、政柄歸握、嚴斷無禁、百戰 畿之地、百辟神祇、比比靈應、何禱不祚、廼實定不

百勝、頤指色使、莫之能忤、氣息所加、枯槁盡蘇、是一於此、而於彼也、是能敬老夫所崇、亦猶敬老夫爾、

神之假之威靈矣、清盛爲置奉祠者數人、享祀唯謹、 老夫雖耄矣、豈坐視人敬己、而不思所以報之哉、廼

歲時匪解、又置內侍伎樂二八、日夜鼓舞娛神、神未使其子內府重盛表辭左大將、而奏故滕納言代之、班

厭平氏之德、雖平氏唯神是聽、臣故曰宜往禱焉、祝「在於宗盛之上、實含人滕重兼之爲也、青史氏曰、重

史陳辭、必問何請、公告以情勿有隱、歸又當從內侍」兼可謂善爲主策矣、以平相國之黠、猶在其術中不悟、

尤者數人抵京、內侍有言、命相國微聞之、相國沾沾呪它人乎、志有之、日神不欲非類、實定之請神也、

自喜、聞之必德於公、是陽徼福於神、而陰餡相國也、 非類也夫、詩云凱悌君子、求福不回、實定之求福也、

臣故曰取大將易於俛拾地芥、公曰善、即齊戒往謁嚴 回邪也夫、可謂辱滕宗、

亦當班進、平氏之族、於斯爲盛、金印紫綬、蟬聯於｜出入金石三奏、及其歸也、祖者皆及海而還、唯內侍

朝、與馬冠盖、相望於街衢、田園第宅、相屬於國、

乘舟從焉、行數里日昏、內侍將辭、滕公爲不

島祠、留祀七日、潔粢豐盛、嘉栗旨酒四七一

倘能赤手相搏、勢若風火、衆皆披靡、信連度彼衆我｜滕德大寺實定辭納言、稱疾不朝、舍人滕車兼夕焉、

單、竟不得脫、欲自裁、身不持寸鐵、自掖門出、將|問日牀第之不安邪、抑無姣麗御於側也、公辭焉、重

趨王所、有一人尾至、蹤以眉尖刀、信連跳踏之、貫 兼日、然則臣知之、大將之選、次當及公、而平宗盛超

股遂就捕、衆鼓譟致諸平宗盛之所、宗盛坐信連於庭、 遷焉、公之快快不樂也、無乃是邪、日然、清盛身為

立罵曰匹夫、若何抗王命、若何敎而王反、若何匿而一相國、威奮内外、天子拱手聽之、群臣震恐、女爲王后、

王處、若何多殺官人、獄史其鞠問、速其處斬、勿有 男爲列卿、重盛宗盛左右大將、其季知盛、若孫維盛、

日嘻、笛者王之所愛也、王常日百年後、以是爲殉、 赦、信連日臣何抗王命、禦抗王命者耳、近有人言盜

而今遺之、敵人見之、必謂我無人、即取、馳及於半途、夜闖宮、臣以謂鼠竊狗盜、怠於干趣、夜半兵至、臣日

跪上笛、王之喜而後可知也、日微卿幾爲它人有、命「人言果信、聞亡賴少年動假朝旨、爲賊於鄙者、往往

信連從行、日勇夫死名、行止奚擇、唯臣在王宮人莫「有之、臣謂是亦亡賴奴輩假朝旨耳、故曰何詔之有

不知、且職爲兵衛、曠宮非職也、逃難非勇也、人必謂「豈抗王命哉、吏士數問王處、信連笑而日王實無反狀、

臣非夫、臣請殲敵來未晚也、信連反之、衣青袍、衷甲、臣又不知王處、縱知之志士何言、呪不知乎、今豆俎

佩衛府刀、大闕宮門、坐待、光長等夜襲高倉之宮門「在前、身分魚肉、我何愛死、汝勿復問、臣首可得、

焉、光長騎入門、呼日王反有狀、光長等奉詔來、王朝臣舌不可奪、遂不復開口、聞者皆義之、清盛日壯士

速出見、信連爲不開者、日王適出不在宮、有事告我、也、減死一等處流、初有盜行劫於京、追捕者不能獲、

光長日臣奉詔來、王果奚之、衆入索王、得王者有賞、信連追及於堀川、死二人捕四人、由是命爲兵衛尉、

信連日何詔之有、匹夫不下宮門大不敬、光長驅士卒 勇名開于世、及高倉王即世、源將軍既誅平氏、而開

而進、信連按刀叱之、日身是長兵衛尉信連也、近爲幕府於鎌倉也、梶原景時薦之賴朝、食邑於能登終身、

糜、身首亡餘、衆色撓、廳卒金武奮而獨前、衆從之、「以其忠勇也

信連抽刀而起、大呼力戰、連殺十數人、信連刀折、

記滕德大寺游嚴嶋事

莫不扼腕切齒欲一事厚清盛腹中者也、世豈無勝廣乎、 原別館、清盛大怒、即遣判官光長等、李甲三百、以

顧有待耳、今王者一院之第二子也、若使以次及邪、 詔流王於土佐之畑、而賴政子兼綱與焉、清盛以未聞賴

王當踐位、何其低首忽忽不樂之爲、臣竊爲王弗取也、 政之說王也、光長兵未發、賴正夜遣使遺書王、日事

今王下令、擧義兵誅平氏、上則以免二皇之憂、下則 已泄、王速出宮、往保三井寺、衆徒義烈、宜可以急

以除生民之害、是孝道之大者也、夫天下之有積怨深 抵者、在敵尚可、呪王乎、王毋遲疑、老臣繼至、王

怒於平氏也、譬之措火薪焉、火辨於突之日久矣、今 讀書、倉皇不知所出、信連日王蒙衣爲婦人出、其孰

王一起扇之、則天下翕然煙至飈起、燼平氏可足而敢誰可、從之、宵逃、宗信豎雇從焉、傘及於寢門、

待也、臣雖老矣、猾能據鞍、臣子雖愚可供驅役、王|嚢及於大逵、王踰渠、路人目逆而送之、日美則婦矣、

誠聽臣、臣請馳檄召諸源、諸源之多士、羽有某某、攝 抑丈夫也、王懼、趨愈疾、信連止衛、視玉笛諸寢、

、是以天下人人一聞其謀、告之平宗盛、宗盛大驚、告之其父淸盛於福

豆有某某、奥有某某、是諸源之最俊傑者、皆能騎悍馬

彎勁弓、帶利刀被堅甲、戰如雷霆、解如風雨、莫不

一人當百也、而亦皆有積怨深怒於平氏矣、今王以此

衆戰、孰能禦之、是以千鈞之弩破潰癰也、兵未交而

勝敗之機既决矣、庶王熟計之、王猶豫未決、初前司

維長者爲少納言、善相人、時人號日相少納言、嘗相

王曰、王龍鳳之質、貴不可言、後必王天下願自愛、

王信之、故途聽賴政之言、迺使新宮義盛、誰更名行

而傳檄馳徇東國、熊野別當湛增者、平氏之臣也、

記源賴政說高倉王及信連獨戰事

記事

有某某、和有某某、江有某某、甲有某某、信有某某、

述著

輯子

肥後 秋

羽

逐源賴政夜見高倉王、承間屏左右而說王日、平清盛恣

幽上皇 廢立、其孫爲帝、己爲帝祖、於是挾幼

主弁天下、天下惴惴、唯命是聽、襁褓天子呱呱耳、

清盛名曰相、其實帝也、惡旣貫盈矣四六九

一大甕、碌碌塗污石子耳、合之則是、離之則非、則「玉山先生遺稿卷之七

蹄酒一盂而祝日、甌窶滿篝、汙邪滿車、五穀蕃熟、

穰穰滿家、臣見其所持者狹、而所欲奢、故笑之、我

聞之學佛之徒、日千刧學佛威儀、萬劫學佛細行、

後可成佛、若斯其難哉、余今見子所爲涓涓墨潘、

坐塗石、是不過一搖五指、運枯管之勞耳、亦何難之

有、乃以若所爲、求若所欲、而不爲淳于髡之笑者幾

希矣、亦何功德之有、翁日雖然第記之、余叉謂叟日、

我聞瞿曇氏昔在靈山、彈廣長舌譚妙理、諸弟子記其

言、載在貝多羅葉者、自如是我聞、至作禮而去、其

文凡六萬九千三百八十有奇、名日法華經、今叟所瘞

之、髡曰今者臣從東方來、見道傍有穰田者、操一豚 光明、山河草木、盡變成黃金色、放是乎

有、翁嘿然無對、

翁時取梨栗啖之、拾石多得梨栗益多、故群兒競趨之、余曰庸詎傷、夫妙理無說、苟欲以說盡之乎、瞿曇氏

貢石不絕、盖期年寫經竣功矣、乃盛以大甕、瘞諸爽之舌徹矣、故不說之說、衆妙存焉、故曰數車無車、

燈之地、磨貞石乞余記其事、余問其所欲書、翁日吾「有成與虧、故昭氏之鼓琹也、無成與虧、故昭氏之不

願以此功德、上自祖宗、而下至妻孥及群兒、同生天 鼓琹也妙云妙云、法華云乎哉、今子超大乘而上之、

堂、受諸快樂則足矣、余日叟亦聞淳于髡對齊威王乎、是爲善轉法華者邪、孰謂我心非石不可轉哉、其功德

盖楚大發兵加齊、齊王使髡之趙請救兵、齋金百斤、 雖巧曆、盖亦無能算也、是可以記乎、翁莞爾而笑、合

車馬十駟髡少之、因仰天大笑、冠纓索絕、王怪而問|掌膜拜曰善哉、余見其十指開蓮華、衆石點頭、放大

瞿曇氏之經歸置案上、盥嗽焚香、寫石以法華、又課村兒拾石、

壞已久矣、亦何功德之略地遵海、到八代城、逐來觀斯潭、潭之四面、青壁

斗絕沈于無底、其水幽幽、色若染藍、其上秀石綺錯、 南郭服翁生于某年月日、以寶曆九年己卯秋七月二十

美卉被之、蓊鬱間、葺茅茨棲神焉、有孤松直前、特 有一日卒、享年七十有六、業承其後者仲英、儼然在

異可觀、蕭森使人興敬、冥冥之中、豈有愛護之者邪、 衰經之中、朝夕哭奠未敢癈、苟少間則又搜其饑中、

從上俯瞰潭內、圓其澄潤其腹、而口甚狹小、水從此 陳其生平書畫服器而泣之、予屬往弔焉、先是予收翁

而吐、爲淺渚爲淪漪、爲潺湲之流、蘋藻鳧雁、點綴|醉畫芭蕉、偶爲人取去、今不復存、予令觀翁之遺書、

其中、遠近之山環拱、蒼翠欲滴、實郡中第一勝槩也、涔涔涕下、口不能言、欲炙之色、盖亦形乎外交、仲

余審視其狀、則悟曰琵琶言容也、綺美言景也、其嘈 英因以翁十三四歲時所爲墨竹一紙贈之、其末有周雪

嘈夜鳴者、則風而木而石而虐牝相叩也、何足怪哉、 寫三字、盖幼字也、其千尺干霄者、盖既朋乎此、距

樵夫牧兒之說、不可信如此、今玆之夏、我公從東都「今六十餘年、墨淋漓若新、予謝曰、我雖非不欲之、

還、取道信中、過觀所謂寢覺牀者、浦島郎盖徐于於「然焉能忍以我私、奪人之羹牆爲哉、敢辭仲英悽然前

斯云、水石之奇甲于天下、我公旣醉勝蹟矣、亡幾上一席、把我臂而謂曰、子旣善我先人、又善我則置諸子

途、恒以不能剪取其半幅、而置諸行中爲恨、歸藩之所、亦猶置諸外府乎、我以此永示世交之不渝焉、子

硬、尙猶夢寐於彼境矣、今也得斯潭、欣然而謂曰、 毋辭、儀則起而拜惠曰、旣已割愛見貽、敢不唯命是

不知何物壺公縮地於此、以慰我心目耶、抑造物者之一聽、遂命工裝潢、歲藏齋中、時又展挂壁上、焚香而

爲莎寵於我也、我而有之、復奚它求之爲唯游豫之度、 望之、乃有冷然來灑我者、我未嘗不改容想見其淸高

過爲流速、故難樂屬仁智乎、不得敢久之、因召宇彈

而圖之、命大夫米著而詩之、且使臣儀也爲文以記之、

詩記旣成、我公大悅而日佳哉、是吾之徵招角招也、

間聚石寫經碑記

也、

服翁墨竹記

狀、開者竦然莫不流涕也、余素聞而誕之甲戌冬我公

我 得以比於轉附朝佛之游也夫、

翁家海上、飯後日行沙際、拾小石扁如基子大者、

四六七

琵琶潭一名綺美潭、在葦北山中、問之土人、日有

戊寅冬、今公有命、欲觀其彝器、於是十一月九日、 師綺美者、開其勝來彈琵琶於絕巖上、響振林木、白

景舊齊戒盛服、稱觴上萬年壽、公則起拜觴而日、是 雲爲遏、潭中之魚、咸噞喁出聽、彈者興發、不覺投

我祖宗口澤之氣存焉、寡人敢不徼福祖宗、念其寵功 琵琶起舞、誤陷於潭以死、故名焉、嘗有人夜過之、

臣、貽厥孫謀、以立邦家之基、廼受一觴、其色洒然 時風恬月朗、萬籟俱寂、忽聞水上有聲、如私語如裂

也、公亦以觴景舊、日女爲雄尾、女能繼而先志、輔、帛、如風雨雜至、四粒之妙、與撥低昂、種種不可名

琵琶潭記

師字婦帥字

勇爵、舍女其誰哉、不知女亦能雄飲諸、正景謹對日、酒極則亂、益田大夫素不勝勺飲、是日也志以師氣

臣死且不辭、呪餘瀝乎、卒一觴、及旅、觴次行、 温克如初、可謂善不亂矣、大夫還家、儀記其事

終而復始、正景叉嚼一觴、公曰雄哉、邃錫之、載在「且申之以戒、日凡我子孫、若雲若仍、攸之觴者、捧

諸府、旌戰功也、正景退、巾笥藏之、永傳于家、號 如穀玉、飲弗敢揮、醉勿過度、言勿由非、是器是燭、

日大進之寶、志戰賞也、詩云、有力如虎、執轡如組、永永莫之敢違、尙保我家哉、衆皆辟席、對日謹聽命、

又云、赫如渥赭、公言錫爵、益田氏有焉、五世至嗣

洶也、事聞東都、乃簡書方伯、出師討之、我公時述 翼寡人、不墜家聲、寡人無忘而舊勳、女亦忽泰爾所

職、在東都邸、實以十二月六日、奉命發軔焉、晝夜 生、景舊越席再拜首受而對日、主臣、臣之先柝矣、

兼程、不日抵揣摩原、威命之行、孰能禦之、明年戊「臣願負荷焉、臣雖怯懦也、苟有緩急、賴君之靈、幸

寅春二月拔原城、臣正景先登、臣陳佐獲厥渠魁、是「能一鳴、豈敢憚筱、亦唯翰音登天是懼、乃飮如其祖

以我師功乎與國矣、越三月朔、奏凱而旋、飮至策之數、公大悅、終宴、威儀秩秩也、徵角之音洋洋也、

勳、進秩有差禮也、後更卜日、宴功臣於花圃之宮、 油油以退、詩云、既醉以酒、既飽以德、是之謂也夫、

廣恩惠也、其於初筵也、公先親飮一巨觴、欣然屬正「之觴濫乎寬永戊寅、漸乎寶曆戊寅、蓋亦有數焉、則

景而謂曰、是役也、女先衆鳴、寡人之雄也、寡人爲福祚之來也滾滾、餘波所及、豈可測乎哉、然余聞之、

大夫景舊、奉職匪解、名位日彰聞矣、今寶曆八年 也、昏黑到秘圖窟、雷雨大作、秉炬而入、濶可容數 觴、朱其質、塗銀其唇、如月之恒之狀、國之始封解

百人、 _ 大石錯落、有水沒髀、冷不可言、石柱屹立、公錫諸臣益田正景也、初寬永十四年丁丑冬、耶蘇妖

宛若琢成、石乳垂垂下滴、旁行二三百武、窟洞漸狹、賊作亂、萃天艸、競執左道、眩惑蠢民、薄海之西

山行草莽中二十餘里、豺狼所嗥、絕無人跡、亦裔埜

一徑仄仄、蟠根交錯、受足如階、不知幾百級、 方今使吾儕小人千里裹糧、不見畏塗、得優遊山澤間

猿臂相引、倒縣而下、愈下愈險、心覆如沐漩溉鳴于|者、蓋亦莫非神祖之德之所致焉、豈不魏魏乎盛大矣

下側、炬屢滅、冥行七八里、嘗險飫阻、歷小室、過一哉、詩云高山仰止、景行行止、此之謂也、明日辭赤

回馬阪、出裔埜、而始開朗矣、蓋不交睫兩夜、下上|池氏、取道甲府、跋涉四百餘里、旬有五日而反邸舍、

山八十餘里、僅抵吉田、始得平地則鷄鳴矣、主祝雁 八月初二日也、斯行所歷、奇勝非一、然余旣拊髀芙

丸家、主人雖齊乎、澆余以酒、余引滿一再、舍爵則 蓉之巔、服日華、餐太古雪、則天下之奇盡矣、雖有

黎明矣、二十三日午後、謁木華氏廟、即吉田下宮、比一它勝、豈足道哉、但二窟者、大嶽精氣之所出入、故

須走殊爲壯麗、是日探胎窟、叉明日辭雁丸家、南並|記中得隸焉

顧下之望上也、亦若是則已矣、蓋窮日之力、而僅能「僂而入、面掩水故不可究、余聞之父老、日徐福避、

到振沙阪、沙礫盡此、山無向背、故所在同名、往往「入海求蓬萊、蓋留此地不去、我焉知此非其藏未焚之

而爾、余聞之人曰、山中諸寶、肉眼不能視、變爲沙「書處哉、唯年代久遠、世莫有能津逮者、悵然久之, 礫、神怯其落人間、故遊者於

此易屐、拂去衣上沙塵|篋歸投宿亭長赤池氏、天正中神祖之卒次于此、郡內

而反云、日已暮矣、余獨後旅、如迷襄城之野、行里「夜襲之、赤池氏之祖、射而却之、神祖賞厥功、賜以

餘、追及前行者、得中宮、有奉香火者二八、日自此|此地、永永免其租、有朱篆藏于家、余得親觀焉、謹

至吉田二十餘里、不聞雞犬啓、衆愕然、勢不可已、 按維嶽降神、神祖以誕、英雄之資、寬仁之度、光輔

逐行、爰有碩艸大木、蓊蔚不見屋月、縛炬以燭塗、 王室、撥亂反正、黎庶艾安、昌平垂百五十年、

四六六

四六五

、雅如爵、

雪水磨墨、題名石頭、石室人乞書、余欣然爲署曰群

玉之圃、石室之有署也、蓋是爲始、余聞之、昔帝聞

赫夜姬端麗、欲內之、不可、日妾廣寒宮女也、以微

一路砂礫、沒足滅蹻、杖之與屠、遽相爲君臣、與

梯劍峯、度雷嶺、謁大宮、朝北極、而下到谷底矣、其罪謫降、今雲車且至、妾去有日、敢僻、帝不知所、

稱或以方位、或以形狀、或以靈威、皆有取焉、蓋周 使甲士執弓矢衛其家、是夜月朗、忽失姬所在、姬獻

覽循環、自内而外、自上而下、自東南而西北、一出「不死之藥於帝爲別、帝既不得姬、不欲復長生、命侍

一入、一登一降、無境而不窮焉、冀間縣崖絕壁、奇「臣、燒葉其藥于此、烟氣上徹天、寶永中其餘烟復然、

石怪巖、如車蓋、如青獅、如駢齒、如雉堞、如霞標 雨沙數百里、三日三夜而止、一小峰附贅南腹、多於

者、不可殫狀、有蛻骨色如白玉、在南壁縣絕處、不「形哉、先是延曆中、雲霧晦冥十日、新山成于脚、

知何物鍊師、尸解于此、或云、仙鹿所化、皆未可知、 神造也、都博士之記日、貞觀中旅祭、有白衣天女、雙

又有銅佛十餘軀、盤坐諸巖石間、此子體重倍余、何 舞于巔、吏民咸觀之、今不審其處、余開而欲識之、

得能來客此、永年不爲風雨刮去邪、豈非具足神通力 因執笛吹之、虛空寥廓、未有應者、迺釋笛作歌、歌

哉、是日驟雨行于南足、叄浦多湖、皆不可辨、俯聽 日、陟芙蓉兮挹瓊漿、望美人兮于帝鄉、風飄颻兮吹

不聞雷霆、吾聞之天目雷聲、如小兒啼、甚可愛、即 裳、目眇眇兮悵以傷、曲一闋、時日薄虞淵、秋色蒼然、

知天目亦培塿耳、谷底層氷積雪、不辨深厚、蓋開闢|雲中之君、彷彿欲降、是耶非耶、欲從之未由也已、

以來未嘗消釋、嚼之齒牙間有玉氣、有水日御盟之泉、 途躝嶺而下、抵第八成、路左右岐、右走須走、左走

出乎石函中、漱之清冷、使人欲羽化、有紫泥黃冠之一吉田、余則舍故就新、直趨于吉田、余幼時間之人日、

徒、用打芙蓉眞形圖、佩之不逢不若、魑魅罔兩、莫之一下嶽者、以尻爲輪、推轉而下、勢如建瓴、今知其非

能近云、是時躬融於大初、萬靈紛紛、來會此際、蓋、也、今之就下路者、兩手敦杖、左右更搥、跳躍而下、

多造化之秘、到者方知、余不欲盡泄也、既而反石室

砂礫、相刀相靡、其行盡如馳、而莫之能止、杖屢蝕、

屢齧、足屢重繭、前者未至、後者尋及、因以爲纍

騎、因以爲波流、從上望下、則人如鶴、鶴如雅室一若二、唯暑天有人、設雪漿待喝者、火流下山去、 絕險、日大縣度、蓋乘危躡巉、窮于此矣、余病不能

否則枯腊矣、疾風至、遊者趨避室中、稍緩則爲漂搖、 輿、石室人與杯水、余一嚥神骨供爽、即復起行、衣

猶木葉幹殼、不知其所如云、自一成至二成、日八勞 神間風冷然善也、然後莫找天閼者、超 鵬 背而上、

多、三成曰滑黎、四成日姥胎、五成曰鎌巖、皆目其 不知青天負我耶、我負青天耶、抑亦山靈之援我以手

險也、亦猶大小頭痛寒熱之稱乎、五成將盡、白蛇無 也耶、孰謂天之衢之不可階乎、焉知杯水非瓊液哉、

數蹈蹬於路、衆大駭、徐視、檠株駒也、六成以上、 余神王甚、前臨吉見、萬松如薺、左右盼焉則甲城基

不毛而坡、日小縣度、是時衆星皆沒、東顧蒼茫間有 「峙、鵝湖河口湖澹澹也、湖上雲氣皆成龍形、使人

物、若大炬火、炎炎有光、動搖不定、問之石室人、 然思騎、翹首唯視一峰、凹若反宇、八九成易易耳、

則日是啓明也、此星上丈餘、東海始見、朱碧相、 蓋是時我骨已換矣、忽到絕頂、中虛為谷、谷神不死、

青黃逆掃、紅光一帶瀲潢、余謂靈曜將躍、踞石注視「玄牝之門、有氣炊蚋、困傻中穎、實天地元精之所函

久之、既而諸彩皆滅、扶桑無景、衆疑焉、頃之山趾「焉、是爲神池、即上宮、宇中六指、不見際涯,下去

深墨中、忽見赤色、石室人指日、是日出也、其初升、 大麓四十餘里、外周可六里、內則減三之二、其深百

層層如車蓋、稍變爲人冠浼而立之狀、使人不覺起敬、 餘仞、俯瞰股票、我唯隕越于下是懼、即惴惴引去、

胡然帝也、須臾屢變、爲鏡容、爲重輪、爲鎔銀、旋轉不「屏氣不息、唯恐鼓動天閣、於是乎攀中臺、跨駒嵩、

於是一步而僂、再步而嘔、展步屢息、猶時躓于前趾、 已六欲合欲離、暈凝胭脂色、俄而光芒亂射、金線百道

行十餘里、爲中宮、即小角祠、路兩岐、右爲上路、 一輪吐干輪、後輪屬前輪、輪輪相及、飛來找前、

左為下路、下路唯砂礫、上路巖險殊甚、是時月出、 珠璣、爲玻璃、雜而下者、不知其數、欲手掬之、

與人平衡、地多楓松、左右夾道、道裁容人、人不爲相 紛墜地、豈所謂日華者邪、未知泰山日觀之奇、與此

辟、登降異路、職是之由、叉行六七里、歷小室、抵、果何如也、既而朝徹矣、下界蒼凉、雲如綿絮、千里

振沙坂、過此無本山、謂眞形也、山凡十成、成率置石 一色、點綴墳起、遠近之峯、皆若累塊積蘇焉、七成

渾然皆融乎詩、而無凝滞焉、其爲義之府也昭昭矣、 趾前後襜如也是爲裔埜、盖取諸衣之有裔焉、即自數

設夫子而在乎、亦當日也始可與言詩已矣、諸家 百里之外而望之、宛不遠顏咫尺、豈不衆嶽之俘、而

訓詁、局於一經、豈如韓之旁通貫綜哉、元儒山東張 群神所朝也哉、余生海西、垂髫既有登陟之志、及弱

綽士行云、外傳傑出、可謂知言矣、己卯春、余從我公 冠、屢從我公而東、率無虛歲、道途所歷、日靚秀色、

而東、三月上浪華磯、夜宿逆旅之舎、有人携是本來、 未嘗不神往其間也、唯不能奮飛、常怏怏耳、今玆乙

日是越烏世章所校、今將上木、敢乞子一言、余年乖亥之夏忍來、年踰五旬、髪既種種犬、因望嶽而嘆曰

耳順、日有玄花、又不能五行俱下、加之跋涉之勞未[已矣哉、我終不得作采眞之游耶、蓋我公開而憫之、

除、燈下草草讀數葉而已、未識其人、將何以措辭、 因得賜休假、以遂其志焉、越七月十有八日、發龍

明發倉皇上途、四月抵江都、不復以序爲意、後數月|邸、循品海、度阿部利、踰足柯嶺、行二百餘里、二

世章寄余詩及文、申以拙叙之役、余受讀之、既見其「十有一日日晡抵須走、即裔埜、距山足不甚遠、

書若文、亦猶見其人乎、義不可固辭、途題其端日、草-沙清泉美卉、漸覺非人境、飯客舍、以初昏發、西行

間之蛇翹首尺、其修短立見、余於校本未卒業、既已一二三百武、得木華氏廟、即下宮、又行十餘里、得回

記

富嶽知其必有裨於學者也云、

馬阪、即東壁下、鎌倉氏狩于此、士馬蹄躍、三周大

鹿、至今父老指語而壯之、從此以往、雖造父駕綠耳

哉、蓋亦無所施其技焉、夜寒甚、於是衣重繭、足着

天下名山三十有六、而表東海者、唯富嶽獨也、削成 菅履行、四顧無際、恒星去地丈餘、余則左控箕尾、

奇峻矣、冬夏有雪、多疾風、非暑月、莫敢登陟者、其 右捫斗舌、禹步以躋、因令鄉道前行之、齎以衣糧、

形蜀焉、其冢八瓣無復向背、方面唯三峰、燁然芙蓉 以非適蒼者比也、道者春穹然伏行、自後望之、如負

倒蔕青天、故又有芙蓉之稱、廼膽其顙頯矣、其肩則 版之蟲、兩髀爲脇、肩高乎項、行且謂余曰、毋仰視、

翼如也、而自腰以下、盤屈於駿甲相數百里之間、其唯足是衛、仰視令人不跂及、若履不視地、厥足用傷、

人而言也簪、未聞其道而言也聾、聾之與瞽、則君子 先王之教、始於誦數、誦數始於詩、詩可以興、可以

弗取也、公子亦何以瞽之言爲、辭、公子日、雖然觀、可以羣、可以怨、邇之事父、遠之事君、多識於

第叙之、女毋有僻、儀也唯唯、退而思之、儀業已辱|鳥獸草木之名、故夫子雅言也、而罕言寓焉、亦唯温

知公子、公子命之、固辭不可、三近不恭、盖儀未見「厚和平、諷咏紘歌、循循然善誘人、使人思而自得之、知

其人也、而公子熟之、儀未聞其道也、而公子達之、 來起予、職此之由、故古之學者、必先於詩焉、然後

即公子也命儀矣、儀雖未見其人乎、猶見也、雖未聞經藝可陳、苟不先於詩乎、經藝不可得而陳也、亦

其道乎、猶聞也、可爲公子序其首筒乎、夫烏迹科斗-面墻而已、故鹽梅五味之和也、四詩六經之和也、諸

之交邈矣、其於今存者、亦唯商之斝、周之鼓、秦之「家之傳、得失互有、燕人韓嬰亦著内外傳、惜内傳

璽若碑、漢之鼎、若鏡劍、若殳戈之銘、其雖若僅僅「不傳、唯外傳存、其書博采古人之言行、引詩釋之、

晨星乎、博古之士、亦必觀而采焉、墓而則焉、庶幾能 其文贍、其辭縟、使讀者欣然忘疲、厭而飫之、愈嚼愈

得與古爲徒也夫、唯師則異諸、師之業、絕學無爲、不覺其味深長、於是乎目經史而外、及諸子百家之言、

新刻韓詩外傳序

啄其間哉、且也儀未見其人、又未聞其道、夫未見

於儀、儀受而繙之、光彩盈紙、爛奪人目、天花古矣、即師之於斯技也可謂闇解已、師乎師乎、亦何

亂墜、紛若雨粟、是豈區區肉眼所能窺、亦安得敢置|逐區區籍頡蒼斯之迹之爲、

石華禪師印譜者、

立文字、死灰其心、槁木其形、乃至二代亞室所陳、孔

石華印譜序

是序也、盖松山公子命之、公子以文與寡君交、時渦藩

邸、言論風生、相得懽甚、輙至竟夕、臣儀也常與侍譺

焉、公子不挾貴、不挾學、布衣知名之士、皆爲禮待、

及工麽如儀也、亦屢被華袞之言、孰不謂翩翩常世佳

公子哉、公子又好古篆、乃以其所善壁所出、汲冢所藏、嬴氏之寶玉、卯金氏之彜器、及諸

名由落石之所勒也者、師皆瓦缶視之矣、則師之於斯

技也、不亦難矣乎、然予聞之、師之所傳、盖有心印

焉、蓋白馬所馱、貝多羅所載、亦皆莫非印是心、乃

蒼頡籀斯所爲、亦復莫非盡是心、則師之既合於

蓋池先生之木鐸是邦也、經明行修、善誘後進、而其「樂之力爲多也、穎川一小郡、黄一循吏、豈足道哉、

分子匡卿、自幼嫺辭、五采日彰、夫人望靚、而未嘗序成宴散、時既秉燭、不卜其夜、禮也、

碧梧亭詩卷序

之詩、剸主格調、而其要則在於擇韻已、故諧 先生招余及從游之士、張飲咏言而落之、是日微雨新

焉、庸作或可觀、苟韻不諧乎、雖高手不能成句、尙 |霽、山翠射牖、余與先生顧而娛甚、惟牙惟鍾、山水互

何格調之論哉、大抵唐人律絕、韻有通例、不必博采、 奏、非陳非雷、膠漆相投、一觴一咏、終日成軸、風

字有常法、不必强押、每韻不過數字、每字不過數法、 雅之美、靡以尙焉、畢且旋、先生乞余題其首、余叩其

廼詩人家常茶飯、旦夕之用、取斯足矣、是則千里之|鏘然中宮商者、日是豈非將離之鳳之雄鳴上風、雌應

足、折旋蟻封、不失其馳者也邪、唯韻書繁雜、蒙士易-下風、而百鳥郡集相和乎其後者耶、因乂指其亭前梧桐

眩、今鸞嘯閣之有韻選也爲是、亦唯平灰通用、略辨 一株曰、是瑞局所棲止、它日有良工過之、亦必伐

一二、音義異同、不必歷擧、以其非近體之要也、若「琴瑟、飾之以黃金、繫之以朱繩、而薦之廟堂之上、供之

夫選古歌行、則別有一法、奇險艱澁、縱橫變化、其「君子之玩、則復有師曠者操之、亦必被之以夫雝雝階

何常之有、今亦不贅、古人不言乎、雖鞭之長不及馬 階之音焉耶、豈不亦治世奇瑞也哉、記曰、治世之音

腹、韻選亦爾、

韻選序

不日美乎家有丹穴奇毛矣、頃者先生別搆小亭、顏日

述著

男

輯肥後 秋 儀 子

玉山先生遺稿卷之七

犽

遜碧梧、取諧亭前所植、硒使匡卿日讀書其中、而不許

敢一窺其園焉、於是匡卿愈益孜孜、精思研究、風氣

日上、且將一鳴驚人、蜚覽乎千仞之上矣、其從遊之

徒、亦皆翩翩可觀也、則過庭之訓、上堂之誨、皆不佞儀

所不能及、而先生則謙孫自持、以鴈行相稱云、一

近體安以樂、是盖我大藩政治所感、和煦所蒸、能生英才

衆盛如此、可謂眞鳳鳴矣、而其教育、則實池先生一

粲、迎刀而解、即古之言、與今之言也合若符契焉、 玉山先生遺稿卷之六

旗

旌、層層出沒乎波濤之間、忽爲颶風掃'而一碧萬頃、

汇然毫無痕迹也、雖未免諷一勸百之譏、蓋亦千古以

來、女流希有奇筆矣、漢家秘辛、近世琵琶西廂、安

得能與此抗衡乎哉、是以縉紳先生注解如林、唯言語

之道、歴世而遷、古之雅馴、今之鄙俚、是不可得而

吻合也、又不可得而解也、是以傅會之說、粉如盈

紙、識者患焉、荒瀬翁夢寐此書、有年于此矣、一夕

對月獨坐、澂心恍然若有所得、廼喟然起嘆曰、有是

哉、靈於耳根者、鶴唳牛語、猶能解之、況人言乎、

吾何以如越裳氏之重九譯之爲、方土之音、四十有八、

三而五之、錯而綜之、不盡之言、不能外此、妙中肯

吉 重校

男

古井吉嚴

真於余、余曰、石湖之月、一照紫氏芳襟、而千歳之後、再

映徹於翁之水鏡焉、則此書宜名源語水鏡、是爲序、

同校

藤

城武

是則翁之玄解也、於是乎諸家迂解、皆廢矣、翁問名

吹、叶韻韶、風流簡貴、凡人情世故、悲觀榮枯、種種

之態、亦皆雜陳莫遺焉、讀之、則使人忽哭忽笑、忽

絕忽蘇、未甞不爽然自失也、故片語之冷、柔腸已斷、

隻字之艷、芳魂欲飛、其言蔓衍、無所底止、亦猶葛

覃之施中谷也、而其幼眇則如浮雲染空、忽而飄散、

又如松風觸紇、幽鳴自然也、語其玄、則如寄生之棲

虎、與不繫虐舟、汎乎中河也、若其終始變幻、不可端

倪、則其猶海市蜃樓、結綵疊翠、人馬臺榭、花木田幸男五四九

然大笑、近時市井漓滑、又甚於永昌之俗、即酒家簿

典雅老蒼、實嚴具體、大有鍾鼎彜器風、可不貴重乎

哉、余甫弱冠受知於翁、盖及聞其譚金石遺意、見其

揮灑磊落之狀、距今四十餘年、念之恍若昨日、中懷

盖有惕焉、天錫徵序、是不可不書也、

奇勝堂印譜序

俄而見之、儼若詩加宥於若者矣、

黼黻焉者、則翁亦自不能刪其聰明也、是豈爲善守青 帳、餅舖牌記、若非分隸、亦必古寨、及至侏儒俳優

牛氏之言耶、何其癖之甚、翁笑而不應、余曰吾知之一卯女崽子、亦莫不皆有別號私印、施之其書畫落款、

矣、是豈動之死地之徒也哉、蓋天既好之以佳景、且謌

縉紳先生之態、雖則昌平餘事乎、叶亦

可媿之甚、其刻手往往世所稱識奇先生者、亦唯爲金

幣餌、不問雅俗、漫然受而應之、其體專務嫵媚、取

本朝古昔不乏善書、唯篆學寥寥寞聞、而其有篆學也、 悅人目、大小伸縮、唯己所欲、非篆之篆、自我作古、

實自廣澤滕翁始、翁之於篆學也、前無古人、後無來「居之不疑、豈非夢英小說所喜爲也邪、於是乎籍斯古

者、可謂藝苑嚆矢矣、翁叉工鐵筆、其所鐫爲王侯及「法、蕩然盡矣、識者患焉、坊間所行、亦唯是已、余

高僧韻士者、不啻數百、蓋自翁之逝也、皆爲世至寶、 恒掩鼻而過之、唯翁父子所爲、茍非其人、印到不與、

植而韞焉、今不可復鰂觀、其藏在家者、亦或為朋友

知己奪去、其餘僅僅晨星耳、其嗣天錫恐其久而散佚

也、譜焉而傳之、以當羹牆云、天錫又能繼父志、不

墜家聲、副以其所自鐫者、號曰奇勝堂印譜、余覽之、

絳霄一毛、莫不五彩、豈可不謂濟美也哉、方今坊間 源語水鏡序

印譜如林、亦皆私淑無師承者、固不足觀、其稱海舶| 源語情史也、紫氏之才富蟾、頗涉經史、旁通竺典、

來者、率係畸人贋作、歷歷可辨也、豈足比數哉、余 且躬長椒房、嫺於形管、而宮禁行樂之秘、中溝裏相之

嘗聞之楊升菴、 日永昌有瑕工、 戴東坡巾、 屠宰號「微、亦往往有得與開焉、因託著此書、始述憑虛公子、

一峯、善謔者見其二人並行、遙謂之白、吾讀書甚久、 是王孫、春雨夜面、品目諸佳麗事、終敷演至於臺閣樞

問人固多、未知蘇學士鍊銕、羅狀元能省牲、路人 密、鹵簿儀衛、衣冠與馬、官跡門地、閨閤脂粉、長夜歌

之報明

天子有命、環丹城堙之、若一矢相加遺者有咎、其或 德如是夫、於是其士大夫、則陳皷樂、揚聲歌、以相和

不用命、實王所慍、皆死無赦、適人聞之、若崩厥角 樂於廣堂大厦之上,其小人則酒黍林、羮魚憖、以集

而解、二公入、勞公以 天子命、問古今集之道焉、 睦於鄉黨隣里之間、而觀水氏之斯集也適成、則使吾

公再拜稽首曰、敢告不寧、自天貺命、王臣舉趾、陪|黨操觚者得以言其志、而樂其業矣、乃斯集亦足以徵

臣敢謝、乃言曰、天之未欲喪古今集也、和謌浦之波 仝公懽虞如之政也夫、而其所自爲若獲歌、詩皆爛然

有歸焉、則使陪臣得敢奏薄技、德之至也、敢不唯命 可觀、鏘然可聽、而其汙不失鐵中錚錚者、實列國所

是聽、硒蕞爾丹城之卒、賴天之靈、以肉腐骨、叉豈一罕見、余故曰、是泱泱乎大風也哉、於是乎吾知我肥

敢不拜命之辱、於是載書金函、再拜稽首以獻、二公 公奕世之德之浹民肌膚至深也、其異日必有太史氏采

受之、周旋鳴玉而出、上車馳報 天子、 天子 焉、余既係之以詩、且今序其首簡、因曰、翁旣云

而後其喜可知也、西藏諸群玉之府、非人臣不得敢窺、我能不役吾耳目矣、而獨於山水之光美與歌詩之宮商

由舊章、德刑不遺、歲戊午、申於民、禁止偷、

決乎大風也

之謀樂、盖無異於西山時也、豈不賢而如是哉、四五八

翁徵

序於余、余既卒讀、喟然而嘆曰、斯集也決邃爲永世帝王至寶、盛矣哉、古今集之道之不眠也、

公顳有力焉、而我都人之善操國風者接踵焉、則幽齋

於是乎吾知我肥公奕世之徳之汭民肌膚至深也、 君之餘波也、六世逮我靈雲公、崇尚詩書、徵用儒生、

余盖聞之父者之言曰、昔我幽齋君、善咏謌圃風、傅|號分温雅、文敎辯興、將使沮溺之徒、輟復而曳裾、

所謂古今集者、究其幼眇、皆曰、延喜之道、未塗於 朝野之間、盖濟濟也、臣儀嘗以剪劣、備員侍讀、親

地、在公矣、慶長中丹城之圍未解、士牌菜色、而尙 承玉啞、盖猶及辱其賡歌康哉之美也、故我都人之善

咏謌弗休、可謂好以暇、横槊之雄哉、當是時也、雖|謠唐聲、則靈雲公之餘敢也、延及今公嗣立也、悆益

王國、通古今集者盖寥寥也、延喜之道、不絕如綫

天子懼焉、硒使三條某公烏丸某公如丹城紓難、以問

古今集無恙、至則狗衆日、

分節度、大撫國之赤子、而乳哺之、可謂不其緒

矣、今玆秋穀大登、歲終計上、租入不億、天四五七

初 亦猶有骨肉之親焉、佳哉山水之望、天叉爲茲好於我

翁既稅駕西山、姜某氏子爲子、子某能拮据於家、翁 也、我豈可以默乎、 廼撰十景、作爲歌詩以娛、且

則日出游、吟哦不疲、取暢泉石、日佳哉山水之適、 倡其所交游曁聞識者、合同賦之、於是多景之勝、始

天爲兢好於我也、歸則燕坐夕照、含飴弄孫、一切不「得一售其技、而四方歌詩之藻、盡萃於觀水氏矣、翁

洋洋者、不違顏咫尺、而魚鳥煙雲之不我遐棄也、

蓋是集之役也、觀水翁爲之嚆矢矣、翁年七十有八

聰矣、夫市言嘔啞者、於我猶微風拂漏門也、而我又

能自塗吾之明矣、夫富貴赫奕者、於我猶爵蚊妄相過

於睫也、皆漠然亡動於中矣、渠焉浼我哉、唯夫峩峩

序

焉、故今有是役也、翁之言曰、善哉、天既已塞吾之

采其文、隆其角、被諸其首乎、余謝不敏、不可、邃

敢序之、則使神龍之與蜥蜴爲伍、

栴檀田十景集叔安裔子者焉、 中連父則曰不敢當、 雖然子盍嘗互

亦爾、涓滴落紙、倏爾墨行、疾如風雨、集如雲霧、 問泉谷事、如翁豈不謂老益賢、又能謀樂哉、丁巳冬、

合而成體、散而成章、蜒蜿乎猶龍哉、誰復施罔綸繪 其子某以職事來府、居于我東郛大逵側、曰是雖近市

者、中連父之篆得之矣、夫龍蟄不常見、今中連父能 惡囂哉、旦夕得所求、亦小人之利也、親之甘旨、庶

物之矣、龍朝夕見也、南華氏曰、唯蟲能蟲、唯蟲能足以共乎、逐奉翁因家焉、大逵故栲檀田、語在藪君

天、所謂用筆天者非邪、雖然中連父善飲、不飲不能|叙中、其地四望六達、遠近之景、環拱焉、唯街衢之

龍其書、及其醉二叁也、神益王、筆徐飛、是龍其以 間、來往如織、馬尾接、人肩摩、擾擾然戴上、其過

酒爲水立威者邪、必爲醒者不取、中連父笑曰、然世|者莫不鮮衣怒馬干旄子子也、其居者莫不鼓瑟站屣、

之奴書、僅縣諸酒肆者、則其受業者手指千矣、而余 陸博蹋鞠、雞走狗也、而其壟斷罔利者、俛拾仰取者、

門之屨寥寥也、何不售之甚、余曰不售詎傷、不售然 廢居欲贏者亦何限、是皆心在蜚雁、而目在逐鹿矣、

見其眞龍也、滔滔者天下皆葉公之徒也、 眞龍後窺|夫外視可欲、内戰不勝、靡瞻不睦、靡聽不惑、人之

牖、豈有其能不還走者耶、雖然子姑俟之、世將有情也、是以其景之奇、至今不售、沒沒也、觀水氏惜

神尙王、行步不衰、唯重聽葳爾、頗有如充耳云、衆

上自禮樂制度、以至凡百藝技之瑣、亦皆於華焉資、遷 妙咸具、余既已爲之嗟嘆不已、 中連父則顧笑搜其

喬變俗、國羣居極東、昭回所被、萬物彪炳、故鉅卿 筐、則紫氣奕奕來射人、駭視之、廼其所篆、道德五

名大夫蟬聯出乎朝也、則才如晃秘書、書如野人若愚、 千言者、規圓矩方、鐵筋玉箸、一經一緯、一文一質

皆靑水、稱於中華矣、環海之州、盖亦莫比肩云、余又 一畫中法度、儼乎若南面王袞冕垂拱而其色燁燁然也、

覽薛嗣昌所臨我 皇子落花詩者、抑何美如彼也、 可謂又玄於衆妙矣、余不能不爲之吐舌也、而其必於

張誠一子兆之徒、盛稱其如唐人學二王筆迹也、信然、 五千言者、豈爲其三日不讀舌本儘彊哉、亦必有說焉、

則當時華之與我、肮猶一丘貉焉、世及叔季、海乃揚 昔者伯陽氏之西度關也、盖以是屬之關令尹喜、當時

波、逐至使行人之不航也、脉華何啻崐崙河源、且人「其所親手書、烏跡邪科斗邪、將上淸洞天霞文烟者

生兵馬間、日夜所業、不過騎射刺擊、超乘相夸、辰|邪、吾未識其作何物狀也、孔夫子嘗稱、其人猶龍也、

佻相示、是以五指如縣椎、肘加急不柔、則令操數寸 顧其書詭幻變化、不可端倪、亦猶龍邪、中連父盖欲

管、重倍於三尋之戟矣、乃謂曰書止取記姓名而已、 見其書、唯靑牛不踰大海而東、其人與骨既朽、

相驅趨使、滔滔不返、蔓體畸畫、匪楷匪草、一二稱 則舍五千言、吾將奚適哉、唯古文既亡、古籍邈矣、

書家者、亦皆以意擣法、肆然以橫、其病不可名狀、 苏毛漆煤、無已則秦斯乎、故假以寓意焉、善乎老子

種種俗惡、國字者竟成矣"是直不蟹行耳、何在其能同之言曰、去子之驕氣與多慾、態色與淫志、唯書亦爾、

文也、所謂晋唐風者、於是乎頽然邃壊矣、曁乎坂城之|驕斯荒、慾斯惑、態斯膠、淫斯頽、故書必去是四者、

克捷也、海内丕變、黎庶息肩、涵濡百年、文運復振、 然後官知止、神欲行、猶龍之迹可庶幾也、盖中連父

廼韜鈐之略、化於詩書、虎嘯之猛、揚於鳳鳴、而行之學也、夫龍之爲蟲也、得水立威、靈怪不測、唯書

篆書老子經序

筆如舞劍器者、稍稍輩出也、於是東有廣澤氏、西有

中連父、盛矣哉、可謂時巳、己未中冬、中連父來客

是爲踏水訣序、

四五六

國朝之書、其始亦師承晋唐、昔我 先王之爲治也、 肥、余見之逆旅主人所、因觀其揮染、楷草分隸、四五五

其深矣、而敢之三勢焉、日手勢、日體勢、曰足勢、

一伸一篇、一左一右、亦必有數存焉、學之三年、其

猾萍梗根虚歎木主浮乎、則能相忘於水矣、故蔡姫蕩

舟、齊侯股票、畏水也、觴深之人、操舟若神、忘水

也、水既忘矣、於是乎釋舟蹶水、祝江漢猶阜、視龍猴

蝘蜓、卽使我片體奮鬛而掠槳柁、提馮夷而挈陽侯、

而尙猶不已、習之久之、與水相狎、漸解浮拍、則就

苦至捽

踏水訣序

所以論詩者耶、故敢陳其說以爲之序、禪師之詩既行 乃能以腐肉朽骨淪於不測、轉於無垠、動溶於至險、

世、必有定價焉、尙何俟不多言哉、

吾鄉邨岡子以善游聞于國、甞擐甲濟水、漂若浮芥、

驅馬舞鎗、如躪實地、人皆服其輕妙絕倫云、吾先公

觀而奇之、因令之聚徒而習其技、以備行軍之用焉、

蓋村岡子之棄其徒也、二十年于此、與造化同波而梟

沒乎冥冥中矣、其子長順恐其先人之名之不聞于世、

而其徒之或失之傳也、著踏水訣、徵序於余、余曰、

吳越之俗、不綺便涉、性也、隴西之游、愈躁愈沈、

非性也、今以非性、而欲學其所性、則可乎、曰可、

吾之先人之言、 日踏水之術、 先試之淺渚、 敢之

手排足擊、即水衝口鼻、畏首畏尾、有逍遙乎汗漫、以至出沒乎巨牙毒鱗之際、而莫之能害

也、則技之熟矣、習之成矣、猶何論性之與非性、

亦唯從水之道、而不爲私焉、信乎呂梁丈人之不吾欺

也、則先人之言、有進乎技矣、余故著此書、欲以顯

先人之名、而使其術之傳于世也、 余日子之志則善

矣、而其以千金之軀、爲戲於齊汨之竟則危也夫、諺

云 善騎者 墮、善游 者溺、故馮河 者、聖人之所不與

也、且以書御馬者、未必得馬之情、况於以書踏水平、

亦焉能得水之性哉、 余也惑焉、 日是知其一、而未

知其二也、今夫結髮食祿、戈先驅、水火豈可避乎、

「然洪流在前、絕梁沈船、則雖有孟賁、無所施其勇、

雖有慶忌、無所用其捷、則徒賦匏有苦葉而已、是戰

陳無勇也、可謂孝乎、高麗之戰、孫六奪敵舸、澱河

之役、權內刺力人、皆能以泅涌之技、而施之戰勝矣、

則勇冠三軍、名揚後世、可謂非孝乎、故踏水之技、

不可廢也、且書在解、人善解書、可以踏水矣、故踏

水之訣、不可廢、昔者子路控涕而受牛謝、夫子稱之、

苟使子路不解踏水乎、唯已身陷是懼、亦何暇能拯人

乎哉、浮海之從特稱由乎、盖亦夫子有取焉、其言甚

徵序於余、余未識師之面也、然師日惠余詩、今叉以 而神情爲之鈎、久之乃能有察其且險嵎者於百份之底

斯集見示、廼余得因其聲以觀其心焉則亡論面不面、 焉、蓋亦孔之昭矣、雖然吾不敢急其氣、則恐其不

禪師既以面壁之餘、善操宮商如此、何以不俊一言、 食也、吾不敢任其才、則恐其跳而去也、吾不敢放其

爲之輕重哉、唯業已命之,因不辭而敢題其首日、韓、思、則恐其懸之而或脫也、我必廢寢與食、夜以繼晷、

詩之美、自唐氏以降、則莫朱明若、而其尤粹然鎔裁 其息深深然求之、忽有躍如也、則百金之魚、雖大盈

有則者、又莫李王二家若也、吾誠莫間然、第今之言「車哉、亦皆莫逃乎獨繭絲搖搖之端矣、則彼來即我非

詩者、其誰不羔雉李王、又誰不句墓而字做之、亦唯 我襲取也、夫然後寸管片石、與天地之抗衡、一動五

稱敗素紫、以眩孔陽之朱、將奈其臭揚何、噫李王何 指、則萬物撓敗、不能吾敢禦、而造化者之藏盡發焉、

辜、乃爲輕薄兒之蠶食、而身其餘亡幾矣、雖李王 是其結撰極致者爾也、是豈可以易心窺哉、余故於今

將何以給之、則余於今之言詩者有譏焉、夫比興微之言詩者有譏焉、蓋自漢魏至唐、皆其善釣者也、宋

妙之境、爲古人窮搜殆盡、而其所未發、則造化懲其「人則緣木矣、及明李王其善釣之亞乎、猶能飫其人矣、

若是也、而客其泄焉、李王之技、蓋亦百倍其功、以「餘子雖有獲、則浮陽魚易與耳、弗齒也、至今之藉李

取諸其褚矣、而昧者不察、往往以易心窺之、乃一旦、王口者、抑亦廢綸折竿者也、余覩其所獲、非衔索之

欲匈奪而有之、造化又怒其若是也、而益固其祕焉、 枯、則腐爛之餘、乃傲然嚇人乎市肆之間、豈有能不

則夫區區者、且不之與也、况其至者乎、故雖片言隻|發嘔噦者哉、余則有譏焉、然則爲之如何、曰、我必

語、亦必俟其人而行、苟非其人乎、則物境不爲之俊、 求之造化、不要假諸人、造化橐篇、吹萬不同、有力

是豈可以易心窺哉、余故於今之言詩者有譏焉、余嘗者能鼓之、漢魏盛唐、唯我所欲、何必仰給李王而已、

謂古作者之難言詩也、蓋譬之釣深魚焉、其始風波之「爲顧儀無似、素不能詩、妄發是說、誰復信者、是以

念未息也、 滑疑之曜、欲得欲失、蓋尙潛在淵矣、 退而恒墨墨也、不意謙叟禪師之爲游揚也、師誤聞

我於是乎氣以持其竿、才以芳其餌、沈思以脩其繪 肥有儀也、而千里徵序、是豈徒哉、其或有取於不能

得而梓之、禪師則千里書託之我肥護國謙叟禪師、以

操觚

家之有璽印、不忘初哉、不可廢也已、師業天游方外

者、何有於區區操觚家哉、戲鐵之技、託之好古、盖

亦欲俾世之反樸近道耶、夫諸篆皆種也、不同形而相

禪、楷與行草、藐焉諸孤、廼欲親見厥祖先之面焉、

攝瑞雲東明禪師所著、律絕若干首、其所善島子者、

以敘其編、

浦小集序

琴玄酒之尙、割刀之用、鸞刀之貴、不忘其初也、則累累乎星聚奎、莫一非垂金屈玉、銛利鈎殺、律如「難矣哉、集古錄博古圖、亦唯墓之之墓、本眞既逝、

也、大爲合作云、余邃題其首日、周禮職金亡論已、 則識者憾焉、師之爲之技、亦靑氷乎海內諸名家、盖

操觚家之有璽印非古也、璽印之用、上之傳國守土、 先得其趣也、得趣則天、不得趣則人、大似强項不肯

中之官爵封號、下之徵發姦禁、秦漢所由唯是、盖自|謝之狀、故得趣有術焉、點書乘除、位置間架、欹正

唐人以降、稍稍施諸翰墨間、其義莫聞、故操觚家之「向背、疏密低昂、妙都在阿堵中、是虎頭之寫眞也、

有璽印非古也、然則廢璽印乎、日否、是有說焉、近 亦唯楷則頰毛、鯤則丘壑、趣之所在、不在多耳、於

世學士大夫志斯文者、皆能彬彬然修復古之業、廼羽翼 是乎吾知師之與虎頭同術也、或日、師之於斯技也、

詩書、驂服左氏司馬子長、而其所以行之、則亦唯楷 奇奇矣、將若其敢何、余曰庸詎傷、西來之敢有

草是賴、嗟夫雖好古之甚哉、終不能反轅於鳥迹焉、 之、以指隃指、莫非印也、以心傳心、莫非印也、咄

勢也、故亦必假璽印而古之、庶其羊存乎、璽印之文、 喝阿罵焚誦、亦皆莫非印也、師則有得乎是矣、因出

必求諸古、上自禹碑湯盤宣鼓孔壁、以至秦山漢年、汲 土苴、以爲斯技、心之所旋、指與物化、不以人滅天、

家所出、及符節幡信、殳銘泉文、鐘鼎款識之屬、皆能取 悠然神王、由此觀之、聿蜩甲也、刀蛇蜕也、至道存

而陳之、參而鐫之、亦足以爲觀美萩圃也夫、操觚家「焉、胡病師哉、問者唯唯、師曰善、問名於余、余曰、

之有璽印也、於是乎古矣、詩云、雖無老成人、倘有「美哉、糜爛乎, 奇變極也哉、請命曰五雲譜、曰其說

典刑、操觚家之有璽印、典刑哉、記有之、醴酒之用、 止是乎、日、倘有望焉爾、盖欲其大施慈雨於人天也, 又欲其翩然而往、翩然而反也、是則可以除其行、亦可

城門諸備之說、吾安知其非禽滑釐相子勤苦獲已齒 護國謙叟禪師之東上途也、謂余曰古之送人者、必

陵子鉅子腹難之屬、各誦師說、倍譎不同者哉、豈莊-贈以言、斯行也、我不請它言、唯得敍此編、則足矣、

周所謂別墨邪、非邪、叉篇分上下、重言錯出、似作 因譜其所戲鐵者篆印若干顆、而出脉之、余披覽焉、

譜序

之辭、器械

四五二

五其志卓然、其言往往切時弊、實非區區腐儒者所能及

墨之道、孟闢之於前、荀非之於後、而昌黎氏獨曰、 也、莊周旣言巨子爲聖人、呪於其師乎、廼知當時已

孔必用墨、墨必用孔、余窃疑焉、夫墨繩墨自矯、大|至孔墨儒墨竝稱焉、豈特賈生之罪哉、盖聖人之道、

帶不類、其術蔽於用、而不知文、過儉約而侵差等、 譬之穀粟、民生日用、萬世滋利、墨唯異鱔、備世之

耳聾竽瑟、反緣往埋、異懸君臣、傷害和氣、是以節「急、一啖則可、再之害人、雖然後世奢侈日長、莫有

用而彌貧、非攻而日爭、是豈夫子所用哉、然墨兼愛「底止、有善讀者、墨術或可一薦也歟、余嚮與岡士騏

恕也、仁之術也、孟子推類比之無父則刻矣、世謂孟 會數本、校讐一過、唯諸家歷傳寫、亥豕非一、未易

墨相反、殊不知亦有相同者存、孟說仁義、墨亦說仁 臆斷、後獲鹿門茅氏本、與松子文井子章再閱之、訂

義、孟稱堯舜、墨亦稱堯舜、孟好詩書、墨亦好詩書、 彼此參合、得失互有、茅本難必盡從、因晳諸藝文、

孟患處士橫議、墨亦患十人十義、而其論湯武放伐也「其訂者、其疑者闕之一附以所見、標之上唇、觀者思

無異、此類不勝枚舉、是豈可盡廢哉、韓之所取其在「之、或是一適也、予歲從我公、往還東西、不遑寧處、

斯乎、今夷考其書、非出一手、余讀諸子、墨兼愛節-盍簪有闕、故再閱之功、子文子章居多、韓譭晷舊刻

用非樂非攻、皆有其目、則知古所謂墨經者、大意不「既附、詰墨書世多有、故今不贅云、

墨子序

過如此、其他若堅白異同之辯、觭偶不忤知也、要詩存焉、余在舟車中、時時展玩不釋、則余覩其草木|口吃之狀者有之、其譬喻與孟出入者有之、其辭氣隱

泉石、欣欣色動、與行笥中詩卷相暎發也、迺足驗世 然若與孟相抗者有之、是或夷之之徒之所爲、亦未可

馨詩有神助哉、因爲品其入佳境者而還之、是爲序、

之墨子眞諸子之傑也、形勞天下、枯槁不休、

雲四五一

是集紀世馨所著、世馨尾人也、尾者大藩也、逸書尙 孜孜攻其業、盖叉數年業成、則隨淡淵翁來東都、無

存、龍劍所出、其氣成五采、其山水韶秀、其人饒雋」何翁逝矣、於是與仲栗修嚶鳴館、按詩古傳行干世、

異鉅材、而世馨盖其尤也、初世馨年十八、有壯志、 而仲栗亦尋物、然世馨愈益砥礪、育英不倦、門下靡

嘟嘟然而日、吁古之人歟、其人與骨皆斷朽、吾不得「然成風、可謂能奉師訓不失墜矣、余與君以詩籍交久

而見之矣、我得見鄒魯之人、親聞先聖遺風斯可矣、 矣、君爲人孝友有信、其詩靄如也、傳日詩敢温厚

即單身負笈、一蒯緱飄然辭國、西抵崎港、崎港與華「和平、不其然乎、余益信翁之善誘人、果質行君子

焉隣、雖其土蕞爾乎、海舶所湊、時有奇士、乘桴而也、方今操觚家如林、其誰不曰我能為唐人所爲、亦

來、觀我國光、若朱舜水之徒、比比然云、乃世馨主河忡|唯乞餘於東郭璠間、以取饜足,是其妻妾所羞、豈可

栗家、日見華客、交臂談論、久之、聲音笑貌華也、 齒諸君子之林哉、比之世馨所爲者、相去弗啻霄壤也、

唯未見若子瑜其人、而其所見詩若文、無一當世馨意|壬午夏,余將歸藩、世馨徵余序其詩、唯歌驅駒者在

者即喟然興嘆曰、陋之客也、以夏變夷、是不足觀已、棄「門、予不能卒酬其意、取置之行笥中、既上途、歴岐

去不復顧、惟與仲要結社、日夜切、誓干城斯文矣、 蘇、涉紫海、其間三千餘里、世馨足跡所逼、則其

櫻鳴舘詩集序

居三年歸尾、尾有淡淵翁者、余不及識其人、盖質行

序

三百十一篇、期三百有六旬,夙夜匪懈、鑿壁繼晷、

著

述男

輯

羽

肥後

子

玉山先生遺稿卷之六

儀

遜 君子也、世馨幼而從學、及其遠遊還、豪氣既除、乃

能見翁之蘊乎中、而著乎外者也、曰吾過矣、吾過矣、

道果在此矣、不在彼也、而今而後、吾悔不求諸邇、而

求諸遐焉、遂與仲栗輩、偕專志師事之、翁則循循然

語之曰、昔夫子之誨人也、各於其性所近、子性所近、

其詩乎、子何莫學夫詩、世馨拜受敢、退而學詩、詩

萬壑風泉晝洒衣、如絲一徑入林霏、初來欲向此中去、

還爲輕陰便擬歸、

畫山水

峯峰快雪曉晴、睡起推窗人骨淸、報道梅花村外發

斷橋便策蹇驢行、

煬帝繁華事已非、汴河流水靄斜暉、到今堤上靑靑柳、

送盡行人終未歸、

己卯冬、謙叟禪師示寂于寳光院、儀在東都聞訃、

今玆庚辰還鄉´十一月晦、正當小祥忌辰、賦此追悼、

想像淸容空斷腹、一枝梅蘂暗含香、請看無月山堂夜、

依舊人天放寳光、

高堂畫壁一登臨、此日相逢杯酒深、楊柳靑靑春水綠

還疑亭子在湖心、

吉大夫湖心亭作

聞說無錢與酒家、蕭然九日葛巾斜、誰能風雨撫琴立、

三徑茫茫弔菊花、

九日憶滕華塘、先是華塘罹火災、唯所買琴無恙、

因有此寄、

玉山先生遺稿卷之五

浮綵盈盈越女衣、秋波落日映霏微、采蓮不向鴛鴦處、

只怕雌雄驚背飛、

采蓮曲

避雨山房待雨晴、皤然一叟出相迎、紗巾烏帽暫間語、

不覺教人忘宦情、

山房避雨

北風雨雪滿袈裟、行盡深山不見家、日暮人烟何處是、

蕭條一鉢倚梅花、

別慧公

坐斷東香第一峯、無端金策化飛龍、遙遙更向寒雲拜、

雪滿山中深夜鐘、

遙賀洞明師在加賀大乘爲第一座

白華山頂白雲飛、海上名藍倚翠微、爲是潮音梵音淨、

天龍八部盡歸依、

賀慧禪禪師住白華山圓通寺

赤輪亭午照秋空、欲避炎塵處處同、願借君家幽竹地、

相逢揮麈沐清風、

秋暑寄大城文卿

四五〇

從駕妙解精舍

小品聽終問煮茶、相逢誰是逆風家、上方今日霏霏雨、

緫見毫光映作花

秋雨集慈眼菴

永明禪師爲太梁山上座、因賦贈、代人、

大梁山翠竹紛紛、高座知師愛出群、若道人間龍種絕、

何緣傍鉢見風雲、

橋上應迷白鼻、雪深何處問梅花、興來欲向前村去、

不見黃公賣酒家、

龍泉紫氣斗間明、此日相携一出城、君試罷經深夜聽、

匣中何似鉢中鳴、

同士騏過永明禪師房

賜宴高臺似栢梁、群臣詩就興偏長、風流割肉千秋事、

誰是當年方朔狂、

濠濮亭陪宴、得長字、

南山佳氣滿華堂、詞客如雲進壽觴、治行如今稱第一、

豫章草木有輝光、

應爲新題屬謝公、

奉壽今治侯五十初度

四四九

泉石寥寥亭子間、歸雲落照滿空山、松一路依然在、

猶記當時踏雪還.

拜悟明禪師影堂

風流當世少如君、一曲鳴琴日易、共道千秋師嘅在、

堪教玄鶴下靑雲、

賦贈高子式

分手天涯正斷腸、楚山殘月有飛霜、愁君客路聽猿夜

偏使三聲夢裡長、

賦得夜猿啼送別

一自芙蓉凌紫烟、飄然換骨挾飛仙、彫蟲小技君休笑、

親託名山萬古傳、

誕日賦示辛翼之

自別吳橋十七年、相逢今日鬢皤然、空誇豪飮猶依舊、

不減長鯨吸百川、

醉示舊友

差素手搗征衣、月白紗窻秋葉飛、試寄寒鮮千萬里、

風吹幾夜到金微、

搗衣

絕頂香臺入彩霞、從遊偏惜夕陽斜、夜來無限諸天雨、

緫到今朝飛作花、

腰下黃金龍雀環、尙誇臂上大刀瘢、葡萄酒冽難成醉、

纔唱凉州人骨寒、

凉州詞

汗血名駒產漢家、長鳴萬里憶風沙、曾經飲汝長城窟、

雪撲銀鞍作五花、

寒玉溪頭萬竹圍、曉天烟雪轉霏微、林間一道雙雙跡、

應是幽人汲水歸、

伊太素雪竹圖

纔看喜鵲出林飛、忽自天台山頂歸、爲是彩毫裁賦好、

赤城霞氣滿春衣、

知君昨宿玉川涯、

使人還憶五湖秋、

爭傳京洛滿鶯花、處處烟霞日易斜、歸去淸風生兩腋、

國九一之京、訪茶隱處士、邃探叡山諸勝歸、因「雪中爲迂浮丘公、

有此贈二首、

纔對靑樽似到家、

萬水千山道路除、征衣重此宿烟霞、憐君花下能留客、

辛巳春重宿國伯璣宅

春松深處彩雲開、白鶴翩翩海上來、一日長風三萬里、

堪能控爾到蓬萊、

廬岳嶙峋落木空、白蓮池上對秋風、登臨偏覺山光照、

同米大夫游光照寺、分得-東、

狂歌濁酒是生涯、作客年年笑垮華、縱使千金如一諾、

人間不見魯朱家、

如黛千山掌上看、揚帆天入海雲寒、鳴門一夜風波穩、

遮莫人間行路難、

送人之阿波

誰家玉笛動中宵、聽上江樓萬里遙、回首關山人不見、

空敢月色滿寒潮、

秋夜江樓聞笛

烟波何處泛扁舟、釣得銀鱗出碧流、撥剌投來堪佐酒、

謝人惠銀鯽

步虛聲散蘂珠宮、飛去飛來碧海東、新得鶴雛猶未相、

遊仙曲

問君跡興如何、君道相中探勝過、無限名山行不盡、

持來堪贈白雲多、

高子式自鎌倉還、賦此寄贈、

四四八

鴻雁哀鳴夜雪飛、燈前夢斷涙沾衣、聲譽莫向平臺去、「慇懃件酒寄楊家、

歳暮游梁人未歸、

雪夜聞雁

旅館凄然夜不眠、滿天鴻雁月如烟、起來欲問家山信、

聲斷蘆花淺水邊、

月夜聞雁

仙松曲、壽奥藩元老大夫田君五十初度、

海雲東望是仙臺、臺下仙松島嶼開朝服松花暮松子、

知君道骨自仙才、

王母今朝辭玉臺、瑤池月落五雲開、縱然東海蟠桃熟、

九色班龍不復回、

白髮麻姑乘紫鸞、步虛聲入曉雲寒、桑田亭子依然在、

愁見茫茫滄海乾、

瀨

街海

映心太夫人邸在田

鶉尾山頭千樹花、春風送色滿王家、碧蔥朱戶渾如雪、

何處張公深駐車、

鶉山景之一

豐山十五

櫻花 灃汕汁五

伏枕蕭條客裡身、重陽空對濁醪新、今朝應被黃花笑、

孤負先生頭上巾、

客中九日病不把杯

輓詞二首

四四七

松鶴圖

文園珍菓壓枝斜、摘去銀盤粲似霞、應慰故人耽寂寞、

城文卿載酒、副以楊梅、率爾賦謝、

友人自洛陽致書曰、近寓居于賣花街、因有此寄、

結隣種樹橐駝家、美爾看花到日斜、人道洛陽春色富、

不知何樹是名花、

相思回首赤城間、此日行人萬里還、君自烟霞耽臥病、

何曾容易出名山、

壬午夏自東都歸、室港泊舟、赤城赤國鸞有疾不

至、使其子士孝來訪、戲有此寄、

擣衣邊月朔雲間、征戍年年人未還、一夜秋風吹不盡、

傳聲直到燕支山、

擣衣曲

紅色文殊低翠眉、普賢雙手自垂垂、金毛獅子六牙象、

高駕香雲慈愍姿、

題文殊普賢圖像

聞君結宇倚青山、萬仭㕍崖不可攀、何日飄然携手去、

置身流水白雲間、

寄題玄對亭

君家咫尺隔東都、一月猶能見兩書、無那我今千里去、

東都寄懐水府越子聰、余時將歸鄉、二首、

黃金將盡不思家、

翩翩龍馬七香車、玉勒銀鞍日醉花、冷笑步兵非痛飲、

詩代人

少年行 讓戲儲

象戲賭

忽叩玄關騎白龍、俯看雲壑萬株松、悠然長嘯天風起、

身在芙蓉第一峰、

號

欲返香魂終不歸´花飛蝶夢霏微、爐烟空化行雲去、

春雨黃昏淚滿衣、

悼亡妓

妙香爐上裊烟霞、自脫紅裙早出家、向佛胸前雙掌合、

纖-未敷白蓮花、

妓人爲僭

武陵溪水奈春何、流出桃花情更多、從此朝雲消息絕、

天邊何處雨滂沱、

朝迎王母宴高堂、日出蟠桃帶露香、分得瑤池春水色、

雙成坐進九霞觴、

賦得瑤池曲、奉壽日出侯大夫人七十初度、

旗亭春酒更依依、橋畔垂楊映客衣、君自彩毫多五色、

何須題鳳及門歸、

岡崎驛宿國伯璣宅、時其嗣九一遊京師未歸、

登廬不覺夕陽移、相見同裁讚佛詩、此土何知非淨土、

秋風瀟洒白蓮池、

秋日遊靈巖寺贈圓海上人

忽臨金井曉寒生、露滴梧桐玉甃淸、腸斷纖纖勞素手、

思君空放轆轤聲、

漢宮金井一相臨、欲汲還愁墜玉簪、休道君王恩自薄、

應緣短綆不任深、

美人汲井圖二首

仙翁忽向岳陽歸、萬頃洞庭波浪飛、釉裡青蛇何處去、

凄風吹雨淚沾衣、

哭呂玄丈

衛靑旌旆滿沙塲、三萬征人向朔方、月白不知輕騎入、

酡酥醉殺右賢王、

從軍行

少年爲客不知悲、杯酒飄然輕別離、今日與君皆已老、

飛蓬萬里奈前期、

孤鴻雙鯉日應疎、

春 思

管絃聲湧水雲中、萬朶芙蓉繞六宮、舞罷羅柃香汗濕、

斜憑朱檻領薰風、

夏宮詞

圓通名刹境殊靈、開士當年此說經、行矣雨花空谷裡、

夜深應有鬼神聽、

送勳首座之下總住圓通禪院

鎮西城迹疇崔嵬、想像當年氣壯哉 日彎時寒月曲、

鴈聲回處白雲開、

望雁回峰

晨起嗽井華水、宿醒頓解、冷然有換骨之想、

玉京仙子會佳期、勸醉流霞歸去遲、向曉漱來銀漢水、

併將明月瀉華池、

漫寫黃庭乞白鵞、風流却覺更勞他、何如紫氣眞人訣、

換得青州從事多、

沼子文以酒一壺乞借藏本道德經

北風胡馬疾如飛、馬上胡兒錦袷衣、胡酒千鍾渾不醉、

城南射虎雪中歸、

欲寄西隣宋玉家、

射獵曲

四四 五

九月十三夜、國俗賞月、是夜值雨、蕭然有作、

桂花秋老雨絲絲、此夜嫦娥暗自悲、一入廣寒宮裡後、

十三無地着蛾眉、

銅瓶掩室養痾年、松老雲間自壙然、遺囑人間秋處士、

此中依舊貯清泉、

三衣六物古雲林、顙我銅瓶情更深、晨起臨江汲流水、

中含明月照禪心、

大川和尚辱知、盖四十年矣、今玆壬午夏順世、遺

言賜余銅瓶一事、因慨然志感二首、

休疑羅漢是前身、托鉢年年混市塵、江水潺湲流不盡、

落花啼鳥易殘春、

題羅漢圖贈玉岡尊者

憐汝籠中誤此生、空思喬木隔窗鳴、時時似解詩人恨、

寄與春風送數聲

詠隣家籠中鶯

急管繁粒白玉巵、春風花下日遲遲、侍臣衣上飛成雪、

還似梁園授簡時、

花下陪宴

十五紅妝不自持´曉臨明鏡畫蛾眉、賣花聲在珠簾外、

恐使春風容易吹、

漢宮少年行

漁陽一去十經春、愁見年年楊柳新、紅婦不知人已老、

征衣猶擬舊時身、

聞說胡天雨雪寒、誰知春草滿長安、可憐丹鳳城頭月、

今夜征人何處看、

天涯雨雪捲黃雲、瀚海祁連路不分、欲寄音書何處是、

人傳征戍灭移軍、

寄遠曲三首

雨晴山館弄芳菲、聽鳥看花到落暉、解道白雲怡悅處、

春風吹上薜蘿衣、

春日薜蘿舘集、得五微

羽客翩翩駕鶴來、長風千里自仙臺、金華山頂金光草、

贈我殷勤未擬回、

仙臺田子善過飲、有詩、次韻謝之、

宇土侯席上置鸚鵡杯、丸萬年有詩、率爾和答、

鸚鵡由來言語開、殷勤向客勸礙杯、縱然北海罇常滿、

愧乏當年作賦才、

鑒湖湖上白雲飛、置酒高臺坐不歸、解道風流賢者樂、

園中鴻雁有光輝、

樂山公子鑒湖臺陪宴、同越子聰岡士騏賦

二月墻頭桃李花、春風搖蕩入烟霞、折來偏恐飛爲雪、

墻頭花

二八如花不解愁、相迎夜夜醉青樓、鴛衾深擁珊瑚枕、

緫說鷄鳴淚已流、

雞鳴曲

翩翩靑烏遠仙宮、萬朶桃花結小紅、自是春風吹不斷、

弄笙人在書簾中、

右盈上人

聽 笙

短棹輕舟碧水涯、黃花紅蓼入新詩、秋山寫到坦夷處、

不是支公那得知、

右米公

秋日同米大夫及盈上人、汎舟神水、向晚將歸、

餘紅啕山、煙樹抹碧、堤上人馬、皆如在燈影中

行、予醉甚、急索筆描之舟轉景移、不可盡寫

也、米公賞之、既而爲上人奪去、明日賦此寄贈、

秋江一上米家船、梟雁菰蒲渺晩烟、書畫風流誰得識、

請君莫向世人傳

結髮朝朝侍漢皇、銀鞍白馬羽林郎、相逢下直誇新賜、

身上猩紅錦裲襠、

四四四

栢梁臺上歲星兒、偷得蟠桃歸去遲、袖相携餐未盡、

方朔偷桃圖

十里烟波墨水流、清暉日夕澹高樓、陪避自是忘歸去、

欲逐行舟隨白、

含暉樓奉陪高松作

草菴蕉樹澹淸秋、風雨蕭條興自幽、更欲迎君題葉上、

不知何處看碑留、

乾阿菴雨集、遲關子肅、不至、得秋字

深宮早起畫蛾眉、荏苒春光欲暮時、偏惜檻中紅芍藥、

殷勤手自帶花移、

春宮詞

今日相逢花正開、芳園欲別更徘徊、重遊只恐飛爲雪

强向春風停酒杯、

花下別得杯字

廬嶽風烟望未分、朝來雪霽倍思君、籃輿難到白蓮社、

翹首遙看出岫雲、

雪後聞諸君集岫雲精舍、走筆寄贈、

春風無日不堪愁、何處王孫作遠遊、好去萋萋芳草色、

長教歸夢滿汀洲、

賦王孫遊送野伯脩之江都

四四三

秋色蒼蒼廬嶽烟、謝公幽屐此逃禪、禪房呪爲黃花好、

陪淵明到暮天、

抄秋陪宴淸光精舍、限韻、

九日表海樓陪宇土侯日出侯松山公子賦、得花字、

落帽風流似孟熹、叨恩九日醉黃花、群公此會年年健、

休笑詞臣彤有華、

薩埵崖上臨高臺、雪浪雲濤勢壯哉、不見芙蓉天際色、

何如東海有蓬萊、

薩埵崖上酒樓同藪士厚飮

英雄舊跡鵲風雲、回首岐阜落日、一路松間採樵者

到今猶說田將軍、

織田氏舊墟

十年蘇李老胡塵、今日河梁別恨新、縱是音書堪可託、

茫茫漢地更無親、

蘇李泣別圖

二月園林聽鳥歌、池塘春雨夜來過、可知夢裡裁佳句、

緣到門前芳草多、

雨後過劉文翼宅

更教金母護瑤池、

十萬天兵上隴時、水聲偏入馬聲悲、看相齊駐征鞍聽、

未到長城青作絲、

隴頭水得支韻

男兒結髮戰漁陽、邊月亭亭萬里長、此夜龍泉鳴不止、

已知城上有飛霜、

塞上曲

欲喚扁舟臨攝津、月明眞野渺無塵、繼橋夜色清如水、

寒影依稀來往人、

賦得眞野月

春雨中樂山公子見召、病不能赴宴、賦此奉謝、

忽傳名苑百花春、公子風流飛盖新、無那病夫多中酒、

空將白髮老風塵、

胡人半夜作秦聲、曲裏梅花漠月明、總是邊風吹不盡、

紛紛飄落受降城、

賦得落梅花、

游子南州省老親、白頭應喜綵衣新、遙知徐福祠前路、

藥草猶餘舊日春、

送北圃生歸省南紀

無那春風馬上吹、

右折楊柳

河梁懸水接雲浮、先聖會携弟子遊、今日蘋蘩堪可奠

奚疑忠信渡波流、

河梁水

君家夜燕自風流、酒滿水壺客滿樓、東華圖書堪並照、

梅花枝上月如鉤、

賦梅樓初月、奉賀林郎君新拜秘書監、

彎刀露滴剖銀瓜、四出離披五色花、青玉吟成高士案、

琅干還贈美人家、

微月彎彎掌上新、剖瓜色圓碧嶙峋、寒應似金莖露、

堪起文園病谒人、

亭午朱輪暑未殘、綠瓜如棗滿氷盤、忽從海上安期手、

持贈風濤萬里寒、

暑日田子華貽瓜、瓜美、副詩、詩美、因賦三絕

幷謝、

鸞嘯閣陪宴、時呂君贈櫻桃、因同高子式賦、

萬顆朱櫻奪綵霞、漢園遺種滿君家、摘來無復相如渴、

疑是金莖瀉露華、

棧道秋殘多白雲、無窮岐路信中分、愁君吹笛峰前夜、

一曲關山對月聞、

暮秋送人之信中

四四二

門庭難得郭林宗、

右王孫游

茅廬伏枕絕人蹤、誰道疎狂不易逢、縱使家人成白事、

迷、

更垂、

春入東郊送馬蹄、揚鞭芳草正萋萋、行行應染征衣色、

右落梅花

作落梅飛、

春城雨雪正霏霏、東郊烟雨使人迷、

送米大夫賦得三絕

春城二月草萋萋、歳歳年年送馬蹄、應是王孫歸不得、

綵雲多處認笙聲、

王孫游

纔說離杯狠斷腹、

楊柳橋邊送柳生、黃鶴磯頭黃鶴鳴、忽乘黃鶴翩何逝、

送柳明哲取道鶴崎還植田

海上松前接大荒、蝦夷鞣鞨正蒼茫、如今卉服歸王化、

送人、

之松前

紅椒仕女圖

新擧嫡孫、徵余賀詩、因率爾賦贈、

休怪雷聲送雨來、

東漢子以善茶事常承恩寵、且巧築假山、癸酉春 陪宴同non避暑杯、凉高擁水亭開、座中此日雙龍合

歸、

夏橋南橋北逐君同高子式過米大夫亭、雷雨驟作、得開字、

柳條嫋嫋柳花飛、二月春風吹客衣、唯有柳花知別恨、

半夜秋風何處來、

柳枝

獨座空山月影開、遙聞幽梵響香臺、不知庭際芭蕉樹、

射聲遙在白雲間、

楊宿寧公房聞婪、得灰韻、

日愛爾林園心匠奇、將雛綵鳳此追隨、非緣慈竹多恩露、

何得孫枝子葉滋、

園裏紅椒日正曛、攀條立盡紫羅裙、長思公子香難見、

欲寄愁心向楚雲藪士厚過訪、余時疾作、門者不通、誤致命空歸、

歸後有詩見寄、因戲賦答二首、

寂寞柴門歲月移、床頭玄艸有誰知、聞君載酒空歸去、

還使子雲涎無限殘寒透客衣、試自凌風臺下過、

笛中吹恐使王孫處處嫋嫋江城楊柳枝、折來相送淚如絲、暫時繫得行人住、

四四一

尊明高閣彩雲新、白首談經華甲春、東魯青齊堪一變、

堯風舜雨被斯民、

辛巳春講尙書明閣

千林霜葉夜飄零、蕭瑟秋聲不可聽、夢裡忽疑風雨至、

開窓殘月滿中庭、

夜開落葉

池上秋風鴻雁過、游梁賓客意如何、園中本自栽脩竹、

吹入平臺幣更多、

秋風引

十二峯峰總想容、仙姝不見白雲重、細腰朝暮空相妬、

無那君王夢裡逢、

楚宮詞

身駕銀麠下太清、飄然巾舄絲雲生、角端忽見金牌動、

試問仙班第幾名、

五色春雲五老峯、素麑瑤珮碧芙蓉、採芝叱去蒼崖裡、

緣入天風化作龍

仙人騎白鹿圖二首

天風吹雪藥珠宮、琪樹凝華一色同、佩玉珊珊人不見、

步虛就在半空中、

却望緱山寒色深、

獨身追虎入南山、十里蒼茫去未還、寒日微微風色晚、

漢宮仙律未吹灰、此日江南驛使回、謝爾前村深雪裡、

偷春先報一枝梅、

冬至前一日謝人惠梅花

人間誰敢到龍門、赤羽橋西澁谷村、唯有芙蓉天際色、

遙將白雪賁丘園、

白賁墅呈服子遷

人傳郢樹已開花、一枝兩枝傍水斜、昨夜城南明月夢、

依稀早自到君家、

北風微雪玉成塵、開說梅園已漏春、多謝一枝猶未折、

斜片月待詩人、

米大夫以詩代柬見招、率爾和答二首、

滿堂含笑弄明珠、掌上相看興不孤、共道連城堪並照、

朱門如月有桑弧、

燕妮春夢滿蘭房、忽見流風揚國香、卜士今朝多雨露、

階前堪笑謝家芳、

新產龍駒毛骨寒、翩翩意態凌雲端、可知奇種黃河出、

已是長風千里看

宇士侯有弄璋之慶、賦此奉賀三首、

道觀雪二首

志賀山中信馬歸、山花撩亂撲鞍飛、一任春風吹作雪、

何曾容易拂征衣、

春日踰志賀山

遙見比良山頂花、一推行队駐馬遙相望、

春滿比山頂花、

瀲漸平湖含晩霞、風吹波色日將斜、行人幾度留春騎、

湖上立馬望比良山花、擬源頼政作、

蒼茫野渡不勝寒、

黃昏馬上客衣單、風雪紛紛撲玉鞍、買酒人家何處是、

佐野渡口馬上值雪圖

仙姝輕着六銖衣、姿態婆娑絕世稀、寄語天風吹莫定、

爲遮雲路不敢歸、

五節觀妓、擬僧遍昭作、

七言絕句

古城貞吉

著

校

輯犽

述肥後 秋 儀 子

先生可師、

秋色輕々淡墨、曉香寂々疎籬、餐英夫子知我、漉酒 玉山先生遺稿卷之五

遜雨雪飄搖珠樹林、瑤臺十二晝沈沈、飛來雙鶴迷影、

蛾眉畫未成、鴉黃口口口、相顧問張郎、新妝入時世、

右畫眉

四敍如裂帛、素手北風寒、啼向漢宮月、低頭不忍彈、

右抱琵琶

金籠學人語、時調綠衣娘、相思唯兩字、爲妾報君王、

右調鸚鵡

女伴學迷藏、花間低笑語、雙々珠履迹、是郎折花去、

右迷藏

忽拂梨花院、還過楊柳邊、綵繩風力軟、窈窕月中仙、

右秋千

漢宮倦刺繡〝雙淚濕羅裳、愁殺日南至、新添一線長、

右刺繡

春晝偸笙譜、乘間逃小樓、海棠花下靜、獨自按凉州、

右偸笙譜

噏湯浴罷後、女伴試啼聲、却憶中元日、銀盤弄化生、

右浴兒

素手拈棋子、數點摘春星、疑是銀河上、白楡種更低、

右對棋

打來彩仗裊、打去綵毬輕、羅帶廻身處、春雲逐月生、

右打毬

上同

一枝氷雪爲骨、半幅春烟自香、姑射山中處女、羅浮

林下新郎

墨 梅 訂

白雲芳草夕、飛錫此相過、知汝遊山處、紛々牛跡多、

六言絕句

贈玉岡尊者

羅衣暈春酒、珠箔映朝霞、睡起一流眄、朦朧桃李花、

右醉起

鬪草芳原上、風吹羅帶輕、愁來不肯採、中有王孫名、

輕風動羅衣、城東春色早、相逐向芳原、爭採宜男草、

右鬪草

美人臨金井、照影自相疑、水底紅顏是、多恐君寵移、

早起汲深井、新妝媚曉霞、不辭勞玉手、應灌内園花、

井闌紅袖濕、汲罷一婆娑、愁見綆縻滴、何如妾淚多、

右汲井

相對學藏鈎、纖手紛未分、忽見初弦影、無端入暮雲

右藏鈎

夷弄彤管、春閨一臨池、慇懃寫數字、不使外人知、

右學書

四三元

懸錢何處去、道是杏花材、縱渡斷橋水、不妨日已昏、

青鞋從此去、千里路紛々、何處雲門寺、相尋踏紫氛、

右草鞋

臨流禪師席上分題賦得二首

一爲馬郎婦、盥漱清池回、繡出低眉相、蓮花逐指開、

右浣手繡觀音

玉膚纔出浴、脂粉辭芳顔、眉黛不須畫、含情望遠山、

右薄妝

芳時看又過、小苑步遲遲、縱拾落花得、安能上故枝、

右拾墜花

祀竈聽靈鏡”昨夜夢金微、雨雪千餘里、征人歸不歸、

右聽鏡

素手拈蓮子、白露冷蓮房、應妬波上戲、打起雙鴛鴦、

右拈蓮子打鴛鴦

欲眠燈有暈、報喜忽開花、恐被春風妬、殷勤護碧

右護燈花

文君酒始醒、湯亦似長卿、愛此花上露、說甚金掌淸、

右吸花露

作宋玉

右折花送隣姬

四三七

樂府傳靑玉、文房愛烏皮、嗒焉喪耦意、只與白雲期、

題美人圖十八首

聞說前溪石、春泉日夜鳴、爲迎長者轍、不敢芳草生

几

昨日題芭蕉、今朝字皆滅、夜來風雨聲、應藏老夫拙、

答河口子

遙夜瓊樓雪、珠履應不鳴、何人跡已滅、何人跡更生、

晨起重題芭蕉

春江多風雨、高浪簸妾屋、妾屋不足云、郎舟何處宿、

絕 句

日暮三軍渇、茫~水草絕、狀士刺白馬、含笑飲靑血、

春 別

君今問要津、誰與鬪嶙峋、天際掬空翠、已如壁立人、

㠵㠵琴浦烟、悠悠琴浦客、烟如琴上絲、山如琴上色、

柱杖欲化龍、袈裟總是雨、有無縹緲間、何處辨琴浦、

出 塞

田園無俗事、秋色滿君家、籬落澹烟碧、晩寒蕎麥花

別默公、兼呈廣德萬仞禪師、三首、

右 杖

秋日過西山氏別業

應龍化作石、蟄伏已千年、一旦逢風雨、飛鳴欲上天、

徐福求藥日、秦皇驅石來、爲君庭際物、常見彩雲開、

奇石挾雙翼、風吹鱗甲鳴、主人時控汝、直欲到蓬瀛、

楊柳枝四時詞、應樂山公子之需、

紀北圃生、堀地得奇石、形似應龍、勢欲飛動、

首尾雙翼盡具、生素有米顚之癖、欣然下拜、遂

名曰應龍石、徵余詩、因賦三絕句贈之、

秋風吹客夢、不寐到天明、庭際芭蕉樹、蕭條金石聲

應龍石詩幷序

偶出 郊望、山村不識名、深々幽竹裏、中有讀書聲、

秋風引

風雪山陰夜、扁舟下水涯、千古興未盡、何處是戴家、

郊行口號

清風深竹裡、欲飲舉杯時、中有青蛇影、不敢俗客窺、

題文休承山陰雪夜圖

雜樹深山曉〝撲蔥嵐氣靑、道書時一讀、上有白猿聽、

竹 歙

幽邃光照寺、一逕泉石轉、芭蕉數十株、上人題欲遍、

山 中

因各和一首

墻東花滿枝、折取送隣姫、欲別苦相屬、莫敢狂蝶知、

捲簾引巢燕、所思在天涯、姜汝異游子、年々得還家、

右開簾引燕

玉指操玉杵、深鳩鳳仙花、剝盡春葱色、纖々染似霞、

右搗花染指

春日深閨靜、魚牋寫小詩、中有相思字、不知心屬誰、

右拾韻掇小詩

朝携翠籠出″暮採柔桑歸、春蠶眠始起、幾日作郎衣、

右剪桑飼春蠶

晨起臨明鏡´凝妝自寫眞、低聲問小玉、何似月中人、

右對鏡寫生

獨夜蘭燈暗、挑來耿不眠、洞房無人到、形影自相憐、

右桃燈坐

剪綵復剪綵、文思次第催、莫道春燈小、是儂手自裁、

右剪綵裁春燈

風吹柳條亂´急風柳花飛、去年誤分手、春歸人未歸、

五月柳陰繁、相送從此去、去時牽郎衣、奈此清風處、

秋風吹衰柳、蕭颯不成絲、非關送人盡、總無前日枝

邊地楊柳少、沙場風雪寒、却思洛陽道、飛絮撲征

題仇十洲美人圖十五首

四三六

花間扶上馬、池上故依々、應戀習家興、春風倒載歸、

小閣臨清流、烟樹日將晚、非關把一杯、自然使人遠、

題山筒倒載圖 總清藝術

風雪鳴不已、朝來三尺深、起開柴門望、試見山水心?

題孟喬畫山水

打起鴛鴦浴、幼女臨春流、生不知此鳥、唯妬兩兩浮、

雪後晨起

夜來過雨痕、生意滿前村、忽報隣翁酔、春羹足菜根、

幼女詞

高齋多雅趣、置酒此相過、玄語堪揮麈、黃庭欲換鵞

題菜根圖

青山開曙色、新樹自依々、寺在浮雲外、磬聲下翠微、

初冬夜集米大夫四時園

偶往前村去、歸來日已傾、柴門芭蕉樹、上有故人名、

曉發岡部驛

維舟絕岸下、烟樹晚依稀、山色欲成雨、行人歸不歸、

日暮啼禽歇、寥寥說法臺、山茶花落盡、隨意點青苔、

畫山水

暮過蓮光寺

深夜歸草堂、危橋臨澗壑、遙。風雪中、松火明籬落、

十月九日同諸友游光照寺、屏上有陳去非六絕、

四三五

春松多氣色、綠酢瀉金壺、時邀浮丘子、慇懃相鶴雛、

風雪夜歸

一見深々竹、便知高士家、琴書牀上色 總似入烟霞、

和笠原大夫元日韻、大夫有門楣之慶、

昨夜倡樓飲、歸來白鼻駒、漫誇錦袍袖、中有鳳凰釵、

絕 句

長安道上花、繁陰十萬家、遊女晝如蝶、歸人晚似霞、

少年行

春月靄花樹、沈々玉漏長、西宮夜轉展、歌舞在昭陽、

長安道

道是吳鉤刀、匣中盛秋水、一寸壯士心、其明亦如此、

班婕妤

十里青松樹、白雲松上來、不知何年夕、風雨下天台、

吳釣行

不寐抄茶經、深坐在竹屋、笑此舊青蛙、烟月照獨、

月影窺竹林、是我彈琴處、方其曲終時代徘徊似難去、

十里松

夜坐二首

愛此餐霞杯、風吹五色開、洞天春已遍、三十六瑤臺、

誰勺仙源水、瀉作杯中霞、一飲三千歲、童顏似桃花、

王孫歸去處、青草自萋々、行々漸應遠、不聞征馬嘶、

餐霞杯應宇土侯需八首

過柳拂簷隙、吹花落酒中、笙聲與鶯語、散入昭陽宮、

杯中堪累日、花下即爲家、停杯不肯盡、恐有落來花、

詠春風

縱度大行嶮、莫上淛漁船、每聞西風起、終夜不成眠、

妾身何所願、願化作淸風、餘芳逐君去、出入懷袖中、

妾心藕中絲、郎情絲外藕、藕折絲不斷、綿々己白首、

古別離

獨坐長松下、但聞謖々聲、家僮休掃石、恐有白雲生、

古 意

飮田元章宅、明日再集靑溪亭、醉後漫題、

百罋應不盡、五斗已過量、復敲西隣飮、牧皮似未狂、

景

春寒休辭醉、送君從此去、關山多雨雪、不見分袂處、

雪中送米大夫歸簷

日夕臨高臺、詩思落何處、誰知橋上人、暗向詩中去、

嶺上多桃樹、來時未着花、今朝駐馬處、滿目總成

霞氣生洞口、花間一逕斜、時々聞笑語、似有避秦家、

潤月亭茗讌、陪金地妙解兩禪師、同賦得庚韻

春澗茶烟歇、不知春月生、賓主對無語、花影滿邃明、

小 景

君昔共杯酒、今爲泉下人、唯餘一株柳、獨似舊時春、

自熱海歸途中桃花盛開二首

是其遺愛、

一自酌此杯、不作烟火語、隨意躡春風、欲向蓬萊去、

漢皇迎金母、度曲董雙成、還讌流霞館、九光杯裏生、

明月夾青霞、光彩何赫奕、自非長命杯、那得盛璚液

九華仙醞熟、酌錦離披、不是美門呂、此味那得知、

神遊華胥國、紅光滿其間、勅賜余餘瀝、哲爾改容顔

素娥勸沆瀣、言是天美祿、起舞飄霞裙、與杯同一色、

米大夫家藏古瓦硯、有結隣二字、按唐李衛公硯

名結隣、眞贋雖不可辨、盖亦數百年物也、米公

手摹造之見貽、視之宛然雅質、與真無二、以此

致交誼、結隣之義益明矣、因賦小詩謝之、

愛此古瓦質、想像衛公賢、休道李唐邈、結隣如比肩、

遊鎌倉過高子式墓 側有楊柳、

絕澗臨流水、清風六月寒、愛此白雲色、容易借人看

誰題芭蕉樹、零露溥盈把、不關秋風吹、蕭條獨自破、

清聽軒賦贈主人

愛此山花落、風吹故飛々、何似馬上雪、幾回拂征衣、

和子式

古渡黃雲夕、馬鳴風雪斜、紛々拂不盡、此去入誰家、

志賀山道中

4日已夕、難別路傍春、終就花間宿、喚君作主人、

佐野渡

遙々木幡里、豈無馬與車、唯爲相思切、徒跳到君家、

花下宿

月自舊時月、春非舊時春、落花逐流水、嘆息舊時身、

五言絕句

述男

輯

子

肥後 秋

著

玕

玉山先生遺稿卷之四

孫四三三

驅馬十餘里、人家半翠微、只見人衣濕、不見細雨飛、

寶劍直千金、無緣贈片心、雷生不可見、紫氣斗間深、

紅閨磨一鏡´未肯向人開、無那秋霜下、年~蕙草摧、

功名久已朽、英雄何處去、茫々郊草底、千載寂無語、

馬上口號

若耶花正發、采々女如雲、笑語隨風去、王郎聞不聞、

雜詠三首

對嘶雙寶馬、芳草綠如烟、相揖不相下、春風舉玉鞭、

采蓮曲

言昨游邯鄲、新賭得一事、觀者如堵牆、上有趙人字、

相逢行

紅樹不見人〝家在雲深處、應是典圖書、沽酒下山去、

逢俠者

飲馬隴頭水、水寒馬嘶悲、壯士忽一聽、秋色上鬚眉、

小 景

蹇驢衝風雪、侵曉問梅花、但聞暗香動、不見處士家、

隴頭流水歌

扁舟着釣磯、秋水晚霏微、復此殘樽酒、留連不肯歸、

探 梅

下舟又飲友人宅

題鳳還愁難値人、白雪陽春歌未和、赤城霞色賦愈新、「玉山先生遺稿巻之三

孤負相思來往頻、參差各自感芳辰、聽鶯漫道堪求侶、

在、後申以佳詩、及海鱗之惠、因賦此答謝、鹹鸞赤

嚮赤國鸞見訪、余時他適、他日往謝、又會其不

西望參河萬里天、長風飛錫度山川、王孫杜若芳洲色、

玉女蓮花春雪、故國故人無所住、他鄉他席總隨縁、

鳳來峰下經行處、應見袈裟多瑞烟、

東都贈別法方弓上人還參河

謝公詩似遠公禪、此日登廬思渺然、僧院春風花作雨、

鶯時物色柳如烟、數椽家在青山外、一路人行芳草邊、

向晩何須愁黑月、衣珠猶自照諸天、

春日妙解精舍陪宴得先韻

使者歡聲報弄璋、無端掌上有輝光、非關樛木被風化、

焉得芳蘭夢國香、繡戶紗窓螽羽集、靑霄白日鳳毛翔、

盛筵呪復瑤琴好、彈出將雞曲曲長、

茶鼎兼烹橘井泉、野服聊追鴻漸技、風塵不到鳳團前、

可知胸裏存丘壑、十里松濤徧半天、

鵲巢千里好音傳、階栽玉樹經年秀、門設桑弧如月懸、

南有高堂和氣洽、葛藟猶自入詩篇、

朱紱相迎此啓筵、君家下飲自神仙、上池大勝中冷品、

瑞雲遙起海西天、使者書來啓賀筵、熊府一時祥夢動、

大醫橘公宅茗讌陪我公賦得先韻

喜色滿堂、堂名南有、盖君夫人逮下之德、於是知君贈我情偏切、縷々貫來紫錦鱗、

乎足徵焉、恭述奉賀二首、

四三三

四三一

三車兼轉貝多文、天晴座上投明月、日暮詩中贈碧雲、

少林過雨淨塵氛、高閣追物象分、五馬忽開蘭若色、

己卯夏 君侯述職在東都邸、越五月十有三日、使

新晴少林精舍陪宴、得字

奉賀懸弧詩並序

黃髮相携同勸酒、殷勤留客聽漁歌、

自是山河堪可鎮、藝林名譽屬無疆、

桃花片々泛春波、洞口回舟偶此過、冠蓋總忘秦日月、

觀桃源圖

東都平景瑞奉命篆璽章、寄書徵余詩、因賦此賀之

興來試欲題新句、狂態縱橫奈爾何、

花間一覺餘聲在、影落紗窗疑是君、

昼漏沈々曉未分、王房金柱石榴裙、羅浮明月紇中度、

夢聽美人彈箏

飲過量、籃輿扶蹄、明日賦此、述謝幷解嘲、

春

重陽後一日、同服仲英及諸子、集赤國鸞宅、轟「牀上如雲三萬軸、
知君不讓鄴侯名、

諸天供給衆香積、呪復秋風送散花、

歌聞郢樹入春聲、素封爭說等千戸、南面何曾要百城、

蒹葭燕雀賀堂成、呪復難波江水清、詩見秦風餘露色、

數里聞鐘傍水涯、繳登香閣夕陽斜、蒼山空豁有無外、

書、因賦此贈之、

遊光照寺得霞字

授簡風流應不盡、爭推漢室馬相如、

浪華木世肅築堂於堀江之上、盖古難波津地、園

大夫高宴雪晴初、此夜樓臺興有餘、同色手中揮玉、

蒹葭堂詩並序

雪後夜集米大夫亭得魚

支謝從來交不淺、玄談未許世人聞、

添光腰下佩銀魚、澄江遙曳吳門練、明月纔臨梁苑裾、

紅樹蕭條三兩家、隨喜幽人淹勝地、貪看歸鳥入霞、

中鑿井、往々得蘆根云、因扁日蒹葭、詞人墨客

多有寄題、世肅託支明上人徵予詩、聞其家富藏

休笑先生雙垮、清高似伯鸞歌、同誇今夜星方聚

更惜重陽節已過、還使籃輿扶客起、仍餘菊酒醉人多

兒孫何識漢山河、一村雞犬烟霞裡、十里桑麻雨露多、

巫峽流泉沈上聞、歸雁迷雲魂縹緲、嬌鶯隔竹語氤氳、

君王朱璽照東方、古篆奇文爾擅場、二世休誇秦氏寳、

千秋何數漢家章、彩毫新蔚雲霞色、黄道高懸奎璧光、

者自熊府至、報侍姬慶事、君侯曁君夫人聞之、

蕭條萬里一悲歌、多少門人執拂過、涕淚千行紛絮酒、

風流咫尺邈山河、本知幻境同蝸舍、終見眞遊屬竆、

葬于

墓

信連哭高子式山人 首

愛賢公子酒如河、陪讌何妨酢且歌、梁苑相如裁賦入、

齊時石父載車過、館前呪有緇衣好、門下爭誇珠履多、

爲是高臺寬禮數、還疑冠帶易松羅、

陪樂山公子宴、同越子聽岡士騏賦

共說金丹難駐顏、斯人倓爾去塵寰、一時酒態王侯座、

萬古詩名天地間、明月夜光埋玉樹、白雲秋色滿缣山、

無情最是萱洲水、日日東流不復還、汕軑家畫譜費刊湘創

一葉飄零哭素秋、銀河傾盡淚橫流、山中叢桂招魂

寺後煙霞託體休、地近要離餘家、天喪庾亮有高樓、

樓頭明月長如此、頓覺清輝異昔遊-汕人洮在圓證時後丘、

逝矣山人一草亭、牀頭詩卷動精靈、投珠終暗連城夜、

掛劍偏寒處士星、宋玉仍招哀楚些、侯芭尚在識玄經、

門前楊柳今搖落、騷屑悲風滿舊庭、椡貼斯遺愛

山人宅有楊柳一

慘澹秋陰鬱未開、白楊風色入悲哉、還疑銀漢乘槎去、

不見緱山駕鶴回、吹笛鄰人思呂壙、談詩社友憶匡來、

影蒼蒼照夜臺、融北渡湖鄉川

山人以七月六日

可堪明月樓空在、寒影蒼蒼照夜臺、

十年杯酒見交情、豈謂今辰涕忽傾、人自坐隅悲鵩止、

客誰牀上作驢鳴、一從流水朱絃絕、無復陽春白雪聲、

鄉河旅

相送六鄉河畔月´翩々丹桃夜寒生、楊所歴

旅櫬依々戀草堂、鐮臺西望更悲傷、舊園蕉鹿終成夢、

今日人琴俱已亡、秋入楚魂不返、月明湘水恨偏長、

柴門空鎖山阿夕、蕭瑟西風薜茘裳、仙认有踔堂在謙槍、蕉

鹿園薜茘門皆其諸勝、

把臂論心彼一時、無端化去淚如絲、筐中縞帶看猶在

身後瓊瑤報已遲、元伯友來情更切、杞梁妻哭曲何悲、

秋生江島終難起、愁殺觀濤未及期-山人未病時、惠余鎬帶、

夏日少林精舍集限韻

晚秋少林精舍陪宴、遲服子遷及仲英、不至、是

日滕天錫在座、得灰韻、潤仲英有懸瓠之

彭澤先生期不來、謝公相望倚香臺、縱然紅樹通山屐、

辜負黃花口酒杯、落筆池邊龍氣動、談經塔外鴈聲、

知君赤水貪看月、應有明珠掌上開、

慶、七八句故云、

新晴香閣接諸天、避暑陪遊倚檻前、賦起雄風大王座、

燈懸佛日少林禪、青山總染蓮花色、淨几仍翻貝葉篇、

共道淹留原不住、此心還向白雲傳、

未報、

君脩建碑勒文、

途就葬塲、

嘆息峴山成故事、猶疑登望在烟蘿、汕驒證喝覺寺後、而樂

四三〇

丁夫日日汲潮煎、爲盡鹽池似書田、新見漉沙凝素處、

松濱觀鹽丁潮作

松江城闕自巍然、此日登臨爲政年、原識黃圖歸版籍、

遙看皂盖繚山川、從游盡是鄒枚侶、語笑無非管晏賢、

共道盛筵唯卜畫、太師兼奏角招篇、

陪駕上松江城樓

水晶簾内影嬋娟、無語新粧暗可憐″粉蝶低飛羅襪底、

彩鸞綋舞鏡臺前、掛絲楊柳籠春月、入畫梅花帶夜烟、

恐是高唐雲欲滅、東家美女自神仙、

隔簾美人圖

海東樓閣表秋天、雨後登臨思渺然、珠履休嫌延上客、

緇衣欲比好名賢、芙蓉影落憑欄外、木葉寒生把酒前、

今日何須鴻雁顧、風流大勝雪宮年、

表海樓賦贈服子遷

凝露臺高晴景殊、崢嶸金刹海南隅、九天白日看堪浴

一望青山忽欲無、幽梵曉淸松外度、片帆風急鳥邊孤、

鮫人別涙滿沙浦、光彩應同衣裏珠、

遊佐賀關德應寺、留別天瑞上人、

南宮草木自精英、無端黔首倒戈日、已是黃河如帶盟、

四海如今慈誦滿、風雲長護武江城、

四二九

聞說名園種菊花、惠來遙自大夫家、銀仟插得裛輕露、

綵錦裁成奪遠霞、秋色應兼嘉樹好、晚光還使落英加、

陶然彭澤堪沈醉、不覺烏巾頭上斜、

謝峨眉長岡君見惠菊花

榴花春酒照庭圍、五月聞君海上歸、長命縷從今日續、

大夫齡已古來稀、烟霞新染靈椿色、雨露偏流嘉樹輝、

爲是平生裁錦美、堂前兼見老萊衣、

甲戌夏、宇土左大夫自東都歸、其嗣子坤徵余壽

詩、因賦贈之、

遊戲揮毫忍上人、風流瀟洒寫余眞、青衣兼見口口趣、

美酒憑將花鳥親、點石爲金龍猛勾、添毛加頰虎頭神、

卷舒相對吾忘我、形影還疑鏡裡新、

忍海上人戲寫余醉像、添以花木侍童、阿堵之妙不

可言、盖其寓意也深矣、因賦此致謝、

風烟兩地歷居諸、重喜相看到草廬、對酒當歌今日興、

加餐努力十年書、狂不用門題鳳、縱飲休言釜有魚、

呪復城南山水美、何妨携手命巾車、

重遊松江、過飲南澗宅、有詩和答、

還疑伏火辣丹煙、虎形原識周廷禮、魚利兼饒齊國年、

一自鄒生吹律罷、飛霜六月下青天、

烟雨霏微動早秋、鑑湖良宴此淹留、瑠璃閣出林端、

菡萏花開鏡裏浮´駒邸千金燕客到、雄風萬里楚王游、

鑒湖臺雨中陪燕、得尤韻

一路青山入紫氛、幽人行迹香難分、柴門那用題凡鳥、

竹徑空憐逢此君、植杖暫時看落日、采芝何處掃殘雲、

可知鸞鳳雙雙嘯、縹緲隨風天際聞、

訪隱者不遇

偶隨流水此經過、一逕蕭條入薜蘿、林靜鳥聲生暝色、

秋高塔影落煙波、黃花浥露供香積、淨几臨風翻貝多、

諸品寥寥堪卜夜、何妨明月照袈裟、

臨流精舍得歌韻

韓康此日有嘉賓、漫避高名混市塵、遺世寧妨囊賣樂

養生還說火傳薪、紅顏猶駐桃花色、白髮何孤竹葉春、

休笑老夫心尚壯、玉壺歌罷引杯頻、

崇古樓集、次原子才題壁韻

高樓九日玉壺殷、五馬相迎照醉、總爲黃花開兎苑、

更將朱邸擬龍山、千秋樂事狂歌外、萬里長風雄飲間、

共道參軍誇落帽、留連未許使鑣還、

九日龍口邸宴集限宇

爲是時時龍女至、諸天仙梵雜潮音、

慶長征戰此安營、誰識雄圖難與爭、東道旌旗餘氣色、

髒蒼山色繞南宮、憶昔關原起大風、漢業基成懸日月、

楚歌聲湧决雌雄、連營一日歸仁德、京觀千年見武功、

父老于今談往事、靑天倚劍有飛虹、

戊寅夏自東都歸、取道濃州、經關原、聞父老展

圖談往事、有述二首、

休道登高興可除、何如獨酌對烟霞、盤收錦里先生粟、

杯泛柴桑處士花、笑我白頭成雪盡、任佗烏帽受風斜、

除非窗外南山色、世上風塵不到家、

九日獨酌

米大夫登飯山得奇石、携歸置案頭、愛玩不己、

予爲名曰飯顆石、取之李白逢杜甫詩也、因賦贈、

拳形勢坐氤氳、相對牀頭遠世氛、五色補天餘片名、

千山縮地出孤雲、風流終受米家拜、寒影遙從飯顆牙、

誰道昔人詩思苦、何知大瘦不如君、

鸞嘯閣集、和格外禪師韻、兼贈黃檗大鵬和尚、

涉歷相誇滄心東、慈航到處自圓通、傳衣兼繫明珠色、

飛錫遙隨大翼風、千里偏滕萍水合、一時爭仰檗山雄、

高僧心事應無染、知是朱門蓬同、

欲歸休厭塗泥甚、醉倚銀鞍興亦幽、

四二八

高齋相見酒杯淸、君自風流一代名、畫裏芙蓉靑眼是、

胸中丘壑白雲生、逃虛偏作眞人想、避世還同傲吏情、

芙蕖館宴集、賦贈服子遷

春日太醫橘公尚友堂集、同越子總賦得先韻、

玉壺春酒艷陽天、白日遲遲開綺筵、雙闕晴雲花滿樹、

比門過雨柳烟、名流只識倉公術、上客爭推石父賢

風暖藥園歸去晚、小鶯啼盡落暉前、

樓頭少婦弄鳴箏、巧拂朱紘對月明、露滴芙蓉嬌夜色、

潮生蘆荻散秋聲、胡天鳴雁愁中度、漢苑啼鶯夢裡清、

一自周郎回顧後、纖々素手不堪情、

聽箏曲

高館新晴黃鳥啼、雙柑斗酒爲君携、千秋堪畫芙蓉色、

三月爭尋桃李蹊、應似探珠遊赤水、何妨問字到口口、

春風別後如如憶、人在關山落日西、

芙蕖館看花留別服子遷

司天臺下草玄亭、促席爭傾白玉餅、仙律吹灰逢至日、

鳥聲求友響間庭、不緣太史觀雲物、那識同人聚瑞星、

休道交懽非卜夜、燈前相見眼逾靑、

至日嚶鳴館宴集

愁來幾度將書信、欲寄飛鴻不可攀、

大悲高閣海之潯、磴道盤殂易夕陰、經罷兎崖明月上、

帆過牛渚碧流深、雲霞總染珊瑚色、爐氣偏饒簷蔔林、

月夜舟中望阿伏免觀音閣

嗟我微官鬌已班、偷間今夜扣禪關、燈花忽照空花色、

貝葉秉翻落葉間、朗月爲餘玄興、白雲應似沃州山、

時聽寒漏沈沈響、對坐相忘未擬還、

冬夜遊一個菴、得刪韻

英雄城跡倚崔嵬´筥嶽鞍峰望壯哉´形勝猶餘蛇口在、

威靈還自鳳儀來、南朝兵甲勤王略、西海風雲拉鬼才、

獨過泮宮尋故事、春風依舊杏花開、

菊池城覽古

荒村侵曉促征裝、旅館閑花情更長、月落林間迷蝶夢、

風吹柳外斷鶯腹、樽前縱作一朝別、衣上猶應三日香、

此去行行誰定主、春光滿路即爲鄉、

咏旅館花

回首東林向夜閑、大夫高宴共憑欄、月明白露垂嘉樹

坐久玄言屬臭蘭、望後蟾蜍依石轉、愁來烏鵲匝枝寒、

最思一水溪橋隔、遙識蓮花漏已殘、

望後米大夫宅集、遲盈上人不至、得寒字、

不爲橋邊攀赤羽、何緣得聽鳳凰鳴、

雙橋東望路紛紛、雪後鳴鐘隔岸聞、積素梅莊分曙色、

雪後過羅漢寺

日出侯第宴集、初謁尾藩命卿成瀨君、及其分嗣君、

堂上金樽興自豪、何妨雨露及吾曹、風雲飛動雙龍氣、
霄漢長鳴一鳳毛、梁苑鄒枚寛禮數、齊卿高國見才毫、
縱然車馬如流水、山色偏能照客袍、
謾道江顔羽翰生、無端惱殺漢王情、鉛華零落靑鸞鏡、
玉樹摧殘紫鳳笙、非向廣寒宮裡住、應隨姑射雪中行、
亭亭孤月紗憲夜、天際遙聞環珮聲、
輓宮人入道
皇華使者賦西征、意氣揚揚玉節明、萬里風濤生筑海、
千秋雨露湛肥城、黃圖無改山河色、朱璽依然帶礪盟、
經歷九州君試聽、不知何郡鳳凰鳴、
征軺遙指鎭西天、此日淸朝甲分傳、原識本支周百世、
新視文物漢元年、白縫寒火王跡、紫海春星逐使船、
不用霜威凌草木、應須問俗擧遺賢、
送鎭西巡檢使二首
四牡騑騑滿路春、仙臺擁節一東巡、風雲天入大荒野、
方岳星分率土濱、山湧金華連海出、地生芳草染衣新、
本聞風俗多淳朴、到處聲詩堪可陳、
懷昔風流飮博間、相逢意氣各紅顔、暮烟柳院聽鶯到、
春雨花街並馬還、一別文章餘短髮、千秋蹤跡託名山、

寄懷越子聰於水府設核圩證轕忐卟黼附

第六句故云、

孤琴匹馬向南州、路上垂楊綰別愁、故國三山連鳥道、

長風萬里捲鯨流、白雲光動瑤姬廟、碧海春饒女舟、

歸日萋萋芳草色、佳人悔賦王孫遊、

徐福遺蹤傍海濱、紀南風物到今新、龍門三月桃花浪、

熊野千年藥草春、此日啼鶯偏惜別、明朝求侶更傷神、

縱然白浦多珠玉、容易休投行路人、

春日送北圃生還南紀二首

黃花濁酒暫淹留、詞客相携對素秋、白社自從烏帽落、

龍山何似虎溪幽、攢眉佳節休歸去、開口浮雲堪勝遊、

此會年々應健在、生涯不必問長流、

九日集蓮光陪舍

登臨香閣靄餘暉、寒色蕭條霜氣微、高麗門前紅葉下、

祇園山上白雲飛、一官誤奏千秋技、半偈綴持萬事非、

極目長江流不盡、時看歸鳥破林霏、

初冬遊妙解精舍得微字

凝華蘭若絕塵氛、三千世界留明月、五百應眞現碧雲、

隨喜諸天堪逼照、玉毫光裡超人群、

送鎮守府巡檢使

穩、余不欲改也、

庚辰冬十一月二十五日夜、夢賦巫正屏風、覺後｜天廻山色白雲開、千年狐石埋芳草、幾字羊碑蝕綠苔、

補變陰晴三字、得成全篇、唯平仄失粘、對偶未 中外欲敢王化遍、何辭百里此徘徊、

裁衣却受福田疑、靑氈本屬人間有、明月還敢外魔窺、

須信繩牀無長物、秋風夜落白蓮池、

送二野巡檢使

殘雪間、

創業開基從此始、知君駐節不思還、

屋梁君子事何奇、精舍空偷囊裏詩、乞食休言貧道是、

戲賦寄

繡衣承寵照朱顏、奉使叄河一出關、五色風雲扁舟、

聞曇公房有盜警送參河巡檢使

霞裙星佩杳徘徊、忽向瑤京白玉臺˹太乙壇空春草井君祥盆池上疊石假作山、宛有合、

九還丹就綵雲開、葛陂浪惡龍終去、蓬島風高鶴不回、

知汝仙遊堪可樂、紅塵日夜使人哀、

共道交園能解渴、玉環獨自醉西凉、

肘樓高擁碧雲滿酌、解醒還有蔗漿寒

詠蒲桃

輓道士

表海樓避暑陪宴作

勞神女情、

九州屏風鑑湖新霽動新凉、臺上陪遊興自長、桐葉題詩猶宿雨、

菊之約、因賦此奉謝、

汎芙蓉對酒有餘香、千金駒邸延燕客、萬里雄風對楚王

更約東籬佳色日、還將烏帽醉重陽、

秋風八月有微霜·架珍苞引蔓長、頷下龍珠低欲吐、

盤中馬乳滴還香、金莖露結垂垂色、銀漢星含璨璨光、

咫尺千里之勢、

余爲榜其亭、曰吳淞半江、取諸杜少陵也、

幽亭咫尺縮滄洲、還向壺中作勝遊、泰華飛來千仭色、

吳淞剪取半江流、樽前日月供青眼、盆裡風烟渺素秋、

相對不知心匠巧、飄然直欲泛畫未成、巫山十二變陰晴、月落哀猿愁
裏聽、

花飛胡蝶夢中輕、朝雲暮雨來豕去、萬壑千峰滅還明、

襄王臺上人安在、朝暮空端、六月清凉暑氣殘、山出芙蓉懸檻外、

江廻素練曳江干、吴鹽如雪銀絲膾、湘簟生風朱李盤、

此日何須辭龍躍地、

千秋日月鳳來山、春饒杜若芳洲水、天泡芙蓉驅車二野氣雄哉、君自翩翩漢使才、地入邊垂鳥水斷、

豪露園

賀從我公陪宴樂山公子於駒邸鑑湖臺、重賜、

從駕陪宴宇土侯蘭雪館、適園中生靈芝、因賦奉|瓊筵弄影飛觴處´潦倒芳園李謫仙、

素娥憑酒醉、桉疑玉兎竊丹眠、

詠春月

怪、風流無語不烟霞、

上客留連裁湛露、何妨銀漢向西斜、

赤欄橋畔日將斜、把酒同臨春水涯、䄂裡青蚍呂翁膽、

風流避暑屬侯家、河朔當年休漫誇春日呂君宅宴集、嘗奉命求藥石州、

引|鳳凰、

宗藩高會有輝光、朱紱相迎薦酒觴、池上儵魚巧畫雙蛾似個長陪宴濠濮園、至夜、有作二首、

無 題

戊寅夏 公駕自東都歸、越伏日推恩宇土侯來賀、 共說紀南山色秀、從今献壽幾千秋、

裁松總是作龍鱗、蟠根還傍萱堂出、偃盖頻迎華早新、

七言律

同賦松契萬春、謹奉壽紀智境大夫人六十誕辰、

述男名園駐駕有輝光、呪產靈芝色滿堂、石上堪餐商嶺種、

輯儀

著

肥後 秋 儀 子

遜羽

階前欲笑謝家芳、朱柯煒煒迎丹紱、紫盖亭亭映玉觴、

爲是推恩多雨露、本支兼擢九莖長、

日東熊埶海之濱、鬟女當年此避、采藥長看垂鶴髪、

笑蒙叟、

園中鴻雁顧梁王、推恩兼見本支茂、陪宴原知瓜瓞長、

自是凉臺忘伏日、休嘲割肉侍臣狂、

、夏簟琅玕分竹影、

池亭畫舫隱荷花、爭開北海千樽酒、翻割東陵五色瓜、

樂山公子裏露園菊花盛開

、紗窓繡戶惜年芳、欲攀楊柳腸先斷、

末折梅花手自香、夢傍陽臺雲作雨、魂迷洛水月如霜、

朱樓高處將瑤管、吹向絳霄門前丹井葛洪家、十洲三島曾求藥、萬壑千峰日見花、

君自神仙誰得江上餘霞一鏡懸、流光瀲浉夜如烟、娟娟纔度梨花外、

濯濯初臨楊柳邊、姿見名園飛盖映詞場、爭醉風流公子傍、駒邸看雲多道氣、

鑒湖浮日有輝光、偏憐叢菊千壺滿、何比柴桑三逕荒、

不是重陽堪潦倒、休誇落帽孟嘉狂、

金峰險且邃、登陟動經旬、迢遞滩城闕、徘徊避世塵、

荷鑱尋藥物、振策去荆榛、所慕岐農業、寧追沮溺倫、

靈巖摩碧漢"飛瀑灑靑旻、棲樹仙禽語、捫蘿瑗狖馴

嘯同蘇嶺客、謳似葛天民、縹緲懸梟舄、逍遙戴鹿巾、

藏王跨崋、大士倚嶙峋、枸杞逢奇犬、松花見異、

落英舍曉露、叢桂媚秋晨、野色胡麻熟、風光杜若新、

頃筐臨絕壑〝雙屐涉良辰、芝秀思商叟、蘭芳戀楚臣、

禹粗洵換骨、堯韭可輕身、但使長年保、何妨小草親、

黄精宜却老、紅朮易回春、

朮易回春、呪爲餐雲母、兼能頤谷神

到來猶未返、采摘總堪珍、疑入桃源路、悠然共探眞、

六言律

漸與青山遠、還敢白髪新、無縁着勝地、何以避囂塵、

已負持螯手、空歌伏櫪身、休誇書自聖、不信筆如神、

欲笑難開口、多傷厭入唇、生前壚上邈、愁裡杖頭貧

落莫高陽興´行吟楚澤濱、可憐長揖客、却作獨醒人、

俄覺乾坤窄、枉分歳月頻、肺腹非爾有、眉宇奈他、

縱悦太常婦″深羞文擧賓、蕭然桃李下、瀹茗送殘春

秋日採藥、登金峰絕頂、遂謁藏王祠、探靈巖洞、

觀皷瀑而歸、賦贈邨淳民

杯覆坳堂水、醪乾虎壁巾、竹林交稍絕、蓮社會應親、

年年歳歳過客、雨雨風風憶家、夢裏三更水石、歸來

萬里烟霞、素琴孤劍無恙、濁酒枯魚可除、相見妻兒

一笑、俄然雙髩成華、

壬午還家志喜

朱門朱紱相會、龍邸龍山興同、裁賦大夫侍宴、鳴珂

上客爭雄、東籬黃菊堪採、北海青樽不空、滿座休嘲

落帽、高歌長嘯西風、

重陽龍口邸集得一東

避暑同河朔、臨風憶楚臺、千峰過驟雨、三伏激鳴雷

倚劍龍飛動、持杯鳌擘開、池晴荷氣淨、雲散竹涼催

忽見衆星聚、兼憐二妙來、綵毫干緯象、永簟絕炎埃、

盤已沈朱李、階仍長綠苔、此樓高幾許自喜得追陪、

表海樓避暑陪宴、是日雷雨大作、須臾忽霽、同群龍爭吐燭、

滕天錫關子肅賦、

、麈尾憶淸狂、偏惜枕中寶、空傳肘後方、

家猶留彩翰、世竟失靑囊、雙淚綆縻滴、徘徊橘井傍、

公家藏名刀、快利無比、嘗一歷德

廟之覽、事存口碑、第九句故云

龍負

漢宮悲尙藥、鄭地哭長桑、昔賜金莖露、今殘玉樹霜、

憐君老喪子、相弔一長吁、聞自卜玄宅、忽如過白駒、

明將傷子夏、年未及羊孚、形影餘詩卷、山河邈酒爐、

風寒悲落木、霜下濕生芻、虛室知疑在、高堂誤欲呼、

目中應不慰、庭上昔曾趨、愁殺書窓夜、蒼蒼烟月孤、

大醫 橘公輓詞

凝華銀椀裏〝積素玉毫光、片片空中落、紛紛別處掛、

爐烟明碧篆、書帙晃縹緗、蹤逐牛車滅、雲連猊座長、

傳心本不染、斷臂何曾傷、疑是衣珠色、投來照路傍、

山子松喪嫡子賦此弔慰

三山應羽化、一壑使舟藏、風雨飄丹、郊原有白楊、

龍泉餘意氣嗟子謝豪飲、風流終未眞、看花偏寂寞、聽鳥轉逡巡、

王者一停舟、紀國分前後、觀光任去留、燃犀仍遠渚、

結蜃即層樓、星隕宋都色、珠還合浦流、綠烟兼夜颸、

朱煆向晨收、因識玄虛賦、應隨此地遊、

嘲九萬年罷酒

帝舟夜、烏流王屋天、西巡曾此地、靈異到今傳、

當年巡葦北、寒燄憶蕭丘、萬點連空出、三更燒海愁、

紅從魚眼射、暗自蚌胎投、偏訝珊瑚碎、不知火齊浮、

紫海孟秋晦、蒼波陰火然、團團舍浦動、點點傍汀鮮、

腰眇鼊鼊駭´闌干星斗懸、燈明千佛現、金色萬鱗連

非入波斯市、還窺娑竭淵、蜃光搖欲湧、鮫淚散逾圓

錯落陽侯外〝依稀罔象前、銀河寒倒影、貝闕璨舍烟、

景行帝西巡幸所見、不知火者即是、是夜登山而

望之、萬頃千點、若連珠然、號爲龍燈、比曉漸

次星散、實吾藩一奇觀也、因賦紀之二首、

我南鄙海上有寒火、以孟秋月晦見、有閏再見、

每歳不差時日、史稱

詠龍燈詩幷序

四二 三

冬景如春色、寒梅着數花、聚星諸彦座、置酒大夫家、

麈尾玄風入、羔裘白日斜、門楣多喜氣、光彩映高霞、

南郭服翁既沒、其嗣仲英持翁平日所用書案、贈曇

龍上人、以示世交不渝焉、上人乞銘、銘成書贈、

敬愛憐公子、離憂奈故人、布衣交不惜、杯酒興愈真、

爲借青雲色、渾忘白髪新、同游難屢得、從此隔音塵、

和米大夫韻、時大夫有門楣之慶

空濶洞庭水、雁波浸遠天、乾坤黃葉下、吳楚白前、

鼓瑟來秋氣、憑欄眺暮烟、朗吟何處發、風雨有飛仙、

樂山公子席上別越子聰

四海推儒雅、諸侯失席珍、家餘左氏業、名比服虔倫、

徒見燕金在、空嗟楚醴陳、兎園縱值雪、授簡更無賓

嗒坐如喪耦、哀歌忽送君、人間昔隱几、地下今修文、

梁自留明月、廬終鎖白雲、蕭條風雨夜、猿鶴不堪聞、

締交垂十年、臨哭一潸然、玄晏遺佳序、鍾期入絶菘、

愁雲連白賁、落日沒蒼天、已矣先鳴者、空載後死傳、

空山理玉地、風格故難忘、一見生薇色、兼思宿草芳、

玄經終寂寞、絳帳自凄凉、千載芙蕖館、餘香易斷腸、

擬登岳陽樓

處士星終隱、潜夫論已閑、招魂空佇立、愁絕暮雲間、

完公安穩否、寶刹曉相望、大雪埋初地、孤峰兀上方、

青蓮爭灼爍、白足共翺翔、幽屐失苔逕、殘燈漏竹房、

林寒璧月、汲井凍銀牀、未見梅花發、唯聞蒼蔔香、

四二 一

此翁終不起、訃至淚沾襟、分袂綴春夏、離杯竟古今、

百年胡蝶夢、半夜杜鵑音、流水嘆長逝、氷淸見片心、

庭花空自落、墓草日應深、西望堪腸斷、蒼茫海月沈、

曉雪寄完禪師

獨園終寂寞、雙樹欲何依、東海三車轉、西方隻履歸、

參玄空掩室、賜紫只傳衣、庭草餘趺坐、天花失指揮、

愁雲埋上界、閒月弔禪扉、神理縱如在、綿綿事已違、

宗仙岳翁訃至慨然有作

諸天無毒熱、九夏自清凉、掃院來荷氣、開納竹光、

興迎朱紱逸、吟入碧雲長、厨味分甘露、爐烟爇妙香、

青山通覺路、白月照迷方、縱在藤羅外、歸鞍夜不妨、

哭大川和尚

少林精舍避暑陪宴賦得長字

几案餘遺愛、相思涙不乾、烏皮虚可隱、青玉比還難、

南郭翁長逝、右軍書已殘、爲同蓮社會、留與上人看、

五言排律

副以此詩、

不知隣市城、偶坐隱心生、無復風塵到、偏能杯酒傾、

一日遊靈地、千年問刧灰、寺連紅樹出、門擁白雲開、

不盡深川水、無端短晷催、爲期明月至、中舄暫回、

宿池石山書齋

西風吹驟雨、病客思悠悠、天地孤燈夜、江湖獨雁秋、

青山成遠夢、白髮爲多愁、不寐聞更漏、沈沈曉未休、

初冬遊深川本誓寺、寺去歳罹災、葺理未完、賦

呈香谷上人、

長卿游未倦、陪宴共論心、豈謂名公座、無端小鬼侵、

難憑枚發起、謾使杜詩吟、寒戰君堪勝、何妨醉酒深、

旅館夜雨

陪遊餘九日、邂逅已三年、酒泛黃花色、詩裁蔓草篇、

渥恩堪既醉〶同病更相憐、公子名園興、長教雅集傳、

同前、席上酒酣、子聰瘧疾大作、尙猶豪飮不休、

因賦此壯之、

人間奈天札、宇內失神醫、丹藥成千古、靑囊亦一時、

鶴從華表去、虎向杏林悲、回首綵雲動、仙遊信可知、

重陽後病起、陪宴樂山公子裏露園、菊花盛開、

席上邂逅越子聰、子聰是日力疾來會、與余別三

年矣

赤羽橋前水、東流不復還、撫牀傾涕淚、對酒邈河山、

城東秋已老、松菊興悠哉、地似陶家僻、窓繙周易開、

鱸蓴觀客醉、雞黍見兒才、忽聽鳴鐘動、苦留未遣回、

哭服子遷五首

聞說東溪上、寒花易漏春、雪中迷去馬、山下問行人、

幽逕隨橋畔〳浮烟傍水濱、林端微月吐、忽見一枝新、

杪秋過飮舍翠亭、主人好讀周易、是日見其二子、

席上賦贈、

一宿城南地、清愁滿水涯、尋人乘夜月、題句問梅花、

意氣雙龍劒、風流二陸家、偏憐春酒美、夢裡在烟霞、

東溪探梅

歸去知何處、蒼蒼不可尋、乾坤餘隻履、龍象哭雙林、

飛錫本無跡、傳燈唯見心、山中明月夜、涕涙落衣襟、

冬夜宿田元章宅

大春終不起、經義孰能窮、玩世生涯盡、圖南志氣空、

垂帷餘短景、閉戸有悲風、嘆息瘞牙地、蕭條落葉中、

哭不識和尙

世人呼爲落葉塚云、

門人某

青燈堪一局、玄語向三更、瀟洒幽篁裡、同眠夢自清、

經授弟子爲業、得稽古著書、

哭井子叔關玩世教主、有遺楬腳印圖南、骨辮脫牙於牛頭、

四二〇

哭官醫桃菴先生

四一九

伊字開三點、禪心照八功、楊枝淨無比、應與大明同、

信中小埜雙瀑

命、錄國中九十以上、賜帛酒有日、唯未施行、

適孺人一日忽奄逝矣、合葬于烏石村宅南習軒先

生之墓、噫余幼讀書舅氏所、唔咿徹曉、寒咳屢

作、孺人夜起、用姜熟湯慰勞之、率以爲常、因

感念往事、爰成玆詠焉、

節後餘修禊、池亭重此陪、羽觴隨浪去、羯鼓爲花催、

肯讓群賢集、空期二妙來、家兒扶我起、何厭醉中回、

東山花下逢河子龍臨別賦贈

焉、遲岡士騏田大璞、不至、分韻得十灰、

癸未春哭千葉氏、千葉氏年旣九十、先是我公有「寒色生紅葉、山光凝紫氛、無端鐘磬發、但恨昜斜曛、

上巳後栖歸林看暮雲、一餐香積飯、不立貝多文、

和匡卿

忽見銀河裂、還疑素練分、客衣千里、暫此洗塵氛、

癸未暮、君侯視學、親聽諸生說經、童子背誦

于俘明閣上、因謹賦奉獻、

歲晩耽文史、憐君混隱淪、檜杉多僻地、城市避囂塵

歲杪贈山叔瑟避喧讀書檜岡鸝在

飛瀑爭相灑、懸崖迥不群、雙龍吟落日、長劍倚層雲、

同愛楓林晩、兼憐蓮漏淸、風流爲許酒、隨喜遠公情、

烏几看雲靜、韋編映雪新、鹿門誰最好、恐是姓龎人、

少林精舍陪宴既夕登西隣白雲菴後峰過橋而歸

小隊携餘興、追隨出世塵、磴緣靑壁上、菴與白雲隣、

復此爲禪侶、何曾謁主人、還過流水去、橋畔晩凉新、

哭千葉氏詩並序

日暖和鸞響、經筵侍泮宮、菁莪多雨露、芳草偃春風、

濟濟靑衿子、皤皤黃翁、琴聲將鳥語、總在杏花中、

妙解精舍席上盡、禪房重陪宴宇土侯鑒水亭、有鼓樂之饗、兒遜

也亦與九十名空錄、兒孫淚忽垂、含飴已作昨、桐酒竟難期、

烏石村南地、白楊風正悲、憶會飛雪夜、燈下慰唔咿、

題溫泉寺三點井在短州

熱海分仙液、温泉涌梵宮、靈山多利益、深井自圓通、

相逢佳麗地、花事易殘春、休怪停杯久、偏憐傾盖新、

浮萍千里客、攀柳暫時親、再會知何日、喪回欲濕巾、

初夏紀世馨嚶鳴館雨集同瀧彌八井子章賦 效

春盡年芳靜、霏霏雨似絲、殘花悲白髮、佳木變黃鸝、

裁序慚玄晏、知音託子期、但敢幽屐在、潦倒不須辭、

日斜、何須投轄去、自駐盡熊車、

春日田士善見訪、䝿以形管、余時他適失迎、還

舍賦此致謝

第

先師已寂滅、之子永歸依、夢幻雲相逐、虛空鳥共飛、

三生緣未盡、長夜笑應微、縱是餘雙樹、蕭條花更稀、

白賁門常鎖、玄經草自深、問奇難屢得、載酒暫相

不見丘園色、何知猿鶴心、此中幽趣足、日夕有鳴琴、

負郭田園靜、幽人此地逃、閒行迷竹逕、嗒坐聽松濤、

白日銜杯盡、靑山隱几高、相忘應不惜、野色借吾曹

壬午夏四月十二日、大川和尚順世、越十三日、

法嗣春海師尋逝、慨然有作、

上巳從駕陪宴宇土侯鑒水亭同服子遷賦侍顏字

流觴池水曲、陪宴弄潺湲、風送童冠詠、春疑溱洧間、

桃花羞白髮、竹葉映朱顏、日暮猶留騎、何須倒載還、

服子遷白賁墅集二首

此物隨行李、相攜芳草坡、研含明月小、刀剪白雲多

寄雁裁書去、尋人載酒過、詩囊與籃、探勝入烟蘿、

塗利文具匣爲屈大夫題

冬日日出侯第茗讌陪我公作

陪宴使君家、茗烟靄若霞、吟成青玉案、座品紫團茶、

竹巷高風入、芸密愛車駕從初地、樓臺倚上清、千峰紅樹合、十里白雲生、

衣繫雙珠色、詩聽兩鳳鳴、林巒餘雨氣、一半夕陽明、

着屐遊空界、停車並化城、山中龍氣冷、塔下雁行成、

飛樓架海天、精舍隔風烟、留客蒲桃酒、懐人貝葉編、

席迎朱紱色、杯渡碧雲邊、相望不相見、秋波一渺然、

十月從駕龍山泰勝寺觀楓宇土侯亦至二首

還疑丘壑近、何辯市城通、朱邸新陰合、玄言脩竹中、

醴仍叨客席、襟自入雄風、呪復青蓮色、相迎對遠公、

秋日表海樓陪宴遲大川和尚不至分得先韻

記得少年日、相携上酒樓、參商今隔地、李郭昔同舟、

忽換絣袍別、頻將斗酒酬、每陪公子讌、王粲更難忘、

首夏日出侯席上陪宇土侯同大川和伺服仲英賦得

東韻

蓮社一經過、高僧暫此逢、春深多忍草、地古有貞松、

已許杯中物非聽飯後鐘、如何要我者、將去下廬峰、

寄懐越子聰

君歸車轍在、悵望向春風、門外仍題鳳、楊邊未繫、

屢忝彤管贈、安得緑樽同、縣榻空搔首、踟躕落日中、
暮春過東林上人房、適爲某侯見招、不得留話、
草草辭去、因賦此爲謝、
四
秋老幽棲地、山窓暫此過、冥鴻連色、呦鹿靜巖阿、
相贈芙蓉佩´同裁叢桂歌、我今欲携去、衣上白雲多、
月下美人影
琅玕當戸碧、石鼎倚窓開、年己逢華甲´性唯耽茗杯
間聽蟹眼沸〝還愛鳳鳴來、此裏清風起、時從蓬島回、
秋日訪隱者
九日幽亭會、相逢心自淸、菊仍浮白態、草已尙玄名、
爲愛龍山醉、何妨烏帽傾、登高如此足、休怪賦難成、
壽茶博士山田翁六十初度
高士黑裘敝、寒松可托身、一瓢不改樂、四壁豈知貧、
非拾遺金者、欲從擊磬人、悠然發長嘯、富貴若飛塵、
九日尙玄亭集
夙好探靈異、登臨縮遠亭、諸峯圖裡出、萬樹鏡中青、
深識制龍術、閑看瘞鶴銘、飄然眞解脫、身世一浮萍、
詠貧士

紺宇臨烟水、霏霏吐光、深秋菰米飯、幽地芰荷裳、

禪自從多病、詩非有異腸、前峯歸鳥盡、瀟洒見微霜、

縮遠亭眺望

難奈河山邈、凄然絮酒芳、太冲賦空在、讀罷使人傷、

秋日遊宗岳寺和惟中禪師韻

征婦魂飛苦、依稀萬里城、月明迷不度、風冷忽還驚、

恐遇來鴻叫、如開班馬鳴、何知人戰死、猶繞漢家營、

哭仲翼三首詠銘峋游、钟栗堺、泥世

也、汪年纔四一七

相逢哭小阮、遺恨一何深、白日成駒隙、絳霄想鳳音、

飛霜空掛劍、流水奈彈琴、可忍秋聲起、蕭蕭動竹林、

昔逢雞黍供、今見鳳毛殘、無復浴沂趣、空悲和郢雞、

九原埋玉樹、一旦奪金蘭、嘆息風流盡、相思淚未乾、

之子乘鸞去、仙遊不復還、烟霞通海嶠、杯酒邈河山、

夢裡青衿冷、窓前綵筆間、屋梁餘月色、猶憶舊時顏

十六

名花辭富貴、競發映禪扉、國色迎朱、天香襲紫衣、

出塵心不染、含露笑還微、偏惜春將晚、停車未擬歸、

賦得秋夢

梅花開攝水、使者過尊翁、壽域年光動、盛筵春信通

香隨綀服滿、色與玉壺同、一入王生曲、千秋播國風、

暮春少林精舍陪燕、時後園牡丹盛開、分韻得微

字、

梅枇糍落地、淸夜欲黃昏、無復珮聲散、何看履迹存、

姮娥臨水動、神女作繁、疑是漢宮裏、香烟忽返魂、

考澗翁久客攝邸、今玆年甫八十、徵余賀詩、時

平埜氏奉使將行、因賦得梅花、託之爲壽、

豈謂非孔融、座客此相同、竹下蒼苔合、梅邊寒石雄、

烏皮人隱几、玉麈自生風、秉燭休歸去、樽中酒未空、

山叔瑟游學、讀書於藩時習館、六年于此矣、今

禪房流水上、相引具袈裟、忽已過橋去、何妨到日斜、

詩清含竹色、臘古似梅花、爲課雛僧罷、間煎陽羨茶

冬日同諸子集米大夫四時園得一

三春終寂寞、萬樹歇芳菲、歷亂空成雪、飄零忽滿衣、

多情人未掃、何意鳥啣飛、遲暮紅閨婦、佳期動易違、

冬日游妙解精舍

避雨投山屋、蒼茫咫尺迷、林蟬爭入戶、巢燕喜啕泥、

移案琴書濕、開竹樹低、主人留客語、一路在谿西、

詠落花

陪宴攀飛閣、天晴鳥語新、茗迎蓮社客、杯引杏林人、

白足連禪榻、靑囊謝世塵、高歌難可和、呪復値陽春、

山房避雨

高堂銀燭動、夜宴漏聲沈、歲月侵雙鬢、文章見片心、

朱門非地僻、玄語使人深、呪此杯中物、何曾減竹林、

春日鷺嘯閣茗讌、陪大川忍海二上人、大醫令橘

公、同賦得人字

歲晚米大夫宅宴集得林字

眞宰忽召汝、冥冥白玉樓、無端天上去、非復夢中遊、

挂劍松楸冷、承塵鵩鳥愁、素車終不及、深愧巨卿流、

蒿里秋風冷、蕭蕭動白楊、病中書一紙、身後淚十行、

陪遊高閣晩、春雪滿瓊林、飛絮雄風起、凝華兎苑深、

玄仍揮麈尾、嘯自聽鸞音、爲有隋侯在、還疑明月臨、

哭左子坤二首

園亭春欲半、花竹晝陰陰、三市囂塵斷、一簾細雨深

掃門迎過客、移榻聽啼禽、常使靑樽滿、何曾負隱心、

春雪鸞嘯閣陪宴得深字

作王喬駕、追飛雲水深、今無萬里翼、空抱九皐心、

嘹唳餘聲苦〝氌氇瘦影沈、吹笙明月夜、夢繞緱山陰、

不願棲珠樹、誰憐形影單、樊籠纔脫去、毛羽已摧殘、

欲向芝田啄、其如華表寒、高飛非舊月、相顧避金丸、

秋風吹病骨、獨立出塵氛、露下明心逈、天空清響聞、

由來爲鳳侶、何久在鷄群、只恨霜毛短、依々望白雲、

春雨飲

玆秋將歸省上毛、有司給行路之費、因賦此贈別、

獨向毛州去、雲山萬里深、烏川思反哺、綠野動歸心、

楚豈終無醴、燕先已有金、高堂賢且健、知爾重相尋

詠老三首

看龍象朝、

幽尋耽勝地、開士幸相邀、亂石泉聲咽、高霞山色驕、

竹敎玄語遠、松自素琴調、且喜空王座、常良宴乘春色、名園公子前、游絲不到地、芳草總如烟、

戲蝶隨飛蓋´啼鶯近侍筵、無緣將薄劣、彊欲鬪奇篇、

和別道禪師韻

野燒入翠微、薄夜有風威、萬丈金蛇繞、千峰火樹圍、

長烟生月暈、落點亂星輝、游子如烏鵲、何枝更可依

春日陪宴樂山公子鑑湖臺、

南山當戶秀、北海滿樽靑、重見迎秋色、餐英踰百齡、

宿熱海旅館、觀野火燒山、炎烟漲天、壯不可言、

明日將發、賦此紀之、

遙分甘谷種、培植向中庭、日永逢華甲、窓閒著

壬午春守山侯年六十矣、託宇土侯辱徵壽詩、開

侯愛種菊著菊經、因賦此奉賀、

五言律

著

述輯羽

肥後 秋 儀 子

相抱融融樂可知、

鴻雁北飛妾東去、去住彼此感別離、此去高堂重會面、 玉山先生遺稿卷之二

遜關門不隔向天涯若過洛第生得失、妾請即今從此辭、還車言邁逢關道、

使 清水寺前柳垂絲、爭向花間開綺席、公子王孫金屈巵、

侍婢莽英齋書往京、請遊夜歸、宗盛不允、彊携遊 遊夜帷禱老母病、救苦薩埵垂大悲、管絃未奏使人促、

夜、賞花于洛東清水寺、宗盛滿酌、使遊夜起舞佐「攬衣下堂步遲遲、彊爲主君一起舞、雙袖龍鍾春風吹、

懽、遊夜不得已從之、舞態龍鍾、觀者戚焉、酒酣|無端春風送春雨、百花亂落使人悲、遊夜對花三嘆息、

俄頃風雨散花、遊夜慨然賦落花嘆見意、悽惋動人、 苦裁愁心入歌詞洛陽春色豈不惜、無那故園花易衰、

宗盛感而遣之、俗間有遊夜謠、辭甚鄙俚、今玆辛「此時花鳥忽無色、見之何人淚不垂、主君決然不肯留、

巳春、余將赴東都、路經其地、有遊夜墓、因戲賦 行矣佳人莫遲疑、遊夜謝恩遙回首、白雲孤飛故山陲

其事、唯埜語小說、不足存也、

序

夜嗚咽不能讀、玉筋閑干掩翠眉、烏烏私情反哺切、

遊夜詞幷西方有美人、瀟洒仙姿出風塵、控鶴忽辭瑤臺月、劉一遊夜家在池田里、道路悠遠長相思、君不見莽英來傳老

然飛來東海濱、朝弄扶桑日、夕戲若木津、云是清淺|母信、一臥三春難久持、今年花落不相見、明年花開

難濯足、扶桑若木可爲薪、八極奮翮觸四隅、崑崙弱不可期、老鶯啼斷春欲晚、倚門瞻望徒爾爲、殷勤主

水若比隣、灭尋靈樂遊三島、三島十洲言采眞、上有一君能割愛、幸使餘喘見女兒、頹齡朝夕不相及、

三花之珠樹、下有五色之金鱗、艪金鱗吮玉液、手 一生恐參差、墨瀋涓涓和涙寫、涙盡字字血淋漓、遊

珠樹朝青旻、此時余亦自西來、相揖同傾芙蓉巾、美

人貺我三珠樹、三花的爍奪目新、三花爲簪珠佩、

服之欲終身、何以報之無所有、漫以木瓜投美人、休

嘲木瓜不如安期棗、永以爲好千萬春

豪奢金屋貯名姬、名姬遊夜專承寵、日夜歌舞侍繡帷、

仙篇答之、聊謝來美萬一云、

四] 四

歸家願報老母慈、紈袴公子一问忍、不管草露人命危、

只道洛陽花正滿、春遊要汝相追隨、七香車中同載去、

青牛紺幰任所、四條五條花如雪、千朶萬朶雪壓枝、

橋南橋北來往客、絡繹連袂映漣漪、熊野祠上霞作錦、

遊夜平宗盛歌妓也、家在遠州池田里、其母病、維昔平氏全盛時代行人不問他是誰、相國次男平宗盛、

、聽鷄戴星侵晨夜、山光雲影兩離披、

四一三

賦得遊

長州瀧八既富詞藻、指芙蓉晴雪邊、

遊仙篇答瀧彌八幷序

記沈湎飲酒池、又記朝戴漉酒巾、夕着白接躁、有時

駭甘夢不得休、又問汝何物、奴耶隷耶將王侯、樽前一春風嫋嫋柳红绳、一石橋頭酒半酣、良朋相逢重相別、

搖頭供嬉笑、若非侏儒必徘優、髑髏答言在世時、只能飲一石醉二參、君不見柳花化萍點江水、朝在江北

一客字子羽、蹙頞不飲心獨憂、試問髑髏汝何辜、驚

和越子聰留別之作

高子式山人達士也、置髑髏杯、時時把玩、一 中山千日偏苦短、百年三萬亦非長、嵇阮化爲祸之父、

死生遺形骸、超然自適焉、少年輩爭飲爲豪舉|黃公壚下暗悲傷、笑殺人間北海守、何如地下南面王、

予獨蹙頞不能飲、衆笑予未達、因作髑髏杯行 自誇唯我酣暢哉、長夜濡首首作杯、子羽頭顱聞此語、

自嘲、兼爲髑髏解嘲、

同口責子羽、子羽汝爲生頭顱、彼爲死頭顱、生死頭

旣非月支頭、亦無知伯仇、山人好奇奇至骨、日盛美 顱亦奚擇、呪勝子璋血摸糊、蹙頞不飲一何愚、汝今

酒以髑髏、少年爭飲誇豪擧、毕道山人達士流、座中一不飲歲將去、俛仰間與彼爲伍、

天池六月有培家、南風、小魚游詠大魚躍、咫尺千里勢已同、

論樂只言知莊叟、貪餌何曾逢任公、盤傅潑墨者誰子、

變化之理與神通、我欲圖南未得力、對此使人意氣雄、

腰間雙劍鳴不已、只恐飛入晝魚中、

州雞絮豈沾唇、淵明臨終不得足,畢卓了生不

復晨、古來酒人孰如我、宿習綿綿的天真、不管功名

朽不朽、不論形神親不親、未作阿梨七分破、常染醂

醜萬斛春、君不見無功日月終醉鄉、酈生意氣盡高陽、

興來稱草聖、脫帽何妨鬓如絲、一自蓬累歸山阿、貴

賤貧富不復知、我肉既飫鳥爲腹、我顱偶爾匹鴟夷、

我形不須司命復、我魂不要宋玉辭、糟丘烟霞喚我起、

知己誰如山人奇、山人日日摩我頂、然何利天下爲、

出離蓬蒿廁綺席、子羽莫謾嘲支離、我聞古酒人、一

棺徒戢身、縱葬陶家土、何異湘水濱、涓滴不到劉伶

暮江南、又不見芳草綠萋萋、年年歲歲送馬蹄、一聚

一散無定期、今日休辭金屈巵、君言千里如比肩 丈

夫何必論各天、請看丈夫肝膽是、突旁通醫理、辛巳歲來客東都、

寓居日三島之衢、至日與余邂逅於紀氏嚶鳴館中、

一見如故、見惠詩三首、五朵粲然射人、因美彼青樓女、素手理瑤琴
、危柱流妙思 飛飈結奇音、

蕩子一聞之、中懷何可禁、知水不知陷、知淵不知沈、

片嬌雙白璧、半笑千黃金、陋彼禮法士、厭彼詩書林、

擬 古

行行陟大行、大行險且長、浮雲覆其上、征馬立彷徨、

佳人悲遊子、夢與浮雲翔、雖在遊子側、何能明中腸、

譬彼弦與箭、一發各一方、相違遂萬里、會面不可常、

願爲高飛鶴´銜箭還故鄕、

擬行行重行行

皎鏡開曉霧″蒼茫照人顏、海客爭利涉、棹謳發波間、

鄕夢恍屢駭´孤枕篝燈殘、天雞繩三號、靈曜拂雲端、

始未辨赭岸、忽已點蒼山、疾風吹帆轉、一瞬贍渺漫、

流水歸海盡、孤雲向山還、愧我在行役、不如白閑、

願因歸鴻翼´裁書報平安、

曉舟發蓮崎

三萬六千日、飄忽若電光、即今不飲酒、旦暮鬂作霜、

東海看沒脛、漸藝麻與桑、山人薪桃李、秋草生玉堂、

賢愚一丘貉、孰能等彭殤、富貴薤上露、一時晞朝陽

萬言不盈掬、何如酒一觴、所以終日醉、世以我爲狂

而我乘鸞去、酒氣開帝鄕、

上堂雷雨排晴空、忽見畫魚一何工、禹門三級翻高浪、

鯖魚行

七言古詩

田文治齊國、四海慕其名、慨哉千餘載、荊棘生墳塋、

珠履無存者、惟聞狗吠聲、

歐冶鑄劍日´師曠奏樂時、朱雀在前舞 玄武在後隨、

蒼龍與白虎、羅列光陸離、黃雲覆其上、太乙降視之、

妙技固當爾、昧者或見疑、我自修吾業、二氏同襟期、

沈思融大始、冥搜逮無涯、嗒焉官知止、神欲從所之、

口柄口手、坐探寰中寄、六丁供使役、萬象爭驅馳、

風雷借威變、造化賛文辭、惜哉二氏逝、斯契閟莫窺、

瓦釜鳴里耳、利器孰辨知、所以操觚士、苦心獨自悲、

雍門行

平生張子宅、蓬蒿二三尺、來往惟明月、曾無來往客、

夕蓬蒿上、初見雙履迹、欣然同拍手、明月向人白、

僧雀谿見過

旦朝忽覺悟、俯仰成古今、金璧本自賤、奈何口光陰、

感此長大息、我得古人心、御者意氣揚、乘者志念深、

所貴今而後、鐵尺磨爲

11

之威、天地蕩振、茫茫禹迹、功亦不神、公不見刳木|宇宙有愚人、眼不識鼎鐺、愚人非無眼、唯識守錢囊、

公無渡河、河伯不仁、公無渡河、陽侯不仁、石光佐

渡河

小齊臨流水、蕭踈遠

蟻穴實壞堤、鴻毛或沈船、垂堂戒飄瓦、鼓瑟忌急粒、

蔓蔓將尋斧、涓涓易成淵、烟烟可撲滅"炎炎欲燎原、

所以古君子、戰兢防未然、

公無水竹居客至

古詩

旨酒崇神禹、象箸嘆箕賢、曾子逃勝母、伯夷君子山人勸酒躪綵禽奇、陳華席流蘇垂、膾夜鯉匕琉璃、圓方充薦

者誰、齊孟弋暨吳姬、揮素手理哀絲、流蘭氣吹參差、

紛屢舞羅繻披、曲未闋愬杯遲、嚼復嚼羲輪馳、銀燭

繼賓毋辭、永今夕無終期、

行

山人勸酒

四 言

將進酒金屈后、堂高峻葺江蘺、蒲菡萏媚清池、朱魚

將進酒

虹屈短兮日輪夷、風蕭蕭兮易水漪、君當歸兮從此辭、

擬古樂府

易水歌

噫嗟蒼旻蒼旻、

之上、無有曾參、刳木之下、不戒波臣、蛟龍相戲,

述著

子

男

輯

玉山先生遺稿卷之一

遜 羽

肥後 秋 儀 肝人血、公欲渡河兮、妾心荼苦蓼辛、公之軀千金、

胡爲敢犯毒鱗、公不聽妾言兮、提壺從萍與蘋、妾欲

走救公分、渺不見涯與津、孰能使河之水涸兮、噫嗟

、酒人愛山、愛山斟酒、身心自閒、心如流

水、身似雲還、還雲杳渺、流水潺湲、綵鳥戲樹、青

霞怡顏、天之寵我、置我其間、我歌我舞、樂若循環、

清風自至、朋月可攀、有酒有酒、勿令垮班、

五言衆竹叢、玆焉把君彎、悠然入林中、

相見坐徐嘯、四面起清風、坐尾一披拂、皎潔與手同、

幽趣無解者、千截寄枯桐、因盡殘樽酢、落日在秋空、

醉 言

五四記序

四

七 卷卷 +

之 一

七

之

+

四

四十七

六五

五

言句 二+

卷卷

八十二

二百

言

+

=

百 二 十

句句 詩 詩律詩 詩詩詩府

古樂

六五言卷

言言 言言言

卷 之

玉山先生遺稿目錄

卷

序 五 七五四擬

之

六絕五絕絕四律三律排律二古古九百 八一補卷卷卷

卷

玉書詩碑

山牘

墓

碑二

碑 記

牘

說引題祭墓贊銘記

跋文誌

十十九

銘

八

1

11

三

1 +111

廿廿

七二五二十三

六

十四

丩 业

井

孝

德

四一〇

四〇九

太室 井 孝 德

肥府秋子羽先生之居學館中、先君子與之交善、而家兄子駿師事之、時々過先君子、

以余幼秉燭于坐隅、得習視其奇貌偉行、而不及其所言談論著、既隨其君歸肥、往

來再四、而先君子捐館舍、則家兄出承叔父之後、於是余亦食升斗之俸于鉛槧之伎、

即少長不似前行酒秉燭之時、子羽乃以所與先君子 交者遇余、不許執子弟之禮于前、

比侍宴席、粗窺知所著文字、於作者如何、子羽實奇才、古人中所希靚也、方其下

筆之際、心不奇其境不就、言不得其奇不發、及其未得之、疾首蹙額、似欲逃坐者、

至心與境合、言得所須、如瀉瀑水于千尋之壑、千萬之字、下筆便成、不求法于前、

而法具其中、不求媚于時、而爲時所悅、是余之所見其藝也、唐也宋也、元明也無

不取、而所根柢有焉、而不好積字成句、累句成篇也、雅也、俗也、方外也、無不交、

而所許與有焉、不善雍容取高無行所達也、是余之所聞 其論也、其詩稿刻者七卷、

平安服子遷元喬、高松岡仲錫孝先序之、未刻者及與其文、於其沒之後、輯爲十卷、

謀行于世、尾張紀世馨德民序之、今歲其孤士遜、因余所厚善野君修重求余序、兵

法不言乎、 奇正相爲變化、蓋言正之爲奇、奇之爲正、嗚呼人亦知子羽之材之奇

而已、不知其爲人發于文辭、不特其專奇也、知不特其專奇者、冀賴余言耶、以是

不辭爲之序、 明和玉山遺稿序

九年壬辰秋

尾張紀德民世馨

明 和 二 年 乙酉仲夏

而 德民 晚生、深受知愛、西也魚鴈于我、東也杖屨于我、間年之歡、不相醉者、

有幾于旬、其終別也、一日二來、繾綣異常、見校鄙集、取一通而去、峴山之輿、

紫海之舟、興至則誦、比其達肥、品評盡成、乃序其首還之、其書有云、老夫老矣、

古人所謂同傳之意、有以寓焉、嗚呼梓未成、旣已逝矣、此皆其讖耶、今睹此集

笑貌在目、聲音如聞、蓋其於文辭也、天機所發溢、躍如乎常度之表、服子遷曾叙

其詩盡矣、且其儒宗于大邦也、其績固多、而至建學館立學政、搜索丘林、育英選

一最爲尤異之事、而文敎加於隣邦矣、先生之業其如斯也、如民復何言、抑野君

之命之、以民之於先生、如前所言、則以爲有傷逝之感、過乎人者也夫、今唯因野

君、敢序我所以得交於丈人行、而竊自欲酬其同傳之言云爾、

熊府野君伯修至、出此集於懷、愀然屬余曰、是子之故人、秋玉山遺編也、欲圖之

梓、子請叙之、子其記與、昔者秋子會子于吳門磯氏、神之一接、目擊交定、杯酌

之盟、吾亦與觀焉、爾後東則杖屨乎子、西則魚鴈乎子、以終其世、吾又與知焉、

既往之忽恍乎夢也、子其記與、於子心無戚夕焉者哉、淚交睫、余受而讀、讀與淚偕、

嗚呼此秋先生之遺艸乎、此其遺艸乎、先生當年友道方廣、自一時名流、無不欲之

玉山先生詩集卷之六

古城 貞吉 校

惟

棧道連天萬里餘、岐蘇此去故人疎、請看飛將出師處、風、千載泱々稱作者、

猶自風雲滿舊墟、

送人之岐蘇

一揮錦如吐、文彩翩々不可數、海西文宗

不遣孤槎犯斗牛、

國

井叔將之備藩、迎接韓客、因賦贈別、

夜深明月在温泉、

華龍劍相携萬里遊´蒼茫紫氣倚天愁、知君能屈三韓使、

薜荔秋深喜雨亭、

清宮

其 二

桂棹遙依桂水停、嵐山寒色望中青、柴門古道知何處、

柴門深鎖白雲多、

翠嵐山色辮嵯峨、寒影蒼蒼落桂河″欲泛扁舟招隱去、 大藩縫掖老儒臣、泮宮舊重席上珍、操觚

汎舟桂河訪嵐山隱者二首

題秋學士詩 篇

華清宮殿樹如煙、帝厭風塵已上仙、無復舊時人賜浴、

秋學士、賦是凌雲壓今古、詩卷風流今已

成、國風樂府見先鳴、建安正始俱彷彿、開

元天實更縱橫、龍鱗拔 痕躍滄海、鳳翼含

彩舞紫淸、一握明月夜光璧、高價誰當十

五、異代詩名長不朽、吟來擲地金石聲、

藝苑弟子授翰墨、掄才一閲詞場色、千金

駿馬若雲屯、因君一顧空冀北、况乃新篇

傳門下、三都豈復論紙價、海表重播大飛流直下尺三千、仰見層雲如裂綿、七級巖頭靈籟動、

飄然欲探鯢桓淵、

其 二

巖坐毫毛含大千、巨靈今日力如綿、依然垂足懸崖上、

喝起蒼龍飲九淵、

和發公觀鎮西七級巖瀑布詩二首

先師舍利晃袈裟、擎向虗空逼碧霞、忽見紫溟金色變、

珊瑚樹樹盡開花、

護國禪師函盛先師金骨將赴京師

魚美氷壺酒復殷、鸞刀剪下照銀盤、紅肥大勝桃花色、

更見吳鹽如雪寒、

暑日喫魚膾

惠我黃花三兩枝、銀鱗帶露相宜、陶家縱有盈樽酒、

此味先生應未知、

儀田生見惠菊花、副以鮮鱗、

阿郎擣藥隔窓紗、謾道仙家勝妾家、借問春風珠樹色、

三花何似合昏花、

姫人怨服散

海上春深白玉臺、眞君今日宴蓬莱、青鸞一隻來還去、

報道三花珠樹開、

夏日園亭對酌深、停杯有待主人心、誰家鼓吹留君醉、

孤負黃鸝囀緑陰

過飲越子聰園亭、遲仲文輔、不至、聞文輔在

家聽鼓樂、因戯賦寄、

夢斷西風冷越羅、空房殘月影婆娑、偏愁金井梧桐樹、

無限秋聲夜更多、

洞房曲

一讀遺文涕涙流、無窮天地作千秋、相迎飲我人何處、

庭樹蕭條舊酒樓、

吉子徵善釀、亡後爲整理其遺稿、則舊時與余唱

和者、皆有焉、讀之慨然有作、

雪後關山送馬蹄、休愁萬里凍雲低、縱然埋盡江南路、

緣有梅花便不迷、

雪後送人之江南

歸雲亭子鎖巖阿、亭在雲歸涕涙沱、猶憶經行明月下、

袈裟寒影落松蘿、

故賜紫海慧悟明禪師輓詞

春雲縹渺彩鸞飛´宴罷瑤池侵曉歸、應是蟠桃花上露、

斑斑色染六銖衣、

遊仙

四〇六

深川西岸簇烟霞、半是漁家半酒家、不爲仙姝能醉客、

其 五

赤欄橋下碧流淸″隔岸鶯花兩地情、日永何須搖桂棹、

春風一任畫舸輕、

其四

百花川上盪輕舟、直到紅欄橋下流、一上長提春更好、

爭迎趙女倚靑樓、

其 三

芳草河邊春色開、浮雲西北是樓臺、金龍閣下花千樹、

多少名姬手自裁、

謝公乘興日忘歸、花滿東山靄夕暉、祇恐紛紛歌舞妓、

春風吹作彩雲飛

江都春日行六首

射雉東皐雨雪紛、雙雙帶箭落黃雲、彩毫含笑應裁賦、

五色離披持贈君、

華蟲貽郚淳民、副以小詩、

誰向虛空畫幻身、儼然笑語出風塵、不唯谷口片雲色、

帶雪松蘿愁殺人、

詣谷隱軒、奉拜慧海悟明禪師影像、

四〇五

海上遙携五岳圖、長風萬里往來孤、片時還到蓬萊闕、

迎得浮丘相鶴雛、

小遊仙二首

中天白日易黃昏、相值應須傾酒樽、正是家園紅芍藥、

開花艶艶大如盆、

庭中芍藥盛開、賦此代柬、招岡士騏同酌、

樓上纖織出素手、日日喚客嘗春酒、不知誰子珊瑚鞭、

挂在門前垂楊柳、

青樓曲

濁酒三杯坐待春、燈前何事老妻嗔、送窮不去窮如故、

道先生文有神、

其 二

歳月崢嶸釜有魚、先生清白似水壺、客來休語人間事、

請看梅花開滿廬、

歳除二首

品水東南多麗人、永和三日凝妝新、謾將紅藥爭相贈、

何似當年溱洧春、

其 六

紅顏何得似桃花、

何論出浴似靑蓮、

其 三

名山仙液海雲邊 到日涓涓注法筵、本自身心應不染、

可能容易釣鯨鼇、

虐名誤道士林髦、烟海年年尺素勞、不是何妨風雨鉢龍驚

其

飄飄千里送君行、知是平生愛馬情、冀北相過須問訊、

綵雲深處踏靈鼇、

、

送喜公之日南玖、地近奉和羽林藤公辱示瑤韻三首

飛錫風雲大海邊、天龍護送度諸天、日南此去休相問、

本自明珠衣裏懸、

千里誰能含笑看、

奉送妙解禪師之日南玖

病後風流罷小冠、由來國語欲裁難、輕雲蔽月縱堪書、

人生兩間如寄客其 三

眼中何得點空靑、難名

、何須碌碌到頭白、一飮百杯氣成虹、

欲凌匡廬三千尺、

同得尺字

蘇峰雲際翠爲屛、忽覺今朝秀色醒、非是新詩傳阮籍、

一任淸風吹岸幘、

其 二

三萬六千駒過隙、斑然頭顱垂半百、日飮君家竹林中、

道錦相似、

非是狂生眼有花、

吉祐宅小集靑鳥翩翩羽客家、春得百字

王郎只在水西頭、

羽林藤公賜詩、時余患眼、久闕奉報、今秋始愈、香風嫋嫋木蘭舟、
欲采芙蓉獨自愁、落日芳洲歸去晩、

因賦奉謝、三首、

、

蓮曲

芳樹黃鶯啼夕霞、紫烟衣上雨如花、風吹讚佛經聲散、

金色垂楊春日斜於世文章如弁髦、雕蟲徒爾使心勞、縱然五色石堪鍊
、

誰補靑天制巨鼇、

春日遊本願寺

四〇四

五朶帶來斜、開緘共漢家濟濟一時髦、作賦千秋誰最勞、人在蓬萊山上住、

長竿千萬尺、

葦北、産馬送偏公之日南玖、浴治温泉、

少年行

彩雲深處佩珊珊、地上空餘太乙壇、昨夜風吹珠樹折、

龍歸滄海月輪寒、

軌道士

潮音閣上海雲高、風雨登臨意氣豪、一自魯連歸去後、

誰將七尺踏驚濤、

其 二

潮音高閣一躋際、身在烟雲縹渺間、急雨千鯨驚欲吼、

拍天波浪捲銀山、

雨中登潮音閣望東海二首

欲問曾遊事已非、山中舊宅白雲飛、怪來風雨生松樹、

此夜愁人挂劍歸、

江生托余絹素徵畫、持歸未果、既客江都一歲、

歸則江生逝矣、因題哭詞其上、而還之其家、聊

比挂劍之義云、

潮生赤石欲黃昏、乘月扁舟下海門、回首汀洲芳草遍、

不知何處弔王孫、

赤石帆海

旁人鼓笛不知悲 白鶴宮前淚暗垂、賤妾空歌金縷曲、

難翻舊日作今時、

四〇三

弄玉吹簫向紫烟´瑤臺銀闕去踞蹮、青鸞背上春風軟、

行盡三十六洞天、

其 二

弄玉乘風弄玉笙、鳳凰背上鳳凰鳴、秦樓十二小如垤、

身在紫烟深處行、

嬴女鳳二首

安僧精舍晝安眠、清淨袈裟繡紫烟、池上白莲看並蒂、

却嫌攀折獄金仙、

秋波不染碧芙蕖、老去年年方寸虛、八月凉風吹病骨、

何堪腕後水晶珠、

老 僧

五夜潮生夢已殘、孤帆曉度海雲端、偏愁風雨魚龍好、

月白尼珠掌上寒、

送衍上人奉祖師舍利之崎陽

膝上琵琶明月輝、休彈幾度掩羅衣、慣聞龍塞多秋色、

不信狂夫不肯歸、

秋思

白馬長鳴散碧蹄、春風吹入錦障泥、百年一擲千金盡、

笑過靑樓楊柳西、

楚臺高架逼雲霄、日日陪遊詞客饒、不啻陽春稱寡和、

陽春閣

年年征戍在龍沙、不見鴻書到妾家、無那金閨秋色早、

紅顏零落泣菱花、

秋閨怨

翩翩舞態楚雲斜、人隔墻頭桃李花、一曲春風吹不盡、

多情宋玉在西家、

東隣美女歌

奉帚西宮秋可憐、梧桐落盡玉階、生憎紈扇如明月、

曾向君王掌上懸、

長信秋思

青袍十八羽林兒、善馬城中屬貳師、吹月寒生秦篳篥、

出關秋動漢旌旗、

羽林郎

吳門作客易驚秋、中夜登樓望女牛、一道銀河如練影、

相思不見使人愁、

吳門驚秋

牐翻春酒如琥珀、盈盈金波瀉綺席、公子潦倒總不知、

猶擁胡姬罵座客、

佰恐夂歙

公子行

婆娑靜女自傾城、起舞强酬幕府情、白鶴宮前歌一闋、

憶君芳野雪中行、

靜女篇二首

峯上香爐日欲殘、飛流萬仞紫煙寒、有人從此騎鯨去、

獨倚靑天長劍看、

廬山瀑布圖

江海微茫一島開、緋雲深處是瑤臺、知君遙在湘中月、

愁聽靈妃鼓瑟哀、

送人之江島

欲撲流螢不自由、

墻階獨自愁〳纖纖素手不勝秋、輕風吹動小團扇、

流螢

扁舟夜泊水雲間、孤夢分明萬里還、殘月蒼茫滄海濶、

不知何處是家山、

深江夜泊得山字

夜夜待郎郎不來、亭亭秋月照羅帷、一夜嗚咽不能起、

郎來在門何得知、

夜夜曲

雄風兼向世人驕、

楊柳枝詞

白日淸流滑水涯、昔人心事有誰知、唯餘石上莓苔色、

猶似靑錢墜却時、

滑 水

蓮花社裏菊花香、弟子如雲掃影堂、今日淵明堪止酒、

肅然風露洒衣裳、

九月四日傳外和尚順世、越十月四日、詣拜影堂、

奠以黃花、慨然有此作、

王母瑤池墮玉簪、雙成扶起翠樓陰、栢梁童子偷桃去、

笑道重門猶未深、

仙 興

眞人昨夜下梁臺、別後君王夢未回、明月過江腸已斷、

蕭蕭秋色自西來、

達摩渡江圖

霜落紗窗秋樹殘、亭亭孤月照欄干、偏愁淸淚眸中滿、

留得明珠掌上寒、

其 三

誤與劉郎別赤城、仙姝合戀劉郎情、桃花流水去難住、

前度劉郎終隔生、

四〇一

青天六月出芙蓉、欲寄山人久未逢、縱是夏雲堪可贈、

何如白雪作奇峰、

夏日題芙蓉圖、贈高子式山人

開君伏枕厭風塵、想見交園白髪新、爲是相如驕病色、

平臺視草更無人、

寄訊田生臥病

夏日陪宴凌霄閣、時新移竹庭中、得青字、

新栽寒玉照幽亭、五月秋風颯滿庭、不是使君憐阮籍、

清陰那得眼中青、

春江風雨浪陶沙、浪沙驚蕩妾家、日見布帆歸欲盡、

狂夫歳歳在天涯、

浪陶沙

重向雛臺作壯遊、蕭條風色入高秋、屠腸山下堪腸斷、

莫問當年血髑髏、

高子式重赴鎌倉戯賦贈別

峻鱠樓閣枕萱洲、小隊風流載酒遊、好是連城明月色、

夜深偏向使君投、

陪宇土侯宴高子式明月樓

落日垂楊汴水西、傷心暮色滿長堤、玉樓銷盍春烟合、

猶使行人處處迷、

四 皓

飄然秋鉢指天涯、滄海如杯不見家、知是神龍相送去、

何來風雨滿袈裟、

送拙堂禪師之京師

書齋竹色照青袍、白日玄言意氣高、共道嵇康交不淺、

却將名飲到山濤、

過飲山宗恕宅

春晝陰陰楊柳垂、東風吹雨細於絲、相思不見流鶯語、

樹抄誰家出酒旗、

春日寄加仲精

聞天壽師自東武歸、未得問訊、先有此寄、

聞道高僧東武還、鈴鈴錫杖白雲間、秋風咫尺難相見、

猶似千山與萬山、

關山落木路悠悠、懷昔同君上酒樓、昨夜江東風雪急、

不知何處買扁舟、

其

芙蓉天際雪爲顏、目斷歸雲飛鳥間、君自周南留滯客、

好將良史寄名山、

求友聲聲到處聞、

寄懷井冲默於江都二首

縹緲紅雲靑鳥飛、瑤池試着六銖衣、芙蓉一夜嚴霜墮、

風急香魂招不歸、

舉男而卒、

吉子徵喪女三首 -女歸父家、與婿未絕、

趙家姊妹學長生、遙夜吹笙作鳳鳴”猶記漢宮按歌舞、

僊人掌上月中輕、

宮人入道

白雲新樹玉函山、書劍年年往口還、今日山靈應笑我、

空將傲骨老人間、

函山道中

當世風流見賦才、爭傳枚叔慧平臺、揮毫忽有秋濤色、

知是廣陵萬里來、

過興仲連旅舍、仲連嘗客藝州、

遙夜歸思滿綵樓、故園琪樹倚清秋、請君休唱公無渡、

河漢西風人正愁、

星夕留別

春風搖曳博山香、殘夢朦朧玉漏長、偏怪守宮餘血色、

分明昨夜侍君王、

春宮怨

爭功擊柱未央宮、辟世圍基商嶺中、護道漢家天子貴、

那知松下有清風、

山寺鳴鐘遠近、秋江回棹東西、月明橋上人度、霜白

樹杪鳥棲、

水竹居作

落落松間怪石、關關花裡啼禽、相逢相值高士、半醉

半醒心、

盤旋所

片言不朽盛事、五尺無能短身、桃李春風美酒、芙蓉

秋水佳人、

米大夫爲余寫眞、因戲題其上、

愛此椝橋名、苔蘚斷紋成、上有高山色、下有流水聲、

六言絕句

秋

辛 黑

雨歇靑天散白雲、如烟新樹望中分、關山此去多黃鳥、

藤澤驛留別高子式得雲字

橫笛休吹關山月、傷心漢月滿秦關、秦漢月長如此、

漢將秦兵終未還、

關山月

漢室將軍賦遠征、虬鬚颯爽 吹笙、鐵衣忽見秋風起、

月白關山草木鳴、

新羅三郎吹笙足柄山圖

月白天南鼓角鳴、文姫掩涙出邊城、秋風吹落哀鴻夜、

總是胡雛戀母聲、

文姫歸漢圖

舞態翩翩掌上開、相迎七寶避風臺 ' 深宮月出簫聲起、

女伴同歌赤鳳來、

漢宮詞

七言絕句

高子校門人

輯著

肥後 輔羽

光子

玉山先生詩集卷之六

婆娑大堤女、不信雪花飛、將扇撲胡蝶、云是胡蝶非、

公子雙白馬、並馳上大堤、大堤風雪起、銀鞍總相迷、

其 三

一上大堤去、大堤雪霏霏、北風且莫定、吹入美人衣、

其 二

長嘯蘇門山、鸞聲難可攀、天風吹不斷、總在綵雲間、

大堤遇雪八絕

蓬窓雨蕭蕭、歸思滿煙渚、一聲溵河曉、杜鵑不知處、

蘇門長嘯圖

一鳥破林霏、出門見翠微、白雲如有意、欲別更依依、

溵河夜泊聽鵑

出山無臭味、不屬黃頤郎、明月秋潭水、渾成汝肺腹、

早 發

縱橫舌尚在、奔走腰欲折、愛汝老益壯、禿頭不成雪、

詠銅瓶

夜歸幽竹逕、月出見輕煙、欲向前村去、酒家應未眠、

詠筆

微茫赤石浦、曉霧滿汀洲、孤島在何處、何能辨去舟、

玄趣未易擬也、

秋風吹海樹、蕭瑟起波瀾、上有田横墓、偏敢月色寒、

琴橋

村邊杏花白、橋畔楊柳靑、獨抱孤琹去、不敢漁父聽、

泉岳寺

天然研池石、片水舍空靑、誰識山靈意、供余寫黃庭、

徵仲小景

大堤臨流水、雨雪滿歸舟、蕩子興應盡、瓊樓人自愁、

壬申冬登阿蘇山、有石高與身等、可坐十人、上

有天然研池、狀如一巨掌、水常滿中、大旱不涸、

余謂同遊者曰、是安知非造物者久設是、以待我

登題哉、因石頭磨墨、題詩及同遊者名而去、

風雪大堤上、紛紛亂楊花、欲去無處所、何辨阿娘家、

堤上如花雪、飛飛襲人裾、樓上如花女、相迎就酒爐、

其 七

人言大堤樂、大堤信自樂、上樓擁胡姬、何知風雪惡、

其 六

馳馬大堤雪、欲去且徘徊、只言柳絮是、風吹滿章臺

其

其 四

三九七

片言生羽翼、一諾賭心肝、握中利匕首、秦王骨已寒、 滿船霜月白、愁人夜未寐、唯聽寒山鐘、不見寒山寺、

有人持柿大夫畫像來徵余詩、因寫其歌意、但其

拜新月、欲傾使妾悲、巧將纖纖影、畫得上蛾眉、游子行十里、故人綰一枝、灞槁煙雨色、裊裊總成絲、

俠客行二首

楓橋夜泊圖

折楊柳

其 二

2月、初見與弦微、君恩願如此、夜夜增光輝、 昨日飛如雪、今朝化作萍、不見楊花白、唯見楊葉青、

午夜連營肅、候騎從李陵、試過戰畫處、風吹血作氷、世上風塵事、何曾到此間、欲窮飛鳥處、洗竹出前山、

拜新月二首.

楊白花

忽疑風雨來、細聽澗泉回、空翠化成水、盈盈瀉我杯、 嫁時雙帶子、織成兩鴛鴦、鴛鴦飛不去、良人在異鄉、

從 軍

一碧亭洗竹見山

偶然過橋去、一逕入竹林、散步日將夕、人語起栖禽、來的竹林裡、頽然不戴巾、清風如此處、可着獨醒人、

雙帶子

朝朝傾五斗、夜夜盡千觴、復此西隣飲、山陽猶未狂、 石甃菱花寒、短綆苔紋蝕、月午不見人、澹如水壺色、

閒行

五日獨酌

秋氣滿西山、對月思黃綺、猿雀與松蘿、總在空裡、

崔與松蘿、總在空翠裡、|志賀皇都古、荒凉已矣哉、年年二三月、依舊山櫻開、

西牓飲

已憐蓮花拆、還妬蓮花新、罷臨流水、水渾不照人、長松依絕岸、空翠晝紛紛、題罷新詩句、風吹欲作雲、

西山

志賀歌

挂席深川水、隨流探石華、春風吹不斷、直到阿娘家、微軀本一髮、肝膽是氷霜、不信看腰下、時時欲吐光、

采蓮曲

伽藍岸

舟 行

回道人詠

金鞍千餘騎、珠履十五行、身在前上處、結客少年場、 相訪柴門靜、莓苔落日明、欲題靑竹去、已見有僧名、

薜荔門

適見獨遊尊者在門、因賦、

思君如漏水、滴滴游子同臭味、愛臥船版牀其 二

竹石淸且奇、中有安牀處、昨夜風雨聲、竿竿欲飛去、 思君如流水、悠悠無還期、安得作舟楫、浮沈每不離、

船版牀

大漠饒風雪、零落漢宮顏、胡兒浪不信、只說燕支山、隴頭水何寒、凄凄復切切、行人一照之、滿頭總成雪、

竹石園

傚古二首

昨夜深結髮、今朝早掃眉、含情嬌不語、見客隱羅帷隴頭水何悲、嗚嗚復咽咽、行人一聽之、心腸忽斷絕、

明妃曲

其 二

起居聽長婦、羞澁如賓客、初遣弄鳴機、終朝未成尺、古錢如明月、幾人照到今、不見古人面、唯見古人心、

其 二

隴頭水二首

王母使青鳥、口術碧篆文、傳來光綵動、盡是瑤池雲、 弄玉秦王女、吹簫引鳳凰、仙遊良可樂、地上奈秦王、

新嫁娘二首

弄玉

三浦

右松岡

蒼翠二里餘、采樵從此去、雲來抱幽松、依依如有語、

右花原

三九六

愛此園中井、春水杏花影、灌來不知疲、花影上短綆、

漱玉橋

石泉鳴萬玉、淙淙橋下分、餘酣一此漱.不使孫楚聞、

、時時將我夢、飄蕩白鄉

結客少年場

無休時、安得作壺箭、晝夜每相、

訪竹公倫不值、薜荔結爲戶、薜荔裁作衣、不知幽人在、山阿雲自歸、 朗吟開百里、忽自岳陽歸、知有青蛇在、風濤拂袖、

灌花井

三九五

儂來愁月明、儂去愁霜積、願如夢中身、來去無影迹、|欲撲雙胡蝶、徘徊芳樹間、祇恐故人夢、花原中路還、

妾心如浣素、郎心如洗紅、浣素素愈白、洗紅紅漸空、莫言石梁小、世界此中分、不見來往者、來往只白雲、

夜度娘

右石梁

夜雨前溪漲、欲渡向何處、不知水淺深、試放黃牛去、 夜來風雨歇、持汲春泉、中帶落花去、浴佛古堂前、

古 意

右兔泉

孤舟入烟波、蒼茫向何浦、青山忽不見、知是飛來雨、山僧掌上鉢、鉢中蓄小龍、夜半卷風雨、動搖萬壑松、

其 二

右龍山

山房春事靜、流水澗中生、澗中荼蘼樹、花濕蟷子行、相逢深井里、一笑見心肝、不爲黃金壽、由來知己難、

小景二首

太古山房五咏

天王收上策、四塞一時平、文字燕然石、亭亭日月阳、吹角黃河北、一聲萬馬秋、孤城寒欲裂、片月向人愁、

山房春事

俠客行

獵火燒狼山、蒼茫不知處、日落天風高、寒鵰帶箭去、 誦罷楞嚴經、獨坐入遙夜、臺上月正中、風雨在臺下、

平蕃曲

吹 角

人下空階、猶掩氷紈扇、忽被輕風吹、容易見半面、｜征子已在途、征馬已在駕、相看兩不言、涕淚雙雙下

塞上曲

瀟洒臺

蓮子可爲餐、蓮葉可作衣、如何前溪女、獨朵蓮花歸、 不識關山路、唯見關山月、低頭彈琵琶、涕下黃金撥、

無 題

古別離

老馬一長鳴、願入燕王市、枯骨直千金、何況心未死、裊裊山中、英英繞茅舍、童子宋松花、飯客南宏下、

前溪女

關山月

山中作

老 馬

一下扁舟去、花深不知處、莫是秦時人、隔花開笑語、白石當中流、是我釣魚處、醉來石頭眠、一竿魚引去、

青山如此好、幾日把一杯、長自不歸去、相忘座莓苔、 非貪武昌魚、好寄武昌書、江水一千里、莫使雙魚疎、

其 二

獨 釣

宋蓮求並蔕、求得歸來遲、只道堪相贈、不知心屬誰、 各自買扁舟、競渡澱河水、應爲歸心切、非關弔屈子、

題書二首

別高子式

歷歷煙中樹、蒼蒼雨後山、劉聲將犬吠、總在白雲間、五絲逢五日、一醉不思鄉、但使玉壺粱、何須續命長、

度大利坂、是日霧、五步不辨牛馬、

其 二

崎嶇十餘里、咫尺迷雲霧、身在空山中、不見空山樹、 痛飲榴花杯、旅窓醉幽獨、但使客愁消、離騷不必讀、

宋蓮曲

其 三

何處樂事多、石城樂事多、日日飲美酒、坐聽莫愁歌、 遊子腰間劍、光彩如秋水、一渡天龍河、鏘鏗鳴不止、

同高子式賦得將進酒、戲贈大川上人、

其 二

繡佛應同好、勸君杯裏霞、不妨終日醉、醉眼墜天花、 龍河流水急、欲渡彩雲飛、知有明珠在、誰能探得歸、

雨後久住道中

五日伏陽旅館作三首

盧家有少婦、石城饒少年、簾前一相眄、含羞未拂韆、 綺席飛杯醉、爭傳鸚鵡名、何須更作賦、狂自勝禰生、

其 四

渡天龍河、示田大璞、二首

其 三

宇士侯席上賦得鸚鵡杯

盧家何所好、煙花石城頭、莫愁何所樂、艶歌在綺樓、車騎填道途、赫奕朝帝都、借問誰氏子、云是執金吾、

皆言莫愁樂、相迎向盧家、日沽石城酒、日醉石城花、|金波明月滿、美酒夜光流、不是高陽侶、此杯休暗投、

其 二

委茏謠

莫愁樂四首

三九四

賦得明月夜光杯

三九三

、颯爽若飢鷹、更擬决生死、各持一半氷、

殘兵從李陵昨日割一縣、今日割一城、割到壯士膽、蕭~易水嗚、

其 三

簀中餘一死、車中匿一生、生死何足道、所期在功名、

其 二

長洲芳草綠、送郎從此去、日暮春潮來、不見送郎處、

詠史三首

疎影殘香黯澹烟、雪滿絨書逢驛使、星明環佩夢遊仙、

誰能爲灑霜毫色、坐使羅浮春思傳、

曲

願作紇下瑟、莫作瑟上菘、粒故離郎手、瑟故在郎前、

其 二

素練蕭條浯可憐、亭々一樹自嬋妍、小橋流水朦朧夜、

淡墨梅花

莫作瑟上粘、願作紇下瑟、故粒不可彈、故瑟不離膝、

白日清風竹是君、但使茗杯消永晝、何論運漏到斜曛、

應知鉢底藏靈物、忽傍龍峯出彩雲、

古意二首

帝掬崑崙雪、置之扶桑東、突兀五千份、芙蓉插碧空、

望芙蓉峰

泰勝香臺絕世氛、偏憐半坐爲相分、綠池春水魚非我、

游龍峰泰勝寺、賦呈諸禪客、

校猛氣平生思一擊、圖中歲月徒悠々、

五言絕句

輯著

高子輔羽

蒼鷹獨立不下、颯爽清門人

光子

黑儀

肥後 秋

不爲上池春水美、何緣家釀醉人心、

蓮峰白雪落鳴琴、休闫賣藥名難避、別是懸壺跡自深、 玉山先生詩集卷之五

英姿殘日愁、夢澤寒雲身上集

胡天風色目中浮、草枯斜瞰千尋澗、木落遙看萬里秋、

玉山先生詩集卷之四

春別嚮者羽林藤公、賜詩藩故文學水足某某父子、而先

是二人者皆既沒、不及拜其賜矣、公盖深惜之、

東望高樓海氣中、猶思破浪駕長風、翠楊浦口春烟澹、

黃鶴磯頭潮勢雄、賓客總知枚叔在、君侯原自木華同、

何時爲摘仙桃去、一到蓬萊白玉宮、

寄題木下侯望海樓

名花本合在瑤臺、還傍諸天明月開、忽見尋香粉蝶失、

仍疑含笑素娥來、腕前相照念珠色、掌上高擎承露杯、

知是禪心無所染、君家銀椀雪成胎、

妙解寺咏白牡丹

雨後城東春水香、靑郊處々踏新芳、終年作賦老間事

二里聽鐘到上方、山鎖降龍雲未散、樓藏臥佛日偏長、

蒼苔古道多幽興˙飛絮唏禽欲夕陽、

雨後郊行、到降龍精舍、

新築幽亭對素秋、蒼々竹色落寒流、樽中濁酒供高臥、

畫裡名山常壯遊、且喜持螯留客醉、何須歌鳳使人愁、

興來一拂瑤琴罷ˊ滿壁芙蓉翠欲流、

臥遊亭集得秋字

萬樹新開圖畫前、黃鳥可憐求侶語、縉雲堪贈傍人、

使君此日將雙眼、兼見靑袍照綺筵、

幽亭晝靜漏聲沉、此日同人抱膝吟ˊ芝海晴雲臨倚檻、

飲菅夷長懸壺亭

祖帳爭傳綠酒杯、翩々意氣壯遊哉、東方千騎風雲合、

西海三山波浪開、芳草洲停靑翰舫、芙蓉雪照白銀臺、

深知臣主爲相悅、述職兼推晏子才、

送源大夫從駕赴江都

曉入長楊騎馬人、鳴珂紫陌蹈紅塵、羽林星綵臨衣動、

金掌露華染翰新、鵷鷺九重森畢集、漁樵萬里邈難親、

誰將寒谷蕭條色、謾道江南堪贈春、

其 三

玉京縹緲步虛人、咳唾飄然落世塵、誤信雄文似者在、

休疑楚相生猶新、洛中明月仙郎嘯、海外青山傲吏親、

遙想風流裁賦處、啼鶯芳樹上林春、

其 二

後公開儀於水足父子、有叔姪兄弟之分也、則使

儀也承乏奉和其詩、且獻二人遺文及拙稿、儀固

辭再三、尙猶見屬不置、邃敢和其瑤韻以奉呈焉

揚夢寐是佳人、漢省威儀逈出塵、驥尾青雲廻望合、

猩毛彩筆寄來新、茂陵遺草空相問、北海典刑豈可親、

原白郢歌稱寡和、如花白雪入陽春、

三九二

設驌銀雲鏡裡淸、三餘事業待君成、奪將鰕目五行下,

千騎東方稱大藩、漢廷今日見飛翻、剖符長壯風雲色、

奕葉仍承雨露思、龍劍衝星朝紫氣、能蟠會客滿朱門、

開君多暇耽詩酒、爲政風流不可論、

上白河侯

新加恩寵佩金章、忽見~意氣揚、五馬早朝臨紫陌

三魚今日集華堂、烟霞欲染冠裳色、霄漢高懸奎璧光、

呪復年~松栢茂、南山無日不稱觴

上某公

陵巘畫閣碧江傍、迎客登臨春晝長、雲外青山來染翰、

兩餘芳草映飛觴、千秋意氣論文盡、三日流風滿座香、

高興休辭挤一醉、饒他返照在垂楊、

春日鸞嘯閣同服子遷賦得陽韻

高閣春醪彥會成、風流肯讓晋時名、偏憐愛馬迎師生、

呪復啼鶯求友聲、自明珠衣裡照、詩兼芳草雨餘生、

朱門誰道人如市、不染應同丘壑情、

春日鸞嘯閣集、呈大川上人、

象外寒生落日愁、休嘆流年爲客盡、應須濁酒滿浮、

追陪授簡吾曹事、肯讓相如梁苑遊、

三九一

攬翠池亭靄翠烟、登臨陪宴蔚藍天、千峰欲染杯橙色、

攬翠亭讌集得前字

侯小隊自風流、海上禪扇暫勝遊、下界笙歌終不到、

諸天香積更相留、總房遙傍孤帆出、天地還隨鷗鳥悸、

爲是支公苦心愛、白雲深駐五驊騮、

陪駕遊少林精舍

海上巍々天女臺、登臨此日壯遊哉、潮驕貝闕千鯨吼、

勢捲銀山萬馬來、曹爾扶搖生羽翰、居然咫尺問蓬萊、

篇成七發飛揚劇、君自當年枚叔才、

和高子式遊盡島觀濤之作

碧梧亭子一登臨、霜落空庭易夕陰、回望千峰紅樹合、

留連十里白雲深、酢來無復蓬心在、病起何論華髮侵、

我有瑤琴君試聽、今朝聊作鳳皇吟、

秋日過飲碧梧亭

春風解纜木蘭舟、萬里西征賦壯遊、楊柳浦頭懸遠夢、

梅花津口入邊愁、陰陽忽變硫黃海、天地中分筑紫州、

好去阿蘇山下路、明珠探得向誰投、

春日送人之海西得舟字

讀破蠅頭萬卷輕、映雪孫窗同灼、看花韓已分明、

還疑太乙靑藜照、天祿當年劉更生、

使君車馬且徘徊、路入芝南別業開、綠酒偏黃憐菊色、

九日陪宴芝南別業

夏日同子坤大璞子祜、過飲萱州高子式明月樓、

高樓百尺倚靑天、六月秋風已颯然"萱草洲前憑欄澗、

芙蓉雪色捲簾懸、登臨堪把忘憂物、披豁還開避暑筵、

縱飲應同河朔興、風流猶自憶當年、

高亭夜靜碧梧林、中有幽人調素琴、一座清風生把臂、

半天明月照論心、興來偏使杯盡、坐久頻聞鐘漏沈、

非爲彩毫成五色、何能鳴鳳下秋陰、

秋夜過飲碧梧亭得林字

虛空峰頂接虛室、北眺屏風颯海風、積氣蒼茫飛鳥外、

斜陽瀲艷去帆中、犬牙二固烟嵐合、蜃氣三山潮水通、

白石青松奇絕處、飄然欲謁玉皇宮、

登虛空峰絕頂望海、是肥筑分界處、

蘭雪高臺一倚欄、使君琴曲爲誰彈、清風欲洒幽蘭氣、

山色遙生白雪寒、寧擬離騷千載怨、偏憐和郢萬人難、

縱然雜佩堪相贈´深愧梁園授簡看、

蘭雪臺應宇土侯之徵

乳雅啼柳曉寒生、佳人屢舞仍傷酒、公子將歸復炙笙、

時聽陌頭珠履散、高霞映樹綺聰明、

醉倚凌霄百尺樓、使君高宴自風流、鴻邊雪霽群峰出、

歲暮凌霄閣燕集得尤韻

落日浮雲是上京、歲晏看君賦西征、秦關行盡山猶合、

渭水望來雪未晴、好去繁華游俠窟、可憐佳麗帝王城、

新豐美酒春將近、一醉天涯寬旅情、

歳暮送人之京

函谷關門紫氣旁、鶏鳴絕頂曉蒼々´蘆湖春水憐鴻鳥、

蛭島風烟弔覇王、九折縱然堪叱馭、千金豈不憶乖堂、

生平自撫雙龍劒、何用區々戀故鄉、

曉蹌函關

憐君相地杏相尋、勝迹多連祇樹林、龍窟應探明月色、

鶴陵虚贈白雲心、三朝兵馬雄圖盡、九世衣冠霸氣沈、

試上谦臺求故事、古今唯有暮鐘音、

送子式之鎌倉.

初向漁陽從貳師、々意氣羽林兒、金鞍新試桃花馬、

銀箭遙穿楊柳絲、路入關山聞鼓笛、天迷雨雪捲旌旗、

横行萬里盧龍塞、縛得賢王歸未遲、

出 塞

紅塵不到白銀臺、重陽興與龍山似、落日風吹烏帽來、

暫爾登高堪作賦、陪遊誰是大夫才、

三九〇

園擁華林卜築開、葱佳氣滿池臺、揮毫綵石橋邊出、

濠濮園亭新成二首

彩雲深鎖赤膚峰、中有靈池神秀鍾、迷鳥應棲千丈樹、

眞僧曾制九頭龍、謾傳碧篆餘秦石、原識黃圖屬漢封、

休怪寶珠成五色、由來帝是仙蹤、

其 二

蘇嶽青天萬悯看、登臨今日僑攢岏 巨靈砦自劈開後、

有力由來負走難、吹笛千幄空翠散、振衣一壑白雲寒、

何時忽脫風塵去、此處飄然戴鶡冠、

登阿蘇山絕頂吹笛二首

秦弩射潮~蹴天、崑崙碣石披襟前、杯看萬里茫々碧、

箕坐一峰澹々烟、長嘯謾求徐福燊、壯遊欲汎晁卿船、

珊瑚堪借人間色、休使玄虛誇大篇、

登金峰絕頂望海、示平士騏、

天蓉社上墮嚴霜、今日經過重斷腹、宿草已生金骨地、

寒花疑見玉毫光、病中謾托雙魚字、身後空焚一瓣香、

難那惠休詩尚在、沈吟欲擬泣江郎、

上人一夕忽奄逝矣、後一年影像初成、弟子義公

延余詣拜、堂前有老梅一株、實上人之遺愛也、

因慘然有作、

休歌日出東南行、皆道青樓夜未央、驄馬嘶花春夢破、

青樓春曉

吉祥高閣水之涯、雪後登臨望轉移、白馬經翻寒色動、

金龍塔出曉雲披、諸天忽現琉璃界、明月長懸菡萏池、

深達身心清淨理、毫光相照不須疑、

雪後登吉祥閣

陰々宮樹靄餘暉、一路如絲入望微、繞到昭陽鶯喚起、

未離長信蝶低飛、梨花院落深沈度、芳草池塘縹緲歸、

還映紗蔥為雨色、珊瑚枕上更依稀、

賦得春夢

抱經高閣青華繁、幾歲陪遊承主恩、曾侍西園公子燕、

還開北海使君樽、風雲長傍雕梁壯、丘壑翻將朱紱論、

爲是花林多雨露、你杯日々到黃昏、

春日花園陪宴

濠濮名園臨釣磯、翳然林木轉霏微、燕王臺就黃金滿、

郢客歌高白雪飛、山出芙蓉迎彩翠、池成鷗鳥有光輝、

風流爲政稱多暇、日々陪遊堪息機、

其 二

倚檻朱霞杯裏來、魚鳥偏成濠濮想、文章肯讓應劉才、

誰能更對楚王問、萬里雄風入快哉、

芙蓉衍上人、病中托余代作復京人某書、書未成、

宇土侯就封、長至日趨謁奉賀二首、

唯有子雲甘寂寞、獨將玄草欲終身、

纖指不禁刀尺冷、綺聰殘月有飛霜、

長安公子日乘春、醉擁胡姬芳興新、宛轉嬌鶯啼白晝、

秋風蟋蟀響蘭房、夢後沈々玉漏長、壯士邊城看太白、

蒼鷹直上五千仞、撩亂花毛墮馬前、

驛使將歸有所思、十年游子滞天涯、封書欲寄青春色、

龍口爲分龍寶色、偏教夜月照摩尼、

仗劍遙携白雪枝、風急笛中香易散、月斜鞍上影相隨、

到時千里將孤夢、應醉佳人金屈后、

一片峨眉多秀色´靑天積雪照人難、

長安道

開君小築傍江干、水石依稀此辫盤、竹裏鳴琴迎夜月、

折梅逢驛使

開平士騏峨眉亭新成、因有此寄、

高、

、佳氣葱夕照綺筵、

其 二

左子坤久客江都、今茲庚午、從宇土侯歸藩、因「自愧談經叨寵遇、還從父老一稱觴、

有此寄、

呪逢仙律動微陽、蹇帷近接青山色、獻頌新添白日長、

倘采國風誰得比、新詩爾雅似君稀、

使君朱紱有輝光、封内爭迎五驌驕、忽見雄風生萬里

南關草木有光輝、山川總入周圖藉、日月猶淨漢繡衣、

元

歸來舊府見交情、重憶風流滯鄴城、左氏春秋千古業、

太冲詞賦十年名、相携滿袖青雲色、誰和高歌白雪聲、

原自穎川稱治最、知君能作鳳皇鳴花間置酒醉春寒、著書應是古亭似、來客還將白眼看、

大川禪師自京師龍寶山歸、過龍口邸、因賦奉呈、

朝辭鳳闕彩雲西、東海歸來望欲迷、函谷烟霞衣上滿、

琶湖春水鉢中携、談經朱邸三車轉、攀閣靑天萬象低、

美人遙夜織流黃´金籠鸚䳇難傳語、碧瓦鴛鴦空斷殤、

舘開樽爲政年、風流誰似使君賢、朱輜兼借黃圖色、

皂蓋初臨紫海天、南至偏多新雨露、西封長鎮舊山川、

今朝陪宴觀雲物十里黃雲欲雪天、遙聞白額嘯風烟、楚王彩鳥衝寒出、

漢將雕弓如月懸、酒力乘來窮遠近、鼓聲猶震動山川、

聯翩駿馬跋紅塵、花間爭鬪黃金距、柳下貫來紫錦鱗、

七

清虛呪復欲論心、新詩自似琅玕色、長嘯還同鸞鳳音、

翩翩驄馬疾如飛、爲接賓儀任指揮、西海藩屏迎氣色、

聞君思我拂瑤琴、何日相逢入竹林、瀟洒原知堪把臂、

送笠大夫迎接巡見使于南關

爵有神童名、故兼及之、

曲罷雙成進靈液、春光滿館蔚流霞、

紀世馨賦竹、托田生見寄因和答謝、開合姪阿八行名駿嚼瓊花、白雲裊裊丘陵出、黃竹凄凄雨雪斜

色斑龍蟠玉樹、

遠遊天子自周家穆天子宴王母於九光流霞館

欲向南村去、縹緲應迷白鼻駒、

駘蕩酒家雪

君自清狂方朔才、每隨王母興佳、九花仙醞兼霞饟

公主其 五

言睿藻宮商協、何必吹簫向紫烟、

擬沈佺期春初幸太平公主南莊應制

奉 詔迢遞朝日邊、神州佳氣滿諸天、牛車忽向雲中

其四

勅赴京住大徳寺

方朔仙才本爾曹不啻風流靑眼好、兼傳小既可繁陰、

奉送謙叟禪師奉

南極今朝多氣色、離離更種白楡高、

遊仙一曲向君操、東望蓬萊興自豪、六六洞天通玉府、

遲遲春日醉香醪、靑雲兼照靑囊籙、綵服相將綵鳳毛、

、瑤池日日醉春醪、偏憐笑語陪金母、

何比佯狂偷玉桃、霄漢雙飛靑為下、丘陵相贈白雲高、

錦囊猶有眞形在、五岳烟霞照彩毫、

五色蟠桃帶露栽、金馬風流堪避世、瑤池春水照銜杯、

飛瓊爲製雙成綵、並奏雲璈紇管催、

夏日陪駕避暑東海禪寺、同高子式賦、

蒼茫東海擁香臺、此日躋攀眺望開、六月寒松棲白鷺、

萬年奇石點靑苔、謝公偏着登山屐、河朔還回避暑杯、

爲愛蓮花能不染、清凉池上暫徘徊、

轉、龍寶遙臨海上懸、金掌爲同甘露味、紫衣應染御

爐烟、到時高閣聞獅吼、更使威音世界傳、

南莊樂未旋、宸遊本自勝神仙、新花一樹迎香

空翠千峯落御筵、春淺黃鸝時睍睆、風和鳳自聯

共春生賣酒家、胡姬如雪雪如花、行人鶴氅堪爭典

上客狐裘休謾誇、銀燭微微搖夜色、金波細細瀉烟霞、

尋梅、此地相迎王母車、九、

共言同甲堪成會、丘風流欲並傳、

日月還新學易年、黃鳥數聲自求友、青溪千伊爾游仙、

同平士騏過飲吳門磯氏宅、是日紀世馨携合姪阿 勸酒春風戲彩天、相迎花裡更開筵、烟霞忽散燒丹火、

爵來見、

愁來欲挂延陵劍、風雨長松不可攀、

其 二

知爾曾遊海上山、暫將杯酒落人間、青囊日月空高枕、

愛汝風流覽揆辰、裁班本不染紅塵、芝蘭總繞階前色、

萱草長生堂背春、肘後奇方從海出、懷中明月入城新、

哭南子和

可知書閣同蘇嶺´總是春風鸞嘯聲、

贈慶焉、

春日鸞嘯閣集、初接服子遷、席上賦呈

回首芙蓉高點滄、何來雨雪灑琴徽、

壽井醇序

、

今日茱萸相對酌、秋風吹帽鬢稀、

秋日鸞嘯閣陪宴樂山公子、同服子遷賦、

九日示左子坤

吳門梅尉近君家、樽前不到紅塵色、竹裏何知白日斜、

呪爲風流逢二阮、玄譚客中疑是在烟霞、

君家但使靑既在、冶坐應咖濁酒杯、

三六

憐君朱履曳長裾、應笑狂夫未卜居、一旦飛鳴原有鳥、

三年寄食已無魚、此生多病唯高枕、何事窮愁更著書、

東行途中小昌毓訃至、慨然有賦、

春寒玉樹着華稀、嗟爾修文一日歸、久訝雙魚中路滯、

忽傳孤鶴九霄飛、山東英妙不相待、江左風流亦已非、

赤羽橋邊孤鳳鳴、飛來此日彩雲生、朱門暫借据相曳、

白髪偏憐蓋始傾、隱几何妨言偃問、傳經蚤識服虔名、

丹竈烟霞難駐顏、化鶴終從華表逝、騎龍何更葛陂還、

飛閣陪遊九月天、蕭條秋色滿江邊、黃花仍老迎朱紱、

綠酒初寒照綺筵、鸞嘯一時名士在、雄風萬里大王前、

可知高會關星象、文采何會讓昔賢民五十初度幷井醇民以善醫聞、去歲吾侯召診、於是名聲藉藉

起也、辛未春君年甫五十、大孺人尚健食、四男

二女、蘭芽並秀、初度日宴復陽洞中、兒孫以次

上觴大孺八、佛爲醇民君壽、歌頌相屬於庭、鄉

人美之、余與君同甲、是日見招、席上欣然賦此、

香醪自勝上池水、傳飮今朝醉幾人、

縱杯此地興堪除、潦倒休嘲垮有華、燕市荆卿還我侶三八五

尼崎東明禪師、托吾藩護國禪師見寄詩、且徵余 雄劍隨身心未灰、千里何須傷馬問、一池堪笑及魚災、

開說文章光焰開、急風吹上讀書臺、孤琴焦尾人無恙、

陶然不省人間事、興在青絲白玉壺、

在江都醉來同倚長松下、六月清風颯滿庭、

游子腰間雄劍孤、相逢俠氣滿江湖、吳門心遠神仙尉、

吳門湖柏山宅集飮

浪迹江湖一客星、狂歌濁酒任流萍、十年容垮愁中改、

千秋玄卓待人知、梁棲服為文初就、歲在龍蛇淚易垂、

君自藍田終不健、茱萸腹斷少陵詩、

醉後贈湖玄室

題字欲論心、

黃公繡上舊追隨´嘆息河山異昔時、九日黃花成已巳重九卒

唱罷松魂涕淚傾、蕭條暮色楚臣情、弄丸曾解兩家、

律辨疑、以

中其扁額即師所

縮遠亭在吾籓護國山

其 三 近聞琴浦彈流水、爲問何人是子期、

尾玄言是我師、容未見既心知、摩尼洲畔香臺逈、

爲言何日東游去、暫駐征鞍敏馬津、

熊藍田先生輓詩二首

多謝高僧情自眞、惠余團扇與紗巾、唯應漉酒迎高士、

不啻摩尼衣裡色、兼將龍寶照人天、

賦奉謝、三首、

其 二

序其所著琴浦集、序成錄上、尋有巾扇之惠、因

金毛高閣上玹年、新見歸依朝日邊、山護紫泥雙詔肅、

其 二

遙知到處慈雲起、堪贈山中禪悅心、

西望函關去路深、白牛遙指帝城陰、賜衣應奪眞人紫、

布地偏饒長者金、鳳詔自天裁五色、獅牀一日表雙林、

橋懸明月一燈傳、宸恩偏許紆眞果、妙選爭推首法筵、

不使飛塵污故人、曉戴寒星壇上淨、晝明月座間新、

敏馬津邊尺素遲、巾上青大懸遠夢、扇間明月寄相思、

埋玉空知一郡名、吾輩千秋悲後死、斯文四海失先、

重陽最是多風雨、忍向東籬餐落英、王、教嚞刻意老杜、著杜

先生家玉名郡、因自稱藍

學講刻意老杜、著柑| 海南雙鯉動浮沈、萬里相思祇樹林、歌自郢中高白雪、

聲仍長者擲黃金、烟波鵬際諸天潤、風雨鯨邊一氣陰、

縮遠亭中難縮地、空將蝶夢、

燕市身輕飲博徒、一世何須生食鼎、千秋堪笑死含珠、

千里雲山夢裡青、游子貂裘空落魄、故人龍劍動精靈、

開水斯立家罹火災、舊物無恙、遙有此寄、

玉山先生詩集卷之三

不論方内方外´乘興獨歌獨來、烏入歸芸遠岫、僧歸落

日香臺、六時猾刻莲漏、萬事總忘茗杯、此處風塵隔

斷、四圍紺碧崔嵬、

過慈眼菴

當戸東峰秀、開窓積雪鮮、初寒高鳥外″曙色遠鏡邊、

出樹人家點、如絲樵路懸、餘淸歸縹帙、明霽落茶煙、

梁苑應裁賦´剡溪欲放船、梅花何處發、昨夜夢相牽、

六言律

秋競裂´錯落快樓臺、唇歇口風入、齒寒霜

寒霜氣催、

閒庭童摘去、斜日鳥啊來、額上 、頬邊暈照腮、

壓枝星斗綴、帶葉玉盤堆、珠散鮫人涙、纈成魚子胎、

裝燈火齊吐、觸鐵珊瑚獾、姓本石家出、根應金谷栽、

解醍思承露″醫渇欲分杯、無復太冲賦、沈吟愧不才、

晨起望東山晴雪

詠海石榴

勅之京、住龍寶山大德賓利、二首、

送大川禪師奉

東方千騎本聯翩、玉潤看君照綺筵、並蔕芙蓉當檻出、

宜男草色繞階鮮、縉雲遙動乘龍外、紅旭初明奠雁前、

置酒池亭應靜好、南風日日入朱絃、

初夏陪宴宇土候鑒水亭

銀河一道接樓臺、今夜傳呼織女來、桃李香車垂翠惚、

菖蒲美酒合瑤杯、共言花燭敢春住、會見桑弧如月開、

雙鳳和鳴應不盡、玉篇金管兩相催、

朱門繡戶綵雲生、百兩今宵親自迎、連理樹兼銀燭照、

合觀花傍錦食明、定知開卜通熊夢、呪復吹簫作鳳鳴、

解道天孫來到處、橋邊早已鵲巢成、

花燭引上宇土二首

七言律

福辛

校子清輯著

高輔犽

黑儀

光子

肥後 秋

玉山先生詩集卷之四

三四

菅相祠堂古、孤松久已貞、蟠根餘手澤、偃蓋感精誠

荏苒春將盡、高歌强自寬、青山空對酒、白髮更憑欄、 地屬印南郡、年傳昌泰名、後凋憐黛色、遺愛慕風聲、

一鳥林間語、千花雨後殘、美人遲暮意、誰與贈琅玕、 崔影棲仍密、龍鱗老更生、液堪仙鼎鍊、材使帝家成、

同士高瑞卿、旅館守歲、遲埜子修、不至、有詩「應等甘棠思、何論嘉樹榮、悠々八百歲、不朽托文明、

濠上興豈買沃州山、但使禪心會、何妨屢往還、

梵宇倚雲標、登臨海色愁、巨鼇山自湧、諸佛宅愈幽、

張祐題詩去、謝公着屐遊、微茫烟雨裡、何處是滄洲、

香得山字

五言排律

虛空飛杖鉢、萬里忽飄然、欲會心幽處近、深省此亭多、爲得禽魚趣、還疑濠濮過、

得多字

拜無縫塔、西歸不住天、

風雲隨白足、嶽雪照靑蓮、因附一書札、平安報惠連、

雨中過清見寺

妙解院後會心亭二首

旅窓同守歲、聚首此相親、深夜靑燈此裡有高士、唔咿發竹林、焚香清晝靜、瀹茗白雲深、

摩尼爾所持、楞伽不須讀、窓前對忘言、嵐翠紛一撲、

清虛亭得幽字

見寄、卒爾和答、

紺宇依龍峰、秋夕澹水木、衣巾染爐芬、月露如膏沐、

寧學屠龍技、偏憐鳴鳳音、幽亭多秀色、風露洒衣襟、

中秋値雨、過飮島生村莊、四月出、欣然同諸詞

客、賦得遲字、

愁雲鎖永夜、驟雨誤佳期、幽地宿心愜、青山傲骨知、

四更歌月出、一座愬杯遲、爲欲留連飮、晨鐘度水涯、

爐芬生水木、塔影在烔蘿、坐久寒鐘度、其如暮色何、

臺依水石、一逕入林間、聽鳥晴窓靜、觀魚白日閑、

偏憐靜、明朝白髮新、

爲耽杯裏興、不厭客中身、已報梅花發、遲君來問春、

從軍行

獻策心猶壯、登壇威亦靈、一身垂虎口、萬里踏王庭、

「叱咤雲成陣、横行劍是星、燕然雖片石、漢業已堪銘、

送佐公將歸豐州、展拜寂々先師塔下、兼附家弟

書、

播州曽根偃松、云是菅公左遷時所手栽、實八百

年物也、癸酉春過觀之、因賦、

竹院何岑寂、春陰此地偏、人來迷曲逕、鳥散破輕烟、

寧知非負郭、幽事屬君家、下榻依春竹、開樽就晚花、

四隣原市井、一醉即烟霞、郢調終難和、沈吟到日

春雨中遊妙解精舍得烟字

東莊春色早、花影滿林端、緩步携鳩秋”沈吟戴鷃冠、

臨風恐作雪、惜日更憑欄、白髪多悲感、陶杯强自寛、

春日過飲高之道宅得花字

驚君家信至、西望哭庭闈、萬里難管樂、千秋奈斷機、

空悲彩服易、忍見白雲飛、陟岵今何處、凄然指落暉、

林莊見花

憐爾休官去、孤蓬任所之、朱崖連海氣、銅柱接天

鵬搏扶搖外、人愁瘴癘時、縱多難得貨、逃世未須疑

開南氏母大人訃至因有斯寄

寂々花社、蓮花漏自沈、何妨將五馬、暫此繫雙林

朱紱乗餘暇、青山諧夙心、隋候珠尚在、並照衲衣深、

送人罷官歸南海

避暑幽亭晚、披襟俯碧江、竹凉侵綺席、荷氣撲銀缸、

名飲追河朔、清風憶北窯、門前楊柳樹、燕子自雙々、

陪駕遊妙解精舍

江亭避暑得雙字

忽聞身後事、不問病中禪、應爲津梁倦、空餘衣鉢傳、

孤雲歸遠岫、一鳥入寥天、相憶焚香處、秋花白露圓、

宿慈眼菴得木字

踈箔懸春雨、斜窓舍翠微、吾生甘寂寞、此地弄芳菲、

竹連通幽屐、花香襲定衣、自憐機已息、啼鳥近人飛、

哭岫雲禪師

佳人將進酒、前席發歌新、微雨桃花色、輕風楊柳春、

朱門停寶馬、綠水出銀鱗、君子休醉、桑楡不復晨、

春日遊宗岳寺

解携前路遠征与且踟躕、行矣龍門客、由來燕市徒、

風煙樹合、寒色驛樓孤、共道終軍少、青雲屬棄繻

將進酒

愛此花臺靜、經過與世違、空香飄客席、春雨濕禪衣、

倚檻聽黃鳥、裁詩座翠微、片雲如有意、更爲近人飛、

送上焚生之江都龍邸

雨餘苔逕滑、山屐愜幽期、爲許淵明酒、來 思遠師、

依然着勝地、忽爾有新詩、不是匡廬色、誰敢淨理知、

奉和大川上人惠

忘世多幽事、看雲息萬緣、不妨花落盡、作雨滿諸天、

醉後賦呈大川上人

三元二

長洲芳草逼、暫此繫扁舟、風土膦鮫室、雲霞結蜃樓、

看花慣作客、沽酒易消愁、春興行應好、王孫未倦遊、

哭吉子徵二首

蘇山不可見、唯見白雲飛、立馬相顧、同樽亦實稀、

高樓王粲賦、故國老萊衣、不廢詩書業、何曽勞斷機、

室津泊舟

明日舟船別、今朝口口深、參商忽兩地、弧矢邃初心、

游子唯耽酒、佳人莫廢琴、蒼茫江海上、猶自有知音、

送井冲默歸省故鄉

哭師双樹下、宇宙日悠々、知是五天竺、應携隻履遊、

虎溪泉石咽、鷲嶺暮雲愁、唯有高秋月、曽經照指頭、

留別水斯立

緑酢盈金、同與故人酌、一官仍贅疣、丈夫咲燕雀

醒醉何關它、是非已爲昨、此心如片、可以翔寥廓、

哭智巖禪師

瀟洒無塵氣、相逢即竹林、高歌聽白雪、妙歳見青衿、

皆道阿戎好、偏憐小阮尋、風流何限意、對酒一心、

吉生宅集飲得昨字

客何須白眼、主是自靑運、相見忘來去、鳴鐘欲暮天

贈阿神童

一

宰府遺蹤舊、猶思昌泰年、浮雲饒紫海、曬日訴青天、

廟貌千秋肅、詩名萬古傳、欲知歳寒操、松色風烟、

悠々八百載、陳迹徒悲傷、都府樓何處、觀音寺己荒、

魂獪吟澤畔、似貶瀟湘、唯有梅花色、春風憶帝鄉、

抱玉空山裡、年々涕淚垂、還同燕客裹、難遇楚王知、

元自連城價、如何按劍疑、微軀豈足惜、三献使人悲、

太宰府謁菅公祠二首

他鄉逢五日、故國思悠哉、芳沐蘭湯色、香啕榴酒杯、

何須續命好、還使反騷裁、痛飲吾曹事、陶然笑楚才、

荆玉篇

殘年猴作客、此地共論心、踪跡空天問、風塵且陸沈、

玄談仍剪燭、白髮未抛簪、同醉他鄉酒、何妨到夜深

客中五日

天地我如寄、死生爾已休、還家身後事、爲客病中秋、

白酒河山邈、黄花涕淚流、蕭條搖落日、偏使故人愁、

除夕過飲南子和客舍得簪字

朱紘今日絕、白雪昔時間、擊筑空燕市、招魂仍楚

千觴思故態、萬巻泣餘芬、雄渡々頭樹、秋聲總爲君、

新歳岳翁壽、烟霞近席飛、杯從今日醉、籌已古來稀

芳樹聽黃鳥、椒花暎綵衣、南山春自好、更覺有光輝、

十日過飲漆園河氏宅、見其二子二首、

同到城西寺、風塵如隔生、棋君堪勍敵、詩我愧難兄、

鳴磬孤雲靜、翻經片石明、留題應不朽、因感昔人情、

新歳壽宗仙岳丈七十初度

竹院隔風塵、可以醫染病、空門留妙題、池水開明鏡、

焚誦定猿心´丘壑馴龍性、超然不知歸、終日得清淨、

壽福別院壁上、有那波活所老人留題、因用其韻、

示同遊諸詞客、

駘蕩長安道、風光入早春、翠揚驚久客、芳草送遊人

佳氣南山近、流澌渭水新、不知誰氏子、挾彈逐紅塵

竹院得淨字

硯水何清冷、悠々一爲君、白沙餘鳥迹、綵石見龜文、

村似結繩俗、峰看磨墨、因知靜者意、長此出塵氛、

早春遊望得春字

牛鳴隔一地´獅吼到雙林、山自無量壽、雲猶不住心、

靑運終日淨、江樹萬峰深、忽見斜陽照、晴嵐彩翠汁、

之桂翁今七十、宅南有硯河磨墨峰之勝、因賦

傷雨色、桂樹秋烟、

多病靑樽外文園常抱病、金地忽逃禪、日落秋峰外´門臨流水前、

此生貴適意、興來探靈異、一榻接諸天、半聽依積翠、

玄語逢眞僧、素餐笑傲吏、只道山氣佳、不省人間事、

過宗岳禪院

、生涯紫蟹前、何須奔窃藥、一醉即神仙、

遊光明寺得翠字

狂

簡二三子、高歌到曉天、姮娥前峰不可上、曹此豁幽襟、求侶聽黃鳥、教人戀綠陰、

酒憐斟北斗、詩愧比南金、一望愁風雨、無緣見道林、

中秋值雨、同二三子賦得前字、

約遊山寺、值雨不果、還過志謙山宅、同酌得金

字、

山中朱景靜、雨後綠溪陰、新樹雲獪濕、前峰路更深、

時々聞伐木、處々變鳴禽、幽怼長松下、淸風滌煩

秋色幽亭晩〝黃花傍濁醪、交游看此物、偃蹇屬吾曹

歳月空華髮、風塵只綵毫、非關學彭澤、酢臥興愈高、

初夏山行得禽字

黃花香未盡、白酒飲逾豪、十日仍烏帽、千秋見鳳毛、

風塵如脫屣〝珠玉在揮毫、開口漆園興、誰如傲吏高、

其 二

胡人吹玉笛、漢將在金微、忽見梅花落、猶聞羽檄飛、

幽逕松間寺、經過自窈窕、隔林一川平、含雨千峰小、

座迓品茶人、門聞啄木鳥、黃昏打鳴鐘、玄理終可了、

胡人吹玉笛

郊野多芳綠、時出展遐矚、烟扉靜梵音、水寺淨塵躅、

爲愛花鳥幽、總忘歳月促、紙恐靈物驚、高吟空潭曲、

臨流菴品茶得鳥字

誰家俠少年、調馬氣翩翩、弱柳低金埒、飛花拂玉鞭

爲躭春色好、屢過酒樓邊、何日嘶風去、沙場縛左賢

日郊行到元宅寺得曲字

龜泉鳴暮夜、螢火集菰蒲、風引撲難住、波搖看欲無、

路旁堪按劍、衣裡忽投珠、疑是銀河上、離離種栢榆、

看調馬

登臨高閣上、晴雪迫崔嵬、詩憶靑鸞嘯、園敎玉兎開、

寒光生把燭、夜色照銜杯、爲侍惰侯宴、還疑明月來、

龜泉群螢爲觀水

三年復見君、千古重論文、置醴叨恩洽、持螯發興粉、

亭堪來綵鳳、人已在靑雲、且愛林泉好、陪遊出世氛、

雪後鸞嘯閣夜宴得開字

鳳鳳亭重奉謁宇土侯得雲字

三七九

織女引歸路、虛無指點中、鼓盆傷蝶夢、窃藥在蟾宮、

夜雨蘭燈暗、春寒蕙帳空、孤魂招不返、香炧恨無窮、

無量壽山觀楓

竹徑少人蹤、桂期叩禪窟、忘却世間相、同賞望後月、

事在水壺、生涯仍白髪、爲探摩尼珠、淸光曉不沒、

辛醫生喪内

蓮宇秋日明、松門甘露洽、本知貴沈冥、何妨親狎

吟詩驚鉢龍、焚香馴寶鴨、身心頓晏如、因得無生法、

望後二尊軒集得沒字

秋江佳絕處、風景滿香臺、黃橘霜初下、靑蘿烟未開、

鐘前憐客到´飯後有禽來、余意在幽、何知落日、

同得法字

詩書聊卒歲、杯酒復迎年、芳樹千家雨、垂楊萬井煙

圖唯藏白澤´囊豈著靑錢、日々醒還醉、飄々地上舞、

秋日遊宗岳寺得來字

先生頌酒德、萬古聞芳馨、鉀見托身後、杯唯稱眼靑

縉紳二豪客、江漢一浮萍、寂寞湘潭上、無爲誇獨醒、

新歲作

關山多雨雪、夜月滿閨粥、征婦夢魂苦、飄飄應未歸、

劉伶墓

沈沈長至夜、良宴興偏新、一線添詩思、三杯見酒眞、

律將鸞嘯應、席附鳳遊親、陪笑剪銀燭、何曾惹世塵、

春夜凌霄閣陪宇土侯作得中字

南方產美、北斗降瑤光、率舞當唐殿、牽來比越裳、

聞言堪拜跪、受敎甚馴良、去歲封東嶽、深知應瑞祥、

長至夜陪宴鸞嘯閣得親字

開說南山下、悠然出世塵、松間種白石、竹裡戴烏巾、

日月閒居賦、田園歸去人、可憐千里外、遊子未知津、

己酉夏、廣南献象、

關西夫子在、悵望夕陽中、家隔千山外、人如萬里蓬、

詩書游魯國、禮樂問周風、自愧支離甚、何比易東、

代柬答鄉人

東海雙林靜、支那一水分、牛車轉大陸、猊座壓高雲、

佛滅從薪盡、人生任酒醺、貪看花欲晚、作雨故紛々

客中奉寄屏山水先生

寺住浮雲裡、諸天不可攀、袈裟人立盡、鐘鼓鳥飛還、

白石堪分座、靑錢豈買山、平生雙履迹、往~在松間、

佛滅日遊東海寺、上人許酒、

招魂諸弟在、屈指故人稀、嘆息金華殿、談經事已非、

遊妙解精舍

問君何處去、去入白雲遊、烟霧南山裡、風霜空谷幽、

爲甘玄豹隱、難使白駒留、別後梅花發、相思到水頭、

歲晚饒風雪、山中途汝廻、反招思桂樹、堅臥閉蒿萊、

解綬浮雲邈、振衣空翠來、蹇驢應未病、到處欲尋梅、

其 二

良夜華堂燕、何妨鐘漏催、餘懽展婉嫟、欲別更遲回、

銀燭臨詩席´金花泛酒杯、期君當國日、美錦操刀裁、

歲晚送還山人二首

故人行仗劍、道路思悠哉、山壓三河出、潮呑八島開、

平生知壯志、此別有餘哀、當世敫熊館、誰能作賦才、

夜譙上蘭陵公子

奉使爲秦餌、由來一璧輕、便能將七尺、爭死動連城、

短髮衝冠上、英風倚柱生、澠池高會日、大奮趙王名、

送葉交通歸讚

桃花陪宴日、楊柳亦绳绳、名飲無中駟、新詩孰兩驂

先期修禊事、臨水湫餘酣、早使群賢集、風流可劇談、

題藺相如使秦圖應樂山公子之徵、

夜宴凌霄閣″飄飄似御風、春星低可摘、烟水望還空、

爲醉花前月、渾忘鬂作蓬、非關大人賦、身已在雲中、

上已前一日鸞嘯閣集同高子式賦得酣字

三七八

玉山先生詩集卷之二

身長八尺瞳子、駿騅々躍千里、叱咤大軍氣成虹、

飛土逐鹿指顧中、五國諸侯凛股栗、一星火燼秦宮、

君不見祖龍斃眞龍翔、赤縣大風雲飛揚、謀士還家疽

發背、美人侍飲泣斷腹、八千子弟氣皆死、倘猾獨戰

勢莫當、暫時涕淚如氷霰、丈夫肝膽照劍硭、駿騅瘖

矣烏江冷、垓下歌舞夜悲傷、

年駐朱顏、

垓下行

碧梧搖落日、淚滿楚臣衣、室見鳳毛美、還悲駒隙滢、

三七七

海內雙青眼、平生肝膽知、微君誰經世´唯我獨躭詩、

長劍從輕薄、一官笑數奇、悲歌燕市飲、聊與漸離期、

哭池鶴林

漳河流不盡、妾思自悠々、搖落銅臺晚、凄凉玉座秋、

寵恩爲往事、歌舞感會遊、西望園陵處、蕭條孤月愁、

吉子微宅集飲鹽水斯立、

內園春駘蕩、咲語自喧嘩、玉砌觀紅藥、銀盤進綠瓜、

眼前歌舞入、掌上寵恩加、爭撲雙胡蝶´紛々團扇斜、

銅雀妓

久聞懸榻日、忽喜把杯時、四十身多病、稀疎鬂作絲、

聚星難驟得、流水任相知、偶此過丘壑、孤雲爲我遲

宮中行樂詞

過江之道山莊

五言律

輔 輯

門人

子清光子

黑儀

肥後 秋

玉山先生詩集卷之三

魚為炙、一人日供十千斗、陶然翻過到蓬山、歲歲年

天吳明月珠、天吳失窟無所歸、百萬波臣喘息微、化

登高丘望遠海、煙濤蒼茫無際涯、人体中有神仙不老 「鯤流血犷酣戰、矯龍脫鱗已退飛、墨澥蒼茫何淋漓、

藥、瑤臺銀闕光陸離、彩鸞街花戲其上、芬々郁々珠 渤澥蓬々黑風吹〃狂波矗立五千仞、震蕩天柱與地維、

樹枝、若能餐者億萬載、乃使秦王饞涎垂、涎空垂、 呷沌欲死倏忽叫、女媧無功神禹悲、君不見孟嘗三千食

徐福之帆無還期、長鯨噴浪蔽日月、蜃氣空濛靑霾吹、 客雜雞狗、無魚何耐久、又不見田横五百義士、海島

吾聞遠海雖大、揚灰填之、高丘雖崇、鋤可夷、唯何處得美酒、我欲告上帝活此帮、未知上帝許我否

神山不可見、靈藥不可思、火棗交梨或可遇、秦王之「我願得長竿如彩虹、巨魚忽落任公手、然後傾海爲酒

愚不可賂、

登高丘而望遠海行

枯東肆中、

東海豪士巨魚歌

君不見寒玉生湘水之潯、有八裁之寫龍吟、五指參差

古行路難

舍妙思、七孔亮瀏發奇音、渾沌已死還飛舞、靈妃休

幾浸淫、颯沓入破飛風雨、引羽刻商慘秋陰、紛4白

雪梅花落、蒼々殘月關山深、關山迢遞夢魂苦、征馬

躑躅殘月沈、此夜空閨涙如雨、或婦柔腹何可禁、

題關雲長長驅圖

如烟、豪飲不知人間熱、

氷盤水壺照波偏、漁人擧網庖人躍、百金之魚出深淵、

魚尾潑剌亂如雪、爭向柁樓事擊鮮、忽開戛々鸞刀響、

又見片々銀絲懸、醉後團劉同下筋、寒生齒頰忽飄然、

吳江休懋張翰興、鄭國易欺子產賢、此時何須論魚樂、

笑殺莊生濠上篇、

慵

龍笛六月一放打魚船、川兼葭畫三七六

澄潭瑩無風〝游麟若在空、我來怼其上、魚語與人同、

一魚言我祖、含劍薦吳宮、一魚言我祺、腹葬楚國忠、

一魚在側笑、豈如我祖功、我祖躍王舟、周道以朗融、

三魚屹相矜、鼓腮語未終、豫且之罔從天下、三魚立

神耶人歟龍乎馬、馬上割飛偃月刀、阿瞞大軍鼎折足、

旌旗百萬如燎毛、孟起自是黥彭侶、髯之絕倫一何豪、

東海豪士盤礴脫衣大狂呼、粉壁忽開巨魚圖、巨魚一

怒尾閭决、百川東蹙天地孤、獨身來攻天吳窟、欲奪

三七五

岱之絕巓、目覺兩間軀爲贅、元氣浮動如載船、雙足

前川捕漁歌

魯連

飛鳥在我後、白雲翔我前、忽攜二生捫星斗、泡立小」從此下筆有神助、笑殺玄虛誇大籍、

季秋病起、携士騏子華登小岱絕頂、薩筑二州、

歷々在指掌、二生神王、賈勇幽尋、余委頓整蘗

先歸、賦此解潮、

君不見東都丸萬年、西遊意氣一何翩、紫溟萬里如杯

石帆海、大風船破、適得淺處不沒、可謂破家而

出矣、爲余話其狀、至今猶分人病悸也、因作踏

海行壯之、

伊人屬長夜、垂堂誤千金、千金亮可惜、永古懷苦心、

庚午夏、宇土候就封、於是丸萬年載筆從焉、赤

踏海行幷序

二夜號跳海日、下窺飛泉澗壑幽、玉井蓮花紫髯病神仙、

行可采、狂

風吹盡藕如舟、寒松尙髒秦時雨、匹練遙曳吳門秋、

冷笑當年呼萬歲、漢家天子不少留、少文本自向平隸、

空說夙志難相酬、我躡五岳朝華胥、天門咫尺屬神游、

百怪眩耀非世有、駕飛龍兮驂青虬、賜我瓊漿甜如密、

聊撫長劍息椒丘、俛見鵬背青濛々气不辨赤縣與神州、

黃河一帶供濯足、蒼梧之野白雲愁、巨靈瘧負忽驚駭、

鈞天鏘鏗鳴未休、此時峰々爲君響、振衣空翠紛不收、

讀水斯立遺草有感

弱齡讀書滿五車、結髮立言排百家、銕研倒捲銀河水、

星辰錯落筆吐華、筆如九鼎力萬鈞、漁竭天池無遺鱗、

珊瑚樹寒老龍泣、貝宮寶藏爲一貧、翻然忽叩天阁去、

青鳳縹緲不知處、秋老薜蘿滿廢宅、人間空餘太平策、

讀之涕零不能禁、谷口烟月向人白、

分垂々吐、欲墜不墜石崖懸、帮鞋軟々跋瑤草、烏

帽岸~摩蒼天、二生探奇不能止、深驅異境相後先、

駿蹄脫銜孰能騎、驍龍弄珠破風烟、沓嶂廻峰心既醉、

筑雲薩水眼欲穿、自嘲老夫無勝具、瞪若蝸牛帶殼遷、

歸來難酬山靈意、謾誇一揮筆如椽、此時萬象愁無色、

颯爽水、揚帆長風破蒼烟、天連赤石陽侯怒、忽見兩蛟挾

其船、船破暫時載朽骨、九郎神王益翛然、被髪欲朝

憑夷窟、翻身幾墮驪龍涎、頷下明珠何足探、懷璧無

恙祐自天、始信毛寶之軍人、穩坐龜背到岸邊、又疑

迢迢銀漢水、渺々仙槎送張騫、歸來誇我支機石、何

用浮沈卜百錢、今日貝闕親經歷、自道高踏勝齒達者流、笑道劉項逐秦鹿、何似集飲爭觥籌、百二、五岳如攢指、百年如急流、欲往從之吾老矣、誰寫秀

山河如蟻垤、謀臣猛將同蚍蜉、先生之杯大於海、中泛|色落牀頭、峭壁懸崖層々碧、芙蓉朶々紫煙浮、金鷄

賢者亦一丘、愚者亦一丘、玄壽先生日々酢、萬不挂 臥游亭、爲岡士騏賦、

覺後語其狀、頗類世所傳九米眞人事、善畫者、

間而戲圖之、一日酒闌出示余、余酢題其上、文

不加點、但調入誹不足存也、

抱去一飲春池上、長號啁晰神獨王、

引君同朝上帝但使玉壺酒如河、何論險阻與風波、少年紅顏難再得、

結客場中屢經過、桃花香陌紫叱撥´醾酥春風金叵羅、

楊柳堤邊聽黃鳥、芳艸池塘泛書舸、倏忽三萬六千日、

休辭日擁美姬歌、醉歌不省人間事、孟門遙瀨奈我何、

夢遊僊并序

松玄壽者、壯飲之士也、夢詣帝所、勅爲酒仙、

孟門囓我足、洺滴我船、我術用游厚、有時視怵然、

龍態、淸

興豈讓庾亮遊、我來一叫明月動、天風吹雪點杯浮、芙

蓉顏色遙相照、總海暮雲慘欲愁、黃鵠高飛翩安逝、

六翮縹緲不可留、狂歌豪飲君休怪、人間世若蜉蝣、

孟門行、醉示南子和、

餘翠、

開雞行

麗何裁明月、自誇未曾向暗投、高臥何減元明月樓、樓高百尺枕萱洲、萱洲之水淨如練、夜涵明｜童鬟徐福舟、杯面忽吐千蜃氣、結成十二白玉樓、一

月澹不流、樓上常置醋千斛、樓下車馬紛不休、主人 飲累月堪辟穀、何須更從赤松遊、忽見青童降碧空、

宮、上帝賜君流霞酒、大腹枵然覺不充、

俛祝漢廷歳月變 空中翺翔西叉東、已聞高陽長揖去、

又見當繡在臨叩、長卿着棰滌釀器、糟風上衝先生鼻、

鼻間栩々何可禁、失脚靑悦墮地、身在山聰睡初醒、

紅日三竿破長安少年愛開雞、結客場中每相携、三月芳草微雨後、

兩雞相見意氣齊、磔毛離披久相持、英姿颯爽不知疲、

道荊卿臨易水、怒髪衝冠亦似之、紫眼黃鬚狙且擊、

老拳毒手合又離、高啄難屈強項、低過莫侮胯下兒、

殺軀欲供子路缮、拔尾何畏賓孟儀、一雞憑陵黃金折、

一雞辟易絳冠裂´勝敗欲分指顧中、觀者盛氣與雞同、

餘勇欲賈高固氣、先鳴自誇州焯雄、飛血淋漓桃花色、

落羽撩亂柳絮風、暫時旗靡勝敗决、馳檄先奏飛將功、

紛滿地、有人、服之七十春、斗大茯茶產其傍、化成琥

珀歳歳香、有人服之欲千載、配顏抹震碧瞳方、此日笙

歌開綺筵、賓客滿堂酒如泉、上有雙雀將雛舞、翩然

下戲彩衣前、彩衣風暖春晝永、爲君齊唱天保篇、

明月樓歌、贈高子式、

太子賓客同縞素、

單車西去不復還ń羽聲凛冽徵聲變、皆血洒襟髮衝冠、

徑將七尺入强秦、豈恃區區骨勇人、千金難購於期首、

君不見玉堂偃松出風塵、磊阿渾作老龍鱗、松子松花

荆卿行

易水鳴兮北風寒、白虹屈短日輪殘、二世之業何忽諸、王不識鹿客嘆鼠、

偃松篇、奉壽祭酒林先生七十初度、

昔爲一江水、同流復同波、自君有訣意、東西各咨嗟

妾心否貞白、之死失靡它、它人行影不欲照、流水

滔奈君何、

「前有三尺魚、後有一坏土、達士由來帝縣解、視死甜

於西施乳、寒冬十月雪作花、虎斑豚魚味方美、醉將

西施葬人腹、笑殺魚腹埋屈子、君不見吳王白日正酣

歌、越來之溪爲血水、又不見吳王三尺魚腸劍、血活

一縷人立死、

各上蔡布衣行

帳、

東西

河豚行戲示岡士騏

斗、甕下磊落天下士、仲 子清高格如鶴、佐郎清 神 一言便殞於期身、趙人匕首督亢圖、咸陽殿上勢己孤、

似水、維騏絕足躦風雲、獨行一日三萬里、正虎大顙「無端環柱英風起、藥囊倉皇大號呼、轆轆之劍吐光、

倜儻生、長嘯雄劍四五鳴、腹中奇策輕韜略、當面談 笑看朱殷汚咸陽、英魂去爲燕中鬼、如此光景報田光、

文不談兵、作歌者誰如秋冷、商紇調急金石清、其餘

數子皆卓犖、森若羽人集玉京、傲然醉倒高堂上、呼

吸元氣歌豪放、三寸之管驅萬物、天地爲之色沮喪、

此時萬物歸一指、苦風酸雨鬼悽愴、紛紛醒者目中空、

唯育蘿月來窺斯本上蔡布衣客、三寸之舌動秦王、在楚漫學帝王術、

入秦唯說申韓謀政如猛虎法狮狗、六經落烟一人手、

祖龍游海混鮑魚、無限餘腥轀轉車、區區只惜通侯印、

一旦沙丘托爾書、長子伏劍山東分、三川菜盜晝如雲、

昔日咸陽大張宴、徒說禍福終難免、果然市中當赤族、

相泣東門感黃犬、可憫奏上獄中語、帝業古來以客著、

百篇、此瀑若變成春酒、一口吸盡醉陶然、然後五指」君不見北斗孕秀氣、散作酒人六七子、酒人握中提北

薄宦遊子絆此身、藥絢心空消日、桃花催夢未知春、

」紅木應生山中路、白石難尋澗之濱、世上交情非故國、

少年行樂屬他人、水壺誰醉青樓酒、金丸誰逐紫陌塵、

馬卿病渴文藻著、王粲登樓詞賦新、黃金已盡異鄉滯、

青囊窣識古方眞、今日病起終頭白、浩歌倚杖淚沾巾、

醉歌行贈菅夷長

是酒中僊、每飲一斗

歲歲伏枕何悲辛、貂裘零落不堪貧、造物小兒斯多病、

李白觀圖

頭素絲終依然、今日不飲宛其逝、八生七十箭離弦、前

有新豐之美酒、傍有燕趙之嬋娟、長袖屢舞曳羅縠、

·羲輪轉靑天、秦皇漢主何迂哉、鞭石航海求蓬萊

蓬萊山不可見、風雨晝鎖糟丘臺、吾輩但唱相逢行、

丈夫相逢盡弟兄、百錢落手應須醉、不用百錢問君平、

浮雲榮辱何足道、造化小兒弄我生、生也有涯思無涯、

半醉半醒也身輕、身如一箇船、百年漂泊觴深淵、蓬

萊山不違顏咫尺、鼎鐺盃杓盡神仙、

太白星精落塵寰、乘風來往匡廬山、深山之阿夕出雲、凄風苦雨鬼成群、小鬼跳梁大鬼笑、

高明之家來去紛、終南高士面如丹、青袍烏靴峩其冠、

十圍腰間三尺劍、小鬼大鬼肝膽寒、君不見白日揶揄

鬼如林、不獨女羅薜荔

車遙遙路悠悠、重山復水言出游、郎搖征鐸妾摻袂、

欲從不能意夷猶、車輪一轉三頓足、車輪再轉九回頭、

願絰即驂作惡木、願要郎船作石尢、此願不得奈君何、

棗軸宛轉豨膏流、復水重山鳥過目、車遙遙兮不可留、

鍾馗掣鬼圖

明蒼海不變、三見滄海作桑田、誰謂素絲易變、滿

前有樽酒行

何時一出飛鳥上、彩翠染我芙蓉巾、

病 懷

三七二

挫崫上馬跡如蹈、4

遙遙

1猶飲羽、到今突兀苔蘚聚、

水涸火然大澤間、中有神人來 來往路、 金童曉飛六月霜、

不客晝嘯五里霧、飄風驟雨吹欲折、九百七十餘丈樹

臾風罷雨亦晴、鶴鳴萬壑寒色生、靈池新吐寶珠氣、

紫煙成花滿太清、笑我年年老風塵、塵中役设七尺身、

蒼蒼欲供先生墨

挽回銀河瀉人間、先生笑道臣萬物、醉墨如山答蒼天

車三七一

阿蘇之放歌

、青壁削瓜崖削銕、伊昔神人大射獵、

醉後斯立、

望阿蘇池煙、用水色絲、女媧鍊成天孫織、我今携來煥成章、龍文何日

白於雪、小如拳頭大如斗、君今餐之色似童、飄然來往

御天風、雙雙白足蹈雲氣、袈裟渾濕空翠中、每誦白馬

無數篇、不羨青牛長生詮、潦倒一生愛繡佛、遊戲三昧

笑金仙、松花紛紛常盈衣、群鶴翩翩相追飛、四十九年二月三月春欲暮、桃花李花開滿樹、洛城東南亂嬌

未顯實、四十九年豈知非、此日兒孫求予詩、滿堂烟霞|綿綿巒蠻隔花鳴´蹬花倏忽高枝去、荷花宛轉低枝語

日遲遲、余道四海盡兄弟、師道大千皆我兒、大兒歌小 百囀相合落花邊、一聲忽流刺繡處、玉箏共調漢宮姬、

兒舞、手弄鶴雛攀松枝´綵服花暖應不老、勸君春風金 金梭同擲秦川女、夢裡聽之斷柔腹、碧紗朦朧窓初曙、

屈卮、

補袞職、知我罪我者誰子、葡萄菊脂唯我與爾、

勿嘲輕薄兒、重聽輕薄辭、結客塲中人若蟻、一言不亅車亦顛、何如散髮走道傍、生相憐死相擲、唯有青蠅

合投袂起、左顧提擲博局盤、右眄反擊金斗尾縱横倓爲吊客、不如生前只銜杯、死後術珠復何益、心上七

忽批人頭、人頭突門門植齒、輕薄兒誰敢當、鯫生齷|竅北斗星、腹中一藏沃焦石、斗可醉酒石消酒、今日

齪良可鄙、萬言盈紙不直錢、區區欲藏名山裡、 不飲良可惜、好是携妓遊東山、莫惜一雙金齒屐、

松鶴壽歌賀逆光上人五十初度上人即親鸞氏之徒醉華胥賓、小醉葛天民、唐虞雖酢餘、熙熙若陽春、

也

陽春熙熙朝天去、渺茫之鳥尻爲輪、俛見黃河入海碧、

松鶴壽、高堂歌舞飲君酒、君家天台石橋畔、青松白鶴|細於銀瓶噴溜涓涓瀉、又見群仙集蓬萊、小於浮蟻翁

結爲友、控鶴飛度海上山、琪樹瑤草携滿手、松根茯

琪樹瑤草携手、松根茯苓 翁白、試從支機石邊過、千丈萬丈生五色、五色石五

勸君日日須縱飲、玉壺青絲髒金堂、君不見飛黃亦蹶

草莝豆辱仇使、皓腕柔爪搔背痒、黃口豁唇咒癰痔、

何知明日非、只知今日是、

葡萄熟菊脂黃、凄凄風雨近重陽、開甕撲鼻烟霞氣、

忍使湘垂涎長、湘江之水空在、靈均骨化色如霜、

山何奇絕十五已充羽林兵、十八便歌出塞行、天子賜我瘞骨地、
天子遣我絕脈城、三十腰間金印黃、錦袍赫奕照路傍、
今日隔下身瀕死、紫髯赤髭盡成霜、憶昔出師蕭關道、
金天秋隼擊寒草、丈八蛇矛六鈞弓、邊兵百萬淨如掃、
朝取一營暮一壘、旗鼓森嚴肅千里、于闐花驄三尋躍、
氷海枯鮫三尺是、爰喪其馬飛狐北、晚暮蒼茫求不得、
前軍失利半氷折、掘盡沙鼠飲馬血、單于乘虛復來即、
陳雲一團晝如墨、戍樓大雪連堞高、士卒墮指命如毛、
將軍一呼長風起、奇兵突出若波濤、亂箭飛矢紛於雨、
單于如鳥忽遁逃、既危復安盖有神、皆道將軍勇且仁、
帳下椎牛供壯士、河上投醪飲萬人、捷書還奏建章宮、
宮前花木生春風、公卿舉觴賀天子、殊恩自誇麟閣功、
爾來昇平五十年、北邊寂寞絕塵烟、抵今天子盛好文、
老將行
鴻門高、高且雄、天曆數、指顧中、謀臣不語目屢動、
劒舞雙雙鬪白虹、屠兒一入四座傾、卮酒彘肩腥風生、
君不見俎上之肉飛生翼、却望天際成五色、
鴻門高
一旦翻去如脫屣、獨留篆印照案頭、清揚婉不違顏咫、

行矣琵琶湖上半輪月、印出兩人一片氷心是、

勿嘲輕薄兒、再聽輕薄僻、我能噓枯作紅紫、我能變

鼠作虎兕、是故九卿結我襪、是故八公奉我机、分有

强項案令拜、客有駢脅薄立視、羅幞繡帷笑跛客、惡

其 二

勿嘲輕薄兒、請聽輕薄僻、妍好豪奢天所縱、甚口大

腹且于思、出入常騎大宛馬、猩紅錦袍光陸離、渭北

花滿春晝永、飛鷹鬪鷄歸每遲、男尚公主女奉天子、

田園第宅連戚里、七貴五侯皆昆季、金張結昏妹與姊、

賞賜春秋大大萬、木難珊瑚雜文綺、黄金千鎰市駿骨、

明珠百斛傾妖妓、彫楹垂垂結流蘇、階砌離離種桃李、

孔翠鵁鶄翔其間、寶石名卉環池水、池水暖拍沙棠舟、

中貯九花春醞美、易牙日夜鳴鍪刀、勺取瓊醬調甘旨、

紅肥紫薑水晶鹽、熊蹯牛心白玉匕、趙女歌燕姬舞、

管絃嘈嘈熱人耳、髣侍坐隅佐談笑″杯行怱遲無究已、

更闌客散銀燭滅´羅襦襟解氣洒、此時痛飲應無數、

只知生樂何知死、

輕薄篇三章

白面書生致青雲、七十餘創無人問、七十餘戰有誰聞、

有時聚米談舊事、旁人指目笑紛紛、已矣哉眼前葡萄

唯爛醉、身後薏苡何足云、

三七〇

朝磨鏡夕磨鏡、少嬌十五十六時、磨來磨去如明月、

云影揚蛾每相持、一星呱呱啼著膝、如雲龔髪忽變衰

昨日生一白、今日垂一絲、桃李春色不復有、芙蓉霜

下難自守、昔日寶鏡使妾妍、今日寶獍使妾醜、鏡兮

鏡兮何無情、明月不暈獨自壽、噫嘻鏡乎何得知、妾

老婦嘆鏡

高僧手披駿馬圖、高僧口淦駿馬詩、駿馬軒然座隅立、

觀者寒生愕且疑、身長八尺矯於龍、屹若秋色生孤峯、

胡雛控出拂其鬣、落落長風吹喬松、錦衣少年玉面

如月雕弓撚銀箭、自矜騎戰功絕倫、呜珂欲朝未央殿

渭橋東南蹈殘雪、流水芳草堪嚕嘟″數聲驕嘶楊柳

一汗淋漓桃花血、目中千里雲崔嵬、蹄間三尋電滅沒、

忽疑西極馱經臻、猶憶北庭著鞭折、不唯良工盡逼真、

又是高僧詩入神、今日詩書爭神駿、知爾支遁是後身、

世上黃金撐北斗、嘆息無復市骨人、君不見傅嵓下磻

溪前、夢卜寥寥草如烟、我願明王御此馬、春風日日

問遺賢、

逆光精舍觀少年騎馬圖引、同密上人賦、

忽覩風雨集袈裟、隔岸之人小如蟻、喜公粲然顧余笑、

浮雲聚散何挂齒´此去欲探嚏龍奪取明珠皈爾、

洞明師洞明師、少壯飛錫好探奇、蹈遍日本名山水、

千里萬里不知疲、天目寒雲生白足、芙蓉晴雪射雙眉、

發東關暮西海、空翠襲衣畫淋漓、師旣奇骨多奇思、

能刻印作奇字、萬物靄然指爪端、得之山水之幽致、

烏跡科斗非關筆、

斗非關筆、鐵筋玉箸不綠漆、全牛忽向刀間解、

-雕龍或疑鉢底出、精技應似郢人斤、微旨蚤入周史室

自誇印法妙絕倫、剃敞不肯示俗人、歸來秘藏蘇山裡、

青松白石淨掃塵、蘇山之下有狂生、散髮倜儻意氣淸、

與師異業同臭味、相見肝膽忽相傾、惠我一顆稱知音、

笑道是物印佛心、佛心印我豈敢、知師中情愛我深、

我亦家有文章印、窺周漢鵠數仭、腐肓史欲比肩、

笑殺魏晋收餘燼、師乎師乎眞大士、我願綳交爲季、

佛心印文章印、彼此相貿我與爾、師云桑下難三宿、

洞明師將遊琵琶湖、留其所鐫篆印一顆見貽、

因賦此贈別、

石勢稜稜雪槎牙、錯落寒梅着數花、一熙颯爽立其上、

掉頭欲下烟水涯 銜青幛生夕紫、滿堂賓客盡高士、

對此神駿誰敢當、垂天大翼亦徒爾、

田元章宅集飲觀徧王梅

之妍醜徒自取、

玉山先生詩集卷之一

悠然詠風凉、秋屨貪秋景、柿栗殷微霜、

翩然臨寒壑、崩雪松色蒼、四序耽佳興、張亦何妨、

余也唯存拙、資性愚而狂、榮子猶然笑、智不效一、

交遊容倚玉、臭味不徹薑、匠氏制大厦、由來要棟梁、

伯樂過冀野、何當拔駿良、欵段飫蒭豆、鴳控偷枋、

爲君裁長句、沈金且彷徨、

裹其糧、

翠、搖木落山聚星皆賢俊 桿芳、

冠者將童子、輔輯麗門楊柳春靑靑、關開黃鳥啼花裡、今日何日別喜公、

一擊扶搖九萬里、海上日月跳雙丸、天際數峯如攢指、

麗門別喜公

君不見大阿羅漢骨相奇、展圖烟霧飛出篋、忽靚嶽嶽

梁間語、巉嵓欸摧赤脚躡、一尊寶龕盛佛牙、光如明

月夜煒燁、深目一尊喝懶龍、俄頃風雨生鱗鬣、侍者

俺搔一鋒痒、快心盎背達眉睫、兩尊持咒焚妙香、金

色梵篆爛貝葉、獅子象虎吼跳梁、夜叉羅剎來服帖、

十有六尊森玉立、翠氛撲壁峰巒、乃欲西去朝法王、

騰身海雲無舟楫、鐵鉢金策瑠琍瓶、群神扶持翔若蝶、

五天蒼茫風濤驕、靈鷲之山呼可接、秋生軀不盈七尺、

健筆與之爭雄捷、天際盈盈無熟地、余亦褰裳欲徑涉、

揮筆長風拂長髯、目送飛鳥彈銀鍓、

觀十六羅漢圖引

七言古詩

著

校福 清

子門人

羽

高光子

辛 黑

綠耳蹙蘭筋´玄崔乖菊裳、百里難展足、九霄本翺翔
嗟君何卓爾´韜晦在林岡、杉竹掩虗牖、衡門聊徜徉、
樂饑有藜攁 何必河之魴、負郭田二頃、終歲書一牀、
抱髡汲流水、持斧伐遠揚、晏如無儋石、先哲相頑、
哂彼崇臺榭〝安坐前膏粱、古處知所畏、人祥天不祥
定省竭孝養、高堂壽且康、甘旨必先饌、餌必先甞、
如賓敬冀缺、舉案有孟光、鴨鳩均七子、芝蘭繞一堂、
十月東壁中*霜氣一何冽、嗷々孤鴈翔、凄々卉木折、
美彼洞房女、感念中腸結、容華日消損、音信日疎絕、
君子從徭役、中野觸風雪、風雪剝人膚、征衣恐裂、
非妾誰改造、非妾誰補綴、感此拭清碣、遙夕慘遠別、
雙杵落參差、光燈亦明滅、素手犯嚴寒、皓腕力盡竭、
豈不憚疲勞、欲慰君飢渴、所貴純素色、比妾志操潔、
請君昭妾心、終始執高節、緘封附行人、欲言泣嗚咽、
妾心不易隃、淚盡繼以血、砥恐山川阻、中路芬芳泄、
韓體一首、贈藪震華、

唔語知何先、未幾東方白、告別慨興嘆´此恨苦如蘗、

如何爲夫婦、草卒如賓客、此生不得意、喜悲須臾易、

來時欲水減、去時欲水積、積水緩歸期、幸免上帝赫、

擣素

三六七

維昔國初日、群雄爪牙張、厥祖力如虎、長嘯得壇場、

羈旅爲藩客、永世貽孫謀、明信薦蘋藻、誠敬陳筥筐、

君之好儒術、於祖有烈光、長目炯千古、萬卷下五行、

揮翰抄其要〝秉燭提其綱、右軍讓瀟洒、左傳厭光洋、

病渴與論腐、並驅逐道傍、時發于所懷、盈紙粲成章、

洞庭兮空潤、韶鈞兮鏗鏘、蛟螭在制御、天地爲低昂、

東遊圖經歷、海嶠連天長、長鯨爲之駕、以尾擊蒼茫

浪沫一千里、日夜鳴雷狼、上崖行仗劍、雲木曉縹糊、

芙蓉寒眉睫、琵琶浣肺腸、飛步疾於鳥、電鞭驅行裝、

遂造東武府、庶富難悉詳、甲第何佳麗、冠盖非庸常、

鉅公六七作、蟬聯而雁行、牛門執牛耳一見愜夙望、

磊落二三子、旗鼓駭相當、西還誇壯觀、跌宕意氣揚、

豈料右武國、聞此鳴鳳凰、盖謂誰昔爾、國華實煒煌、

菊郡傳俎豆、蘇嶽產琳琅、斐然先聖國、屹在海一方、

萬里爲鄰並、風氣被鴻荒、盪摩生奇士、唇吻激馨香

舶上觀光者、逡巡讓雌黃、君曰何足道、一粒出大倉、

餘勇理方枝´墟落免天殤、有時會賓友、乘興奏笙簧

雖愛靑藜秋、何廢綠沉鎗、馳馬笑性癖、屠龍搔技痒、

箕裘業不 韜鉛策難忘、咫尺城聚米、百步射穿楊

此事君所陋、瑚璉期廟廊、所貴在節操、高潔若秋陽、

團坐攬羣秀˙峰峰競献奇、烟霞駐繡 繡栱、水石媚姿

衍公雖逝矣、典刑有義師、顧我嗒乎後、相惠以前綏、

紅塵與城郭、春草亂如絲、時人事蹋鞠、稻々不知疲、

揚々騎大馬、盡是賣珠兒、我性多鑿枘、與世動背馳、

!動背馳、

今辰集寶剎、同心吹壎箎、慈禽啼脩竹、

負郭十餘里´喜居篮輿迎、出郊展遠矚 稍覺遺塵纓、

遙峰舍餘雪、田疇靄新晴、靑黃錯若繡、野色接空平、

藉卓黃犢睡 隔竹春鳩聲、豈無伊呂業、深姜沮耕、

縈紆涉微逕、重疊顧高城、半道倒爾屣、相要下行、

連袂尋墟落、振策除榛荆、微々澗芳吐、灑々巖溜鳴、

幽崖紛碧草 重阜被緋英、昏到薛蘿宅、犬吠烟月明、

陳堂以野蔌´壺觴酌已傾、頹然各就寢、境高夢魂淸、

遠雞忽啁晰˙花影在簷楹、晨起湫寒齒、嵐翠解宿、

上東嶽、彩霞照西瀛、庭内環芳卉、泉石心匠成、

當日千嶂繞、搖翰萬象驚、留連竟三夕、何能割愛情、

瞻彼喬木烏、求友一何腰、隣伍來相贈、香芹碧玉、

已疑種祧客、復恐爛柯名、欲歸迷去路、谷口白雲生、

重過光明寺、時衍上人既逝矣、弟子義公供以杯

茶、

步、日暮到翁隱居、次宿而歸、

「織女不下機、牽牛不離宅、間以絳河水、常時盈脈々、

誰謂跂予望、從之難成跡、孟秋皓露降、凉飔及今夕

絳河淸見底、明徹不盈尺、乃知天上星、盡是河中石、

駕言不濡軌、女美可悦懌、女有機中錦、願郎服無斁、

織女篇

枯魚過河泣 出河数不神、我乃白龍子、魚脈游河濱、

一被豫且辱、逐喪騰雲身、委尾伏豆俎、翘首語庖人、

莫敢割我腹、我腹葬忠臣、

其 二

枯魚過河泣、出河難或躁、一旦誤呑釣、百載空術索、

世間乏子產、庖人多虛諾、寄言同隊侶、甘芳引鼎鑊、

牛涔本難容、車轍亦易涸、

鴐鴦不陸處、芙蓉不陸生、入宮忽見妬、受侮不可名、

蒼蠅能玷白´衆煦亦拔城、舊人如委土、新人如弟兄、

誰知新與舊、轉眄爲枯榮、枯榮何足道、恐損君子明、

其新信孔嘉、其舊豈無情、萓蒯苟代、庶昭金石貞、

枯魚過河泣二首

塘上行

驩然陳山簿、梧杓錯參差、豈謂非超凡、娯樂欲及時、

砥恐羲輪轉、虞淵不可追、

三六六

富春有高士、天子本匹儔、偃臥聊復爾、變動星辰愁、

長揖尚其事、風雲襲羊裘、人皆乘朱轂、我則隨白、

手有千尺線、五采盈目浮、衮職不須補、長此釣長流、

富春有高士

浮雲多變態、人事多是非、人事何足道、浮雲自在飛、

忽向空中诚、更傍石上微、出如抽繭緒、飄似脫錦機、

英々照彩翰、曳々爲白衣、間與老僧偶、孤與貧士依、

悠然看雲叟、此心與世違、

黃鵠有高志、一朝萬里翔、長風鳴金策、飄然辭故鄉、

鄉樹隱海霧、天末忽微茫、習靜怒濤裡片帆正飛揚、

乞食上孤島、聽鐘看夕陽、誓欲成覺道、不厭疲津梁、

看雲叟

黃雀何嘖々々雌與雄、禾黍錯若繡、啄々田疇東、

不願膏粱味、何戀世瑤宮、鵷雛雖文、詎能翼雀躬、

鴻鵠擧千里、我則甘下風、昔人玩我巢、其俗貴大同、

陵夷及戰國、欺詐日無窮、艾如張于野、爪鉤亦當空、

豈不懷怖懼、辟禍用誠衷、微物知有命、可游弆鷇中、

送義天師

凉氣衣襟、高歌念帝力、

野田黃雀行

天嚴何洞達、空濶石扇開、奇文縟霞壁、崖綠相廻、

此中銑陽燧´曠然反嬰孩、輕雲生巾舄、紅雪在莓苔、

斧氷漱寒齒、比之瓊液杯、一嘯虛牝應、萬靈紛下來、

垢氛漸超忽´簪纓心已灰、而我凌倒景、駕霍言裴回、

俯視人寰小、豈謂非仙才、誰復從我者、霄漢香妙哉、

丈水翁籃與見招、余行里餘、翁出迎半途、途同

三六五

共工戰不勝、奮怒觸不周、天傾地維折、漂漾若汎舟、

鼇足立四極、蘆灰塞滔流、奇哉女媧氏、煉石補天阪、

無乃其餘石、誤墮此牀頭、氣疑神物寓、勢接烟嵐幽、

關巨靈劈、還使一拳愁、忽見華嶽裂、叉訝蓬島、

拜應效米老、祀乃學留侯、孫楚何得漱、卞和猶未收、

半夜恐負走千里當臥遊、愛爾仁智樂、撫弄日可求、

蘇山天門巖、云是羽流鑽燈修道處、

丁卯春宿山家驛、館人有米癖、築介于亭、中貯

巨石三、形狀不凡、奇不可言、旁有衆怪石列峙

焉、因賦贈之、

桑拓炊烟起´葵藿日景傾、妻孥團欒坐、屋後眺山晴、

凉風來篁逕、使我煩襟淸、明朝冒草露、欲向東皐行

因盡餘杯寢、月下聽犢鳴、

田家雜

處世如匪澣、垢氛何能竭、兢遯靑蓮宇、以探白雲窟、

嵐翠間薜茘、登臨屐齒滑、鈴鐸空中鳴、風吹聲淸越、

芙蓉抱明月、荷葉凋嚴霜、君子困中野、懷玉脛無裳、

遺老在北海、美人在西方、天旣生良弼、世豈無明王、

我欲往從之、滄波渺無梁、傲~雲中雁、延頸徒悲傷、

訪衍上人臥病

探薪臨山北、種秫逼山西、山中經九世家業在鋤犁、

生兒六七歲、稍長與犢齊、驅犢往又返、荆榛路不迷、

樂此無餘願、酌醪屬老妻、笑彼飲水者、市朝病夏畦、

擬 古

西園屬淸夜´嘉賓良宴會、繁星綴鳴珮、輕雲承飛蓋、

芙蓉臨月池、芳柯環其外、鳳管流淸商、鸞觴汎沆瀣、

豐澤無不洽 優渥展敬愛、宗子實惟城、千秋得所、

山農詞

公讌擬陳思王

弱齡戀中林、棲遲香以深、白雲來庭際、英々覆鳴琴、

巖壑收陽彩、水木夕陰、技焉集好友、綢繆客賞心、

芙蓉灼柔翰、薛荔間重襟、况有芳菊酒、酌言發長吟、

世事勿復道、且坐聽秋禽、

九日諸公見過林亭

赤日忽西頹、徘徊淅川側、薰風波上來、霏微縠紋織

俯臨數潛鱗´仰視指歸翼、片月生中洲、斷山入瞑色、

水木相葱翠、埃鵲淨如拭、瞻彼虛舟況、優游知食息、

晚凉行樂至白河上

白馬如白龍、矯々洛陽陌、霜蹄何聯翩、月題亦赫奕、

馬上游俠兒、容顏如雪白、所思在功名、微軀何足惜

願得葬胡中、裹屍以馬革、言畢西北馳、萬里如咫尺、

身與飛雲俱、忽若流星激、交河跑層水、祁連蹈寒石、

腰間鄧師劍、縱横斬鐵幞、大屈金僕姑、精妙行且射、

一蹪名王顱、再蹴單于腑、三蹽胡無人、奔竄喪其魄

黃沙血楊波、白草盡變赤、信哉馬是龍、噴嘶風生磧、

歸奏天子前、千秋光竹帛、

川上看欲瞑、餘紅在屏巒、彎々初弦月、艷々媚暮寒、

岸遠行人小、村幽獨樹團、喚舟沙際立、秋水正漫々

白馬

琅函盛玉軸、金界浮寶筏、爾時見維摩、眄睞令人發、

病色削蒼崖、毫光叶素月、供我香積饈、甘芳淪髓骨、

百慮澹無波、一身坐超忽、生既爲蝶胥、死亦復梟沒、

所貴摩尼珠、微細耀毛髮、得之欲献難、何論楚人則、

晚 歸

三六四

大冶鑄我形、何殊爵與蚊、所受雖誠眇、襟衷獨不羣、

以指喻非指、喜怒一何紛、苟合靜躁定、坐可謁元君、

謦咳叩虛牝、毛竅激清芬、其將乘鸞蜜、海上蹈紫氛、

烟鳥棲江樹、微月欲上初、悠然與心會、力疾臨前除、
庭草藹達、映我牀頭書、隣兒纔垂髫、持竿事釣魚、
對此散愁寂、鳴鐘隔林疎、
其 四
園中桃李樹、風雨花參差、零落苍苔上、歷亂令人悲、
荏苒老將至、逼促焉得辭、四十强仕、奈何已覺衰、
病容驚明鏡、晨起未梳時、餘翠在簷隙、孤鶯欲囀遲、
慨玆幽蘭佩、因誰遺所思、
其 三
棲々衡門下´節變鳴倉庚、江草粉碧色、林木吐幽芳、
豈不欲行樂、抱疴在筐牀、呼妻撿藥物、稚子戲我傍、
良朋雖時至、詎能陳壺腹、三春爲流水、百歳徒悲傷、
寄言滔々者、努力及時光、
其 二
討論平生文、以欲垂不朽、趙孟語何偷、仲尼言禱久、
悠々任所遭、復奚疑夭壽、
三六三
蠢爾嘯鬼方、王師膽氣張、旌旆蔽日、劒戟森曉霜、
驅馬塞垣上、一麾威靈揚、烟塵淨如掃″獻凱悅漢皇

厮養亨茅土、妻孥嗟路旁、誰哉大樹下、塊然獨韜光、

澗中屏氛雜、衷情矖且間、靡々菖蒲草玉娟々水石間、

青霞來襟袖、煙蘿怡人顏、秋氣一以集、瑗鳥靜空山、

戀賞不能去、裴回若循環、而我同懷子、相贈以幽、

古游俠

同十騏子華遊江之道宅東澗中、分山水佳妙四字、

各得一字賦、

雨降灌未息、日出烟火然、武仲擲天下、兒戲何踼躚、

芬乎時爲帝、孰分愚與賢、萬言雖盈紙、微跡若蝸涎、

仲尼魯城北、軒皇豈神仙、神奇與臭腐、循環紛紜焉、

斯道不容辨、長酢勝大年、

海中有奇樹、乃在蓬壺顚、神露澤柯葉、朱蕤一何鮮

陽烏舒靈景、射波湧紫烟、鴻崇游其上、雲將欣逢天、

敢余餐其實、云是可延年、甘芳流齒頬、頓使容顏妍、

携之旋鄉里、輕裾擧隔躚、衆人嚇腐鼠、萬口啌真仙、

不如閟光彩、墨々守余玄、

瞻彼春草 平相國妓妓王失寵、而作也、

瞻彼春草、我心悲傷、秋氣一至、何草不黄、

瞻彼春草、我涕不止霜露一降、 何草不死、

瞻彼春草二章、章四句、 右風雅三首

杜若有華 在中將東遊、思故國、而作也、

杜若有華、思我妻孥、道路有遼、哀我征夫、

衣裳楚楚、妻孥縫之、道路悠々、征夫從之、

衣裳楚楚、經新作故、道路悠々、日遠鄉土、

杜若有華三章、章四句、

臨高臺 仁德帝登臺、望民應殷富、而作也、

臨彼高臺、高臺如雲、烟火千里、鷄鳴相聞、

臨彼高臺、瞻望祥氛、人烟千里、犬吠相聞、

臨彼高臺、瞻望無外、板屋鱗次、人烟靄靄、

臨高臺三章、章四句、

四 言

肥後 秋 儀 子羽著

辛黑光輔輯

門人

福 淸 子

玉山先生詩集卷之一

寢瘵掩敝廬〝抱影窺虛牖〟倏忽度冬春、紅芳萎榛莽

雖羸射亦間、造物遇我厚、行樂時命屨、幽蔭高柳、

今朝新雨餘、扶杖翦園韭、何必河之魴、聊足招良友、

病中雜詠六首

神龜非奇齡、靈椿豈大年、冥心襲氣母、鍊魄潛玄淵、

顏染瓊液、鮮膚澤絳泉、蟬聯容成輩、雁行洪崖肩、

蓬萊左提外、崐崙右挈前、澡身若木渚、唏髮扶桑巓、

言駕靑虬逝、一瞬周九天、

遊仙詩

五言古詩

陟彼商山、言采其芝、芝英燁々、可療我飢、山中無

虎、其路孔夷、虎滿于朝、陛階嶝巇、冠而利齒、孰

能觸之、芝兮芝兮、從女無知、

旨酒旣陳、熊蹯雞炙、胡不日湎、以永今夕、人壽幾

何、若駒過隙、夸父善走、嗟亦何益、鬼伯無時、起

於肘腋、累々者墳、孰分舜跖、瓊瑰粲々、曾不如石、

明者不疑、達者不设、以歌以逹、蟬蛻形跡、燕我良

朋、皓首勿易、

善哉行.

三六二

七言絕句百一首

卷之六

六言絕句三首

五言絕句百五首

卷之五

七言律詩八十二首

卷之四

六言律詩一首

五言排律三首

五言律詩八十首

卷 之

七言古詩四十一首

卷 之 二

五言古詩三十二首

四言古詩五首

卷 之

1

玉山先生詩集目錄

三六 一

高松侯侍讀 岡井孝先撰

寶曆甲戌歲夏五月

句摹字擬。自以爲翺翔開天之域。然千人如一。每篇雷同。其究必至老身長子。而

遂無發吾心竅。謂之唫咏性情可乎。夫李唐諸子。壹是皆修辭。而體裁人異。聲調

亦各不同。馳騁百氏。鑄陶千古。各成一家。豈必屑々然剽竊是務。而謂之修辭乎。

每後生有求於余。告之淳々不已。我友秋子羽世仕。細川侯。爲士大夫之矜式。才

氣甚高。博聞強識。其詩以迢乘爲志。不局促轅下。然遣辭温雅。韶令渢夕。唐音

哉。今夏侯命以子羽詩稿上于梓。曰玉山集。爲卷者六。子羽謁敘余。余不肯不能

重子羽之名。然子羽之名。豈待余重。故以余生平所持論。冠于卷首。嚮者子羽從

五馬歸肥也。握手相別。酒後耳熱。語及藝苑。高談雄辨°務排彼剽竊雷同爲詩者。

迺子羽之詩可知矣。

詩尙辭而已。苟辭之不嫺乎。方其結撰構思時。菀于臆。畜于念。已躑躅於燥吻。

未得流離於濡翰。或直情而徑言乎。俚言盈耳。鄙倍滿幅。急達意而忘温厚。二者

何足言詩。今世作者。往々專力修辭。摛藻綴華。彬々乎盛矣。而後生響附景逐。

玉 山 集 序

治世之音。大國之風。徵之古今。蓋聲詩之爲道。則然。然詩志也,志小。則區域

自晝。學局。則識量爲窄。拘々者與、何足與言詩,必也狂簡谬夕。稱古之人。然

後可以鳴其盛矣。積中發外。是唯在其人。則爲不易遇爾。余既與熊本秋文學子羽

驩焉。稍益親。則知其爲人。磊落不屑一世。斯集也文學之詩。而其徒所爲輯。

將行世。余乃得與寓目焉。其詩豁達而有法。亦若其人。夫昭代升平。百有餘年。

海内歌詠。莫非雍和之音固也。熊本封畛於肥。肥大國也。宏器輩出。相鼓而鳴。

莫非怏々之風。亦固也。况今其君好學。文學相輔。唱之則杞梓巨材。大國所出。

波及海内。是文學爲職。固任其責。他邦亦來取法。庶幾從斯始。若夫學識遠大。

具於文章雜著者。雖竢之嗣出。既乃推類可知。姑且爲序。敢贊盛事云爾。

寶曆甲戌之春

平安 服 元喬

唯古今異宜、彼此殊俗、故今不必執泥也、置集愆

册、

古城貞吉 校

藩 國學教授臣秋儀謹撰

毀汗作踐者有責、初犯紀錄、再犯密從繩愆廳究治、

尚猶不悛者、同人鳴鼓攻之、即時放遣、永不齒君子 公造士之美意焉、則風動於泮宮之間、而草偃於閭閻

之林、古者桓楚二物、以收其威、明制用竹館痛决、 之下矣、諸生其勉旃、

學非經明、質乏行修、雖有一日之長、未必賢於諸生、

其負乘豈不自恥於心哉、蓋聞一知十、固所罕觀、

人百己千、或可跂及、臣儀 冀與諸生俱永,守之、

經學相難、不敢失墜、諸生亦宜時習匪懈、日新可

畏、各言爾志、有起予者、以副我

亂抽、烟器茶甌敢致紛糅者、又異色閒雜人等不許

輒入、又不許酗酒狂歌、臧否人物、及爲謠藝戲慢

之談、若其在館生員、不遵學規、乖戾禮法、

右十有三、臣儀 承乏敢官、奉 命議定者、臣 儀

、

一凡各齋務整飭、常加潔淨、不許几席從橫、書帙

也、置東西之兩榭、

一凡生員離堂、若同人莫夜來往者、人給牌一面、牌上

輟也、兼科者升班一等、若二等、虛曠一月、若二

月、降其班、過之削其籍、不敢齒列、益一出焉一

入焉、塗巷之人也、但疾病事故、不在此限、古三

年通一經、不通者移學易習、以觀有變、俟之之道」

也、至九年學不變、業不成者罷歸、雖過年限、才近

成立者、又聽留學卒業、立考課之法、

一詩心聲也、易於動物、交道輿也、寫出恭入敬四字、門吏驗之、以通出入、無者不許

輒出入、置出恭入敬之牌、

一凡諸生肄業者、詳記其姓名鄉里年庚、入學歲月、

及每日所講、所誦、所借覽書目、若坐班虛喘等事、

以備他日積分通考、置通知、勘合、講誦、供書之

四簿、

時試歲課、等其藝業、而進退之 所以督勤惰、驗作

三五八

可行諸遠、興觀

群怨之用、經國不朽之典、非斯二者、君子之業、

將何以傳後世哉、雖游夏之徒、蓋亦學焉、而後善

之、呪後生乎、立礪詩論文之會一館之左右設射圃馬埒、及講武按藝之所、弓馬劍槍

諸技之士、皆造焉、傳日有文事者、必有武備、言

不可偏廢一書須背誦、誦須華音、否則四聲不明、同訓相混、字

位或易、語助或脫、不足以供文辭之用、和語之陋

也、故書必背誦、誦必華音、而齊楚合焉、彼此一

孝謙天皇天平寶字元年四月、詔天下家藏孝經一本、

後漢光武時、建學官、置孝經師一人、亦皆務本之

義、慎敢之所由立也、因分童子先受孝經、朝播暮

從事於斯、以爲學問之本領、則邪辟之心、莫

自而入、而培養之道成矣、立孝經之師、

一大學之道、主於養老、歷代明主、養三老五更、勸

孝弟力田、皆所以誨民孝道也、一孝立焉、百行选

之、故吾東邦

一擇善爲容者、訓顓幼以定省視鱔、及灑掃應對、坐

立進止等之儀、皆須諄々然、尊守毋失焉、幼成如

天性、習慣如自然、即爲學之基、自卑升高之道也、

立幼儀之師、

書、稍長、要依古名法帖、歐虞顏柳、唯其所好、

務要机案整齊、筆硯潔淨、點畫撇捺、必須端楷、

每月三次、寫做一幅、就於先生處呈改、以圈改少爲

珉、若或衣裾淋漓、室壁塗污、有致狼藉者究治、

立習書之帥、

三五七

一記曰、比年入學、中年考校、一年視離經辨志、三

年視敬業樂群、五年視博習親師、七年視論學取友、

謂之小成、九年知類通達、强立而不反、謂之大成、

盖不考不視、將怠而玩、玩斯弛、弛斯厭、厭斯廢、

廢斯落、豈能有殖乎、是學之大患也、故日看月考、

焉 是處之莊嶽之間之術也、立漢語之師、

一諸生之業、嚴立課程、孝經論語一科、詩書易一科、

春秋三傳一科、二禮二戴記一科、是爲正業、雖主

古義、不廢新註、彼此參考、必歸至當而止、每歲

輪會、終而復始、宜如循環、而其執業也、有會講、

復講、有背誦、有獨看、會講致其討論、復講致

其厭飫、背誦致其決洽、獨看致其靜一下皆一課也、

每會有訓道一人、誘掖後生、催督工程、日夕更番、

無間缺、而其疑義未審者、必質諸教授先生、得講

詳明白、而始休矣、優哉游哉、漸之摩之、於是乎

玉石相攻、蓬麻相直、朝乾夕惕、日就月將、至於

微諸言行、而有補於政治矣、然後旁及史子百家、

凡歴代治亂、地理沿革、文物制度、樂律書算、皆

習貫無違、通古達今、舍短取長、庶免博而寡要之

譏焉、立會講背誦之日期、

公命、敢定科條、榜諸楣間、以示諸生、若其禮樂之一擇筆論精熟者
、誨蒙穉以把筆法、 及千文急就章等

命宗室一人、爲國子總敢、提調學政、專制黜陟、

所以重國學也、且設俘經堂、置敢授及訓道官、

掖後生、典籍有藏、廩餼有給、群居稽古、相觀而

善、藏修息游、豫時孫摩、絃誦於斯、揖讓於斯、

又從而涵泳於斯、使其耳目不觸異物、而遷焉、所

以敦人倫育英才、而供國之用也、越二月吉辰、我

公命駕臨視、躬建首善、於是乎、子弟入館者、靡

然悅服、各思成厥業、以答國恩、豈不濟々乎盛矣

哉、古之教者、虞日米廩、夏日校、殷日序、周日

庠、皆鄉學也、而學則三代共之、蓋虞商貴在郊、以

遠斯集市紛之劇、夏周貴在國、以惇禮樂教化之原、

今也中國設斯館、以從來學之矣、其敢則文行忠

信、其書詩書易春秋三禮、其事則禮樂射御書數、

聖邈矣、方策具存、由此求之乎、則應亦可以

弗畔矣夫、謹奉

一擇經義疏通者、每月以三八日、講說於曽經堂、

須歛襟正坐、從容教諭、主以孝弟忠信、隆師親友

之說、務在紀綱秩然、足爲矜式、而其赴堂坐班者、

少長必順、尊卑必序、亦須誠心聽受、毋得傲慢喧

聒、有乖禮法、違者有罰、立講說之師、

一擇音義詳明者、以分授子弟句讀、凡子弟受句讀者、

以赴館早晩、爲之先後、先授孝經論語、次及五經

諸書、皆須謹愼聽受、進退安詳、毋有劇談大笑、聒

於旁聽、讀書之法、要眼到口到心到、而逐句逐讀

語音朗然、平上去入、四聲不差、焉哉乎也、一字

不漏、務至於背誦不躓、則名爲三到矣、於是知慧

稍開、始可施講解也、迺授六德六行等目】二則、

若歷史中孝親忠君友于等故事一二條、使彼油然喜

躍、染若丹靑、先入爲主、不可復渝、而以為善誘

之地矣、若或唔咿含糊、欠伸厭倦、起席下堂、舉止

草率、履舃亂錯者有罰、其爲之師者、亦須要整飾

威儀、表率後進、不可尸位素餐、因生怠惰、立句

讀之師、

春、我

公新興學館、扁日時習、令國之子弟、肄業於其中、

化則俟後之君子云爾、

維寶曆五年乙亥古城貞吉

校

弗殊先儒謂上帝即天帝或謂五帝惽特酒 公侯祀百辟自卿以下不

過其族 蔟族

夫鬼神之所及非其族類則紹其同位是故天子祀上帝

上帝往士 聖王尊崇之

之士二祀

生萬倍

春秋竈姓張名禪字子郭一名隗夫人名

禮三本日郊止天子社止諸侯道及士大夫 祥記貶酸 說苑

日大夫祭五祀士祭門戶庶人祭其先祖祭法日大夫立三

祀日族厲曰門曰行適士立二祀曰門日行庶士庶人立一

祀或立戶或立竈 五經異義曰竈神姓蘇名吉利夫人姓王名摶頭或云

猶道

中霤五祀 無行襲此明 士庶人祖考而已

白虎通有井

曲禮日大夫祭五祀歲徧士祭其先1 楚語日卿大夫祀

其禮 汪 士庶人不過其祖J赶漢書日大夫祭門戶井竈

主南叉設盛于俎祭肉腎一脾再其 其他皆如祀門之禮

主、之殿祀門之禮 北面 主尸門左樞乃制 肝及肺心爲俎 奠于主南叉

有自如 祭竈之 在門外之 西 厚二 寸廣五尺輪

面設由于軷上乃制腎及脾爲俎奠于

於竈陘乃制肺及心 肝爲俎奠于主西叉設盛于俎

既祭徹 之一

祭祭肺心肝各

尺盛祭亦席

設如先

黍三治月張日豬獺祭士喪禮記曰乃行禱于五祀 註五祀博言

傳

日三五五

王制祭中

饌設徹禮俎主祀

之奥

于竈于

一干在陳中

肉脾

證皆三 祭以禮有

竈設

祭肉心肺

小廟之儀祀月之禮南面

于俎西祭黍 稷

主

有

俎 西祭黍稷祭内祭醴皆 嘗家於

主戸祭

又日霤之禮設

黍

祭五祀

設祭祭祀

王制曰大夫祭五

王

五

所孟月以

雙前俎 大

立祀

之祭 依嘗!

故國夏

夏之祭 重於禘嘗 2嚓购大顗衛是也苟以痛常以夏称常眷則何

故曰莫杰的禘陽義也嘗杰陰義也禘者陽之盛也嘗者陰之盛也|私也忌日方有服則輕矣

祭統日凡祭有四時春祭日約夏祭日禘秋祭日邃嘗冬祭日

麻其

之享歟

已未有無飲者 禮雖服衰

家之忌也故不敢飲子順註禮忌日不樂而

註謂四時之祭按春饗缔而

日飲也

日嘗碲杰享1杰在祭比立享献物也

國語福爲春祭也

子從之

嘗明亦

食耆老其義一也期祂版面下郊

叔弓

之叔父

蠍子

日

則不磅禘則不

以周官祠魯在東方王東巡守以存或

殷祭 名

謂

夏

祭

公耳

子 周疏韭日豐本鹽日鹹鹺玉曰嘉玉幣量幣

之

禮代

忌

必諦陰陽陰下有尊卑之義也

六

季日

位夏爲孟夏樂書曰禘

或

堂六月廟于周公

明也祭締

諦大日

名

所禮一值一祫祫即

甞

禁之名

於也時統按

!正 名而卷

日 上於夏祭笃時

夏六之夏祭

是

三五四

献雉曰疏趾兎曰明視晡臼尹祭燊魚日商祭鮮魚日祭

水日清滌酒日清酌黍日獵合梁I薌箕稷日明粢稻日嘉

曰以祠春享先王以綸夏享先王以嘗秋享先王以烝

冬享先王爾雅公羊傳皆日春祭日祠夏祭日禴秋祭曰嘗

冬祭日烝詩日約祠烝嘗 0罐 明堂位日夏初秋嘗冬烝杯

傩黐賭砗蓟鰣賍砘惓髌赒砟鰔襕贬矼踋岵 祭義日春禘秋嘗禘

有樂而嘗無樂郊特牲曰饗禘有樂而食甞無樂陰陽之義

也春禘而秋宜春孤子秋大竹祭王同

四廟書耳制輪

以六年侯以烝

日忌 月周粑詔又月曰夏締魯大禘祭是也禘盖日

六與夏的

以祭月異

月夏同之月大以以亂為二月甲子亡

祭義曰君子有終身之喪忌日之謂也 ♂鐗與死日胴干支之

|四I是也世俗說會故議之一

後世以呷子冋忌日不立二月忌日不用非不祥也言夫日志有所

|至而不敢盡其私也又日忌日必哀稱諱如見親

檀弓日君子有終身之憂而無一期之患故忌日不樂

春秋左氏傳日魯昭公三年五月叔弓 双如滕葬滕成公

子服椒 灯觚 爲介及郊遇懿伯之忌

懿伯惠伯 敬子不入 “也敬弓

禮椒

惠伯日公事有公無私忌 椒請先入乃先受館敬

口嘗夏祭曰禘冬祭 祭法曰享嘗乃止 孔叢子日季節見於子順子順賜之酒辭問其故對日今日

見於君及先生與之梁肉無辭所以敬尊長而不敢

依碲禮故或

【於是乎烝灬嘗嘗祀言之

禮故

嘗攤 牲告備于天子

及設 會饌北略又如 曰天子諸侯宗廟之祭春日內夏日褅秋曰嘗冬日烝及野鹤姐奠于主北 双季盛

·筵前迎尸如肉南乃祭面肝制醴設各心西更奠乃陳于再制鼎旣脾俎北竈在廟門 外之東祀識之禮

三五三

者也是故君子非有大事也非有恭敬也則不齊不齊則於

夫婦人某氏三月廟見則稱某氏未婦 又日凡祭宗廟之禮牛日

物無防也耆欲無止也及其將齊也防其邪物訖其耆欲耳｜一元大武豖日剛鬣豚日肥羊日柔毛鶏日翰音犬日羹

其祭者自稱曰孝孫孝子夫於妻日乃妻於

妣日

曲禮日祭王父曰皇祖考王母日皇祖妣父日皇考母日皇

按卑祭尊日

皇尊臨卑曲禮日齊者不樂不弔

食玉

齊 戒

知齊魯之嘗拉皆用乙亥也

祝 號

曰王日一舉王齊日三舉

一月乙亥嘗于大公之廟則

於是更筮旬有一日是所以心兩擧丁亥也艾按春 大鸛州三十八钾團｜論語日齊必有明衣布也齋必變食居必遷坐訊數周官

秋襄公二十八年傳

配於陰辰

少牢及此銘

此諸文觀之則天子諸侯齊有三日者

公以下 多

太史謁之天子曰某日立春天子乃由

【禮上日

祭大廟

徒三

先與有 Éº 睥鉠衛孔悝之鼎銘日六月丁亥公假于

臥衛孔悝之鼎銘日六月丁亥公假于 郊特牲日齊之玄也以陰幽思也故君子三日齊必見其所

·亥鄭註丁未必亥也直舉一日以言之耳褅于大

失之

日矣不如少牢大夫

外七日

主居也辛之言新也

可暇不疏

侃

寧日乃

儀禮日少牢饋食之禮日用丁巳衆旬有一日

處記

路寢中三

祭前

必先諏此

其志意思其所樂思其所嗜齊三日乃見其所爲齊者

日此

適內

卜常祀而卜其牲日

人君路護在

不」祭義曰致齊於內散齊於外齊之日思其居處思其笑語思

日

以正月下辛卜二月上辛若不從制以二月下摔下三朝上左傳日禮辛若不從則止郊特牲日郊之用辛也周之始郊日以至

事先近日卜筮不過三公羊傳曰三卜禮也四卜非禮也三又曰君致齊於外夫人致齊於內然後會於大廟 飯團體老

卜何以禮四卜何以非禮求吉之道三 辛拉正用上辛若不從则蝁阳两

穀梁傳曰魯以十二月下 八正寢在

.甲三日又曰先庚三日後庚三日蓋甲庚前後必得

-夏六月辛己 有事

零後日宣

公烝月

治兵納煇際和他國之大事在兒輿我故必

開莊公八年正

是 內事以柔日 後[公八年春正月己卯

2⺝己卯季夏五月丁形不聽樂故記日齊者不樂言不敢散其志也心不苟慮必依

年八月丁 卯大事于大廟又

公三十五年秋七月 上辛大雾季辛又需 哀公元年夏四月辛 已郊據儀禮於道手足不苟動必依於禮是故君子之齊也導致其精明

日唯坦丁巳则用辛或乙可也必擇丁诺辛者易阳先钾、 凡卜筮日-之德也故散齊七日以定之致齊三日以齊之定之之謂齊

旬之外日遠某日旬之内日近某日喪事先遠日吉齊者精明之至也然後可以交於神明也

職取藝自自變改之義打之這打也又日特牲饋食之禮不識日到事暇可以向不剧期室王肅促造家語以内倉内寢適曰者非非疾也不

士處適寢疾者齊養者皆齊鄭玄註適寝者不

亥辛亥亦用之無則苟

者又曰三日齊一日用之猶恐不敬 諸侯遷廟禮王君前日齊月令日先立春三日

夫日皇牌生日父日母日妻死日考日妣日嬪 蹤裨際韓咀

祭統日及時將祭君子乃齊齊之爲言齊也齊不齊以致齊

變食王府職日王

曲禮無等

月也大自諸侯以下至

伯嘅禱叉日

飲烝

王制曰庶羞不踰性虧 香耇不徒食按庶人都老羹食而已又日美食

: 内則日大夫燕食有無脯有脯無膾士不貳羹越 時日

之樂以迎來哀以送往

家於是乎嘗祀

不可以不備虛中以治之宮室既修墻屋既設百物既備夫| 天道禘秋嘗霜露既降君子履之必有忧惕之心如將見

婦齋戒沐浴盛服奉承而進之

祭義曰孝子將祭祀必有齊莊之心以慮事以具服物以修|祭義日祭不欲數數則煩煩則不敬祭不欲疏疏則怠怠則

宮室以治百事又曰孝子將祭慮事不可以不豫比時具物 忠 松雕鄗眼觀墭石瓦茲四着財多不對更不葛

公羊傳曰丞則讀讀則不敬君子之祭也敬而不鬚 是故君子合諸

群神孟子曰犧牲不成粢盛不絜衣服不備不敢以祭

入室烝嘗 孟隆治汨是

備不可以祭有同一人不備其職不可以祭

又曰宮室不美也非享味也

云有田者既祭叉薦新祭以直瞞纛以中⺝ 楚語日古者晏子春秋日天子以下至休註公羊云祭必

楚語曰求備物不求豐大又日不羞珍異不陳庶侈

祭期

禮器日祭祀不祈不麾蚤不樂葆大不善嘉事性不及肥大| 也今之祭者不首其義故誣於祭也

薦不美多品

徒有庶子祭者以此若義

孝子以其 稱也

郊特牲日祭稱孝孫身沒而已子游孔子曰禮與其奢也寧儉禮

倣 宗子死

孝

一

又日不歸肉其辭於賓日宗兄宗廟宗子在他國便辭 若宗子死告於墓

古者有祭墓之禮故

算今年一大夫葬以士祭以大夫

不厭祭不显不假不綏祭不配布奠於賓賓奠而不舉

大夫祭以士父爲士子爲

孔子曰望墓而爲壇以時祭 喀青田教孔某働】于某執斯常事攝主

生者 帥

曲禮日支子不祭祭必告于宗子曾子問日宗子去在他國

夫子王制曰自天子達爲士葬助 |

祭 法

中庸日父爲大

曲禮日牲死則埋之

三五二

於庶人 喪從死者祭從庶子無而居者可以祭乎孔子日祭哉請問其祭如之何

祭用數之仂 之數用其他歲程用 又日祭豐 年不奢凶 年不 而后祭於家結楮唏礤孋乾猪 人職云祭墓爲片

數字 稱名不言明祭也又日凶年祀以下牲

之穀梁傳日祭者薦其時也薦其敬也 際嘅註哮好之轉堿也薦其

設不可以祭衣服不脩不可以祭車馬器械不

士皆祭以首時 視訊頌轇禮記正義何

之猛明豬澂淇現新物之明他抓支裝批註

先王日祭月

享時類歲祀諸侯舍日卿大夫舍月鮬懅士庶人舍時帶動

日月會于龍龍眼她日月合辰淤泥

I孟 日在尾 土氣收天明昌作百

嘉備舍 百穀盡

也

頻行 衛瓛 國於是乎於庶人

日外事以剛日鄧事繡揮旅沺帶池詩白咕沿維成嘅吉日庚午既差我馬春秋桓公六年秋八月壬午大

三五一

免之

求神非一處

~有疲者左傳日日日牲

事之牛

終日香雪福於鬼神祈求福之牛也鄭支

求成

穀梁傳日免牲者爲之緇衣裳有司玄端奉送至于南郊

卒

内則曰子弟若富則具二牲献其賢者於宗子夫婦齊而

哭大

事

皆少牢(

鄭司農

哭羊

云员

I上太羊豕 孔疏是天子太夫士也

曲禮日大夫以 索 牛 綻抵禦譟嗎炸豬粨鈮尅啜椅士以 | 宗敬焉終事而后後私祭

注云求得而用之日家 襄公二年

又日大夫有羊饋士有豚犬之奠庶人有魚炙之薦籩豆脯 上牲祭於宗子之家祝曰孝子某爲介子某薦其常事

醢則上下共之

曾子問日宗子爲士庶子爲大夫其祭也如之何孔子曰以

故不

按月令中春天子鮮羔開氷先薦寢廟季春薦鮪于寢廟

孟夏天子以彘嘗麥先薦寢廟中夏以雛嘗黍羞以含桃

先薦寢廟孟秋天子嘗新先薦寢廟仲秋以犬嘗麻先薦

寢廟季秋以大嘗稻先薦寢廟季冬天子嘗魚先薦寢廟

內則日春宜羔膳膏薌夏宜腒膳膏

天子

王制舉以 特牲祀以少牢

士無故不殺大家庶人無

王制曰大夫無故不殺羊

諸侯之大夫唯褱祭得用牛四命孤痌

與天子之大夫同四時廟祭得用索牛

士食魚炙祀以特性庶人食菜祀以魚

楚語日祀加於舉 月月半之盛饌也

牲 物

又日大夫士去國祭器不踰竟大夫寓祭器於大夫十寓祭 以魚紆黍以豚天子稻以雁

器於士 竟音境

麥

王制曰庶人春薦非夏薦麥秋薦黍冬薦稻韭以卵紆反

於既特羊殷以少牢足以共祀

語曰官宰食

叻當伐加國

征家臣邑宰之田日加

曲禮日問大夫之富用羊豚

祭用羊無

禮用孔氏

也

王制曰此謂四命大夫也

無祿者稷饋

祭器可假祭

先爲祭服服宜

設祭器有田錄曲禮日凡家造祭器爲先犧賦爲次養器爲後無田祿者不 曾子天圓日大夫之祭牲羊日少牢士之祭牲特豕日饋食

者大夫祭器不假祭器未成不造燕器 周霞 四命受器

禮運日大夫且官祭器不假聲樂皆具非禮器曰羔豚而祭百官皆足礙無地大夫七薦羔豚也按大夫士有田

鄭註士薦牲用特大+ 玉田薦日有宰食力祭器衣服不假

加周禮云唯加田無國

左氏傳曰鄭公孫黑肱有疾召室老宗人使黜宮薄祭祭以

豕日祭 服歃 則焚之祭器敝則 埋之君子雖貧不粥祭器 周官曰凡庶民不畜者祭無性不耕者祭無盛

雖寒不衣祭服 爛暗育衣

曰庶羞不踰牲是也 卿擧以少牢祀以特

大夫夫之虞也崇

·蠢則不祭牲殺器皿衣服不備不敢以祭則不敢以宴

祭無牲日薦

内出者 無匹不行自外 至者無不

亦

何止日有牲日

道士虞禮日尸坐不説履鄭註侍神田無征忍日 大夫 士宗廟之

者之於

侑神聖人因以示事君

祺故卜尸焉郊特牲象也楼中注也體賓主必配食祭祀之禮主人不敢配於· 爲藉百畝冕而青紘們秉

孟子諸侯

祭義日昔者天汙 爲籍千

祭田祭器

寸二分四釐厚三分六鱉

之神版長七寸九分强博三

日祭版 咕枳滋殓雅啉此威

王

孫與囊合於竹廂中以帛槭芝祭於君之

硕士上服以主

自

古周尺當今世木匠曲 大書某祖考某封之神座夫人某氏之神座以下皆然書記 全於子是故不出者明君臣之義也

有司之守也 晋安冒公荀氏祠制神版皆正長尺一寸博四'廟中則全於君君在於廟門外則疑於君入廟門則全於臣

寸五分厚五分

其背者

士欲守古禮其有采邑 者建廟于邑則 當設主依唐 制諸侯减一等則大夫又

石主謂 父

母也白 虎通亦!

必式必有前驅

姘卿大夫士皆下之尸

廂各剡一寸一分上下四方通孔徑九分玄漆賣玄漆趺其 曲禮日孫可以爲王父尸子不可以爲父尸爲君尸者大夫

賣底蓋俱方底自下而上蓋從上而下與底齊趺方一尺厚 士見之則下之君知所以爲尸者則自下之尸必式乘必以

父北面而事之所以明子事父之道

通典日大唐之制長尺二寸方四寸上頂圓徑一寸八分四

方天子尺二寸諸侯一尺皆刻謚於背

祭統日夫祭之道孫爲王父尸所使爲尸者於祭者子行也

於廟左團云書不時也杜主动過林朋故不晦候在世轲孝經緯

日主狀正方穿中央達四方天子長一尺二寸諸侯長一尺

杜岐公通典日主之制四方穿中央通四

孝經緯 曾子問日尸必以孫孫幼則使人抱之無孫則取於同姓可

丁丑作僖 註云主者殷人以柏周人以栗三年終則遷入

三五〇

三寸皆用古尺以光漆題謚號於背义日晋武帝太康中制 几

太廟神主長尺二寸后主一尺卡凡后封塔水糜信茆衛大仲云宗

按漢儀高帝廟主九寸前方後圓圍

青用栗 右八寸左主七寸 廣三寸若

减一等則士尺寸自見 又日一廟二主

曾子問日尸弁冕而出15螺轳餅喊-等斯士内衣能貼 戏哦一月 其酎d短期難輕轉可望動識祛瓶祭統日君迎牲而不迎尸別嫌也尸在廟門外則疑於臣在

按士以爵弁爲上

冠緇唯尸

士虞記日尸服卒者之上服調館哼 職驢院王先松之還依服諾將

蠟油炙入理刮拭之藏以帛囊白缣裏盛如婚禮囊版版 服雜記日士弁而祭於 公冠而祭

- 祝佐食支端主裳 者鄭謂之檢封*_ 5男男尸女女尸必使異姓不使踐者證者謂庶

註賤配皆授畝冕而朱肱躬秉耒曰卿以下必有圭田圭田五十畝 淼義旧带啫跃圩 A袿千

搗籍百谳冕譎清糍繃崍王制曰圭日尸神之主 不敢燕惰,也是尸者所以接神而神象

田其所服而言耳必立尸 老傳所謂自休祭有田則祭無田則薦 晡: 孟子日惟士無田則三四九

荀子曰有五乘傳;

維杜免喪服

三乘之地者事二世待手 渚級線啪調慄 許叔重按論語所云謂社主也按左傳襄二十五年鄭

公孫舍之帥師入陳陳

兩宗廟之主三代

者殷人以柏周人

【註本作問社鄭玄

家語日庶人無廟四時祭於寢

周人以栗

論語魯哀公問主於宰我宰我對日夏后氏以松殷人以柏

廟瑠镭酸鰤下庶人祭於寢証糰物也以其無廟故唯

二字當爲鑿

*士－而祭穿通

不爵

廟 一昭一穆與大祖之廟而三 杪物謂的蛇

爾雅日無東西

王制曰大祖別子始爵 山海經日桑封者桑 ※主也方其下而銳其上而中穿之加

死曰鬼 得薦寢也

桑之言

公羊傳日主者曷用虞主桑練主用栗,也

鬼亦之於

怡加嵪 去王考爲鬼 纛雄甗 主可知

者府史之屬也

禮庶士庶人無廟

君之

設筵庶士庶人在宮

合而享

城去增爲鬼官帥一廟雎乍日考廟王考無廟而祭之

穀梁傳日立主喪主

日

主桑於

宰文

武於王乃宮設祀不傳虞處

使於

布:

興期襄公益

一壇曰考廟日王考廟享嘗乃止考無廟

有禱焉爲

賜薦吉

兩下士#

而不祭 適士二

祖禰-

主管

式

國主是不

示於杜

於四

官

適士上士也夫子之中士下士同人

爲大

為鬼

遷云祭或用云

者也

主綴重”

碲日立說不拙

而埋

祖考無廟 而有禱焉爲壇祭之去壇於處吉主

練

夫立三廟二城日考廟日王考廟日皇考廟享嘗乃止顯考

女叔 於

嶂下許:

廟

左氏傳曰凡君薨卒哭而祔祔而作主特祀於曲禮曰君子將營宮室宗廟爲先礤林柏融定祭法日大

神 主

廟 制

撕丁角反

新之礱之大夫断之士劉本刻柄非正也

宮柄穀梁傳曰禮天子之橘斲之礱之加密石焉諸侯之格

四 年春刻桓

維他擲司農坛黝 大夫倉士瑱丹讀爲幽·黑也

東肥 昔陽古先生著

周官守祧職日其朝則有司修除之其祧則守祧黝堊之鄭

互言之鄭司農云黝黑也坐白也爾雅日均謂之黝牆謂之

平安橘泰音

春秋莊公二十三年秋丹桓宮楹穀梁傳日禮天子諸侯黝

祭禮通考

而食者不得立宗廟乘繩證反

此書所集率人臣之禮而如神主之制時祭之

名兼取王侯欲使人博乎禮覽者其擇焉

楹非禮也二十主杰作禘於

廟則饌于禰廟註士事几矣於乃筵 於廟云宗廟常年左日於日如故袝立練
售云而尸禮 喪酒或誤記主几重主自祭曰而也有大夫三之地者事三世有
注同郡一尺屋村にあり、大友義統の家士若林越後守橘

鎮興入道道圓、同嫡子八郎統昌、一尺屋村を領し、壘

九尾にて居之、天正十四年、嶋津が兵臼杵亂入

の時、父子心力を盡し、當砦を守る、大友頽落の後

ち、文禄二年、鎮興は豫州にて卒す、其子統昌、同

右同郡白木村にあり、佐伯惟益が子彈正少弼惟数入

道宗天、代々大友に仕へ、佐伯の領主たり、弘治三

年五月、聊大友義鎮を恨る事有之、佐伯を退去し、

豫州に至り、永禄十二年二月、豫州より豊後佐賀關

に至り、舊地歸参を乞ふ、義鎮是を免許、 烏帽子

嶽に新城を築て、海邊要害の船中の押へとす、同年

十二月二十七日、再び本領佐伯郡を給て還ると云、

一尺屋堡之跡

烏帽子嶽古城」

海部佐賀關鄉上野村にあり、上野城共、山の山足

より登る事四百歩、蟠根一にして谷深く、山頂三つ

双ひ峙ち、上の平地各三畝斗り、段々に高し、城主

大友の家臣上野兵部少輔、八千丁を領して松崎村に

居すと云、

妙見山古城

古城貞吉 重校

宇野 風

梅林軒泰盈入道佑心行年八十有六

嘉永五年仲春寫之

谷龍子祥横田氏敦謹書之

右古城考全部三冊者天明八戌年十二月中旬獻納之

草書也

古城考

二男平右衛門義統、關東左遷の時、是に相従ふ、平

右 元和元年、大坂籠城、同五月戰死す、 若

林の

臼杵城下、又は一尺屋村にも有りさ云、

三四八

三四七

時分は能し藪参する柴田遠江守人道橋絽安に、 嶋津中書人數を

蔭より、鯨波を揚ければ、薩州勢大に怖れわなぎ、添て、薩州より
籠置る、而後嶋津勢に討ると云、

の事不分明、

大友家より降

不分明、

天面山古城

鏡城古城 竹中村にあり、城主落去、

宮城此時に

有しかも、固くして出さりしさ也、油はり後、

りに、人數を遣し、徳丸權左衛門我先にと迯走る、猶もに追蒐て、
乙津川に追込、

浮つ沈つする所を、勢に乗て漬ける程に、大半討れ

溺れ死す、備中守流矢に中り、郎等に介抱せられ、

日州高城迄行て死にけり、味方は中村新助只一人

討死す、妙林は思ふ儘に討勝て、翌日究竟の首六十

三、丹生嶋に送りければ、宗麟父子是を見て、尼の

身として希代の忠節、古今絕類也さて、稱歎限なし、

則彼が孫甚吉統盆へ、重恩賜可有と也、其後秀吉公開召れ、咸讃不淺、呼出して御對面、恩賞行るべしさ、同嘉左衛門、 中

村新助、同弟新兵衛、以下其勢僅五六十騎、一村茂る藪陰なぎに、鳴を靜めて待居たり、比は天正十五年三月八日、伊集院、野村、白濱、鶴崎を出、閑かに打て通る所を、同時に起て討てか~る、去れごも多勢に無勢にて、一丁斗り引退き、西の藪迦寺司の濱に蹈止り、追つ返しつ戰ける、伊集院下野守は、白柄の長刀携へ、一文字に撃てか~るを、中村助兵衛渡り合討捕たり、伊集院美作守も、鎗を撚てか~りけるを、徳丸又左衛門是を討、白濱周防守も、鎗を取り七縱八横に突て迫り、大に威風烈しく働ける所を穂九式部、強弓に矢取て番ひ、辭をかくれば、直に突てか~りけるを、兵と放せば、胸板を射通され、馬よりごうと溶けるを周防が郎等馳來り、肩にかけ退んとするを、二の矢にて射貫き、主從二人、

同じ枕に倒れけり、野村備中守、妻栗玄蕃、諸軍一

同に討てか～るを、徳丸權左衛門、同志摩、同嘉左衛

門、中村新助など、勇を振って射伏せ切伏せ、暫し

戰ける中に、豫て相岡の老若男女、戸次庄伊興床村にあり、高山の上也、山の後は竹田

領井田鄉也、東北は戸次の也、本丸五町斗り、傍

の低みに小笹あり、清水少し中に池有り、二の丸五

畝斗り也、腰郭の廻り、北に向て行く、至て高竣一

城主始を不知、天正十四年、なり、首實換にも身自手を掛け、夫れ是さ沙汰せん 越え春になりしかば、京勢數十萬渡海の由ゆゑ、三

ご也、或夜德九式部、妙林の前に出て、 是迄の籠城 も薩州へ帰るべきに極る、野村備中、妙林方へ

無比類候然れども、始終の勝利は叶まご、宜に随 行て、今日此所を引取也、妙林も薩州へ同道申さん、

て御降參候へかしさ諫言す、妙林大に怒り、汝日本 勝手次第也有ければ、妙林も居り候所なく候へば、

一の不覺者也、何百萬騎寄たりとも、命を此城に捨 御供申べし、首途賊し申さんさて、酒肴をもてなし、

るからは、百億も恐るに足らず、汝が様成大臆病 酔に及で、潜に内談し、音津川の邊り切所塞り塞

薩州勢此所より攻入難く、川を東へ渡り、白龍山に 者を、敵の手に懸んよりは、某が手に懸けんぞ、

陳取て、重而城へ押寄れば、僅かの平城、堀築地 國光の刀を抜て振廻せば、徳丸も詮方なく、御尤に

に拵たると見えて、 要害も堅固ならず、殊に大將だ さて立にける、斯て敵も急に落し得す攻めぐみし

なれば、思ひ侮り攻亡さんと、勢に乗じて駈立れば、 が、伊集院思慮を廻らし、妙林が郎黨中嶋玄佐、井

件の設陥件に落入しかば、人馬彌が上に重り落、 野道察が方へ、使者賄を送り、妙林下城然べしと云

杭に貫き死るも有り、残兵肝を冷す所に、二百八十 送りければ、兩人返事し、妙林に斯と云、早瀬も盡

挺の鐵砲、雨の如く打懸れば、討る者數を不知、 玉藥も大半打捨候、今度は御下城有て、後日の謀こ

寄手は案に相違し、元の所に引退く、其後寄手は穽 そ可然と云けるにぞ、妙林も若し薩兵の謀にて、反

に恐れ、近郷の牛馬を盗み、先に立て跡に随ひ押寄 忠も出来なば、見苦しき事にか逢ふべき、今迄負ざ

るは、不自由成る有様也、既に十六度迄攻れごも、 る所をほにして、後日謀を全するに不如と思惟し、

城内堅固に守成して、敢て不陥、夜更物音静なれば、 下城す可きに極め、三將も事故なく、城を受取入替

城兵終日の防戦に疲れ倦み、夢を結ばんとする折柄 、妙林は近邊の民家に居て、嶋津三將へ折と洒肴

は、妙林自ら馳廻り、酒さ飯さを興へて、共に力を」を送り饗膳して、若き女房に酌取せ、今様抔謠はせ

副へ、其々言を盡し、呼はる體は、男に増さる有様 慰めければ、三將も打解慇懃に振廻ける、斯て年も

三四六

鶴崎村姫宮の邊にありたるさ云、今に内郭堀跡少し

残り、又今の町並御茶屋、古の城跡共、大友家

臣吉岡三河守入道宗、鶴崎邊を領知して、此所に

在城す、其子掃部亮鎭興、相續て在城、天正六年、

義鎮日州出陣の日相從ふ、同十一月十二日、日州高

城にて戦死す、其子甚吉統益當城に居れり、後大友

義統に從ひ、豊前龍王城にあり、同十四年十二月、

薩州の兵豊後表に出張して、所々方々侵掠す、甚吉

が母は、左京亮が女にて、 容色世に越え仁愛深く、

野津原手永矢野原村にあり、城主姓名不分明、

鶴崎古城

柿野山古城

大分郡野津原村にあり、城主姓名年代不分明、山上

にあり、廢城後鷲城山無量寺と云、天台宗の寺有り

しも、古跡と成り、後に日蓮宗の寺有りしも、野津

原町に移ると云、

鷲ヶ城古城

す、其子常陸介、 兵庫此時に至て、嶋津が兵城邊に

亂入す、拒戰て敗績、天正十五年五月五日、津江

口にて切腹し、其後南山城絶えたり、

勇力有貞満なりしが、 掃部亮討死の後、尼に成り

妙林と號す、然るに、今年嶋津より新納武藏守忠元、

伊集院右衛門太夫、両人をさして、豊州に働入る

由聞えしが、妙林は一子甚吉、義統の近習に在りて、

龍王に居ける故、妙林當城に居て、堀を廣め塀柵を

搆へ、塀裏に板立て疊を双べ、堀のにを穿て、

其上を平地になら、竹木の杖を立て印さし、數百の

鐵砲を矢間に配り、譜代士中嶋玄佐、井野道察、其

外鶴崎高田三百丁の士、徳丸式部太輔、同刑部烝、

同助作、同權左衛門、以下の諸士籠城す、 十二月十

三日、伊集院美作守を大將さして、野村備中守、白

濱周防守、三千餘騎、臼杵城を巻解して、當城に押

寄鬨を作る、城中は態と鳴を静めて寂然たり、寄手

は疑ひ、堀のきは迄押寄る、待設たる事なれば、矢

玉を不惜防戰す、妙林は着籠の上に羽織を着し、鎌

鉢巻して長刀を横へ、劣らぬ女房三十五人、甲冑

にて身を固め、左右に從へ、晝夜を不分馳廻る、外

より入來る味方有れば、大に恥しめ押返して、士卒

を働まし下知すれば、蒐出戰て、徳丸三郎兵衛、

同勘右衛門、同中書を先して、二千餘人討死す、

ふ、其子武藏守鑑隆、常剃髪して道害と號

の爲に當國小國の扇村にて切腹す、其子兵庫頭親定、

一肥後國之内千七百五十五石之事今度以御檢地之上|喃號常 父横死の時六歲、潜に肥後國立田常に蟄居

爲新御恩地被完行之全令領地小西攝津守與力可す、後に大友氏の招きにて、南山に歸城し、本領

抽忠節者也

大矢野民部太輔殿

御朱印

天正十五五月朔日

之忠勤者也

一於肥後國天草郡之内九十丁之事今度爲御恩地被仰

直入郡宮原村にあり、志賀氏代々在城、始祖志賀入

を給ふ物如左、

南山古城

豐後國之内

古襲来の時、大矢野十郎種保、同弟三郎種村、兵船 古城考附錄

を備へ、防禦して勇譽を顕す、其裔大矢野民部太夫、

年、蒙

楠甫村にあり、大矢野氏代々居城大矢野古城

大島子古城 大島子村にあり、姓名不分明、

栖本古城

大矢野民部太輔殿

天正十五後五月十五日

御朱印

也、上津浦氏は、天草氏と同く、大藏種直が末裔也、

三四四

子孫上津浦種欠入道辨勢より、同上總介重貞迄十一

代、相續て在城、重貞が子種眞が時、家衰弊す、當 常城落去の年月
、未考之、

村に、寛永年中耶賊陣屋跡あり、

志柹古城 志村にあり、右に同じ、

湯舟原村にあり、栖本氏代々在城す、大藏姓にして、

天草三分に分け、其一商也、二本鷹の羽を定紋とす、

中村古城、中村にあり、城主姓名不分明、

一本山古城、在所幷城主姓名不知、

す、弘安四天正十五年、秀吉公に降り迎ふ、即ち領知恩給の書

付候上者全致領知合與力羽柴陸奥守向後可抽奉公

郎能郷入道信叔は、大友義直の八男、子孫代々、大

友一族として彼家に仕へ、後に兩家に分れたり、竹

田を上の志賀、當城を下の志賀と呼ぶ、此白丹志賀

の後胤、志賀山城守親有の時、讒言に依て、大友氏

三四三

て、原田太

夫種直が末葉、天草、上津浦、大矢野、秋月は、同 上津浦村にあり、熊本へ十六里、 上津浦氏代々居城

久玉古城 久玉村にあり、城主名跡不分明、

上津浦古城

下田古城 下田村にあり、右に同じ、

本渡馬場村にあり、天草氏代々在城す、天草氏は、

小宮地古城 小宮地村にあり、城主姓名不分明、

人は右の外にて、先亡の者と云、

、

戈津古城、戈津村にあり、城主姓名不知、

本渡古城

天草又三郎す、其年龍造寺隆信、自ら兵を帥て當城を圍む、鎮

經不克、人質を出して隆信に降り從ふ、其子兵部入

道麟泉、兵部少輔親重と有り、

一本に志岐入道林泉、子相續て在城す、同天正十

五年、秀吉公征西の日歸降し、小西行長領知の日、

行長に不順、同十七年、行長兵を卒來り攻れざる

利あらず、加藤清正聞て、熊本より加勢として自ら

來て、攻擊する事甚急也、精に起麟泉防戰不

克、終に和を乞、下城して薩州に退去す、一説には

小西に仕ふ共云、秀吉公より清正公に書二通給ふ

と云

城木塢古城、城木場村にあり、城主姓名不知喜左衛

姓也、大永享祿の比は、天草彈正左衛門行盛在城し、

天文元年、大友義鎮の幕下に降る、永祿元龜の比は、

一太郎

天草伊豆守 居之、秀吉公征西の後、小西行長

左衛門

の時、行長に不從、同十七年、行長當城を攻め、加

藤清正行長を援ひ、十一月五日、城主天草伊豆守敗

績と城陥り、伊豆守自殺す、一般降参して、行

太郎左

弟

海上に戰はじめ、志岐方利を失て、三角へ船を漕戻

衛門長が家人と成る「天草一黨

の者ごも、秀吉公へ降參の時、下詒る祿左之通、百

石天草三郎 左衛門、

人扶持天草太郎左衛門、五百

榔祐 五百石天草新助、二百石市十郎、新玠百五十石

、嫡子 百人扶持栖本甚左衛門、百人扶持

上津浦左衛門、百人扶持大矢野安松、百人扶持志岐

藤左衛門、天草家來三人、木山彈正、 天草伊豆、同

主水、右者天草落去之節降參、慶長年中、石田治部

少輔三成に、行長興して滅亡の後、加藤家に仕へ、

家來三大藏姓にして、其先漢霊帝より出たり、霊帝の苗裔

光武帝十二代、 帝の末阿多部王、老徳天皇大化年

中に、歸化来朝し、播州明石浦に着、大蔵谷に住す

阿多部王第二子貴主王、大藏姓の麗にし寺聞之て、田澤右京に命じ
、軍船數十艘を出して、

、

天草郡

志岐古城

一武古城一武村にあり、城主姓名不知、

大畑村にあり、城主姓名不知、右之外にも有べ

大畑古城 にあり、右に同じ、

永池古城 永池村にあり、右に同じ、薩州への城也と云、

岡本古城岡本村守隨時、時實 同修理亮定宗、糖質爲防禦自鎌倉常所

に下向し、途に爰に卒す、古墳満願寺にあり、

球摩郡

廣高の男兵庫頭賢高の時に、故有天草四萬石を被滅、

文永年中、蒙古襲來の日、北條六郎時貞、同遠江

合二 城して、其臣三宅藤兵衛重利をして當城を守らしむ

十ヶ城也

山の城 櫻尾 石櫃 動馬木 比良 下城

野さ云、大抵是等之領知と見えたり、天正の比、秀

往古大宮司全盛の時、領内諸郡に多く、當時二十ヶ分は天草の末裔、一日上津浦、一日栖本、一日大矢

所の城と云は、

、三

尾湯岳と云り

當城の初を不知、天草記には、天草一島五分一にして

鐘の西原 入江 木戸 鳶尾 小鶴 櫻

富岡古城

阿蘇家の説に、小國九ヶ城は、

三四二

立兩氏、一日志岐菊池氏也、一日天草大藏姓也吉公征西の節、當郡をも小西行長に給り、慶長五年、

小西滅亡後、寺澤志摩守廣高領となり、肥前唐津在

木戸 鳶尾 小鶴 入江 西原 鐘 坂梨

高森 高城 小城 松尾 鍋城 松山 楯平にあり、城主姓名不知、

湯前の古城湯前村にあり、城主姓名不分明、

深田古城深田村けれども不知其後段々に領主替り、今は公料となる、 山室の嶮、

海岸の要害、堅固にして、寛永の耶賊一節にも守成

したり、今尚地形の險あり、

志岐代々の居城と云、元菊地家の庶流也、元亀の比

は、志岐豊後守鎮經居之、天正七年、 志岐民部允、

天草伊豆守、木山彈正忠等、島津に隠し、同八年、

薩州の甑相馬允さ共に、筑後の援兵さして、龍造寺

を可討さて、大船に船數百艘、糧を積み兵を載せて、

三角の迫門を押渡り、 玉名郡大島の沖に到る、龍造

同下村にあり、城主姓名不分明、

鳶の尾古城

小國下城村にあり、裏の城共、阿蘇家臣下城右近

太夫惟隆、其子上野介相續て在城す、天正十五年、秀

吉公征西の時、戸田氏部重民、當城を攻陷す、惟

隆が干下城九郎、後に加藤家に奉仕、

下城古城

下城村にあり、下城氏守之、

北里上田村にあり、 葉室氏在城と云、

木戸古城

西原古城

満願寺村にあり、城主北里氏守之、

小國滿願寺村にあり、北里越前守、同紀伊守守之、

平古城

北里式部少輔、 満願寺僧共に三百騎、延年中守之、

動馬木古城

満願寺城ヶ鼻古城

北里次郎左衛門、初惟久、寛永十年、従 細川公

義 賜二百石、寛永十四年、於肥前國島原一揆蜂起之節、

赴彼地、射矢顯弓勢、爲高名蒙、

入江城 守護神城 櫻尾 籠 中山城

阿蘇境城 矢田原口城 動馬木城 鐘ヶ城

常郡古城跡多し、往昔阿蘇大宮司家人在居すと云、

城代の姓名、多くは不分明、参考太平記に云、延文

四年阿蘇大宮司、少貳家に興し、小國に九ヶ所の城

武光一ヶ所も不

を構て、菊池武光を可討さ企ある、

殘打破る、其九ヶ城と云は、

右十二ヶ所未考、名有之、其跡未詳

小城 松尾の鍋松山 中原 下田 石井

上久木野東 松野 矢田 原口

同湯田村にあり、北里将監守之と云、

同松木村にあり、城主姓名不分明、

城ヶ平古城

松木古城

右同村にあり、室原一族二百五十騎守之、菊池武光

攻落、

入江古城

同關田村にあり、北里大和守八百騎にて守之、延文

年中、菊池武光攻落、

鐘ヶ城古城

才二主馬之允

左京亮

右京亮

石櫃城取立、

永義

北里大藏太輔、

也、大友氏有書出、

北里加賀守、伯耆守二男

在薩州、及十三歳爲家督、

正義

北里次郎、後改滿義、父伯耆戰死の時、漸く三歳、

日州高千尾耳川戰死、二十九歳、

爲義

北里伯耆守、天正五丁丑年十一月、屬大友義鎮、於

馬喜竹熊口大將

義之

同越前守、右同時動

鼻大將

右氏

義章

同式部、右同時陣

山の城取立

惟義

城大

北里安藝守、

同大和守、右同時鐘

北里加賀守、後改正義、延文四年、大友氏從 (

-包義

菊池責ける時、小國に数ヶ所の城を搆防戦す、小

國諸城 總大將、楔尾の城忔籠、

義房 北里備前守

政義

惟經

惟宣

-惟連

惟治

重義

久義 又作

北里次郎左衛門、後右馬介、天正三年、石櫃城退去、

慶長年中、領知被召上、先溟人爲續合力米賜二百

石、其後本領安堵の沙汰杂L、

-以下略之

北里傳兵衛

北里傳兵衛、正保二乙酉年六月四日死、寛永九年、

忠利公御入國前、傳兵徽小倉〈被召寄、肥後表

榛子御尋汇付、委細達上聞候所、被召所の羅耖

羽織を粘る、御入園の上、同十年小國擔庄屋役

を被命、其後島原一揆蜂起の節、惟宣儀島原へ可

罷越旨被命、揃羽織五十宮被渡下、惟宣五十人之

召連、島原〈赴く所、無程及落城故、彼地引取云

〃、其後上使衆、諸大名方、豐前小倉(御攏有之

時、忠利公南關通、御歸國の砌、四月十三日、傳

兵衛宅(御入、暫御滞坐、傳兵衛御前忆被召、

作來の高五十石の御書出、唐縞の賜御單物云々

右賜所の品々、於今代々摠庄屋の家忆相傳、其後

御代々御書出を賜り、尚子孫代々庄屋役を勤む、

北里十郎左衛門傳兵衛一同忆摠庄屋役被命三十石

知行下城屋と成る

北里右京進

北里三河守一本從阿蘇大宮司大友義鎮爲使者の節

被改惟昌云々

三四〇

賴親 大和守

從四位下

鎮守府將軍

-賴光

正四位下

鎮守府將軍

賜源姓

位下

經基

満仲

○清和天皇一貞純親王一正四

北里氏略系

北里村にあり、阿蘇家臣北里大藏太輔永義在城す、

先祖綿貫次郎左衛門妙義、壽永年中、鎌倉より下向

し、北里村涌蓋山の麓、櫻尾城を築て居住す、 爾來

代々相續す、天文年中、妙義が末葉北里大藏太輔、

大宮司惟豊に仕へ、當城を築て在城し、豊後豊前口

を藩衛す、其子三河守政義、其子左馬亮、孫介亦三代

在城し、天正十五年、秀吉公征西の時に落去し、左

馬亮は後に加藤家に仕へて、當城は絶たり、

石櫃古城

小國赤谷にあり、 北里安藝守在城と云、又北里伯耆

守宗義在城とも云、

山の古城

信義

北里大郎左衛門、後加賀守、 入道して契、幸鶴丸

妙義

より妙義に至る其間數代、 系譜未詳、妙義改綿貫、

以北里爲氏、肥 後境小國尾城を築くと云、又

元享四年、自鎌 教書有りと云、元德己巳年七月

七日、妙義卒す、八十一歳、一本に云、鎌倉殿御教

書に、元享四年と有り、然れば、時貞、貞時の比

り、高時の代始迄も有者と見えたり、又家司

岡右衛門守久と云者あり、丹後坊子孫にて、

爲執事云

鎮守府将軍、

定義

義親

四門射の三三九

有合云

北里往けよ人を被

太郎左衛門

不手實義

延

日

七門

綿貫五郎左衛門、延└守次 松岡丹波守

十七日、

滿義

北里安藝守

北里加賀守

從五位下、綿貫幸鶴丸、後次郎左衛門 加賀守、 北

里、多田仲二男、 大和守賴親五男也、賴親叛逆

の時、幸鶴丸二歲也、其比将軍家(晝出仕之山伏、

松岡丹後坊と云者、 幸鶴丸を被像置、賴親者絡に亡

ぶ、仲の四男河内守賴信武将の時、長元元年戊

辰四月朔日、幸鶴丸を丹後坊誘引して、頼信の舘に

登り、頼親の一子の由告、賴信不審被思召、據を被

問、持佛の毘沙門井安綱の刀差出す、賴信御覧有り、

佛は父仲守本尊、刀は頼光より譲り玉ふ

所無疑、賴信喜悅不斜、此時綿貫次郎左衛門尉信

義と可吹由於肥後國二百四十丁、豊後園にて六

十丁賜り、丹後も一同に肥後へ下り、後見の仕蒙

命、阿蘇小國に住す、

しが、平氏没落して、頼朝卿爲總追捕使、 天下一統

に源氏に伏せしかば、忠綱鎌倉の猛威に怕れ、此所 西里村にあり、
原山城とも云、城主年代不分明、

湯の岳古城

肥豊の境也、河上古城

西里村にあり、城主松岡丹後守と云、

籠り古城

守護神古城

北の里南郷野尻岩神村にあり、日州堺也攻落す、

岩神古城

櫻尾古城

北の里土田村にあり、阿蘇家臣在番、延文年中落城

芹口村にあり、城主芹口大和守と云、年代不分明、

芹口古城

と云

小鶴古城

しと云、

に迯下り、壘を築て居住すと云、子孫數代在城せり

末孫野尻刑部少輔久綱、其子甚五左衛門直綱迄相續

す、城下に花を植愛せ所は、今の野尻清兵衛が屋

敷にて、 常念寺の隣也、

多し、大宮司惟豐、日高千穂より親宣を招き、三三八

感

賞して四百五十町の領知を奥へ、日州境岩神の城に

居らしむ、後御船を給り移城すさ云、岩神城跡こ~

より近し、恐らくは此城跡も、親宣が古城跡なるべ

、 甲斐大和守親宣

在城、甲斐宗運が父也、親宣は元日州高千穂の城

主也、永正十年、阿蘇大宮司惟豐に屬し、多く戰功

を勵み忠貞をなす、依之領知四百五十丁を興へ、當

城に居らしむ、大永六年、惟豐の下知にて、盆城

郡御船に移れりと云、其後城主野尻刑部少輔也、刑

部が先祖は足利又太郎忠綱と云、

涌蓋山の麓にある故、櫻山の城と云、壽永年

中、綿貫次郎左衛門妙義、鎌倉より下向し、當所に

城を築居れり、綿貫氏は清和源氏頼信の子孫と云、

延文年中、北里加賀守兼義、千五百騎にて守之、菊

武光野尻氏祖足利又太郎忠綱平氏に属し、宇治川の先陣

して、三位頼政さ戰ひ、動功に依て上野國に居住せ

杖立とも云、大友玖珠士三百餘騎、延

文の比守之、

三三七

、氣力竭ける 本丸は日州縣領の内、二の丸は倉村の内也、城主

故自殺せり、伊豫守惟道は、搦手より遁出、村山村 年代不分明、甲斐惟直入道宗運が父、 大和守親宣、

に至り、秘臓の長刀城内にありしを取れて、近數代日州にあり、親宣阿蘇大宮司の家臣となり戰功

阿蘇家臣、高森

社倉古城

在城す、大宮司惟豊の臣也、

の古城

村山薩州へ歸る、此時高森及豊後方より討取首、臣山村大學を城内に返せしを、薩兵に捕へられ糺明

せん故、主人の在所顯れ、直に押蒐りしかば、惟直

遁る~方なく切腹す、大學は主人の在所訴人せし罪

なり迚、薩兵即ち切捨たりと云、此時惟直が娘柏御

前生年十七歳、美質優艶也、大學が弟山村小學

城外山村が宅に潜み置が、小學が出て

に預けて、

働く中に、薩兵彼家に亂入し、此娘を奪取り、肩に

かけ迯行を、小學追跡不得、長刀にて後より追様に、

脊負しま~に切倒し、其遺骸を其所に埋めし、柏の

森さて、今の十里山の遊にあり、其外死傷多かりし、

骸骨を集埋所、高森町東の野外に、畑の畔に大松

有りしが、近年風に砕けて今は榎有り、減説に高森城主

九左衛門、一説高森安藝守とあ

るは、惟直が父祖父歟と考ふ

平千八百

餘級也、蘆北、水俣の城主深水休甫が一子津助も、

此時に討れたりと見ゆ、惟直歸城す、同十二年三月、

島津中書家久、新納武藏等をさして、重て大軍當城

を攻め、防戰難叶落城す、此時常國の雄士、多くは

大友を抜き島津に従を、高森伊豫守惟直、同子伊勢

守は、始終心を不變、大友感狀を興ふ、落城の後浪

々さ成しを、大友宗麟開及、彼が忠貞を感じ、志賀

より价を遣して、豊州に招き、松本に居らしめ、翌

年肥後に歸入しむ、其子高森新助、後に加藤家に奉

仕す云、同十三年十二月晦日、又薩兵を、惟直高

森の城にて追崩せんが、大友家衰微に付て、諸城伯

各此城に取籠りしを、薩州の大軍攻屠る、同十四年

正月二十三日、正月廿三日は、薩兵二千なりしが、甘

三日

落城に

三萬餘に及べりと云、

及時、大手の大将、惟直に向ひ足下は搦手より出て

豊後に赴き大友を頼み、復ねて此仇を報し給へ、某

は其間大手を防ぎ可申てて出、島津の勁兵隊長

四人兵士十八人を、大長刀にて伏せ村にあり、阿蘇家人村上能登守惟廣、其子丹波

家久布田の内久木野村にあり、城主阿蘇家臣久木野備後して五百人、手痛(攻蒐る、稲田敗走して、這々

久木野古城

北坂梨古城

高城古城

打入高森を攻め、寡兵不有利に依て、一旦和を請て

は云、

南郷高森村に分明、沼中に居の如く三つ取り、網城跡 明應二年の比

高森古城

黒川村にあり、阿蘇家臣代々居城也さいへごち、不

手さして、薩軍大勢来る二邊塚古城

、

湯の浦にあり、城主阿蘇家臣小島五郎三郎、同弟五 使を遣え降参を進れごも、城内未決處に、高森の攻

古城

野中右同はたべ山にあり、城主年代不分明、

城ヶ嶽古城

城代と成る、

云、

一同下久木野村にあり、城主阿蘇家臣久木野隼人さ

鼠戸古城

三三六

時、其臣加藤清左衛門言正、其子同右馬允正方、

守と云、

相續城代と成る、高麗陳従軍、留守は林半之允留

守居たり、正方八代へ移城の跡は、加藤越後蚓正直

牛の頭古城

市下村にあり、城主市下大和守在城、天正十四年、

薩州島津の人數三百餘人攻來り、市下村に在隙し、

郎次郎と云、年代不分明を見て、正月二十二日、急

に城を攻落す、此時大和守討死せしさ云、

、藏原志摩守在城とと云、四五丁を隔て共間は泥沼

あり、阿蘇家臣伊像守惟直在城、天正

十年、薩州の軍將稻田新助三千餘兵を帥て、當郡に

坂梨村にあり、天正年中、阿蘇家臣坂梨右衛門惟右 城を出、大友家豊岡の城主志賀兵部入道道輝を頼

入道紹元在城さ云、

み潜に道輝方より、志賀掃部亮、朝倉土佐守、大森彈

正を大將さして、千五百餘騎を加勢し、十二月二十

日の夜、一方に伏を設け、三方より城に火を懸け、

後藤大學、佐藤左京、大塚和泉、後藤市之助を頭さ

阿蘇家臣北坂隱岐入道了喜在城さ云、

三三五

木山村正教寺廢跡山上にあり、 木野彌次郎親政城跡

木山古城

八方岳の麓にあり、城主隈部彌三郎親次也、天文二

隈部彌三郎が

十年、大友義鎮豊後より當國に發し、

籠たる、八方嶽の城攻落、城主降參すと云、

阿蘇郡

武光、南帝依勅、奉屬一品式部卿親王、二十四年に、

八方嶽古城

三年三月十三日、於筑前博多討死、

其次武重、此代より肥後一國の主と成り、其次武士、虎口村にあり、隈部某の城といへども、年代不分明、

亦た隈部云、年序未考之、

虎口の古城

菊の城を築て移城と、

其後中絶して、

古城

深川村の北にあり名陳内稱す、

染菊池妹智也、

古城

親基

陣内古城

武房 出田宮内少輔

出左衛門

白木村にあり、隈部家傳云、宇野七郎持直嫡子、隈

部式部太輔親直、菊池郡白木陣内館居之、從是地

土、雲上の城と云、菊池氏太夫將

監則隆、延久二年下向有之、當城を築て居す、夫よ

り相續て、經隆、經頼、經宗、經直、隆直、代に日綱

鷹の羽

隆定、熊隆、隆泰、武房、文永弘

後に違鷹の羽とす、

安蒙古戰雨度、大に蒙古人を拒ぎ討夷げ、日本の武

名を異國に顯す、其次時隆、武時武功太平記に出後醍

醐帝の爲に、元弘九州一統に切靡け、勳功を成す、此代迄當城居住
、

延久二年より應安六年迄三百餘年在城、元祖則隆よ

十五代に至る、 武光の子武政、城を守山にて移

ると云

と云、木野郷八十丁の領主也、 菊池九代式部少輔隆

と云、木野郷八十丁の領主也、菊池九代式部少輔隆

泰七男、木野對馬守武茂のにて、 隈部但馬守親永

菊池則隆當國に下向し、當所へ居住し、後染川

親永築城と内牧古城

當城の始末考、天文の比、阿蘇家臣邊春丹波守盛

道在城す、島津義久猥りに干戈を起し、當國に打入

道在城+

り、當城を攻落す、盛道自殺す、 加藤清正侯領國の

茂藤里古城

年迄、四百八十五年、

右菊池家二十五代、則隆延久二年より、天文二十三

左兵衛督、従四位、始は重治、大友修理太夫義長の

義武

子、義鑑の弟、宗麟の叔父也、天文二十三年十一月、

於豐後切腹、法名金圭宗閑居士、此代に、嫡子

大丸、

廿五代

せざるにより、高來

るとなり、彼所にて卒

す、法名宗岳居士、

「武包

肥後守、二十二代能運の弟、託摩武安子、諸士一致

廿四代

をして武包を立、二十四代とす、

始は惟長一位也、阿蘇大宮司惟来の嫡子、岡侍八十

-武經

四人連の書を以て、申請養子とす、政隆自害後、

武經阿蘇大友にせず、逆意有終没落と云、隈部

親氏、長野運貞、内空閑重載、同長載等相計

廿三代 重安子、鶴立三月、永正六年間八月十七日、合志郡

政隆

安國寺にて自害、十九歳、法名天仙源祐居士、

法名儀天明細居士、墓在于正寺實相院、監實

相院殿、

廿二代 肥後守、従五位下、二十五歳逝去、二月二十五日、

能運

加賀滿丸 於豐後早世、二十一、

の時、

武國

依謀反にて討死、

武

正年中十九歳出田祖

是政冬

重基

出田刑部

重照 城下野守

城氏の系略之

〇重岑 城越前守

親冬

菊池八代 能隆より九說

同越前守

・出田氏略系

るを不

代

かの出田式部

入道を城代とし、宗於霜野討死の後、其子帯刀宗

蓮、動功に依て直に當城に居らしむ、前條城山條の説に

刀

出田村にあり、出田氏代々在城す、後に城氏山鹿よ

來て在城し、城越前守親冬、天正八年、鹿子木氏

の招きに依て、隈本の城に移り、當城には虎歯宗道

出田古城

木庭村にあり、城林とも云、城越前守武顯築くと云、

弘治の比は、城筑後守武束在城す、其後虎商宗道在

城、山本郡霜野合戦に、宗蓮討死、其子帯刀戰場に

て、父が仇牧野彈正を討たる功に依て、直に木庭の

城主たらしむ、

城山古城

伊倉村にあり、菊池七代隆定の五男、伊倉七郎定實

の城跡也、系圖不見、七郎定直歟

三三四

兼士 大藏少輔

-英朝 千田伊豫守

武楯 高瀬相模守

父子不和佐敷山中六十二逝

-兼朝

十八代 左京太夫法名元朝與持朝

武相 高瀬+郎

爲房 双次耶

良臣

右馬介、法名阿元、

、

又肥後守、又右京太夫、應永十年丁亥早世、四十五、

始武興、法名元徹、又常朝、

|-武朝

次郎、自十二歳出軍、十六託摩原合戰、肥後守、

[十七代

十六、 武光嫡子、肥後守、志行大廣、早世、三十三、永和

-武政

四乙卯年八月、勸請阿蘇北宮於菊池、今北宮村の北

宮也、法名直傳居士、此代築守山城、正平二十二丁

未の年云、

-空禪房

一作日開、蜷井合戰討死、

-武義

眞武

深川彦四郎、法名自聞、

楯

守

武相 ß　武代、

武國

-武

筑十郎、後

武明 -武豐

少輔

修理介

中務肥後守

守護代

務少輔、右京太夫、左京太夫、明德四年天下一統耶、肥後守、文正元丙戌年、二十七出家、長亨二

三三三

法名智顯梅屋正英、文明十三年八月一日、萬句連

八行、月松の題記發句、月PL十加〈の松

千々の秋、是より月松の屋形と稱す、孔子堂

墓在于玉祥寺、

重

朝代

字藤菊丸、明愬二癸丑年十月二十九日、四十五逝、

廿一

忠豐養子、號彈正少弼、

-爲光

宇土次郎太郎、宇土掃部助

號爲山、號大膳太夫、

-爲房

託摩又次郎、侍從、

繼能述立、

太夫將監、

政隆

重安

-爲安

次郎三郎、號

始政朝、

肥前

年戊申十月二十二日逝、法名尖活仍勢居士、年五十

九、墓在于玉祥寺、隱居之後、居于板井碧巖寺、

爲邦

二十大相模守

重棟 兵庫頭

-武明

十郎左衛門佐

-武弘

十八日、與姪爲邦和睦、

武德

左京大夫、亨德三年九月

忠親 北彌次郎、新宮墨社、

十九代 左兵衛督、肥後守、三十八、早世、文安三年乙丑七

持朝

月二十八日、法名阿山蘇光居士、一説永亨五年十一

月十一日、墓在于片角村光善寺、位钾肥风太守有

兄弟三人、武時四男、墓在于正觀寺、應安六年

月十六日死去、法名正觀寺殿、九州都督武光聖

居士、

-1

一統、靜謐二十四年、九州 日將軍云々、

武光

肥後守、豐田十郎、奉勅奉屬一品式部鄉親王、九州

十五代

神なれし花も昔をわすれずば我すみ染をあばれさ

は見よ

次郎、二十一歲出家、法名祖禪寂照、遁世時、

|-武士 迴諸國及歸寺、小野の櫻★見

|十四代

十三代

次郎、肥後守、任佐京太夫、建武二年上洛、韓氏

武重

叛逆の時、初箱根山合戰、從是三役初、執懽隆

香、侍所經村、守護代武村、興固三年八月三日逝

去、葬于輪足山、號勸喜居士、

十二代字正龍丸、次郎、法名寂阿、元和三年三月十三日、奉

-武時

詔於博多戰死、平英時陣记打入、同頼隆討死、

十一代､六郎八郎、字永德丸、與八郎于宋督之後、就得

時隆

利、爲叔父武經、於關東分妖、時年十七、

の 時´於淀渡戰死、

武村

重富兴市、建武二年´武重上洛

武門 郎

倉而亡、

武經

八郎、與時隆家督爭論、於鎗

武本 六郎

武成 長瀨七郎

燕命討死、盖時之功名、

頼隆

武

託樫次郎於筑後本

江討 名永網

豐前守收

貞公

-武規

攝津守

對馬守

對馬守

-武茂

木野殿

對馬守

武鄉

氽茂 五郎

經重——武爲 駿河守

武安

大圓寺阿日坊與

隆舜

父於博多討死

武吉

七郎於兵庫與

楠正成同戰死

武豐

武方 六郎

十四歲、

武世余五

世原致

致大保

原戰早

-武澄

守肥

肥前

於高山討死

郎四月二十日

-爲安 三郎、寬正六

養子肥前次郎

依逆謀陸沉、

筑後守護職之内、

澄安

-武照

肥前

死、一說於筑前爐形

年二十、

肥前守、蜷井合戰討

武信

對馬守

宗一丸 號中村

無賴 摩叉次郎、

法名空印

又空阿北殿

家光——武敏

九郎判官

三三二

隆泰

九代

武賢 常陸介家

昌世 對馬守

法名大

-師世

上總介

秀世

少

-師周

宮内

-秀周

經鄉

右經

-隆古

下野守、

早世

下野守

朝長

越中守、

越中守

厚人

法名元高、

經村家督、

紀伊介

|-重隆

小野播摩守、

法名延隆、

治部少輔、法名大中、

武朝兼朝兩代執權、

常陸

新左衛門、溝口

秀武

戰死、二十八歳

武岑

年十二月二十九日卒、葬

於飽田郡石神山東南之

武房

隆冬 -道武 五

堀川三郎

隆顯 孫四郎、先自父早世、仍不繼、

隆盛

若宮四郎

嘉暦二卯年七月三日死、葬於西福寺、

祖有別、

有隆

赤星三郎、蒙古合戰有高名、自將軍幕敕賜、赤星

-武房

十代

･政重 次郎

-覺佛 賴隆 文永弘安蒙古合戰後、薙髮號覺佛、成輪足山院主

出田祖

内少輔

衛門

式部

政冬

親基 重基

出田刑部

出田宮

出田左

出田

重照

久基 十郎太耶

守六郎

重岑

隅´號焜峰道感大居士、

十郎太郎、越前守、天正元

-親賢

左衛門

同越前

實照

本鄉四

城祖

隆經

前守

豆守

爲冬

部

城六郎

爲星

同伊

同式

同越

-隆時

豆子

中守

太郎

越

顯

隆政

〒隆隆西鄉太郎

賴

同六

隆氏 母關東小山田

孫三郎

-隆

林原余三、

無子

隆重

隆光

左近三郎、

一云九條十耶

-隆光

號小野崎五郎

一爲隆光兄

朝定

三郎太夫

號藤田

定直

伊倉七郎、

一爲隆朝兄

-武益

藤三郎

家隆 太夫四耶

父子不和、

-隆朝

-定基 江長四郎

林原三郎、

此人居處の跡、

-隆親

片角三耶、今下片角村记三郎丸8云所、

直女、承久之時合戰、

父死、因不繼、

能隆

隆繼

小代

、先于

黑木祖

隆政

-隆俊

黑木藤兵衛尉、

八代五郎

直方 合志四郎

-秀定 一以作定直、砥川三邸、於壇浦討死、

戰比

-隆定

孫次郎、後鳥羽院奉仕、天下武者所、承久合

七代

-隆長 永野太郎

無子隆次郎彌次郎、娶大友豐前々司義

武重代侍所

-經村

彥四郎法名大空

惟幸 新三揶

-基幸 彥三郎 |-武幸 四郎三郎

資幸 小三郎 -爲幸 又三郎

-隆興 -經幸 孫三耶

六郎太郎 邦幸三郎

三郎

永享十年十一月十一日、高名顯于都鄙云、

長門介

-隆幸

長門介

秉幸 三郎

兼雄

式部少輔、法名元勝、筑後守、後職中三瀨戰、

約

-武賴 但馬助

父子の契

溝口合戰討死、五十八歳

七月孫四郎、安藝守、法名合貞

里

-、

元中五年

隆平

則勝 伊豫介、無子弟隆里繼、

近江介、自

隆爭立、

武重武光兩代の執權

-隆香

孫四耶、安藝守、

子、初與甥能

畠山重忠養爲

筒突川戰死、

-定氏-

別當在重女、

彥鶴丸、蛇冢三郎、

經平 藢尚五郎

隆明——隆綱————隆倫

經明

合志

安頂 三郎禪師

-通俊 兵藤太郎

經賴

兵藤次郉

三代

經政 出崦太夫

若宮菊池三耶.肥後守、寬仁年中、異賊襲來時、

着紫墨井笠、乘白葦毛馬、打望博多、警固松原防

戰時、賊之大將網不畏箭鋒、仍射足裏討取、

州兵頭、因被下院宣、

二代

保隆

經保

小島次耶

山崎伊豆守殿

八月十日

能隆曰一院綸宣今日文永二年:下若頂数華一家分國各

不分遠近新 鷹羽嫡々相 承如件

隆任

隆古

基時

山崎左京太夫

山崎伊豆守

刑部少輔

基奇

隆邑

隆宗

四川太郎

|兵庫太郎

山崎阿房守

三二九

たえぬかざりは

あさくともふかたのめや菊池川|あその畑の

宮大明神歌曰、

籠時、鷹羽土器上降落者記

.阿蘇十二

比、安德天皇奉仕、從此代鸞

始石、阿蘇叄

隆直

此以前汶日足、菊池九郎、肥後守、薛永元

-經泰 高倉三

經能 原四郎

佐野

-經政 佐野太耶

俊直 次郎

經視

-經俊

赤星祖

經直

烏羽院武者所

五代

-經質 井芹五郎

立田出田祖

-經遠

經秀

出田三郎

村田五郎井芹

經道 四入道

經瀅 琢麿五郎

經信

經親

藤田三郎小次郎

」

死

出 田

郎、立田

經世

兵藤

北國合戰討

天草長坂小太

經宗

四代 鳥羽院武者所

屋源五郎、百餘人にて追悪たり、宗利、角田は、親

房を肩に引かけ、野傳ひに親安が陣に送り届け、野

田は敵九人を討、富田は七人を切るを見て、須

所に、富田一族必死を究め、鍵を揃て突かえり、一

の備を突崩し、二段備に切て入り、手痛働き奮戦す、

寄手 水野泉州忠重の嫡子、水野六左衛門勝成、

【經歴して今

佐々か備にあり 小谷又右衛門、松下彌兵衛高名す、親安

は夢にも不知、夜の明るを待所に、成政使を再三

遣し、急に軍議すべき事有り、痰々陣所へ來會すべ

心と催促す、親安は城上の相図の煙も不見、毎度の

使不審思所に、多久降参し、富田は討死せん山

しかば、今は運の極めなり、討死すべしと思ふ所に、

又成政より使來るを、搦捕て首を切る、城内には、

多久富田が微を見て、悉く退散し、残兵謡二百に不安

足、親永も勢脱し機疲れて、無是非法體染衣をかけ、

二男次郎親房を伴ひ、出降せんとする所を、かたへ

の軍士荐りに留め、假降参有りさても、成政許容

菊池氏略系

す可らず、如何にもして、切、式部殿と一所になし ○藤原道隆

申さんさて、木場、神崎、高木、岡田、村廊、山崎、出

田、大塚、仲光、須賀山、池邊、一族合て百五十餘

人、親永を中に包み、喧さて出て、親安が陣へ加

ける、此時従士三十二人討死す、親房は富田主膳、

野田藏人、宗利主水、角田河田主従五人、高塚を

太政大臣

政則

帥大納言

刑部少輔

屋野親西郷太郎

須

隆

隆基

政切隆秀隆房

四郎太郎

太一代、後二條院御宇延久 年庚戌菊池下向山崎靈社大明神

四郎太夫

池祖人王七十

則經輔

太夫將監、菊

對馬守

正二位

帥中納言

熊家公子、糊白内大臣、

隆

隆家

大職冠十二代孫、を門の中とか北向後不同十六年六

月、常郡加藤侯の領さなりて、其後は加藤傳藏城代

成る

は怕れて、馬を早めて引退くを、追蒐け馬上よ

て落し、首取て靜々と引退く、有働兼元も、所々手

負ながら、 親安が側を不離、親安をて、親永も親

房も、共に城村の城に歸ける、成政勝利を得て大
に悦び、隈府に城番を入れ置き、隈本の城に入
人質を悉く追出す、
末子棒千代十歳なり
八見逢 女藝が妻山本郡に潜れ
正二位、
夫
廻りて、親安が陣に加らんさ仕る所を、多久が弟須
三三元
藝同名兵庫をは、親安が陳したる玉祥寺原へ遣、
鍛元に斯さ告ければ、价を留置、件の趣逐一に云入
る、親安思案し、父親永の仰の如く、父君に向て楯
をつく事、人倫の道に非ず、此上は父と一所に討死
すべしさ、書簡を認渡しければ、元は兵庫を招き、
親安が書簡に、己が狀を添へ、明日裏切すべし、其
時城内より討出給へ、引韜て成政を討取べし、相圖
には黎明に煙を揚らるべしさ、互に約を宛て、兵庫

を城中に返しければ、親永大に喜び、北小路口より
小葉常陸切て出よさ、持口を定め、翌日を遅相
待ける、親安が陣所は、従弟の山鹿彦次郎重安と一
所にして、成政が陣所の間、川を隔て切所を抱へ、
玉祥寺原さ云所也、然處に、成政を親安に遣し、
足下父子の義絶は豫て知り、惣而親永非儀成故、
誅伐の爲に出馬せり、曽て隈部一家を断絶せんとの
事に非ず、足下早々城を攻られよとなれば、親安は
仰承候、如差岡人數可出と返事して、此旨親永へ告
知せ、静りかへつて控たり、然るに、 隈部親永が家
臣多久大和、熟々思案し、今般親永父子合體して、
成政を討取り運を開くさも、當國を領せん事難叶、
所詮成政に反忠して降りなば、 隈部領分のも
なり、後榮を期するに不如と、妻子郎従被官與力千
五百人を引連て、佐々が陣に降る故、城中大に周章
安藝此旨を親永に告ければ、親永按に相違し忙
す、

然たりしが、誠に人心難斗、城中の者共是を見て、

嘸足浮て覺ゆべし、乍此上軍士一致の篇なれば、妻

安藝畏て軍士に觸

子を取て質さすべしさ命せん故、

、己れが妻を眞先に出す、其子飛弾は不知して夜

廻せんが、途中にて母に逢、何方へと問ふ、母答て

斯さ云、飛彈母を具して本丸に登り、親永に對面し、

某も義を不忘、母を質に出して、不得已討死せ

しさ、人々の味を受ん事、尸の上の恥辱也、泪

を浮めて嘆訴す、親永聞て汝等を疑ふにあらず、城

士の心を一にすべき爲也さて、母を返す、飛弾は悦

び母と共に踊りて、此旨を語る、安藝大に怒りて、

我壯年より老期に及迄、一言君の命に不背、今を限

の露命に至りて、君命に違ふらずさ、妻を猶本

丸に遣して、一途に死を究めける、時剋積りて夜

も臼々と明れば、 安藝守、城戸を開て撃て出る、

は大和が反忠にて用意をなし、段々備を立て控たる

の城主たり、天正十五年八月、 隈部親永、肥前龍造
寺隆信請に依て、隆信弟江上家種、赤星退治のため
大軍を卒し、山鹿郡に出陳しければ、道は山鹿彦
次郎重安、合志隆重、大津山資冬に心を合せ、所々
にて接戰防禦す、同六年四月、又龍造寺隆信二萬餘
兵を以て、隈府城を攻擊す、親隆防戰利非らず、終
に軍門に降り、人質を出して退去し、合志隆重を頼
て、竹迫城に寓止し、其後嶋津家に属すと云、其後
當城に隈部親永移り住す、道半は天正十六年、隈本
一揆に非ざる由、大坂に至て謝すれごも、秀吉公容
られず、元和五年六月二日、於阿波國卒す、 八十九
歳さ云、天正七年三月、新納、河上等、大兵を以て
當國に亂入し、諸所の城壘を攻圍む、親永堅く守て、
防戰数月に及び、同八年、飽田郡旦過瀬にて、甲斐
宗運さ戰て、親永利を失ふ、同十五年、秀吉公征西
の日、親永轅門に降り、本領八百町を給はる、其外

の國士、各本領を給はり、佐々成政が力とす、 同
五月六日、成政隈本入城して、後國士の領に竿を入
んこす、就中親永が領分を先とす、親永は秀吉公よ
八百町如先規給はり、朱印をも所持せしむ、殊更
國士多き中に、我一人の領知に竿を入らる事、面目
なして不肯、成政甚だ怒り思惟して、親永を賺し
て可討を謀り、國士を招き饗應し、日吉太夫に命し、
能興行すべしさ觸遣し、隈部を刺殺さんと議る處、
城十郎太郎傳聞て、密に隈部に告し故、病氣と詭り
不來、故成政彌憤り深く、同七月十日、甥佐々與左
衛門宗能、家人前野又五郎忠勝、久世又助、三田村
庄右衛門以下三百餘騎、隈府の城を攻れども不克、
八月二十六日、成政六千餘騎を引卒、隈府城下犬
馬場口に陳を取る、城兵も千八百餘人也、 成政奇謀
を運らし扱を入る、隈部も終に不可勝を知つて、人
質を九人出す、然れども、成政圍を解かざれば、長
臣富田安藝守家治、多久大和守宗貞、小葉常陸重

一戰に生死を極む

を呼て評議し、一文字に突出、

べし、乍去嫡子式部太輔親安は、豫て父子不和にし

て義絕すといへども、父か討る~を餘所に見ん事、

末代の恥辱也、殊更成政に催され、國士一同に寄手

にあり、同くは父子一所に屍を曝すべし、彼が一老

有働大隅守兼元は、富田安藝が聟也、親しき者を使

价さえて、有働に此旨を云送るべしと云ける故、安

三三六

三二五

義武害せられしかば、義鎮、義武の従士を肥後に追 死す、其子周防守親隆入道、道、相籟て隈府

依之親永恨舍及一戰、轉工油碗郡世間の者はおちきつ同四年、道雲病

て居る

口宣綸旨を頂戴し、官位昇進して、従二位に叙せら

れ、一家繁榮し、斯て一國の豪士、都大友家に随

ひしかば、大友義鎮の叔父十郎義國に、菊池家を

がしめ、菊池左兵衛尉重治改む、証治後政義宗収義國

の執務とし、義鎮は同年十一月、豊府に帰る、其後

義武、豊府より附 屬臣田 原石馬頭親賢さ、鹿子木

民部少輔親俊、聊子細有て鉾楯に及び、隈本の城を攻

め、田原利を失で、山本郡鞍掛城に籠る、義鎮怒

て豊州より、志賀安房守入道道輝を遺して、親賢

責て追却し、其終を不知、義武肥後の主となりて、

程なくさ遊び務を怠り、溶樂噌酒、不義亂事

する故、國士恨憤、其比菊池庶流、 八代大野高塚

城主、木野但馬守親則、顔を犯して諫箏す、 義武却

て親則を切る、義鎮、 義武が妻艶なるを知り、國政

を怠るに事よせ、義武を憎み、天文二十三年十一月、

豊府に招き、搦捕て首を切る也、其狂歌あり、

人の妻もよしげしげに召るれは

返し、赤星周防守親家入道道雲斗を残し置、叔父義

肯、

天正十三年九月、烏丸大納言、勅使さして下向有り、

武無道成故誅戮す、 義武が子犬房丸を誅、 義武が
領知を領すべしさ、道雲に預る條、家を相続すべし
この命を蒙り、道雲殆んご喜び肥後に返り、犬房丸
を押籠、國士の人質を取入れ、城を堅固に守る、義
武が長臣田原右京入道宗以は、方便を以て犬房を己
が宅に置き、密に鹿子木、青野、小代、隈庄、小森
田を語らひ、道雲と一戦を計れごも、各人質を取
れ、心々なるゆゑ、宗以、鹿子木親後さ密計し、犬
房をひ肥前高木へ走り、有馬家を頼居しが、後に
嶋津義久頼で蟄居すさ、此時國中城壘六十餘ヶ
所也さかや、髪に隈部但馬守親永、其先蔵大和源
氏宇野七郎親治、保元気に、基盛さ戰ひ虜と成
り、常國菊池に預られ、山鹿郡に下向し、其末葉隈
部上総介忠直、持朝、爲邦に仕へて忠を盡し、數代
相續て親永に至る、永祿二年、親永が一族、木野彌
次郎討死して、上知八十町を、私館に近き故、私館

の内に替地すべき由を、赤星に訴へけれども不長野古守爲宗、隈部和泉守宗直、 部分隆久、馬見塚藤左衛門盛秀、出田十郎貞峯、佐

鹿子木民部左衛門貞治、御宇田上總介重面、城大藏|野伊豆守朝經、佐藤式部亟朝右、竹崎叉丞丸、多比

少輔敏峯、出田刑部太輔重綱、岩河藏人運秀、立田良出雲守朝道、牧右京進安滿、内田右衛門尉朝藤、

小太郎重德、長田右衛門尉武秀、隈部豐前守貞明、 立田刑部少輔武貫、赤星安藝守有繼、馬見塚新左衛

吉田左衛門尉公世、北山城守公村、隈部源兵衛守治、 門尉長行、平山中務少輔秀面、若園源左衛門忠村、

關部新左衛門朝家、内田右京允重貞、小森田和泉守 竹崎次郎右衛門尉惟次、馬見塚左衛門尉盛峰、中村

朝右、内容我次郎左衛門朝貞、瀬田新左衛門尉惟夏、 對馬守經世、大河内和泉守氏直、田中彈正朝宗、竹

山北掃部分景面、臼間田又十郎武益、隈部左京亮常|崎圖書助惟秀等也、政隆怒[城六郎政元、隈部下

治、隈部彌七郎清平、赤星右京進惟淸、宗與八郎盛 守鏵治、以下五百人語GS、武經芒戰、豐後

賴、瀬田兵部允惟、竹崎忠左衛門尉惟忠、高倉圖|大友、阿蘇大宮司等、武經仁一味讠、大兵以政

書介俊疽、相良式部少輔朝長、吉田新十郎公桢、竹|隆弝攻办、政隆一戰敗亡、永正六年閏八月十七

崎兵部進惟直、赤星飛彈守房繼、關將監公賴、古閑 日、合志郡久米庄安國寺汇入、腹切死了、時十

山城守貞載、高橋薩摩守朝乘、若岡源兵衛忠通、長| 九歳、法號天仙源祐居士、又云鐵山淨智居士、武經

野清左衛門能、内空閑周防守朝誠、小森田伊豆守」後暴惡LLT、忠臣の謀不用、搖行仁依國士

高世、平山十郎太郎能世、隈部右馬介車門、合志藏|憤5、隈府城望追落;´武經程葢く病死、武經如是

人少輔隆峯、小出十郎三郎運貝、關部萬部丸、小森成心後、隈部親氏、内容閑重載、長野運貞等相計、

田四郎兵衛運淸、窪田式部允重宗、山井丹後守賴直、 菊池庶流詑摩氏安奶子武包請LT、二十五代の屋

赤星大減少輔重生、隈部新兵衛賴夏、城彌兵衛昌峯、 形芒、此時上5、阿蘇大宮司威勢熾汇5、家臣

御宇田山城守面貞、佐藤日向守重秀、白石民部允朝等,L㆒諸城至守6せ、剩内修造の勅奉ㄷ勤之、

田安藝守能世、内田遠江守重國、長野備前守運貞三二四

通、鹿子木式部亟房貞、

、内空閑神十郎運貞、合志掃

立田伊賀守車雄、窪田大和三二三

仍勢居士さ號し、私亭を寺さん袈裟か 屋形稱す、惟長は神職を弟惟豊に讓で、其身は菊

けて、自ら古則碧巖を講ず、板井村神龍山碧岩禪寺 池家を纒、肥後守武經と改、所謂菊池家士八十四人

是也、同三年十月二十三日、六十歳にて卒去す、姉 は、城上総守頼岑、隈部式部少輔武治、赤星彈正少

子重朝、號肥後守松月屋形、交學に志厚く、隈府に重規、内空我備前守重載、田島右京進重實、小森

センクワツセウ

聖堂を建、後に當郡矢筈嶽の麓に住す、八嘉吉元年、赤松滿

祐、將軍義数を殺し~時、大内が内通にて、持朝

逞兵千餘騎を卒し、 筑前生の松原に出張し、少貳

戰ひ、首數百級を得、少貳父子は討負け、四十四騎

に討なされ、名古屋をさして引退く、持朝凱歌唱

て歸城せり、此時從兵城、隈部、赤星、原、木野、

白石、八代、以下粉骨碎身の働あり、持朝三十八歳

にて病死す、嫡子爲邦家をて、肥後守と號す、康

安元年三月八日、一揆起て隈府城を攻圍む、爲邦防

之不利處に、島津修理太夫義久、多兵を卒して一揆

を追拂ひ、急難を援ふ、然る處に、爲邦二男民部允

武邦、父を恨む子細有て、五百餘兵を帥ひ、益城郡

豊福の城に籠る、爲邦嫡子重朝と共に、豊の城

を攻め、強戦數度に及び、城兵悉く討れしかば、武

邦向敵二十四人を切て討死す、行年十九歳也、文正

元年爲邦三十七歳、嫡子藤菊丸重朝に家を譲り、剃

稃典の祭祀をなし、佛道を修す、又和歌

其臣隈部上総介源忠直、詩

を嗜み、連歌を興行す、

を賦詠和歌、文章に巧也、藤崎宮の記、及稲本八

幡宮の梁碑等、世に知る所也、明應二年十月二十九

號智顗梅屋正英雄公、

日、重朝四十五歳にて卒す、

重朝子能運嗣家、改肥後守、能直祖父爲邦が弟、宇

土彈正爲光は、能運を亡して家を奪んと、於所々會

戰す、能運終に明應九年、肥前高木に走り、爲光其

跡を奪ふ、文龜元年、能運奮臣等と謀て、一戦に爲

光父子を亡し、能運も深手を負ひ、八代に至りて卒

す、法號洪福寺殿義天明綱大禪定門、一歳に大永元年秋

岡村の山中に一寺を建て、號洪麗寺、菊池嫡流此時

にて斷絕す、因玆城隈部等相計て、甥肥前守重安

子政隆をして、爲邦が跡を継がしむ、然共、家士不

一致、永正二年十二月三日、八十四人連誓紙を以

て、阿蘇大宮司惟憲が嫡子惟長を招て、二十四代の

髪して活武朝、詫摩原にて切崩し、摩郡宮古寄手叉敗北 有るべし、希代の勇士剛兵なれば、助け置れ、肥後

す、足利將軍義滿卿、菊池を退治すべして、自ら を賜りて、御和睦可然さ、正勞して申ければ、將

十七萬騎を引卒し、大將小將、法令正敷、隊伍を定め、 軍も尤也、書を送りて宥られ、菊池は宮の命を奉

同七年三月二十三日發向有る、菊池も征西將軍泰成 じて、降旗を樹て肥後に皈り、将軍も歸洛有りんご

親王を大將さし奉り、新田の一族、菊池の一族、六 かや、永和二年、武政又大軍を以て、筑後半國を打

萬餘騎、太宰府に出張す、武朝、武教父子二萬餘騎、 從へ、肥前をも所々切散し、豊前後にも出張す

長門國に押渡り、將軍の先陣大内介義弘、山名石橋 大友親世防戦、數度利を失ひ、菊池既に府内に攻

門佐師氏、赤松越前守顯則等、五月五日に着陸して

少貳方へ内通して、三

る故、大友より嶋津、大村、

合戰ひ、菊他亦た大に勝ち、敵兵を追散、然も 方より肥後國へ打入んさす、武政軍を班して本國へ

嶋津、秋月、松浦等、軍方に馳加り、合志五郎定 返り、同國佐敷の城にて、嶋津勢を追返す、大村、

實、御船河内守盛安、 岩野、 鹿子木、牧、藤井、 託 少貳の軍兵は、不戰して引歸る、武政頓て陣中より

摩、本山、中村、本庄、津江、五條、皆々將軍方へ 病を得、菊池に踭つて

病を得、菊池に踊って、應永六年十月四日病死、法

降參せしかば、菊池勢は、日々に減し、一萬にも不 號志行大居士さ云、子左京太夫武朝、十二歳より

足故、武朝、武殺、中國より引退き、太宰府に着陣 戦場に出て、十六歳にて詫摩原合戦、大に利を得、

せんが、大軍難防さて、筑後高良山に陣を取る、 其外於所々有動功、應永九年三月十八日病卒、號玄

將軍もて豊後に押渡り、大友刑部太輔氏を先鋒 徹定朝居士、四十五蔵也、其子兼朝家を續ぎ、改肥

さて、高良山へ押寄る、武政は八千餘騎、出向て 後守、河尻實照さ不和にして、度々爭戦に及び、應

合戰ひ、數剋挑戦て、寄手三千餘を討取る、味方も安二十七年八月四日、終に實照を追出して、絶

八百餘人討死す、細川頼之、將軍に言上せしは、菊の下に領知を奪ひ、家を十郎持朝に譲り、其後父

池父子が軍立、聞及しに百倍す、軍勢一萬の強兵 子不和に成る故、蘆北郡佐敷に住す、持朝改肥後守、

1111111

戦ふ毎に利を失ひ、士卒を多く討せる事、将軍の御憤り、他門の嘲口惜く、今一度潔く一戦して、 數度の恥辱を雪んて、大内義弘、同盛見、大友親世、阿蘇大宮司を語らひ、同年七月三日、六萬八千餘騎を引卒、豊後路より常國に討入、菊池が城を攻んさす、武政是を聞て、子息武朝に四千餘騎を差添て、合志原出張す、双方既に對陣せんが、菊池の先鋒河尻左衞門太郎、如何思ひけん、手勢八百餘騎を引分け、今川方に馳加はり、味方を散々に射させければ、味方少し色めきて危く見ええに、大將武朝、父麗に不劣良將なれば、少しも不疼、猛威を振ひ、四千餘騎の勢を以て、渦巻きたる大敵に切て入、縦横に切立、一人萬卒に常て、愛に耐彼に突、 川尻、笠原、井田、奥山、四人の剛兵に進み、武朝を目掛討んせんが、却而各自武にて落さる、味方には城

五郎兵衛、赤星掃部亮、以下命を塵芥に比し、奮戦して切れば、さしもの寄手切立られ、右往左往に紛胤し、討る者二千餘人、今川、大友以下、又這回も利を失び、豊後をさして引退く、味方も討死八百餘人、手負を抜け凱問を揚り隈府城に凱還す、

1111 1

同年十一月十六日、菊池肥後守武光病死、熊耳山正

大

寺に葬る、號建寺大檀那都督武光聖巖大居士、

内、大友傳聞て、武政、武朝、此愁傷の虚を可討さ

相議し、筑後國田尻、黑木、草野、 蒲池を始め、肥

前の大村、諫早を催し、大友は豊前の兵を卒して既

に出陣し、筑後勢は船より、常長須の濱に着んさ

す、武朝聞て、合志六郎に二千餘騎を相添へ、筑後

國に向ふ、合志は夜の間に十餘里を馳て、筑後國竹

井原に逆寄し、間を作て攻蒐る、筑後勢は、思も寄

らず、一戰に敗北し、討るる者數を不知、肥前勢は

是に怕れ、出船にも不及、親世も是非なく引退く、

武朝機にのり、筑後國を攻んさて、八千餘騎を卒し、

自ら筑後へ發向すれば、田尻鑑安、要川にて奮戦ひ、

利を失うて降參す、其外の者共、大友に援兵を乞け

れば、親世自ら一萬餘騎を怪して、筑後の國に打出市の塚に隙を取る、武弱火押寄て、血煙を立て攻戦へは、親世散々に打負て引退し故、筑後の諸將一人も不愛、冑を脱し弦を迎して軍門に降り、菊池の旗下へ屬従す、今川、大友、大内は、戰毎に利を失ひ憤り甚敷、人數を催し、亦々常國に攻入しを、菊池安六年二月十二日、まだ東雲の暗紛れに、五千餘騎を三手に分け、少貳が陳に押寄る、待設けたる事なれば、少貳も魁合、主客相はらうて、山川震眩し、旌旗日に聳て龍麟動き、干戈霜に映して電光輝き、死生を瞬目の間に箏ふ、折柄例の問者、三ヶ所の敵營に火を放ち、此に潜み彼に顯れ、鬨を揚れば、衆軍甚だ周章騒き、武得たりこ陳頭に進み、責皷を鳴し白旗を振て三軍を進れば、少貳方しとろになり、少貳も手負從兵も討れ敗弊し、大友、大内を一所に成て、這々引退く、今川父子は五百餘騎にて蹈止り、鹿子木、草野、山鹿、本條、中村、津江、五條が勢

を追靡け、勝に乗て進む所に、菊池武教、伯耆、合志、赤星、以下三千餘騎、大友、大内、臼杵、麻生、高橋が大勢に突て入り、萬死を爰と責戰ふに、少貳方叉まくり立られ、戰負て引退く、今川、大内二度の戦に敗軍し、豊後の府内へ歸りければ、武は凱歌を唱へ、手負を助け、肥後國菊池の城へ歸陳す、今川貞世、同仲秋、初度の軍に打負て口惜く思ひ、同年五月五日に、五千餘騎の着到にて、筑前博多を發陳し、當國山鹿を経て、隈府の城を攻んさす、 武教兼て筑前に入置きたる間牒、此由を告げしかば、半途に出て可討さて、嫡子中務少輔武明を大將さして、二千餘騎を差向る、武明は隈府を出で、水島臺に打上り、敵陳を望見て、拙き敵の軍立哉、味方の勝利手裡にありと、三軍鳴を鎮めて、敵の近付を待居たり、寄手の諸將是を見て、菊池が入數小勢なるぞ、一揆に採崩さんと、猶豫なく眞一文字に攻上る、菊池は思ふ圖に敵を引受け、時分は能ぞ蒐れやさて

皷を鳴し、一同に喧さをめきて蒐り、切迫れば、

今川勢千五百騎、立足もなく坂中より、雪頽崩て引

ける、射伏切伏、又は西郷郷の瀬川に追陥し、二

百餘人討取ぬ、今川彌怒をなし、衆を働まし近付け

ば、武朝は葉室、赤星、隈部、東郷、西郷、蛇塚、

片角、加恵、本郷、以下二千餘騎を左右に立、眞一

文字に破て入り、息をもせす攻戦へは、今川勢

立られ、片時の間に千二百人討死す、今川今は爲方

な 討殘されたる人數を引揚、筑前國へ引退く、

菊池が勢も、討る者六百餘人、手負數多有しとか

や、 凱歌を唱歸陳す、今川貞世、九州の探題とし

て下向し、菊池を討んと、數回争戦に及さいへごも、

云所有り、菊池十六代肥後守武政築之住

居す、先祖則隆より武光まで、十六代は深川菊の城

に在居也、武政武威父に不劣、征西將軍懐良親王は、

嘉慶二年三月十八日、八代の館に薨し給ひ、御養子

征西將軍泰成親王を奉迎、九州の諸將出仕す、應

トレウス

雙の要害也、守山の城共云、世に隈府の城と唱れ

共、高野瀬村正観寺村の内也、東西四十四間、南北

百四間高二十間四尺、落地形より六十間、 山形

也、上の郭二百七十六間、下の郭四百四十間、東北

の間九十間、東北に山有り、城跡より三間高し、惣

隈府古城

菊池郡

張せし事あり、岩群は今久木野手永岩峰城の事也、

佐々傳配には、豊河内と書けり、河内、双方河内

とも書き、さよかはちと云所名は無之、

郭東大梯村の下牛縊谷より、土豊水村の下を境、南

は菊池川を限る、北は迫間川を限り、西は立石村の

下牟田より、深川村の下今の熊本への街道を限て、

城中也さ云、北後ろ茶臼山の根を、内裡の尾と云、

將軍の宮御座館之跡と云、城中に天満宮を祀る、又

犬の馬場と安四年、武政は泰成親王の命を奉して、隣好を求め、

故例を温て、借如瑤を大明に使介す、明高帝、翌年

趙を日本に遣して謝礎す、武政之を留て、将軍の

宮に謁せしむ、明帝、是を日本王と思へり、其後亦

仲猷無逸を來朝せしむ、多九州都宮方に属し、

菊池が旗下に随ふ故、足利義滿將軍、應安四年、侍

所の別常今川伊豫守源貞世を、九州の探題に補せら

る、悪技定特定職、大内介義弘を差添らる、筑紫博多

に下向の折に、常國にも彩り、阿蘇大宮司、河尻左

衛門太郎を招き語らひ、菊池退治の策を運らす、而

て軍勢を催促するに、九州の諸士、また日々に馳集

る、武政是を聞て、舎弟彦次郎武教に五千餘騎を差

添て、筑前に向はしむ、今川、大友、戸次、佐伯、

原田、臼杵、大野、長野、麻生、高橋、宇佐大宮司

以下六萬餘騎、三笠郡に隙を取る、一手は武藤筑後

守頼武、朝日、久保、那賀、三原、秋月、上座、下

座、宗像大宮司、以下二萬餘騎、 味坂邊に出張し、

菊池川の南に受て支へたり、折しも厳寒肌にせし

故、翌年睦月迄六十餘日對陳す、菊池は三百人の間

人を商夫に拵へ、百人宛三ヶ所の敵營に入置き、

三一九

十二月1於八代生害、

賴高

大膳太夫、天正九辛巳

巳年十二月二日討死、歲三十八、

法名柳江院越江蓮芳、

永幸

左兵衛佐、法名

非山蓮慶

-晴廣

法名了德

八代芦北球摩三郡領之

爲續

三耶左衞門尉、法名蓮舟、

永德

大喜

法名法名堯賴

前續

三郎

近江守

名契阿

法名立阿

-賴

前定賴

兵庫允、法

近江守

賴廣

彌三郎

迎蓮

賴長賴

俊

六郎法名

三郎

太夫

賴寛

賴景

賴繁

大膳

藤太

相長四郎、建久四癸巳年下

向肥後、同九戊午年入球摩、

六耶三郎

長氏

法名蓮通

站長

兵庫允

實長

法名實阿

長續

左近將監、法名

寶山道珍

太郎

宮内

長祇

義滋

少輔

從四位下修理

|義陽

太夫、天正九年

長毎

宮内少輔左

兵衛生

護高 水俣、深水合右衛門

大正十壬午十月、於

討之于時十七歳

れる城主なし、また島津より、當城井岩群の城に出

深川村の内、才河内村仁bb、相良氏砦汇、定

河内古城

浦淺右衛門嫡子

-賴護|賴甚

水俣吉左衛門、宇土郡浦住、郡

月十日死、法名春了院色雲敢空、

頼胤

水俣吉次兵衛、後市郎右衛門、正德二壬辰二

月十九日死、

-頼家

水俣紀伊介、後吉左衛門、延寶六午年二

延寶六午年七月十七日死、法名圓入、

頼秋

水俣久平、後吉左衛門、肥前有馬有戰功、

月、賜領知百五十石、

氏

紀伊介、後水俣吉左衛門、寛永十五戊寅年七

七月廿四日病死、八十二才、法名敢珍、

-頼元

深水耙伊介、後水俣吉左衛門、慶長二己丑年

始長武

頼寛

近江守

志摩

壹岐守

頼福 頼以

遠江守

頼高

戰功、後改水俣吉左衛門、薩州島津勢相戰討死

通頼

深水帯刀、深水三河守頼方入道宗方爲養子、有

うつ蝉の羽よりも薄き身を持て筑紫よしさはいか

御請申せしさ也、殿下は島津降参後、日州、豊州を

経て、常國阿蘇、小國を通り、南の關に着陣ましま

して、休甫を上方へ可被召連旨也、休甫は、紹巴に

憑て、某は相良譜代の士也、願くは可蒙恩発さ辭退

す、殿下休甫を召て、汝筑紫に馴て、花洛を不知哉

と宣ひければ、

鞍馬よりながる水はちからかは

と仰ければ、休甫取へず、

鈴のはなにか~るなみかな

州責の日、諸軍の陳せ所也、曽て相良義陽の弟、
大膳太夫晴高、於八代生害の後、其一子辰王丸護高
潜に八代を出て、當所の山中に潜れ、樹下釜底に潜
み、夜毎に出て民を悩まし暴悪す故、深水合右衛門
捜出して害之、其靈祟りある故、小祠を立て龍王
祟る、今存于南福寺後山、當城加藤家領分の時は、
中村監をして守らしむと云、天正十五年、秀吉公
征西の日、休甫幼主頼房を進めて、秀吉公を奉
迎、頼房は殿下の御先駈さして、薩州に入り、休甫
も御馬の後に従ふ、薩州千代川にて休甫を召れ、
等
伊東八郎三七
光子
上總介
周賴
正三
光

爲時

右京太相宰相

維維

-維維 武藏工藤

向伊東祖

夫

維永

時時文

藤太右京太夫實

信

伊豆宰相

從三位

守

工藤介

目代

中將

遠江守

兼輔

憲

爲維乙 乙包

少將信

宰相

中納

臣

陸奧守

高扶

足公

第河

越前守

雄友

大納言

右大

官

右大臣

號淡

○鎌足 不比左大

臣

大職

武智麿

右大臣

さ發句して、言下に安產なりしざ云、或說、此句は

征西將軍懷良親王の作と云、休甫此節思出せるにや、

球磨郡の野人、今に此句を產に張て得功者多と云、

相良氏深水水俣

露落て其ま〜かろき小松原

御暇を給り、賴房の供して水俣にかへりさ也、一

年義陽の妻室、難產に臨み、醫療寸効なく、危かり

に、休甫、

がいふべき

と云脇句を射返したるこ云、城邊に月の浦さ云所ぁ

れば、一人興せし也、攻城日を歷れども、寄手利

よせてはしつむ月のうら波

と云發句して、城內に射ければ、

秋風にみなまた落る木葉かな

監、水俣四郎、以下七百餘騎、原田敗走さみえたり、

治承壽永の比也、天正七年五月中旬、薩州より新納

武藏忠元、三千餘騎にて常國に亂入し、島津義久も

大軍を卒し、相良義陽を討へして、常國に討入り、

諸所の砦を責、大軍かこんで籠鳥の如し、相良臣簑

田信濃守、高橋駿河守、 宮原左衛門等、手を砕き防

戰す、義陽は自ら大軍を卒ひ、居城八代を發し、佐

敷に伏兵を設け、急に起て薩兵の先陣を蒐立る、然

ごも、島津の本陣は少も不崩、義陽は本城に引籠り、

島津は軍を班す、同年八月二日、島津一族伊勢守忠春

を大將として、鎌田、樺山、伊集院以下八百餘騎、

蘆北表に打入り、手分けして當城を攻む、城は義

陽の家臣、深水三河入道休甫也、小を以て大を防ぎ、

堅固にして城不落、寄手攻城の暇、連歌茶會して軍

勞を慰す、如何成好事の者か、矢文に

なく、剰寄手の大將春忠を、休甫が興力東喜三左衛

門、同萬左衛門等、川中にて討之、犬童美作、深水

彥左衛門、戦顯す、此時肥前國島原城主

有馬左衛門佐義純、島津家之援兵として、數百の

押しが、月の浦、美作島、古路島の澳、暴風俄

然と起り、怒潮忽ち舶艦を砕き、兵卒悉く漂沒す、

其後義久檄を走て、伯耆左兵衛顯孝、城十郎太郎を

語らひ、人数を合せ、三方より一同に、蘆北を責べ

隈本の人數向由、浮説區々止事な

さて、宇土

、依之、義陽八代より、後藤雅樂介、渡邊左衛

門を使として、薩州へ遣し和談を計る、 義久容之て

加久藤越より

和談しければ、義陽嫡子四郎太郎を、

横川、 加治木を過て、鹿兒島に遣す、義久甚だ悦び、

家名用の一字を與へて、忠房と名乗らす、忠房は

大口を経て、當國湯浦に出、八代に歸城す、島津相

良和睦しければ、爭擊聊か靜り、休甫元より惟風月

嗜み、戰諍を厭ひ、同郡百濟歸は、元来の領知さい

ひ、山間溪流の地なれば、折々勝遊し、朗月積雪に

心を澄せしさかや、又城邊に、肥前陳、筑前陳、宇

土陳、球摩陳杯云所あるは、天正十五年、秀吉公薩

三一六

守正廣、 大町次郎、宇野七郎、 出田遠江守、山本將

守正廣、大町次郎、宇野七郎、出田遠江守、山本將

三一五

八年より、筑紫四郎右衛門等、組の士七十六人、炎

鹿子木三河

郎盛質、山鹿太郎重光、山崎六郎重、

兵衛、松本次郎助、山内越後、三河彦右衛門、慶長

給ふ、

其後休甫は、古郷百濟歸に皈隠し、風月を弄して死 和名類聚抄に、水俣郷あり、鎌倉實記に、水俣四郎

す云、天正十六年、加藤家領に成て、平野五郎左 有り、太平記に、水俣の名有り、宮方の端城なる歟、

衛門長時、是は平野安次の一族也、竹内吉兵衛屋次、 姓名未考、村上顯興八代在城の日、家臣本郷式部太

其姓を不知、小代下總は兒玉黨にして、玉名郡筒嶽 輔家久、當城を守る、此本郷氏は、天武帝の裔、

の城主也、森本儀太夫一友は、右京太夫季國が嫡 櫻町權太夫、右家武者所の的孫、従四位下右馬太夫

子にして、 加藤家草創より爪牙の臣として、武者奉 右宗の末孫にて、伯耆家寄一家代々の長臣也、菊池

行を乗帶し、治亂を謀り、朝鮮所々功有り、世の知 六代肥後守隆直、筑前國原田太輔種直、鉾楯に及び、

所故略之、以上皆城代也、其後加藤内匠、八木 相從兵、菊池五郎隆澄、阿蘇大宮司惟安、 木原次

水俣古城

城也、依之鶴の城さ云、

赤崎古城

其後深水宗方入道休甫再生す、天正九年、相良義陽

土俗傳て云、古此城攻れごも途に不陥、希代の名

山崎武藏守殿

一もこの花にあやなや春のかせ

五月一日 休甫追悼、

義陽判

仍而

向後扶助之事、於有知行者、不可有無沙汰候、旁

無綏御心懸肝要候、以上、

今度到津奈木、百日可被相勤之由、可然候、々城番と云、山本郡内空閑佐鎮當城にて討死の事、

山本霜野古城の下に出、深水休甫は、一子津之介

宗滿、南郷高森城攻の日、 津留大藏さ戰ひ討死す、

討死の後、義陽の嫡子長房、幼病身成る故、東以

伯と計りて、家事を整へ人吉に移らしめ、長房夭死

故、二男義房を守り立、秀吉公天正十五年の夏征西 津奈木赤崎村にあり、城主不分明、

日、奉迎て家系を全うし、秀吉公甚だ眄顧し跡暫く番城さす、一書有り、如左、

高尾古城

高叛逆を企て行甚しき故、八代城下に押籠置、其

野角古城

高さ小野チクマ

古城

才木村古城

中尾古城

古城

市岩群城とも云、岩峰城とも云、又久木野城とも云、

大仁田城

云

鶴平古城

村相良臣東藤左衛門、同新左衛門城代たり、年序未考

三一四

之、同所千代村は 東藤左衛門嫡子乙千代丸が館の跡

と云、不知是非、吟八千代

大野村の内、桑澤見村にあり、城主相良家臣酒井藏

人と云、

と大仁田村にあり、相良家士大仁田玄蕃在城す、肥 俗説薩州より城を築き、勢を入置しとも云、 又久木

後玄蕃と異名すと云、年代未考之、

野瀬野四郎と云者居城也、 或説相良四郎と云、 又相良駿

河守頼雄居城と云、何れか不知是非、

市野瀬村にあり、城主相良家士市野瀬輿三左衛門宗

氏と云、年代不分明、

才木村にあり、城主姓名不分明、一説相良家士安永

兵部左衛門、此邊にあまつけの岩さて、巖泉絕

景地也、

嶽湯浦本村の内にあり、小篠の城とも云、山上水有り、

柳中の西村の東也、城主島津家臣二階堂阿波と云、

久木野村の内、古里村にあり、城主相良家臣菱刈左

兵衛と云、島津家臣とも云、

津奈木古城

百間、周廻千三百間、南北二百五十間、東西二

百間有り、建武年中、村上顯興八代麓に在城し、當

所に城を築て、一族加悅越前守泰行、三谷丹後守行

長、竹萬内兵衛氏安等をして守らしむ、其後永祿

の、相良家臣東右衛門佐、元龜の比、東尾張守久

長と次第す、其後深水三河守宗方入道休甫、天正之

野角村にあり、宮崎城とも云、相良家臣犬童丹波守、初、相良義陽
の弟大膳太夫晴高在城す、然ごも、晴

或は鬼塚七右衛門守之とも云、

數を分ち、多は八代へ差遣す、同十五日、四人の者

共酒肴を携へ、入城の賀儀を祝す、盛大に喜悦、

を呼て酌を取せ、順逆數獻に及えが、安

田は其日、南の方杉本山の境、堀切を深すべえさ奉

行して、其座になし、坂井、盛定に願て安田を城上

に召出し、盛定、安田に盃をさす所を、坂井太刀

を盛定に切付、勘兵衛不透二の太刀にて仕留め、大

手の櫓に走り上り、只今梅北を打取たりご呼りけれ

ば、本丸に在り合ふ梅北が者共、あはてふためき、

折節炎暑を凌んさて、佐敷川に游泳し、又は市店に

居る者も、丸踝にて酒を飲み、焼酎を酌て暑を紛

れ、思ひ儲ぬ事なる故、赤踝に刀を捨、山林に迯

隠れ、暫く命遁れ援かるか、這廻計りなり、盛定

が弟民部盛行は、漸々城に駐着んとせん所に、平等

寺杉本院の仁王を見て、敵ぞと思ひ放つ、今に仁王

の胸板に射込矢有さかや、城に駈入んさすれご

も、門を堅めて入事不叶、終にはこ~にて討れける、

其外の残業をば、湯の浦、 津奈木、水俣の終道、野

山をつたいて迯廻るを、老若男女出合て、奈刀鎌、

力ら竿、棒、棒、鳶口、熊手の類を以て、追詰追詰

三一三

と、大に謬れり、豊前は矢部

岩尾愛藤寺城の城代たり、

同東の古城

慶長五年、石田三成、宇喜多、 島津、 小西等、濃州

關ヶ原一戦の日、薩兵當城攻撃の説有之故、加藤

加藤家の時、長

大和、井上勘兵衛等、三十餘日籠城す、 佐城代

坂井善左衛門殿

八月二十二日 御朱印

一人も不殘打殺し、盛定が首をば、 湯地坂の山下に

獄門す、四人の者共、豫て人吉に加勢をし故、相

良留守居より、人數上下六十餘人差遣す、折から梅

北を討時に、向へ町に控へたり、向町にて一番に

敵を討は、覺玄さ云者也、斯(四士より、此旨を

隈本の留守居へ達し、名護屋へ召招かれ、善左衛門

を御前に召れ、今度の計略にて、城を速に取返し、

剰刺賊將梅北兄弟を始め、悉く討取事、莫大之忠勤也

さて、甚だ感じ思召、御盃を給はり、感状を賜はる、

今度梅北初逆徒等、悉く刎首之條、神妙之働、無

比類思召候、依之、 淺野彈正少弼被仰付、御人數

被差遣候、其元惡逆同意之族尋出、可加誅伐候、

猶長束大藏太輔可申也、

門、井上彌市四人のみ、留守兵として、其外被官奴 數を分け助勢あらば可然とすめければ、梅北四人

僕二十人にも不足、殊更勘兵衛は、同郡小田浦に居の面々無二心の體故、心をゆるし、尤同じて、人

に従軍し、坂井善左衛門、 井上勘兵衛、安田彌右衛努々氣遣あるべからず、本郷甚右衛門方無覚束、 人

に従軍し、坂井善左衛門、井上勘兵衛、安田彌右衛

、義弘幸人数、大口まで出張す、 成 揚、留守居の面々、唯今城を渡さるべし、否に及ば

政台命は不知猥に境を侵すと心得、芦北の防を ど、焼落すべしと罵りける、留守居の共、大に驚、

相良義房に頼故、兵を佐敷津奈木の雨所に遣し、 いかぶはせん唆しが、焼落されては不叶と、興左

島津を防て守之、然共義弘不和と聞故、人数を

城外中村の客屋に片付、深水喜

衛門が妻子を始め、

人吉に引取しさかや、同十六年五月、成政伏誅の後、 兵衛を附置、若梅北を討損せば、妻子を害し火をか

加藤家の領になる、城代加藤大和重次氏、江州

後数與左衛門、体 ~べしさ云合、城を開て梅北に渡し、四人は直に梅

澁谷の奥力には坂井善左衛門、井上勘兵衛、安田彌右 北に降参す、梅北悦び、四人の者共を、無二心者さ

衛門、天野加右衛門、井上次郎兵衛、村田九右衛門、賞して召使ふ、四人は様々謀慮を廻らし、或時、四

井上勘右衛門、 田中善太、加藤重次隊下さ共に朝鮮人、盛定に云けるは、當城は我々無異儀、如是なれば

島津兵庫頭殿

十月廿三日

石同

郡位尾

湯の中納維盛の妾腹也、平氏後落の時、襁褓にして、乳母に常八代郡

肥後表之儀、以御書被仰出、被差下伊集院右衛門

せり、然るに 薩州島津祁答院歳久入道時、

左衛門盛定、

肥後一揆を可鎮由の命あり、此時義弘への書簡云、

111 111

太夫、於模様は委細被仰含候、有御相談、御行等

肝要相心得可申入候由、始末相見御書候間、不能

詳候、恐惶謹言、

石田治部少輔三成判

長岡兵部入道玄旨御判

國湯の尾外城持梅北宮内原三宮社の社職を頼み 成長の後

、外城時に密謀り、當入代佐敷の無人を伺ひ、本郷

甚右衛門を八代へ遣し、宮内左衛門は佐敷に來り、

名護屋へ交代の人数、汐待して海路を可行と読りて

徘徊し、入數の揃を相待、文政三年六月朔日卯の刻

に、都台七白三十餘人、城に押寄、盛定前んて大音

如是台命に依て俊頼の歌に因れば、何れ田浦を野坂の浦と云成べし

、

當城其始を不知、建武の比、村上顯興當國に下り、

八代に在城し、當所に砦を構へ、一族上神出羽守重

光をして守らしむ、其後を不知、 永和二年、菊池武

政打出、筑後半國肥前の内所々を切取る、豊後にも

折々出張し、大友親世防戰數度、勝利なく既に府内

にも攻入故、薩摩の島津、肥前の大村、 筑前少貳牒

し合、三方より勢を出し、常國に打入由聞えし故、

武政急ぎ本國へ帰り、薩兵押へ撃退けば、肥筑勢は

怖に不足とて、城三郎を大將さして、逞兵三千餘騎

妹脊そなへて幾代經ぬらん

芦北の野坂の浦のうつせ貝

花岡城共云、佐敷古は佐色と書、和名類聚抄に、桑

原郷と云、佐敷の北田浦の南佐敷太郎坂あり、所謂

野坂成べし、佐敷山の垂尾にある坂なれば、たれを

坂を轉して、土俗太郎坂と稱する成べし、 赤松、津

奈木も太郎坂と云、佐敷山の垂尾坂、即ち野坂也、

里と云分て、野坂の浦を云、田の浦なるべし、此所

に石貝有り、

佐敷古城

1111 1

輕石の尾に陣す、義久は水俣に在て、諸所の砦を攻しむ、義陽入代を出て、佐敷に兵を伏せ、接戦數度に及び、勝敗未決ごも、元より衆寡敵し難く、義陽は八代へ引歸すと云、天正の初より、相良領分となり、定れる城主もなかりしが、同十五年、秀吉公征西の後に、當國を佐々成政に紛れごも、我意に依て國士背き、一揆蟻の如くに起る、此時島津義久が家士伊集院右衛門太夫忠棟、在大阪なりしを召れ、ジ

を相添、同佐敷にて合戦し、薩兵を追退く、肥筑の兵は案の如く、不戰して本に引退と云、應永二+七年、菊池武病死し、其子肥後守兼朝武威を奮ひ、河尻質照さ戰ふ、實照が臣佐河田玄蕃、反忠して兼朝勝利を得、朝後に世務を厭ひ、佐敷山中に住し、六十二歳にて卒と云、永祿五年、薩州島津家

臣梅北宮内左衛門、當國に打入り、水俣次郎

卿方を先手して、二千餘騎佐敷太郎重家が城を攻

落し、重家討死す、其後相良家領分となり、天正七

島津修理太夫義久、入數をひ常國に討入、相

良義腸を攻んさす、先陣は錢亀が尾に冷た屯し、義

久弟兵庫頭義弘能群に向ひ、 島津右馬頭幸久等は、

に集り、從士十二人腹を切りし也、古墳千代永に 城主姓名不分明、

同邊田の河内城主村上家臣、園田伊豆入道宗林在城

せんが、或時宗林二見城主南大和守示し合、桑原

を討んと議る、南も相良家士なれば、桑原に隔心な

けれ共、宗林に余儀なく頼まれ一味せり、宗林は無

下に小身なる故、頼しさかや、宗林入道士卒を催し、

夜中に桑原が城に押寄攻蒐る、能登は不思儲ごも、

事共せず、鎗を捨て眞先に出で、宗林を手下に突伏

首を取り、主従八人、八面に切立れば、敵兵は大将

を討せ、縦横に擾亂す、桑原は急難を遁れ、剰宗林

を打捕、翌朝未明に田の河内城を乗取べしさて、馬

上に鍵を提げ、眞先に前み行く所に、宗林が被官本

山仙左衛門、麥隴に潜れ居て、唯一矢に胸板を射透

しければ、能登を見てさ白眼み、己れ下郎、我

を害す、子孫七代祟るべしと、齒を切て嘆り死す、

仙左衛門は、畦を傳ひて失ぬ、能登が従士追々に 舟倉村にあり、相良家臣愛甲尾張守常吉在城と云、

馳着て、麥隴を捜せごも、行方不知、故に死骸の前

舟倉古城

田野宇楚古城

日羅百濟國より歸朝して爰に居、故に百濟歸と書さ

云説有り、當村に城跡所々にあり、其主未考之、數

代相良の領分也、永祿天正の間、相良家臣深水三河

守宗方領知なりしが、爰に入道して休甫號し、津

奈木、水俣に城主さして、武を張り文を捨て、名譽

を顯忠節を専にし、終に世塵を避て、此地に歸隠

すさ云、當城は宗方入道休甫と云、一説愛甲尾 世諺に

百濟来の七秋とは、秋、蠶秋、梶秋、米秋、漆秋、

麻秋なり農桑の事繁く、豊饒の地也、 今は久多良木

書

クラ

年代不分明、後に阿蘇家臣草壁文右衛門城主たりさ

云、不分明、子孫は日奈久町西寶寺と云、

久多良木城跡

右同所にあり、相良家臣桑原能登在城す、永禄年中、

村上家臣園田伊豆入道宗林討死の事、前段に有之、

、

千代永本村古城

碑、年代等不分明三一〇

存す、小鏡には、日奈久城主山崎伊豆と有之、磯城腰害

田の河内古城

三〇九

其母妙珍比丘尼、三

世を捨、隠遁して頑禪さ號し、勝の地を撰んで、 年此所に在陣、砦を構へて居たりと云、古人の口

同所南古城

國君命を下して大舎を搆へ、三等の涇渭を分ち、日

村上顯興八代在城の日、家臣村上太郎太 興善在 夜の制有り、那和氏の私記に、益城郡豊福の城主伯

城と云、其後勝田大和守宗房在城、一説曽田大和守 耆守顯興、芦北郡湯里に寓す、 時に田浦の城主進悪

云、又園田大和守云、此三人名同し、名字も似 左衛門勞使价して駕を招く、然ごも顯興不抂駕、

たり、同人歟別人歟、不分明、

故に進氏憤含事有り云々、進氏は村上の族、湯里は

二見古城

年中、

吉尾村にあり、相良家臣吉尾大學在城す、年代不分とは、山鹿、垂玉、杖立、栃木、當所也と云、寛文

明、

日奈久叉火名後、又湯の里と云、常國五ヶ所の温泉

吉尾古城

比丘尼が城舊跡

田の浦の内猪野山村にあり、 田浦相模守俊國、數代に有る古城主を、勝田大和守宗房と云しさ、不分明、

在城と云、年序不分明、

二見南の方にある古城主を、南安藝守種重、北の方

大木山門古城

要害堅岡の地也、山上をば錢檀と云、又一説に、

相良氏領分の時、此石城を築き、番勢を入置、定れ 又當村の北に、君が淵有り、芦北郡中無双の絶景、

る城主はなし、

當所に居をさめご也、 今の松庵 其遺跡也と云、

同所西の古城

今の日奈久也と云、進氏系圖を考ふれば、村上は一

永祚の比、相良家臣南下野守在城と云、一説に南大 族とは不見、實名は云、初の名は田浦左衛門

和守在城と云、同人が父子、 未考之、一説には曽 太夫、法名榮寶慶秀と有り、伯耆物語には、進眞弓

田大和守在城云、不知是否、嘗聞菊池十四代肥後 は寄一家とあり、何れか不知是、山上に時薩州本

守武士、大智禪師のに依て、叔父武重に家を譲り 鄉能登と云勇士出張討死の後、田浦氏代々在城す、檜前政鷹取日曜の子孫、田浦と

稱す、相模守實俊と云しも、右同所に在城さ云、 田

口黑古城

を築て居りにや、

村上顯興の一族ヒノクマ

せし者には非ず、名古屋より交代してる薩摩の人

數也、此段佐敷へも申さるべしさ、山伏を以て當地

の大庄屋助三郎に断り、案内を取て佐敷に越え、向

八町に至る時、球摩より來りし佐敷への援兵、端な

〈出合、一人も不殘討取、甚右衛門は陸地より田浦

に来る時に、赤松に陣せしを、助三郎、郷中の男女

に下知し、一人も不殘討殺す、甚右衛門をば、助三

郎馬上より鎗付に、突れし鍵をたぐり来れば、助

三郎鑓共に刎倒す、時に鬼塚藏人落合て、甚右衛門

が首を取る、赤松坂の山下路傍に埋む、一株の松今

に存す、其外の者共も路傍に埋め、一塚の苦底に名

を埋むと云、此時田浦に城代あらば、何ぞや助三郎

一人のみ下知せん、此助三郎が先祖は、堀川右大臣

俊房公の嫡孫、檜前政九八代の郡司として常國に下

り、其子孫建久三年芦北七浦を押領して、代々當所

に在城すと云、助三郎子孫、今

進實春

大庄屋だり

は、別に城家百五十石を賜、代々相續す、

武俊

助兵衛、寛永十五年七月、從御當

騒動を靜む、仍て加藤家より高十石を賜ふ、

長國正成 門を討取、其後も藤兵を追退、慶長の比、

助兵衛、文祿二年、於赤松坂、東鄉甚右衛

田浦相

國直——元國——長國——兼國——國堯——國宗

模守、

田浦の城主、薩州勢と戰ひ討死と云とも、幼年より

山奥に閑居す、何某の時より城主と云事不分明、

-是治ー安次ー安國國恒一國吉國清

政丸より代不分明

七浦を領す

〇俊 房

檜前政丸

建久三年芦北

天智天皇三十餘代堀川右大臣 俊房嫡孫

田浦氏系

浦の風光、四山祭りて、灣々たる曲浦、海山河淡

墨に入る、古所謂野坂浦、野坂里と云は、即ち此浦

歟、當所石貝あり、俊頼家集うつせ貝の歌は、此石

貝なるべし、政麿の子孫、芦北七浦を領すとは、日

奈久、田の浦、津奈木、佐敷、湯の浦、水俣、百濟

木也さ云、獨り田浦のみ相續して、當城に居れり、

今の邑長田浦助兵衛 其裔孫也、

三〇八

三〇七

興善寺村にあり、本丸高百十間、上の廣東西十四間、戻し、當所に来て、佐敷の様子を聞、梅北等に奥

興善寺古城

云、爲朝の馬蹄石ありさ云、

龍峰の絶頂凹なる所を、鎮西八郎為朝居之たりさ 北盛定、佐敷花岡が城を奪時、本郷甚右衛門、矢崎

佐々刑部吉重在城すご云、吉重は吉が末葉なるべ

し、又一説に、相良家臣佐々木宮内左衛門高光、天

正十年の比在城さ云、又伯耆家の臣さ云説もあり、

按るに、佐々木宮内左衛門高光は、相良の臣にあら

ず、又天文の比には非ず、村上顯興八代在城の日、

一族佐々木高光を岡の城主と云事、伯耆巻に出たり、

龍峯古城

其始を不知左衛門重次、彼地に軍立し其隙を何、薩州梅

田の浦古城

村上顯興家臣、佐々木宮内左衛門吉廣在城、同顯孝

岡南北十六間、郭四十八間、近所の山三百六十間、二

の丸高山形に四十六間、上の廣十間十六間、曲輪四

十三間、總地張三百四十間有之、村上顯興家臣本郷市

正忠行在城、永祿天正の間は、相良伊勢守城主とな

り、本城に居れり、其弟越中守は本城の西に居る故、

越中が城さいひしを、御當家御入國より本城と云、

南なるを新城さ稱すと云、

古城

次郎、同三郎、島

津勢に攻られ落城と云、古墳あり、伊賀野は強弓精

兵也しさ云、伊賀野先麗は、平宗盛の臣伊賀野十兵

衛宗清さ云者也、平氏沈落の後、當國に下向して住

居せ云、

郡

葦北草場古城

早尾村にあり、天正の比、伊賀野る、

、里俗上の城と云、建武の、村上顯興

八代在城の日、其臣進忠兵衛實春城主たり、進氏は

那和の寄一家と云、其後城主未考之、天正十六年、

加藤家領の時、加藤輿左衛門、當城代と云事は甚だ

謬也、其比與左衛門は、佐敷の城代にて、當所の事

をも兼帯せと成るべし、文禄二年の夏、朝鮮征伐の

日、與内藏介當國に西分八代麥島の城を何ふ所に、盛定

が謝れたるを聞て、八代より引返し、雑人は船にて

の末裔にして、菊池家二十六代義武の老臣也、天文

菊池家臣木野氏代々居城と云、木野親則、永正二年、二十年の比、忠誠の事に依却て義武が爲に誅せら

大野古城

吉本村にあり、八代往還東の山也、今本丸高さ六吉本古城

平家が古城

始さかや、

菊池義宗讒伎を信じ、隈府に招て、親則主從九十六

高田平山にあり、相良家士東越後在城、

天正の

平山古城

三〇六

比、同臣桑原和泉守廣政在城、島津勢に攻られて退

城、叉討死共云、廣政嘗て遊舞を好み、落城の後、

其子浪して踊をなして渡世す、 是今山歌舞妓春

駒の猫谷日山の上にあり、山頭凹也、平氏没落の時、

族隠れ居たる所と云、又緒方某暫く爰に隠れ、五

庄白鳥嶽に潜るとも云、

間

三尺、上の廣南北三十二間、東西十七間、上の曲輪

九十間、地張百三十六間、二の丸高さ四間三尺、上

廣南北十四間、東西十間、上の曲五十間に七十間、

建武之比、村上伯耆守顯興の臣佐々木宮内左衛門

廣城代たり、 巻に、八代岡の城代吉廣と有り、

然れに吉本の城は、其後に築たるや、天正の比

は、相良家臣東掃部介城代と云、

人、一人も不殘討取る、此一件を、木野殿崩れさ、

琵琶法師 ひさかや、其後東氏城主となる、東上

野子伊勢守と云、菓子掃部亮と、天正九年の冬、

野原一戦の日、一方の巨魁さして、軍士千五百人

を領して、松尾の城を攻んこす、 城將伊津野山城守

討出て、日和瀬河原にて討死し、即日伊津野四郎左
衛門掃部を討取ると云、又一説に、天正十年、薩摩
勢責破る、蹴れ橋の軍は此時也、島津が勢寄ると
聞、掃部家士拵、早尾に出張して防戦す、東が先駈
の士悉く討死す、拵の橋、左京が橋さも云、早尾迫
戸口に人塚とて、戦死者を埋めし所あり、大塚二
つ皆朽骨也、城内より薩摩口の表を、第一と防し故、
敵裏手に廻り、直に本丸を責破る、東部も討死す、
重代の家士田、高橋、日瀬、筑間など、勇士出て
討死せん故、城内無勢也、今に鉛玉地中に朽て多く
出づ、狭く築添を新城と云、大野、吉本共高津賀
とも云、八代高塚城主木野對馬守親則は、菊池氏
〟古麓と稱す、山鹿町共稱す、小西行長領知の
り
以て又八代に皈城すさ云、義陽が弟大膳太夫晴
高、津奈木在城の時、叛心亂行に依て、當所の小谷
に押籠る時に、響野原一戰有之、義陽戦死の由を聞

きて、復び叛逆を企てしかば、諸臣相談して生害せ

しむ、其霊祟り有故、相良天神號し祭る、其子辰

王丸護高十二歳、遁れ出て、蘆北水俣山中に潜る、

義陽の首をば飯田山に埋る、同年十二月八日九日、

麓の市店を球人吉に移す、此時義陽の臣東以伯が

事、蘆北の條下に出づ、天正十一二年の比は、島津

義久當城に出張し、犬追物を興行すと云、家臣伊集院

忠棟入道幸侃を城代とす、同十五年、秀吉公征西の

日退去し、秀吉公より佐々成政承り、家士を在番と

す、成政落去の時、福島左衛門太夫正則、當城を守

奮記に有り、顕興は没後、彼が忠義を思召れ、 護國

山顯興寺を建立之事、名傳行銖に出づ、村上伯州

文明年中迄在城す、長享年中より天正九年迄、財

相良七代相續して在城す、天正七年五月中旬、島津

義久大兵を以て當國に攻入り、蘆北を侵す、義陽居

城麓を出、蘆北佐敷に人数を伏す、然共衆寡敵し難

の、

光

賴寛━賴景

三〇五

球摩侯系也

佐、實は忠房弟、

早世

以下略之忠房

長每

四郎、

太郎

四郎次郎、左兵衛

晴廣

義准

-晴高 大膳大夫

宮内少輔

義太郎早世

陽

-修理太夫

━定長 堯賴━長續爲續長每 守

-頼俊一長氏———頼廣━定頼━前頼

近江

-頼 五郎、山北氏

宗頼四郎、山井氏

二男、

一長頼

に下る

祐三郎

て球摩

遠州相祖

孫

は大庭

○大職冠鎌足

光頼

藤太夫、

右京大夫十三代

周頼

時、城を麥島に移すと云、世に麓五城跡を説て、

勝尾、鞍掛、鷺尾と云へ共、今考ふるに

城、丸山、

此五山の内にては、新城のみ城跡と見えたり、五城

とは、好事の者の伝習はしたると聞えたり、

相良氏略系

云、文

百十間、家臣小西美作

店

小西行長領の時、麓の城を島に移築く、城の惣郭

[百四間、西四麥島古城

上土村六月十五日に、梅北佐敷にて討れたる由聞えければ、

宮の原薩兵悉く敗北す、慶長五年、加藤侯の領に至て、吉

村左近、蜂須賀與兵衛、野尻九右衛門、 在番にて城

代なし、同忠廣侯の時は、長臣加藤右馬改て右馬允、

元和五年三月七日午の、大地震に城櫓崩壊す、同

年忠潰快、 大樹秀忠公の受命、城を徳淵に移す、

古麓古城

八代郡

古城

鄉甚左衛門、谷口五郎右衛門、同因果之助を討取る、

へ難き所に、

松浦筑後久、此働きわたるべし、

横田氏敦校正

古城考巻之下

森 本一瑞

三〇四

宮原町三宮社の前田畔にあり、城主相良家臣宮原左

兵衛尉橋公忠、天正年中在城也、物具して入定すさ

云、共子十郎公吉十八歳、 宇土岩屋の城主舵社諸

字土岩屋城

也、南鄉高森城にて討死、子孫狩相良氏に仕ふさ云、

上土古城

にあり、城主相良臣奥善寺城代相良伊勢守、

與力岩峪主馬忠久さ云、

案に城代行重朝鮮に出陣し、溜俊之薩兵當城は麓村東の山上也、東丸高さ二百三十間、上の

曲輪百五間、惣地張四百十二間有り、後醍醐天皇第

九皇子征西將軍良懷親王、常國に御下向、菊池よん

森山御所に移らせ給ひ、建武の初村上顯興、菊池を

憑て常國へ下向し、暫く當所に在城して、豊城に

移り、常城には内河彦三郎眞信入道無三、同信定、

同忠宗、本郷修理太夫等をして城代とす、尊氏將軍

延元元年春、一色太郎入道道獻、仁木四郎次郎等を

して、菊池を責めて、直に内河の城を攻むと云事、

祿元年六月、薩州義久入道龍伯の弟、 祁答院左衛門 太平記に見えたり、此時は無三在城成るべし、内河

尉歳久入道時簑、逆謀を企て、梅北宮内左衛門、本は村上家臣也、弘治二年の比は、村上顯興在城の事、

或說城代小

にをして守らしむ、近 所涕供、又前に

◆行重は行長が弟共

徳淵の海濱、後に球摩川有り、梅北一亂記に總

天球

品

烏南國

栖下富草岡麈鐘動

附

内

力馬

郡 郡

十ク

本田岡 本 城木

錄

五所

ク

所

-

尺ヶ

屋城

榭

野

山

中久志 湯 入

村寶岐 浦 江

上城深松西

浦場 田木原

一本松山

鶴.

大才永城木

島

力

崎

子津 池 平戸

鐘

志本

1

下

城

柿渡武

城

三〇三

妙 見 山

尾

大小 畑

野地 宮

鳶

大

護守芹録

郡

阿

本

神口,

本原

南浦

菊

郡

木木内府

野

郡

郡

>

所目

八

宮代

古城考巻之下

久内蘇陳隈池津才田同田北吉野牧 楚籠岩鼠牛 染茂 赤小佐比口

,

藤

野

塚神戸頸

土里

崎嶽敷

湯河城野

虎城水野同

岳上嶽中

口山 俣 東

同所西

草麥

塲島

山小高二

入出,河高伏田

岡古

邊 方

河山

鶴森塚 嶽田

内尾木内門ㄌㄚˋ麓

比丘尼力城舊跡千代永本村

大上留

黑

野ㄓㄓㄨㄚˇˋ

石城平高

菊

鶴大久吉

龍

仁

良

樋山 城

池

平田木尾峰山

城力櫻社市舟尾倉瀬倉見寺三〇二

滿願寺興 善 寺

滿平家力城

鼻

城城

北

尾E

坂

木

梨

野

中二

中窪田村にあり、合志氏の元祖此所に堀を穿り、大

九萬石古城

を知らず、

騙す、是否

離れ

町にありと、合志家基は、佐

合志家基は、佐々木近江源氏也、叡山の

貢物を取立つる役なるに、或時麁略有之故催促の

使、度重れども不出合、却つて怒り及合戦、敗弊し

て、他國へ走り、人を頼みて、向後疎略す可からす

さ肯ひ、復疎略ありし故、山徒集り調伏す、後之様

様祟り有る故、吉良、大林、石坂、渡邊等を從へ、

忍んて出奔し、衆徒等の道を遮り塞く故、伊勢路に

懸り、播磨より豊後竹田の津に航海して、後當郡眞

木村に潜居すれども、叡山の聞えを恐れ、名を隠し

て、二郎丸、三郎丸さて、紛居たり、子孫二つに分

れて、一つは中窪田に住めり、一つは住吉に移り

長網

是を山の合志、里の合志の分れと云ふ、 ば、

長二年に、合志半郡の地頭職となり、同郡眞木村

云 に居住し、合志民と稱す爾來子孫相続して、住吉

舘に居れり、合志氏両家あり、中原姓竹迫の合志氏

を里俗地ノ合志と稱す、源姓佐々木氏を下り合志氏

さ稱す、川久保日記に、と希也、彼がの日記

川久保三郎と云ふ者、合志生

なり、子孫枯木

三〇一

誰か此矢に中て可死と、慄怖れて陣を引く、此

時二鹿木川上より二郎兵衛高則さ云者、材木を舟さ

筏として、夜々城内に兵糧を入れ故、此所を夜

船と呼ぶ、謬りて湯舟と唱ふ、今にも逆茂木、矢の

根の類、土中より出つると云ふ、

湯舟村にあり、傳に云、仁平久壽之比、鎮西八郎爲

朝、常國に下り、暫く在城す、九州の豪士來り攻む、

時に爲朝寄手に弓勢を見す可して、八町斗隔てて、

柳樹に白鷺の宿するを射落す、敵方に此矢を取傳へ

龜城古城

天正之頃、城主稲葉安藥守と云、合志家之人歟、未

考之、後改保帆、因幡加藤家に仕官す、

垣を結ひて住める跡なりしを、天文の比、伊勢守親

賢、世外となりて後、此所に居住せしと云ふ、

久保田古城

眞木古城

齋藤尾張守實家、越前國より當國へ下り、古郷の城

地に彷彿たりごて、城を築き、古城と呼ひて在城す

と云ふ、其後の城主不分明、實家が子孫古城村にあ

りと云ふ、

古城村東山上にあり、文治年中、齋藤別當實盛が子、

古城村古城

云ふ、

津久禮村畔、白川の頭にあり、合志家全盛の時、其

今石古城

居城せり、然共水遠きゆゑ、後に廃城と云ふ、

て、敵三〇〇

大津にあり、大津掃部亮宗連が先、大津十郎欠

は小勢ぞ、後勢の不重先に打散せさて、先に

白川に馳込めば、騎歩一同に我先にと打渉す、薩兵

はて謀し事故、一揆々んて弱々と引退く、城兵彌

勝に乗じ、隊伍を亂して追蒐くる、敵は思岡に引入

れ、取て返し取韜みて戰へば、城兵は不意を訪れ、

ごろに成って敗北す、 本田勘太夫、太田黒小平次兩

人は、長刀を揮うて漸く凌ぎ、若松弓削が屋敷に込

入りけり、寄手は荒手を入れ替へ入替へ、手繁く射

させ切立てければ、城將狩野介創多く被りて、三日

の夜死しけり、南の壁如斯一戰に責破り、左京は直

に竹迫の城に攻寄すると臣石原狩野介吉利居城して、竹迫南手の防たりと云

ふ、天正十三年、薩州島津義弘人數を出し、 常國諸

所を侵掠す、斯時薩兵川上左京をさして、南の手

より攻来る、故に今石城内に持口を定む、石原狩野

介吉利をさして、同三郎右衛門、同八郎、眞鍋常

陸、弓削主膳、同軍兵衛、渡邊主水、同五郎、同新

八郎、本田太夫、田次九左衛門、大津掃部亮太

田黑一統、若松孫三郎、野田大藏、 加藝丹後、平川

内臓、大堀本周防、今村和泉、大島内膳、川久保隼

人、長尾清左衛門、 坂田勘左衛門、青木與三右衛門、

左田忠左衛門、月野大膳、野田忠右衛門、天野源三

郎、石原兵部亮、同六三郎、古城出、同次郎右衛

門、同新左衛門、瀬田四郎、一手の足輕一千餘人相

す、今其所を今石の堀と云ふ、翌れば三日 何れの

本書に曙に川上左京總勢を戸島の窪に隠し置き、 竹迫代家傳に云、近江源氏佐々木四郎左衛門尉高綱、

二三百人を小山塚の邊りに打出つる、狩野介を見 末孫四郎左衛門尉長網、大友家の裁許に依りて、建

何、行やらて見るや橋守波の月

東嶽古城

二九九

に、花畑の跡とて有之、平城にての内に、堀跡土

居形殘れり常町八幡宮の相殿に東帶の夫婦の神

月橋片隆門

合志藏人佐

重 隆

須屋村にあり、城主須屋市藏と云ふ、城跡の北の郭

月桂初何、見よやなほ月の朝顔花の露

須屋古城

合志太郎

一人の老云、つくつくさ城上を見るに、群鳥怕れ無

を見て、城内無人なるべしさて、北の手より攻るに

音なし、門戸を破るに、武者一騎切りて出て、長刀

を振りて、芦刈帶刀と名乗り、切迫り討死す、寄手

城中を捜して、老姥一人を得たり、捕へて糺問仕る

に、初は偽りしが、後に白状して、帯刀は去夜風雨

の紛れに出城し、今討死せしは、井原喜藤太さ云者

なりといへば、寄手案に相違し、大儀なりと始て引

取ぬ、始終九日に落城せしゆゑ、九日城と云ふ、又

姥が城共云ふ、芦刈は爰を去りて、大友を頼めごも、

はかばかしからぬ放浪々す、子孫託摩郡竹宮の民間

にありと云ふ、

住吉十三年、隈府萬句連歌、

飛隈古城

久米の古城

りし故、千束の城と呼ぶさかや、又、寄手の内に

俄にも攻難く、林藪の竹を剪りて埋れごも、詮なか 板井村にあり、豊前城さて有り、城主姓名不分明、

堀と云ふ堀の跡あり、

丸の廿間四方斗小松山なり、豊

菊池攻の時、少貳松浦の軍士、此城を責潰して通れ尸有り、右の市藏を祟りたる神體也、

古城 前さて攻むるに、小勢にて防難く、又深泥を帯たれば、

久米村高請と云町也、城主里前治部と云ふ、年代不

分明、

村にあり、宇多帝の後胤、佐々木四郎左衛門尉

高綱が六代の孫、四郎左衛門尉長綱、建武年中、

州より常國へ下向し、子孫合志氏さ號し、住吉に住

、飛隈城を築く、初は叡山の聞を憚る事あり、

菊池家熾んなるに怕れて、勢卑微也し、菊池大友

ふるに及びて、志家熾んになり、永正の比、日向

守昌種、豊州に移るの後、伊勢守隆岑、竹迫城に移

、古書令に存する者あり、

文明隆朝 平川刑部少輔

女 鹿子木民部允室 └高久

惟冬室

女

-重隆

瀬田新左衛門

衛門

門

-隆祐

隆合志五郎左

左衛門尉

定重

小足三郎、

武郷室

甲斐伊豆守

刑部少輔

合志太郎隆冬

-定實

亮

合志五郎、

隆道 眞木太郎早世

〒別源 僭

「女子

隆敏

-時綱

長綱

時長

合志祖

-泰季

女 阿蘇大宮司惟義室

合志五郎左衛門尉

、

式部鑑岑

合志四

兵衛

女

重義道 ㄔ=支隣/弟卜

合志藏

瀬田兵部少

武宗

人太輔

輔、爲養子

合志近江守、

重基

從五位下

-隆基 合志藏人

中林村仁市5、城主芦刈帯刀、應安年中、今川了俊

千束古城

女

女

親重

隆賢

賢

親重

-親賢

隆重

合志伊勢守

藏人太輔

領地伊萩村、

重遠

高久

實讧菊池肥後守重安二男、

於長坂城討死、

明存坊律師

天正五年八月二日、

正

-隆成

合志隼人

三河守

-隆房

合志藏人、

衛門室

重網室

-盛高 女

同土佐守

平川與三左

出田刑部亟

弼重親室

赤星彈正少

從五位下

隆峰

-隆眞

輔、伊劳守

二九八

合志丹守

女

合志藏人少

二九七

志氏を、下り合志唱へたり、地の合志竹迫重種、

寛正四年三月卒去、其子筑前守正種、其子左京亮忠

種、其子駿河守久種ご相續き、半郡地頭職さして、

竹迫に在城す、大友の幕下たり、永正大永の比、久

種大友義鑑に近侍し、終に豊後に移居す、其子日向

守昌種が時、戸次鑑連入道、道雪に従うて、筑前に

在りと云ふ、又合志長綱十二代の孫、合志伊勢守隆

岑が時、永正年中、住吉館より竹迫城に移る、其子

孫相続いて竹迫の城に居れり、天正十三年閏九月、

島津部將新納武藏守忠元、常國隈本城親賢等と心を

合せ、竹迫城を攻抜く、此時竹迫親賢、島津が爲に

擒はれ、薩州に赴く時、八代大野にて病死す 重隆が

父仙頓 るは、親 隆重も出陣し、天正十四年、於薩州

卒す、前夫より竹迫城には、新納武藏入替つて

居れり、天正十五年、秀吉公征西の日、四月七日、

新納等退城云々、家紀云、竹迫城は平城也、 曲

一里十七丁、東西千三十間、南北七百五十間、

一女子

泰重 同太郎左衛門

景同七郎

左衛門尉

佐々木五郎、

左衛門尉

時高

泰高

佐々木四郎、

-光綱 野木三郎左衛門尉、 居住于出雲國

高重

左衛門尉

佐々木太郎、杉山合戦七ヶ度先掛、

-重綱

川先陣、七ヶ國拝領す、

高綱

佐々木四郎左衛門、宇治

四男

號淨恵冠者

下、兵部丞

秀義

秀定

佐々木源太夫

經方

佐々木扶義章經

一品式敦部卿

信

參議宰相

二男

醍醐天皇 -敦實親王

○宇多天皇

合志氏略系

云、爾來竹迫合志氏を地の合志と云ふ、佐々木合

合志と改む、其後住吉に移る、家族稱して住吉屋形 丸東西七百五十
間、南北五十三間あり、

源太夫、従

五位熊野木住高野山門に戦死十九歳

佐々木家 三、兵衛尉

木源

打ちければ、痛手なれば働難く、

刀を杖につき立ちたり、討手の共首を取らんこ群

来る、其先の兵をかひ抓て中切りにす、此勢ひに恐

をなし、残業悉く引退く、一傳隆重に向ひて、閲如

斯手負討れぬ、急ぎ御腹召さるべし、某防ぎ申べし、

今生の暇乞、是を限りこ云捨て、又大勢に戦うて、

途に討死する間に、隆重心に自殺して、羽織の露

消失せたり、其後一傳が亡魂祟りをなし、種々怪

異多き故、神に崇ひて今以霊験多しさかや、同年五

の鐵砲にて、一傳をさて、天正十四年四月五日、五百の軍士を遺し
、 月、川上左京人数を率ゐ、竹迫に來り、合志の類葉

一傅は曲者なりご、各短き鐵砲を持たせたり、廿四 探索し、重ごもを貪り探り、侵し求め、数品の蜜

日の晩景に、隼人方より一人の倍を使さして、一種 物悉く奪ひしさかや、常城は齋院次官中原親能四男

一瓶を送り、永々の滞留を慰ます、隆重方には各自目 大膳太夫兼攝津守師員、建久年中、常國合志郡の地

合し、死の近付きしを察すれごも、左あらぬ體に禮 頭職を給り、關東より下向し、常郡二子村に住し、

今其所

説

二九六

也と云俗上の庄を

謝す、終夜清泉を汲み、佳肴を喫して舞ふ、翌れ 竹迫の城を築く、古城其跡

ば廿五日の暁に、討手の面々群り來り、早出でられ 本城と云ひ、原口を新城と云ふ、師員は大友左近將

よ、古鄉へ送る可き爲、迎ひに來れりと脛々に罵れ 監能直が弟にして、鹿子木、三池同姓、是竹迫氏の

ば、一傅を始め各引導に預る可して、一同に切って 始麗也、或時霊竹の間に有りと云ふ夢見て、翌日

出で、一騎常千の勇兵、大勢に切って入り、奮戦し 靈鍬を得たり、因玆姓名を改め、竹迫輝種と號す、

て一方を打破り、既に落ちんとする所に、彙て用意 爾此地を竹迫と稱す、共子竹迫攝津守師能、相續

きて合志郡の地頭職として、竹迫に居城す、子孫代

代鎌倉幕府に仕へ、北條氏に従ひ、後に菊池家に屬

す師能より十代、竹迫日向守重種が時、菊池家衰

微し、重種勢卑微に至り、豊後大友家に降服し、漸

合志の郡の地頭職さ成る、此時に近江源氏佐々

木四郎左衛門高綱五代の孫、佐々木四郎左衛門尉長

綱、大友の裁許に依りて當國に下向、建武二年、住

吉に居住し、菊池家に屬すも、系圖に見えたり

合志郡の地頭職となり、眞木村に居城し、城氏を

來れり、去る年の意趣も有れば、御免を蒙り、先蒐 落行き散亂す、城内には元より小勢なれば防ぎ難き

可仕望む、對馬對て、存念至極せり、乍去田中、 體なるに左京城内に使者を送り、今度の攻城、強ち

三池、宇曽、三ヶ島の若者、先逢うて先蒐を望む、 に親賢父子を可討結構には非ず、城を受取、御父子

叶へたる也、依之其次を可勤制しける、か~る所 を薩州へ伴ひ申さば、復歸城の後有るべし、同心

に誰さは不知、敵十四五騎追々に馳來り、眞しくら なくば不得止、一戰して勝負を可決さ云送る、城中

に切懸る、市藏不透陣頭に飛んで出、爰に見には、 には、衆議區々なれ共、此小勢にて敵討拂ひ、運を

薩州へ手引したる人々歟、隼人佐御入りあらば、見 開くべき事は叶難し、一旦降を乞うて、後日に謀

參して先年の返禮可申匐り、斯云某は、箭にて知 有るべして、主従十三人、弦をはづし軍門に下る、

れやさて、五人張の強弓、羽音高く切って放せば、 左京は嬉び軍を班し、薩州へ歸りしが、隆重が父仙

眞先に進みたる敵のたゞ中射通して、遙の向に矢は 顔に、坂本孫九郎を差添へて戻して、残る人々をば

落ちたり、差詰引詰放つ矢に、矢庭に三騎射落せば、 鹿兒島へも入れず、白坂隼人預りて、さ云所に

双方一同に入亂れ、鍛先より火を出し、火水になれ 置さ也、奥に合志の軍師合志一傳は上京せんが、

と接戦す、軍將馬は、新納武藏守と無端出逢ひ、 竹迫の變を長州にて聞き、直に羽織に馳来る、竹迫

聲を放つて戰ひしが、勝負なければ、太刀を捨て、 には一族打寄評議して、太閤秀吉公近々薩州を可被

無手と組む、對馬は力増りければ、武藏を押臥せ、 攻との説有故、其時を待ち如~の計略にて、再

腰を探るを、武藏手早く刎返し、首を取って立上り、 び歸國あるべしさ書中に認め、忍の者を挟み、羽織

大將合志對馬守を、新納武藏討取たりと呼はりける、 に通らせんとす、忍の者は乞食の體になり、隆重熱

を聞いて勢力を落機を屈し、浮足に成る 居のりを伺ふを、隼人見搦捕、水火を以て貴む

を見て、藤崎藤右衛門、諸卒を勇ての面々退く可れごも、聊も落ざる故、下帯を改むれば、縫込めた

らず、大將は隋重ぞと下知すれごも、或は謝れ或はるを見出し、鹿兒島へ告ければ、所詮殺すにしかじ

蒲木但馬、弘生修理、

部、板田次郎兵衛住吉、與力の人々花枝、市原藤左 青木藤五郎、福代田内膳、秋岡新三郎、溝越小路、

衙門、本田七郎兵衛、宇曽和泉亮、渡邊源右衛門、 青木主殿、山邊與三右衛門、田中藏人、井上因幡、

迫間式部、見島駿河、同藤右衛門、後藤主計、木下」田崎與三左衛門、鳥井助太郎、是等宗徒の兵EL

加賀之介、牟田喜六郎、緒方次郎四郎、平添水民部、C、都合千五百人相向、須屋市藏淇、軍將對馬守

大津九郎次郎、同九郎右衛門、關右衙門、同八郎九 炉前仁來5、城越前守島津仁與亡、手引LT大軍寄

二九四

イニ田ナシ

元、鎌田寛西、梅北宮内左衛門、川上左京智將芒)|郎、須屋市藏、同新九郎、佐藤新左衛門、杉野新五

丁、三萬餘兵、宇土郡の浦!着船)、矢崎の城智攻兵爾、立石大膳、弘瀬彦九郎、早田九郎右衛門、大

落ぃ、直汇隈庄、甲佐、中山、砥用、御舟仁發向、 津式部、今村叉右衛門、太田善右衛門、兒玉與一郎、

甲斐宗立、案の外汇城弝逊℃ㄒ降叄亡、木山城攻 荒木與三右衛門、村吉中務、伊津野藏助、同民部、

落ぃ、木山紹宅古降參、夫上b頓T合志、竹迫の｜小森田左近、同右近亮、同三郎左衛門、同藤左衛門、

城攻懸石、伊勢守强く防氵、堅く守b、寄手大「井上孫助、長野彌七兵衛、秋岡八郎四郎、三村掃部、

勢在討取、數度追立ㄅhㄛb、終始叶難く降參貳、 吉良助右衛門、大島清左衛門、中原内藏介、中尾民

天正十三年、川上左京を將さして、常城南手の砦、 部、柳井田安藝、岩本右馬介、中野勘解由、西和田之

今石攻陷L直ㄘ汇前人丁當城望攻的、西の手杖新「助、緒方清左衛門、伊萩小次、別府出羽、早田美濃、

納武藏、城の方持口、合志對馬守聖將ELT、長一同主膳、西山藏助、戸田刑部、水島内膳、上津浦主

尾周防、眞鍋彈正、同兵部左衛門、吉良丹波、大津 殿、段帶刀丞、大塚半左衛門、輪奈良八郎、矢野八

次郎太郎、同大和守、同大藏、相原源右衛門、神科「郎、田中七兵衛、久保市助、藤崎藤右衛門、松本善

石見、五島助左衛門、同藤兵衛、東掃部亮、今村長「十郎、新關七郎、大塚宮内、五宇若狹、勝波藤助、田

門、同源左衛門前虎入道、河島新左衛門、古城式部、中又三郎、苧野椋之丞、三池能登、芹川右衛門、坂

同山城、同越後、同勘解由、同源左衛門、太田黑民|田又三郎、同市正、石原新七、翌日戰相止みて、和談になると云、天文二十年八

月二十七日、大友義鎮、甲斐宗運を案内さして、佐

伯惟敵を大將にて、合志郡竹迫の城主、合志伊勢守

隆重を攻、再三戰ひて城彩に不陷、翌日合志降参す

る處、本領安堵し、人質を出す云々、永元年の

比、常城は合志伊勢守隆重在城也、永六年四月十

道をば誰れもかくや思はむ

命より名こそをしけれ武士の

進發有り、依之同五月、合志五郎定實、將軍方に降

參す、永正二年十二月三日、菊池政隆さ、合志藏人

太輔隆岑と、一戰に及び、政隆利を失ひ、合志郡久

米庄安國寺に入りて腹を切る、法名天仙源祐居士、永

正年中、合志伊勢守隆岑、住吉館より當城に移る、八

方嶽城主隈部彌三郎親次も旗下に属す、天文十七年

八月、大友義鎮出張し大將には佐伯惟、志賀親安、

同鑑隆、朽網鑑安、 以上三備合六千餘騎、合志親爲

か竹迫の城を攻屠り、一日に十三度の鎗合、死創九

百餘人、此時大友方森迫三十郎十七歳、敵方は山本

十郎と組んで、三十郎を討取、三十郎は三本菖蒲の

立物に、短冊を付け、一首の歌有り、

返すと云

討んとする謀を告しか 親重が押来る道の近村

天正十二年三月、薩州新納武藏守忠

繋ぎ咲べしむ、

八日、龍造寺山城守政家二千餘騎、隈府の城を攻め

が、城主赤星入道道、小勢にて叶難く、抛命防

戰仕る時、市の瀬野村より廻り、搦手より攻めし

かば、道防難く降参して下城し、人質を出し、共

身は合志竹迫の城主伊勢守が方へ引退く、肥前の兵

は、城を隈部に渡し歸陣し、右の人質を竹井原に

磔にすご云々、同年政隆大將さして三千餘騎、隈部

親永を先鋒さして、竹迫城を攻むれごも、隆重道半

強く防きて不陥ば、肥前勢は攻あくんで、引取ぬさ

云々、天正八年三月、城越前守親賢、合志伊勢守隆

重、隈部但馬守親永、伯耆左兵衛顯孝、川尻、高橋

等、島津に通じて出馬を待つ、大友方甲斐宗運、同

嫡子宗立、手勢三百餘騎、阿蘇家人八千餘兵を帥て、

託摩原本庄に發向す、隈本方の諸軍は、白川旦過瀬

川尻の軍士は、半田、砥川原、藥師

に支へ、宇土、

町邊に出張し、合戦して、宗運一戰に勝を得たり、

此時合志は竹迫城より打つて出、宗運が後より切掛

る可き手合せしが、子細有りて半途より引退く、君誌

犬を怕る、宗運像て之を知り、竹迫に入流し同者より、合志が人数

一名蛇の尾共云、高さ百三十五間、東西千三十間、

南北三千百八十間餘也、大津山掃部亮手鑑に、合志

領内總て一萬六千町、永祿八年五月五日、勢汰の騎

馬百五十八匹、但安藤氏の馬は除く、歩行共に合二

千人、御幕の内御公方並病人は除く云云、鎌足公十

二代の孫齋院次官親能四男、攝津守師員、其子大學

師俊、 共子安蔡守貞房、嫡子太郎師時、合志竹迫城

主と成る、二男貞殺は、鹿子木寂心が昶也云云、菊

池が一族甲斐六郎武本四代の孫、甲斐民部太輔重村

曾祖父、武本菊池時隆と家督を爭ひ、後に甲斐國へ

蟄居せんが、重村尊氏將軍に属し、肥後還住を乞願

ふ、依之肥後國を討從へ、領知すべしと御教書を給

竹迫上庄古城

萬田村にあり、文治元年、八郎行、頼朝の命に依

りて常國に下り、府本村筒嶽に在城し、小代を領し、

又屋形山袴嶽に城を築くさ云、

宮内村にあり、本丸廣さ一反十四歩、 二の丸廣さ同

前、其内堀切り有り、三の丸の外にも堀の跡あり、

袴嶽古城

六反古城

貞和五年九月十三日、足利右兵衛佐直冬、

中國より河尻幸俊が船に乗り、常國に落下る、幸俊

幸さ悦び、直多を大將さして、託摩別當太郎守直、

同次郎宗直を語らひ、國中を駈催し、將軍方宇都宮

參河守と合戦し、首百級を討取り、夫より宮方鹿子

木大炊介貞基が籠りたる、合志竹迫の城を攻落と云、

延文五年十一月三日、菊池武光、合志五郎を可責さ

て、三千餘騎にて向ひけるに、合志郡鞍嶽に雪の積

合志か城に押寄せて攻陥と云、應安七年二月、將軍

義満、菊池を退治して十七萬騎を引率し、九州へ

あられ梨地に見ゆる山形

鞍嶽は銀ふくりんか今朝の雪

るを見て、

に委

り、肥後守に任せらる、重村悦ひ急ぎ、豊後に下向

し、大友が家人等を駈催し、延元三年九月四日、肥

後國に討入り、翌日菊池へ寄せんとす、選兵千五百

騎を卒し、阿蘇へ寄せける所、合志鞍嶽の麓にて無

端行、双方旗手を進め、入亂れ戰ひが、重村忽

ちに敗弊し、卒多く討せ、這々豊後へ引退き、日

向國へ赴き、還住の思ひを止めけり云々、 仔藤甲斐宗

御舟

古城の下

今は松樫椎等木山に成る、本丸東六十間にして、下荒尾村の内にあり、小代八郎築之、

や、此事不審也尾形山古城

、

三月、城を攻扱く、武包肥前高木に敗走有り、職満村に有り、城主年代不分明、

在城以前の恋に本丸東西九間、藏満古城

平山村にあり、城主堀切若狭守種藤と云ふ、小代家

臣也、年代不分明、

井手古城

宮司、 中井手村にあり、城主姓名等不分明、

其臣甲斐入道宗運に命し、是を討たしむ、大永三年

平山古城

に水の手あり、二の丸、東西九間、南北三十八間、

本丸より二の丸は九間低し、三の丸東西六間、南北

二十七間、本丸より三の丸は十間低し、 曲輪五百二

十間、東は百五十間程の大谷、西は本丸より十二間

さがり、尾きの方本丸共に二の丸の間に、横四

間、長さ十一間、二の南丸の方、二の丸際に堀二つ

有り、但一所也、一つは幅四間、長さ十六間、此堀

切より南は尾續木山也、本丸より西尾續辻一の堀、

但尾辻は道也、両脇は堀亘り、五間長三十盟、此堀

より本丸まで二百八間半、流れ二十間、此堀より本

九迄七百間、

を築きて居之、又荒尾屋形山城萬田袴嶽城を築く、

今の高二萬九

其末孫小代伊勢守親傳入道宗全、永祿の初、筒嶽へ

在城す、其子下總親忠入道友心、相きて當城に居

れり、八百三十町を領す、 千八百石、 内八十町は、

筑後三池郡にあり云ふ、天正七年、肥前龍造寺隆

信大軍を師ゐて、肥後國に打入り、諸所の城壘を攻

屠る、於是親忠か守る所、梅屋城を攻圍む、親忠防

戰難叶降参す、其子下総守親泰か時、同十二年、隆

信滅亡と、薩州島津家に属す、同十五年、秀吉公征

西の時、親泰は定に云、四明小代伊勢守居城筒を渡富國

の諸士の中、一番に豊前小倉に出迎、秀吉公に拝謁

し、即ち先鋒に加り、薩州にて軍功あり、其後隈部、

有働、一揆の催促に不從、後に加藤清正侯に奉仕し、

四千百三十石を知行し、芦北郡津奈木城代と成る、

菊池家傳に云、菊池二十四代肥後守武包、永正の頃、

阿蘇大宮司惟豐、及鉾楯、筒嶽城に立籠る、大南北三十一間、總抱は

開田城共云、開田村にあり、大野氏代々在城と云、

村上帝應和三年、紀貫之大野郷の領主となりて下向

す、貫之三男大野領主大野菊麿紀隆村 繁根木八幡

宮建立と云々、後醍醐帝建武四年四月二日、紀國隆

肥後國玉名郡大野二百五十丁を給る、下向して大野

を以て家號さして、中尾高岡に住す、國隆男子三人

有り、嫡子中村太郎時隆、高瀬中村五十五丁を領す、

二男築地二郎國香、築地五十五丁を領す、三男大野

三郎秀隆、中尾高岡五十五丁を領して、父か家を相

續す、中村時隆が子孫今に残り、家號を甲改

上村にあり、大野紀隆村の後、紀國隆二男、築

地二郎國香、當城を築きて在城すご云、終を不知、

日嶽古城

上村古城

大野郷上にあり、未考之、

下村にあり、齊院次官親能、當國に下向し、當城を

築きて居り、後に南田の新城に移る、其後中絶、龍

造寺隆信家人代る在番、天正十年落去さ云、

城村古城

下村古城

小代山の内にあり、小代、又床代共書く、惣名也、

古に所謂墨摺山は、 小代山と云り、蟠根数十の村邑

に掛る、峯巒多く名各異り、當城跡は府本村の内也、

小代家代々の在城と云ふ、小代氏は藤原氏にして、

兒玉黨小代八郎行より出たり、右大將頼朝卿の時、

文治元年、行肥後國に下向し、 小代を領し、當城

筒嶽古城

城主小代八郎行平と云ふ、小代山中にありと云ふ、

不分明、

梅の尾古城

齋院次官親能、右大将家の命に依て、常郡下村に下

向して、居城を搆へ、後又當城を築きて、移り住す

さ云、元龜天正の比には、龍造寺隆信、兵を率して

當城を攻落す、其時は小代か出城也しさ云ふ、

む云々、後小松帝應安十年五月三日、大野出羽守

紀朝隆、玉名郡日嶽の城主となる、天正年中には、

大野彈正紀親祐城主たり、此時小代氏が爲に落去し、

大野の家絶えたり云、又大野左馬介、 二百五

十丁を顔して當城に居り、天正十年落去と云々

赤崎古城

二九〇

二八九

に在城し、在名を家號さして、臼間野と云ふ、臼間 郡荻原村沉落さ云、

胤在城、天正十年、龍造寺が為に落城さ云、子孫當

大野氏下城さ云、或は大野左馬介が一族池松主水貞

古城

元龜天正の比、臼間野太郎宗郷、百七十丁を領す、

高道より、後の城主を不知、

坂下古城

武祐、其子三郎武備、其子右京武基、 於宇土死して

久重村にあり、小代氏の一族猿渡豐後守直貞か在住 相模守、從五位下武楯、城は菊池武二男、兼共子十郎

の痕也、古城と云ふにもあるべからず、

む、其子深川彦三郎武儀、其子高瀬三郎眞武、其子

城の尾古城

今村にあり、城主姓名年代不分明、

高瀬保多木町にあり、高瀬氏代々の城跡、今や町

高瀬古城

古城

宗郷が子臼間野能登守邦郷が居城也、天正年の間、

蟠根四町柴山也、障子嶽との間四町五反肥筑、熊關氏、

障子嶽古城

豊後野の資鎮——資秉 谷川右京

圓右京、子孫在

同所古城

孫在肥前、

家直

盛資

の庄廣けれども、坂の上、坂の下を分けて臼間野さ

後改資秋

信濃守、子

家稜

經眞

資冬

河内守

河内守

修理亮

、本丸より

辰巳方、天神塚と云山へも四町五反あり、城主姓名

不分明、

呼來れり、此城東西十一間、南北二十一間、高さ五

十間、曲輪六十八間、今は畑となる、四方野也、

大友が為に落去さ云、東西三十九間、南北四十間、

高さ東五十三間、西十五間、南三十五間、北地續堀

切あり、南は泥土田なり、曲輪百四十間、

奉行の屋敷さ成る、菊池則隆より十六代、肥後守武

政弟彥次郎武敘より出てたり、彥次郎後相模守と改

俵藤太秀鄉の後胤也、先祖何れの頭にか、當岡に下

玉名郡坂の上、坂の下百七十町を領し、坂の下

拔材、小代、大津山之戰、資冬大汇奮戰LT、敵

軍を突破り、親興と引組、取つて押へて首を取り、

蒲池於城弝攻落寸、或記、天正十四年六月下旬,

嶋津修理太夫義久、大津山髙嶽の城打出て、此所

にて諸方の手配あり、同七月、嶋津兵庫頭忠平を將

さして、肥後筑後の勢を差添へ、高橋紹雲が籠りた

る、岩屋の城を責落す、此時家稜を案内者として先

手に加ふ、家稜は大津山明神の檜の馬場にて、勢の

沙汰寸、士二百五十人、内七十人以騎馬、百人以足

輕なり、大津山が一番備石井下線が組十二人、 夫婦

木新藏、藏野治部、釋迦牟尼佛掃部、福山左京、同

伊織、砥上宇兵衛、野田權六、町次郎太夫也、今般岩

屋攻城に、家稜抜群の動功に依りて、嶋津義久是を

賞し、感狀及び騎蹄四疋を家稜にふさ云々、家稜

佐々成政が爲に害せらる、時弟信濃守家直は、聞くさ

ひさしく、肥前諫早に落行き病死す、家綾子此時三

歳なりしが、成長して關右京祐宜さ號し、 立花家に

仕ふ、子孫今にありさ云、

押寄せ、急攻城、後三河守親興三百餘騎、蒲池

○大職冠鎌足公――不比等――房 眞楯

内鷹

從二位、長

岡右大臣

眞夏

議、

濱雄

從三位

左大

家宗

弘蔭

日向守

從五位下

繁時

-輔道

豐前守,

從五位下

有國

從五位下

太宰大貳

資業

備前守

-實繩

有信

正四位下

大學頭

正四位下

實光

權大納言

-次長

兼光

從二位

權中納言

正三位

資實

家光

中納言

從二位

中納言

資宣

從二位

俊光

權大納言、正二位

大津山河内守

資名

資基

號日野中納言

肥後下向、

河内守

修理亮

-經稜

經方

重經

美濃守

掃部頭

守

經澄

河内

從二位

權大納言

從二位

中納言

正四位下

右中

從三位

式部太輔

肥後守

肥前守

從五位下

治部少輔、

正二位、大

納言

旗下に成りて還す、 病死の後、其子修理亮家稜、

家を継いて秀吉公に降り、本領安堵し、天正十五年、

佐々成政が爲に退城して、同所前原に移り害せらる、

其跡佐々藤左衛門城代となり、清正侯の時に、 加藤

清兵衛直政城代となり、植政後に出奔して、奥州會津の城主

蒲生飛彈守へへ、一萬石を領し、

一族なり、

鑑元入道宗意、當城代となる、然る處に、宗意叛逆の曲聞えければ、永禄元年五月二日、大友より肥筑兩國の小給人、大津山、木野、谷川、 小代、遊春、河崎、三池、田尻、 蒲池等に、手勢を合せて三千餘騎を遣え、小原を責む、同三日、寄手町小路を焼狒ひ、矢合して、翌四日本城を責む、此城は高さ四百五十間餘、石高木繁りて、登難けれ共、資冬兼て案内能知たる故、先に進んで後より攻入りしに、小原不叶、三十六歳なる妻、十七歳に成る女子を刺殺し、逞兵三百二十人、左右に立て、城戸を開き切つて出、寄手百九十人を討取、主従一所に討死す、宗意行年四十三歳也、此戦に木野彌次郎親政痛手を負ひ、木野に蹴りて死にけるを、 正敬寺に葬る、家人仲光須賀山は頼べき方なく、隈部親永に屬すと云、親、親泳 宗意右の如く誅せられし後、資冬又大友の其跡加藤美作正次、城代と成ると見えたり、其後慶

長五年、正次願うて新城を鷹野原に築きし時、當城を捨つと云、或記云、資冬又大友を背き、肥前の龍造寺隆信の旗下に属す、其比筑後の國士草野新佐、龍造寺を背き、薩州島津義久に屬せんさて、上下四十六人、 薩州へ落行くを、可討留よし、隆信より大津山に下知せしかば、資冬手勢を卒し、北の關北原と云ふ所に待受、一人も不殘討取りて、首を肥前に送る、又臼間野太郎宗郷、城を鯉の鮮に築く、是を追拂ふ、天正七年、資冬龍造寺が命を背く故、討手向ふ聞え、小勢にて難防さて、太田黑、神の尾の城崎に籠る、寄手龍造寺家治等、城攻不利迯散す、同年五月五日、資冬筑後山下住人蒲池志摩守鑑廣一味して、筑後松延に打出て、筑後給人九頭と合圖して、瀬高に屯す、龍造寺家治は、白鳥に出向ひ、終日蒲池と戰ふ、鑑廣利なく敗せんとす、資冬鼓を鳴して、横合急に突いて肥前勢を追崩し、首數百級を得たり、又日、同八年六月十五日、小代大

津山一味して、二千餘騎を卒して、筑後國高良山に

二本松の城主となり、本山豊前 文禄二年、唐津へ出奔す、

守と吹む、蒲生軍記に出づ

古城

二十町イニ

伯耆左兵衛家人伊津野菜と云者、當城に籠りしを、

清正攻落して、伊津野を討つこあり、

翠簾置吉地村にあり、清正記に云、加藤清正肥後入國の時、

古城

今古閑死二元六

は、更に知る人なし、山鹿郡南島村の東綴に、鬼塚と云塚

の説彈正は只一人、四尺八寸の太刀を打振り、大

勢に切りて入り、片時に死創數をしれず、心静に自

害せんと、宮嶽に登るを見て、迯るとや思ひけん、

神保又五郎、杉野又市、彈正を追うて登るを、彈正

花と見、大手を広げ、兩人を脇に掻挟み、宮嶽より

谷底に飛落ちて死にけり、現實が妻、此時懷胎三月也が、

男子を 後に小野氏を練

は和仁 傅に云、落城の時、弾正が妻、同十三歳の

女子共に城を出て、女子は城下の川に身を投ず、其

所に石有り、和仁石と呼ぶ、妻は河下三里行いて、

内田村の淵に身を沈む、其所を和仁淵と云、其靈祟

り有り、水神に祭る、祠今にあり、和仁御前と云、

親行は其後本領安堵の沙汰なく、却誅せらるべき

風聞なる故、彼方此方と迷ひ歩き、程なく吉地村に

て病死す、 其子後に加藤家に奉仕す云、

あり、是人鬼親宗が古墳、里俗 吉地村の内翠簾置村の上のにあり、
城主不分明、

蒿嶽古城

城主大津山家稜が先祖は、日野中納言藤原資名卿よ

り出てたり、建武年中、足利尊氏と新田義貞と鉾楯

の時、尊氏持明院殿の院宣を可賜ため、熊野本宮の

別當が子藥師丸を、資名卿一族なれば、彼れを以て

資名に頼み、院宣を給り、一戦の功に依って、天下

を掌握せしより、尊氏資名甚だ睦し、是故に資名の

末子資基、尊氏に属し、武士となる、其後將軍義持

の時、肥後國玉名郡東郷臼間野庄大津山を給り、

永二年十二月晦日、大津山木屋塚に下着す、從士

百五十餘人、翌年嶽に城を築いて移る、號河内守

其子經澄、其子經稜、其子經方、其子重經、其子經

眞酸雜髮して湖春と號す、其子資冬、領する所は

玉名郡の内、關、赤坂、 太田黑、野田、上津原、平野、

岩村、青木、河床、箱谷、溝ノ上、筑後の内、眞弓、

北ノ關、小萩、方野、三峰等にて、三百十二丁也、

資冬大友に背き、龍造寺に随し、肥前佐賀に移り、

龍造寺家治暫く當城に在居し、資多又當城に還す、

宗麟甚だ怒りて退城させ、大友家臣小原三郎左衛門

信用に城内には薄手 敷吹き、さしもの城壘堅固なりしも、一時の灰燼

負たる者四五人のみにて、訪れたる者はなし、流石 なりにける、か~りける所に、親範、親宗以下の者

の成政攻めあぐみ、ヶ様の小城を陥得ず、味方の死 共、闇の兵を集め見るに、大將親實討し故落失、

亡多き事は、要害能(兵粳多く、士卒一致して防ぐ 殘る兵四十人には過ぎざるを、一所に集め、敵陣に

故也、然るに邊春親行は、義に薄く慾深く、淺智也 馳入り、縦横に合戰ひ、馳抜くれば多く訪れ、正、

聞く、所詮彼を輝すべしさて、矢檄を認め、射さ 人鬼、石原刑部、中村治部、松尾日向、同市正、春

せけるを、親行被見仕るに、今度の一戦は、 和仁兄 東彌、以下十七人殘りける、人鬼は兄親實が妻、

弟を討べき爲也、其方聊罪なければ、親質を討つて 並五歳の女子に、春ノ東を差添へ、同村東勝寺寺記

降參あらば、本領の上に、一跡を秀吉公より加行有 東郷和仁村、光静山、東勝寺、長壽院は、天台の教刹、本尊薬師如来、

九年建立、和仁一家の新所也、今や吹東陽寺、日蓮宗となる、

るべしさの事なれば、親行心に喜び、則返書に、親 清長坊が方へ遣し、筑後三池の住人小野某方へ送り

實を討つ相岡に、火の手を上ぐべきの間、攻入玉へ 玉へと賴置き、死狂すべして、正幷人鬼以下の

さ云遣し、親實を討たんこ斗れ共、 親實が勇威に恐 者も、又敵の中へ切って迫り、鍛尖より火を放つ

れ、いかぶせんと思ふ所に、親實が近習に鷹の藏人 て戰ひける、成政が侍大將津田與兵衛信里は、彈正

さて、辨才あれごも勇もなく、生質懶惰の男あり、 を目懸けて突掛り、暫く鍵を合せ、與兵衛終に討死

今度一方のともせざるを、憤恨る躰なるを、親行 す、續いて牛島東七と名乗りて進みしを、 松尾日向

幸いと思ひ、密に呼寄せ、如是と頼みけるに、藏人 引組んで、岩地の石壁より、谷に落ちて空敷成る、

容易に領掌し、十二月六日、夜更けて後、親實が寐 春ノ東彌、松尾市正、石原刑部、多くの敵を討取り、

所に忍び入り、首を切りて親行に見せければ、親行 數ヶ所創を被りしが、近付く者さ引組々々、刺通し

頓て火の手を揚ぐ、寄手は是を見、一同に入りぬ、て討死す、 人鬼は敵二十四人に圍まれ、八人を切倒

親行、職人諸ともに、寄手の陣に馳加る、打節風烈、七人に手を負せて追散、山中に入りて、生

百餘人に及びける、

一説には、十二月三日

此事隈本へ聞えしかば、佐々陸奥守成政、八千餘兵を
卒して、十月二十八日、田中の城に押寄する、筑後
柳川城主立花宗茂、肥前龍造寺城主鍋島方よりも加
兵を出し、馬喰田、栗崎、橘川、金敷原、宮嶽、芝
塚、境原、日明口に陣を取る、本より分内狭き所に、
一萬に及ぶ人集りぬれば、山溪人ならぬ所少なし、
佐々方より城を見て、彼程の小城に、千に足らぬ小
勢にて籠りたる不敵さよ、一もみに攻落さんご、
攻具をも用意せず、我一と攻近つく、成政が家人松
原五郎兵衛直元は、長身の鎗を提出て、事々敷名乘
りければ、春東彌城中より立出て、詞をかはして戰
ひ、松原が鎗の鶏の首無手と取、互に引合ひしが鎗
の柄終に眞中より引折りて、双方に分れける、
ば、秀吉公、宗茂に感狀給ふ、成政は、隈本の一揆
野隼人百餘人、鐵砲二十挺、弓三十張、鎗三十本也、

静謐し、和仁親實、遊春親行を可討さて、様々に賺

せども、敢て承引せず、和仁村當城に籠る、邊春

親行も緣座なれば、三百餘を卒して、親實一所

になる、彼親實は、父丹波守後に自休と號す、一女

三男あり、嫡女は親行に嫁す、二男は親實也、三男

彈正親範、身の長け七尺六寸、力鼎を揚ぐ、四男人

鬼親宗、顔赤く目炊き、鬚左右に生分れ、手足偏に

熊の如く輕提にして大力なる故、父自体、彼は人倫

にして鬼形さて、人鬼と名付、家人には石原刑部、

東彌、草野隼人、松尾日向、中村治部少輔、是

等は他に越えたる勇士なり、今度籠城の手配は、城

の大門日明口には、和仁彈正親範、松尾日向百五十

人、鐵炮三十挺、弓三十張、城の北門宮嶽口には、

和仁人鬼親宗、松尾市正珦 百餘人、鐵砲二十挺、 柳川勢由布大炊介惟時蒐合けるを、中村治部が放

弓二十張、新城口には、中村治部少輔百五十人、鐵 つ矢、胸板に中り、脊へ通りければ、たまりもあへ

砲三十挺、弓二十張、第二十本、本丸には、遊春能 す馬上より逆に落死したりけり、寄手は春に前み

登守親行、従士三百人、鐵砲百挺、弓八十張、鎗五 攻むるを、近々と引付けて、城中より矢石を飛して

十本、二の丸には、大將和仁勘解由親實、従士百餘 防ぎ働けば、寄手の死傷若干に及び、漂ふ所を切っ

人、鐵砲三十挺、弓二十張、鎗三十本、浮武者頭草て出、散々に追崩し、寄手討る者、片時の間に六

二八三

を入れたれば、儲路を討たんこ待居たり、立花宗茂

和仁村にあり、當城其始を不知、天正七八年の比、 兵粗を付城に入れさせ、追慕ふ勢を追退け、平野邊

和仁丹波守近績、筑前に打出づ、筑後國山下住人蒲 を遮りけるに、待設たる兵ども、不意に起つて前後

池志摩守鑑廣を語らひ、 大津山河内守、和仁丹波守、 より蒐る、宗茂は由布上總、小野和泉、十時攝津を

以上三將二千餘人、筑後松延迄出陣し、龍造寺隆信 左右に立て突懸り、後兵進んで揉立つれば、一揆の

さ戰ふさ云て、天正十五年、和仁勘解由親賢、同彈 勢、過半追討たる、中にち中村出は、只一人蹈止

正、同人鬼親宗、邊春能登守親行籠城、佐々成政 り、長刀を取延へ、敵五人迄切伏せる處に、花

戰ひ落城す、此一戰は、天正十五年四月、秀吉公征 手池邊龍右衛門と名乗りて、中村と引組、出羽を

西、當國打入の時、親實北の關に出迎へて拝謁し、 取りたり、此一戰に、主客の死傷甚だ多く、宗茂手

則ち先駈に加り、於薩州軍功有り、依之本領玉名郡を砕きし事共、黒田孝隆、毛利勝信より注進しけれ

田中古城

成政に背き籠城す、男子

竹井原被害

-親高 安房守

高にして二千五百石と云、

親隆

新六郎、於

房守道

住隈府城

守

七丁、今の親家

重隆

武規

安左京太夫、

左京大夫

-武光 六月二日、於阿州死、八十九、

津江三

、

備中守、周防守、月叟道牛、元和五年

和仁十丁村、山鹿郡芋生村、筑後國白木村等百二十

肥前三郎、安

政繼

兼規

武則

彈正少

式部太輔

刑部少輔

房一説に、百五十丁、又一説親實所領五十を給り、同十月其故成政城村に付城を築き、筑

後立花を頼んで、兵を送る由聞えしかば、人数を

出し、柳川勢を追散して、兵を奪ひ、隈部に力を

添ふべしとて、和仁勘解由、邊春能登守

城主、

味して、大津山方よりも、中村出、同専助以下百

餘人、和仁方よりは、中村治部以下百餘人、邊春方

ようは、芋生攝津守以下百餘人、都合三百人の者共、

平野立尾に打出てて見れば、柳川勢逸や付城に兵粗

菊池則隆九代、式部大輔隆安が四男、 赤星播磨守有

侯入國之上、國を鎮め殘黨を攫へ有りて、古給人不

殘成敗の由也、清正侯既に當郡下津郡下津原迄出馬

の由にて、進退究まり及難儀所、上津原村社人須山

宮内が云へるは、昔の劔は、今の切りと云へり、

足下今分にては、一兩日の内、一門の命路難叶、先

づ百姓になり候へと云へは、兎も角も、我等分別な

し、資冬主に後れ奉りて力もなし、萬事を頼むと言

ひければ、須山喜ひ、村中に相談し、但馬を大圓坊

さいへる寺屋敷に移らせ、鎧甲は大釜の灰の中に埋

め置、偖宮内手につき、御前事なく、慶長十四年十

月十五日、八十六歳にて病死す、嫡子小次郎兵衛、

浪人にて百姓役を勤む、上津原村は、清正侯の足軽

大將貴田玄蕃が知行也、文祿元年、高麗陣の時、小

次郎兵衛を召連、彼地に七年逗留、小次郎兵衛が妹

聟牧野圖書、同作甚九郎も従軍す、何れも鐵砲の上手

にて、高麗にて鶴白鳥を打役也、虎も度々打が、甚

九郎は大なる虎を打、小次郎は小さなる虎を打けれ

ば、其銀砲を大虎小虎と名付、清正祕臓ありしさ也、

大津山古城

四男亦星三耶宗弘三年博多討死

號西寂

以後、遠基養之、改筑前守武生、

武生

武次

遠江守、

實菊池寂阿子、號武豐、武實討死

八月十六日戰死、

武實

掃部亮、延交八年

女子 菊池武時妻

法名寂正

遠基

患、元

◎有隆

同肥前四郎、

菊池四代降泰隆、文禄弘安年中、蒙古日本を襲ふの時、於對馬筑

前武功をし、一方の軍將を搦捕、帝寂感有りて、

肥後國玉名郡の内七百丁、幷豊前規矩郡、肥前神崎

郡を給り、玉名郡本郷臼間庄、大津山關に城を築き

元弘三年、菊池寂阿と共に筑前國博多に

て居住す、

戦死す 其子肥前守遠基無嗣子、寂阿が末子孫次郎

武豊を養子とす、 武生と號す、其子武繼其子武則、

稱安房守、左京大夫、 刑部少輔、其子規、 其子

爲、其子政繼、其子武規、其子安房守重隆、後住

隈庄城、其子肥前三郎親家、後式部太輔、又安房守、

剃髪號道雲、隈府に移りて、跡を大友宗麟家臣小原

鑑元を城代とす、其後大津山河内守在城すと云、

赤星氏略系

東西尾續曲輪百九十間あり、古老書記、天正七年、 倒しければ、九寸五分の脇差を手裡劔に打ち、但馬

肥前衆曜 打出、筑後福島より山越して、肥後の十 が左の踵を打落しければ、歩行不叶、偖敵味方大勢

丁の内、坂本城主邊春能登守親行を責めて、既に落 に成り、弓手も馬手も戰有りて、我主人をも見分難

城に及ばんさす、依之和仁大津山兩所より、加勢を し、但馬が従者も各の働なり、然處に右に弱みを出

出す、此事肥前衆聞付彌城を手荒く攻むれども、城 したる砥上内膳參り合、突伏たる敵の首を奪取り、

中は加勢のあるに競懸りて、頻りに防ぎ、切つて出 高名の由を申す、 然れ共、家稜が一老西村筑前が興

つれば、寄手敗北し、坂本口既に崩れ破れて、肥前 力北村新藏、右但馬が鎗合を能見、早く歸りて

坂下谷散り、大津山の援兵、十丁の内平手 筑前に語る處、砥上敵の首を提来て、我高名也と云

へ、先蒐の士來りければ、肥前の敗兵彌下る、爰 所に、筑前云けるは、佐藤但馬が手柄は、砥上が手柄

に母衣武者一騎、主従五六人落下る、大津山の士砥 に成るべきかと云、但馬が一族さも、但馬が手を負

上内膳、平手にて出合ひ鏡を合せ、内膳敵を一鍵突 居たるを見付、戸板に乗せ、討取たる敵の武具装束

きけれ共、屑さもせず、持ちたる鍵にて打拂ひ引退 共を持たせ足を澁手拭にて縊り来る、神野尾にて

く、内膳手繁く追懸ければ、敵立歸り、肩先を一鍵 は、鍵を杖に突き、家稜の前に出る、家稜云ける

突く、少の手なれごも、低上は引退けば、敵は彌心安 は、さすが土佐が子にて、今度の働き榊妙也さて、

〈落下る、下十丁野々村阿彌陀堂の前にて、右の敵 即座に感狀を奥へ、坂の上にて、三反五畝を加思あ

大津山が佐藤但馬行合、但馬は達者なる家士のみ り、先知より、加恩まで、二十三町を領す、資冬、

を召連追付、味方も未だ大勢なし、駈馬にて敵を見 家稜二代に仕へ、天正十五年、秀吉公薩摩攻まで、

懸け、名乗ければ、敵耳にも不開入、逸參に田の中 但馬も従軍す、其後の事にて、資多分利あしく、

を迯去る、其儘但馬も馬より飛下り、阿彌陀堂の道 天正十六年四月八日、吉地村於持勝院伏誅の後は、

下田の畔にて渡し台、今の母衣武者を二鎗突きて刎 古給人身を置く所なき處に、天正十七年、加藤清正

一

虹射佲歌不晛油醃鏽嗚謝妳好、本 九十間、南百八十間、北六十間、筑後國境迄三十間、

「田底三千町田村、五年六月、秀吉公征西の日、本領百二十丁を給り、

佐々輿力に附けらる、同年初緑類和仁親實が逆意に

與し、田中城に籠れ共、成政密謀に依って、途に親

實を誅す、彼親行が古墳、今吉地村にあり、親行

山十丁村の内、筑後國遊春山の境近きにあり、天正 が子熊市、 此時九蔵、吉地村に熱し、後次郎右衛門

七年、邊春加賀守親貞、 其子能登守親行、 當城に在

加藤清正侯に仕ふ、當城の東

號、次郎右衛門、

居して、玉名郡十丁、板楠、吉地、 藤田、 前原、江 西二十間、南北五十五間、高東の方六十間、西の方

上板楠村にあり、天文年中、板楠豐後守景貞、同嫡

子景次、相續きて在城す、終を不知、坂崎祇紅、梶原景

坂本古城

岡原古城

きたり、既証眸、資硫城して栄治 資冬、同八年病死、

然るに、大津山修理亮家

を領す、所領八十一町高にして、

其子修理亮家稜、後改河内守、二男信濃守家直さ云、 稜が領地、吉地村に有しが、邊春領の土民と、大津

天正十五年、秀吉公征西の日、家稜本領三百十二町 山領の土民と、境を争ひ不和になり、家稜、同弟信

を賜り、即ち佐々成政が、興力となる、後に故あり 濃守家直、二百五十人にて押寄戰ふに、大津山が一

て成政に抜き、居城を退去し、暫く前原村に居れ 番備小野權之允、邊春が家人前原加兵衛が放つ鐵砲

後復神尾城に楯籠り、成政が家人に賺出され、於吉

利

に中りて死す、二十三歳也、是より大津山の勢、

地村被害、一説天正十四年、神尾落城す、大津山資冬、同

弟家直、肥前大村に出す、後に刺すと云 一説 を失ひ引退く處に、城戸を開いて突出てき~に、

に云、大和越前守と云者、玉名郡太田黒城にありて、 家稜取て返し、遊が勢を追込み、惣勢を引取ぬ、

隈部有働等と一味し、當城に籠り、天正十五年九月、 權之允が妻は、石井下總が娘なりしが、討死を聞い

筑後柳川の立花と接戦し、討死すと云、當城東西七 て、曽て不悲、是武士の本意也、女の身こそ口惜し

十間、南北八十間、高東西十間、西は尾き、ロニ けれて、跡能弔ひ、七日に當る日、二十歳にて、

間、流三十間の堀有り、曲輪六百六十間あり、 同穴の契りせばやさて、自害しける也、其後天正十

二八〇

山鹿郡茂賀畛と云所、即ち左への茂賀浦と云、

二七九

小原古城

築之半ばに、大津山資冬、 我等が領分にかくる山な

るを、理りもなく、尾籠の肺也といかりて、手勢を

引具し押寄、宗郷を追散す云、南關誌略に云、五

位の巣、里俗誤って鯉の巣の城さ云、天文年中、大

友義鎮の臣小森大膳亮鑑元入道宗意築之、城未だな

らずして滅ぶと云、

神尾の古城

鯉鮓古城

云、強ち城跡共不見、物見を出したる所、此所

へ犬塚孫左衛門が古墳あり、

相の谷村にあり、臼間野太郎藤原宗郷、此所に城を

往昔はおばるさ訓す、慶長十三年、坂の上村と分っ

城ヶ鼻にあり、堀切僅に殘れり、城主犬塚孫左衛門

岩原古城 同古城

と云、又隈部氏居之共云、不審、

時、此城地の名によつて、こばる村と呼ぶ、實に肥

猪村の内也、

千田村の内廣村にあり、城主不分明、千田英朝築之 攻圍、永禄元年
五月三日戰死、四十三歳と云、小原

城の尾古城

小原村にあり、天文年間、豊後大友義鎮家臣小森大

也、其子英次落去すと云、

塚崎古城

の為に被

千田宮村にあり、城主千田伊豫守英戰、應永、文安

之比在城す、英朝は菊池十六代左京太夫武朝之三男

膳を鑑元入道宗意當城を築く、善光寺の上也、俗

城築前の在所を今や陳内稱す、鑑元

は古城さ云、

が母の古墳、塚が鼻にあり、天文二十三年鑑元當郡

菖嶽城に移る、後叛逆の聞え有りて、大友兵大田黑村にあり、天正五年三月、隈部親永が手引に

て、龍造寺隆信より、舍弟江上下總守家種を將さし

て、後藤家信、多久氏冬、修行越前守、大塚馬場以

下五千餘兵、常に打入、八月朔日、山鹿長坂の城を

責めて、隈部に渡し、大津山資冬が嶽の城を攻めん

議る、資冬聞いて、嶽は小勢はては難守さて、

東郷臼間野庄太田黑村神尾の城に籠る、肥前の兵

押寄せて、攻城五日にしても不陷、城兵楠田伊豆、

宮野主水、夫婦木新藏等能(働いて城を守る、肥前

勢あぐんで打捨、隈庄城に取懸る、資冬は運を開

萩原村にあり、始めは内田相良藤原重貞在城、天

の比落去、天正の比は、天武帝の皇子舎人親王の末

葉、長野壹岐守清原重鄉入道宗孚、 七十三町五百石

を領して、常城に居れり、天正七年落去す、霜野雜

記に云、長野壹岐守親次、萩原、米野、江田村三百

丁を領して、當城に居れり、其伯父隈部但馬守親永

遺恨有之、元龜三年三月三日、常城を攻落す、親次

は筑後國に出奔す云、此城山城也、高百七十四間、

東三百四十八間、西百八十四間、南七十四間、北曲

輪千百九十七間半、城の惣廻萱野也、西下は林藪も廣、

萩原古城

南北五十九間、東高二百四十間、西北南三百七十間、

堀江曲輪百間、小森田源四郎源光永在城す、天

文二十年十二月十三日、大友義鎮肥後國に發向し、

常城を攻落す、或説に小森田又次郎百廿三町讀化して

を領し、當城に居、天正十一年落去と云々、霜

野雜記に云、花牟禮の城主小森田彈正親廣と云者

隈部が族にて、日平村下小田村にて、二百五十町を

領す、其子又次郎親光が時、天正八年十一月、薩兵

の爲に落去と云々、

上廣村城の尾城共、永正天正の間、城主長田右衛

門尉武秀さ云、菊池家臣也、一説千田伊豫守英朝ご

廣古城

中原雜記に云、城主佐伯某也、肥後國士、各豐後大

友屋形の旗下に屬けれども、小代のみ未屬せず、

屋形此時佐伯某を召て、肥後小代未だ我手に不入、

佐伯は肥後へ罷越、陳場を見立つべしこの下知に依

て、佐伯則ち常國に立越え、玉名郡米の山に城を取

立、三ヶ年に普請成就し、佐伯七ヶ年常城に在留す、

右城郭成就の後、小代へ出陳すと云、

米の山古城

也、本丸東西十二間半、南北十二間五尺、二の丸よ

北也、東西七間二尺、南北十一間半、 紙本丸より

三の丸の間、三の丸、本丸の北、東西六間四

尺、南北三十三間、二の丸より一間低し、一の堀、

本丸の北也、口三間、流れ二十七間半、二の堀、本

丸の北也、口二間、流二十三間、一二の堀の間、六

間半、三の堀、ロ二間、流れ二十三間、二三の堀の

間、二十二間あり、

二七八

にあり、兄鎮房は、安國寺柳川方便り寄て討しは、 花とも云、日本村の内にあり、山城也、東西七間、

二七七

衞門等、於康平寺、鎮房の作善を修す、鎮照も常城

日平古城

時常城留守居は、荒木彌助鎮則也、鎮房、三月三日

於柳川城戰ひ、終に切腹す、荒木鎮則、伊形市郎右 請村にあり、城主年代未考之、

鷺原古城

江田村にあり、内空閑鎮房家士、誤りて佐々宗能牧野古城

於是同九月廿六日、牧野城を攻落す、内空閑攝津守

米渡尾高野岩尾久米野等に當る

て移るこ云、

舞尾藏人

豐後野縫殿介

下村にあり、建久年中、齊院次官親能、鎌倉の命に

古武城殿

下村古城

天正十六年九月日

安國寺判

城主年代不分明、

稻佐古城

、

今度鎮房隈部が子故也、隈部系圖には 我は服部が子なれば子細

忠儀を感じて、征西將軍命ありて、木葉村に宇都宮

なしさ、當館に移りしを、安國寺聞付、江田村住人

鎮照が家人古武城某に、方便状を送りて云、

大明神と崇む、又一説に、加藤家入國の時、 伯耆左

兵衛が家人伊津野十郎楯籠りし、清正攻落して討

取ると云、又一説に、天正十七年、小森田將監百四

五十人にて楯籠りしを、清正攻落すとも云依て、當國へ下向し、此所に在城し、後南田の新城

を築き悪逆に付、於筑州被誅、鎮照猾逆意を

振ひ、餘堂を導卒し、牧野城に籠、運智略條、

其聞明白也、急運計略、鎮照を討、首を捧候者、

明所二百丁安堵之御例可賜者也、仍下知如件、

鎮照、大に奮戦して途に自殺す、二十有三蔵さ云、

山本郡霜野城條下に可考合、鎮照辭世、

はたち餘り三とせの秋を一期とは

今ぞ誠に思ひえらる~

を

討取る、天正十六年、當城に退去し、二月下旬出城

して三月朔日到筑後柳川城、安國寺惠瓊に會して、

肥後一國の熊に有らざるを訴んこす、悪瓊誅之、此

、赤

星も放返し、扱連れて蒐る、職人は三尺七寸の刀を

隆房は

木の葉村にあり、宇都宮三河守隆房居城す、

振って、多勢が中に駈入る處を、時雨のごこく放つ 延久五年七月、
筑後大原台戰に討死す、三十九歳也、

小森田古城

名郡

池田村灰塚に陣を取る、赤星は大勢を引率し、

幸屈強の切所は、山前は古閑川を隔て

玉箭七六

ば田底八十丁を替地に進すべしさ云へば、赤星敢て

不肯して謂けるは、去る弘治二年、永野近所也とて、

阿佐古宮原を乞ふに任す、又今木野を望む事、遠慮

なして不承引、隈部大に憤り、是より赤星を可計

策を運らしぬ、道雲是を傳へ聞て、逆寄すべしと相

謀り、幕下の國士へ觸廻し、家人赤星中務を大手の

將として四百餘人、赤星人を搦手のさして四百、

其身は宗徒七百人引率し、永野城に押寄る、親永は

て期したる事故、六百餘人にて出向、衆寡元より

敵しがた 、藏人に中り、馬より逆に落ければ、隈部が軍

士一度に瞳と突懸る、藏人が四百餘人、大将は討る

れごも、炎天停午汗流して漿をなし、眼暗み息喘き、

二時計の戰に、寄手は悉く討死し、二十餘人に討成

さる、今其所を合瀬川さ云、道雲方には、此敗弊を

不順、多勢を頼み手を不碎、徒に見物す、既に日数

十餘日迄、攻撃の沙汰もなく、晝夜酒宴のみして打

暮、同晦日、殊更大雨頻りなれば、彌怠り帶紐解き

て、酒肴を弄し居たるを見て、隈部が入れし忍の者、

如是さ告しかば、親永老臣富田安藝守に命じ、夜

すべしさ、相言を定め、枚を含んで、西のに六百

赤星が陣営に推寄せ、 鬨を作って突懸る、赤

餘人、

星が営室は元より懶惰なりしかば、大に周章擾亂す、

隈部勝に乗り、追討して首數八百餘級を得、心の外

に討勝て、内浦に堡六ヶ所の要害を構へ、城代をこ

小野鶴巣兩城を築き、武威國中に輝けりと云、

玉米原金塚に打出、敵陣の小勢を見て心驕り、手に入

れて採崩さんも、安かるべしと荒言し、木山大森の

村路に入りて憩息す、職人は今般の戰、味方衆軍を

憑んで、不虞の負有るべしと深く思ひ、 四百餘人引

具し、隈部が陣の向なる道場に陣を取り、夜に入け

れば、兩陣烽火を焼連ぬ、翌れば五日二十一日、隈部

赤星川を隔て三丁計り、隈部方より矢玉を發す下内田村の山腹にあり、相良庄司藤原頼景二男、三

郎兵衛尉宗頼、承久年中地頭こなり、城を築て在城

し、内田氏と改め稱す、其子孫内田伊豆守高豊と云

者、氏を中尾さ改め、末裔存す、 此城本丸に石骸

の若宮あり、

若宮古城

上内田村畔にあり、城主隈部但馬守親永築くと、 山

鹿由來記に出たり、系圖に隈部式部太輔親廣、山鹿

郡米山鶴巣に舘を築て居る云々、赤星軍談に、親永

永禄三年より天正五年迄十八年、常城井長野城を排

へて、守拒の専要とす云々、常城矢谷も程近し、薩

軍に隈府城を攻落され、城將隈部親永此城に籠る、

薩軍直に攻れ共、 城郭堅固に禦強、終に城を抜れず

久原村の外西の方にあり、城主姓名年代等不分明、家城代たりと云、

鸛の巢古城

津袋村にあり、城主菊池家臣内田庄九郎時貞さ云、

久原古城

藤九郎高房居城と云、

津袋古城

上長野村にあり、險阻の地也、城主隈部但馬守親永

也、永禄二年、隈部親永、隈府の城に行て、赤星道

雲に對話し、此般木野彌次郎親政討死し家絶えて、

上知八十丁、私館に近し、某に給るべし、左も有ら

猿渡古城

山鹿由來記に、宇野七郎親德築之さ云々、 隈部式部

太輔親廣、米の山鶴巢に館を築て居之云々、土俗の

一 説に、隈部親廣在城の時、嶋津兵士來て攻之、城中

水し、薩兵是を知て、敢て急に不、故城兵殆ん

ご困苦す、親廣謀て、城外より見ゆる高場の所にて、

旦暮白米をもつて馬を洗ふ事夥し、寄手數日見之、

城内兵粗多く、且つ水の手多き事案外也、中々急に

攻ても難陥かる城に、日数を重て無益さて、人數班

せん故、米の山の城と稱すと云、

米の山古城

里俗下長野城と云、實に下内田村の内也、 赤星軍談

に、隈部親永永三年より天正五年迄、永野城鶴巢

城を用意す云、隈部親永が家臣富田伊豫守氏績、

日渡古城

氏が三男平山備後守秀世在城す、

前河内村陳内と云所にあり、菊池家庶流蛇塚九郎定

平山古城

室

内空閑權太輔鎮房

自害

-親房

隈部治部、同父

同父自害

親安

隈部式部太輔、

女

女 山鹿彥三郎重政室

上總介

親次 親家

隈部彌三郎

隈部式部太輔、

鑑承 隈親永

伯耆守

喂部刑部介

女

清平 親元

部彌七郎

鎮治 宗眞 隈泉守

守

武貞明

治

隈部式部太輔

隈部幸若丸、豊後守

出家

運治

隈部上總介

部次郎和隈部下野隈正法寺村平林の東にあり、御宇田光親が二男、吉田

下吉田古城

城守直貞と相續て、今城跡に二ヶ所眠天神・

北に花園の跡ありさ云、北に八郎丸さて、要害の

所、一老八郎丸が館跡也、又城の東に星丸さ云所、

星丸將監が館跡也、

あり、

御堂關白藤原光高公五代の孫、右大臣光重公、醍醐

帝の御宇、延長三年、始て下向、肥國後山鹿郡御宇田

村に住し、稲在名、其子又三郎光親、號民部太輔、幕

の紋八連錢、檜扇也、其子光房より相續て、代々爰

に在城す、菊池家に属し、御宇田上總介重直、岡山

以上公卿補任を以考、燃れば、御宇田

が系甚不審也、

(付箋)

御宇田古城

接するに、関白に光尚さ云人聞えず、

又延長年中に公卿藤原光重さ云人なし

菊池家庶流方保田與三郎重、其後方保田三郎武明

在城と云、地は今の方保田の東村外にあり、

方保田古城

邊春能登親行か一族、邊春常陸入道嘉勇が男、 芋生

攝津守親延、芋生十二丁を領して在城す、

-治朝 宇野但馬守阿佐古長野祖

式部太輔

-女 越前守隆顯室 i隆朝

隈部千代丸

式部太輔

隆忠

菊池肥後守武士

隈部源大郎

始宇野源治郎、後隈部右衛門尉、文永元甲子、菊池

武房以爲其外叔父、以當地之府訓、授賜隈部氏、自

此時、稱四天王之武士、

女 菊池式部少輔隆泰室

成治

宇野刑部左衛門

直

女 長野太郎隆基室

宇野源太郎

於北國討死

宗治

宇野五郎左衛門尉、

北國合戰討死

忠治

-義治

宇野源四郎、

大森の

與父同下向肥後

-業治

-茂治

宇野三郎兵衛尉大森三郎左衛門、

、

俊治 宇野大耶

有治 宇野太郎、齊院次官、關東下向、子孫稱入野、

賴直 下野守

治郎隆貞、居山鹿郡、而始開溫泉、

清和天皇十代宇野七郎、保元平治の亂敗、下向肥後州、菊池

親治

-隆治 早 世

·朝直

隈部又次郎、

上總介

赤星刑部少輔、

女

武則室

隈部源八、但馬守

朝忠

一に朝豐

託 別當太郎

女

安春室

忠門 但馬守

重治 隈部入耶

|-興

田 續

部富相

至宇

-元成

隈部民部

重元 隈部又十

朝夏 隈部耶三郎

二七三

常治 隈部右京

守治 隈源兵衛尉

上總介

親朝

隈部式部太輔

女 合志伊勢守隆本室

「武直

|-武治

讃岐守

隈部源次耶、

忠直

隈部常若丸、上總介

永俘 五平山現住

-親忠 宇野清左衛門

長治

喂部又三郎、式部太輔

朝光 隈部源太郎

案有るべし、隈部氏は代々菊池老臣秀吉公も本領

八百町の印朱を賜る、成政異議有間敷所、罪なき隈

部を亡し、所領を奪べしさの企て、無道の至り也、

往々は國士をも亡して所領を奪ひ、己が家人に與ふ

べしさの結構なり、各彼が爲に力を盡し、付城普請

は何事ぞ、自滅を招くにひさし、此所を被考ば、却

て隈本に取かけ、心を一途にして責られば、道塞

り可及難儀乎、左あらば成政歸路を伺ひ、不意に起

つて討べきと、十通斗り書送ければ、悉く引拂ひ、

小代斗り残りける、偖佐々與左衛門宗能は、山鹿通

本道を押て内空閑に討れ、成政は合志通り、坪井谷

より隈本へ歸城せんが、阿蘇奮臣等が反忠にて虎口

をのがれ、夫より田中の城を攻撃して、又常城に攻

蒐る、半に秀吉公より、成政急ぎ上洛すべしさ嚴命

はて、天正十六年四月三日、隈本より出立、同十

四日尼崎に着船し、同五月十四日伏誅、去る十二月

二日、秀吉公の依命、黒田勘解由孝隆、毛利壹岐守

勝信、安國寺惠瓊、常國に下り、使者を常城に遣し、

今度の逆意、成政に恨有りての事歟、又は天下に

しての事なる哉、申開くべしさの事故、親安返答、

に在城し不順を、壹岐守家人を遣して誅之、城久

基、赤星道半は、一揆にも不與、成政にも不助力が、

今度一揆に與するの由、大坂へ聞えしかば、急ぎ大

坂に至り無罪の趣陳謝すれごも、秀吉公無宥免、本

領を没収せらる、附城の跡に残り、原口の附城

は畠となれり、保柳口の附城の跡は中にあり、

隈部氏略系

一揆隈本攻の時、

終に盆城郡六ヶ村にて搦捕て首を切る

ると云一説有り、如何

敗北して六ヶ村にて割れた臼間野太郎宗郷は、玉名坂の下

宗立は去る比、

我々天下へ對し奉り、いかでか逆心可仕哉、唯成政

を恨むのみ申ければ、城に居ながらの返事憚有り、

親永、親房は柳川に開き、 親安井元は小倉に蟄居

し、無罪趣秀吉公へ達しなば、本領安堵疑なしてい

ひければ、畏る地下城し、親永、親房は立花左近將

監宗茂方へ、親安、 重安、兼元、有働甲斐、同能登、

同志摩、小道菴、北里與三兵衛、甲斐半藏以下十

五人は、毛利壹岐守勝信方へ遣し置、使を以て各事

上聞に達せし處、切腹すべき旨上意也さて、天正十

六年五月二十七日、兩所に於て切腹せしめぬ 甲斐

宗立は、身を遁れんさ、こかしこに、潛ぬれごも、

二七二

政が砲長、相蒐りに馳合せ、原口の門より半丁斗り

近づく時に、有働左京、糸木宮内、小場次郎以下三

十四人、切って出て追返す、同十三日、寄手原口に

攻蒐り、保柳口、圓通寺ロに押寄せ、大勢打破らんとする所に、大將親安鏡を提け突出、口の軍士を立直し、戰手に浮武者頭有動孫市同叉七、糸木宮内尾崎より横合に蒐り、共間に五六間なる時、矢玉一つ放つ哉否哉、鏡先を揃へ突悪れば、寄手不堪敗北す、右馬頭は、味方に後れて引けるを、隈部五郎兵衛が家人追懸れば、右馬頭取て返し突伏せける、孫市、宮内、遁すまじと追れば、右馬頭石原淵にて追詰られ、岩の上より飛下りければ、二人もいて飛下り、孫市、 右馬頭を押伏せ、宮内は首を取たり、岩地藏口は、第一の切所にて、防ぐ方便なき所を、成政が兵三百餘、押寄せて上り、既に危くみえければ、圓通寺住持大長刀を持つて、多勢を數度追下す、木原藤兵衛氏次は、五人張の強弓にて、下拳に散々に射る所に、孫市、宮内馳蹄り、後よ駈立つれば、寄手又なだれ崩る、成政が物頭赤星左近、高木左衛門取つて返し″が、有働父七鍵を合せ、

右衛門、小島庄藏、石田源助以下百八十人を籠置け

る、有働兼元書簡を認め、國士に輝けるは、能々思

二七一

加藤清正、宇都宮氏なり、

佐藤原雄也、泥酬の士、後三田村左衛門、方田傳

改大木

二人共に突伏する、 親安が近習中原修理、河井權助、

牧野主殿、拔ん出て働き、中原は川中にて太刀打

が、鍔本より打折しゆゑ、引組て水中にて首を取る、

主殿も河中にて組討し、首を取る、權助は若武者二

人、馬上より切つて落す、其外寄手討る者甚多し、

城中より小塢太郎左衛門と名乗って出しを、水野六

左衛門蒐合、小場を討つて首を揚ぐ、是を見て城中

より三人切って出、水野を中に取こめけれども、勝

成屑ともせず、三人共に切臥せて、息繼居た

成に差續て、道家次右衛門、鈴木小左衛門、淺井甚

太郎、岡田將監、各敵を討て首を得たり、山田庄太

夫も不劣進しが、城上の鐵砲にて眉間を訪れ、馬上

より逆に落て死にけり、かる處に、隈本より國中

の一揆、城を取圍むよし告來り故、前後の敵に心

を苦め、先つ東西二ヶ所に付城を、國士に下知して

築せ、東には前野又太郎忠勝、瀧三位、多田新兵衛、

杉山小佐以下百七十人、西には大木助鍵能時は、

、足輕

に帰り、當城に籠る、實に八月三日也、惣人數一 せり合の最中、城村の砲卒多く打出つるを見て、成

山鹿

事は隈本の隈

府の條

、其内侍八百餘八、鐵砲八百三拾

七百

挺

挺、化拍計

郡二七〇

は多く領知し、後に城氏さ戰ひ勝利を得て、山鹿

郡をも押領す、隈部氏は菊池最初の老臣也、城氏戰負けて隈本に移ると云、天正之比、隈部親永隈府に居城し、其子親安は常所に在城す、は府曽て聞く、延文四年七月、征西將軍懷良親王を大將さして、味坂御陣に、城越前守隆顯、腎菊池武光、同武政、同武信、赤星掃部亮武實以下八千餘騎功有り、又於長者原働き、大に少貳、大友を破る、應安六年三月、今川、大内戰ひ、筑前に於いて武数に順って、 赤星、城以下三十餘騎す~んで功有り、同年七月、城五郎兵衛、赤星掃部亮、有軍功、嘉吉元年十一月、城、赤星、隈部、木野、白石以下菊池持朝に従つて生松原にて戰ひ、少貳を破って凱歌を唱ふ、永正二年十二月三日、菊池家士八十四人連判にて、 大宮司惟長を養君とするに、城上総介頼岑、隈部式部少輔武治、赤星彈正少弼、其首領たり、天正十五年夏、關白秀吉公、九州進發後、常國を佐々陸奥守成政に給り、同年七月下旬、隈部但馬守親永を隈府に攻め、

親永が子式部太輔親安、隈府より萬五千也、甥

百弓五百張、17時頃大

將隈部式部太輔親安、大手の大将は一族山鹿彦次郎、

從兵有働志摩、同甲斐、同玄蕃、同掃部、同大膳、

同左京、同所升形は、有働越前、同能登、同將監、

筒間土佐、出田彌太郎、岡田三郎兵衛、鐵砲七十挺

弓五十張、保柳口には、隈部次郎親房を大將さして、

有酬伯耆守、高濱武藏、進惣兵衛,木山紹宅、富田

主膳、野田藏人、宗利主水、角田河内、松尾源三郎、

木原次郎、須賀山七郎、鐵砲六拾挺、弓三十五張、

出丸妙見口には、北里與次衛、小嶋常陸入道萬鐵

千葉新助、有働左助、同帶刀、鐵砲百五十挺、弓百

張、圓通寺口には、隈部五郎兵衛、大塚平次、關部

玄蕃、小濟小四郎、上科備後、關佐渡、同隼人、池

遊彌三郎、鐵砲百二十挺、弓五十張、浮武者頭

働孫市、同又七、糸木宮内、鐵砲百挺、弓百張、

百本、捻者頭、有働大隅元と相定む、佐々成政は

同八月七日、城村に發向し、日輪寺に斥候をかけ、

城の體を見せしめ、大手原口より古閑谷堺に二六九

小原村にあり、城主姓名不分明、本丸廢井有り、 土本古城の條下にあり、城、 隈部、 赤星の三老と云、

俗の説に、城を築き徙移して、翌日落城せし故、唯一菊池家衰微し三家爭威、終に隈部威勢強く、菊池一

小原古城

當城は菊池庶流城氏代々の居城と云、城氏の傳、隈

村古城

翌ればば八月二日、肥前勢復た星子が城に押寄、急に

城を攻落して、 中務以下百餘人が首を切掛、城を隈

部親永に渡し、大津山資冬が城を攻むべしさて、人

數を督して歸陣す、天正十五年、有働一族當城を捨

て、城村の城に籠り、佐々成政さ戰ひ、同十六年四

月、於豐前小倉被戮、

城山鹿由來記に、宇野七郎親治、鶴山に城を築いて居

住す、龜山に並べり、此所三方は地續也さ云、今其

所知る人なら、津留村の東寺島村に古城の跡あり、

此所なるべし、本丸郭大手の門跡歷然たり、鶴山、

亀山共に不知、銭亀山と云所は近是を云乎、親治

は保元の亂に擒れ、菊池に預けられ、鶴山に居住す、

末葉隈部さ號し、菊池の家臣となる、

向ふ處に、合志伊勢守隆重、赤星を援くべして、

二千五百人を引具し、長坂の邊なる奥縄手白金村よ

り、二町斗りを隔て~陣取り、頻に強砲を放悪くる、

肥前勢二子塚より押卸し、中村瀬を打渉り、堀田村

に陣を取る、然處に親永が一族山鹿彦次郎重安千五

百人、横合より志が勢に突懸り、戰に肥前勢物

陰より、不意に起つて討蒐れば、合志勢敗亂し、死

創八百人に及び、隆重從兵百騎斗りに討なされ引退

降重が叔父合志道玄明存一專蹈止つて討死す、

津留山古城

熊人村にあり、有働が家人多久大和宗貞が居城也、

天正十五年、隈部但馬守親永共に隈府に籠城せんが

佐々陸奥守成政に内通裏切して、 不忠不義の名を千

載に残す、誰か不惡之哉、

坂田村の山畔にあり、城主未考之、

熊入古城

坂田古城

んさて、湯の町二子塚に斥候をかけ、 星子が城に押

務が五百餘兵にて楯籠りし、山鹿、長坂の城を攻め一日の城さ呼と云、

貞元

貞高

-貞康

貞一

-通貞

-維衡

一妙丸、中、左衛門尉、正嘉元年六月十一日卒す、

頼朝通貞が孝心を感じ、父子に肥後国を賜り、再

び大橋に住す、

従四位下、

越後前司、

正五位下、武

正度

上總介

藏守、越後守

官、下向山本郡、住大橋、以大橋爲氏、

家貞

肥後國爲代

肥後守、肥沉代官、後尾州の族、 太郎左衛門

-貞能

貞經

原平太夫高春が許に住す、

父上洛の時

鎌倉殿本領の内、三十ヶ所賜はり、御家人となる、後

虎口の讒にて、擒と成りて鎌倉に赴く、

后改政重、

民部太輔、

修理太夫、

1

貞憲

貞

太郎左衛門

號二階堂

太郎左衛門、三

州額田を領す

貞

太郎左衛門 弘安八年七月

十七日卒す、

太郎左衛門、元

德年中在城す、

貞省

修理太夫

長門守

定庫

定條

安藝守 法大橋赴江州、

定雄

佐々木氏と云、

三河守、奉仕大塔宮、法名武

藏坊、元中元年於尾州卒す、

長門守、享祿二年

七月十一日卒す

長坂村に有り、赤星道半が家臣星子中務在城す、 天

正五年、隈部親永、家人有働外記を价使さして肥前

に遣し、龍造寺山城守隆信に、肥後手引すべし、急

ぎ軍士を出さるべしさ云送る、隆信諾して、弟江上

家種を代將さして、後藤家信、多久氏冬、修行越前守、

犬塚馬場、以下五千餘兵、 肥後國に打入り、七月晦

日、山鹿に着く、八月朔日、赤星道半が家臣星子中

長坂古城

山鹿彦次郎重安が城跡、湯町裏にありさ云、 山鹿由

水記にも見えたり、魔繹記に、重安は隈部親安が從

弟也と云々、天正五年七月晦日、肥前の龍造寺隆信

が魁將江上、後藤、多久、 犬塚、馬場を初五千餘兵

當城に来り、重安と會議して、翌朔日長坂の城を攻

む、其後同十五年四月、豊臣秀吉公征西の時、本領

安堵、同年秋重安當城を捨て、隈部但馬守親永、

同式部太輔親安と共に、常郡城村に籠城して、佐々

陸奥守成政さ戰び、翌十六年の夏、隈部、有働さ共

に、於豊州小倉秀吉公の為に被戮、

才法師になる、中將さ號し、松王 一人を召具

して鎌倉に下り、鶴岡八幡宮の祇檀に籠り、語經

て父の行衛を祈る、折しも北政所、内陳に忍籠り給

ひとが、雅き整にて讃經の整殊勝なれば、對面して

法華の功徳要文を尋ね玉ふ、一つさして不滯、政所

此事を頼朝卿に語り玉へば、中將を急ぎ御前に召れ、

法華の疑問をなし給ふに、辯舌糸の如く、一々答へ

ければ、大に驚き、心に望事あらば、叶へ玉はんさ

ある、中將嬉しく涙を押へて、有り次第を言上し、

胎内にて別れたる父貞經が顔を見申度、外の望は無

一書に

若松

然る所に、貞經謀反の企有り、虎口の讒に逢うて、

頼朝卿憤り深く、文治二年三月四日、梶原平三景時

を討手として差下し、大橋が城を攻めしむ、貞經哲

しは防ぎしが、途に不克、景時利を得て貞經を擒に

して、鎌倉に赴きければ、頼朝卿思惟有りて、松葉

が谷の土の籠に入れ置かれ、貞經が領知をば梶原に

給る、貞經が妻は、乳母が所縁にて薩摩の國に落行

き、憂年月を送り、無程男子を産む、摩仁王丸叉二の丸

と名付け、七歳の時、同國大御堂に登せ學問をさす

るに、才智人に越え法花を詰し、母に願うて、十二

呼出、妙典に對して布施物といひ、兒が孝心を感

し、所領興ふさて、左衛門父子に肥後半國を給り、

共に下向し、大橋左衛門二六七

將軍、陸奥守

天皇一葛原親王

從五位下

高望 上總介

鎮守府

将軍、陸奥守、

常陸大掾國香

従三位、

良望

鐘守高見王

○桓武一品式部卿

平姓大橋氏略系

通貞さ號し、當城に子孫在

居す、通貞正嘉元年六月十一日に卒す、貞一後改政

重、海東諸國亂記に、大橋政重丁亥年、遣使來賀觀音

現像前、此再度救我漂流人、書稱肥後大將軍大橋政

重さ云々、貞晟嘉禎三年流豆州加茂、初島貞原は三

州額田をも領す、貞清弘安八年七月十七日卒す、貞

|高は元徳年中の人也、定省は大塔宮護良親王に仕へ、

参河守と號す、 法名武蔵坊、元中元年於尾州卒す、

定雄初名善次郎と云、肥後國を去りて江州に移り、佐

々木に仕ふさ云、其後田中祐實在城と云、

b

く候と泣居たる、頼朝卿聞召、貞經が罪科不輕、近

日可誅者なれども、約せし一言は不飜と、土の籠よ

後小松帝明徳三年、肥後山本郡五百五十町を賜り、

基貞

備前守

後嵯峨天皇の御宇、伊賀國服部の城主

○藤原鎮基

伊賀守

内空閑氏略系

隈部系圖を考ふるに、親永女は、内空閑鎮房妻さ

有り、然れば、鎮房は親永二男と云は誤りにて、

外の家より養子に来れる成るべし、

毛利、安國寺被差下、安國寺は筑州柳川立花が許に

ありて、一揆叛逆の族、實否を糺問す、此時内空閑

鎮房 霜野の城を退去し、 新領江田村の内牧野城に

居すれ共、安國寺が謀にて柳川に至り、同年三月三

日、被害、弟鎮照、其比小代伊勢守を頼み石尾に居

しが、兄鎮房は、實は隈部が子なれば、誅せらるべ

きが、其身は服部氏の子なれば、不可有子細さて、

領分江田、牧野城に移り、安國寺及謀つて、鎮房

が譜代の家人古布志呂喜左衛門に内通す、喜左衛門

應諾し、其外家人忽に逆意を企て、同年九月、牧野

城を攻む、鎮照力戦をみ、遂に自殺して落城

于時二十三歳也しさ云、

山城村にあり、越後前司家貞、平相國清盛の一族

して、始て常國の代官となりて下向し、此所に住し

てより、大橋を名乗る、其子貞能、肥筑の代官た

しが、平家没落せしかば、貞能は舅尾張國原平太夫

高春が許に潜れ居て、後には剃髪染衣のとなり、

終る所を不知、貞能が子貞經は、父が上洛の砌、

鎌倉殿に降参しければ、世治りて後、本領の内三十

餘ヶ所を給り、御家人の列に加る、貞經が妻は、肥

後國鍋屋庄司が娘にて、十三歳より迎へ相訓しが、

子の無きを悲み、阿蘇山の観世音に祈りて懐胎す、

大橋古城

鎮照 攝津守

鎭資養子

民部太輔一

鎮資

本左衛門尉

新刑部太輔

一本親

一本真

式部少輔

中務少輔

少輔

備前守

長

爲載

重載

刑部太輔

柿部亮

式部

常國へ下り、山本郡垣の内に住居、家の鷹の羽を

木瓜に改む

思ひ、甥の佐々興左衛門に大勢を付て、兵を

運送す、此事隠れなく、内空閑が家來共、 都士の出

立、さぞ花やかなるべし、見物せんさて、數十人群

がりて、六の辻に立出、此彼の岸に並居て、路次

の行列を待ちけるを、佐々が先手は是を見て、伏兵

ぞ心待宗能に告ぐれば、左あらぬにて、脇道を

行くべしさ下知する故、即ち道を替へ、今藤村の堂

差て引卸す、見物の者共、此體を見て、聞くに劣れ
る臆病なる都武士、威して見んこ云もあり、否々
忽さ云もあり、其中に若者共、鬨を作りて、走り出、
鐵炮持ちたる若者、二放し發しければ、宗能が運や
の鉢、眞二つに打破りたり、誠に孝心天に通じ、即
時に父が讐を討事、例稀なる動功也、薩兵に利を
失いて、引退く云、天正十五年夏、秀吉公征西の
日、内空閑兄弟に本領の上に、玉名郡用木、江田村
の内にて、五十丁倍して給り、兄弟共に三百丁完の
城もたり、同年八月、佐々成政、山鹿城村城攻の日、
隈本に一揆攻城す、此時一揆に不興、成政は山鹿城
村に付城を築き人數を入置き、隈本に返り、一揆
を追拂ひ入城せんが、山鹿の付城、兵糧乏しかるべ
極りけん、眉間に中つて、馬上より逆に落けるを、
爲方なく足輕が肩にかけさせ、我一に逃るを見て、
今の鐵炮は大将に中りたるぞ、迎の事に追付て首取
れと、各追懸け、追討に切臥る、餘りに手繁く追ひ

ければ、宗能が尸を彼等に投捨て、八方に散るを

追散らし、宗能が首を取り、勝鬨作りで霜野の城下

へ歸りさ也、一説に、 山鹿城村攻城の時、國中の

隈本の城を攻む、 成政急ぎ付城を築き、人數

一揆、

を込め置き、隈本の城へ歸らんこす、甥の興左衛門、

山鹿通本道は、一揆與黨さへぎるべし、我成政に代

て山鹿通りすべし、成政は分田通り、隈本へ入城

有れ云、成政其詞の如くす、宗能は案のごとく山

鹿通りせに、霜野城主内空閑權太輔鎮房は、隈部

親永が聟なりしかば、一説視安の知田、松、鹿子木

等を語らひ、内村藤にかくれ居て、一同に切って

入る、 宗能元より期したる事なれば、防ぎ戦ひ、主

従三騎に討なされ、然も手疵を負ひたるゆゑ、藪に

走り入り、草摺を疊みあげ、腹かき切って死にけ

り、墓所今藤村にあり、同十六年、成政伏誅の後、

肥後一揆爲退鎮、 淺野、加藤、福島、 生駒、蜂須賀、

搦手には、牧野宗倫、同彈正、同淡路、同平馬、 同

丹波、毛利角七等七十六騎にて固めたり、寄手の大

將虎歯宗道五百余人の兵士を卒ひ、和泉山の麓より

二王堂の前に駈出て、こ~をせん度と責戰ふ、主客

の死創數を知らず、寄手は手繁く打立てられ、しさ

ころに成りて敗走す、牧野彈正競懸り、逃行敵を追

君にひかる 梓弓かな

M

敵とてもかはる心はなけれごも

薩軍大に腹をたて、今般降せし虎歯宗道、平川某を

案内さして、霜野城に攻掛る、正九年八月十五日なりと

城内思儲ぬ事なれ共、 虎口、 金穴、緒方、 市安を始

め、岩地藏口を固め、小高き所より散々に射る、寄

手五百餘人、さすが大勢なれごもたまり得ず、引色

になる處に、何なる者にや、上の原より岸を傳ひ、

中谷に走出、横矢を放つ、矢虎口藤兵衛が左の肪に

立ければ、弓をからり取落す、されども勇氣盛にして、 月を蹈上げて右の手に取り、城戸に入て矢を抜て、一首の歌を書付たり、

霜野をよけて日本うつ也

薩摩衆はあかがり足かひびきれか

詰々々切臥する、引立たる敵の中より、宗道壹人蹈止り、弾正に渡り合ふ、牧野元來手利なれば、宗道が細腰を突て刎倒す、弟の平馬走りより、宗蓮が首打落し、高らかに呼ば〜りければ、殘黨宗道が首を、取かへさんこもりかへす、竹下内膳是を見て、大長刀を水車に廻し、大勢に切て入れば、牧野一黨彌勇み、喚て追蒐れば、さしもの薩州勢切立られ、楠坂を追卸され、或は川に追込まれ、或は岸より轉び落

宗道が嫡子虎商帶刀宗連、

ち、右往左往に敗走す、

生年十八歳、女夫石に蹈止り、郎等に向って云けるは、眼前に父を討せ、共に天を戴き難し、當敵彈正

を可討也、我侗討れば、首を敵に渡すべからず、骸

の上の恥辱也と云捨て、取て返し、楠坂に押寄せ、

大音にて云けるは、我は今朝牧野殿に討れたる虎齒

宗道が嫡子帶刀宗連也、 牧野殿に見參して、父諸共

に討る~か、又は御首を給るか、勝負を試申さんさ

呼ばらければ、彈正聞いて、優しくも出玉ふ、一軍

仕らんこ、件の鍵を下げ、楠坂を走下り、田面に出

て、二王立につ~立てば、帶刀は長刀を提げ走り寄

り、板川の際に追出し、暫く挑戰ひしが、彈正が冑

故、氏を改め内空閑を家號とす、爾来相續て當城に、一陳に切て入り、途に討死しけり、家士内田喜左衛

居れり、後年基貞六代の孫式部少輔鑑貞、其子民部 門右の矢を寮殿に納む、即ち厳島の社内に小祠を建

太輔鎮資と云、天正十三年八月二十七日卒す、或傳

八代目を

て、佐鎮を今宮靈社と號す、納は、正院

に、内空閑氏元祖は、 後嵯峨天皇の御宇、伊賀國 鏡資號し、男子無之故、 隈部親永が二男鎮房を養

上野城主服部伊賀守鎮基と云、其子備前守基貞と號 子とす、附属の士には牧野、栗原、三木、三宮、金

す、肥後國山本郡五百五十町を給はり、參内有りて、 穴、虎口、垂水等都合二十四人也、鎮資後に男子生

天盃を頂戴の上に瓜を給る、依之家の紋鷹の羽を改 じ、鎮照と號す、鏡資病死之後、家督及爭論に、

めて、木瓜の紋とすべしさの宣旨を蒙り、筑紫に下 城越前守和儀を入れ、五百五十丁の内南三百町を鎮

向し、山本郡内村垣の内と云所に居住し、則ち在名 照に、北二百五十町を鎮房が領知さし、鎮房は霜野

號さて、内空閑刑部大輔元重さ改む、相從ふ 現嶽の城に移り、鎮照は尾平の城に移る、然に天

士には、竹下、内田、大平、朽貫、井手、中和田、 正八年十一月、島津大兵を卒ひて當所々を攻め、

正院、三保、其外共に三十五人屬従す、厳島大明神 日平城を落して、小森田親光を亡し、歸陳の時、路

を神として、代々尊敬す、基貞より六代中務太輔傍に木札を建て、歌あり、

本郡の内所々を領し、常城を築き、内空閑に住する

M

、又は正年中の人とも云、

名譽の太力をうちのこかなり

を引たて、

つなぎおく駒の手綱年代の洗まちくにして決、平家也、

左近太輔 無双の勇士也、芦北郡津奈木合戦

基貞が築く所也、初は内村權現嶽聖山の麓にあり

さ云、内空閑は、元と藤原姓にて、服部家より出、

伊部は、 伊賀國住人服部備前守基貞、明徳三年、

の時、赤星、田尻、鹿子木等と共に後攻に向ひ、都

合十六度迄相戰ふ、出陣の時、佐鎮士卒に向ひ、 我

今度死すべし、此中差の矢を厳島宮の破風に打付置

くべしさて、一首の歌を詠む、

佐鎮、霜野村にあり、内空閑家傳に云、當城は内空閑

霜野古城

云、

或は永肥後に下向して、山

仁元年親貞を-兼信

-義信

-義澄

尚貞

盛眞

-經義

助國

宗右馬頭、四郎左衛門、寛元四年丙午秋、賴嗣將軍

種邦

之時、押渡對馬、伐阿比留對馬守親元、頷對馬、

右馬七耶、弘安四年辛巳五月八日、蒙古襲來、再攻

對馬、助國拒之苦戰LC死、此時一族八十人討死

寸、氏族建社於濱汀、以助國靈尊崇高島大明神、

右馬頭

右馬頭、刑部太輔、爲大兵强力、世

賴義

俗云、鬼刑部、九州賜侍所、屬尊氏

將軍、建武四於攝州和田峠破大敵、賞武功、賜侍所

右馬頭、次郎太夫、貞和二年二月、於佐賀府、與尙

義爭論家督、盛眞戰奔肥前、觀應元年九月、赴肥

後州、隨事菊池武光、於筑前味坂戰死、

ｲ－義右馬權太夫

盛義

右馬頭、弘治二年正月、於飽田郡一揆討平、依功有、

菊池武朝賜感狀、

四耶左衛門、右京大夫、菊池籍朝賜一字改兼義、嘉

吉元年十一月、於筑前生松原討死、

刑部大輔、賜二百町、居住本山

城、天授四年、於詐摩原戰(死加)

大和守、度々有功、依菊池爲邦賜感狀、同山本郡

岩野莊百五十町、住岩野岳道祖城云々

小畑村仁bb、城主小田部式部少輔親尹亡云、内空

閑家人乎、年代不分明、

文年中沒落、石塔有b幽光寺叫林、内村西勯寺植此子孫e云、

荒平古城

紋は二本杉入り、子孫民間に有りと云、

加茂村仁市5、角田掃部亮光雅三劫师 在城、天

門の内古城

聖山の麓、小塚山共云歟、永仁元年、服部備前守基

貞下向、當所垣の内居住、後汇築當城居住、後

霜野城弫築之移住寸、一說城主内空閑鎮房共云、城

跡の地名、今は里俗城の腰と云

岩照寺山古城

池郡又肥前國之云、

久隆

岩野城忔是迄住赴、享祿四年辛卯年退去、子孫在菊

重頼爲養子、居岩野城

隆盛

治部少輔、實菊池武包二男、九郎兵衛

年八月、菊池能運賜證狀

盛賴

隼人佐

與八郎、丹波守、文龜元

從菊池重朝賜一字

於宇土討死

重信

大和守、明應九年八月、

盛信

丹冶丸、大和守、

二六二

岩野村の肉に、今道園と云ふ村あり、天文の比、 小

岩野嶽道古城

平原村にあり、内空閑攝津守鎮照、天正の比在城

也、

尾平古城

木留村にあり、城主姓名不分明、一説に圓臺寺繁榮

の節、設置きし要害共云、

木留古城

天文二年十一月下旬、菊池肥後守義武、 男、菊池を

十六爲國務、豊後より田原右馬頭親賢を附置が、

代也、

隈本城主鹿子木親俊と、及矛楯事有り、田原隈本を攻

れども防戰強く、城堅固に守りければ、田原利を失

ひて、山本郡鞍懸山の城に籠ると云、當城の始末

考之、

實は大友義長二

鞍懸山古城

山本郡

森本一瑞 輯

一瑞輯

横田氏敦校正

古城考卷之中

森の嬰兒也、乳父南備後守惟宗懷二六一

之、竄于山林、伺

時日、其頃原田太宰少貳大藏種直、執兵馬權、跋扈

千九州二島、惟宗遊事于 少貳種直、知邦を守立さ

知邦

左馬助、元暦元年、父知盛於長州檀浦戦死の時、襁

位大政大臣

〇清盛

法名淨海

知盛

新中納言

桓武天皇十代從一野左兵衛尉橋良旨築之、其後宗大和守兼信、永享八

年、菊池肥後守爲邦の時、詫摩郡本山に在城して、

同年六月、城備中守と共に、詫摩郡の凶徒を追散す、

又康正元年六月、盆城郡に大に戰ひ、一族七十人戰

死、依之爲邦、感狀及山本岩野の百五十町をふ、

岩野道租城に遷住す、其子丹治丸に菊池重朝一字を

給ふ、大和守重信、其子を大和守盛信さ云、明應九

年八月、於宇土郡戰死す、其子を奥八郎さ號す、後

丹後守盛頼と改む、菊池能運より、盛賴所領幷城地

無相違之旨、文亀三年八月三日、證狀を給ふ、子

隼人佐重賴無嗣子、依之菊池武包の二男次郎丸を爲

猶子、名跡を繼がしむ、 治部少輔重顯と號す、其子

九郎兵衛隆盛相續して、其終る所不分明、

宗氏略系

凡八十五ヶ所

嶽莊

所龜竹

〃

東城今千

石束

古須

城

村屋

眞丸

木

九久

萬

石米

久飛

保

二六〇

田熊

合

山本 郡

志古城考巻之中

郡

錄

後

山村玉

山

森

野關所原田

平村町

山

郡

返袋郡

懸

目

本

平下豐大同萩小名猿津城湯鹿荒鞍井城城田鯉米稲

野

手村尾中鮓山

稲佐二ヶ所

久平長

霜木

原山坂

野留

藏上坂今小廣平

古

鸛芋小

大尾

の

滿村下關原村

巢生原

橋本

屋日同翠神场牧

形

簾*>

若方城

保

山嶽 所⁑尾 崎 野

官田田

二五九

岩野嶽道祖

岩照寺山

六梅高藟岡城鶯

日御熊

宇

反尾瀬嶽原尾原

渡田入

筒高障坂岩日

子

嶽道嶽本原嶽袴山

山田米平

留

>吉下津

門口内

几に懸り居て下知をなす、城邊の平らと云所にて

の事也、其骸を一所に集め、埋めたる所にあり、

此時より城は落つると云傳ふ、

タイ セラ

阿蘇家臣松野原一彌太、近村二十箇村吟の幅にメ三

領し、常城に居れり、大宮司の娘を嫁す、下女四十

人を連れ来る、一彌太が父之を憎み、小身にて女多

し、家の破滅の基なりとて、二十箇村の者共に示合

せ、所詮一彌太を殺さば、嫁は阿蘇に帰るべしさて、

鹿狩を催し、拂川村に風呂を設け、一彌太を浴せし

む、松の原の郷民は事繁くして不出合、残る十九箇

村の郷民等、手々に熱湯を汲みて一彌太にかけ沸き、

終に一彌太を煎殺せり、一彌太が妻家に帰り男子を

生す、七歳に及びて松の原に來り、十九筒村の民首

等を招き、我亡父の遺跡を領す、何れも對面すべし、

扇子のみを指して出づべしさ相觸れ呼出し、十九人

の民首を、一同に々と頭を切らしむ、七歳にて床

松の古城

ふ、宗立が諸士新助を追散し、首級若干を得たり、

大友宗麟甚だ悦び、感状を宗立に興ふさ云、此節年

山村に大番所と云地名あり、常には山下に居りし

序等未」考、あり、時に山の上に上りしと云、

桑木野村にあり、城主篠原丹後守、年序不分明、

阿蘇家臣低用丹後守城紀藤原天正年中在城す、

中力の古城 桑木野村の内

傍島馬入古城 峠原村の内

二五八

に差向

二五七

萱野古城

山崎村山上にあり、城主姓名不分明、

山崎古城

さ云、箭石箭越なと云へる所名あり、按に征西將軍

森山

に御座したる時、名和顯興奉守

護事古記にあり、其舘跡不分明、此地森山に隣りたれば、其舘跡にはあらずや、

御舟より三里計り南小熊野村の内也、天正九年十二

山の御所跡あり

花山古城

菊池隈府にも守

東小川の山上にあり、俗説に鎮西八郎爲朝の城跡

小川古城

堅志田にあり、阿蘇大宮司惟前隠居して、甲佐に在

北部田村にあり、城主未」考」之、

在城と云、後に氏を小野と改む、子孫にあり、

北部田古城

舘し、惟豐天死の後、惟前復た大宮司職再勤の心あり、當城に居す、事長き放任

是を略す惟前沒落の後、阿蘇家臣西

左衛門尉惟安城主となる、天正九年十二月二十日、

相良義陽響野原の事ある日、西肥前守久遠、二千餘

兵を以て當城を攻むれごも、城不」陥、惟安常生不測

の話多し、其行を知る人なら、不死を云、謚登霞

梅林、

軍艦を乗りされ共、其功を不」被」賞、

鎌倉に愁訴す、其後當郡四海東を 今の高三千

七八百石 賜はり、

吉を請す、家の紋桐也、古記大矢野氏に存す、 慶

長の比住吉の宮を今の住吉村に移す、村號出于此

小野古城

小野村山の上にあり、阿蘇家臣男成伊勢守宇治友竹

村の内

赤蜂尾古城 カウソノ

に働き、蒙古の秋月等と同じく賊を防ぎ、筑前博多鹿の島にて大い明、

蒙古襲来の時、太宰少貳、 菊池、松浦、 赤星、島津、 萱野村にあり、阿蘇家臣城主たりといへども、不分

蒙古襲來の時、太宰少貳、菊池、松浦、赤星、島津、

神園月、甲斐相良野原一戰の後、島津家より當城を築

き、絹脇刑部左衛門城代として、人數三百餘を籠置い

て宗運圍碁の中手のごとして手を不」掛、常に音信

を爲す、宗運死して未だ百日も不」過に、宗立當城を

攻めて、大将を始め塵にす、其後島津が大兵常國に蹴

入す、天正十二年三月也、一説島津家臣新納武藏守忠

元、御船城を攻取んと譲り、稲富新助を花の山臣大 跡也、文永、弘安の比、 竹崎五郎兵衛定安在城、蒙

季

竹村の長の山上にあり、一株の老松あり、是れ城

す、里俗は法源殿の城跡、又は市正殿の城跡とも云、

又説當城主は婦人なりき、射術をして精兵の強弓、

城内より射る矢、南田村に留る、貌美

く然かもあり、或時慢して、今天下に我れ恐る人

なし、假令雷電霹靂なりとも、拉くに足らずと云言下

に、雷電して、此婦人撃れ、城郭灰燼すご云、此外城

稱する堆き畑地野等三ヶ所あれごも、城主等不分明、

大塚古城

竹崎古城

豊福村の巽にあり、此地森山に近し、征西將軍懷良親王森山御所に御座す時、村上顯興幅に在城して、御所を守護し、盆城、八代、芦北の間所々に城を築

八代在城

き、一族をして守らしむ、顯興の子泰興、

の時は、一族加悅飛彈守長秀を城代とす、天正元年、菊池二十代肥後守爲邦二男民部允武邦十九歳、豊福に籠る、爲邦嫡子重朝、其子能運相談して、諸軍を遣し責る事四十餘日、終に落城し、武邦戰死す、 此時從五位下能運、深手を負ひ菊池に帰る事を得ず、八代郡岡城に入りて死去、今や岡中村興福寺の廢跡に古墳を存す、観音堂に位牌梁牌あり、洪福寺殿前肥筑太守義天明絅大禪定門神儀、永正元甲子年二月十五日とあり、村上武顯、宇土在城の日は、本郷、東を城代とす、東播磨守は矢崎にて討死したる、東右衛門が二男也、

曲野古城 辻の城と云

天正の比在城と、野原合戦の時は、矢部濱の館

詰番にて、留守居淵甚吉と云者、城内をさし、

寄手の使に應對せりさいへごも、其城跡不分明、今

考に、當所の畔に城跡あり、里農も何れの時、何人

の城跡といふ事を不」知、此邊豊田郷さ稱する故、城

なるべし、

野村の内村にあり、阿蘇家臣鈞野民部少輔在城

豊麗古城

荻尾村の内、浦河内村にあり、阿蘇の臣村山丹後守、

豐田古城

野天進が居城乎、大野民部少輔が居城乎、

二五六

松橋の西南大野村の西にあり、城主不分明、阿蘇二五五

の神人田上周防は、大河六彌太を組討し、 成松 陣内村にあり、鎮西八郎爲朝の城と云へとも、不分

陣内古城

しさかや、

しければ、弟本郷武蔵守を大將さして、士首には大井芹河内討留め、其外の残業を、悉く追詰々々射伏せ切伏せ、沉目の泥田に追込めて、一人を不殘首を取る、此時伊津野は、いかなる所存にや間に合はず、古城の其後大宮司より、従軍城主甲斐正運に、宗と力を合せ、隈庄を攻落すべき旨下知ありしかば、雨將策をめぐらし、御船川神水川の水練者を選み、隈庄戸川をば密に潜らせ、城内に忍び込み、此處彼處に火を放てば、城内大いに騒ぎ立つ、其噓を伺ひ急に責むれば、城將今は怺へ難く、守昌を始め一族を盡し、切って出しを、大勢の中に取込め、悉く計取って勝間を執行ひ、都合三年の籠城も、一炬の爲めに焦土となる、守昌は隈庄、鈴村、上島村、川尻を領せしさかや、天正十五年の夏、秀吉公征西の日、其臣岡本太郎右衛門を以て、隈庄に居しめ、小西領には、弟小西主殿亮城代さし、慶長の

役に、宇土の留守居となり、途に並河宅に於て切腹

すさ云、行長曽て居城の地に擇めごも、薪材木乏し

さて止め河六彌太、成松式部、雑兵都合三百餘人を爲兵」此

者共は旗を隠し、木原塚原より沉目村城所に忍

入りて伏居たり、早川は夢にもしらず、舞の原の

堀道より、大手に寄せんこ議しけるに、伊津野が人

避々する故に、早川一手計を押寄る、然る處に思ひょ

らざる沉目村の陰より、帆悪舟の紋付けたる旅一

流風に靡かせ、武藏守以下の選兵、眞一文字に切っ

て蒐る、休雲、吉久、春藏主等是を見て、堀を描い

後攻を助け、絆を廻す所に城中より甲斐運天、

同帯刀城戸を開かせ切つて出て、早川勢を引落さん

さて責めけるに、早川勢は前後の敵に据立てられて

敗弊す、本郷武藏守は、後陣に扣へ居たりしに、早

川休雲、透間を見て無手と組み、差遠へて死にける、

渡邉吉久、春藏主も討死す、宗運陣所は、十五六丁

を隔てしが、聞くこひさしく旗本には、南田代の城

田代宗を床に代らせ、選兵二百騎を卒し、飛鳥

の如く馳着け、大河、 成松、沉目村の陰に人数を

休め居たりしに、一文字に突いて懸り、山出村大武

明神次郎武房０３三男甲斐六郎武本、六代甲斐豊前守重

村在城す、天文年中より、甲斐上総介敦昌、其

子隈庄甲斐守昌相す、守昌、始の名を甲斐右馬

允と號す、御舟城主宗運が聟也、一日守昌、宗運を

訊ひ、雑談數刻に及ぶ處に、宗秘臓の鎧通の短剣、

刀掛にありらが、猫障りて茶臼溶靠く、釼室を放れ

て、鍛尖五六歩茶臼にぬかり立たるを見て、守昌大

に驚き、所望しければ、宗運答へて易き程の事なが

ら、愚老は大宮司殿他に異に思名候間、自然の事ぁ

らば、用可｣立意得なれば難｣叶、死後に至り遺物に

遣すべしとて辭しけるに、守昌家に踊り、妻を頼み

て盗取り、小烏丸 名附け秘藏すれども、宗運は

それとも云はず、然るに守昌熟思ひけるは、惜みた

いかなるべし

に至り、惟將の下知に依りて、早川越前守吉秀入道

休雲、渡邊右衛門吉久、承陽山圓福寺住持春藏主、

佐渡大學、同圖書、同修理、同能登を始め、騎士七

十五人、雑兵三百餘人、三月十四日、天文八年三月十

辰の刻出陣して、隈庄より二十町計り手前、吉野茶

臼山一の谷に陣を取る、甲佐城主伊津野山城守も

同日同時に出陣す、士頭には江原雲晴、赤星市太夫、

大宮司数人の蔵部八十五騎、雑兵四百餘人、隈庄

より一里東出水村の前なる河原に陣を取る、宗運陣

所は、上島の河向千原の向南坂本の上なり、宗運は

甲佐早川の南勢に大手を攻しむ、宗運軍者下山勘解

由戯れて、早川陣所茶臼山なり、先

餘所に

陣所をかへ給へ、茶臼は引いては敵を粉になし難し

笑ひぬこぞ、城守昌は、宇土の伯耆太兵衛に通

を陳ねて攻むれごも、城不]陥、翌れば永禄八年三月

隈庄古城

往日は熊無田庄さ云き、城築の始を不」知、菊池十代

紫垣土佐守道高、榎津村の城主也、年代不分明、 だ怒り、隈庄を討取るべしさ命じける故、宗運兵

榎津古城

宇土城主伯耆さ謀り、島津が旗下に可屈さ約せん

者の一族也、

ば、

伯耆武顯家臣三谷刑部左衛門在城す、三谷氏は、伯首尾者に爲すべし、然らば一向手替りすべしだて、

阿高古城 東阿高る匙首を盗まれたれば、宗定めて我を阿蘇殿へ不

村の内

二五四

を、宗運聞届け大に腹立ち、阿蘇惟將へ訴へけれ二五三

、安

女

丸

次郎太郎丸

大宮司忠國保とあり

芦北

伊豆大島にて自害、

伊豫守

爲義

強弓、安二年、

西八郎無双の從五位下

河内守

從四位下鎮守府將軍

伊豫守

頼義

從四位下鎭守府將軍

河内守

滿仲——頼信

○經基

鎮西八郎爲朝の城跡さ云、近衛帝從四位下鎮守府將軍

始賜源姓

木原古城

在城すと云ふ、其の是非をしらず、

矢部杉村にあり、城主夫」考」之、

寺尾古城

」之、

矢部市の原村にる故、水は、川尻大慈寺十境の一也、北山四面一様のを

飯蓋古城一

の跡あり、今は帛地と成る、

天正年中在城す、本丸の北川を隔て、三の丸芦北郡津奈木浦より乗船し、薩摩に赴き琉球に航渡

すご云説あり、其時浦の船人に奥へられて直垂を神崇

矢部川井野村の逆にあり、阿蘇家臣甲斐將監信光、

元二年三月六日被」誅、三十八歳城三云々、又常國

勝山古城 河内村の内

土居堀

め、濱の宮とあがむと云ふ、今猶存せり、

城山

の南に、木原山あり、仙居の地と云ふ、山中の午時

あり、城主未」考井牟田村にあり、阿蘇家臣飯蓋備中守光金在城と云、なす、爲朝射術神妙なき、今に至つて飛雁亂行す

市の原古城

雁回山名附さ云、一説に其後文明の比、

村上彈正大弼武顯、八代の城を相良に讓りて宇土に

來り、家臣加悦飛彈守をして守らせ、武顯は當所に

の御宇、仁平久壽

の比、六孫王經基より六代、六條判官爲義の八男入

郎爲朝、天質強なりしを、父爲義、後來凶忠の害

あらん事を察して、筑紫に追下す、時に爲朝十六歲、

常國に下向し、菊池に居る。

初めは阿蘇ス後には木原山に在城、

にる古曽て阿蘇卸に押なり

て、九州二島を掠領し、自分鎮西八郎さ稱す、其後

歸京し、保元元年の軍に、父爲義と同敗績出奔して、

同年八月、江州に擒れ、豆州大島に流刑せらる天正十五年六月、秀吉公より、矢部の内にて三百町

寄附證狀あり、惟乘神主より、二位惟豊、惟將、惟

種の代、尤も盛大也、大宮司は庄の本に移る

矢部村にあり、阿蘇大宮司、小國南郷矢部に住す、

後に當城に居す、 又麓の隙内を居館さし、常城には、

家臣甲斐親定、甲斐武藏守親房、黑仁田豐後守各城

代たり、親房が子源左衛門、同彌左衛門、同九兵衛

さ次第す、後には加藤清正に仕ふ、天正十五年、小

西領の時、結城彌平次、太田市兵衛城代となり、小

西滅亡の後、加藤家より長尾豊前、加藤萬兵衛を、

當城及び愛藤寺の城代とす、然れ共祟りある故、城

内に不居住別に宅を設くと云、文龜永正より、菊

池家衰敗亂に及ぶ、此節阿蘇神領の外、益城一郡共

外諸所、大宮司手に入るさみえたり、

岩尾古城

の間を作ると云、

すべきよし被｣加制禁」て、各城共を潰すと云、

木を以て、熊本花畑亭

城

材田邊中右衛門、横田勘左衛門、加賀山次郎八、岡兵

左衛門、天木庄太夫、 小野田彌右衛門、吉田杢右衛

門等也、岩尾城掛持也、其後秀吉公より、諸城却

-惟景惟國 惟直惟時惟澄 惟村-

正三位

-惟郷- 惟前惟種惟光惟善友貞 友隆友名 眞楫-惟典

從三位

豊

-惟長惟-惟將從二位

-

惟忠

從四位

-惟成 惟正三位

家惟乘

賴元-惟助－惟親 惟信ー惟滿ー惟遠-惟雅

「惟綱ー惟員ー惟行ー惟眞-惟貞友孝友質

-友房ー惟俊ー惟宣 資永惟泰惟次惟義

遠明——宗延 -惟清友利 友成友仲

從三位

〒惟惟風利名 賴高成時-則高惟致

惟文惟氏ー忠行!惟峯友助-罹顯-惟保

ー成秉ー成輔 高正 高範友則友粂

速瓶玉命

○神武天皇 -神八井耳

健盤龍

第五皇子

第二皇子

阿蘇家の略系

二五二

二五 一

-宮山悟旨寺

懐良親皇 西野車、或稱関西視臣、嘉慶二年、草千肥

後村上天皇

南帝

第七皇子

〇後醍醐天皇

の北、家臣犬飼備後守城代となる、小西時分には結

人皇九十五代

犬飼村にあり、初は大宮司在城和介

天正

矢部親王系

愛藤寺古城

足に御あり、

不分明、

共に菅丸の内にありて、緑川を隔て相望めり、城主

右同御坪村にあり、征西將軍泰成親王御在城、當城

鬼ヶ城猿ヶ城

御坪古城

風を城のに現人神さ崇ふ、邦秀子を越前守吉秀と

云、早川城主也、

東上野有水村にあり、征西將軍御在城の時の番城 猿渡に城を構へて隠居す、沒後其子孫子細有りて、離

有水古城

離風、嫡子式部少輔邦秀Kに城を譲り、其身は

矢部征猿渡古城

式

泰成親王

太宰帥宮、懷長親王羲之爲嗣子、後

南帝斷絕、

-高福帝

後山水越村の内山の内村にあり、城主姓名不分明、土俗の

祿二年、於吉野爲赤松被殺

第一皇子

山内古城

説に、征西將軍泰成親王、 當所御坪御在城の日、有水

の城さ當城さ、翼の如くして藩鎮とす、此谷要害自然

の地也、町村と云は北の市店の跡さ云、又有水城下

の谷に、湖の本は、共頃往來を改めし關所さ云

院 猿渡にあり、永正年中、早川式部少輔正秀入道

並に有水山の内足の勢あり、町村の上将軍山の山

城彌平次城代、加藤家に成りて長尾豊前善政、硝

佑衛 加藤萬兵衛正直、城代と成る、與力の士

には、土橋掃部、好孫御舟島澤市右衛門、平地源右衛

中小路三右衛門、速水七左衛門、後藤三五兵衛、

大宮司に選任、此の忠賞に依て、御船庄五百四十町

賜り、在城す、 は左巴、

-観宣

甲斐大和守 阿蘇惟盟に従い、前を討滅し、惟豐

重村

甲州住

恋の頃、肥後に下り、菊池武

武光戰て不際、土二人、薩州に落行、後に日向

に赴き、岡山に登居、

忠重

菊池八耶

菊池上野介、後甲斐肥後守、呼

甲州住

住

甲州住

菊池五琊

武定

武忠

菊池六郎

武治

菊池左衛門尉

其子時隆、家督争論して終に肥後を出奔し、

京都にて訴ふと、不成る事故、甲斐に下

都留郡に蟄居す、

〇藤原武本

菊池十代武房三男菊池六那兄孫四郭隆盛早世、

甲斐氏略系

七十五歳にして、忽ち黄泉の鬼となりしさかや、遺

言に依つて木の倉壽永寺に葬り、遊田見村東禪寺、

菩提所なれば位牌を建て、又御船若宮の邊に一

の石を建て、宗運夢庵主さ碑銘せり、宗立が行

旦過瀬台戰、花の山攻城、且つ一揆の首領さして、

隈本にて敗績、六箇村に縛せられて、家名を絶つ

事前條にあり、可」考、天正十五年、秀吉公征西の日、

黒田官兵衛を以て城代とすと云、

甲州北田代村にあり、田代紀伊守入道宗傳会在城、

天正九年、響野原一戰に、宗傳一族を催し、堅志田

に到りて、相良勢を多く討取ると云、阿蘇家臣也、

紀伊守が子半七四郎右衛門、後に黒田如水軒に仕ふ

小園古城

肩の上城とも云、玉東村邊にあり、阿蘇臣田代乘珍

響野一戦に功有り、天正十四年迄在城と舊記にあり、

或説には、天文年中には、孫左衛門光高在城、菊池

の爲めに亡ぶさ云、また甲斐五郎親房子孫民間に有

りこ云、何れか是なるや、不」知、

北田代古城

甲佐城守伊津

女子三人 早川驪守護邊右術大夫吉久棲、混生城主甲斐

-惟秀 同五郎

藏堂に於

-親秀

守入道宗立、金城郡

親常 甲斐膳

甲斐の

隆昌

甲民部大輔、阿蘇一字を賜り、惟槻入道宗運

夢、一世の動功不可勝計、綾鷹羽を賜り、丸の内用

甲斐七郎、隈の庄

二五〇

下

に至り、四郎右衛門が手負ひたるを訊ひて、御船に

皈城し、義陽の骸を懇に納めさせ、一片の石を建て

印しさす、其銘に柳江院殿前従四位下大尹義陽越江

蓮芳大居士さし、左右に討死の士の名を合せ銘す、

義陽の首を八代に送る、相良家麓飯盛山下に葬送し、

同石碑を建て今にあり、御船陣原にも塚を築いて、

相良塚さて今にあり、宗運男子四人、嫡子親秀、父

命に不随、龍造寺隆信に通じて阿蘇に背く、宗運怒

つて、既に合志郡に追懸けて生捕り、討つて捨ん

せしか共、合志伊勢守を始め、頻に佗びて歸城せし

む、入道して宗立さ號す、二男孫次郎、三男仙千代、

四男十郎、何れも生質懶惰にして、剰へ阿蘇を背き

陽の

急に進んで打て出で、渡邊孫四郎吉次に、共に舟津

笹尾を越え、西山正法寺の前を過ぎ、野傳ひ經の坪

に駈付け、宗運に謁する處、馬に離れ武者一人、

長刀を横たへ南の田原を引退くを見て、名乗悪くれ

ば敵も犬童藤七 備頭 と名乗りて、返し合ひて相戰

ひ、藤七を討つて首を取る、大宮司之を感じて禄を

倍し、軍兵衛改名せしむ、軍既に散しければ、人

數を屯して、宗運は雑兵の傷者と紛れて、油坂を宗運幕下に、菊池の庶流井芹加賀を首

や、四男十郎系

領して、七十餘人の一黨あり、飽田郡井芹村に、加

津家に志しを通し、引入れて大宮司を亡さんと企け

るを、宗運密に謀りて、一人も不」殘討殺す、大將加

賀をば、渡邊軍兵衛討」之、去程に木山備後守が

宗立が娘也、或時宗立が妻、右の娘を招き、某が親

黒仁田豊後守は、叛逆に依りて先年宗運に討れ、其

時某に云はれし事、義に當る故、神に誓つて否まざ

りき、されば正敷宗運は親の敵也、亡父泉下の思も

あれごも、某仇を報せんとすれば、神佛に誓ひし恐

れあり、御身の爲めには祖父也、 あはれ宗運を毒殺

して、仇を報い、且我心をも休んじてよさ、餘儀

〱頼みければ、女心の默止がたく、安々さ領掌し、

天正十一年七月五日の事なるに、木崎温泉に入浴し

給へと、木山が妻より、宗運を僞り迎へけり、宗運

かかる企のありともしらず、木山が城に至りしを、

木山が妻毒茶を自ら持出で、迎へてすめけるゆゑ、

一人は逃げ延びて日向に至り、山伏さ成るさか
て、 井芹一黨の返逆に加り、討取るべきを疑ひ、密
に城を遁出しを、宗運追かけ俵山にて、兩人は討取
義陽本陣の後花園の六戦より押上り、二巴鷺矢の旗
を差上る、義陽の旗本二三町を隔てしに、本田、田
上、下山、栗林、方、 島岡、 井芹、 鳥居、 湛淵、
柿葉、杉田、保田、林、村山、甲斐、武藏一同に切
て入る、義陽の勢は旗本迄にて小勢さいひ、思ひ
けぬ事なれば、右往左往に敗北す、されれ共義陽勇
將にて、床に祟り、白旗を揮て敗兵を集め、防か
んとする處に、緒方喜藏馳來り、陽を討つて首を
擧ぐ、義陽の近習討る者、江林寺、 玉井院、成願
寺、光明寺、致阿院、東越後、同彥右衛門、同解
由、同彌三郎、同刑部、同木工、同河内、同彌四郎、
同左近、同又次郎、同石見、同大監物、犬童藤七、
同喜左衛門、同喜六、小田美作、同十郎左衛門、同
與太郎、村上大監物、有瀬與兵衛、園田忠四郎、恒

松美濃、竹下兵部左衛門、桑原紀伊、同喜兵衛、淵上刑部左衛門、野田善左衛門、北嶋又八郎、中尾將監前田喜三左衛門、芦原佐左衛門、長藤八郎、木下喜三左衛門、小谷輿一郎、濱田次兵衛、伊福伊豆、同圖書、丸山十兵衛、深江次兵衛、 淵上喜左衛門、犬童土用、千代甚九郎、又治郎、放音朔也、犬童真

八代城ょ

識知山東左京、同周防、同主水、同次郎左衛門、同帯刀、同六左衛門、同兵部、同藤兵衛、同軍四郎、同三郎左衛門、高津賀上野、犬童存藝、同長門、同五兵衛、京太郎左衛門、西大和、同駿河、同八郎、篠田筑前、同三浦、村上飛彈、 同宗次、同土甲、高橋四膳、同志摩、松下壹岐、税所自牧、澄川孫太郎、平川右衛門、河邊新右衛門、外山主計、原口佐左衛門、瓜尾兵部左衛門、井部千宮、精方五藤右衛門、吉田若狭、下山佐渡、風呂内藏、一所下野、 同喜二左衛門、坂下長門、田口淡路、新右衛門、被官

十五人足輕雨人、店 舗、兵供に二百餘

人と云ひて、今石碑に有る所如」斯也、

宗運巢林系の坪に本陣を据ゑ、兵糧を遣ひ息を継ぐ、

田代宗傅は、宗運の出陣を聞くま~、後れ駈來り、

手に不]合を無念に思ひ、宗運に謁して勝を祝す、相

良勢は大討れける故に、雨所の寄手糸石栗迫を繰

引にす、宗傳、宗運に御免あれと断りて、歩兵二百

を左右に備へ、眞先に切って入り、火水になれ揉

立々々、五千餘人討取って、宗運に感賞せらる、宗

運今度の戰にも、首四百八級を得たり、早川越前守

秀家は、宗運出陣のよしを聞き、玄蕃一人を召具、

二四八

二四七

森山に放火し、鯖峠に陣を取る、翌れば二日、 運は糸石村にて様すを聞き、谷を傳ひて嚮野を廻り、

パカミ

織田藩瀬合質は、別家に出

常國入ཁ པ འདེ O ཞ

久遠をさして

に〻す、

家毎に一人宛儲客を、事故なく都合四百八人を慶

年月不』委、且つ隈庄一戦の

千五百歙、一

未明に手分を定め、

〻〻代麗の城主

良修理大夫従四位下義場は、求麻、蘆北、盆城の内 一手は東掃部分を將さして軍士二千を差添へ、伊津

を領し、阿蘇家に滅し、無別心」盟約し、宗運に誓 野が居城松尾城に差向ふ、伊津野山城守は、居城を

紙を送る、則ち阿蘇に納め、宗運が誓紙は白木の 放れて油坂に戦ひ、日和瀬川河原に討死す、山城守

に納む、去程に、義陽は、島津義久様々にこらへ が子宮内大輔は、大病にて起居ならず、此戦に不」出

招きければ、不」得」已和親に及ぶ、此事阿蘇へ開え 也、西肥前守が向ひたる赤蜂尾の城は、防戰強くし

なば、退治の合戰あるべし、先ずれば則ち人を制す、 て不昭、去程に山城守を討取りたる由掃部介より

所詮此方より可」寄さて、天正九辛巳年十二月朔日、 義陽へ注進しければ、大に悦び陣を響の原に移し、

八代を出陣す、相従ふには、八代興善寺城代相良伊 物始めよしご酒を汲みて勇み合ふ、御船にも山城守

勢守長次、同弟越中守長久、同岡の城代佐々木宮内 が訪れし事を告げしかば、宗運は聞くさひさしく、

左衛門高光、同吉本城代東掃部介、同陣内種山の城 甲斐武膨、同伊勢、栗原伊賀守入道等の を始さ

代簗田五兵衛、北郡田の浦城代進忠左衛門實俊、同 して、不断の兵二百を従へて出陣し、嫡子宗立

佐敷の城代西肥前守久遠、天草の領主刑部少輔東越 に御船郷中の健民を、早々飯田山へ登せ、堅志田表

後、同彦右衛門、同木工、同河内、同左近、同大監 より見ゆべき山の峠をば、鋤にて穿崩させよさ云

物、犬童藤七、同美濃存法師を始めとして、都合 ひ含め、山出村の田上備後大井芹河内を引供し

一萬餘兵、十二月朔日の黎明に、白木の祇に塗る處、 て、碧川を打渡り、田口、津志田の道より、安見

重代の旗華表にか〜り、旗竿中より折れしかば、諸 村に押通る、相良斥候是を見て、本陣に告ければ、宇

士今般の軍には、利ある間敷と私語す、即日益城郡小

宗

土よりの援兵ならんと、油断せしこそ不運なれ、

野家人

矢部岩尾の城代たり、然るに宗運て菊池武光が秘

する處の軍法を傳ふ、阿蘇家臣御船房行叛逆を企る

故、是を討て御船に在城すべき由、大宮司の命也、

親直父親宣に云ひて、自ら房行を可討さ請ふ、親宣

事を惟豊に訴ふ、惟豊請に應ず、於是て親直軍士

を卒、苦身坂峠に陣を張り、木の倉にて大いに戰

ひ、房行を始め首四百級を得たり、此戰功に依って

阿蘇家より御船の城主たらしむ、親直後に入道して

ク

なれば、親とても一味難し、兎も角もこ諾へけ

蘇に還往し、是に君臣の約をなす、親宣は歸國して

臣たり、甲斐氏は、菊池十代武房が三男六郎武本 宗蕉夢號す、 天文二十年八月十六日、大友義鎮

云ふ、兄孫四郎 隆盛早世、其子時隆と家督の争論 軍立して、二萬三千餘兵を卒し、同十九日、阿蘇坂

し、終に閤東に至り、留り甲州に在りしが、四代重 梨に着陣、同廿日小國醍醐満願寺を本陣さん、諸

村、足利尊氏の命にて、甲斐氏さ改む、肥後守に成 方へ手配す、大宮司より案内として甲斐宗運を遣し、

りて下向し、菊池武重さ戰ひ、追出され薩州に入り、 大友佐伯惟殺を將さして、合志郡竹迫の城を攻めし

日向に赴き、蟄居して土持綱に騙して、年暦を む、城將伊勢守隆重降參す、矢部岩尾の城代黒仁田

り、大和守親宣に到り、永正の頃、阿蘇大宮司惟豊、 豊後守は、宗立がん鮮なり、然るに黒仁田阿蘇

菊池武經が子惟前さ戰ひ、毎度勝利を失ひて、日向 家を抜き、日向の伊東に属する故可」討の由、宗運に

國鞍岡山に沒落して、阿蘇惟前を亡し、阿蘇に往せ 命せらる、宗運は命を蒙り、娵を呼んで然々の由を

ん事を、旦夕憤り思ふ處に、甲斐親宣に邂逅し、親 」語り、誅伐を加ふる也、わごせも一味せらるべきや

宣父子が計略に依りて、惟前薩州へ奔走し、惟豐阿否さ問ふ、姫此由を聞き、代々の主君を背く無法

ば、宗運び、は誓言を聞くべしといへば、杌

佛神に誓ひ不」故、黑仁田が一家を、御船川逍遙に、

日を定めて招き、黒仁田が郎を、宗運が家中御船

九十九小路に、一軒に一人宛のめ請し入れ、

酒肴をもてなし、黒仁田は元より城上へ招き、奥の

亭へ請じ、珍膳佳菓にて時を移す、豊後はか〜る謀

も知らず、打解けて酒飯を喫し、酩酊の折から、宗

運唯一刀に手討し、相岡の貝を吹きし故、宗運は、往古國未だ陸ならず、景行天

皇巡狩の時此の所に御船着津せしゆゑ地名さし、一

艘二艘、又は碇野抔云ふも、此遊にありと云ふ、應

安年中、御船河内守盛安在城す、永正の頃、御船房

行と云は、盛安が子乎、未」考」之、在城して阿蘇家

味木古城

在城す、

乙女山古城

傳云、地名御船永祿天正の頃、阿蘇家臣小左衛門尉惟致油屋敷等津志田古城

の跡ありさ云、俚説區々にて不分明、

御船古城

宮の一の武家、赤星一太夫が屋敷跡なるべし、

安平村にあり、土俗古城さいへ共、天正の頃、甲佐 す、宗運が居間の跡猶存す、往古長者屋敷にて、倉

安平古城

御船牛瀨村の内今城村にあり、甲斐宗運始めて此の

城を築いて居り、後に御船に城を築いて移り、隍

壘櫓臺存せり、享保の始、礀を崩し堀を埋めて畠と

味木村にあり、味木氏は、甲斐源氏安田三郎備へ居たり、

四郎右衛門死憤の兵となり、直ちに坂を馳せ登り、

名乗りかけて討て入り、掃部暫く戰ひしが、 掃部が

突く鎗を受迦し、眞只中を突通さる、勇氣も不撓、

鎗をたぐり、一刀に掃部を討つて本意を遂ぐ、

江原

義定が

後胤、義定嫡子安田三郎義治、常國に下り、盆城を

領知し、味木の庄に在城し、 家號ごす、家の紋は、

大洲流し、又は二の引雨也、味木次郎四郎久慶、鹿

苑院義滿將軍九州征伐の時、味方にし抽三軍志上

夫より在京して、公方家譜代衆三十六

洛の供奉す、

人の内、左の上座也と、本朝高名記に記したり、元亭

釋書に、味木縣源憑と有るは何人か、未」考」之、

平瀨古城

子にて、

稱す、 油坂の峠小高き所に陣を据ゑ、 眞黒に此の一戰に、田上伊

山城守 娶り、後伊津野と稱す、

豆、渡邊孫四郎、能く働いて、宗運より感狀を受く、

田上備後惟滿は、此の一戦に法師武者を討つ、父は

田上周防さて、山出村大武明神の權大宮司也、備後

子を美作さ云、宗運託摩原合戦に、城氏幕下の士を

討つて功ありこ云、

田口村にあり、城主田口彈正と云、後に同郡飯田山

に城を築いて移ると云ひ傅ふ、常城は天文の頃也、

に碧

南早川古城

同丹波守秀貞、

す

を可正さいへども、彼は村上帝の恋葉なるゆゑ、

早川記に載る早川城主

三王の爲めに反忠して、 隈本城を援、功不可

勝計知りぬ松伯の湖に後る事を、

本氏渡邉也、早川に居住し阿蘇に騙す、依て

同十五年、三圭を佐々成政に預け、國士一揆の日、

二四四

近江守秀村、 早川を

同式部少輔政秀、

同越前守吉秀入道休雲、 同越前守秀家、

同式部少輔秀邦、

一命をと天草に追放す、三年の後、阿蘇の諸士幷

に郷中の寺院、頻りに伊津野が歸城を願ふに依って、

大宮司免許、山城守復び當城に主たり、天正十九

年十二月二日、相良義陽の先鋒東掃部介、當城に向

ふと聞き、隊下をも不具、己れが手廻り僅かにて

城を出て、碧川を打渡り、日和瀬河原に陣を張り、

背水の陣をなす、 東掃部介、油坂峠に着陣して相戰

ひ、秀貞一戰に利を失ひ、引かんさすれば、後天正の頃、阿蘇家臣渡邊右衛門太夫吉久在城、吉久 川の湛浪茫さして、退く事不」協、是れは先年、隈

は早川越前守秀家が弟、初め孫四郎と云へり、

豐内古城

庄にて後れを取りし事を思ひ、今日陣頭に命を捨

先非の恥を雪かん爲め、討死さ思ひ定めしとかや

松尾城共云、甲佐豐内にあり、此城跡の上に、三四 豊の内城に、秀貞が家老伊津野四郎右衛門を始め、

町の地堀跡あるは、大宮司惟前の舘跡也、惟前弟 赤星一太夫、田上伊豆守等馳集り、評議しけるは、

惟種の雨兒惟光惟善也、城主伊津野秀勝に、村上天 山城守出陣を不知、討死は是非もなし、常城に楷籠

皇の末葉にて、綸旨をも所持す、其子山城守は、甲 り、寄手を引請け、潔く弔合戰するか、又は人數を

斐宗が嫡女を返れり、隈庄合戦に、早川渡邊と同盡討て出て、油坂に向ふべきかさいひければ、四

〈出陣し、舞の原合戦に味方既に破れ、軍將命を損郎右衛門進出で、各は兎も角も、某は立所に主の仇

すれごも敢て不援、敗績に及ぶ、阿蘇大宮司へ、宗を討たずんば、生きて再び歸らじ、油坂へ切って

運此旨を告げれば、大いに怒り、首を斬りて軍法 登る、掃部介は、伊津野を一戦に討取って勝誇り、

二四三

早川氏 阿蘇にして、代々居城す、早川越前守 寒を嘗め、潜に糧を送り、千辛萬苦終に操を不失、

早川古城

吉秀入道你雲、妻は甲斐宗連が二女也、甲斐守昌叛

の丸には弟惟純居す、 天文二十年、大友義鎮に攻め

られて降参す、阿蘇家には、村上、甲斐、仁田 水

光永、木山等家老の筋目也、

探薪汲水の苦

津森古城

下陣村にあり、阿蘇家臣光永中務家久在城、二

げんき人の心にて

相續在城す、天文二十年八月、

手毎に折し花の枝かな

大友義鎮、大

木山古城

迫村にあり、天文、弘治、永祿、元龜、天正の間、

人とれずにむすぶ癲帯

軍にて宇土城を落し、夫より直に木山の城を責るに、

一戦に及ばず降参しけるを、案内として九郎林より

中尾村に押下し、下陣城に攻蒐るこ云々、惟久入道

紹宅、城を赤井に移して築き居れり、常城には家臣

を居らしむ、天正十三年、薩兵に攻撃たれ、 赤井

一同に落城す、小西行長領の時は、其の臣伊藤與左
衙門を城代とすこ云、紹宅飯田山花見にまかりて、
風よりもは心にて、永七年、宗運、隈無田庄の城を攻むれご
も不」陥、同八年三月、阿蘇惟將が命に随つて出軍
舞の原堀道を忍びて押寄せ、宇土よりの後攻の将本
郷と引組、差違ひて討死する後、嫡子秀家を阿蘇よ
り改め、越前守休雲領分居城と共に給はる、家士名
有るものは、佐渡大學、同岡書、同能登、同修理等
也、秀家が弟渡邊孫四郎吉次は、天正九年十二月
響原一戦の日、相良勢向ふと聞き、秀家と共に籠城
すと云、惟前叛逆の時、堅志田を攻めて功あり、阿
蘇惟種沒後沉落の日、其二子惟光惟善、幷に惟種の
後室、島津が爲めに矢部に飄零す、家臣各不義を懐
き、思々になる、然れども、秀家は金銭をえる、其外
は南郷、矢部、兩高森、男成、中山、甲佐、上島、
渡邊、北里、下城、迫、井手、村山、雨坂梨、秀定
是等は堅く義を守り、山中潜行の時も、坂梨孫太郎

眞先に綸旨箱を荷し、次に西源兵衛惟光を肩に乗

せ、渡邊孫四郎惟善を肩に乗す、秀家は殿して追慕

ふ敵を拂ひ、漸々にして矢部に至り、ロ乙女山に住し、後此所に住む、東の崖に古墳あり、

飯田山にあり、田口本さ云、城主田口彈正、初めは田

飯田古城

下六ヶ村の畔にあり、永祿天正の頃、阿蘇の家臣西 双宰府にて

越前守同加賀守相いてす

益城郡

隆信を川上左京討取り、薩兵大に威を奮ひ、皈帆の

時、難風俄然として起り、波濤舳艦を砕く故、網田

浦に船泊す、此時素心酒肴美味を以て薩州の將士に

饗應し、數~軍労を慰す、

細田村の内田村海遊にあり、村上武顯、宇土在城

の時、家臣杵築越後城代たり、文明明態の頃なり、

其後行直、顯孝の時には、家臣加悦大和入道素心を

して、當城を守らしむ、天正十二年、肥前國主龍造

寺山城守隆信さ、同岡有馬左衛門佐義純さ合戦に及

び、有馬は勢の微なる故、安徳古閑を薩州にせて

援兵を請ふ、嶋津義久は詩に感じて、嶋津家久を將

さて、新納忠元幷に鎌田、梅北、川上を始め三萬

餘兵を肥前に航海し、攻伐守禦節に當り、終に

田平古城

八重櫻一重はさきに散心くるしき月をこそまで

小野笠着の連歌

人をおくりてかへるゆふくれ

身をいつの煙のために残すらむ

紹宅

そめて

紹宅

紹巴

又七たびのわかれをぞする

或年北野にて

赤井村にあり、木山左近大夫惟久入道紹宅、始めて

木山迫の城に居り、後常城を築いて移る、故に誤つ

て常城を木山城さ云、天正十三年九月十九日、薩兵

新納河上等急に来て當城を攻落す、紹宅が妻幼兒を

携へ、福原迄遁落つれごも、敵追慕ふゆゑ、持來の

觀音等を差置き、藤原の内野村の民家に潛る、幼

兒の子孫に民間にあり云、紹宅は風雅に名高き

人也、

砥川村の旧畔にあり、城主砥川丹後守吉住在城す、

其後木山紹宅赤井在城の日、兵臟とすさ云、

赤井古城

砥川古城

二四二

二四一

々の

出立ちにて、我不」劣を切って出で、双向ふ寄手をな網田村にあり
、城主姓名年代等不分明、

ぐり立てなぐり立て、二三町追拂ひ、枕を双べて討

死す、薩摩勢大に勝利を得、物始よしさ勇みをなし、

人数を分けて、隈、甲佐、中山、砥用、御船に發

向す、就中甲斐宗運が嫡子なれば、軍立も心にくく、

防禦の備へ、進退の節、さぞ手強かるべし、殊に

先年花の山脇刑部左衛門を討取たる者なれば、粉

骨して相働き、城兵をみなごろすべし、御船の城

に寄せければ、按に相違し、一戰にも及ばず、飯田

山に逃げ上り、使を以て降を乞ふ、宗立如｣斯上は、

仁田水備後守、 木山紹宅、合志親馬各出て降参す、

高森伊豫守惟直は、防戰堅固也けれ共、終に城を攻

落され、右の如く肥後大義久に属しければ、又宇

土に立蹄り、船艦漕ぎらね、肥前の高木に押渡る、

隆信は是を聞き、二萬三千五百餘騎の着到にて出張

、薩摩勢と挑戦し、終に討負け、隆信を始め四千

嶋津勢隆信が首を肥後國迄持

三百六十二人討死す、

り、玉名郡高瀬に到り、蒼園山願行寺四阿彌陀佛

に葬らしむ、

松浦、江上、後藤、多久、田尻、馬以下多勢を催

し、押寄る由風間す、是れに依り、有馬氏より、安

徳越後、空閑上野を兩使さして、嶋津義久に援兵を

請ふ、又赤星道代も、寵愛の幼兒を二人迄、隆信に

害せられしを憤り、薩摩へ赴き義久に屬し、此の恨

を報せんさ歎きけり、義久も難默止延別すべきに

あらず、先づ肥後を従へて、其後肥前を可攻と、

弟嶋津中書家久を將として、新納武藏守忠元、鎌田

尾張入道寛西、梅北宮内左衛門盛定、河上左京

以下都合三萬餘騎、百艘漕ぎ連れて、いろは幟

十文字、隊伍を倒さず、金の響、櫓聲船歌相交へ

波にたぐへて夥しく、郡浦へ着船し、阿蘇大宮司の

家臣中村伯耆惟冬が籠たる、矢嶋の城に押寄せて、

採崩さんと攻掛る、城將惟多聞ゆる勇者、爰を詮度

防げごも、元衆寡敵しがたく、外に憑みの助兵

無ければ、討殘されたる郎等七十餘人を一所に集め、

城戸を開いて突いて出で、一人も不」焼討死す、暫く

有って惟冬が妻、緋威の鎧を着け、小長刀を脇挟み、

不意に切って出てければ、続いて女二十人、思大嶽古城

隆牛 隆元九條十郎隆朝林原三郎隆範

舊記等に有」之往昔の宇土城主、左之通、神菲

菊池一族

後志水伯耆と改め、能く働く、細

す、仕寄番日下部輿助 細川公にふ

川源公、咸狀及短刀を給ふ、同月二十三日、城邃に落

る、同十月朔日、留守居主殿亮をば、隈本二の丸並

河志摩守宅に於て誅す、今や西なるは伯耆家の城

痕、東なるは行長が縄張したる居城の跡と云ふ、其

天守を清正熊本城内に引移して、宇土櫓と稱す、清正

領に成って城を創迄の間、並河金右衛門誌と中川

太郎平代る代る城代也、

常城に籠る、行長

ふ士さして、遂に肥州の藩主なし、文祿年中朝鮮

攻伐、一方の先鋒さす、生質偏曲にして、然も蠻國

の邪法に染着す、初めは小豆嶋鹽館を領し、豫め朝鮮

攻擊を知りて、魁主を望む意あり、秀吉公其勇氣を

知って登庸せらる、慶長五年の後、石田三成に組み

して、凶徒の首さなり、濃州關ヶ原に軍立し、東軍

の爲めに捕へられ、縛せられて京に梟首せらる、

同九月五日より、清正當城を攻む、留守居小西主殿

隈庄城代也、隈庄を措き三宅玄蕃、或は防ぎ或は夜軍

名乘那郡浦にあり、城築の始をしらず、村上武顯、宇土在

城の時、其臣東右衛門太夫城代となる、後討死すこ

いへども、未」考、其後阿蘇大宮司が家臣、中村伯耆

守惟冬を城代とす、天正十二年三月、龍造寺隆信、

嶋原の有馬修理太夫義純を攻めんこて、三井、山下、

田河、筑城、糟屋、 早良、 遠賀、 小城、佐賀、神崎、

矢嶋古城

州討死、

顯輝

伯耆左兵衛尉

惡四郎顯孝爲養子、於薩

-行興

行直

行憲

修理太夫

九郎早世

和

重行

·武顯

重年

彈正大弼

太夫

眞彈正少弼

顯忠

伯耆守

太夫

ニイニ

面

泰興

興

村上氏略系

武茂木野對馬守 武爲 武門迫十郎 英朝千田伊守

爲光艦伝の頃

菊池十二郎

重光 長朝

正少弼

神山村にあり、往古の事跡」考」之、文明年中、村上彈正大弼武顯、八代麓城を相良三郎爲機に譲りて、當城に主たり、宇土、益城富ノ庄、飽田郡、合て五百五十町を領す、此時當城には、一族加悦飛彈守をして守らしめ、武顯は盆城木原に在城すと云一説も有りて、是否を知らず、天文二十年八月二十八日、大友義鎮、二萬三千餘の兵を以て、當城に押寄せ蒐る、城將顯孝、思ひ設けざる事なれども、八百餘

兵にて楯籠り、寄手を度々追立つる、されごも元よ

小勢と云ひ、死傷も多く、守城既に危きに至つて、

大友方より使節を以て、本領可 安堵條、下城せら

れよとありし故、顯孝是を幸ひにして旗下に屬え、

天正十五年、秀吉公征西の日、伯耆顯孝も本領安堵

せんが、一揆起つて隈本を攻め後、一揆に不興由

を、大坂に至りて謝する處、顯孝が養子惡四郎顯輝、

顯孝留守に逆意して、宇土の城に籠る、秀吉公之

れに依り憤り深く、顯孝が所領を没収し、近國の

宇土古城

委はし、

宇土郡

に命じて、顯輝を攻めしむ、顯輝防戰力盡き、走り

薩州出水にる、折しも嶋津義弘、肥後境に出張

して、一揆を鎮る時なれば、顯輝を出水に責む、従

兵百七十餘人悉く討死し、自ら一人手を砕き、奮戦

數刻、敵数多撃取つて終に討死す、年十九歳、氣聊か

不撓を感じて、出水に墳墓を築いて現然たりと云、

此時秀吉公、加藤清正に命じて、暫く城代とす、同

十六年閏五月、肥後半國二十四萬石を小西攝津守行

長に給はり、宇土に在城せしむ、領内諸城にて城代を

定む、先づ益城郡隈庄の城には、弟小西主殿亮、矢

部愛藤寺に岩尾、雨城代結城彌平次、太田市兵衛、

八代麥嶋城代木戸作右衛門行重 1等也、行長繩

後改小

西美

張仕て、宇土城を改築く、行長始めて宇土に入城、

六月二十七日也、同年冬、幕下天草の諸將、行長に

抜いて命を背せず、行長往いて責むれども不」克、援

兵を加藤清正に乞ふ、清正自ら軍を卒ゐて出で天草

に至り、堅きを破り鋭きを砕き、危きに立つて敵將を

鎗下に討ち、魁主を陣下に降し、秀吉公感狀を清正に

賜ふ、行長は泉州境津の店小西如西が子にして、初

名を小西彌九郎と云ふ、秀吉公采地を興采地を興

二三九

千町の大將分合て八千餘人、宗運父子を大将として、

天正八年三月十八日、竹宮原に隙を取る、隈部、麗子

木、隈本、高橋等の城伯も、白川且過瀬を前に受け、

宇土、川尻兩勢は、且過瀬の戰半に、不意に蒐りて

詩べして、半田、戸河原邊に伏居たり、其夜も

雨降りて、物静かなる體なれば、隈本方の諸陣には、

酒肴取散し、明日の合戦には、兎して敵を組討し、

角して首を取るべきなんさ戯むれて、打甘ぎて物語

し、帯紐解いて悠殺たる、油断大敵とぞ知られけり、

宗運は、必定敵は此の雨にて心を緩め、沈睡すべし

思ひ量り、此の虚を討んこ計る處に、て敵に入

置きし忍の者立かへり、如是と告げしかば、未だ東

雲の空ながら、竹宮原より且過瀬五十町をば、暫時

が中に人數を押詰め、川を濟りて鬨の聲をあげけれ

ば、隈本の諸勢は、前夜の酔紛れ、鬨の聲に目を覺

し、上を下へと周章騒ぎ、太刀も刀も取へず、然

れごも、漸々に川端に打臨み、こを渡せ罵れば、

宗運方も左巴鷺矢の旗を翻し、敵の渡るを待ちか

けしに、城方の軍勢は、宗運が小勢を慢り、一度に

川に馳入りて押渡る半に、御船甲佐の川に訓れたる

若者共、川に入り戦に、敵軍大いに切立てられ

引退く、宗運方は勝に乗り、追つまくりつ切崩せば、

敵方の相圖も相違し、宇土、川尻は一戦にも不｣及し

て敗散す、宗運は一戦に勝利を得、士卒を集め息を

ぐ、然るに隈本の陣より、武者三騎馳せ來り、

我には木庭九郎左衛門、平川左近太夫、城藤左衛門

さて、國中に名を知られたる者共也、 聊かの用に遮

られ他出せん間に、味方敗軍に及び、甲斐殿御父子

に未だ對面致さず、願日は自餘を不」交、御父子と勝

負を試み度候と呼はつて、氣象凛々として控へたり、

宗運聞いて、彼等が風情誠に一騎當千也、大將の手

を卸すはいかゞながら、老後の慰に、一軍して見す

べしさ(宗運父子は陣頭に進み、木庭平川に組合、

せ、兩人共に討取りたり、宗運七十二歳也、竹宮入

郎左衛門も進んで戰び、藤左衛門を始めとして、首

七級を討取りたり、物語には、城藤左衛門は、右八郎

左衛門 れに成り、隈本に踊る

實に天正八年三月十八日也、今日宗運討取る首數四

百八級、凱歌を唱へて、翌日豊後に首共遣はしけれ

ば、大友宗麟甚だ悅喜し、其賞さして飽田郡池の上

村を興へらるさ也、宗運行狀は、御船古城の條下に

二三八

二三七

入けなり、一手は三千、健軍宮の森の木蔭に伏し居た 川越前守を招いて留守居さし、宗選手勢三百騎、

早

氏も、代々阿蘇大宮司の家臣たり、光永攝津守入道

大

り、残る一萬二千餘兵を、前後左右中央に立て、

淨英、尤も阿蘇の家臣也、其後同臣甲斐宗運が一族甲 將小將法令を正し、卒伍を整へ、旌旗瞳に映じて、

正運を城代こす、其後隈庄守昌不順の事有りて、宗 龍鱗動き、金鼓の音なく、間をも不作、静まりかへ

運攻むれごも城不落、大宮司又正運に命じ、宗運さ つて扣へたり、三家の寄手、未だほのくらき霞間よ

相計りて、隈庄の城を攻め陥す、正運が一子親英は り、菊池が本陳に押寄せて、鯨波を作って責懸り、

宗運が聟也、親英一子あり、 長鶴と號す、 十五歳に 主客互に入れ、死生を一擧に箏ひしが、菊池が軍

して氣隨懶惰なる故、宗運書を送りて親英を諦め、 略孫呉に不恥、黄石か秘するの神武の智勇、人の

遂に長鶴を追出す、長鶴は後今春太夫が門に遊び、石 及ばざる妙を自得し、武威奮然さして敵を挫く、敵

原右衛門太夫と號し、謠曲を以て世に鳴りえさかや、 軍大に敗北し、菊池又勝に乗じて突崩せば、大友は

託燥原合戦は、應安六年、探題今川貞世、幷に大内、 遥々津守の城に落ち行く、今川、大内からうして散

大友は度々の軍に、一度も勝利を得ず、ゆゑに甚だ 々になつて、川尻より船に取乗り、筑前さして帰り

憤り、又人數を催して、菊池追討の事を計る、今川、 さ也、且過瀬合戦は、天正七年、日向耳川合戦の

大内、筑陽肥陰の大兵を一手さし、大友は豊、日二州 後は、大友旗下の常國中の豪雄、各自大友を抜いて、

の衆兵を一手さし、海手は他田郡川尻に輻輳し、陸 島津、龍造寺の幕下に属す、獨り甲斐宗運は、御船

は阿蘇、金城を打越えて陳を張る、菊池肥後守武朝 の城にありて義を守り、阿蘇に對し大友に脊遇す、

は、逞兵二萬餘兵を卒る、居乍ら大軍に當らんは、 國士宇土、 隈本、 川尻、 鹿子木、高橋等謀し合せて、

軍慮の不足に似たりさて、託座原に打出て、鍵て設 阿蘇大宮司惟豊、 甲斐宗運を可亡を企てけり、宗連

けし事なれば、二萬餘兵を三つに分け、五千餘兵を 此の由を聞き、強軍坐ら防んは短慮也、先則制」人

一手さし、原中の西方に潜れ伏し、横を撃つべき設 どこそいへ、此方より強して、敵を拉かんさて、早

高江古城

給はり、正平十二年本山の城に居ららむ、天授四年

九月、少貳大友肥後のに寄せ來り、託摩原一戰に

盛義討死す、其子義澄、弘治二年正月、飽田郡の一

揆を鎮め、菊池武朝を興、其子義信、菊池

朝の一字を給はりて兼義と改む、嘉吉元年十一月、
筑前生の松原に於て戦死す、其子兼信、永享八年六
月、城備中守共に託摩郡の凶徒を追散す、又康正
元年六月、益城郡に大いに戰ひ、一族七十人戦死す、
肥後守武邦、咸狀及び山本郡岩野庄百五十町を給ふ、
岩野嶽道の城に移り住す、本山在城より四代、凡
九十九年、菊池十二代肥後守武時三男、武重の弟別
當太郎武元を本山の城に居らしめ、其子守武、
武安と相殺し、凡七十八年在城さいふ、武安一子武
包は、菊池二十四代肥後守武經、阿蘇より來つて家
を継ぎしが、終に追出され故、士相談して武包を
以て菊池を艦がしめ、肥後守と號す、 託摩左馬亮實
照、永祿四年、豊後方を背き、赤星が下知に従はず、
隣郷を妨くる聞えあるゆゑ、赤星道雲人数を催し、
本山の城を攻従へ歸陣すと云
城築の初、未だ之を不」考、光永氏代々在城さも云、
阿蘇四箇の神領の内にて、三百五十町と云、健軍宮

は、欽明天皇の御宇、阿蘇大明神降臨の地也、 光永

健軍陣内古城

小山村にあり、山城也、城主姓名不分明、一説城跡

にはあらず、天正九年、薩軍此所に屯して、合志郡

今石の城を攻めし時の陣営の跡地云、不」知是非、

堀郭等の跡分明也、

長嶺村にあり、山城也、里俗筑後の嶺さ云、又往昔

筑後守城主なり共いへども、家名年代不分明、

小山古城

長嶺古城

陣跡志に、近衛帝仁平三年、石浦河内守經國、姓

は藤原、父は信長と云、河内の両を領す、久安六年、

經國當國に下向し、國を領すこ云、仁安三年、經

國子經成、新に茶臼山に城を築き、高江城より移る、

高江の城は、經國が築城也、高家は今の高江也と云

々然れば此高江村なるべし、城跡の有る所を不知

茶臼山の城跡も不分明、經が末孫は、飽田郡横手

手永池端村、金光山大榮寺也云々

二三六

二三五

本山古城

託摩郡

三輪紹宅殿

本鄉甲斐守殿

加悅飛驒守殿

九月二十四日

御朱印

川尻城代と成る、忠の時に城を潰さる、 加悅飛彈

守、本鄉甲斐守、三輪紹宅を、伯耆家の三老云、是

よりさき、秀吉公征西の時、書を送るもの左の通、

肥後面一揆分蜂起」に付、其方事、筑後立花所に

逗留之由被聞召候、心遣之段尤候、併肥後へ可

罷歸忠義於」仕者、可」然樣可」被仰付候、又者

悪に同心可仕共、覺悟次第に候也、

山本二

郎、建保元年八月、朝廷より肥後國内託摩、

肱の臣なりしが、宇土沒落の後は、加藤清正に仕へ、

長年の庶流、村上一家の重臣たり、始めは伯耆家股のと云々、武家衰盛記に、大友能直二男太夫五

郡を給はり、別當職に補任し、安貞二年從五位下肥

後守叙任せらる、弘治三年卒去六十六歳、是れ託摩

氏の祖也と有り、守直、宗疽等が先祖なるべし、

に託摩家をば、菊池氏より繼ぎし事もあり、菊池元

昶則隆より十二代、肥後守武時入道が三男、託摩別

當太郎武元、同守武、同安春、同武安、此四代當城

に在城せりさいへり、又菊池九郎武俊の三男、託摩

次郎武平さ號す亦加來氏覺書に、大友能正二男、

大夫五郎能秀、肥後に来り、本山の城を築きて居」之、

託摩別當と號す、爾来二十三代相續とあり、又大平

記に、足利右兵衛佐直冬、貞和五年、中國より下向

す、川尻幸俊悦びて直冬を大將さして、託摩守直兄

弟をかたらい、國中の勢を集め、將軍方宇都宮と戰

うて勝を得、夫より宮方鹿子木貞基を攻めて、竹迫

年中には、託摩別當太郎宗直在城す、延文の頃、託 の城を陥す、宗直兄に順うて直多に随はず、託摩は

摩三郎員政と申者あり、123按に託摩守直員政等 大友豊前守能直が二男、託摩別當能秀が末葉なり、

出目不分明、大友系圖に、大友始、豊前前司能直終を考へず、宗右馬頭平盛貞、筑州味坂に於て戦死、

二男託摩別當能秀、是れ井上、平井、 坂井、 迫扇等 其子盛義に、菊池肥後守武政、 託摩郡の内二百町を

坂井、迫扇等|其子盛義

本山村にあり、託摩別當太郎守直が城跡と云、元弘

家、逐日衰弊すと見えたり、元弘年中、河尻肥後守 を奪取り領知を合せ、嫡子持朝に譲りて、後には父

幸俊、系圏に見えず、分流なるに、又庭の胸抗肥後將軍 子不和になり、朝は芦北郡佐敷に住す、然るに實

尊氏公に晒して、肥後守に成る、此時菊池肥後守武 照が姉は、持朝の母なる故、持朝密に舊領を實照に

光と接戦す、當國に雨肥後守有り、代々菊池さ不和 奥へしさ也、天文十七年九月、大友義鎮、大いに武

也、幸俊菊池に毎度戰ひ負け、逋れ大將もかなこ思 を張り、當國に働き、國士各自ら不」に降る事、水

ふ折節、足利右兵衛佐直冬、備後鞆のより高師直に の下れるにつき、火の原を炊くが如し、其中に獨川

追ひ落され、貞和五年九月十三日、川尻幸俊が船に 尻肥後守は、武名ある者の、聞怖せんを無下也さて、

乗り、當國に落ちられしかば、願ふ幸さ悦び、直冬 義鎮に攻められ、三日合戰に及び、遂に切腹し、一

を大將さし、託麿別當太郎守直、同次郎宗直を語ら 國平均せしかば、義鎮叔父義武を國守とす、永祿年

ひ、國中の勢を駈催す、無程雲霞の如くなりしかば、 中に、城越前守親賢、武威熾んにして、宇土の伯耆

將軍方宇都宮三河守と戰ひ、首百餘級を得たり、夫 顯孝と心を合せ、川尻肥後守重兼入道堯信が居城に

より宮の方鹿子木大炊助貞基が合志郡竹迫の城を攻 押寄、數日攻むれごも不落、然るに處に赤星道雲、

なごす、然るに太宰少貳頼向、直冬を婿さし迎へ 伯耆顯孝と和睦し、城親賢を可」撃と議す、親賢驚き

故、手に属する者多く、肥後に押寄せ、菊池武光さ 川尻肥後守と和睦して、敵を待つ、伯耆、赤星は二

戰うて、直多、賴討ち負け、筑前に引いて入る、幸 千餘人を卒ゐて、隈本へ押寄する、城内よりも防

俊は剃髪の染衣の姿となりて、菊池方に降参して、 ぎ、出田左右衛門親基、一千餘人にて大手に出て

漸く一命を助かりぬ、川尻左馬佐實照は、菊池肥後 既に矢軍始まり、寄手一面に進まんとすれごも、隍

守兼朝と不和と成り、度々戰に及び、永二十七 壘能(搆へたれば、心に不任處に、豫て約せん川尻

年八月廿四日、實照が家士佐河田玄蕃吉久、朝に肥後守、六百人を卒ゐて、親賢を援けしかば、終

反忠して、人数を引入れ、實照を追出す、朝川尻に勝利を得たりと云、 加悦飛騨守は、村上源氏那和

守

師俊

地頭職、竹迫城を築きて住む

貞房

¦-師員

大學 安藝

大膳太夫、乗攝津守、合志郡

郡の内、久重長田等を領す、

〇源親能

齊院次官、奉仕頼朝卿、筑後國三池郡、肥後國玉名

鹿子木略系

五月五日、印地打あり、打たさる年は必づ城跡の岸崩れて、田畑を損すと云ふ、里俗に云、十五歳以下の童男、紙昇をさし、五月五日未明に城迹に到り、さざ矢の旗ほうでかぬぞ、えいえいわうと云ふ、さざ矢族は、甲斐宗運が圓居なり、何の所以ありて斯く唱ふるや、審かならず、

今福が于今福五左衛門は、上代浴去以後飄害して、府の藤崎宮の社司某は聟なる故、彼所に寄宿し、後年平野彌治右衛門が家に客とし仕える、子孫微く断えたり、鹿子木親俊の子孫、山鹿郡名塚村の農家に今にあり、

小代、小森等會談し、義兵の旗を揚げんとすれごも、人質を赤星に入れ置く放難」決、田島、鹿子木、犬房を供えて肥前高木へ赴き、其後薩州へ至り、島津家を頼みて蟄居すと云ふ、古城主考には、上代の

城寂心が家臣今福民部在城也と記せるは、誤り也さ

云へり、寂心當城を築き、老臣今福民部を城代さ

天文八年、隈本の城を一族城越前守に譲り、寂心親

俊父子共に當城に移るこ云、其後天正十年五月五日

落去云々

以鹿子木爲家號一鹿子110111

外城町にあり、冷の御茶河尻三郎源實明の築く所、飛

是れ河尻城主の始也と云ふ、河尻氏は、西の宮左

大臣源高明公の末孫三郎實明、當國川尻郷を賜はり、

川尻の城に居住せしより、世々以て家號さす、子孫

相きて城主となる、實明建久八年鶴岡八幡、伊勢、

春日、住吉、阿蘇を川尻に並び祭つて、若宮五大

明神と崇む、河尻左馬亮實照の時、連年菊池彙朝こ

爭ひ戦ふ、應永二十七年八月、敗績して川尻を退去

し、其後舊領に復する事もありといへごち、爾來彼

河尻古城

云、

-親俊

民部大輔 隈本城より父子共に高橋上代城に移る

歌人也、

親員

三河守入道、號月舟寂心、隈本の城を築きて住居す、

貞 貞員 武員 朝員員重員 重能

貞經田郡領

木の、

鹿子木兵衛太夫、飽田郡鹿子木に居住、

-貞敬

兵衛督

三池を領して爲三家」

師時

三池太郎、上野守、合志郡竹迫に居る、後に筑後園

町の辰巳にあり、城地東西四十間、南北五十間、 赤星親家入道が逆意に依て、大友義鎮が爲めに害せ

高さ三十二間、曲輪四百八十六間、城より丑寅の方、 らる、大友より赤星を菊池の家跡こす、義武の男犬

松椎雑木山有り、山の曲輪三百三十間、東西五十六

舊臣田島

房丸計囚成り、赤星が許にありしを、

間、南北五十二間、高三十間、城山の間三十五 右京入道宗意潜に出だし、鹿子木親俊、 隈部、青野、

上代古城

異父の兄と云

楢崎村の上にあり、城主姓名不分明、里俗虎御前の

城と云ふ、堀切の跡穴あり、此の山に御坊趾あり、

坊は曽我祐成時

楢崎古城

松尾、千

金甲村にあり、東西は谷、南は高橋川、北は山の尾

を堀切り、要害の地也、俗説に鹿子木寂心、上代在

後號

城の日、此所に城を築きて、二男三郎 親行を居

らむ、親行系

一説に鹿子木民部少輔に兄あり、

曾て良馬を持てり、兄再三所望すれごも、千金の甲

にも不˩換さて、終に云ふ處を果さず、佐˩之大に怒

り、弟民部を殺し、上代城も沒落すこ云に依てみれ

ば、親行は兄にて、當城に在城せにや、未知三是

否

土俗は判官殿

不見

間、城跡の東西、足入泥土田あり、當城は鹿子木三河

城主高城判官秀豊さ云ふ、時代不分明、下下松尾古城

1111111

親俊在城さ云

山親員入道寂心の子民部少輔菊池暉記

ふ、鹿子木は齋院次官親能より出づ、頼朝卿の時、

筑後三池郡、當岡玉名郡の内を領す、親能四男大膳

大夫彙攝津守師員、合志郡地頭職を賜はり、同郡竹

迫の城を築きて居す、其子大學師俊、黒子安藝守貞

房、其嫡子三池太郎上野守師時、後に筑後三池を傾

して、三池を以て家號す、其弟鹿子木兵衛大夫貞

其子兵衛

、飽田郡鹿子木に住し、以て家號さす、

督貞經、八代の孫九郎重能、其子三河守親員也、剃

髮して月舟寂心さ號す、文武の譽れ有り、菊池家

屬、飽田郡、託、玉名の内、都五百六十町を

一領し、隈本城を改め築

今の古

滅なり

菊池家衰弊の後、

大友の旗下に属し、其後山林に逸遊ずさ云ひ傳ふ、

其間に當城を築けるにや、共千民部大輔親俊、 隈本

に在城し、後に當城に移る、菊池左兵衛督義武、老臣

高橋二三一

の頃は、大友菊池共に衰へ、國中の群雄、大友の旗 にありと云ふ、

に送りたる書簡に見えたり、其後天正七八年、山野田畑を配分す、是より弊して、子孫民間

上松尾の古城

始を不」知、鹿子木寂心が孫次郎鑑員在城、天文十九

柿原古城

井芹村の内中尾丸村の畔也、城主井芹六郎經盆也、

不分明、城跡今光照寺と云ふ、眞宗住す、

中屋丸古城

亀井村にあり、城主龜井若狭守光と云ふ、年代等の地、圓徳寺跡の近邊にあり、寺跡は地藏堂殘れり、

龜井古城

地名あり、城下鳴岩の側石佛あり、鹿子木鑑員を殺害

菊池家八十四人の士の内也、

其跡城上立田金子淵の上にあり、菊池家の餘裔立田伊賀守

恥かき原を迯げてこそゆけ

コガ子

イナン

ものふたはらぁつかひ似合ねば

立田古城

今宮と號するあり、城主時代未」考、

踊る、其時の落書に、

津浦に小き要害の跡あり、天神 天福寺住持の木忍を攻むべき由風聞
しければ、同六月、紹忍豊後へ

津浦古城

けども、敢て臆せず、 却て城伯十四人相議して、紹

の立山の内にあり

今や城跡は大木氏

下を背き、島津龍造寺が旗下に属す、故に大友家臣

池田古城

城主未」考田原紹忍を、天正九年三月當城に遣はし、國士を招

重雄、其子立田小太郎重德在城す、秀吉公征

西の日、城を出て逐てんす、子孫高橋町にあり云

ふ、寶積寺と云ふ菩提所、古墳今に存す、兼治は

越前守親賢、隈本城にありて一族をして當城

當城大手の

を守らしむ、同年十二月、親賢病死す、

門の跡に椋大木二本有り、近年大風に碎く故、其跡

に天神祠を建つ、城下に長町、城の下、平小路等の

年八月、鑑員圓德寺に於いて横死す、鑑員性質懶惰

なる故に、首を刎ねらるさぞ、宗運が竹宮の甲斐親

池村高良宮の梁牌にも見ゆ、吟の石取

代軽瀨六

城主志垣土佐守貞友、弘治四年病死す、男子七人有

城ヶ平古城

栗山有り、

跡、今に小高所

の城

楠原村にあり、鹿子木代々の居城也、齋院次官視能

四代兵衛太夫貞敬、飽田郡を半領し、館を鹿子木に

搆ふ、是れ鹿子木の也、後に楠原に城を築きて居

住す、貞敬より十代の孫三河守親員、 入道して月舟

心と號す、文武の名有り、菊池又大友に屬す、 五

百六十町を領す、明應五年、隈本の城に移住す、

鹿子木古城

舌嚙切て死、十五歳、

光正

松平豐後守、寛永九年六月、配流飛騨、於途中

寛永九年六月、配流出羽莊内、領一萬石、承

二年卒、五十七歳、

忠廣

虎藤、肥後守、従四位侍從、

忠正 早世

女 阿部修理太夫室

女 紀伊大納言頼直嫺室

虎之助、計頭、肥後守、従四位下、侍従、永禄五年

清正

於尾州愛智郡中村誕生、慶長十六年六月廿四日卒

千肥後熊本、五十歳、身長六尺二寸

音堂あり

分明ならず、城跡は観

五町井上村にあり、鹿子木氏の在城也さいへごも、

井上古城

なる、

萬樂寺村にあり、城主田尻生計頭と云ふ、田尻家傳

に、漢の高昶裔孫、筑前國に来朝し、数世を経て頼

朝卿の時、文治年中、當國鹿子木を賜り、五町村の

内に在城し、其後此の所に城を築きて數代在城す、

主計頭が時に當つて、四海甚だ穏ならず、故に城を

毀ちて其跡に台宗荒平山萬樂寺を建立す、今椿山さ

妙見城さ云ふ、隆福寺村にあり、鹿子木氏出城と云

ふ、城中より水を汲みし道、今にありと云ふ、

荒平古城

隆福寺古城

五町赤水村にあり、城主鹿子木寂心の長臣岩崎惠林

在城す、 大城小城さて一所に有り、惠林が古墳、古

城跡の近邊に今にあり、

御馬下村にあり、城主西牟田常陸守と云ふ、 西牟田

氏は、阿蘇家四天王といへる内の西氏と云ふ、

赤水古城

二三〇

部

爲冬

兼敏

爲昌 同式

同

-實照 本鄉四郎左衛門

前守

太郎

隆賴

隆經

武岑

隆顯

同伊豆守

城六

越

同同六郎

-隆時

嘉惠九郎

政朝 同四郎

隆政

西鄉三郎

菊池隆泰

之系

式部少輔

〇能隆

治郎

右京太夫

彌菊池八代

城氏之略系

六、十二月九日、御入城、御子孫無究、萬民豐樂、

寛永九年十月四日、常國を一職に 細川忠利公に賜

莊内本乗寺に葬る、

淨德院西條日源大居士、謫所の詩15、

人間萬事定不定、身似明星西又東、

三十一年如一夢、覺來莊内破簾中、

法號

屬齋藤山城守討死

二二九

衛門兵衛

清方

清忠

同因幡守於尾大山

虎若彈正右

三男

大力

住尾州中村

時

正吉

-正同三郎

三男

男

一四一三虎

時

義虎時

同三郎 同宮内少輔

三男

四郎

ٽ

三

家久

頼

同伊勢 ㄨㄤ 同源太

加藤三郎

長二男

藤武者

〇大職冠鎌足公――此間三十五代――正家

美濃 加

加藤氏略系

出田祖

政图

右に云出田秀信とは別系也

出田刑部

重照 城下野守

越前守

守

冬基 十郎太郎

親親賢

冬

十郎太郎

同越前

同九月四日、二重峠より人數を隈本へ不入、直に小

西が宇土の城を責む、廿三日に宇土の城陥る、小西

行長が留守居小西主殿亮のを隈本二の丸並川

志摩守が宅にて誅す、同年十一月、従 大神君、肥

後一國を賜る、蓋豐後、宇土、 柳川表出張の褒美な

有吉四郎右衛門殿

渡殿

八日

加主將正

九月従如水幸便付而御狀本望候、濃州表之儀心よき

仕合、併少殘多存候、其邊御手間不」入、爰かしこ

隙を被明、御美布候、此方は手間入候さ存候事

に候、是へ押寄候日雨ふり、其上程近き道は、人

數つかひ不罷成付而八代の方へ押廻し候へば、

数草臥、日も暮にか~り候故、城中杯

~り候故、城中杯かためさせ

口惜候、併落去有」程間敷候條、可」被御心安

候、少日數延候共、悉く可果覺悟候、是分に

候は、中國表へ各申談候事は成間敷かご存じ、

敷事不及是非候、 上方之様子如水へ申遣候、

折節指急候に付、以三書状不申汰沙一本意之外に

獪吉左右互に可申承候、恐々謹言、

淨池院殿永運日乘大居士、同年七月 明 清正二男

虎藤、十歳にて大樹を拝し、同廿八日に家督を賜り、

寛永三年八月十九日、任肥後守叙従四位下侍從î

賜三一字號忠廣、同九月下旬、熊本入城、寛永九年

六月三日、忠廣有」故、出羽荘内に配流、一萬石を賜

ひ、 其子豊後守は、 大樹賜三一字稱三光正父と同日

飛騨高山に配流せらる、忠は承應二年二月卒す、

云狂歌あり、同十六年六月廿四日、加藤肥後守從

四位下藤原清正朝臣熊城にて卒す、行年五十歳、他

田郡活龜、中尾山に葬る、法號

くまもこに石引きまはす茶臼山てきにかこうの

城の主かな

り、清正曾て城を築くべき地を國中に選み、隈府、

城村、大野、横島等也、地形尤宜しといへども、

一國の府に可」成の地にあらず、隈本は四神相應に

要害も備り、繁榮の地なりさて、茶臼山を本

して、

城として城を築き、隈の字に畏るを禁忌して、

熊の字に改め、慶長初年鍬始、七年に土木成功、一

説に一國を領して後、慶長六年八月中旬鍬始、櫻井

素丹が

右とも相積候、下々迄其段可」被仰聞、若大友

以飛脚申入候、今朝大坂を廿三日に出船の者參

り、内府公、廿五日に清洲へ御着の由に候、

」記」之、清正勳績

考、清正記等、世の知る所、故略」之、慶長五年、石

田小西が徒、濃州關ヶ原に有事の日、大神君の御味

方となり、台命を請ひ、九州を押へて、先亡

大友義統領に一揆を起し、細川公の領知豊州木付

の城を侵さんさして、立石原に攻戰の時、細川公

の長臣松井佐渡守康之、有吉四郎右衛門立行に力を

合せ、書簡數回す、事繁きゆゑこさぐく不載」之、

左に一二を證さす、終に阿蘇小國を通ひ豊州引地村

に至り、立石落去の告を聞きて、軍を斑して宇土の

城を攻む、氷は宇土古城 前略

カタナ

を陥し王子を追うて會寧府に捕へ、直兀良哈に武名

こぶめ、カセンホ川にセルトゥス將軍を斬り、蔚

ホイレク

國を領し、天正十九年冬、 小西行長を援けて天草に

戰び、敵將木山彈正を手自ら鍵付け、凱歌を唱へ、

文祿慶長の間、朝鮮征伐の前鋒して航海し、王城

山に籠城して、大明皇の勅使を奉し、大明漢南朝鮮

百萬の衆を破り、一生の勳績不」遑二二七

御返報

有四郎右殿

松 佐渡殿

昨十六日立石よりの御狀、今未の刻す郡の内ひ

きち村と申所に而令拝見候、十四日に拝見申御

注進狀に而、翌日罷立、是迄人數過半召連候得共、

はや其元相濟候由承、滿足候、尤其元へ参り、

如水へも可懸三御目候へごも、我等も手前の事に

候間、自是分歸國候、納以」使具可」申候、今

御手柄とも、我等一入と大慶存候、互手前隙を明

け、中國邊に而可」懸御目候、委細いつの守可

申候、恐々謹言、

九月十七日

加主清正

松井佐渡守殿

有吉四郎右衛門殿

御宿所

主清正判

八月廿九日

行は、爲後巻熊本を捨て

~成共、拙者可罷出候間、可」有三御心得」候、猶

いつ守可」申候、恐々謹言

加方百姓助力催於

弼長政を差

丘の如く、流る~血白砂を潰す、一揆の大將宗立は、

眞先に迯失せて、盆城の六箇に隠れ住む、菊池武國

は、流石家名や恥ちたりけん、引組て討死す、一揆

の張本甲斐武臓は、早川、渡邊に搦捕れ、總て一揆

討る~者四千八百九十餘人也、殘る黨繒六筒、健軍、

稗田邊に潜れ居るを、さがし出して悉く誅伐して、

隈本は靜なり、同十月廿八日、成政八千餘兵を督し、

玉名郡和仁村田中の城に押寄る、城は和仁勘解由

親實、同彈正親範、同人鬼親宗、同姊聟邊春能登守

親行也、攻城利なく、成政計を以て城を

郡古城條直に山鹿城村の城に押寄せ、年を越えて攻む

れども、城兵強く防いて不陥、天正十六年四月三日、

秀吉公の召に依りて、成政隈本を發し、同四月十四

日に、攝州尼ヶ崎に着船す、折節秀吉公此地にまし

まし、成政が苛政に依りて、國士一揆し中を亂し、

制書の旨を犯す段、以ての外の罪科、死刑難」被」

趣を、一つ書を以て加藤主計頭清正厳命を傳へ、五

月十四日、成政に切腹せしむ、時に五十三歳、尼ヶ

崎法園寺に葬る、法名成政寺庭月洞閑大居士、成政

伏誅の跡、隈本城番さして、淺野彈正少後國の

内二十五萬石を、加藤主計頭藤原清正賜ひ、同

六月三日、大坂出船、廿三日に豊州鶴崎に着船、同

廿七日に到り、肥後隈本に入城し、絶えたるをぎ

廢れたるを興し、荊棘を拂らひ豺狼を獲り、先亡成

政が家士を育む、隈府の城にて成政に反忠したる多

久大和、訴状を捧げ抽賞を請ふ、清正彼れが無道を

小森田何某一族一揆して、玉名郡小

惡んで族刑す、

森城に籠りしを、家士加藤清兵衛に命じて討しめ、

又成政に反忠君に忠義を致し~早川越前、猿渡

玉名

丹波、高森新助、上田周防、渡邊軍兵衛、下城九郎、

北里三河守、村上丹波、男成七郎及加悦飛騨守、富

田主膳、甲斐源左衛門、同彌左衛門、同半七等を共

忠節を感賞し、祿を與へて家人とす、領内諸所の城

代は、飽田郡川尻城加悦飛彈守、 玉名郡髙嶽の城加

藤清兵衛直政、芦北郡佐敷の城加藤興左衛門、同郡

津奈木の城小代下總親泰、平野五郎左衛門、竹内吉

兵衛、森本儀太夫一友、阿蘇内牧城加藤右馬允正方

等也、清正は尾州中村の産、父を右衛門兵衛廣忠さ

云、清正幼名虎之助、始めて秀吉公に仕へ、肥後车

、

秀吉公肥下さる、同年閏五月廿七日二二六

二二五

島、田上の三名字の者共、使を以て此方へ渡り給へ 成は一揆一味の反逆人にはあらざれども、其色を見

一所に働き打破て、城内へ入れ可」申さ云送りけれ せ候へば、即時に討つべき禍故、外に當城に向ひ候、

共、成政は一揆等が方便と疑ひ、敢てこれを不用 然れども阿蘇神主の後室、雨若子ともに城中に候へ

佐々平左衛門、松原五郎兵衛直光も、成政共に粉 ば、我々反忠を致し、裏切して一揆の大将を討せ可

骨して働けば、田代、田上、蛇塚、高橋以下百餘人を 申、あは神主を御立て賜はるべし、さも有らは、

討取、半丁斗り追退て、城内より是を見て、神保安 明朝城の西につて中黒の旗を樹可」申、其れを相

藝守城兵を卒るて切て出、内外より挟んで、群る敵 岡に御向可」有さて、一味連判の誓紙を捧ぐ、兵庫急

を切崩し、都合千九百人討取れども、渦たる一揆、 ぎ成政に告げれば、成政大に悦び、猿渡に對面し、

少しも疼ます、三方より鬨を發し矢炮を下し、成 大宮司職の事は心安かれ、御朱印の外に、耐領若干

政が勢を引韜み、短兵急に拉んこす、成政も亦選兵 を寄附し、且各へも知行過分に可三宛行堅く約す、

を左右に列ね、幾重さもなく取巻たる敵の中へ切

成政城外

漏箭不」駐、夜も無」程黎明に向はんこす、

入り、切先より火炎を出し、縦横に揉立つれば、 を臨み見れば、寄手の衆軍洪波の如く、旗旌刷飜

に除る多勢なれば、息問き機勞れて、近付敵を漸々 して霞を拂ふ、合岡の時刻は今なりて、白旗を揮

に追避け、萬死を出て城中には入りたれごも、味方 うて三軍を前ませ、西の方中黒の旅を見當さして眞

も多く討れ、贏輸未」決、伊津野次佑門い城の 先にするめば、佐々平左衛門、松原、神保、建部を

殊更援兵後詰め憑もなく、進退既に窮谷す、然る處 始め宗徒の従士、瞳さ喚いて切って出づる、反忠の

に、即夜亥の剋斗りに、門を控く者あり、成政が右 者ごも之を見て、驚破や今ぞこ、後より切立つれば、

筆建部兵庫立出で誰ぞ問ふ、答へて云、某は阿蘇 一揆の奴原周章騒ぎ、稲裏に謀反人あり、反せ戻せ

家の奮臣早川越前守秀家が弟猿渡丹波と云者也、 今さ喚叫び、こころに成りて紛れ崩れ、我一に敗れ

般高森、早川、渡邊、田上、下城、北里、村山、男逊るを、前後より採立切捨たる尸骸は、累々さして

林原雄介以下三萬五千人、一揆して蜂の

成政は源姓にして、尾州春日井の産、比羅の城に在 如くに起り、城を巻詰る由告しかば、成政はまづ附

居し、織田信長公に仕へ、號内臓助、被」封越國戸 城を三個所に築き、敵を押への人數を籠置き、山鹿

山の城主たり、信長公薨去の後は、屬同信雄卿1秀 道は敵の可」遮なればとて、分田表より合志道、板井

吉公戰ひ、離倫の勇士也、秀吉公天下掌握の後、 須屋原通に隈本に至り、坪井谷より寺原を下り、千

彼が勇武を知つて、肥後の藩とす、然れども制書の 葉城邊より川を渡らんとすれば、田代、田上以下の

旨に違ひ、國家守護の任に不耐、惜哉、我意の舉動有 一揆、川を前にあて~さへぎりこぶめんとす、成政

りて、人心離れ乖き、國士不二一和1途に隈部但馬守 屑ともせず、坪井川をはせ渡り、城の上なる茶臼山に

源親永隈府に籠城す、於是成政家士佐々興左衛門宗 打上り、群りたる一揆の中へ切て入る、此時田尻、牛

佐々陸奥守殿

天正十五年六月六日 御朱印

陥す、

上方普請三年右條々無相違可」被相守此旨」也、仍如」件

一一揆不起樣可」有三免許 事

一百姓等不」痛樣肝要事

一三年撿地有間敷事

事

遠慮事

事は隈府古城の

一肥後國五十二人の國人に、如三先規知行可 相渡」を卒して、同廿六日、隈府に押寄せ、計を以て城を

して攻難く、成政六千餘兵

御制書

を差添へて、天正十五五ヶ條の制書を賜ふ、左の如し、

6 前野又五郎忠勝、三田村衛左衛門宗雄等、三

一二四

百奥守成政に肥後一國を賜ひ、隈本の城に居らしめ、

能

年七月十日、隈府の城

を攻むれ共、守城堅固に條下にはし 同八月六日、直に前んで親永が

嫡子式部太輔親安が楯籠る山鹿郡城村に發向し、城

を取巻き攻掛る、然處に、同三十日隈本留守居より

飛札を以て、甲斐親秀入道宗立、池香右衛門を大將

さして、甲斐武藏守、赤星彌右衛門、同備中、城九左
衛門、小山左京、託摩兵庫、 伯耆五郎兵衛、甲斐能
登、同志摩、鹿子木太郎左衛門、佐野太郎兵衛、五
條新九郎、ず、逆寄して勝負を決す
べしさ、同四月十一日、出田一要に三千餘人を差添
て先鋒さし、其身は二千人を引率し、託摩原に控へ
たり、合志 伊勢守も城方にて、其日宗運が後より
可蒐さて、人數を率して竹迫の城を出でしが、聊子
細有りて本城に引返す、宗運も出て戰ふに不如
て、手勢輿力を合せて、託摩原に討出て、一日の内
五度鎗合ありしが、城が多勢は勢ひを得、宗運負色
也が、宗運子共一人に二百の勢を進退させ、子共
三人を三備に立、其身は千五百人を七手に分け、自
太鼓を拍って引廻す、終日多勢に操立てられぬれ
ども、芝居を蹈み黄昏に至れば、雌雄は重ねてすべ
して、城は隈本に歸陣す、天正九年十二月十九日、
タングワ

下に属す、大友甚だ怒り、朽網兵庫頭以下三千餘騎

を遣し、隈本の城を攻しむ、 親賢防戰堅固にして、

或は戰ひ或は夜討し、寄手多く訪れ引退くを、兵を

出して追崩し、又首數百を得て、武威彌熾也、同八

クダミ

年三月十七日、旦過の瀬に宗と戰ふ、其

身は城に居、一族出田右衛門佐親基入道一要に、八

事は甲斐氏御

百餘人を添て戦しむ、

親賢、今度宗運が

船條下に委

爲に、味方多く討せ安から•

111111

親賢病死す、飽田郡石神山の東南の隅に葬る、霊
峯道威大居士、一生の績不盡其子十郎太郎親
政幼弱の間、島津義久、命じて十郎太郎が叔父出田
親基入道一要をして後見たらしめ、義久一字を興て、
十郎太郎久基と號す、近年菊池家断絶の後、大友、
島津、龍造寺九州に鼎足のごさくなりしが、大友、龍
造寺弊し、島津大に威を奮ひ、九州を侵掠め、當
國の城伯も、威を爭ひ權を専にし、四民一日も不安、
豊臣秀吉公、遙に鎮西の逆浪を聞召して、これを鎮
めんがため、天正十五年四月三日、鏡兵二十五萬餘
騎の大兵をして御下向有る、其威奮然として、攻
る所敵なく、九國の侯伯、當國の群雄、自ら旗を巻
久も報門に降り、本領を安堵す、六
き戈を伏す、
月朔日、隈本に着城、二日逗留有りて、國士を綏撫

政令を改め、城伯本領を安堵する者五十餘人、其

内久基八百町、相良頼房同五百町、伯耆顯孝同五百

隈部親永同八百町、和仁親實同百五十町、大津

町、

山家稜同三百十二町、 邊春親行同百二十町、白間野

宗鄉同百七十町、 志岐、林、泉、 伊豆、 大矢野、 小

代、内古閑、高森、幷阿蘇にも本領を賜ひ、佐々陸

熊本、往昔は隈本と書けり、當所城築の始を不知

諸家の傳記、雑記、古老話、夫の俚諺、見聞に随

てこれを輯して、識者の訓を待つ、甚惶差誤有ん

事を、諸城雅之、菊池家出田の譜に云、鎌足公十二

代關白内大臣藤原道隆公、四代大夫將監則隆、後三

條院の御宇、延久四年、初めて當國に下向し菊池を

領す、是れ菊池の始祖とす、則隆より四代肥後守經

宗、弟藤田三郎經家二男、太郎藏人經信、菊池出田

を領して、 出田讃岐守と稱す、經信より十三代出田

筑後守秀信、隈本の城に住す、年序未考之、此時の

城は、今云千葉城也、其後大永享禄の頃は、齋院大

官親能十四代鹿子木三河守親員入道寂心、飽田、託

摩、山本、玉名の内にて、五百六十町を知行し、始は

菊池の旗下に属し、當郡鹿子木、楠原に在城し、後

隈本並千葉城舊跡

飽田郡

田 氏 敦 校正

古城考巻之上

に引籠り、大友の下知に不順、親冬は薩州義久の旗

赤星、 隈部等、己が城々

城越前守、託摩、

城越前守親冬、 天文八年、菊池郡出田の城より當所

に移る、城氏は菊池家八代右京大夫能隆の四男、城

六郎經隆を始祖とす、經隆より八代越前守親冬也、

永禄十二年四月下旬、豊後大友の三越前守親冬を

介して、肥前龍造寺に遣して和をふ、隆信容」之、

其後大友龍造寺及及矛楯、保原に於て、豊後勢戰負

け、佐賀方成松大膳、柄長左馬允と云者、城越前守

引組、親冬を生捕しを、鍋島直茂が意見に依て、

親冬を隈本に帰らしむ、其子十郎太郎親賢、後改二越

前守、城氏も飽田、託摩二郡を領す、天正六年十一月

十一日、日州耳川合戦の後、宇土伯耆左兵衛尉行直

城十郎太郎

知ら

く、城氏に城をされ、天草に近

記には、寂心大友に氣せられ、領地を離れしかば

せて、世をひたりと云々

かなるを

をる

共、九州

武の

共に在城せり、城東に馬場有りで天文八年、一族城

越前守に當城を譲り、心父子は當郡高橋上代の城

に移る、或説に寂心子無き故、城氏に譲ると云、又説に三人の子

古城也、寂心は文武の將也、其子民部少輔親俊、

には豊後大友の旗下に属して、 隈本に在城す、今云

111111

凡七十六ヶ所

傍島馬入中

川

11111

山

崎

萱

野

赤

蜂

尾

花

山

松

原

野曲木鮑田

藤

益古城考卷之上

錄

上

託

郡並

土愛山味 早道 城 宇土本摩河柿荒熊田

平本

飽

郡

郡

目

宇郡 原寺内木皮山 尻原大阿岩有平南飯 高

早

中井千

尾葉

塚高尾水瀬川田 崎 江

丸上城

豊榎勝御御

大長

上池鹿

福津山坪船内川嶽 嶺

松 子

尾田木

竹隈飯'猿北安赤 田 小

田

崎 庄 蓋丫渡 代平井 平山

下津城

松ク

尾浦平

小陳市鬼小津 木

ク志

野内原城園田山

健軍陳内

楢立赤

崎田水

北豐寺猿南乙津

部 上龜隆

11110

田田尾城ク田女

福 寺

寺

代山森

代井二九

〇船方

○作事普請方

本書に見えず、

掃除方

獨立

○刑法方

合併

単國師旅の事を掌る、東

○寺社方

は合併

塲師

客

屋敷・

○町方

〇勘定

合併

同右

〇郡方

○手當方

○學校

合併

獨立 古参奉行擔當

〇類族方

〇城内方

○選舉方

以下分職さいふ

受附の所にて、各受理の書類を選分けて、夫々擔當の局に廻付す

●當用方

容易に人の出入するを得ず

〇機密間

◇奉行所

右は本書記載せるとこうなり、然れども時によりて、變更なきにしもあらず、また各分職、事務の繁

に擦り、獨立せるものと、合併せるものとありき、廢藩置縣の際、政府の役人なりし簔田蕃穀翁の

談に擦りて、左に附記す、編者云、

以上十六局ヲ分司ト云フ

-櫨方

小物成銀成方

倉

小物井樋方塘方

水理方

山

寺社局

-○-一杣方

○郡 局

郡代局

○類族局

牧演武場なども之に屬す、此

|-〇屋敷局

- 刑法局

○學校方

方

◎船

一〇城内局

◎普請作事掃除道方

C客屋局

◎町局

-〇勘定局

1〇選舉局

!〇機密局——〇考續方屬之

I〇當用局

奉行所

寄合所

-勘定所

小間物所

-算用所

諸道具方

客屋

賄物所

天守方

船方

軍船井樓方

學校

謝

穿鑿所

-普請作事所

-掃除方道方

銀倉

-炭薪會所

米稟

總敢局

-教授局

二元

二一七

校重古 城 貞

吉は禁止

なり然といへ共此禁行れがたし今は弊たり嚴にせず

校

井田幸男

同

ヒロ

男男

武藤 嚴

〇他國之賣藥

三月

官職制度考終

已上

一何方にても町中御通りの時は下々共床より下りつ

くはい居候様可被申候事

間敷候事

米取は十石高に六石手取

一御行列之中に而たばこを給申一江戸京大坂詰に可被申付候事

石減

一御供行列道を半分明け左に片付往還つかへざる様 在宅之面々高百二十石已上は二石城百石已下は一

一新参者被召抱候ば心を付かぶきもの抱被申間敷候 一百三十石百二十石各別割増有百石は三十二石手取

一八十五石已下三十石高迄各別割増有

公義被仰出候通前々より御觸之旨今以堅被相守下 一役付無役無差別百石高に二十石手取

々にも急度可被申付候事

一三三百石已下二百石迄右同廿一石、

一下々かぶきたる體惣目に立候事を不仕候様可被一百八十石は右二十二石手取之割

申付候事

一百五十石は右二十五石手取之割

一刀脇差寸尺同拵衣類之儀從

事候ば重而以使斷候様下々迄可申付候事

○歳体増方

旨候緞に而も御法度と申儀は先随ひ候而断有之んば有べからず寛政元年の

寛政二年九月歳増の號合あり

一下々頭つ~み不申様可被申付候事

は百石高に三石宛増

一切他國にて調製したる藥市中在中共賣弘める事一御高札之外に御法度之由所々之者申候は可相守其

ざる様に可仕候幷衣類之事絹細は苦しからず女房

同前帶ぬいはくの類堅無用たるべき事

一海陸所々御高札之面可被相守事

殿様御參勤に付而被仰出御法度

一筆申觸候今度

一大庄屋は御知行被遣候間武具之拵も随分分限に過

條々

寛文元年之介

林あれ可申良木多少なくなり國用の支になる向後は

今迄札相渡置たる者の外は叶ひがたきとの事天和二

年十二月の命あり近世炭焼の禁無之により貧民農を

止めて炭を焼事多なる山林荒て旱魃す如此事年々積

りたるにや近頃別て芦北方にて私に炭を焼都下に廻

すふりにて他國に出す事年々舟三十四十艘より已上

有内多くは熊本へは廻らす故を以炭焼又は他所出の

禁を立度事なり

御郡奉行衆中

佐渡守判

賴 母判

判

監 七月

右之外に過たる儀有之ば御郡奉行御代官衆より可

被申候右樣無之樣に能く可被申聞候此旨相背者は

科の輕重にしたがひ曲事におこなはるべき旨仰せ

出さる者也

付たり人により此書付の外の類の者可有之候御

炭を所々の山付にて百姓共利用の爲に猥に焼きて山

◎炭燒

郡奉行をしてなみをはからひ可被申聞候事

一神事祭禮幷祝言葬禮之事は其庄屋をして分に過ざ

る様に可申付候事

申との事天和二年十二月之介なり

野を焼く事は制禁にて候つる間猥りにやき申まじく

な染物たるべし女も衣類同然たるへき事

百姓は銀作り指べからず衣類帯下帯迄も布木綿は

〇野焼

米は三割銀は二割より上之利を取間敷との事貞享元一小庄屋分刀脇
差拵之事銀作り之上は指べからず小

年令なり

111K

焼不申て秣の立方不宜處は前以郡奉行に相断り可

寛永十七年物二五

今の

●借財利息

八年令あり

六十六部の類すべて他邦の修行者の類は公舘花畑の

〇六十六部

一大麥蕎麥粟胡麻荏子蕼四斗入にいたすべき旨寛文

一米大豆小豆小麥三斗五升入 米山奥八三斗入

兼松下總守

〇俵物入實

高木伊勢守

旨暦三年の分なり

在中所々に出家入込百姓家にて説法いたす事厳禁之

北條安房守

後書面之通之寸尺より不足に織出す輩有之は可爲

曲事來巳年より秋中に改之不足之分見出し次第可

取上之候間諸國在々所々において可存其趣者也

寛文四年七月十三日

質物紛失の上は元銀一倍の積りを以本主え遣し申べ

との事延八年江戸の號合あり

○民家説法

年なり初三月五日にあり然るに男は二月二日女は

三月十日と國方の極にて暦六年正月分あり

○質物紛失

一布木綿之儀一端は右同三丈四尺巾一尺三寸

一尺四寸たるべき事

右之通此巳前より被相立候處近年猥に有之候間向

一絹紬之類一端に付大工のかねにてたけ三四尺巾 江戸の號合にて
下々奉公人の出替日極る寛文十二

定

〇奉公人出替日

〇布帛之寸法

なるは政に害有改めすんば有べからず

東三十三ヶ國は守隨彦太郎西三十三ヶ國は神善四郎

番人とも是等の法度守り居るや不審かし此等の事は

中に一統に合せらる今世八郎と云升を下もにて作り

彼辻番共に壁書の條目を渡し置たし

たこへば一升に二合減し八合にしてる是奸商の仕

業嚴合を出して停止し正に歸し度事なり料量不平

を用ゆべしの 公義の命令寛文九年二月あり

近所は通え申さぬ樣にと享保三年三月の命なり京升は内のり四寸九分にして深さ二十七分と元文年

小國久住の四ヶ所は故ありて夜芝居免許な

○の寸法

なり

夜芝居之事前々其禁なし暦四年一廐之者 手廻小人之類 荒仕子

〇夜芝居禁

令を下さる事寶暦五年十一月なり

一手木之者 一長柄之者 一駕之者

右同斷

主人の母幷妻に密通せし者死罪に處すべき旨一統に

村人数の者より抱らる時は其身斗右同

○主婦姦淫

右無苗之時は其身斗村人數放れるなり苗字刀免許

此禁不行時の勢なり

一加子

になれば家族皆放るとなり

〇鐵砲質

○百姓より人數放ゝ之事

桎梏の如し

一定手傳

國々にて向後新規之祭禮無用に候無仔細は寺社奉

公の遊獵の地經界を正標札を建つ夫より内にて猥

○鷹場の禁

行へ可相斷事貞享二年十一月廿五日 公義より被仰

出也

◎新規祭禮

火術の事は府中近郊にては火災事寛政四年二月之分なり

○火術

間川端開き作所にいたしたる所多し已來不相成さの

成長の頃になりては家中之面々を始鷹野網懸等 惣愷郡中にて新に地方開明之事容易には不成山際谷

に出で申さぬ様に寶暦十三年三月の分なり

○開田畑禁

○鷹野網懸

二一四

の恐有により川尻大

慈寺河原之外は一切禁なるよし右同年の命なり

に漁獵する者嚴罰有り人是を恐る事囹圄の如し

鐵砲質に取る事は成らぬとの禁元祿四年の命なら今

二月禁ぜらる野

津原鶴崎右村人数にて其儘居る升知行所の百姓を自用に仕事三百石已上高百石に一

ヶ年に十人宛一人に付夫銀八分宛三百石二百石は

○夫仕

菖蒲甲には立物斗に金箔を置き其外の嘘には外の繪

具を用ひ組織物にて包み申間敷鍵長刀にも箔を付申

間敷との旨享保六年 公義の命なり天明中に國家

も號合あり先人は享保七年の生れにて今に至つて九

十餘年なり其噺を聞に今時の如く甲人形に金襴織物

結構なるを用る事なし此等の事も世の奢の美につ

れてかくはなり行なり三月の雛も是に同じ皆古風の

實意を失して時の奢に増長したるなり號令を下し改

めずんば有べからず

◎菖蒲甲

九十文已上九十一二文なり天明中に九十五六文にな

寛政中に九十八九文より百二三文になる享和中百

六七文より百十文已上になる文化年より百十四五

文になる文化八年百十八文位なり文化十年頃百十九

予先人の噺を聞に享保より以前は銀六十七十の間

なりと云り今に至迄年々に高くなるいかんともしが

たき勢なり

111 111

宇土佐敷鶴崎此三ヶ所は熊本に准するなん賓暦年間

に合あり

知行取郡中所々に在宅の面々二百三十餘人なり年々

増減有さ云とも大略三百には越へず

◯淮町

米俵は京升にて三斗五升入を一俵とす山奥遠在は三

斗入に極る事寛文八年の命なり川尻高瀬八代之三ヶ

所は納る米は三斗二升入にて納る此三ヶ所は皆大坂

へ廻してるなり此米高國計の部に記す

○在邑

○米俵

夫仕は四月より十月までは堅召仕ふ間敷家中も同

斷なり延八年之介

右五稜は無賃錢此外は一人に飯米一升馬は大豆一

升宛給す

一御參勤 一公義事 一用水之事

一御國廻之時

一道橋之事

〇公用夫仕之事

ヶ年三十人二百石已下百石迄は二十八百石已下は

十人宛

さて旦那寺の坊主より其寺の旦那に粉なし 寛永十三年始て通の錢を鑄る夫まで本朝に用ゆる

の裏書印形する是天下の法令なり是より佛法彌以繁 所の錢和錢異錢混じ通用す中にも室町將軍の代に金

昌せり切支丹の法を却けん爲の始の術也しか今は 銀其外貨物を異朝に遣し錢を請はれ事度々なり其

統の事となり浮居氏の幸となれるも此の時なり諸人 頃は明の世にて洪武永樂の錢中にも多く今の世に残

は此書物無し故に彼の宗門の神器を箱に入夫を年々 れり寛永の錢出てより天下今の如き通用とはなれ

正月々始め市中在中洩れざる様に持廻り老若男女の り朝鮮國に今多寛永通寳を用とき是我朝の寮の

差別なく其神體を蹈ましむるなり其神器を足にてふ 洩て異國に渡りたるなり常國は錢は七十文を一匁さ

みたる上は信仰する心絶て無らしむる方便なり當國 定めらる寛永寛文頃迄は錢は何十何百何文と數へ

にては寛文四年始れり愚民を統御する術にて面白 目の數なし匁は泉の字の古字なり一匁は一錢の

き事なり今又治國天下に用るにあらずんば左道異 一錢は大略懸目一匁なるを以てなり寛文元祿永の

術の徒ありて愚民を誰かし祈り祈禱加持修法護摩 間錢一匁云は五十或は六十或七十八十を以て一匁

ご其言葉はよけれ共積る所は其人の為にするにあ こす定れる事なかりしが銀一匁の買五十六十七十

らず自己の爲にして米錢を貪り取るなりかよふの者 八十の時は其直段につれて定りたる事なし享保の初

は極て 國家政事の 妨となり 聖敢治民を亂る 王制に 年銀一匁八十錢の時又一匁八十とす泉の字は錢の字

折言破律亂名改作孰左道以亂政殺作謠聲異服奇技奇 なり元文年中銀一匁七十錢の時に一匁を七十錢と定

器以疑衆殺行俏而堅言僑而辨學非而博順非而澤以疑 められしより今に至りて八十年の間七十錢と定る予

衆殺假於鬼神時日卜筮疑衆殺此四誅者不以聽見へ暦の末年に生れ明和の頃よりの事を覺へて心に

たり又孔子も悪紫之奪朱と被仰候右の類は悉く吟味 留めしが銀一匁
八十七八文乃至九十文安永の頃より

〇錢仕

夫に神文を書加此神文は慶長十八年五月始て

して平げ邪神邪佛を却廢すべし

111 11

東照神凧の命にて議定て天下に布告し給ひき其文

に裏書111 1

騎馬

◎の上許さるなり

農民より町家の者になる事厳禁なり虚弱不具者の類を轉び切支丹と云仕官の人は大小となく仕官の

轉じて佛法にせ

變業

○天下の大禁となり大名小名を始め諸人末々に至迄旦

る

歌舞伎其外一切見世物の類興行十一月より三月を限 法極て怪むべき事の有つらん慶長の年間此寺を廢し

給ふ諸人は勿論大名小名も多く此法にす然るに此

巒寺と云寺を作り異人を住持たらしめて此法を弘め

○見世物月限

町人百姓慰に山川の漁獵は禁なり渡世に致すは願出 日本に弘めし法なり織田信長此法を信じ京都に南

札を取可申事

切支丹の宗門は元来南蠻國より異人來り天正の頃よ

○町人百姓の漁獵

なり

射術には古法を守り候事勿論にて賭のかりなし

〇影踏

○射術

の外

仕官之者子弟追々仕官の望有之者は歌舞伎見物は遠

慮すべき旨命あり勿論在勤の官人は猶さら遠慮なり

〇業楮及び昏を他邦に出す事國禁なん

○〇番格

るなり見物

卸と云

旅人諸の貨物を持来りぐ事ならず筆て極置處の行 乗馬は三百石已上は極て持つ筈の事其巳下は嗜次第

家に仕切を以て相渡し其行家より小の者に附興す之事

トヒ

此を業の各籍に入して薬調合し賣薬又は病人を察

る事是又禁なり市中の合藥他所の合藥近年禁せら

る享和年中なり今は禁破れたりみだりなる事云は

歌舞伎趣向は制禁な

鐵砲も賭の勝負は禁之なり其外何事にても一切賭

の勝負は禁止那寺極め始るかくして皆此法を農民出家沙門さなる願
は糺方始に此宗旨にて無之何寺旦那何宗にて紛る~事無き

由を書このへ公に奉る其書き物を宗門誓詞書物と

夫有女も處女も心らけて評判よき役者の為には命

をもすて思ひ入は皆此の役者の仕業なり何てか

思ひ入事の深きや君の親夫の為にも捨がたき命

を役者の爲塵芥よりも安く思ふは淫事の人を逃す事

此に過たるはなし故に顔淵國を治る道を問えに孔子

對て日鄭整を放ち人を遠ざけよ鄭壁は淫なり倭人

は危しさ對へ給へり鄭聲は詩の鄭の風にて其國

のはやり歌なり鄭國は國からあしく淫亂の國なれば

國のはやりうたも皆淫亂にて此を用ゆれば皆人淫心

生じて風儀あしくなる故に鄭聲は放ち退けて用のへ

からずとなり佞人は彼は口才さて口器用に物云ひ廻

世に云利口さ云者なり佞人は吾身のよからんさて

は人をあさまに言なし吾身を立んさては人を倒し

讒言を搆へて忠を不忠に云なし手前の氣に入たる人

を吹擧氣に入ぬをしりぞけなぎする類皆佞人の業

なり故にかよふの者は國家を危うする故に佞人はあ

やうし遠ざけしりぞけよこの事なり又利口の邦家を

覆す者をも悪と仰られ候ひき國政には第一風俗の亂

ムスメ

オット

見度と思ふ心を引出してゑもしれぬ事の出来るは皆

芝居の害なり歌舞伎の程、人の愛る者はなし

案に踊り子は今の歌舞伎役者 りふこ引さ云はい

かなる藝にて有りけん今の世聞見に及ばず あや

おりさ~らすりと云者も見聞に及ばず春駒は予若

年の頃見及べり其さま焼き乞兒の類腰に張大鼓を

付て一人にて之を皷し平家の文句のやふなるを唄

ひて門々にて米を乞此類にしてはさまで民間の風

俗を弊る事はなかるべし然れ共昔時は禁せられた

其淳質の政思ひやるべし夫に打かはりたる近世

の風俗いかに憂る事なからんや

〇旅人商買

踊り子 春駒 目明きの三味線引 りふこ引

きふあやおりさょらすり ほふかの類在中に

入込み禁ぜらる寛文年中なり

熊本より藝者入込又雇ひ申間敷事

○在中入込禁制

る~を先にすれば歌舞伎浄瑠璃諸國一統の事と申な

がら中までにても禁じたき事共なりさかくに自國

は田舎らしき上はなし上美都めくは政の上にて最

嫌ふべし少しの事にても華奢風流に移らぬ工夫第一

1110

二〇九

他國の躍子を國中に入込躍せ申事不相成事右同年よ 三十四十の者までも其淫心を搖動て我々もかくして

(人か有べき予を以て此を思ふに若き男女は元より

〇他國俳優

ドリ

鳥獸之類他國に買出す事停止にて寛文十年の合也

◎鳥獸類

邪謀計を見男女懸慕淫奔の事を見て悪ましく思は男

春秋共に田野秋春の作毛生長之時は鷹野網かけ制禁 子烈女の行を見て感じ我々もかく有度思ひ悪人の

之事賓曆年中の命なり

を以て議せば芝居は一切無にはしかし其故は忠臣孝

○田野之獵

人共夫は芝居に贔負したる言なり手が狭少

一旅人往来の宿所は各別盤上の遊び無用之事

稽古無用之戀無常さて人事世態洩らさす善懲悪の教

事

ご夫より人々費出來り今の窮迫さはなれり俗の諺に

芝居戻りの色事と云事ありさかくに芝居には神祇釋

一女の櫛笄は木櫛鯨のひれ鹿の角用うべし其外無用 盛になるよりして男女共に髪形衣類まで飾る心生

之事

なり風俗を壊り淫風を引起す事此にしく物なし淫風

一乗懸に毛せん置事不成事

一傘合羽下駄木履菅笠不成事

一疊藺表を用事不成事

○百姓之身分

過べからず其已下は二百石たるべき旨右同年の命な

知行之内二男末子に分知興附する事大祿はの禁なり暦の頃より少々相ゆるみ歌舞伎一座に

○分知

五百石に

旅藝者五人をされたり其後一切禁せられたれ共歌

舞伎に限りたるなり其禁はあれ共行はれず春向は所

所の歌舞伎に地藝者のちを以旅者を入込置て興行

するは村里の役人も強て差咎めぬは同じ心になりて

旅の 者にまさりたるにめでたるなり村所市

中共男女老弱を云す愛でるは淫楽の人心を蕩らかす

一手習算用之外農民謠鳴物淨瑠璃等之子にしては君子なり女子にしては賢婦人なり此の如

き芝居を見て善悪に取捨有る人一日の見物人に幾ば

しき物也餅饅

頭も是に向きなり食事の上の費へ事なり是等の物調

へ食したり共框米の助にならぬにて其費を知るべし

右を禁せば民間の穀食豊にして下直になりぬべし民

飢る事なかるべし然共米穀下直にては家中さ百姓は

迷惑すべし其時に紙鈔を以て渡方時に買上げ民間に

有餘ありて持ちましたる五穀を買上にして大阪叉

は所々の湊々に運送し貰り現金銀を取官庫に納む

ベル是我が國を富し又無用のただ喰を自ら禁じて儉

約の本立つべしか様の類外にも多く有べし吟味を

て禁すべき事なり本立されば約行はれず民の奢を

禁する事はならぬものなり

ヒクハシ

宿町の外は饂飩そばきり饅頭焼餅飴おこしの類を

るを禁ぜらる事是又寛永の中年なり豆腐も造る事

なら此等は五穀をして民食の乏くなるを禁じ其

ウドン

きば民の多くして貧に成村所零落の基なり其漸を

防ぎ禁行はる~やふに厳法を立ずんばあるべからず

○餅饅の禁

源をふせぎ給ひしなるべし乾菓子の類近年善盡美

盡し上品に成高價になるあり音信贈答に用ゆるの

み喰て腹中の助にならず固より費の甚侍は城下往來の時鍵を持せる
事六百石以上と定らる

其已上は火事の時持せるも不苦と元禄五年令あり

家中縁組は物頭格已上は公に伺ひて公許の上にて

婚禮す平士より中小姓までは家老に達するまでなり

其已下は官長に聞す諸人は媒灼を以縁約す他邦さ縁

約は上下共に官に達して可許を得て約するなり

○侍城下往來の鎗

○縁組

火鉢の事諸官府には十月朔日より翌二月晦日迄出す

なり

m

ヤクシ

四季衣服の事九月朔日より同八日迄拾九日より綿入

公方家ばかり襪を召さる

は同十日より九日には

下方は三月中足皮用四月朔日より拾五月四日まで五

日より帷子是 公方家の制度國家も是に准するなり

〇火鉢

惣列刀を帶したる者歩行の時は道の左により通行す

べしと諸人は道の左により往來すべき旨小倉にて仰

出され由なり其後此等の號寛永後聞きはべらず

〇四時の服

○歩行

二〇

乘下二十貫目

輕尻 五貫目在中の馬を乘下にするを云

駄荷物 四十貫目

○駄荷

國中の端々に地侍と云者を立置る足輕の代りに召仕

ふ軍役なり支配は其郡の郡代支配す常に武を講ず寛

永十一年より始る

○地侍 一に地筒とあり

札筒と云は在中百姓の内に人数を極札を渡し鐵砲一

挺づ~所持して軍用に召仕る此を札筒と云運上銀五

匁を出し此を集めて玉藥股引を調會所に備置く

べしさ寛永十一年の命なり

下益城 宇土 八代 芦北之内 高田 野津

種山郡浦松山河江 芦北六手永

〇札筒

五月前

一三間梁十七間

右納所々

一四間梁十五間

甲佐 矢部 杉島 廻江 河江 中山 砥用

松山 郡浦

二〇七

在中にて揚酒商質は一切禁之川尻高瀬高橋は別段と

寛文十年に禁立て右三ヶ所の外は國中一統の禁なり

しも今の世は此に打替り在中にも造酒や餘計に出来

揚酒場所本手所々に多く其外隠しの禁令敗れ村ご

に賣る商人大勢入こみ在中禁止の品を賣る此の如

〇在中酒商賣

なり

往還宿町地子年貢先代加藤氏領知之時は高悪にて地

子上納せり 妙解公寛永中免除せらる此仁澤の一ッ

一高橋二十八疋一八代十四疋一内牧四十疋

一植木二十疋一小川四十二疋一坪井日に二疋宛

一久住四十疋一大津四十疋一野津原二十疋

一高田五十五疋一種山四十五疋一野津三十五疋

一南關三十二疋一長須十三疋一宇土四十疋

○往還宿町地子

一熊本五十疋一河尻十六疋一高瀬十九疋

〇驛馬

右 公義之定制

駕夫四人

人足一人五貫目 乘物舁六人

河原 深川 竹廻 大津 正院 本庄 田迎

横手 池田 五町

右東西倉に藏する所々

一同七十間

十八戸前

五天前

一同二十間

西倉

一同十八間

四天前

中立

一六間梁十八東西に分

間政讹年

一六間梁三十二間

東倉

國中の風年始に門々に松枝を假栽する事は采地已上

門松を立る松は若松の枝五段七段三段なり又商人の

富家にも譯ありてゆるさる

チギウトリ

◎門松

濱の産固より多五穀澤山にして豊饒の國なり本朝

中上の國なり國中百萬の人民食有餘あり多他邦に運

遭して交易于諸貨故に他國より米穀買入る事は

禁止なり然はあれ共凶年にて民食乏き時は米穀他邦

より買調る事を許さるなり

一三間梁十二間

横手 錢塘 本庄田迎 沼山津 木倉

下益城 上盆城 飽田宇土の内 五町 池田

右納所々

一六間梁十二間

一四間梁十間

一同十間

一三間梁十六間

三戸前

一四梁間十二間

四戸前

一同六間

一三間梁二十間

五戸前

一四間梁九間

三戸前

一六間梁十六間

四戸前

川尻

玉名六手永 山鹿船手 菊池手 合志 ū 山本

右に納所々

前

二戸一三間梁十八間

一同二十間

五月前

一六間梁三十三間

高瀬

二〇六

二〇五

は私に申たるにあらずと宣ふ参冠を死して頓首して

謝日陛下自察聖武孰與高帝上日朕安敢望高帝乎參日常國は沃野廣洪山林川澤丘陵墳衍原濕魚鹽都土地海

〇他國の米穀

様に右同年の命なり

争訟

○百姓の今に於て此旨なり

〇他國緣組

日君似不及也參日陛下言固

是也且高帝與蕭何定天下法令既明今陛下垂拱

-陛下垂拱參等叉

守職遵而勿失不亦可乎恵帝日善君休矣百姓歌之日蕭

何爲法畫一曹參代之而勿失載其清淨民用寧一さ

此等の事舊政をみたりに不改維持して敗れゆるまぬ

様にいた事簡にして國中に煩しき事なき驗なり

妙解公寛永十三年の號分に何程善き事候共前かごの

儀くずし申さぬ様に心得可申候との仰は誠に國家治

神武聖識申も中(恐多

體の要領を知しめしたる

き事共なり

陛下觀臣能孰與蕭何賢上たる事久しくあるは輕(しく改むべからず宋の煕

寧中明末にしば(法を改め變ける故に唐庾と云者

存舊論を著し新法の國家に害有事を論じたり國家の

物は常に人民の耳目に習慣して夫々安居るもの

なれば猥に改すれば民の耳目を驚かし危懼の意を

生じ各業を安せず故に巳事を得に非れば改革變轉し

て民心を驚すべからず漢曹参は蕭何か跡を續て相國

となりしか共蕭何か遺法を守りて改る事なく無事閉

暇にして日夜酒をのんで樂めり惠帝參が天下の政事

に心を用さるかと疑い參が子の近侍たりしに詔日汝

父參は天下の相國として政事に心を用ひず日夜酒を

呑で談笑するは職の重きを忘れるに似たり汝膜が詔

さなしに試に問て見よさの詔にて候ひつる間從容

して父に問事詔の如し参大に怒て日天下の政事汝等

が知る所に非してみだりに言は不埒なりて策を以

て打擲す參か子曹空出仕してかくこ帝に申上る翌日

參出仕したる時間で日何事の有つれば強く密を答

ちたるや畢覚は朕がに詔して若を巻を諫めつれ窟

他邦の人と縁組は一切ならぬ事にあらず寛文十年に

初てあり百姓町人たりさも他國の者と縁組下々に

て致すべからず無ものは願を出裁許受べしさの事

給知の百姓たり共公事訴訟の儀は紛人より一切不搆

移

じて二人とす寛文二年より暦六年迄九十五年連綿

〇變水牢さは在中惣庄屋會所に堀をほり水をた~へ

○水牢

中央に柱を立て年貢不納未進の百姓を束縛し水に

漬し柱につなぎ置て懲さしむるなり是全く戰國苛刻

の事にして治世牧民の政にあらず暦六年止めらる

は美事なりさ云べし

一沙門師の類は修學十ヶ年を許す寺院の内より寺局を立らる郡間を其局さす此時より郡頭一人を減

往來を渡す事を禁ずる者は罰あり

二〇四

して夫より四十二年を歴て寛政九年郡間を廢せらる

郡頭已下の属悉く闕官となる郡頭の職掌都て郡方奉

行の任に歸す叉郡間の分司小物成方を勘定所の分司

に幷す文化の初年又小物成方を分つて別局とす此局

は雜枕を調す金米の賃殖を主とす前條に詳なり立官

設府の移轉沿革は時の利害にもよると云共國家は一

定不易の法を立べし新法を立て新規を興すは惡き事

國初寛永の初より寛文二年迄三十一年の間郡政の事 なり古人論せりた有ふりたる事にひづみの出来

詳かならず郡方の事免方共に奉行の職掌にてありつ ぬ様に維持し用ゆれば安らかにして物事濡らす新規

るに同三年より奉行之内瀬戸五兵衛郡方の職員に參 を起しぬれば事繁多にしてむづかしく棄て思え様に

加はりて鎌田圭之助兩人掌之 其後奥田次郎 は事行はれず却而違ひそむく事に成り行く新意を出

左衛門加り三人なり此時に代官さ云官を置る小野太 書きを改むる事はいづれの世も有る事なれ、共其中

左衛門吉村勘左衛門夏間孫兵衛三人なり此官租税 に一二の盆ある事も有つべし大方は其近効に迷ひて

促取して未進を責る役なり此時より郡方に郡方 遠さ慮深く謀る事なく易を見て難を見ず思の外障礙

根取と云官を始て立らる此局にて郡中一切牧民 ありて貨財の費入力の耗る事になり行なり毛を吹て

租調庸山林川澤牧牛馬在役人の淑塘堤溝洫道路 疵を求風を起して波を生じ素朴淳厚の風日々に敗れ

橋梁修造の精粗郡政治理不治理の事を論す然るに 逐利奇權の術月々に長したさひ小利を得るこも國家

暦六年より郡方を郡間と改め唱故政府中に郡方と云に長く害を貽宗の良法成策國中耳目に熟し馴れ

侍屋敷の門開扉にする事五百石取已上其已下は引戸

◯開扉門

家中の士在宅之事五百石已上は相ならず城下居住な

b其已下たり共物頭は在宅ならず自分知行所にてな

(共其郷里故障なきにおいては不苦寛文八年に極

〇在宅

他國之人は士農工商共に來り滞留するは旅人北宿の

行家ありて其所に止めて用事を辨行家の外旅人を

宿る事を禁す犯す者は常刑あり

〇旅人之宿

獨禮已下刀脇差之全具に金具を用る事を禁ず衣類に

純子糯子綸子縮緬毛留糯珍女笄櫛に金銀鼈甲象牙を

用る事を禁ず禁を犯せば常刑あり

七十歳已上十歳已下井醫師出家は制外之

〇國中之禁

一商家は獨禮已下に可准事

一倍臣知行取は士席に準し中小姓以下は獨織已下に

他邦に出る時は夫々の支配方に願請して券帖110111

一農民は日数の定なしと云共大略春冬農隙に旅行を

許す商は一ヶ年を限りさすれ共年を越るの旅行は

容易にゆるさず難民も同じ

私用の旅行には日数の定れる事ならと共士は大

略百日二百日の間故あれば此數に限らず日勤の役

は容易に自用之旅行ならず然れ共巳事を得ざれば

日三十日の旅行は許さるなり

にての旅行なら私用の旅行は券符を渡す

ライデが女

ライ

一女の境を出るには侍は家老より口屋の符を出す其

已下はすべて奉行より出す其文式の如きは有司の

關る所なり

テガタ

を取り

て出る猥に境を越る事を許さず猥に越境の者は常刑

有り

一士の鍵を持せて旅行するは券符に及ばす是は公用

士農工商沙門祠官醫師修驗遊民雜戸自用にて開を越

○旅行

夜中侍屋數内柝木にて時を告屋敷廻する事三千石已

上なら其巳下なし

○柝木

ヒヤウジキ

是に大辟を加て五刑こす大辟は死刑なり墨は刺墨と

斬首已上死の軽重なり古は死を減じて墨別宮

「ネクビ

國家を駁するの要は有功を賞し有罪を罰す賞は以て

人をめ罰は以て人を懲す賞罰は國の治具豈ゆるが

せにすべけんや尚書孝經に五刑の三千とあり國

の刑條も又三千と云べし其大辟を大塞ぐ磔肆首

公事を辨す疾病居喪其外故障之外は日勤の役は

故

に日勤の官人は月に一日の暇日を給り休息す 公在

東都の時は正月三ヶ日同七日同十五日三月三日五月

五日七月七日同十四日同十五日八月朔日九月九日皆

暇日なり番は都て當直す 公在國の日は暇にあら

す當直の役は座班するなり八月十五日六月十四日は

國崇神祭の日にて休日なしを議ありて休日をとぶ

めて官人當直す此も往古の制の變ばれるなり

○檢使

ヨットキ

官人は大小さなく官府有は其官府に日々又は交番

ヤクニン

ヤクショ

○暇日

云勤めたるを賞し怠をむるは聖賢馭世の具ゆる

がせにすべからず

ギヨル

一日も闕席する事なし四皷より八鼓に至り退す一雨羽織木綿類可用事

着座以上羅紗心に任す

一獨禮以下越後縮帷子靈紋紗之羽織指平之袴禁之事

一火事羽織革木綿可用事

但下着幷單羽織は加賀日野心に任すべし

一足輕以下衣服帶に至迄すべて木綿布可用事

百姓之衣類も右同斷

一獨禮以下諸役人段已上衣服羽織袴表裏共にすべて

布木綿可用事

但裏は心にまかす羽織は紗綾加賀日野心にま

かす

一士已上衣服裏付上下羽織袴すべて表は細木綿を可

用事

○衣服の制度

て入れ墨なり類に入るなり則は鼻を截ッなり刺は足

入

を断っなり宮は勢を割ツなり今此四ッの内を墨

一ッを用ひ笞杖と大辟とのみ笞は百を限とす其上を

死に営す刑の階級足らぬに似たり猶聖謨に則して深

〈議すべえめ議しかたし刑伐の時掩使物頭勤之寶

暦五年初る

11011

に至るまで孝悌惇朴力

田精勤の者あらば其支配(より官に以聞すべき旨

箕暦六年分あり其善行を換して賞賜あり又九十歳

巳上の者を年の終に官に以聞し翌正月に金銭を賜又

鰥寡孤獨を救恤し給ふ養老の政にして仁の術なり

○堅メ

不六月達

在に札座あり 不二十五

年行れて寶永六年に止む鈔の形容印文考る所なし

延享三年より叉紙鈔行る資暦の初止む此鈔予幼年の

時先姥の筐に納め置きしを見及へり今其全形印文を

覺へす寛政四年より又行る是は往昔の紙幣はぷり

預り手形にて通用す其品は百目五十目四十目三十目

二十目十匁五匁二匁五分一匁五分二分色は黄青絳白

印文狻猊蟠龍等の文を押す小物成方も同く製預

手形を用姦民多く詐爲して眞贋し難く民間便させ

すして之を愛す此れより金銀の價高くなるこ云り

○孝悌惇朴

國中すべて士は元より農工商イケニヘ

年初て紙鈔を行る町濟しては官の密事篩書簡牘等披問する事を不発事

東照

を取調する事ならず此神父は慶長十八年五月

神浮屠氏に命じて文を作らしめ天下に詢達す神文

式あり世の人知る所なれば不賛異朝には此を盟誓と

云古き事有尚書には王督于師日あり又春秋の世

となりては王者之跡熄道不行詐謀術のみにて上下

交際信義立す諸侯は俱に王命を受其寰宇を有ち上

天子に事へ下隣に交る卯大夫士は又其國君に事へ

君を助るに信義立す諸相信せず卿大夫士共に信

せず是を以盟誓をなして之を要す盟の禮と申すは

牲を殺し血を敵て神明に告げ誓を若違背あらば神明

の殃を蒙り此牲の如殺されんこの事なり曲に約

信日」誓と見へたり日本には性を殺の事を聞かず自

ら手指の膚肌を刀にて刺し血を出し姓名の上に塗る

此牲を殺て血を敵の形ちまねたるにや

○六月達は自身役前の積分考課を記し年々日勤不参等

堅と云事有大小となく官人さ成時は其官夫々取計ひ の事自己の年齢支干を書つらねて上達す官長より六

様の條目あり其掟條目の通り堅相守り奉職無狀有ま 月三日迄に夫々達す是を考積方に而調取す勤て不懈

ごきさの誓約して神に血判する是を堅と云其堅のを賞す三年不怠を金銀を以賞之斯を三年皆勤賞さ

家中の知行藏納に申付になりしは寬永襲封の後

公より三代を歴て 妙應公延八年家中の地方上

寛永十四年 公命して日近年下々おごり候に付我

等下國いたし候はいかゞ可申付と他國にても取

さいたし候由承り候然る間年寄及奉行共面々存

候通りを書付後二十一日差出可申候侍共町人百

姓三段に書付可申候たさへ我等身の上の事たりさ

も皆々存寄候處は可申出事

◎采地禀米

○奉行所萬事物毎つかへ候様に相聞へ候随分はかの

ゆき候やふに沙汰可仕候四人相詰くたびれては

奉公も不相成候間談合仕三人か二人あて詰申くた

ひれ不申やうに勤可申事

○求直言直諫

○何程善き事有之候こも前かごの儀くすし申さぬ様

に心得可申候

人の心得三ッあり第一は物を不取様に第二は諸侍

の用に慮外無き様に第三は心直に物事ひがみ

無機にたしなみ可申候此三ッを不極候はど重き役

は不相成事に候

一百石已上

七十石迄

霍崎へ被差越候面々は

二十五石手取

十五紙鈔は衰世の術にて唐土にては五百年已前より行る

日本にては百二三十年已來の事なり當國には貞享二

延寶八年之極此時迄は御家中地面取は皆自分收

納に而候を此時より御歳米を以被渡下候事

〇紙幣

一京大坂長崎天草詰は

三十五石

三十五石

一江戸御留守居は

石

一江戸御供は

三三石五斗宛

一五十石より十石迄

二十五石

一百石より石

二十え被納米を以て百石高何十石と制限を定め給ひ

しより自分の收納止む然る處貞享元年地方は家中

に返されつれ共米を以て月俸歳体を紛る事は元

の如是國中廣大にして石田さ鹵沙醤油の地上中

下等の差ありて又豊凶の異同民間の富貧未進あり

上下種々の出入有るを以て一統を平均し給ひ甲

乙無らしむるの善政淑法と云へし

手取米極

1100

○寛政八年春四十二三匁粟二十七八匁此夏六月十一日大雨洪水有別郭秋冬に至り米四十二匁なり

○同九年同三十四匁五匁より七八匁に至る

〇同七年春三十目夏三十五匁冬四十目粟二十三大豆二十二匁小豆二十七匆大麥十四匁五分小麥二十三匁五分空豆十六匁五分蕎麥十八匁胡)五十七匁五分榮種四十目綿百目五匁二分白米一升八十四文搗粜七十四文銀一匁百一文歩判二十一匁七分小判八十六匁

○同六年春二十八匁夏二十九匁冬二十五匁

○同五年同三十九匁冬二十八匁

○同四年四月朔日肥後西の海濱高浪民屋數萬軒破壊流亡人民四千七百三十八餘一時に海底に投沒す田畑亡所に成る数百町國中救恤の備不足の由にて公儀より三萬兩の恩給あり米價一俵四十七匁粟二十七八匁より三十目に及同冬に至り米價益貴(成

る五十目に及命有りて四十目を以て限さす行

す樽代を以て取遣前に同

○寛政三年夏米同三十目同冬二十五匁

の變なり

右物價の踊貴變遷人事の如し物質は賤を以て善政

さし寛永十三年 妙解して日總別政道にかくる役

一九九

ノタマハク

○役人之心得

貴を以て變とす上下苦めばなり古漢の昭帝の

時米一石五錢唐太宗の時一斗三錢今の世に論する

にあらざれ共太中思ひやるべし

ヤスキ

一○同五年冬米三十一匁鯛百目一匁二分

○同六年同三十日

○同三年冬同粟十匁大豆二十八匁蕎麥十匁鹽三十文

同四年冬米三十八匁粟十六匁鹽二十八文

○文化二年冬同二十五匁

○享和三年春米三十二匁釜三十五匁鹽一升廿四文

○同四年冬米二十六七匁

〇同十三年米三十七八匁銀一匁百一次同冬米四十一

二匁金一兩百十匁

の子二匁四分蠣二匁五分鰹節二匁三匁蜜柑一ツ三

文より五文に至る白魚五匁

0同十二年二十士入久短白數

〇同七年同二十九匆金一步二十八匁銀一百十七文

目)

○同十一年三十二匁

右之通札に書付店に張出し置べしこの命令なり尤

酒に水をさし賣事急度禁止なり染物之價花色紋付

〇同十六年飢饉銀一匁米六合大麥二升小麥一升五合

○寶永三年四月上旬大地震處々岩石ぬけ大地破裂家

倒れ壓死する者夥し數不知此年天下飢饉米價踊貴

〇元祿七年の物價白米一升七分諸白酒一升七分並酒

五分胡麻油一升二匁種子油一升一匁八分

○同十五年洪水大變

〇元禄八年天下飢饉銀一匁大麥三升鹽二升五合米一

斗五合

〇貞享二年一俵十一匁太米八匁小麥五匁大豆九

〇同三年一俵二十日太米十六匁大豆十匁

○同四年十八匁

〇同四年一俵十三匁太米十一

○天和二年一俵二十五匁太米二十一匁同秋一俵十三

匁太米九匁

○同九年一俵二十九匁三十目太米十六匁大豆十八匁

樫實八匁樫實此年初てなり食したる人腹痛強!八

多死す

同五年銀百目二石七斗

和核 之間米一升四 元文

官命ありて四十目を以て限さし夫より已上の賣買

を禁ぜらる表には四十目に賣買して其餘を樽代さ

號して取やりをする姦商の術防に便なしにせす

んば有へからず貞享二年一俵十一匁此より安き事

二百年未聞か此時より高き事是又最第一とす時

○天明六年夏大雨洪水秋凶作米一俵四十目已上より

五十七八匁位に至る諸人大に苦む此時を最第一と

右之外萬品數不可枚舉以一二可推知其餘元祿の初

より文化の初まで百二十餘年なん

同十六文婷備跟鹽一升六文七文 人宕同十文十三

四文濱鐵餅同二十四文位停 之間

文化同六文文 暦の初

元祿享保(

○綿白目三匁 棚同五匁 嘅] 同四四五永の末頃

分

射

政天

一匁八分飛色二三分吉岡染二匁三分黑一匁八分

けんほふ形付一匁八分鼠形付一匁二分同無地一匁

○文化八年物價黑米一升八分諸白一升二匁並酒一匁

八分種油一升五匁五分胡麻油七匁花色紋付四匁五

分飛色九匁同模樣付十四匁吉岡五匁鼠形付四匁空

色三匁五分

一九八

年春米一俵二十八匁太米二十六匁

一九七

○同四○天文九年の頃兵庫にて米の買米が一石六〇同十年百目一石太米一石二斗大麥一俵十四匁

○延寶三年米一俵三十三匁五分太米二十八匁大麥二

十目小麥二十八匁大阪にて銀百目に米八斗江戸は

七斗なり今春天下飢饉餓死多し

○寬文七年米價銀百目二斗

九千七百十四人

○明暦三年江戸大火此時 城の本丸焼失す油一升銀

三拾目酒一升一步米四斗壹兩

夫より飯尾五左衛門殿

岡村忠左衛門殿

佐野權助殿

甚五郎

林十二月二日

庫にて米之直段一石に付六匁三分之由申す板屋新

日本國中の人別を改られより組の1 七ヶ年目

に國中の人別を改められ 公義に上らるしかれ

左衛門申候其心得可有之候

一年已後是叉改めし事なかりしに享保年中 公儀よ 一御御生事業切
十二にらひ可申由此員兵

る人の無は郡政部の一典なり人別の事は寛永十

木綿今程一匹に一匁六分之賣買に耐候

共是農商寺社の人別までにて士の人別はなし國中の

人別は國主一人を除て已下は士庶人まで洩る事なか

るべ是古の道なり農商までの改にて士の人別なき

は是乂一闕典なり文化七年午國中農商の人別男女五

十五萬三千三百五十一人寛永より差引三十四萬九千

六百七十三人の增なり夫に應じて田野開けたる事多

穀食は人の食に足さいへごも魚鹽の利山林の材其

外の貨物は大數かぎりある物なれば人物の增にて

多事なくなるたじなければ慣貴くなる自然の勢なり

物價平準には心を用ひずば有べからず熊本町男女1萬

○米價古今幷諸貨物

米價は其高下豊因によると云共叉時の糴の法によ

れり甚高ければ諸人苦み甚だ安ければ士農憂ふ其高

下によりて時の宜き政をなすべし

匁三分

さ有室町日記と云書に云

凡百年斗の間米考るところなら寛永の末

には木綿一匹六百文なり米も夫に應高くなり元

祿の頃は米一石銀百目木綿一匹一貫一二百文さな

聞召て日 八萬二百五十餘さ見ゆ其後の改を聞ず寛政十二年頃

越中は解訟の大名になられたり家中士の千十五 郡局の指揮にて竈數の改ありしかご事全備に至らず

になれば相續せしめらるささあらば後にはよき士して止みぬ又當時の急務にあらずなご~云て再興す

動功ありて采地を給りし者たり共國初の頃までは果

して家督相續の事を思ひ寄らず大略其身一代限りの

覺悟なりに 妙解公の代に士の子十五歳已上にな

れば相續せめて其祀を絶つ事なからしめ給ふ如此

は重の仁恵にあらずや是世禄なり

相續

戸口の増減は國家の利害に關係する事重し改善○○戸口 損して相續せしむるあり

を伝

は出来まし精入て奉公する士次第に少くなり風儀

あしくなるべしさの宣へり誠に聖鑑の知言掌に是

を見るが如し才不才庸を論ず舊相續せしめ

給ふ事先祖の功とは云ながら餘り有る國家の洪

恐るべき事にあらずや

寵数を云

七を 賜る日

輔著加藤

二而卒年五十七法名

一萬石を本乗寺に葬ル編者山形県人羽柴雄

同年十月十四日常國

應

年間-

一九六

蹟乘妙解公に賜る十二月九日 公初て封まし

て一國統轄五十四萬石之證書を給り平國治安士民快

樂して各忠を勵業を勤めて仁惠の徳に浴せり其後

眞源公の世慶安二年已前の國家さ憂を共にせし舊動

の家臣の采地を舊故の家さ唱大故無においては代々

無減損して相續せしめらる右已後の新恩增加の俸祿

は代替には少々宛減損せらる然はあれ共其父の大

勳勞又は其身材力文武の藝術衆に秀たるをば時々の

僉議を以て無人別なれ

ば戸口增し政不善なれば戸口減す其故は善政行はる

る時は民富む民富む時は戸口增すなり田野開くなり

所務多きなり民貧なれば皆田宅を失て村所を立のく

もの多し故に年々に戸口減少して田野荒蕪して年貢

所務年々に減じて國計の不足となり或は士の俸祿を

闕きて不」興民に課役を増て苦める様になる故に政

は民の利する所によつて利」之是を善政す常國の

人口寛永十一年 妙解公襲封て國中の口數を改め

らる男女二十萬三千六百七十八人と見へたりしかれ

共其戸数の事を見す延寶年中にて戸數改りて竈數

竊に案るに三齋公八代に於て此事を一九五

食料

シム

生駒雅樂跟吉一は山鹿城村を監す蜂須賀阿波

の府さなれり親貞は寂心なり四十四年在城其子民部 六年四月二日熊本を發四月十四日攝州尼ヶ崎に着

大輔親俊相續て住す天文二十年豊後大友義鎮肥後に す秀吉賜死五月十四日自刎す是みたりに干戈に

亂入して城を屠る親俊降を乞大友に属す後此城を城 及び國中動亂せし故を以てなり此の時城親俊等大坂

越前守に譲りて自ら上代に移り住す城氏飽田詫摩二に至り一揆の謀に興せぬ由を辭すと雖も秀吉不聞領

地となり寺院証祠等も多くは此地に移る瀬々ご一固 こむ合戦のいざむ處に秀吉命で上京せこび天正十

親員等熊本に住す今の古城なり此頃より熊本幅湊の主和仁勘解由反す成政是を征し直に城村の隈部をか

郡の主なり其後城十良太郎親政相續す住する事三十一地を沒收す同年秀吉命 淺野彈正少弼長政」監熊本

餘年天正十五年二月豊太閤秀吉大に駈て九州を征す 加藤主計頭宇土城を監す福嶋左衛門太夫正則は八代

親政降を乞秀吉熊本に留事三日肥後征討する所の

土地四十九萬石を佐々陸奥守成政に賜ひ封す國中の

諸士を成政が與力とす親政本領八百丁を賜り與力

成る同月成政熊本城に入るに菊池郡隈府城主隈部

但馬守親永其子山鹿城村の城主式部太夫親安成政の

下知に従はす因て成政兵を率て隈府城を改む親政敗

走し城村の城に入る同八月成政及此城村に討入る時

に菊池香右衛門武宗甲斐相摸守親秀入道宗立相謀

國中の士をかたらひ三萬五千人一揆して熊本城を責

む成政驚て城村には押の兵を残え熊本に歸る賊京町

口に支成政力戦して賊を敗り城に入る敵を斬事四

千八百九十人賊皆散す同十二月玉名郡和仁田中の城

守家政は菊池城を監す黒田勘解由孝高は盆城御舟を

監す毛利壹岐守勝信は阿蘇内牧を監して中違戻の

賊を討伐して國中を治し歸り上る同年五月常國

のを加藤清正に封す國を小西攝津守行長に封し

て國中平定せり慶長五年關ヶ原の役小西行長敗北す

故を以て清正尚加へ封せられて一圓に領之同六年よ

り古城をして茶臼山に城を改め築く同年八月事を

始九年にして築城成る同十六年六月二十四日清正卒

五十歳其子肥後守忠廣襲封八月二十八日也九月國に

入る寛永九年六月三日有罪而國除る羽州庄内に移り

住す酒井宮内少輔忠勝をして之を守らしめられ延寶八年閏六月

備中

右之條々可被相守者也

一面々御代官所替又は私領相渡候節は跡々未進其

外諸事無油斷常々念を入第一御勘定無滯樣可被

心懸事

一堤川除道橋其外諸事常々心に懸物事不及大破時

支配所に達し可被加修理幷百姓論諍がましき儀

有之節は輕き内に聞層内に而可相濟儀は依怙

贔負なく不及難儀樣可被申付候事

一面々之儀は不及申手代等に至る迄支配所之民私

用につかひ申間敷井金銀米錢民より借又は民え

かし不申樣堅可申付候事

一御代官之面々常に其身を謹しみ奢なく民の農業

細に存候は御取上等入念宜樣可被申付候總而

諸事不任手代之身分被勤儀肝要候然時は手代末

~迄私有間數事

叉下を疑事多し上下疑なきゃふに萬事念を入可 官職制度考五

被申付候事

崇神帝の朝に見ゆ其後肥の字に改め事支干を詳に

せず宋史に火兒ご記武備志に非谷さ記す初天草葦

北阿蘇各一國たり後併て一國十四郡となる東海諸國

記云神護景雲三年以往正米納除免出」瑞郡田租三

分一是征賦の事始て見る所なり同書に天平十七年

五月肥後國無姓人等賜所願姓」是國の司のなら
ん同書に及云寶龜六年乙未肥後置三省二員」貞観十八
年運賃穀一萬七千四束幷綱丁水手百六十餘人稲三千
二百八拾束さ是束數を以て貢し官人にも束數を以て
給せしなり其後薬を去て籾さして貢す太平記時代ま
ではもみにて貸せりと見たり今のすり米とせし事其
時代を詳にせず又當國にてさせしは古飽田郡之内
に有を聞今横手宮寺村の遊に其節の在廳屋敷の
蹟今にあり熊本には菊池の氏族出田秀信者在城
す今の千葉城なり大永享の頃一八鹿子木三河守
當藩の事蹟遠く其往昔を考るに焉さして詳ならず
雖も古史に火國さ稱せし事初て

御目見奉願候儀は可有遠慮候此段組支配方へ可
御目見願之儀勝手次第其外之御中小姓倈
御中小姓頭え相渡

代々相續被仰付候御中小姓之嫡子

覺

士席已上二男末子等別祿被下置候面々は其身才

能に依而被召出置本家有之事に候へば子孫相

續容易に不被仰付筈に候右之類は嫡子たり共他

家に養子に遣候儀勝手次第之事に候條此段頭々

承置候樣可申開旨候

御備頭え

覺

〇士席已上二男末子別祿

一佐敷番二十二人

一八代城付四十四人

總計七十八人知行總高二十九萬二千三百石餘

一番方組四百八十人 前に詳なり

合四十四人知行高五萬三千三百七十六石

四郎、千石中村伊織、千石芦村八百八、千石志

水新之允、千石松山形馬、千石神谷矢柄、千石

谷内藏允、

一民は上へ遠き故に疑有ものなり此故に上よりも

一九三

一岡寛なる時は民奢もの時は己が事業に罹り

安諸民衣食住諸事奢無之樣可申付候事

民は國之本也御代官之面々常に民之辛苦を能く

察し飢寒等之愁無之樣可申付事

○延寶八年公義御代官等え渡る~書付

條々

寶曆六年閏十一月 御制

士中知行之儀代々相續之事大體當國之高に應じ

古代之定有之候處中古我等に及迄新知加祿等

都而世祿に申付來候付當國不相應之高に至り後

來勤功之者有之候共賞すべき祿乏數世背前代之

本意候依之慶安二年已前之知行は舊故之家に付

無相違相續せしめ右已後之新知加祿は代々相

之高を斟酌し可申付候子孫拔群之功勞に依而は

故の家に進或子孫才能に依而世減すべから

す新知加祿之儀に付面は近年申付置候趣も有之

候條何も存候爲申聞置候者也

十一月

有沙汰候已上

津川平左衛門、二千八百石木下三郎左衛門、二

千石宮村平馬、二千石平野九郎右衛門、二千八

百

1二千石已上二千八百石溝口藏人、二千石

附合十六人知行六萬三千六百石

高

足合七人知行高十四萬九千五百石

一萬石已上三萬五千石細川能登守、三萬石細川和

泉守、一萬石長岡左仲、三萬石長岡主水、一萬

五十石長岡左馬助、一萬八千五百石有吉主膳、

一萬千石澤村衛士、

〇千石已上人數

て出すなり御一門御家老開所の井麺は 公よりの

作事は不被仰付候事 暦二年に極る

=

三千石已上六千石長岡内膳、六千石小笠原美濃、

五千石三淵八郎左衛門、三千石堀丹右衛門、三

内千石 松野外記、轉都三千石吶千石遠坂關

内、帽配四千石清水數馬、三千石尾藤助次郎、

三千石氏家甚左衞門、三千石朽木内匠、五千石

沼田勘解由、五千石大木彌助、三千石有吉萬之

丞、三千六百石松井求馬、四千五百石柏原新左

衙門、三千石坂崎兵庫、

一千石已上千七百石郡夷則、千五百石福田源左衛

門、千俵長岡與三郎、千五百石志水孫七郎、千

石楯岡亥一郎、千石下津久馬、千三百石長岡岩

之助、千五百石松下久兵衛、千二百石志水九左

衛門、千三百石小笠原彥左衛門、千石續彈右衛

門、千石津田三十郎、千石堀次郡右衙門、千九

百石片山典膳、千石住江甚石衙門、千八百石澤

村宇右衛門、千五百石三宅英殿、千百五十石

田彌一右衛門、千石中根尖兵衛、千二百石出田

作左衛門、千二百石奥村安太夫、千石大河原次

郎九郎、千石西山大街、千石牧左學、千石中瀬

助五郎、千九百石松野齋、千五百石松野鼂右衛

門、千三百五十石横山壽七郎、千五百石岩越椿

十郎、千石小坂仙八、千二百石齋藤叉大夫、千

石三野文大夫、千石]田軍助、千五十石寺尾志

摩、千百五十石長谷川久太郎、千四百石山本四

合十一人知行高二萬五千九百石

百石有吉市左衛門、二千八百石藪内藏允、二

百石岩間恰、二千五百石木村萬之助、二千百石

小笠原多宫、二千石田中嘉治馬、

一九二

○松を植る候

竹を植る地は能く乾きたる地應するなり地卑の濕

地には竹の性あ~

日本の中にて美濃尾張紀州近江などの國々上米な

り土地も上國さ聞く此等の米は肥後に而は菊地入

代芦北玉名の内にて坂下内田盆城にて甲佐なこの

地味に類せり此國々の籾を植て見ば能米出来る事

もあらんか然れども江南の橘を江北に植れば枳さ

なる類にもあらん

○竹を植る土地

土地の形象東高西低は早稲上作なり西高東低

は晩稲上作なり南北高は常に上作なり北低く南

高きは下地なり知べし

○上米種子籾

一高百石 此物成三十六石五斗四升三合高三つ

八分玉名郡下關村にて百姓共と相對直所務

○土地見様

○香山知行

安永八年亥七月廿八日極樂寺町より出火千七百九

十八軒燒失夜四時分より暁に至る

井樋は國中にて作事料年々五六十貫目在中割賦に

〇井麺

新堤堀方は費地床年貢米受中村井上納年限後は

法の通三ヶに上納免許

○新堤

一百石高に現高は八十七八石より九十石已上の釣

合なれば割渡すなり

一知行割の時は上知の内六ヶ年已上になる知行所

にて無之ては割方に不成なり

一加増は九里已下十里已上の遠在にては不被渡下

一減知は其人の家筋にて追々加増之節年月近き知

行所之内より上知になる職納になるなり

一新地は根村三里二里より内に一ヶ所其外は城下

より五里已上十里已下なり

家中の面々え新知加増又は減知等の節知行割渡之

◎知行割

○杉檜はさしめよし候は正月下旬より二月中旬迄

の間を吉とする

松を植るは二月の中をさするなり

○百姓出高にて造る橋

旨貞享元年正月より相始る

高札の趣を年々影踏の節町八百姓へよみきけ可申

〇高札讀聞之事

五千四百兩

五兩宛五十四萬石分

四千五十兩

役高一萬石に七十

内

一金九千四百五十兩 但五十四萬石分

文化八年の夏朝鮮の信對馬まで来聘に付公義よ

b脇坂淡路守 檮礙其外御目附御使番對州下向諸

大小各々出金之命有肥後國分

〇朝鮮信使之事

○寛永九年肥後上使 熊本八代の雨城被引渡節之

上使衆板倉内膳正殿仙石大和守殿御代官小林十郎

左衛門殿十一月下旬熊本は米田監物提御受取八代

は有吉頼母受取なり 忠利公十二月五日小倉を

御發駕九日入城し給ふ城番石川主殿頭殿一人は相

知れ不申忠廣公改易已後上使大勢なりが引渡之

節は右三人なら

國役懸一萬石三百兩

此時に陣の橋上の櫓焼る

明和七年閏六月廿五日晝九時分より出火坪井堀ば

火本四百七十六軒西にさして京町赤尾口まで

曆十二年七月八日晝竹部五十人組より出火西に

さして焼失

享保四年四月廿八日藪の内より出火千四百三軒燒

失

坪井廣町の侍屋敷を潰し火よけの為に杉土手迄

東西南北左右廣小路を造らる元禄二年なり此時

に竹部出屋敷出來なり

永五年三月十日坪井竹屋町より出火千二百軒餘

焼失なり

○熊本内大火

三齋公正保二年十二月二日御逝去に付翌三年

源公より御願被成松井佐渡守同年八月十二日依

台命八代之城被引移候事

一長六一中ノ瀬一國町

一佐敷 一小池橋 一内牧

右總在中割賦にて出銀なり

○八代城

一氷川 一三十町

一九〇

右は古来よりの引高なり 御入國の後侍屋敷不

足に付上の通町下の通町の町を引き長六橋外在

地の所に引き方に成りたるを今迎町と云此所の

地床高は相知れ不申候冶屋敷の坪數二十二萬三

右同年閂後慶安四年迄熊本屋敷廻り引高なり

合七百四十四五八斗餘

一百三十七石六斗一升餘

寛永九年 上使衆引渡の節より高外になる熊本

廻り諸屋敷に成る引高なり

一六百七石一斗餘

〇熊本屋敷高

町ニメ四町九反二畝五歩

坪ニメ一萬四千七百六十五坪

北 百十一間

南 八十一間

西 百二十一間三尺

東 百八十七間二尺四寸

◎御花畑坪數之事

豐前宰相殿

元和三年五月廿六日御判

圍籾こ云は暦の年初る同八年七月にて職

を立ちる治世の善政にて凶年に民の肌を救術なり

唐土にては常平倉又は義倉こ云の出来秋に少々

宛民の戸毎に出さしめて此を在中會所の職に

納め置飢民を救ふなり今に至りて連綿せり此に過

たる美事はあらご

「八九

◎圍粄之事

熊本内他田詫摩堺は誰に分りがたし繪圖を以相考

るに御花畑の邊備前坂の塀際の遊より山崎天神の

遊は詫摩の内相見る追廻土手田畑之所河原田開

申て五町手永の内に加り居る其外は何方より何

方と申事不詳高田原邊は代繼元の産子にて彼神の

敷地ご申傳へ九月十五日に神祭あり是を以て考れ

ば本庄手永之内を見るなり

〇曲翰郡堺之事

東西一里南北一里餘出京町構口より大手の城門迄

八百九十一間 長六橋口より右同所迄八百六十二

○熊本内道のり

千四百四十坪餘撫高一石一反の積

在城同國中津へ御隠居江戸一ヶ年越に御父子様御

妙解公は御三男様にて元和七年御家督豐前小倉御

やすからぬ思ひの家は出にけりしかすみはてぬ

柴の庵に

忠興公元和元年より細川さ號し給ふ同七年の春御

隠居法體し給ひ 三齋宗立さ稱し奉る御剃髪江

にて被成たるなり其時の御詠歌

◎御刊物

六百間總廻り此畝九町四反九畝坪に〆二萬八千四

百七十九坪

○水前寺茶屋坪數

一二萬五千石已上五十六石

一二萬石已上二萬五千石迄四十五石

一一萬五千石已上二萬石迄四十石

一一萬石已上一萬五千石迄三十五石

一五千石已上一萬石迄三十石

一五千石已下二十五石

○代官口米

は一人一日二升五合宛之飯米を下さる然るに承應

二年より一人扶持減少せらる

所合三十萬石組織在 事宛行訖可有領知之狀如

豐前國一圓幷豐後國之内國東郡速見郡之内所

公

台徳公 地上5 忠興公ㄆ之證書

秀忠

一慶長五年濃州岐阜開ヶ原の御軍功によって忠興公

ㄆ丹後望改の豐前幷豐後之内二郡被進同十二月廿

六日 忠興公豐前小倉 御入部其節羽柴越中守

奉稱 御官位參議宰相奉稱候事御知行高三十九

萬石内九萬石無役三十萬石役高

肥後少將殿

寛永九年八月四日御判

事宛行訖分領知之狀如件

肥後國十二郡五十一萬九千石幷豐後國之内直入

郡大分海部郡之内二萬餘石都合五十四萬石

紙

一家光公 公より忠利公え證文

一寛永九年十月廿八日忠利公肥後御拜領十二月九日

に熊本御入 三齋様は明る春八代え御入中務太

輔様は刑部様八代に御一所に被成御座候事

上り被成候なり 三鷹様は京吉田に御屋敷有江戸

御往來には御滞留も被成候事

一八

寛永八年三月肥後下向之上使衆出立に付沙汰

上使衆御泊り(書の休所に借り屋を立させ候

へと御意に候鶴崎道筋にはかつて水無之所御座

候由申上候間左様之所には大釜をすへ湯を沸し

○上使

寺社領の数は前に記し置しなり寛永十年二月十日

に國中寺社領を改めらる事を寺社奉行に命ぜらる

改めすみれる上にて先規の旨に任せて寺社の料は

相違なしの命を下さる

右宗像田中兩人も御入國頃の御奉行なり 御意

を奉りすべての御政事を觸流したる面々なり

○寺社領

御郡奉行衆中

宗像清兵衛

二月三日

一當月中に百姓中に差出衆に可被遣候間此儀も庄

屋へ可被申觸候右之旨堅 御意に付可被得其意

候恐々謹言

候得と可申付候氣仕可仕候いさ～か不苦候百姓

迷惑不仕程に斗可申付候由可被申付候御郡奉

御代官少もかまひ申間敷事

右定水夫の儀寛永の初年之極め召仕はる時に

一八七

外に六十人高田助水夫二百五人 關右同

合五百七十二

八反二畝十二步一人二二畝

九十四石九斗六升四合三勺居屋敷赦免畝九町

二千百四十一石三斗七升

作り高

内

一四百九十三人關手永右同

十五石六斗屋敷赦免高畝數一町五反八畝一人

二二畝

作り高

但四百十石五斗七升一合

一七十九人

高田定水夫

に鶴崎の水夫之手常は各別なり則如左

すべて國中惣水夫之事は前に記する通りなり然る

○鶴崎水夫

御入國後寛永十年二月6御國廻被遊候事

へ可被仰付さ奉存候事

下々のみ申候様可申付旨得其意申候是も御奉行

加藤氏有罪而國除るの後寛永九年 妙解公入藩の

後同十年撥地有上使其前檢地の時百姓共隱田又は

能田を否田と唱又は荒地なご 詐り有すしになき

により 妙解公仰出さる箇條を奉りて下に示す其

寛文十二年二月坪井村百姓居屋敷を家中侍屋敷に

渡さるについて百姓へは家立料を給るなり

○億田謡の事前に出たりさいくざる吹

其節の令書を此所に記す

○竹邊出屋敷

田畑二十七町七反入畝餘

〇岩立田

右明和七年寅六月改なり

田畑二十一町五反三畝牧崎村陣の橋本妙寺弓手

一圓なり

○牧崎田

田畑八十一町六反二畝餘坪井村より室園道を限り

西は寺原より打越村の通り道南は寺原より竹邊下

屋敷遊を限る

米反五斗七升五合一勺五才

○坪井田

高反一石二斗五升三勺二才

一右總百姓中に被仰觸候ごさく勿論其段を以て堅

可得其意候上使衆御前は不荒所を荒候様子書出

し又は隠田も有之候に付其段只今之改に百姓中

より書出可申此段曲事なる事に候得共右之儀

は少も御搆ひ無之候條かくし地の物成は庄屋百

姓相談之上能程出候へと此方 不及仰付候左候

はど左様之所は物成何程出し可申庄屋書上

一一瞬御檢地之儀は江戸え被得御意に被遣候間其

段は重而可被仰付條々何時も被仰觸候時書上候

様それくみせたき田地書付庄屋(手前に置

候へと其時もむさとせはきよし申上候へ共御撥

地之剋は御改堅可有之候條内々被得御意候へと

可被申觸候事

一御知行高かくれ候而有之處あまた有之由に付而

高多き前斗明細に書上候へ其役人を被遣御改被

成候間其時田地廣候ば其村中へ過怠さして可申

付由飽田郡へ申付候間十一月に下改いたし届き

々はをしらめ只今念を入申由に候間此段庄

屋可申付候事

文に云

一高瀬町 一大島町 一木葉町 一關町

玉名郡

三月町立

一味取町

元禄入

一同新町

永十五

山本郡

一一濱村町 一町免許

日奈久町 一佐敷町

蘆北郡

一鏡町年貢 一河原町免許

一宮原町 一八代町 一吉本町 同免許

一宇土町 一御領 一高良寛永十五年免許

一小川町 一松橋町 寛永十五年より免許

一隈庄町 一堅志田町 一砥用町 年貢地

宇土

下城

一御舟町 一岩下町 一木山町 一矢部濱町

右之所々年貢地なら

上益城

一室町

地子免許.

年貢町

地なり

一一同岡十年より

寛永町

小島一長須町 一大濱町 一伊倉町

一伊倉町

一内杉町年貢

一吉田新町上に同

一坂梨町

一鶴新町年貢一高森町年貢

陣白丹町一八五

田畝二丁七反六畝十二歩

物成十五石九斗二升五合九四ッ六歩

高三十四石六斗二升一合五勺二才

坪井村の河原田新地と云

〇追廻田

免許

一佐賀關町年貢

年

一久住町免許

一鶴崎町一白丹町年貢一野津原免許

一久住

一宮地町

一馬見原免許

天和元年七月初町立になる

阿蘇郡

一竹迫町年貢

一新町同

一大津町

寛永十五年

一湯町免許 一新町年貢 一隈府年貢

合志郡

右年貢地

町

一廣町

一廣一肥豬町 已上寛永十五年免許

郡奉行さ唱來りしを郡代を改唱父藏奉行銀奉行或

○知行何貫さ云こと太平記時代の知行に五百貫千

貫なさ云知行を記したるあり五百貫は今の五千

石なら千貫は一萬石なり其外推て知べし

〇役名

右球麻天草五ヶ庄を加へ久住野津原鶴崎を除き

たる高なり

高五十六萬三千八百七石一斗七升八合

〇肥後全高

高二萬二千百九十二石三斗二升

○球麻郡 四十五ヶ村

合三石九斗三升六合

一同六斗四合

仁田尾村

一同四斗三升九合五勺

葉木村

一同九斗四升七合

樅木村

久連子村

一同一石七斗六升三合五勺

一高七斗一升三合

椎原村

右三人建長三年三月十三日豊後を逃て五家山白鳥

嶽に潜悪す深草院の御宇なり元禄九年迄四百四十

七年であり

一川尻町

より免許

加藤氏の時寛永十年免許

一高橋町

寛永十五年免許なり

一鹿子木

一郡中治理不治理之事

已上は見聞之爲也

〇國中在町地子免許

鮑田

一塘手道橋手入の精粗

一山川所置の得失

一在役人の心得厚薄

一郡代の指揮届か屈ざるか

一民間の風俗善惡

郡頭を在中巡察さして賓暦の初年より差廻さる其

條目

寶暦六年十一月廢せられ郡代の支配となる明和元

年閏十二月又町奉行を立ちる今に至て不替なり

○郡頭廻在

○高瀬町奉行

は薪奉行なこ云しを藏支配役銀支配役薪支配役さ

唱改る寳暦六年七月なり

一八四

-右大臣宗盛

-小松内大臣重盛

尾張守清房

-三河守經俊

-大夫舜盛

-能登守教經

越前守通盛

|-大夫敦盛

-淡路守清房

-但馬守經正

薩摩守忠度

-修理大夫經盛

-門脇平宰相教盛

|-池大納言頼盛

-大政入道清盛

-刑部卿忠盛

平將軍貞盛

-讃岐守政盛-

左馬守行盛

右衛門督清宗

-緒方兵部實明

-緒方三郎近盛

-緒方記四郎盛幸

-緒方少將盛實-

緒方三郎重盛

緒方五郎實家

緒方次郎左衛門

緒方左馬助實園が聟と成停國を生

右清經平家沒落の時元暦元年豐後に下

緒方市郎停國

-安藝守俊實

|-備中守師房

|-丹後侍從忠房

少將有盛

-左中將清經

|-新三位資盛

-三位中將惟盛

-三河守知度

-本三位中將重衡

兵部少正明

———

武藏守知章

-新中納言知盛寬文十二年切支丹改について寺町八百姓は五人

組を彌定して切支丹宗門にて無之何宗に紛無之不

手取二十石の所追て三十石に成旅給四十石

○五人組初

延實八年正月家中之知行地方を上に召さる俸は

を以て給せらる貞享元年地方は返されしか共

米を以給る事は今に至りて不變なり

新出町は本無之池田手永岩立村之内にて正徳元年

大木夕岸え岩立村の中を屋敷に賜りに付其村の

百姓を出京町口より外に百五間を限り作り出し町並となれり初は村の支配にて出小屋に準じたりしを天明中に議有りて熊本出京町の内に加る

○家中上知

一五萬九千七百四十四町五反九畝十四歩

○新出町

惣庄屋は他邦にてはすべて大庄屋と云當國の事組を手永と云庄屋と云事 妙解公襲封之後がくは改められ事古き書に見へたり其詳は未考

〇田畑

五ヶ庄は八代郡種山手永の内なり無高なり 妙解公閫中寛永十一年巡見の時て此山中に幽栖する事を知め公義に届給ひてより公義の支配なる此郷士緒方藏座の二氏を以て其長とす其先祖は平氏にして壽永元暦の役に平氏敗して海底に沒す其餘族此山中に隱ると云予若年の時或禪刹にて一僧に會す五ヶ庄の人なり其來歴を問答云五ヶ庄

の先は小松内大臣重盛の三男左中將清經西海を通

豊後緒方左馬之介實國の聟となる所産の男を賭

方市郎停國其所傳の系圖之由にて見せし記之

〇五ヶ庄

百二十三ヶ村高二萬千七百六拾八石九斗七升六合

加藤主計頭清正此一郡を以豊後國之内野津原高田

關等の郷を以て替地させらる豊後合二萬百八石五

斗八升五合天草郡の高は元祿十四年評定所に達し

になる國郷帳前なり

審成者は五人組より急と可申出旨其頭々な可巾付

この命なり親類を五人組に入れ申間敷との事元祿

二年十一月達に成元祿の命

○天草郡 肥後國

三萬七千石に相極る宇土侯の別封推恩は此領を以

てし給へり

〇三齋公隱居料

八代蜜柑は献上の果質にていつの頃より始りたる

和寛永十一年進献之事見へたれば 妙解公襲封の

頃より始りたるにや又は加藤氏の時代に始りたる

にや考未暇

○八代蜜柑

江戸下屋敷拝領 眞源公の代寛永二十年増上寺南

の方に下屋敷指上られ翌正保元年甲申代地を給る

龍口は慶長年中江戸詰大名屋敷割の時に 三齋公

拝賜其頃迄は此邊空地なり地形惡き故に加藤主計

頭の屋敷は高き岡にて有つるを其地形を引き龍口

の地形を上げらる白銀は 眞源公拝領之由正保元

年正月同三年四月移徙なん

○江戸屋敷

官職制度考四

一天台宗百十一寺

一眞言宗十八寺

一禪宗百七十九寺

一淨土宗六六寺熊本十二寺郡中

二十九寺熊本百五十寺郡中

三十一寺熊本三十一中居牢下は足輕已下に準す

○總庄屋

一次女中三の間は獨禮已下に準す

一若年寄中﨟頭は平士知行取に準す

一中﨟小姓奥女中は士席に準す

右寺社之内領知寄附の高三千四百二十石餘

○宮女の位階 天明中用人手島角彌上進

一老女は物頭に淮す

大小之証あり

總計八百九十四寺

社六百一社

一兵宗西三百五十寺

一同東百八寺

五十九寺熊本二百九十一寺郡中

二十九寺熊本七十九寺郡中

二十二寺熊本三十八寺郡中

一法華宗六十寺

十五寺

一時宗二寺

十一寺熊本百寺郡中

四寺郡中

◎寺社員數

同武器

は御山内より被渡下候

一年々二千石被渡下作事以帯刀殿引受!汇付材木竹

八代城付米

右は米田助右衛門殿手開を以同六年右同斷

一三十石

〇法成寺領

十二月初從 大守樣被成下候車

右日佐渡殿手開之内記御寄附御書出延寶五年

一三十石 悟真寺 一百石 春光寺

悟眞寺春光寺領

M

川口入申西油博 鰯十分 一 他國賣出馬

右之外二相增候分 清酒 油屋 判屋

一米千七百五十石 延寶七年分

妙應院様御代

問屋 俵物 熊本廻 地子

右品々之外三 七島葮 商札 酒屋 麹屋

一銀百八十二貫九百三十

一米二千五百二十五石 慶安元年分

一同五挺十匁

一月二十張

長柄百一小筒二百挺1 大身鎗五十本

一番筒百挺

諸網 他國釣 336網 唐網

〇一陣笠百蓋

右之分寛文二年二月廿三日佐渡殿八拜領45

一藥二百斤

一長刀五振

一大筒十五匁廿迄 一猩々緋筒袋二十

一刀百腰

一番弓三十張

一位具足三十領

一長柄百本 此稜

一玉藥十荷

本

一三匁

一同二挺四十五匁

一同三埏二十日

一大筒一挺二百

同百五十目

一〇

○知行取惣人數九百八十七人内藏前之知行百六十

一萬千七十一石餘物成五千四百八十石六斗餘寛

政九年の改なり

開地を公に上りて其代に知行を給る事は不容

易開地仕立百姓村立附居地味居り古来より本方

の地同前に有之は其時の議により知行にも直し

下さる事も昔時は有之たるよし今世は其儀なし

〇國中荒地高

○開を知行に直す願の事

右方の大略なり其隠微なる機事は内の職掌

にて其道に入其事を執にあらざれば詳にする事

を得ず然し一つを以て二つを推す時は其道を辨

ど知らざる事や有べからず能不能は心を用る

ご用ひざるとによるべし今大略を記するは予が

微志なり

眞源公の代寛永十八年より正保二年迄は右同割

にて渡さる正保三年より寛文八年迄前三ヶ年の

秋の内下り一ヶ年殘二ヶ年の秋をならし

四つ成にて割り家中に給る寛文五年は土免割

に申付らる

一七九

眞源院樣御代

葺板

漆密柑 荷

野開 茶代紙代 眞編 諸札 竹木

一銀八十六貫二百二十

妙解院様眞源院様妙應院槎御三代

一千三百四十七石 寛永十七年分

野開 實 受藪 御野菜代

〇二ノロ米を賦する始は往時はなし寛文年中迄は

五の口を納めるをつるかけ升を京升に命せら

るにより升の算計變り有により五の口は差止め

三の口になる享保二年江戸龍口の邸燒亡の節僉

議有て三年五年の間二の口上納仰付らる其後

長く納め来れる處橋谷市藏申代官存寄相達候

は二のロ米享保の年五ヶ年と定められ夫を五

ヶ年過候てもやはり免除なくのびぐに上納仰

付らる儀下に信義立不申下の彙受宜しからず候

へば早々御免有たしさ申上る依て免除せらる

三齋公御隠居料高三萬七千三十石の所務也

○小物成

人なり時々少々宛増減有寛政六年改めなり

一米二百七十五石餘

右三稜請藪代米

一錢三十二貫百十八匁餘

一米二千八百七十六石六斗餘

一銀二十八貫八百五十七匁餘

二萬二千三百四十八石一斗

二十六萬二千六百五十四石餘

外二

現米納

願立拂

此銀四百六十五貫四百四匁餘

百六十石 津奈木願代錢納

此錢十一貫四百二十八匁餘

四十一石八斗 雜穀代米

九千七百廿二石銀納

右之內

一米二十九萬四千九百二十六石餘

○文化四年の物成

右之分免帳內引5

一圍粄代米一郡代足高分之手取米

一用心苗床一沼山津無田三割増用心苗粄代

一用宅訟 一在藏床一小庄屋給「五韩宛

中の俸禄に相渡さる

妙解公之代寛永十七年までは土四つ成にて家

○割の事

右今時五割增 5

一中一石二斗 一下一石一斗

一鹽濱上一反三付一石三斗

O鹽納之事 寛文六年極ル

一堆水夫米 右同

一水夫米 同三斗六合六勺

一三ノロ米同三斗宛

一二/口米、物成高十石二二斗宛

〇二ノロ米三ノロ米以出する故に二ノ口三ノ口となり

二ノ口三ノ口と云は二斗三斗の規矩を

右文化七年より受上納になる

一銀百三十五貫目

◎請運上高

右諸色運上

一錢百十三匁

一同百十八貫五百五十一匁餘

一銀二百九十貫九百十八匁餘

右野開運上

一七八

一高一萬三千九十八石七斗一升七合七句七才

右寛永九年上使引渡されえ目録にて現高

一高七十四萬六百四十石四斗四合

肥後之内天草球磨幷五ヶ庄の郷帳なり此村

數百七十三ヶ村

四萬三千九百六十五石七斗餘

外に高

國

二萬百八石五斗餘,

豐後五十一萬九千八百九十一石四斗餘 肥後國

内

一五十四萬石

肥後國郷高

已上郡間の取計常時郡局の取調と成る内の手

數職掌は惣庄屋の職掌に成郡間廢して郡局の職

掌と成受発已來檢見の法寛永已來の法廢す其利

害得失管見を以て議し難し

年々調出したるを夫々しらべ勘定所へ達する事

一赦免開立山讓渡の節割印書仕直し手數の事

一家中地子内作證年貢米小前帳手永限代官より

右費地分此印▵三ヶ一上納三ヶ二免許也

一七七

一⊿新井手 新川<新堤 新道塘下

○発帳内引ニテ上納免許

三十萬九千二百六十二石餘 給知

四十三萬七千八十石餘 䶵納

○藏納給地高

三十三萬五千四百七十石一斗六升九合四句

高四ッ六歩八朱三厘三弗

七十一萬六千三百五十一石五斗三升五合二苟

九才

物成

一高二千百三十三石八斗五升四合三勺九才

右社領幷別莊屋敷道床川床の引高なり

残り

一高三萬五千二百五十三石七斗三升二合九才

右宇土知行内分

合七十五萬三千七百三十九石一斗二升一合七句

七才

内

右上使引渡已後新地出高分現高=加ル

一知行取病死暇閉門の節知行押幷開立山押差紙又

一新知加祿知行割一件書證の添目錄内檢しらべな

カキダシ

一右同算用帳の儀夫々しらべ吟味方へ仕向るなり

一諸郡見圖帳名寄帳の儀内のしらべなり

一右同正月十一日目錄しらべの事

一年貢皆濟目錄は代官手永限の帳面村々小前帳共

に相添差出たるを吟味方へ仕向郡間え控を取置

相しらべるなり

一諸郡開地徳米野開上り開畝物類の徳米銀積り帳

百五十冊内檢役より差出すをしらべるなり

一代官付札算用の證文しらべ此又郡頭の印形を取

右同斷

一右同秋免帳數百冊一々讀合清算を入外に代官よ

調出したるを對讀郡頭の印を受算用局に納

む此一ヶ年の總計なり

錄しらべ立仰渡され相濟又々受目錄仕立るなり

一右同田畑荒地之内起畝改の帳面毎年内檢役より

差出たるをしらべ一紙帳面相しらべる事手數な

一水夫二ノロ米根帳二百冊引合清算受方目錄清算

一年貢米日々所々の納める高達たるをしらべ

遲滞するを催促する事

一赦免開立山帳の一件

一圍籾其外公膳の用大小麥大小豆飼鳥用の籾粟稗
の類在中割賦之事
一國中處々橋かけ等入用の銀馬飼料代國方江戸荒
仕子郡限出夫柄の割且臨時出米銀割賦之事
一天守方舟方用の雞の尾羽賦配の事
一所々用の澁掃除方川尻作事所舟方普請方其外鶴
崎用水竹木繩シュロなわの類割賦之事
一年始門松諸飾物家中寺社の門松共にしらべなり
一熊本作事所の用木材竹 外家萱古猫伏等郡中割
賦品々之事
一山方算用一件幷熊本廻地子米銀取立算用帳共に
しらべ郡頭印を取算用所に納るなり
しらべ
一公義へ差上らる國中人別改年々影蹈一紙帳面等
跡目知行引渡差紙起畝引高差紙一件のしらべ且
隱居家督之面々知行所沙汰之事

一反當りと云事 反當りと云は譬へば此田畑一反に
何斗之を以上納仰付らる~と云事なり
一土反と云事 土反と云は在中の言ならわしなれご
も今は官府の通言となるたさへば此田畑共に反に
何斗何升有之たると云事なり田なれは反にためし
て一石五斗又は二石と有るだけを年貢と定りた
右内に惣庄屋より出すなら
一右同拔下見帳
一損引積立帳
一損引德揃帳
一早中晩土免通畝懸帳
一切一紙帳
一早中晩田下見帳
一損引之節高分帳
一田畑作毛色付人別小前帳幷村々一紙
一五ヶ年目(荒地改村々小前帳
一大小豆青葉改小前帳
一損引見積一紙帳

一村々土免通假受帳

一右同田畑諸徳懸の一件内の職掌なり

一右同諸色付帳大概四千六百冊程代官より毎年差

出したるを秋に至り損引仰付らる内検より手永

限菟下積帳差出たるを内より夫々引合せ伺目

一七五

一稟納さ給知新地と共に上地配又は引畝起畝等

有之においては高物成田畑反別退轉せざる爲に

手永反別を改めいたすなり此又内の掌る所な

クラウ

一土は毎春手札を受合相濟たる上一紙の目録幷

手永限の小前帳共に百七十餘冊惣庄屋より仕出

たるを内よりしらべるなり此を春土割と云

一発極りて年貢納に至給知を分ちて地高の差引内

検の取調なり

一方手数の事

一荒地高 實暦中地撫の時荒地を改めて記する所の

高一萬千百七十一石餘物成五千四百八十石餘

たり

一慶安元年の 此頃まではすべて地方を渡されて

自己の收納所務なり故に高物成の事詳らかならず

共は四ッ九朱九厘と云事慶安の簿書に見へ

たるを荒地起畝物米と云〇永荒川成塘下に成荒

たる所を紛らかし荒地餘計に有様に姦民の取なす

精々相糺し有筋に此節改めらる其畝高共に帳面

に記し年々に起き方を改む永荒川床塘下等にてい

かにも起き方無之見ゆるは一毛畝物空地開野開等

を替地に出さしめ荒地起方に命ぜらる

一上納免除の事

一年檢地已後百八十年の後暦の末より明和

の中迄十三年を歷て地あり て改め出す此

畝物上納に申付る夫を唱て新出畝物と云郡間納

めたりしを四千石を分ち本方に上納す此米を以て

地引合に出役せし人々の造作料飯米とするなり

荒地をも改め畝高共に帳面に記して年季受開き明

候様に申付る開き明け作りになりて年貢上納に

先 云

「隱地之事 恩田附

此地方空原平野を開き田畑にいか

一永荒の事 永荒さは寛永地の時より洪水荒川床

山崩堤床塘等は永荒になりて荒地起畝にならず此

を永荒さ云なり

國家の愛なるまさに大息すべし

百姓共無年貢にて私に作て押隠し置を云此を寛

永十一村々免受目錄

妙解公入藩し給ひしより発は年々變らざりしを安

永三年午七月に此法を改めらる其詳なる事は郡局

の大典繁冗なれば今略之

一発方帳村々より仕出分

一春秋免帳

一郡中一紙目錄

一方潤色の事苑と云は元來田畑の高物成を定め此程は公に納め其餘何程は百姓にして取らしむると云より発方と云今は賦歛の惣名とは成れり予郡政要覧に田賦歛法を辨する事詳らかなり併せ見て我藩賦歛法を知るべし

下々野開畑高二十石開地に仰

地筒の者開地の事

付らる此を新地鐵砲の者開き渡り地と云

一増水夫米幷二ノ口米右同九年

此下り米と云は損引なく土免通りの年貢を上納する者には二歩通り下さるなり

一土免二歩下り米右同年

一反懸米同六年右同

一種子籾利米暦四年に免除せらる

一七四

一五ヶ條

一諸出銀之事 此銀高を付割賦之儀は名寄帳面より

書ぬき高の内より引高を引銀當り何程と申儀を記

小百姓共疑なき様にいたすなり

一諸公役 右は名寄帳面の高を書ぬき右の高より引

高を引高役をまとめ一人前の出夫を兼てきわめお

き相勤る不同無き爲の仕法なり

右前々より今以其分に而沙汰あり

下は一斗五升

一豊後の内も右同出高は其村々田畑分米不同あるに

付其村々の元畑分米を以差引出高相定るなり

一山畑一反分米 三斗五升〇中二斗五升

一本田畑には下々の高定無之故に出高の儀上中下三

だんの吟味を以出高極るなり

右畑を田にいたす出高のさし引此の如し但其

田所により上中下有之分は其坪々の地位次第に

上田にいたす地味は其位次第に高を定元畑上中

下の高定を以さし引いたし出高の吟味相定るな

此畑一反同五斗同六斗出高

逐年民の腴は姦吏の為に征せられ村里の荒亡

一七三

アフラ

一諸公役は高相當贔負無き様いたすべし

一諸出銀は不直の儀なき様にいたすべし

右五ヶ條村役人會所役人の廉直を糺す事内換之

職なり享和三年より此官廢す會所役人村役人任

せにすればいか程の私曲あらん小百姓共は無筆

無算の者多し愚なる者なればたさへば五合七合

又は二升三升二分三分乃至五分七分づきの割増

を出さしむる共去年の上納に引合勺才分厘を引

糺して納むるやふの者は一村に一人も有か無き

かなり然れば夫だけの割増は一村積りて斗石さ

なり一手永積て十石百石となる一郡二郡の積て

は千石二千石さなる此姦曲の會所村役人の所得

とするなり上よりは少々にても下の傷みとなら

ぬ様仁恵の政を施し給ふを右の如くするは罪死

を免さるべし糺さずんば有べからず然れども

其官廢しつれば今に至りていかんともしがたし

一発割帳 此帳のしらべは廉直にいたすべし

一取立庭帳此帳は明白にいたすべし

一緒差引は正直にいたすべし

右國中の高定にして撫地は先代加藤家の時の検地

帳の残りたるを本據さし 妙解公の御世に國中田

畑地撫しさなし給ひ其村々の惣高を有畝に割付け

高を定め故に村制に高定め同じからず本田畑は

撫地を以て沙汰ありしなり

下同シ

一同上畑 同八斗

一同中畑 同七斗

一下畑 同五斗

同一石一斗

一下田一反

同一石二斗

一中田一反

分米一石三斗份米と云は後世高と云なり天正慶長

頃の帳を閲するに昔分米と記したり

一本上田一反

〇田畑高定

反赦免開

右新地郡方開畝物共=

一田畑三千四百五十町餘

此米六百二十石餘

畝合七萬二千二十町餘

米合四千九百十石餘

三一升八合

一下田一反 同一石一斗

此本畑一反同七斗同五斗出高

○畑成田出高

此本畑一反分米八斗差引五斗出高

一上田一反 分米一石三斗

一中田一反 分米一石二斗

付に成

右寛永十年に國中幷豊後之内領分の分は如此申

一下々畑一反, 同 三斗

一下畑一反

同 五斗

一中畑一反

同 七斗

一上畑一反

右同

一下々田一反

石

同

一下田一反

一石一斗

同

一中田一反

同 一石二斗

分米一一上田一反

石三斗 上々ム無

○新地高定

一豊後國の内の領分は田畑高定の儀は其村々同じか

らず故に村々下帳面の村々に傅りたるを本據さし

沙汰有しなり

一七二

一内引高之事右往昔公廨井手床其外費地にも免帳

村高之内に結びこみ其内より物成引くると見ゆれ

共地引合已後は外高引になりたる故帳面の混亂さ

なるにより却而費地分の引高は免帳内外に申付ら

る尤諸夫役共に懸らぬなり且引高さ云事給地の内

にも有之處若後年地方返し被給時右引高分の物成

諸夫役等は如何して辨に相成可申やさ已前の事共

換閲するに井手料米等は給人々辨へられたると相

見るなり高役は魏の事にて残高にて割合せ申たる

と見ゆるなり泰勝寺野屋敷を神水村に下さる處太

田小右衛門内藤彦大夫知行所の内に加り居るに付

其分は兩人に代地を渡し下さると見たり井手料米

公廨井手床 道下 寺院屋敷等其外諸費地方の

高物成菟方帳村高に結び入れず高引にして物成は

勿論諸公役共にか~り不申事

ハヤシキ

一外引高之事 右古書簿帳を閲するに永川床

る

追々仕立に成るを當時古新地と申て本方に納る

なり延寶六年より郡方新地を仕立てになる此を新

地と唱故已前の新地を古新地と唱るより二品さな

一七一

反二一升二合宛

此米五百八十石

一同千九百七十町餘

此米三千七百十石餘 反六合宛

一田畑畝數六萬三千五百六十町餘

事は不都合なり自然と本方の衰微となる已來新地

開發の儀無用に被成との事元文二年 仰出さる

一反懸米は先年江戸屋敷類焼せる故白銀作事料の爲

に在中に歛せらる寶暦元年迄年数なれども成就に

不成故給地反懸半方新地野開は今迄之通赦免開は

五割増其數量

に力を用ひず新規に海邊などに開を仕立る

一山野海邊を開事都て重んする所本方の荒地を焚き

一千石水夫米 右浦々水夫を召仕るに三口づ~一口

は其身二口は妻子從類に給る此を水夫跡扶持と云

年々千石づ~國中より割り出す物成百石に三石六

升六合あて出すなり寛文八年十月改め征す

の儀は自身地方の為の水たる故に給人より辨に

なるなり如此なれば様子次第に給人辨へ又代地を

下さる給人望によりては現米を以て下さるも有な

見圖帳は田畑の地位上中下定り坪々の肩に何枚

くさ枚数を記し坪々の下に通り番を記し

其下に受持百姓の名を記し肩に藏納給地夫々各

目を記すを云なり

一見圖帳 右は 妙解公封の翌年臉地あり見圖帳

さて出来たり此時新に出来たるにあらず加藤氏よ

用ひ来るを掩地之上にて改め作りて恩田隱田を

改めるさる此れ一村を限りて調進す此帳簿今に

至るまで郡局の大典なり田畑の高物成畝數地主地

主一村を限り總計して公枕の数を記す一村積て一

郷となる鄉積りて縣となる縣積りて郡となる

りて一國の高成此其不易の典なりゆるがせにす

べからず

一水夫米は物成百石に三石六升宛の征なり田畑の間

竿六尺三寸を用

一綿一俵代米一石

一太米 米一升 一升二合

一升 二升五合

米黍

一蕎麥

二升宛

米一升

合

三升五一种

米一升

一作林主を記す作主は年々變すればなり此村正のあ

すかる所妙解公襲封已延寶五年まで新地永荒開出高等の

但一助分の畝数幾坪にても見圖帳よりうつし坪

に其地位の高を書記と田畑の高を合せ物懸出し

寄帳は土免割

土免割帳

根帳たるにより其坪一切

帳の根元なり

の事は委細に記して一紙小前帳共に発限にし

らへるなり見圖帳名寄帳は最田地樞要の帳面内

換以て貴重する帳也父曰名寄帳は明白に改めお

き夫より帳を仕立念を入出米を書入人別の年

貢上納の石高合勺才まで違無様に清算を入内検

より手札を渡し手札前の米高を上納させ百姓の

疑なき様にしたる者なり右寶暦引合の時改る

右前にも出たり

一古新地の事

なり此帳を詳に辨せざれば此れ方にて

民の利害にかくる重き帳なり田畑の上中下の地位

を記し畝數高物成作り主の小前を記し百姓共

無筆無算の者たり共身前の年貢納め高を能く覺え

居せ秋に至り納るなり此帳を以百姓の年貢を規矩

さするなり寶暦年地引合の時に改る

シャウヤ

一名寄帳 右は一村限り年貢帳面を新にして田畑の

一七〇

一居畝物 右一年畝物歳月久奄にして本方と同前定

米に成る所おし

米と云

一大豆

一上畝物 右本方新地畑等の水理宜しき所を開き田

作になし田の年貢上納より床畑物成を引餘を上徳

開きあけ高を持たるを云納り右に同

一山方新地 右は公藪受藪の内を百姓願て公許の上

間納になる今小物成に納

一郡方新地 右古新地同前延寶八年已後開たるを郡一荏子

此五品は本方に納るなり

一粟

田作にしたると云年月久しく高を持たるを云

一本方 一古新地 一永荒 一寄下 一出高

一出高 右本方新地床畑を作にいたし上畝物

上畝物と云は畑を

但本方の内に寄下添と申地方あれ共何の所より

何の所をさして申と云事を辨せす

しかれごも其事詳ならず本畝の内に加り一緒は二

十歩結は十歩元祿八年の比より一統崩して田地

に加る暦七年吟味に成古来より寄下有之高外に

成居たるを高に加へたると見ゆれごも歳月邈さし

其由を詳にせす

米一升. 二升

一小麥 米一升

一一六九

一野稲は同等なり

一升五合

米一升 中一升 合

下一升五合

上一升三合

一大麥

四合

升升四合

大角豆

升三合

一升五合

1

小豆

米一升

八九升

-

升三合

同四

一

升二合

下八合

一胡麻

二升升 合合升同米

升 升升升

下中上

一野開 右芝野を焚きあけ運上銀本方郡方共に納む

並には銀六六分宛なり地悪しき所は又て納む

一田成畑 右本方新地共水利しく年々早損して登

らす如此は公許を得て畑となす此を田成畑と云

一雑穀替口

右空間の土地をひらき其年の出来次第

一一年畝物

年貢極るを云一毛畝物とも云なり

なり一升二合野開に二合宛歛す寶暦六年免除なり

反懸と云は田畑一反に何升さて極め出米をする

一反懸米之事

但百姓共自然不同の頭ちをなし人畜地方相當な

る事なく零落の百姓か又は越し高多く受持ては

双方彌以相濟かたき事ゆへに法式の通り田畑上

中下位~共に正直に分ち候様に内検より糺すな

右之通にて換見向春秋手札渡し反別下発下小

前帳等の儀内検の取調なり

上知にも家中の知行上り知になり納りと成る又

相續の節減知になると云配地は知行を新に給り

又は加増知等を云譬へば三百石村高之四百石配知 一二の日米 一増水夫米

に給るになれば惣庄屋より百石宛三ッに引わけ百

石相當の高人畜の常否を糺し總庄屋より百石組三

ッ夫(岡を以配地を極る節内撥立會來る右配地

一紙取分の儀畝高相當仕來り米反當各別増減無之

様に奮法の通内檢より分ける事なり

一上知配地之事

の様にいたす此境において上の損益にか~り

下の利害にもか~るなり

一寄下右先代加藤氏の時より有之たる由申傳へたり

一永荒開は往昔より極りたる堤井手下川に成山崩な

にて潰滅したる坪々久しくあれ地にて有しを漸

々手を入中古より追々高を持たるを古新地と同し

事なり

一方潤色安永三年天明中兩度なり延寶八年巳上を

古新地と云其已後開き明たる地を新地と云也

一地引合寶暦六年より始り明和八年に終る

一本方と云は臓に納る地方幷給知を云なり叉古新地

さ云有是は昔より極りたる畝の外に空地海川干出

古池堤等の潰れたる所を開くを云本方に納るなり

一土免極延寶年中

一飼料米代は三十貫目在中割賦なり

右二稜は享保十五年免除と成

右小物成納

一各別畝物米 一増水夫米 一馬恩米 一年賦米

一郡方開

一年貢米 一反懸作事料 是城郭の作事に用

右本方に納

一

色付は六月朔日より相改秋に至り極の根帳に一

一色付帳之事

此は毎年惣庄屋見分仕開明る畝方は其年より五

ヶ年の間無免に仰付らる六ヶ年目より全上納申付

然れども惣庄屋より改め畝指て無之内検より改
の節五年目!~六七月の比命あり右改の節餘計の
起畝有之分は地味大抵に有は見分向に察討いた
前年の改起畝に願出させ其を一紙の帳面にして
内検より上達す夫だけは公の所務増すなり受免已
後内換廢官となる此等の改典となり公の損な
事恐るべき事なり識せずんば有べからず

一荒地改之事

此青葉改云は五六月にかけ見圀帳より紅したる
所の小前帳を以五ヶ村の内竈常り一ヶ村にて總庄
屋を五ヶ村庄屋共立合見分いたし帳面に付立る
但總百姓受持の畝方一圓に有之ヶ所間には畔を
潰し勝手を斗見圖帳の根源を失ひ候様成儀は其
際目を正し經界を全くし置く様に青葉見分之節
内検より紅すなり此畑此田には種粟其外何々
作り付有と云事を改め帳面に書立るな
は彌以委しく相紅し村役人をも撫しの事申聞惣庄

屋え問合惣庄屋より糺たる已後人別小積帳を以莵

すりの者受のかせ、いかにもうけのきがたき

者は損引に出す様に手をつめ吟味をとくる故に強

見向にて多くの損高減し事により一村も二村も受

あるや

秋と申は秋に至り作毛登の時候に相成り候へば

何も出在にて村々毛上の次第を見分いたし此は土

通り是は損引との差別なく一下ヶ各限委しく

見分いたし置免極の儀は所作の者願出る時に損

高を極むる事惣庄屋よりいたす村々よりは法のこ

ふり帳面を差出す内検在中村々を廻り内升を入小

積帳よりしらへ立になる損高をぬき色付帳面内換

に出す時内のみこみより損高ふさくみゆれば總

庄屋へ察討いたす減つめになり損引坪に下見帳を

以見分の上一村にて毛上馴合中分の畝方又は上中

下三段にも内升を入間には下見不同有之右之村方

一秋免之事

色品は申に及ばず田畑屋しき作りまで夫々相改め

帳面仕立郡局に相達す見圖帳名寄帳より取出すな

新道 出高床 水車床 荒地床 上畝物床

右荒地床之内畑起畝物畝起にもなり又荒地年季受

反別下坪に願の事年限ゑさを記し當毛荒皆無畝作

替等一切地面の變化したるを其節々見圖帳に小

書し相糺す事内換の職掌にて印形を用の土割に

土割と申は百姓共人別田畑を作り高當物成何

程莬幾つ何歩幷作德種子米の利品に相加都合何

程上納致せば皆濟と申事小百姓末々迄書付相渡

し菟割帳をさくこよみきかせ銘々判形を爲仕土

苑の時より如此村々銘々の上納高を申きけ置き

候へば初春より當年の上納前何程と銘々覺悟仕

居ずいぶん精を出し可申事寛文八年の分なり

一諸床年貢とは 新屋敷 新井手 新堤

用置百姓名前新面有無相記自然空體に名を出し

悪地斗りを片落に受持せ不申不正の取計いたさぬ

様に精々内より吟味いたす事職掌なり總體免方

の事は春土免割帳清算相すみ居不申ては年分仕出

の諸帳面符合いたさず庭帳にいたり百姓共人別上

納過不足になり疑を生じ不申也各別念を入れる事

内撫の職掌なん

右跡目を記し上に兄弟を記し名替等は勿論の儀

也一坪の内枚數増減すれば法の一早田 一太米 一中田 一晩田

右悉皆色品付を帳面に記し張紙を用置申候是又内

掩印形を用ひ来る地面變化すれば見圖帳幷坪附帳

は地面見分の節仕立るなり

此帳は年貢庭帳さて割帳の面一人前上納高取立

の高を菁記し合せ高の内より藏拂又給人扶持方諸

上納共に右取立の一紙を差引いたし百姓共能承

居候へば上納分は棄て存し居る爲の帳面なり

一靑葉改之事

一庭帳

一青至りては譬は一助受持の畝方二助にゆつれは質地

又は讓地高土作に至るまで付送りを以て入替いか

なり

葉

通付札にて直し是

又内外夫々の印を押坪分りを願出し者は地

の勝肥片寄不申様に規矩を以て分ち地面之見圖

帳と名寄帳と符合する様にしらへ来るなり此又免

方根元の帳面にて聊手のぬけぬ様にする手ぬ

けすれば地面のにらみ合なく混亂す至て重き帳面

一六六

エト

但内檢見込の坪の近所にて一反巳上の大坪の内

にて上毛三錢中毛三錢下毛三錢九歩のを合て

何程の割起し右の通例双方起にて撫何割と定

夫をニッに分け其半分を起釈に極めるなり譬は

内檢見込坪にて十割起百姓の見込坪にて四割起

候へば合十四割を二ッに分け七ッ割の起と定め
申なり但百姓の見込坪各別不都合にあり又は所
により内検見込の近邊にて相應之毛上無之又
は大坪無之ば時宜に随ひ角違又は小坪にても見
立かへ候様に土地内検方郡代惣庄屋へ議申筈
一百姓見込の坪例
其人に傳法なり受税より已來内検後廢した
れば数十年の後に至らば例の歛法絶て知る人無
に至り其法を求んとすと云とも木に縁て魚を求
の患ありて由しなかるべし遺憾と云べし予國の
爲に此を憂さ云へごも其職に有らざれば詳に識
る事を得ず然と雖も其老官の物語と老圃の傳へ
る所見聞え其大略を記して世に遺す身後若
見歛法の奮復もあらば萬一の補とも成んかと愚
かなる筆に留つ~かくは記しぬ
此を帳に記す此帳は百姓人別割諸取立米踏出土臺
の帳面冬春に至地方へ入替讓地質地高の入替諸開

の出入等に至るまでぬきはこを以相らへ見圖帳

各寄帳共にはり紙を以て付を記し置内換印形を

一六五

一春土免割之事

反別下さ云は其村所水早等にて年々得土不申損

引下り米有之所は年~難儀に及によりて願により

年限を以て反別にたさへば一石の土を九斗上納

に下ヶ方に成る其ゆるみを以て村成立されば本の

一石に反るなり

一反別下さ云事

一例籾斗立候節間には摺斗棒を弔うる所もありつれ

共向後すべて割斗棒を用うべき旨命ぜらる

一徳悪を仕か~り候已前さへば来る幾日より何村

より徳懸幾日頃何村までを彩るとの儀内検より書

付を以郡代へ達す郡代より村々へ沙汰に及び其内

に下夕見帳申物を揃へ置候へご其日限期の如

くならず怠る村々は損引は叶はす土通さ沙汰に

及ぶなり

なり

○損引

右徳悪さは秋に至り田畑に登りたる米穀を検見

初田賦にか〜りたる役人立會見分して公の歛數

を極りたる通りに百姓共受合て上納するを土菟受

除と云

○徳懸

を哀愍し風俗をして淳漓ならしめん事肝要なり當國

郡政の歴は寛永九年 妙解公封の後同十年より

國中檢地ありて郡政の大綱を議定し給ひてより已來

連綿して今に至れり其大綱は變革なしといへごも時

の勢によりて郡政の改りし事幾ばくならん延寶年中

に土菟極天和に上知暦に地引合輪純享保に請免

の議ありて止む安永に免方潤色天明に同潤色享和に

請免檢見の法に延賓の比石見さ云あり其後五割の作

法三割の作徳と云も時々の變法なりさいへごも寬

永巳の法を紀綱として大同小異なりしを享和に至

て請免となりて寛永已來二百年の檢見の法此時に

廢絶するは一大なり後年の利害得失豫して論難

〈管見の及ぶ所にあらず

アツク

案に此のための法は古来より内検の役に記憶

し來り年々の取計らひにて書傳に有事にあらず

但し把ためし其外の例仕法古来より仕来りし通

り何割起き

タメン

○損引となる村々は徳悪を極る時に内見込の通に

百姓肯て其旨を得ざればためしをいたすなら是迄

は内検見込の坪をためしたるを何後は左の如し

一内検見二三の坪ためし

〇土は此畑には上納未何石何斗と極りたる通り

上納いたすを土免と云年には其通り上納成かた

き故損を引と云て其田有だけの石高に五割の作徳

を百姓に給るたこへば籾一石五斗のならば五斗

百姓に給り一石は公の納となるを云

大損引と云は水損損風損虫入等の外さま!~天

災にて作毛登らず土通り受のきかたき時は損引

を願ふ其時に見を初夫の役人立曽て登不登

を改め有實をためし五公五民とか四公六民とかを

さため極る是を損引と云德懸損引の兩法受免已後

絕たり内換の官廢す其法予詳にせずと云共思ふ子

細ありて大略を記す 米力

一六四

右荒仕子は年々二月に交替して町在之者より使

之譜代の者に非ず一季なり

一厩の者二百三十人小頭十人語

荒仕子四百餘人

三石一口

一六石一口

るは日を送び用に盆すなり 泰山之雷は穿」石彈極

之統斷」幹水非石之鑽 索非木之鋸|漸々磨使」之

然也とあれば物の漸磨は善にして善にす～み惡にし

ては悪をます恐るべき事也又力田を勤めて孝悌を敢

へ忠信を誘ふ事父母の子を導く如く怠惰を戒め勉勵

し善を賞し惡を罰し疾病を扶持し死を吊ひ鰥寡孤獨

一六三

ツキキ

ノコギリ

シタ

夫れ民は國の本なり本固ければ安しさ云へり本を固

ふするは民の力を強くするにあり民を富す術は外な

し孟子曰易其田疇薄其稅斂民可」使」富也管子又

不言乎衣食足而禮節をしり倉廩實而榮辱を知るこ古

今の通義なり然れ共民富て之を制するに法令嚴なら

ざれば民犯安民犯して法令行れざれば奢侈に至

奢の積りは貧になる貧の民は遊惰に流る其蔽農力

薄く郡村衰微し人畜減損田畑曠蕪して租稅の障さ

なり貸借救恤訴訟の事起りて郡政の累となる一村積
めて一郷となる一郷積て一郡に係り漸を以ては一國
の總計に係る事さして目には見へざれ共耗さな
郡政部幷田賦
官職制度考三
一十石三口
歩幷役人之禄
一十石四口
一十三石五口
獨禮の禄
中小口
の禄
又十石
一二十石五叔研压石
中小姓の
切米取L中小姓歩使番幷同列獨禮歩中小姓并同列
諸役人段足輕中間之等級切米棣十石高L五石旅給
は増加あり寛政年定

切米取俸禄

百石高に四口宛一

口诂一斗五升也寛政年中定也

ロクニンフチ

一江戸京大坂長崎在番交番体百石高三石宛増

一在宅の侍は高百二十石以上は二石減百石已下は

一石減

一八十五石以下三十石迄は割増あ

一百三十石は右同二十石割増あり

一百石は三十二石

一百八十石は右同二十二石

一百五十石は右同二十五石

一三百石已下二百石迄日右同廿一石

一月俸百石は六口二百石已上は一十五石五口四姓使番三石掃除人三十人小頭三人四石二口

一半

一一七石二口

草履取六人

鎚持廿三人

一七五二口

駕舁の者四十五人小頭六人設

一八石二

外汇手廻小頭八人入石二口

一四石二口 留守居右同廿六人小人八十七人

一畠地廿石高

新地鐵砲の者二百四十人

長柄粗四百人小頭十二人誌

一五石一口

一七石二口

舁組三十二人内小頭右同

一七石二口

持筒組十七人内小頭二人

飛脚番十五人小頭二一八石二口

人三口

小頭八十六人

一拾石二口

介様足輕千二十二人

側足輕百十二人吶小

一拾石三口

頭

諸組の定祿

一三石二口一口一口半

一六石三口二口 足輕格、祿足輕渡十石二口

一五石二口一口 五石二口已下は中間格の祿

一四石二口二口半

一七石三口二口

右同

一八石三口二

右役人の祿

一六二

田原口

杖立

萩原口

下明里口

同

岳湯口

同

志屋口

黑淵口

中湯田口

小國北里

同馬塲鄉十里餘

湯田口

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

一高百石二十石

使に達す又國中租賦の文化三年請免已來撫して

三ッ八歩とす士の禄如左

本ノマ

四ッ物成と云百石に四十石の規矩なれ共是大数に

して此かねに至らず豊凶によって増減ありて巡見

禄俸 歳俸月

常藩之事四方境内廣洪にして東南北の三方は皆陸

地續き西一方は海濱なり薩州堺より筑後堺迄四十

九里他邦より出入の口々右の如く數十ヶ所にて國

禁の貨物出入嚴なりと云さも不行出入姦商の爲

みたりなり議せずんば有べからず

侍二十一人歩者六十人足輕百四十一人

合七十七所

大關三十八所

中關十八所

上關二十一所

文化六年始取建

同二人

白嵩川口

鶴崎志村,内

椛山口

河野口

南郷菅尾

鳳来口

同

穴川口

半尺口

長山口

同

竹野牧口

菊池郡河原

三楠木口

中津原

同

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同二人

同野尻

永野口

同二人

河原口

同二人

阿蘇郡久住

二田水 口

同二人

同

小地野口

同二人

檜木野口

同二人

豐後直入郡

久住口

同二人

同

山中口

同二人

小國馬塲鄉

宇土口

同二人

同七日市鄉下老云二極也

同二人

北里口

六〇

境﨑

足輕四人

玉名郡筑後界

下關陸口

津口 同四人

八代野津

植柳 浦 同四人

八代高田

小川| 川口 同四人

上益城郡河入口

下り松 同 同四人

同松山上

戸口 同 歩入者三人

戸馳 同 同三人

|瀬戸口 浦 同三人

宇土郡浦

同 同四人

同池田

小島

一五九

同二人

星原口

山鹿郡中村筑後界

伊野口

同二人

菊池郡河原

柏木口

同二人

同

|桃田口

同二人

山鹿郡中村筑後界

茂田井

同二人

矢谷

同二人

山鹿郡中村筑後界

須口

同 同三人

同遠見

久木野 同 同二人

石坂口 郡筒足輕二人宛五日交番

芦北郡薩州界

和仁口| 陸口 步之者二人

北方筑後界南關和仁村九里半

中關陸口

袋浦| 海濱 同一人同三人

同芦北水俣二十五里

陣町廻二人

水俣

同一人同三人

同陣内村二十三里

津奈木 同 一人同三人

同津奈木村1内二十一里

同一人同三元

斗石

同十九里

海浦

同一人同三人

小佐敷小田浦村2 内十七里

田浦 同 同一人 天

同郡之内十六里

町廻二人

日奈久 同

同一人同三人

同芦北郡十三里

郡浦」 同 同一人同三人

同郡網田村九里

近津」 同 同四人

同五町河内村

高橋

同 同四人

同郡池田

河尻 川口 同四人

飽田郡鐵塘二町村

中關川口湊口

松葉口 同 同二人

同玉名郡荒尾筑後界

同 同二人

生味口

同北方菊池郡河原九里

【川地口 同 同二人

同野尻村1界十五里

岩神口 同 同二人

同日田界阿蘇郡南々野尻草夕部村十四里半

岩本口 同 同二人

南方久麻界芦北郡佐敷野瀬村廿一里

久重口 陸口 同 二天

北方南闕九里半長田村1内

一五八

交番す

坂梨 ^ 同一人 足輕四人

阿蘇組之内

同方豐後入會冫地阿蘇郡坂梨村

馬見原 同 同一人步之者三人

城下東方日向堺阿蘇郡南鄉菅尾大野村

口 同 同一人同四人

同南方薩州堺芦北郡水俣陣内村

南關 陸口 丶侍一人足輕六人

都城19北筑後境玉名郡南關十一里

上關

國境陸口湊口川口

國家嘉吉の時叉雨社祭禮に此猿樂の式あり座

米六拾石を給す

猿樂師の長なり新座本座の兩組ありて座の支配に

年行司と云あり熊本町別當の内一人宛交番し座の

支配を司る是を年行司と云

友枝善藏

兩座

大夫二人 櫻間左陣

て年々町在の者より一季に抱て諸役間に五人三人

宛使命水薪の用を勤む月俸一口歳俸三石

町一五七

同 同一人同三人

三角

同郡郡浦入内十一里

高良 同 同一人足輕三人

南方宇土郡松山高五里

洒浦| 海濱 侍一人步之者三人

西方玉名郡,内洒村六里

清源寺 同 同一人同三人

同方同郡腹赤村六里

長須 同 同二人

同方同郡2内九里

廻二人

大島

同一人同三人

同 白濱 海濱 同一人同三人

同北方玉名郡荒尾大島十三里

佐賀關 同 同一人同十人

同西方跑田郡五町河内村三里

同三十六里遠見

鶴崎] 湊口 同一人同三人

同豐後,内三十一里遠見

西光寺 在古町

一向宗西派 無禄

世の人所知也不詳寺記

此寺は國中法華の錄所なり始加藤氏之菩提寺たり

池田中尾村

本妙寺

法華宗飽田郡 同四百石

此寺は國中禪宗の錄所なり

發星山

常會料十貫目

川尻

大慈寺

禪宗曹洞在 寺領五十石

大梁山

此,國中淨土宗ノ錄事ナリ右將軍家淨土ノ尊靈

ヲ此寺=安置ス

往生院

淨土宗在出京町 有寺祿

無量壽山

建大佛妙法院末寺ナリ將軍家天台ノ尊霊位ヲ

此寺安置ス叉國中天台宗総司ナリ

荒仕子 四百人餘時々有増減此奴隷之者にし

盲人の長一人あら檢校より任す 開役 二人有りて

國中盲人の支配を司る

坐頭 一人 檢校勾當ノ二官アリ 月俸五口

政府根取屬

此宗錄所無シ府中有ル五ヶ寺月番アリテ公用法

用ノ二事達ス寺社員數巻末=出

眞言宗

無祿

眞言

仙勝院 修驗在府中依 月俸五口

右東派國中寺院の銀所也

光明寺

右兩寺各年交番して西派國中の寺院を指揮す

在古町東派 無祿

順正寺

在古町西派 無祿

六所宮

有社祿

九月十一日右同

祇園宮

在負郭北岡山 有社祿

六月十四日右同

藤崎宮

在郭内二丸 社祿二百石

八月十五日祭禮有式

他邦占5入來石六十六部虚無僧巡禮猿廻其外異色

異形の者城下街道の外小徑に入る事を制す

已上足輕番

○所々役所八ヶ所

〇同北辻右同

〇同中辻二分所

〇追廻田端木戸口右同

〇同所南辻右同

○同所辻右同

○下馬橋右同

○山崎口辻番四人晝一人夜一人 有明燈

○帶刀屋敷下右同

此寺藤崎宮ノ執行ナリ且東照神凪ノ祠境内ニ

一五五

神護寺

天台宗在郭中 有寺祿百石

豐嶺山

歴代及宗室ノ年忌征當ノ佛事ヲ執行ス

松向寺殿墳墓神位及配栲此寺二納藏ヌ右兩寺二於

泰勝院殿

泰勝寺

禪妙心寺派 同百石

龍田山

妙解公已來歴代及宗室之墳塋此寺在y及神位7

立ツ

禪濟宗京大德寺末 寺祿三百石

妙解寺

護國山

之造營皆國家ノ度支ナリ

右國家崇敬之社也年々恒例ノ祭祀式?y各祠官守

社祿千石

阿蘇宮

六月廿四日日廿六日三至元

以上城內所々

皆劵帖を以出入す〇大手門足輕五人晝夜二人宛

〇南北門同上

モンサツ

〇類常門側足輕六人晝夜守此門!出入望改事嚴

〇耕作門四人〇札門八人 手取口四人〇數寄屋丸

四人已上切米取番也

城內所々

君公東國の時は番兵六人宛喬之在東京の時は番頭

物頭大組付交番して衙之

城內本丸の警衛也晝夜交番す

大番所

番所

定番なり

采地百石

番人

京留守居支配

伏見茶屋

番二人碇 ○川加子十人同 ◇藏子二人同

一裏須戸口同一人

○壹丁目門右同

○大木彌助屋敷右同

○坊庵坂上右同

○長岡圖書屋敷向

有明燈

○新三町目門

○高麗門辻番三人晝夜一人

○慶宅坂上門右同

同○長六橋口右同

○住江甚右衛門右同

〇長岡監物屋敷下右同

〇出京町搆口右同

◎新堀門右同

同同同同同同

〇流長院搆口晝一人夜二人 有明燈

城門外郭中所々辻番所

一寳藏番六人晝

一定香番八人从

一同六人晝二

在府

在國

同

一同裏門右一花畑表門番晝夜二人 足輕以下同

公館

一五四

留守居」 三人 七百石高職料

爵物頭上座

右所々の第宅ありて定府又は交番各有官職興藩中

之役員無異其員数の如き不記之

〇矢/倉〇田町

江戸龍邸

〇白銀邸〇濱町〇石小田

他邦守邸

〇日奈久井客屋〇佐敷井客屋〇大津〇内牧〇的石

〇笹倉休所 坂梨〇野津原〇鶴崎〇植木〇高瀬

川尻〇山鹿〇南關〇小川〇佐賀關〇長須〇水俣

三角〇八代〇種山 柿迫

水前寺 囿游是謂御花離宮也

遊宴華圃之別莊儲假山水風色

コリ 八石六石五石二口三口不同

所々茶屋

各番人一人宛役人格足輕格十石三

此藏都下ョリ一里郊外五町德王村横手萬日村ノ雨

所ニアリ

出納スルナリ

鹽焔藏二所

番人二人アリ天守方ノ指揮ニテ

一五三

此邸交番ノ官人勘定頭一八〇目附一人〇目附ノ

横目一人 勘定所根取一人 同書記一人〇吟味役

一八〇勝手方横目一八〇同所々横目二人〇銀米支

配二人○書記二人〇手傳二人綻〇作事方一人○門

書記

高不定職料

留守居

二三百石已上

大坂守邸

周物頭格

右之外役員不記之

一人 十石三口諸役兼之

mich

留守居 一人 四百石

爵物頭格

京師守邸

書記

外使」 五人 十石三口

城使」 二人 中小姓十五石五口

人仕

七人 棟梁アリ鍛冶モ屬ス

大工

二

言

二人 七石書記

一人所々横目ヨリ監ス

横目

七人 八石三口

役人

根取

一人 右同

目附

職料二十苞

頭

百石已上

此府は川尻の水塞舟の作事米廩又は所々官署の造

作を掌る官屬

川尻作事所

に命じて此城の守衛たらしむ成兵四十餘人伍長二人

此を八代番頭さ云此城下一切松井家の指揮なり

頭

一人 十五石四口獨禮

鶴崎銀倉 支配役」 三人横目一人書記一人

八人 内二人棟梁鍛冶共

手傳 十一人 夫仕番人此内my勤

人

書記

目

役人 四人体右ス

一人 十五石四口獨禮

根取

頭熊

今作事所目附一人宛交番して

鶴崎作事所

門番 三人

二人

手傳

一五二

事を司る 姑く舊のまちにして臆吹を加へず

此官醫生の業を試み淑膳を董正し異術隱業を治療

をして正しうして濟世の技國中に偏ねからしむる

編者云ふ本課あるやうなれども

瞖業吟味役 二人 職料十五苞

采地アリ中小姓アリ

漢名醫正

此官醫員を支配する役なり長なり

職料十五苞

醫師觸役

二百石高

已上醫學政ヲ掌リ醫生ヲ教導ス

十五石五口

師役 二人

采地アリ中小姓アリ

職料

人

授敬

百石已上

一此館寶曆の初年醫師村井見朴岩木原理に命じて醫

の學政を定めらる夫より國中の醫生此館に課程し

て及第す醫の學は別に記有を以て今爰に不記

典寮

再春館

醫學寮

小物成銀所

客屋||音信所|賄物所||炭薪會所

妙解公襲封の時嚴父 三齋公此城に隠居まします。

正保三年十二月二日逝去の後 眞源公松平佐渡守

都下より南方十一里にあり此加藤家の時築之加藤

平左衛門守焉忠廣國除而退散

八代城

外鎮

右ノ外賣醫ノ膺國中二充滿ス不辨其數の湯藥ョ

輿テ人ヲ誤ル一洗スベキ事ナリ

此郡中二二三人又七八人定員ナシ此民間ノ疾病ヲ

救爲ナリ

郡醫師 俸不定三口五口四ロアリ

物産生ナリ

藥園

藥物蕃殖ノ圃也監之/醫生一人アリ此

各分科○本道〇外科○科○眼科○科○科○

兒科○按摩○物産〇經絡

醫員」 四十六人

四十六人 給!優良アリ

時於增減ス

此官平日足輕長柄の者組並勤前望指揮辶人置支配

は家中徒隷を支配するなり奴は二月二日に交替其

獨禮十石四口

役割支配役 四人 中小姓十五石五口

人置支配役

人置所

役割所

荒仕子 六人 三石一口

傳

手物書 二人 七石二

内五人、金銀錢ァ掌ル六人諸貨物堂ル

役人 十一人 八石二口

一人 十五石五口獨禮

七人 十石獨禮

吟味役] 十人 秩百石中小姓十五石五口7y

勘定方奉行ノ屬平士

七人 三石二口

小間物所||朱銀倉||算用所||諸道具方

此官監察の所々如左

所々目附、十九人精心勸中小姐鎮五枚

此外臨時の公事について所々に出す

本行屬

百石已上中小姓了廿石十五石五

役割所,江戸交番六人,鶴崎二˙

江戸交番六人| 鶴崎二人| 川尻二人

客屋||音信所| 賄物所 買物所 炭薪所

諸道具方

銀倉| 小間物所算用所高瀬二人

銀倉

米倉 す又吏務の正邪を察視す其所々如左

此官は所々の役間に廿日宛交番して公事を監察

勝手方付所々横目| 三十六人十石三口職料

奉行所當用局1屬

公事を談す

寄合所

此府に月三八の日横目不殘會合して

外諸奉公人の支配を掌る

1五〇

音信所

公館之内有勘定局入屬y

三石一口

荒仕子

餌刺 八人 五石二口足輕格

切飼役 三人 五石二口役人格足輕格有

職料七十目

犬牽 七人

足輕股

五石二口

榜示横目 十二人 十石三口右同

十三人 十石三口獨禮步段役匠

人段

鷹組脇 二人 職料銀三枚

中小姓十五石五口

鷹方

公館之内－7

此員數國方江戸龍口白銀濱町皆總ての數嬪婦階位

あれ共事繁なれば不記

官婦」 九十六人

九十六人 俸米錢有數繁碎なる故不記

一四九

の度支に備ふ事を掌る

生植其外諸貨物を交易其利を勾會不虞

サンヨウ

此府は諸算計の事を換えの油を制して之紙

櫨方

一吟味方ト云分曹アリ

郡局屬

此官文化四年始而置之

苔塲見 二人 八石三

二人 三石一口

荒仕子

三人 三石二

手傳

役人 八人 書記兼八石三口

根取 二人 十五石四口獨禮職料

此官は音信所の長官なり此府は 公義月次の献上

の政又は列侯音信贈答の事を掌る品目製造の政を

掌る

音信役 二人 中小姓十五石五口

職料

勘定方奉行1屬

漢名

右厩 公舘の北壺水の濱にあり組脇以下馬乗馬醫

共に此府に出て馬を練習す厩の庭に馬場をまふけ

たり諸士の練馬も又此に於てす

漢名掖廷又後宮

馬は其麁良によりて増減あり員數不定

四十

右人數之内小頭十人爪髪役物書注苗字有其外法無

苗平日馬の養事を勤む

二百卅八 六石一口

厩之者

一人 六石二口

實役7兼

十八

小頭

爪髮役故六石二口

四人 十石三

飼料役 四人 七石二

馬醫」 五人

五人 右同

武器之類

五人 三石二口二十目

手傳

日番」 六人 六石二口七拾目

一人 七石二口

料理人

賄役 四人 八石三口職料七十目

付物書 一人 七石二

人 獨禮 十五石三口職料九十日

宮伯

局

る一人

1人 足輕段 七石二口

薪炭蔬菜の類一切日用の品を掌

錢裏

歩段 十石三口

付物書

裏方の中にて諸賄をする部曲なり皆米

用聞横目兼帶

宗室の増減により役員も又増減あり

此官掖廷の事宗室連枝の附役なり東都及所々連枝

附役] 十人餘 百石已上職料十五苞

一四八

ウラカ

漢名宮正類 物頭格用人!屬

役人

根取 1人 中小姓十五石五口

目 四人 十石三

二人 中小姓職料銀五枚

目附

同監

臺一人 百石所頭

役料十俵

漢名尙倉御 平士用人屬

此局は公の常膳珍羞監膳を司る

クワン

公館之内ニアリ酒方椀方菓子方賄方道

臺所 具方等分職アリ

漢名尙食署

右筆」 十五人 百石采地廩米又中小姓獨禮05

漢名内史

職料十五苞

右筆頭 三人

二百石高

漢名内史正

の事を掌る

此府はすべて公義及列國の諸侯往復の簡札書牘

一四七

馬方八人 百石ョリ中小姓獨禮アリ

尚乘御之類

二人 百石灭;中小姓

目附

組脇」 三人 百石職料十五苞

物頭平士用人屬

馬方

草支度ヲ司り馬方馬!フ辨シ其

習馭ヲ司ル

廐

飼料所

内ニ此兩部分の飼料所馬ノ芻

漢名典底署

十人 十石三

料理人

内饔

料理頭 四人 中小姓二十石五口十五石五口

膳夫

三石一口

荒仕子

手傳 六人 三石二

酒方道具方菓子方賄方等の職掌あり

二人 八石二口

十五苞其外は百石二百石なり

茶道| 六人

内令一人百五十石高物頭格職料

漢名

一府なり

此府は近習方の一府にて別に府を立す 君邊の

茶道方

公舘之内

此官は剃髪にして君邊の酒掃戸の開閉使令等

を勤む

次坊主| 十四人 秩七石二

番屬足輕格

漢名

此官日夜 君の左右に當直して不寝番を勤の湯沐

進御の政を辨す 下横目 十四人あり秩七石二口足

輕格

近習目附 十四人 中小姓モアリ

秩百石二百石♪

周二寺人ト云者漢名内侍監士

二近

此官日夜 君公の左右に侍り使令を勤め配膳櫛役

等の事をつとむ

扈從役 廿一人 石巳上モア

秩百石♪二三百

漢名 爵平士用人ノ屬

爵平士用人1屬

右筆局

秩百石二百石

漢名内史公舘之内

御書方云

此官日々殿中に出仕して殿中の酒掃障屏戸襖開閉

を主る 掃除坊主一四十五人五石二口 錄事 一人五

石二口皆屬す

座敷支配役 二人 料 十五夜

局

漢名殿中監平士用人屬

醫科三等本科外科鍼科口科あり内二人は匕職と云

物頭格にて常に 君公の脈絡湯藥を司る

サジ

次醫十三人 中小姓アリ職料十五枚

秩百石ョリ二三百石叉

名侍御醫二近シ用人

錄事 二人 八石二口庭方見抄 二人入石

三口手傳 五人 荒仕子 六人

此宦は剃髮して一刀をす日夜 君邊に侍り茶事

飲水の事を勸め書院掛幅花瓶花及園圃花圃假山

水の事を司る

一四六

〇寶 藏

〇公之印綬預

◎〇所 支 配

〇近習次方支配

此部曲を近習欠方と云用人の職掌

此官 君邊の部曲に日夜當直し 君公に随侍して

君用を達す國政に關事なし此官員数定れる事なし

或五六人又七八人あり部曲の屬吏根取一人中小

姓十五石五口 書記八人十石三口 次小姓 六人七

石三口用人の使命なり手傳

ツメトコロ

·石高

職料四十苞

トウメン

漢名中書謁者/類給事中二近》内官+)爵上中比1若坐三等y

番頭格

手廻之者小頭」二人八石二口鎚持」二十三人七

石二口 草履取 八人七石二口小人 八十七人六石

一口〇槍 長刀〇立傘〇臺笠〇挾箱〇臺弓之類鎚

持の内より持之〇燈灯の類小人より持之

石駕之者屬文|小頭六人入石三口四十五人入石

配

〇音信方支配

臺 後宮嬪御支配

【四 五

を司る

云

加諸其外一切 君公坐右の器物

佩刀

腰物方

繪師の類も此部曲に屬す其品目は○

細工

寸屬官 縫物役] 衣紋方 役人六人録事|使命 四

此官は 君公衣服の制度又其名数を辨ご進御に供

又内司服 周禮

又八中小姓

|納戸役| 四人 百石く二三百石

漢名尚衣奉御二近平士用人屬

此官 君邊侍衛の役なり

職料十五苞

次番」 四人

漢名給事舍人,類 物頭格又平士用人,屬

百石より二三百石あり

此官日夜 君邊に随侍し命令を奉じて外に傳ふ

奏達の事有る時は大小の臣先つ此取次を以て

君の起居を伺ひ事を奏す

内一人組脇三百石高

近習取次 五人

二百石高職料二十苞

漢名謁者通事舍人類

爵物頭格用人2屬内官

○側金方

○書 簡 右 筆 方

○腰 物 方 支 配

馬 方支配

〇鷹 方 支 〇小姓組 六十六人 秩百石より三四百石に至

漢名

人

此官組を預供奉の時には車馬僕従の事を司り騎

馬にて相供奉す又諸規式を司る

石三口手傳

荒石五口 書記此官公舘の内に部曲あり根取 二人中小姓十五

職料五十苞

小姓頭」 四人 千石高

漢名太僕類 番頭格

久住同 十人 右同

五斗一口

二人

十二人 野津原同十三十一人 七石二口

鶴崎詰足輕

此組平日鐵砲ヲ練習シ常府中ノ川ヲ浚道路修造

勤

留守居鐵砲之者 二十六人 四石二口

掃除頭支配

百五十人時々増減あり老幼免除の人々なら此内よ

吏の闕官に除す獨禮歩使番列歩段役人段あり俸

は十石四口已下たり

三石]五人十仕子 此官府なし右の如く駕輿車乘に従て戸の開閉を掌

駕役 七人 秩右同

右同

君公の供奉をいたし道路の案内するなり

漢名

此官府なし

石保地米アリ

案内役 八人 秩二十石五口十五

中小姓は定員なし時々増減あり皆無職掌時ありて

小姓組の助役を勤む用によりて外の役を勤む

漢名 爵中小姓小姓頭屬

又三口定ラス

中小姓 百三十餘人

百三十餘人 二十石五十五石五口

漢名

漢石

に二人宛都組下 百三十餘人あり

此官府な中小姓三組の支配をいたし 組脇一組

職料五十苞

中小姓頭」 三人 七百石高

爵番頭格中老屬

君公出行の時供奉するなり又所々の使節を勤め

賓客饗燕の時行酒配膳の事を勤む 組脇一組に一

人宛爵物頭格

る此官平日頭の支配を受て

一四四

大手鍵番 四人

此官留守居番兵二組の長一組に四十餘人あり

組脇二人定あり番兵の采地極れる高無し百石よ

り二三百石四五百石もあり此内より職掌如左

漢名城門揶

職料四十苞

二人 留守居番頭

千石高

大頭

此官備頭の次に有りて軍役を勤む留守居の組を預

留守居城代の守衛たり非常に備る役なり府なし

月番ありて私第にて用を達す

留守居大頭 二人 職料百苞

此八代は都下より十一里南方邊要の地なり番兵四

十餘人の鎮將なり 組脇 二人目附 二人鎮捍防守

の政令右佐敷に同じ此を八代城付と云

千五百石高

職料四十苞

八代番頭二人 千石高

右二同

の長なり此を佐敷詰と云伍長共に其所にありて成

るなり番兵の内より 組脇 副二人目附監二人

あり鎮捍防守の總制を掌

此官無役切米取の頭なり外に職掌なし斯人數凡二

一四三

同切米取觸頭 二人 職料十五苞

百石高

大頭

此官組下の中小姓七十餘人の長なり職掌なし中小

姓二十石十五石十石五十口七口三口又無祿もあ

此内より奉行所銀倉櫨方の上番夜中二人宛勤之

職料

留守居中小姓觸頭 五百石巳上

大頭/屬

此官宇土郡浦の海濱を守る部下番人あり

已上留守居番頭組なり

一人 右同

郡浦番┃

此官は豊州佐賀關海濱を衛る部下番八十人あり足

輕格七石二口都下より三十六里

佐賀關浦番 一人 定番

此官城内所々櫓の番を晝夜勤む

櫓番 九人

此官城門晨昏の開閉管鑰を掌る守門の卒毎門二人

宛晝夜當直す

一島原 御出馬之節は被召連御本陣御葉串之御番

相勤二月廿七日 總責之節澤村宇右衛門殿手に

付申候三月二日 御歸陣之節罷歸申

一御城御作事に被召仕候元祿五年御掃除方支配

に相成夫迄は頭有之野田角左衛門さ申候

一給米之儀は御苑地一人前野高二十石勤方は一ヶ

月五日二人扶持之常を以五斗宛月々被渡下候御奉

公之儀は外様足輕同様相勤可申旨被仰付小頭は野

高四十石被下置候

右仕立之儀は寛永十三年 妙解院御鷹野に御出

之節上林甚助へ御意之頃菊池往還を西の境にし

て合志郡鳥巢村辨天山を目常に登境にして是

小山之山を目當に立田杉馬場限東之境にして

立田山神子松を南之境に極此内に地筒百二十八人

御仕立鐵砲望之者所々方被召抱候事

大津本山 麻生田 黑石 花立 兎谷楡木

保田久保

地筒

宛

に臨で雙刀を帶其外武藝得手に任す惣代小頭一人

此組寛永十五年島原の役

て佐敷は都下より南方二十五六里葦北郡薩州の境邊

樞要の地なり此所に番頭の兵二十餘人あり此部伍

職料四十苞

佐敷番頭

一人 二千石高

漢 鑲將ニ近シ

此組天明の初年八代城警衛の為に始て置之種山平

永三十五人高田二十五人

三年

八代郡筒 六十一人 無禄農兵ナリ

平日鐵砲を本業として武藝人々の得手に任す平日

郡代の指揮を受て郡中土木の用を勤む此又寛永以

來人數増あり○二十一人久木野〇百七人水俣〇四

十二人津奈木〇百三人湯浦〇七十人佐敷〇八十七

田浦高四千五百四十石地士三十人一人に五石宛

小頭四人は十石宛

始て此備を立らる

り右三同

芦北郡筒 四百卅人

高二石五斗ノ渡地アリ

一大津原地右同年御仕立百人頭吉谷平大夫

郡代支配

一保田久保之儀は阿部彌一右衛門殿承に而寛永十

二年追々仕立に相成候事

一四二

此官軍舟井樓の事を司る平日職掌なし

軍船井樓方 一人 秩七十石

士舟方奉行屬

漢名

君公の陣屋を營造する事を勤む平日の方かずか

ずあり繁なれば記さす

此官府無し平日昇組二組之支配を司る小頭

に一人宛七石三組下三十二人七石二口軍事に

昇幡を持つ又

二百五十石高

昇添頭 二人 職料十五苞

歩頭

無し組を四つに分ち一組に二十人宛なり

組脇四人十五石四口組下,八十人十石三口平日

君公之供奉所々の使節宰警衛を勤む水濱にて游

泳螺貝金瘡の治療を練熟して軍事の用に備ふ

漢名 假物頭格中老屬

職料十五苞

四人

二百五十石高

小頭 二人組下| 十七人 七石二口

君公行莊の時鐵砲を持諸門の傷を勤む

漢名 爵物頭格

小頭ハ

此官府一四一

右之所々に住居して常に鐵砲を稽古し平日掃除頭

の指揮を受城中又は 公館庭中庭外の酒掃道造の

事をつさむ定れる歳俸月俸なく渡り地と唱て山林

空原の地を開き取て高貳拾石を定とす一人二町三

町又五六町をも自ら耕して給す平日一刀を帶す事

此組合志郡大津一ヶ所○飽田郡平山村花立黒石

楡木 麻生田 兎谷〇託摩郡保田久保農兵之類

古に所謂野武士と云者

此類なるべし

新地鐵砲者 二百三十六人 公襲封ノ始置之

/支配

永

掃除頭此官も右同散在して平日の勤方右に同此父軍事の

備なり、

寛地侍 五百餘人談醸蔵

有禄無禄足輕格

アリ無禄ハ農兵類

此官は郡中所々に散在して軍事の用に備 平日定

れる職務なしと共郡中臨事の用に郡代の指揮を

受て勤之常に鎧一領馬一疋を備ふ故名焉役人の次

席す

文化十一年

一領壹疋 三百餘人五百四十八人 三口四口五口又の無

代

録事 三人 此帳付役ト云 七石二口

此官府無し平日他邦及東都の使節を勤む月番にし

て公用を勤む又殿中諸士の坐班を正す

十七人 職料二十苞

使番

三百石高

漢名行人物頭格中老丿屬

此官長柄之者十二組を預一組に小頭一人宛組下四

百三十人此組諸警衛の時長柄鍵を持つ隊伍の備を

なす組下の者諸役を勤む事繁なれば不得記

長柄頭| 職料十五苞

格 伍佰拓搞

五百石高

貫物頭格

漢名未考

此官平日職事なし

なし軍事の備なり此を小荷駄奉行と

も唱

人

高

物奉行

無五

備頭ノ屬

漢名不考

右物頭は平常組足輕之支配をいたし諸警固を勤め

都下郭中火災の要心防禦の事盗賊追捕異色異言の

者を改め非常を戒む軍事には其政令又別なり豫め

記しがたし又平日諸檢使の役を勤む

六滑肋頭此官府無し平日持筒組之支配をいたす外に職掌な

職料十五苞

持筒頭 一人 佰伍十石高

爵物頭格中老屬

漢名

此官府無月番あり公事を辨す〇十五張頭二人

○鐵砲十五挺頭六人外に小頭 一組に一人宛

組下百二十人十石三口常に卒をひきいて行莊の

警衛又宮門衛屯の兵を主り

君邊殿中の宿衛を勤む

職料十五苞

側物頭 八人 貳百五十石高

君公行莊の時供奉を勤む組下三十八十五石四口

供奉の役也軍事には別段の勤あり豫め記し難し

漢名衛尉又校尉1類中老屬

一人宛あり

此官府無月番にて公事を辨す粗下三十人二組あ

歩使番頭 二人 職料十五苞

一四〇

漢名 爵物頭格中老屬

二百五十石高

づ~組を統領して備頭の組に加る官府なし一人づ

~月番あり私第にて公私を勤む番兵十二組四百八

九拾人の間時々増減あり此國家の干城なり常には

格常に番頭物頭替々城内晝夜の警衛を勤む頭二

十五六人づ～なり 親脇 二人づ~一組に有准物頭

組脇二人

領す此組一番より十二番迄次第あり一組に番兵四

馬廻と云

十二人各一組を統

此官番兵の組頭なり

番方と他邦

四十苞

番頭

十二人 千石高

漢名羽林軍(郎?)ニ近シ備頭ノ屬

此官武官の長にして常に備の組を預りて支配す軍

事を董し不虞に備て年々三月に一組づ~替る國初

より六人なりんを明和年中四組を減じて二組とす

四組は家老の内より兼職となる又三人の時は家老

の内一人減す此官府なし一人づ~月番ありて私第

にて組の用公用を辨す番頭物頭此組に属す

備頭 三人 職料百

漢名周大司馬兵部尚書近シ

三千石高

官職制度考二

職料足輕百人小一三九

不定二三百石已上

料無

勤之職

三十挺以上一人宛高

足輕百九十人小頭右同

合千百八拾壹人小頭共

裨將類

同拾挺頭十九人 高右三同

足輕三百六拾人小頭同二人宛

足輕三百六十人小頭一組二三人宛

同貳拾挺頭十八人,顆粒;十五苞

貳百五十石高

同三拾挺頭十二人 職料同

三百石高

頭四人宛

職料四十苞

五百石高

鐵砲五十挺頭二人

を達す輪鄱月次の寄合あり

五十一人

府なし月番あり私第にて公

漢名番帥ニ近シ備頭ノ組

門海濱の湊港要地に番所を置て往来の出入貨物の

多少海舶出入の百貨を總例の爲に右番士を一ヶ所

に一人づ~三年交番させて守とす其所に下條に陳

す

ミナト

公館の警衛を右の如交番して勤之又國境驛道の關

君公在國の時は城内大番所の警衛を晝夜六人宛勤

之交番す在東都の時は

右奉行使ヲ勤簿書策書持運どヲ勤ム

〇詰小姓八人

右家老中老ノ使ヲ勤七石二口

○剃髪六人手傳二人 烟器茶器ヲ掌ル

右公司

○書記

〇根取

右政府

〇目附

◎奉行

〇大目附

○大奉行

○家老中老

政府班如左

官署

焼物方 漢名甄諸帳支配ョリ之

「又挈氏

時太鼓番 晝夜二人宛足輕ョリ勤漢名司長

ス

此十六司=洩事ナシ奉行已上政府出坐根

取書記各分司局中坐班シテ日々萬機ヲ分辨

右水薪爐火烟器出入ヲム

○荒仕子六人

右長柄組中間格之者文箱等大トキ物ヲ持運

○下使十六人

右足輕ョリ奉行已下外人ェ赴告文書ヲ持運ヲ

○小使二十四人

右閑外=座シテ家老ノ文書ヲ持運ヲム

○側足輕一人

○手傳三人 右同

○小細工二人 職掌前記ス

墨筆ノ出入ヲ掌ル

右政府古來ョリ之舊典簿書類出入ァ司リ又紙

○諸帳支配二人

右政府閑外列坐シテ取次申之事勤ム又

所々へ之飛脚勤ム

○飛脚番十六人内小頭二人

一三八

此牧馬百五六十疋餘年々四月馬ノ良ヲ撰テ典厩

移牧ス牧山支配アリ郡代ヨリ指揮ス

牧山二所

宇土郡網田村芦北郡田浦村ニアリ

郡方奉行屬

此官山林蕃茂の政令を掌る山支配役之長官にはあ

らされ共其職掌は相似たるを以て支配役にも相談

する也

山林藪見抄役 一人 顆粒二十苞

百五十石平士

荒仕子 三人 三石一口

手傳 二人 三石二口

書記 二人 七石二口

横目 一人,郡横目兼之

支配役 二人 八石二口

所々目附兼之

目附

を受て取調す小物成方は郡局の旨を奉て指揮す

右十六局ヲ分司ト云此ヲ都而奉行所ト云政府トモ

稱ス國政令ノ出所ナレジナリ國中大小ノ政事

一三七

宗伯ノ職ニラ前ノ四條別段ノ事ニテ相分レタ

又鎭守社年忌祭佛祖會式之事

記此方一而武運長久國家安全禰請蛃晴〇祀祭

崇敬社恒例!神事祭砲等事 右四條大常寺周ノ太

此方－

公廟享祭道佛葬儀事ヲ掌ル寺社奉行府ナリ

簿書策書此府納屋横目三人町横目之

案此局唐=崇署ト釋道ノ支配ヲスル其掌

ル所、寺社沙門巫祝進退褒貶〇訴訟判決願書裁

劉◯僧徒巫凧道家之戸藉圖書ノ事此四條ヲ

局=ァ取調ス又覶宗之忌祭防先順 ○凶禮

此局佛寺神社修驗總テ沙門巫祝之類之支配進退

公事訴訟判裁神明祠祀祈禱之禮水早炭禰ヲ除穫

ノ儀

書記四人 寺社奉行掌之町局勤之

寺社局 根取二人 病院督官印アリ

ル事監察ヲ郡方指揮ヲ受動之

此官、田賦等ヲ始山林川澤スペラ郡政ニカ・リタ

郡横目 二十人十石四口

井樋方塘方役人」 四人 石三口

此官溝洫河渠築堤等ノ事ヲ掌ル

井樋塘惣支配 一人 中小姓十五石五口

郡方奉行之屬名水部耶1類

|水理方屬

都水監冫類

書記 一人 七石二口

内二人足輕ヨリ之

三人 人仕

十石二

二人 八石三口

役人

杣頭 二人 十石三口

此官材木ヲ探伐スル事ヲ掌ル

方

書記 一人 足輕ヨy勤之

漢名百工監ノ類

此府は小物成雜税金銀の出納を小物成方の指揮

小物成銀倉

新地税〇反懸米 赦免開反懸米〇野開運上米 山

刈畑上納米〇諸札運上銀〇夏成茶上納〇紙楮上納

〇鐵砲札運上〇栗上納質屋札C漁獵札〇舟運上

ネング

右雜税ノ品目〇千石水夫米〇受藪代米諸畝物米

荒仕子 四人 三石一口

手傳 二人 三石二合

リ之

一人 叶横目

四口

八人 八石三口

書記

此官本方年貢之外種々ノ雜税ヲ納ル府ナリ

根取 三人 中小姓二十石五口灭世石三口

小物成方

書記 一人 柚方ョリ兼之

一三六

鶴崎倉

城東三十里豐州鶴崎－厂y

四十五人

一人 三石二

藏子

一人 十石四口

書記 一人 七石二口

二人 八石二

支配役

八代倉

城南十一里八代

根取已下准川尻仲仕五十三人

高瀬倉

城北七里玉名坂下懸高瀬鄉二y

仲仕] 五十人

二人 三石二

一人 十石四口

|横目

一三五

支配入石二口

役

此倉往昔無之文化ノ初年始メラ此倉ヲ建創ス

久住倉

城東二十五里久住鄉丅y

五人

支配役 二人 俸右二同

大津倉

城東五里大津驛二y

|藏子 三人 三石二

一人 十石四口

目

書記 一人七石二合

支配役」 二人 八石二口

鶴崎倉||大津倉久住倉

米廩

東西倉|川尻倉高瀬倉 八代倉

此官往古無之寶曆之初立此官享和之間罷此官。

文化中置之。郡懸ヨ巡按〻農政官吏之淑慝及農

中ノ善惡郡村ノ可否得失ヲ辨察シテ上言ス 横目

五人ァリ十石四口文化二年此官ヲ止メ又同七年置

之

職料二十五苞

郡目附

二百五十石

漢名巡按使入類郡方奉行屬物頭格

一萬二千四百三十四石九斗六升七句六才

◎物成

二萬二千七百七十四石五斗六升七合三勺七才

◎新地高

撫高四ッ六分八朱三厘三弗

物成三十三萬五千四百七十石四斗四升六合八句

四才

高七十一萬六千三百五十一石五斗三升五合二勺

九才

東西倉

|支配役

書記

川尻倉

支配役

ביוווד

書記

二人 七石二口

二人 八石二口

一人 十五石四口

都下ョリ二里南海濱ニアリ

五十人 米給一斗月々也

十四人 三石二口

四人 十石四口

十六人 七石二口

入石二口

六人

ニ至ル

六人

中小姓十五石五口m)十五石四

百石二百石叉;中小姓Ty

周平士奉行,屬

此倉1米穀六萬石7納家中上下1月

俸俸給ス

一三四

物成一萬五百六十三石七斗三升六合八勺三才

高三萬六百十四石五斗二升二合四句

〇高六千二百十九石八斗六升二合三勺

〇物成千六百十八八斗二合四勺才

右四懸總計

〇物成七百四十八石二斗九升一合七勺八才

菅尾懸」 本村六十三 小村四十八

〇高六千二百十四石二斗

〇高九千百二石三斗六升三合七八才

○物成二千八百五十一石二斗二升七合四才

野尻| 本村四十一 小村六十九

○物成三千三百五十三石四斗一升六合八勺五才

高森懸」 本村十五 小村百六十五

○高九千七十八石八升二合一勺四才

此ョリ下四懸ヲ南郷トス阿蘇郡之内蘇山ヲ限トス

布田| 本村十七 小村六十七

物成八千二百六十九石七斗一升五合三勺三才

1 111111

右郡總計

○物成四千百五十五石七斗七合六勺五才

:〇高七千六百九十八石四斗二升五合八句六才

本村十五

〇高五千七百六十三石九斗二升三合四勺四才

○物成三千二百十三石六斗六升九合一勺九才

右同郡1内

關

高田 本村二十二 小村百二十

海部郡/内

女 女

○高五千七百六十三石九斗二升三合四勺四才

〇物成三千二百十三石六斗六升九合一勺九才

北里懸」 本村二十六 小村二百八

阿蘇郡小國内

○戸口男女二千五百十六人娯仟麺七叶帆人

右小國郷は阿蘇の内久住郷は阿蘇豊後兩郡入交な

直入郡之内なり

小國鄉| 郡代二人 書記二人

久住

都下ヨッ十八九里ヨリ二十四五里巳上二及フ

大津 本村四十七 小村四十六

○高二萬三千四十一石一斗八升八勺五才

戶口男女二萬四千七百四十三人 一汗秧佰二十二

合志郡 代一人 書記一人

都下ヨリ

高二萬八千三十七石八升二合五勺七才

物成八千二百八十六石一斗三升二勺三才

河原懸| 本村三十五 小村六十七

〇高一萬三千六百三十石七升八合一句二才

〇物成七千四百一石一斗九升三合七才

總計

○物成七千四百三十六石八斗九升四合八才

○高一萬四千四百七石四合四句四才

深川| 本村四十四 小村四十七

戸口男女二萬百五十三人娜仁确的雅女自數不足彳y

都下,六里已上二十里二及7

代一人 書記一人

識女一萬三千百二十二人

高二萬九百八十六石九斗五升八合四勺四才

右二計

〇物成三千九百二十石八斗七升九合六才

○高一萬千九百六十三石四斗四升八合八勺八才

〇物成三千四百二十石八斗七升九合六才

坂梨懸」 本村十二 小村六十七

〇高九千二十三石五斗九合三勺六才

内牧懸」 本村三十一 小村九十八

戸口男女四萬六百十六人 女二萬二千七百四人

男二萬三千九百十二人

阿蘇郡| 代二人 書記二人

高四萬九千八百五石八斗入升九合一勺五才

物成一萬九千三百六十二石五斗八合五勺六才

都下ヨリ十里以上二十里二及プ

〇高二萬六千七百六十四石七升八合二勺

○物成七千七百八十四石八斗八升二合六勺

總計

〇物成七千九百二十六石六斗一升二合二勺六才

竹迫懸] 本村五十 小村四十二

111111

〇高二萬千八百八十一石二升七合八勺九才

○物成七千六百三十五石一斗九升四合三勺八才

南關懸| 本村四十八 小村三百六十八

〇高二萬三千五百七十六石五斗六合

〇物成九千九百十一石九斗七合二勺四才

中富懸| 本村三十 小村二十

〇高一萬九千百二十八石五升三合八勺三才

〇物成九千二百十四石七斗九升四合六勺三才

荒尾」 本村四十六 小村二十四

〇物成九千九十一石五斗二升一合六勺三才

坂下懸」 本村三十一 小村二十

〇高二萬百九十五石五升九合三才

〇高二萬六百五十八石五斗一升九合三勺八才

〇物成九千二百二石三斗一升一合九勺一才

内田懸| 本村五十二 小村百二十四

小田懸| 本村三十九 小村九十五

1 111 1

物成二萬八百五十六石六斗七升七合四句八才

高三萬五千八百十六石四斗七勺二才

○高一萬七千九百三十九石三斗七升七合四勺一才

〇物成八千六百七十六石六斗三升八合七勺七才

總計

〇高一萬七千八百七十七石二升九合六勺一才

〇物成八千三百十七石二斗八升三合五才

中村?」 本村三十二 小村七十八

戸口男女二萬四千八百八十五人嬬一纖毛纤六十

山鹿懸」 本村三十三 小村七十八

山鹿郡 代一人. 書記同右

山本郡井兼之

物成六萬三千二百七石五斗七升二合八勺三才.

都下my五六里已上十四里=及7

高十一萬九千九百四十五石七斗一升七合一勺三

才

〇物成六千百五十三石三斗五升四合八勺五才

總計

●高一萬四千五百六十石五升一合

〇高五百十八石四升三合八勺五才

○物成百八十石七升六勺三才

久木野 本村一 小村二十四

○高四千七百六十石七斗六升二合勺八才

〇物成千二百二石八合一勺三才

水俣懸 本村七 小村

〇高三千三石八斗九升八合六勺九才

〇物成千百八十八石五斗五升五合

〇高三千八百四十七石四斗二升六合四勺四才

〇物成千五百九十二石八斗七升七合五勺六才

湯浦懸」 本村六 小村六十

○物成二千三百六十三石七斗七升三合九勺四才

佐敷懸| 本村六 小村九十一

〇高五千百二十八石六斗六九合二夕

田浦懸| 本村六 小村九十一

戶口男女二萬八千九百卅八人 一女一萬四千二百九十人

仟佰椢计人

男三萬三千八百三十八人

女四萬八百三十九人

〇戸口男女八萬四千六百七十七人

玉名郡| 代二人 書記二人

都下ヨリ五里已上十里餘=及フ

○物成一萬二千七百八十九石四斗三升八合七勺三

才

○高二萬六千二百四十三石九斗七升七合九勺三才

正院懸」 本村六十三 小村百三十五

女六千八十一人

〇戸口男女一萬二千九百二十人 男六千八百四十五人

山本郡| 代一人 書記一人

高一萬九千二百九十八石五斗八升五合八勺五才

物成九千百七十五石三斗六升八合六勺四才

都下ヨリ三里ヨリ五里ニ及フ

〇物成八百四十七石九斗六升五合八勺八才

總計

〇高二千三十九石七斗八升四合七勺九才

津奈木懸」 本村四 小村五十三

高二萬七千九百三十五石一斗七升二合四勺一才

物成八千六百四十八石七升二合九勺五才

〇物成三千五百五十一石八斗四升九合五勺六才

總計

C高九千四百石九斗三升三勺八才

〇高一萬二千五百三十四石二斗四升二合三勺

〇物成三千八百六十五石五斗三升四合二勺三才

郡浦懸」 本村三十 小村九十四

松山懸| 本村三十一. 小村五十

女一萬千九百八十四人

男一萬二千七十八人

〇戶口男女二萬四千六十二人

宇土郡」 代一人 書記一人

四里已上

高十六萬四千五百十八石一斗七升九合三勺五才

物成六萬七千五百十八石一斗三升五句二才

物成貳萬四千九百十五八斗九升四合八勺二才

上下城

高七萬千四百二石七斗六升三合三勺四才

一二九

芦北郡| 代二人 書記一人

高六萬千二百五十石七斗七升二合九勺一才

物成二萬五千百五十八石六斗六升六合一句

都下ヨリ十五里巳上二十五里及7

C 高二萬六千三百三十三石八斗三升八合九勺六才

〇物成一萬二百四十二石七斗六升八合一勺四才

總計

本村四十 小村三百六

高田

カウダ

○高一萬七千二百三十八石六斗六合三勺三才

○物成四千四百二十八石九斗六升四合九勺二才

種山懸 本村二十四 小村百五十七

〇物成五千七百四十二石九斗九升一勺六才

〇高一萬七千六百七十八石三斗五升七分六句七才

女二萬三千六百十三人

男二萬四千十七人

野津懸」 本村二十三 小村五十二

戸口男女四萬七千六百三十八

八代郡| 代二人 書記一人

部下ヨッ十一里巳上十六七里二及フ

高九萬三千百十五石四斗一升七合二勺一才

物成四萬二千六百二石二斗三升五合七勺

〇高一萬三千五百二十一万五斗七升九勺九才

〇物成五千六百石七斗五合六句

總計

以上上益城=屬ス

木倉懸」 本村二十三 小村百

〇高一萬五千八百四十二石八斗二升九合三勺六才

〇物成五千六百九十六石一斗二合五勺八才

甲佐懸」 本村三十一 小村七十三

|沼山津懸| 本邨二十八 小村五十七

○高二萬四千三百三十六石五斗二升五合五才

〇物成八千四百三十四石九升七勺一才

〇高一萬二百三十六石七斗二升六合二勺二才

〇物成五千二百十石七斗四升五合九

矢部懸」 本邨七十六 小邑百十三

〇物成九千六百二十七石四斗七升一合三勺五才

總計

○高一萬四百三十六石九斗四升五合六勺九才

〇物成二千四百五十八石七斗九升九合三勺一才

以上下益城

〇高一萬八千百四十六石四升五合二勺一才

○物成四千九百六石六斗三升三合三勺六才

中山 本村三十九 小村六十九

〇高一萬四千三百八石二斗二升九勺

○物成四千二百二十八五九斗七合七勺九才

砥用懸] 本村五十二 小村四十七

河江懸」 本村三十六 小村五十八

〇高一萬八千六百五石八斗四升六合九勺九才

(C)物成五千百六十六石二斗一升三勺

〇高九千九百五石一斗五合一句六才

〇物成三千四百五十七石一斗七升八合三勺六才

廻江懸」 本村二十七 小村五十七

杉島懸] 本村二十一 小村五

代一人

飽田郡より勤書記も右に

都下my一二里間

物成三萬四千二百七十二石五斗一升八合九勺九

才

總計六萬九千四石六斗四升四合八勺五才

○高一萬七千五百六十石二斗七合八勺五才

○物成五千七百五十九石一升七合四勺五才

亀田郡

○本村三十四 小村八

錢塘

○高一萬六千八百十四石六斗七合五勺五才

◎物成

○本村三十五 小村四十三

○物成七千五百四十三石四斗四升二合九勺

横手

○高一萬七千二百四十石八斗九九勺

○本邑三十三 小邑三十七

池田懸| 會所已下役員准右

○高二萬百七十七石六斗九升五合一勺四才

一二七

鯰懸| 本邨二十 - 小邑二十五

女四萬六千七百七十六人

男五萬百八十人

○戶口男女九萬六千九百五十九人

代二人 合之

書記二人上下ヲ分テ都之今

物成二萬千七十六石二斗八升七合五勺四才

都城ヨリ五里十里以上

總計高三萬七百七石八升七合八句五才

託摩郡

○物成八千七百六十三石四斗二升

○高一萬五千九百四十石七斗四合三勺六撮

田迎懸| 本村十 小村十九

○高一萬四千七百六十六石三斗八升三合四句九才

〇物成八千五百石二升五合

本庄懸」 本邨三十三 小村十八

女八千二百十九人

〇戸口男八千四百七十人

總庄屋

五町懸 四懸アリ

會所

他邦

懸命類

官辦

言手永ト伝

代一人 書記二人五石二口

部下ヨり一二里/間

の

黜陟進退政府の命を奉て指揮す郡懸如左郡代已前

より局府なし安永六年始て此局を建郡代此局に

座班寛政九年に此局をして元の如くなる又享和

二年叉此局を立らる安永に復す文化十一年より一

日越に出席になる

カコヒモ

邦國郡政の事を郡方奉行の指揮を奉て行ふ農力

孝悌惇朴の風化を誘導き貢租調傭産物の

職料二十苞

|郡代】 十八人

二百石高

爵物頭格又手士

都方奉行

荒仕子

郡代局

書記各郡－記之

手傳 二人

地内撿十石三口役料錢

手代一人

小歛逋欠魚鹽陂池築堤溝洫濕澤山林貨財義倉委積

廩藏九穀都て民間利弊の政令を掌り惣庄屋巳下勤

内より

井樋塘支配

敷上に同在中に居る家人の

を主る

員数上に同郡代の手に付て郡中の監察

なり

此官山林蕃茂の事を掌り常に經廻して見打をする

山口 アリ員數同上

郡中の度狹によりて二人三人又四五人に及ぶ

其に

山支配

○高壹萬七千三百三十九石一斗九升九合五勺五才

○物成七千百六十八石一斗一升三合八勺七才

五十一人俸米十五

女三萬二百四十九人

カコヒモミクラ

一郎

○戸口男六萬五千百十八人

頭百姓 ア

五列 アリ

○本邑 六十四小邨九十七海村 庄屋アリ

横目 アリ 詰夫走番 時の繁閑により人數定數なし

下代」四五人 三四人

頭

副丞 類

丞ノ類

一二六

此局、國中民部ノ戸口郡岡籍井田貢賦ノ逋欠

シン

荒仕子六人 使命ヲス

郡局 書記十四人 郡曹ノ官印アリ

根取三人

諸帳支配 一人紙配人を兼ぬ 手傳 二人此局は政府

往古よりの故籍奮典諸分曹の簿書策簡の出納脩補

及紙墨筆の類を掌り分曹の用を辨ず小細工 二人

書書の綴織糊續裁決等の事を掌る

漢名戸部ノ類

方奉行の

府なり書策書此府に納む属 諸帳局

の組

行公義より改めらる」に付生死存亡改名住所替縁組

縁

此局は邪蘇道者轉類族等

類族局

漢名無比

輕四十歩 〇年間格

二十歩

○足〇 役人格 五十歩 ○小頭格 三十六歩

長柄之者

〇六石五石四石 三十六歩 〇三石 二十四歩

扶持方取月俸

〇十石 五十歩 〇九石八石七石 四十歩

等すべて出入にか～りたる事を取調類族一二五

此官は換見の役にして上内さ云者内十七人有妙

解公襲封の時より此官を立られたり延賓年中まで

用ひられたり延中に土免極と云事起り方の法

改る其法賓曆年中迄行る賓曆八年に地引合さ云事

始り明和の中年に終る是にて方の法改りて細密

詳悉無不盡民間の餘澤此時に渇す又安永三年に発

方潤色と云事有りて歛法又改りて民食随て耗す又

文化三年貢法を改めらる是を請免と云國中土地善

悪を擇はす撫苑三ッ八歩と云に極外に二萬石の現

米を賦す二萬石と三ッ八歩とを台て年の豊凶に拘

らず歛賦す此を受と云此時に内撥の官を罷む換

見の法廢絶此又貢法古今の一大變なり予別に論有

今茲に不記内檢は上見十五石四口獨禮外に十俵

の米を給役料錢

内檢 五十七人

牧牛蓄馬養蠶桑樹土木道路橋梁舟材/政分又貧民

賑恤ノ事ヲ掌ル郡方奉行部尚書ノ府ナリ簿書策書

此府二藏ム附屬ノ部局

勾會川瀆陂池築堤堰决溝洫河渠丿導達山林丿暮兢

サンヨウカワホジミトモツキ

此局都下侍屋敷大小身ョリ中間二至ルマデ住居

/屋敷出入/指揮ㄕヌè屋敷方奉行2府y屋敷

丿廣狹祿秩/多寡位階/下上二曰9元常則y

ジャウカ

屋敷方

从 勘定局ヨy兼之

荒仕子| 三人 三石一口

三人

采地アリ中小姓アリ

手傳

拷問役| 五人 十石二口

獄丞

三人 七石二口

錄事

二人

三石二口

横目 穿鑿役

十石四口

同丞

職料

百石以上

目附

職料三十苞

百石以上

穿鑿頭 二人

漢名大理正刑法方奉行ノ屬物頭格

〇二十石 九十步 〇十五石 七十五步

〇千石 八百六十步 〇九百五十石 六百八十步

〇八百五十石 六百十二步 〇八百石 五百七十

六步 〇七百石 五百四步 〇六百五十石 四百

六十八步 〇五百五十石 三百九十步 〇五百石

三百十六步 〇四百五十石 三百三十步 四

百石 三百步 〇三百五十石 二百八十步 三

百石 二百六十步 〇二百五十石 二百五十步

○二百石 二百四十步 C百五十石 百八十步

○百石 百二十步 ○中小姓 九十步

切米取歳俸

右百石二八十六步則

○六千石 五千百六十步 ○五千石 四千三百步

○四千石 三千四百四十步 ○三千石:二千五百

八十步 ○二千石 千七百二十步 ○千五百石

千二百九十步

右百石高二七十八步/則

○八千石 六千二百四十步 ○七千石 五千七百

六十步

○一萬石 七千八百步 ○九千石 七千二十九步

一館中=名牌ヲ設テ生員外生作輟ナク會集スル者

ノ姓名ヲ署シテ壁上=掛ル版アリ版黑塗ナ

リ牌表朱背黑ナリ朱ト黒トヲ以テ虚坐班ヲ

分ッナリ

一諸生館中=優游涵泳每日怠ル事ナク辰牌ョリ未

牌=至ル教授是ァ督シ訓導是ァ助ク會讀復講

三習貫其侠洽ヲ致スナリ其餘獨看歷史諸子百

家詩文集等皆博覽涉獵ス是ヲ旁業ト云諸子百家

皆經ノ羽翼ナリ經明カナラズ諸士不通ナレバ

經濟施ス事ヲ得ガタシ虛文狹少ノ害アリ詩文

固ョリ藝ニ游ノ一件ナリ又此二技=セザレ

バ古人ノ肺肝探ル事能ハズ如何ゾ經史ヲ讀事

ヲ得シャ是詩文ノ會アル故ナ

一諸生平日俗語ヲ遠クベッ參校赴館赴堂ト云出

席坐班ナリ懈怠曠ナリ積分皆勤總算

用ナリ外出離堂ナリ鄉里=歸歸省ナリ休息

暇日ナリ

一外生會讀日夕=至ル經子史集日期掛板アリ訓導

是ヲ督ス

時習館印記トス

格調優美ナルヲ一分トシ交

ラ算計スルアリ詩

奉行二達ス是穿盤所罪人換シ其情ヲ得ルヲ

1111

要トシ刑法局其ノ罪状彈糺シテ罰ヲ行フ推鞫

與治罰」ト兩斷ナリ

ギンミ

此府、又推鞫訟獄彈糺罪名 其勸帖以刑法方

1

クチガキ

穿鑿所

此局罪人ヲ治罰スル事ヲり國中ノ 誣及徒

覆刑罰ヲ斷ズ刑法方奉行ノ府ナリ 大理寺@攵：

刑部尚書

策書此府=藏ス非義構へ闘諍籍盜及禮節違背

スル者奉行く指揮奉テ廻役ヲ遣テ追捕スル

廻役 五十人 6 足輕格本職十四人受場廻三十六

人坪井 京町 古町一所二十二人宛書夜經廻シテ

非常ヲ正ス竊盜ヲ索搜ス屬府

刑法局 諏

漢名大理寺類

義理並長字句則アルヲ一分トス

別錄

右學政大略ナリ

詩文策7歳ノ終佳惡辨

一叉積分ァリ是諸生

公上達シ賞罰アリ凡經アムル事三年一經

ヲ脩ム三年ニシテ學進マザレバ寮替ヘ師ヲ改

テ其耳目心志新ニシテ變化セン事ヲ要ス六年

ニシテ化セザレバス如此スル事九年ヲヘラ業成

ラザレバ民間=罷歸ラシム是進退/大略ナリ

一各齊整ニシテ常=潔ニシ几席縱橫書帙像抽

ヲ許サズ烟器茶粉糅スル事ナカラシメ異色間

雜ノ人入ル事ヲ許サス又釀酒狂歌ヲ許サズ人物

アル者班一等ヲ下ス中年以上虛曠ナレバ共籍ヲ

削リテ不列疾病故事アル者是=限ラズ三年

ニッチ通一經不通者移】學習”易アルマッナ

リ九年ニシテ變業ナラザル者テラシム俊

材成立者又留學フュルシテ業ヲ卒ヘシム故考課

ノ法アリ考課ト課程試テ子弟坐班ヲ下上

スル黜陟ノ法ナリ毎月二十九日モック八三十日

ニ勤情ヲ考テ毎季ノ終リニ再ど考マタ歳ノ妙ク

二考ヘ國子總敢=達ス是ヲ小案此ト云三年二大

ニ會校スルヲ大比ト云小比國子總-

貶アリ大比シテ

惰督責勤者班一等ヲ升ス一月二月

一出恭入敬牌 此生員離堂及塾外ヨリ往來夜讀ス

ル者ニ附シテ出入通ズル門札ナリ表出恭入

敬四字ヲ寫シ背ノ右角二付ノ一字書以下

黒印押下ノ左角=生員/姓名ヲ書ス黒印

テス

一藏書二一時習館藏書印ト篆文印押ス朱ヲ以

一勘合簿 毎日坐班及虚曠ヲ記ス帳面ナリ

一供書簿 是籍典給借目ヲスル帳面ナリ

共出納開閉フ愼デ紙葉牙籤ヲ毀損スル事ヲ許サ

ズ

一通知簿 會識復講背書等/日課ヲ記スル帳面ナ

一集衍心冊 罪犯ヲ紀錄スル帳面ナリ

一每日坐班ニ朱圈ヲ印シ虚ニ黒圏ヲ印ス一

月三十日ヲ十方界畫シテ一方三三圈ヅ、十方

三十日ナリ是明!國監!制ナリ是諸生ノ惰

作輟ァ錄スル帳面ナリ又簿帳如左

ヲ臧否シ淫技熾慢談停止ス乖者アリ

一諸生ノ館入者姓名郷里年康及入館ノ歳月

ヲ記シ椿分通考ノ爲ニス

11111

三人

手傳

七石二口

三人 十石三口

役人

三人 十石三口

根取 一人 中小姓

目附 二人 職料二十苞

三百石高

右學校文武官員大略ナリ館中典籍及肄業ノ戎器吏

有テ管篇主ル其ノ覽事ヲ乞者供書簿記シテ

許與7吏其出納ヲ嚴ニシテ其開閉ヲ愼ム吏如左

右各期日アリテ子弟ヲ誘テ榭ニ赴キテ肄業ス

音樂師 一人 於館中肄業

馬術師力

炮術師

游泳ハ五月朔日ヨリ八月晦日ニ至河濱

一テ水練習蹈水術ヲ熟練ス

二人

|游泳師

一人

體術師

1 11 1

一講堂=訓導宦一人當直日夕更番シテ終日無訣坐

其疑義ヲ質ス其外八日斯會讀詩文ノ會アリ

一初一日暇十五日暇其外三十日=至り虚曠ナシ

一入學ノ諸生中二八考校一年ニシテ離經辨志ヲ

視三年ニシテ敬業樂群7砌五年ニシテ博習親師

ヲ觀是小成ト云九年ニシテ知類通達是大成ナリ

怠惰ナル學ヲ敗シテ大患ナリ故二日省月考テ

時試歳=課シテ其藝業ヲ等クシ此ヲ進退シ勸

一朔望二日暇ナリ每月三八ノ日明閤説經ア

リ聽衆斂襟正坐ス少長必順尊卑必序アリ誠心受

用シテ傲慢喧聒シテ禮法=遠事ナカラシム

一諸生之業嚴二課程孝經論語一科。易詩書一科。

春秋三傳一科。二禮二藏記一科。是爲正業古義

ヲ主トストイヘドモ新注モ又廢セズ彼是參考シ

至當=歸スルッ主トス

一履亂錯スレバ有罰威儀ヲ整飭シ後進ヲ表率ス

ベシ

學政科條大略

荒仕子 三人

有東榭西樹

此官は陰陽變化天文推步易道の妙用律暦の微及田

疇の細に至るまで皆至道の寓する所民用の最切な

る事算術に過たるは無し是算學の任する所なり

右幼儀數學の二師は文學に屬して齋中に於て業

を肄す

數學師| 五人 平地百不已上已下

も楹桶に餘りあるべし世代奕ては大廈高堂を支る

の材森然として出ん若氣短にして旦夕に効を求ん

させば久からずして壞べし是學校造士貢士の法于

遠に似て于遠にあらず深謀遠慮して小利を見る事

な此幼儀師の任なり

カサ子

又曲職小儀弟子職の類父兄に事る坐立進退砌膳

吉凶軍賓嘉の式等をゆ徳行の基とす木を植る者

は十年の後に利あり德を種る者は百年の後に利

り士を訓ゆるも亦爾り如是漸を以誨成する時は歳

月久きに及び國の子弟風儀一人倫いよ(明

にして國用に供するに足んたさひ棟梁に至らずと

二三百石又中小姓獨禮步段

射術師

柔術師

一人

二人

啤具師

具足師

人

小一二人

組打師

人

五軍學師

陳信信玄北條山鹿八幡

四人

炮術六人

師

犬追物師」 二人

槍術師 五人

アリ年勞ニョリテ席進み

劍術師

各有門流俸祿不同百石ョリ

十四人

四人

居合師

此講武堂なり學館の傍射圃を設講武校の所諸技

の士爰に至る傅日有文事者必有武備かたん廢す

べからず各有其師子弟の勤惰考課の法厳なり其技

員如左

ず國家の具にあらず唯姓名を記するは是坊間徒胥

・チウチ

習書は蒙科より誰に把筆字様の法を以てすべし

把筆、法の如くならざれば長じて書を成す事を得

此官筆論精熟把筆撥法の如くなる者任之

|坐督 一員 坐督代見代役ノ類

習書師 一員栢哲

日石已上又八中小姓

習書齋

朝五時半ョリ午後二至ル

b

孝經論孟學庸五經及唐詩選左國史漢等に限る

背誦攻業の漢文義や~通する時は簡試して

の列に入る講堂に坐班して會讀看詩文の課に入

る此記に二十にして出で外傅に就とあり王制には

十三にして始めて小學に入年二十にして始て大學

に入さあり尚書大傳には十五にして小學に入十八

にして大學に入とあり只大戴禮及白虎通に八歳小

學十五大學の説あり年の小長は伶悧遅鈍によれ

子弟十歳前後より十五六歳に至るまでを調す

月三次嶌幅あるべし窓壁戸に塗鴉する者は擯

罰あり然れ共童子の性遊戯を好む強て責罰すれば

學館を畏る~事圀圄の如きに至と函史編に云る如

し却て過厳の害を成す事あり故に坊間時師の責罰

に傚は却て殺を害するなり是を以て舒暢せん事を

要す畏縮せしめん事を要せず是を束縛を馳驟

する事牛馬の如くするは菁義育才の本意にあらず

故にたぶ日月を此官國中の子弟をひきひて時々に訓す和國の故式

一一九

上又

幼儀師

二人此故實師上武田小笠原ノ二流地百石巳

重じて怠らずいつとなく習熟する

ように殺る是蒙養習書師の任なり

セキカ

の習書のみ漸く以て書符の用をするのみ故

に其鑑本は千文急就章等及唐詩の類及稍長じて古

法帖を以す又其好む處にて六體の書を誨ゆ六體

乗脩する事其師も又難とす又或民用に切なる字様

を誨ゆ机案整齊筆硯潔淨を加ふ把筆法正(字様規

矩に協ひ點捺法度端正ならん事を要す時に孝

悌忠信等の故事を談じて聞しめ感發興起せしむ毎

タワムレガキ

惟齋崇徳、徳必有隣、以會友、以友輔仁、不

磯不緇、精義入神、言行月將、藝業日新、克慎于

此、君子之人、明閣ノ額アリ長岡内膳書

是を九經と云是を正業とし諸生を敢導す會輔齋銘

諸生の正業を督し講説を掌り詩文を刪潤と月季歳

抄に積分を考課して國子總敢に達すれば賞あり

れば貶せらる唐の國子博士の如し敢授正業

○毛詩 〇尚書 ○禮記 ○周禮 〇儀禮

○左傳 〇周易 ○論語 ○孝經

物頭格

職料

助教

一人采地百石已上

時有教授

時進爵一等爲番頭格

頭

物

1

號會輔齊訓導官及生員會讀之所有時教授坐督詩文

會皆於斯

使命 一人

教授局

二人

職料

員

句讀帥

采地百石已上

一員

蒙養講蕬采地百石已上

齋

師

句讀齋

朝五時ヨリ入時=至ル

ヲ置朱墨筆硯ヲ続屬ス會讀生督ノ外皆獨看ス

訓導督」之删ñ潤士之詩文: ●館生、凡館中二有

ノ生員ナリ○外生館來往シテ學ブナリ句讀

終リテ簡試後會講背誦列=加テ講堂ニ入訓

導師誘之

授 ı 講ñ説經書 ı 生員ァテ會講ス唐ノ國士助教ノ

如シ旦タ交番シテ間決ナカラシム各案一脚書筐

教

此官一人爲啓事餘五員每員掌 諸生:三八日代三

六員 職料

[導官

采地百石ョリ ・巳上又中小姓アリ

靈威公の眞筆なり

堂中上面仰止の二字額あり

試業

講堂

朝五時ョリ昏時ニ至リ諸生坐班シテ

一一八

右同二百五十六人川尻 四百三十六人鶴崎

浦水夫」 三千三百六十一人

加子」 六百九十二人 六石二

右同百三十人川尻 二百九十八人鶴崎

船頭 四百二十八人 八石三口

右同

組脇 四人 采地又は中小姓あり

鶴崎二人 川尻二人

船頭首

四人 百石已上叉中小姓市b

カシラ

船方奉行ノ屬爵准物頭

船方

船方局に屬

雨水塞の舟の指揮を掌る舟方奉行の府なり簿書

策書此府に納む屬官舟手あり如左

鶴崎里ニアリ

府城入南二里

此府は川尻

同上東方三十

栂濱地各水塞所 船方 書記三人作事力ョリ之

根取二人當用局 my兼之

漢名舟楫署

二人 使命を無

學政を提調し黜陟を専制す唐の國子司業の如是

國學を重するは人才を教育し國家の用に具せんが

爲なり總敢局なり

國子總敎 一人 命宗室為國子總敢

講武堂

同榭有東西榭

學校

時習舘各齋下條陳

學文堂

漢名國子監

額玉山書

此局は學校の上府なり學政を掌る學校方奉行の府

なり簿書策書此府にむ

學校方| 从 勘定局 my箫之勤ム

書記四′

君公東都交替之時舟中被召仕事右同斷也

右浦々の郷民に寛永十六年閏十一月手常被仰付た

る員数なり不慮の備に役せらる時は跡の妻に

三口を給せらる~是を水夫跡扶持と云

二百六十人八代 四百四十八人芦北

鲍田

四百五十四人宇土

千五十六人二百二十九人益城

八百十八人玉名

鍔鍛師

11.

鐵砲臺師 四人

柄巻師

鐵砲師 三人

弓師

金具師 三人

シナヒ師

具足八人

師

已下准之一

刀鍛冶

各十石三口内外有差等

九人

「掃除支配

五人

三人 二口宛

弓鐵砲支配 三人

具足支配 三人

三人 叶石三加一口

目

三人 顧不已上

目附

百石已上

鹽焇支配

八石七人

書 右有所屬而勤三邦國之用,城郭中の出入城内方奉

行の指揮を出入す城内の事外人猥に窺知事を許

さす又機密多ければ詳に記さす其職員の大略を記

七人

七人

繪紙漉 筆師

石百工天守方に属して日々其用を勤む

研師 四人

四人

弓矢師

三人

縫物師

馬具師

雜細工

人人

鍵柄師

散打六

革細工

師

目附

-

百石以上+

揮す

官長なり府中所々掃除道路の廣狭を改め修造を指

二十苞

掃除頭

石三百石/内

掃除方奉行冫屬平士

道方

掃除方

已上作事所の附属にして日々の造作奔走を勤む

日傭夫あり造作の大小によりて増減あり百工都

て九月より四月迄早晨六時より出て昏に帰る

掃除局

十四貫

多

抱夫] 十八人 一半

給錢七八貫

小屋手傳| 十人 諸方役使 三石一口半

廿九人 䱇木ノ力役7 五石二口半

手木

七人 百工ノ勤惰ヨ促ヌ 五石二口

働夫 二十人 一口半 2餞右一同

二人 料二十苞

天守支配頭

石已上二三百石

漢名戸部中耶二近物頭格城内方奉行屬

此府は軍國の戎器儀仗鹵簿平常修造出納の事を掌

天守方

城内局に属す

此府は城中の出入戎器の脩造資糧一切城内の政事

を掌る城内方奉行の府なり書策書此府にむ屬

府 天守方あり此内に又分」職如左

城内局

三人勘定局ヨリ

石一口

支配番人

人 五人 五石一口

掃除人

人 六石二口

人仕

二人 七石二

録事

一人 十石三

二人 十石三口

十六人同二口

小棟梁

十石三口外加二口役人格

同格

大棟梁

三十二人

十三人 十石三口外加一口

二十人役」 兼録事 五石二口

六人 七石二口

錄事

役人 三十四人 八石二口

四人 中小姓十五石根取

五口

目附 二

二三百石2内10任

漢名將作監爵平士作事方奉行屬

此官は邦國脩造建立土木營搆梓匠の政令其外雜材

を致し其曲直適用の差を分ち其器用を制其功巧

を程す及版築塗泥の事を掌る

タテン

普請作事頭 二人 三百石高職料三十苞

物頭作事方奉行の

細二人 間内丿使命 三手傳

石二

以上百工皆其長ありて統之

柿葺

十人 六石二

疊差

竹細工 十人

六石二口

屋根葺

瓦葺

四石一口

七人 草取兼

瓦工

張付師

十石三口

棟梁一人小細工ヲ

小六人 六石二

工

事

左官

八石三口

神梁一人塗呢!

事

石工

十石二口

穴生下云石壁

國中の鍛冶都て風之勤公用

鍛冶棟梁

にあり

此局は巡見使諸侯の通行諸方の來賓使節來社吉凶

禮之儀式都で他邦に係りたる事及使僧飛脚の類

君公東都參勤朝聘の事を掌客屋方奉行の府な

り簿書簡牘此府に穢む此局に属する客屋熟客 所々

當用局より兼職

客屋局

漢名司儀署

此所は都下より十一里南方にして薩州境邊要の

城地なり正保の初年より家老松井佐渡 守之代

此地の城代たり外に番兵四十餘人副守たり町

奉行松井の家臣勤」之 熊本町は町方奉行の支配

たるにより別に町奉行なし、

〇八代町 二人

二里

〇高橋町 一人

右同

職料

○高瀬町 一人 里

二百石高平士

曬料

二里

○川尻町

部下より 五百石高物頭格

五石二口

三人

町廻三人宛足輕

漢名市正司

の程式悉くす分て此を細にすれば普請は城

郭石壁修築を指揮す作事は官府公館の經治興造墻

塀の修理を指揮す掃除は城中を始

一一三

普詩作事所

公館庭中都下街道の掃除隍壘の修理を指揮す

道方は道路の修造を指揮す各屬官あり

漢名將作署

ホリド、

カト

此局は土木の事經營興造の衆務凡城池の脩溶善葺

ホリサー

フシン

掃除道方 書記 二人

普請作事

根坂 二人 當用より勤

漢名工部の類

三人 三石一口

荒仕子

二人 七石二口足輕格

錄事

客屋支配 二人 中小姓十五石五口

同掌客

客屋

漢名典客署

此局は城下市中の支配を掌り公事訴訟萬事の指揮

を取調す町方奉行の府なり簿書策書籍此府に

す城下町如左分て十五懸さす

小便三人

職粗三瓜

書記四· 市井督官印あり

町

根取已下寺社局兼職,

根取

漢名諸市署

錄事 一人 七石二口

手傳

荒仕子

|支配役 二人 八石二口

仕子の判及協圄の食事を調るなり

此府は薪の所藏荒仕子會所下臺所此内にあり荒

炭薪會所

漢名鈎盾署

四人 三石一口

荒仕子

丁目三丁目三丁職人 二丁細工町六丁

中古 十二丁東古町十三丁

丁 京 是を四ヶ町さ云熊本を加へ五ヶ町なら四ヶ町に市

正司あり別當以下熊本に同じ都町局に属す又宇

土町佐敷鶴崎熊本にす郡代支配す

マチ

川尻町 高瀬町 高橋町 八代町

雑居を禁ず又都下の火災火消の組を定置て非常を

戒む叉城下町に准る町

ジャウカ

右十五懸を合て八十二丁なり夫を四ッに分ちて坪

井京町古町新町す一懸に別當役あり二三二人より

五六人迄あり此悪の長なり一丁に丁頭有一人づ~

なり一丁の長なり五人組の法を立一組に組頭一人

づ ありー悪に肝煎物書ありて一二人づ~別當以

下町方根取支配す市中店肆の内に士農其外遊民の

出京町三丁 本坪井町

三丁 本坪井町八丁 新坪井町+二丁

町三丁令京町

一丁

紺屋町

西古町

蔚山町

1

新一町目五丁同二丁

丁目 三丁同三丁

1111

賄物所

手傳 一人 三石二口

荒仕子 二人 三石一口

録事 二人 七石二

支配役 三人 八石三

此府邦國日用 の器械屏障襖幕帷匱籠盥器桶夜具

衾膳椀鍋釜燭器一切の械器此府に納む勘定所の指

揮を受て出納を掌る

諸道具方

荒仕子 二人 三石一口

手傳 二人 三石二

二人 七石二

録事

支配役」 四人 八石三口

四人 八石二口

111

手傳| 三人

三人 三石二

三人 七石二口

録事

支配役

根取 一人 中小姓十五石五口

此府は國用の金銀錢を蓄儲し出納の事定所の指

揮を受て取調す

銀倉

荒仕子 四人 三石一口

三人 三石二口

手傳

録事 二人,七石二

支配役 二人 八石二口

根取 一人 中小姓 十五石五口

を調す出納は勘定所の指揮な

此府は邦國日用の鹽水醬乾果酒醴向食餅饅の類

右勘定局一府の官なり屬府左の如し

荒仕子 二十八人`三石一口

小細工 三人 三石二

八人 三石二口

手傳

切手番」 六人

六人 五石二

錄事 五十餘人 十石三口

是謂司書

根取」 七人 二十石三口中小姓以加二口

出るを勘ふ官屬如左

す國用の支入を計り

サンヨウ

外現米三十石

勘定頭」 五人 百石案料二十五苞

右勘定所一府の分曹なり又附属の官府條下に陳す

勘定方奉行屬物頭格涌名司會周禮主天下之大計官之長

ヤクショ

當用局

此局はすべて常用臨時の諸貨器用出納の事を掌る

を掌る

買物局

此局 布帛及諸品國家入用の器物貨の類商賈より

此官府に班坐して國計を

根取 一人 中小姓十五石五口

此府は勘定所の屬にて所蔵の貨物布帛筆硯紙墨苧麻

糸繩紅粉油蠟灯燈等の品物勘定所の指揮を受て出納

を掌る

小間物所

荒仕子 二人 三石一口

手: 二人 三石二

書記

六人 八石三

二人 十石四口

此官は貢税總勾會米銀所々の出納其外貨財様々の一

ヶ年受拂の清算をなし過不足を糺す役な

二人 百石二百石之間職料二十苞銀二十枚

漢名 勘定奉行の

算用所

一〇九

人人

四勘定局は栄地の士巳上月俸歳俸の事を取調す

局

局

總銀二

テトリ

チギットリ

根取

漢名大府寺又計局

切米局

此局は切米取已下月俸歳俸の渡し方券帖を取調す

課忠課賞褒及市井農商の勤惰褒貶を司る選舉方奉行

の府なり書簡牘此府に藏す

キッチ

フチカタキリマイ

此局は金銀錢米栗諸穀出る所の議定此局にて券帖を

な

拂局

此局は歩使番以下官吏卒徒隷に至る迄進退の政孝

キッテ

四

選舉局 諏

根取録事智術廉潔の人を撰て任ずべし

已上三局を合積り方云府最要の勾會なり

11-

の官吏淑悪考課を掌る根取の調なり

漢名吏部の類

議

來買受局

而

此

考績方此局に属す三年にして考績”是内外文武

すす職内

三年大比賞罰の政令を司る凡事は密を以成り洩露し

て敗る故機密局あり家老の文書を取調す奉行六人都

て此局を指揮す

質

の

議議 議穀

得現銀局

金

失納得失

銀 事

現米局

此局は米諸穀の出

此局は國中の大事誥諭の號士の選授勳封考課積分

所

府内に分曹あり

勘定|機密局

官印有

佐貳役 二人

勘定局の屬唐の大府寺の如

漢名秘書の類

下勘定所算用所 銀倉

for

等

を辨

左

夜一人づ~用番の受持有政府退去後不時の用根取其外畫

なり此局は當直奉行の府なり日々の雑事臨時の用を取調 此局は國中旬會度支金銀錢米粟出納の指揮を掌る局

す簿書策書簡牘此府に穢む

トウジン

書記勘定方奉行の府なり簿書策書此府に藏む屬府如

取調し渡す米倉銀倉の其券帖をして米銀を出す根忌ㅆ

同史

物頭格内一人

交々東都の藩邸に交替す其外日々政府に坐班し一人

主事

常用局

漢名11

牧阜成兆民

五十苞

六人奉行

内二人は副役なり五百石高役料四十苞家老之府なり政府と唱唐の尚書省の如

奉行所

名周官の六唐の六部の如し爵位中比着座吏部尚書の類

この符帖に官印私印を用 別あり

番頭格淦國中上下の淑膳を監察して目附に以聞東都藩邸に

二人大阪に一人交番す京師にも大阪より來住するな

今は十三人あり傅に云十目之所覩十指之所指其嚴

哉國中之洪廣不洩十人之監所以立此官也

老さ唱

家老中老と同席して政事の参議を見聞す外に職掌な

納諸士の宋地俸米増減の事

役料百苞

大目附 此官常に政府奉行間に坐班して萬機を察す屬に

漢名御史大夫之類なるべし爵位右に同大監察なり

目附 ん

石高職料二十苞

是官日家宰掌邦治続三百官均四海」とあり此官なら

んと飲る者は訴状筐に入るなり

君に聞達し可許を得て奉行す常に私第に銘を

大奉行 一人 千五百石高役料百苞

漢名尚書令に穎す位 留守大頭同列

周禮には家宰と云が如し

君徳は深沈寛洪を尊び給へばなり

ヤスハコ

聞す大奉行審にして家老中老に以聞事の輕重によ

君公は自ら聰明照察を不尊故に老を得て任」之給づ~常直し政治を僉議し淑慝を討論し大奉行に以

ふ並

一〇八

家老中老に參座と國政を開聞百官を總領と端揆に儀

刑し諸號令を審にす奉行の長官なり 最任重し案

二人 千五百石高し或は家老の代として東都の藩邸に交替す是を旅家

錢米懍出置て國中の寃滯を申べ以萬人の情狀を疏通し直訴せ

其の官長の下を抑塞せるを訴へしめて只管に越訴

を禁じ猥に越訴する者は有常刑分職如左

漢名中老屬爵物頭格

人 三百横目十人あり十三石五口なり目附の指揮を受て

|印 八百石高役料し案周官六卿分」職率 其屬以倡二九

一〇七

許可是

九曜間 中柱間佐野々間鷹間 月間鐵砲間 廣間

ネガ

ユルス

ッテ

と名づけ叉披雲閣と云表の書院を

寛政九壬申冬妙解公封の在城し給ひ其後此館を

政を開り開事家老に同じ以上家老中老日々政府

在城之時遊宴華圃の地なりさ

中老職 二人 三千石高役料二百苞

傅へ云此館は先國主加藤主計頭清正同肥後守忠廣

漢名參知政事之類

の政令を掌り用事を達す官員左に詳なり

所」不」不下以三一職名 其官.

主君在國の時は家老以下百官有司日々交番して諸事以佐國君 理陰陽治三國中統正群生無

主君の館なり本丸外山崎にあり

世官三人あり松井米田有吉なり松井米田は長岡の氏

族を賜り爲稱是を三家と云一代家老二人あり都合五

花畑館

道之要｣

主君在東都の時一人更番して勤之叉國學總の任あ

家老職 三千五百石高役料二百苞

宗室二人に命じて城代たらしむ此

名大夫家老は大夫之家の宰臣を云是と不同

二人長岡圖書

城代 二人

for

長岡内膳

を以て出入を許す劵符符帖無者は猥に入事を許さ

所

府城一サガミ

其外百官有司夫々の部分ありて森然として列

官職制度考一

器械器之類辨其名數以備國用

肥後熊本飽田託摩南部之内なり

城内之事不得詳

を成し門戸鑰鎖晨昏開閉の定あり出入を殿にして

異色異形を禁じて臨時用ありて出入する者は券符

への負數あり内四人は軍團師旅の卒伍を預り將帥の

役を兼勤し組の支配を掌り國政の管轄論治營造ありて居宅となし代々住し給ふ常居の所を陽春

に座班一人交々用番を立政令を参議國中上下

の波を薫正し命誥號の文書簡策用番より奉行

役に渡下奉行役奉」之國中に調達し又人々の願請を

垣 塚 交 成章識

一凡本邦之立官、朝廷有職原、和漢相當、後世訛舛、而厥名實不正、以官爲人名、海内皆然、流俗之弊、

今不得改之、呪元和革命之後、天下宛然封建、列侯三百、各衛其邦疆、受制於王朝、政由聖謨、難以相

似具官員、倭國之俚語、戰國之習號、又重之以風土之方言、爲官名而已、故多不相常漢名、是以取近似、

傍注之、不得其考者闕焉、以俟博識之君子也、

一凡此篇集、不用御字者、倣先覺太宰氏經濟録例也、非敢不敬之義也、

一凡國家之機密、非外人之所知、又非厥職掌者、不得詳也、故多闕如焉、

凡 例

東肥熊府 垣塚文成 章 謹撰

康兆民、敎化洽于邦内、豈不快哉、此國家萬世無窮之統也、小臣垣夜數世浴澤矣、

今述立官制度之略、上從大夫下及徒隸、各記其職掌分數、名曰官職制度考、以秘

欲報此德、是

天無疆、素餐豈自不耻於心哉、故述此篇、欲傳之於不朽、而報國家洪德之萬一也、

雖然乏才寡聞、固拙藻翰、唯記見聞之所及而已、不及者、闕而以俟後日之訂正者

也、文化八年辛未春三月

當疑嘗訛

10K

於帳中者、雖事々非機密、由書政典制度之大概也、 身雖卑下、當辱史職、質無修

行、雖具一日之員、未必賢於寮友、唯游溢於國家之澤、養老扶幼、一〇五

富國強兵、戸給家足、而民謳歌于衙也、妙解公六世之後、靈感公之治國家也、雖

沿祖宗之法、觀察時勢、改革其舊弊、政由聖謨、大得立官之法矣、設府具官、

職而司之、謂此寶曆之改革也、名實官爵大定矣、又設成學校、敎化大行、温柔敦

厚之敎、亦未嘗廢也、又建立靈學館、救人民之疾苦、儲義倉而賑恤飢窮、若此者、雖

三代之治、豈外於此哉、予究考國家風教之所由、官得其人、諮事以度、齊物以制、

如此者、不由學校之政行、而鼓舞之以禮樂、導之以孝悌、安能得至于此乎、故永

衙疑衢訛

夫王者馭世也、立官設府、爵位祿秩、以行黜陟之政、是周之所治、而歷代有典籍

也、書云、我有官君子欽乃攸司、慎乃出令、令出惟行、 弗惟反、學古入官、 議

事以制、政乃不迷也、孔子不言乎、名不正、則 言不順、言不順則事不成、事不成

則禮樂不興、 禮樂不興、則刑罰不中、刑罰不中、則民無所措手足也、凡事名實

乖戾、則玉石交錯、涇渭混淆、美惡無辨、清濁不分、人莫知所其適從焉、周

公正名百官、而萬邦服其仁、仲尼修飾禮樂、而天下稱厥德、老聃云、有名萬物之

母也、是厥經治國家、以正名立官爲先也、官得厥人、則府能治、府能治、則發號

施令不苟且、號令不苟、則民信、民信則政不迷、政不迷、則莅事無煩、百事擧焉、

萬機簡焉、 上下快樂也、夫我先君妙解公、 寛永襲封之後、星霜至于今二百年、

官職制度考序

•

一或時御會の節御咄に、ひ物も、たしなき物が甘き

なり、後世は書物をかさねて、あまり全備致し過

ぎたる故、書物のうまみが、身にしまぬことに成り

たり、昔の義經は、六韜三略を得んさて、膽をこ

がしてやうやく身に得られ故、其信仰も厚くし

て、六韜三略も書物にては居らず、今は犬打童も

七書を読まぬ者はなし、夫枚書物は書物にて棚に

あるなり、世に書物を秘する事あるは、勢を見ての

智者の仕事なり、夫を秘するは、狭き事なり譏

る者もあれごも、うけられぬ事なり、それも物と

るなり、

一或時、御弓被」遊候に、御中り悪く被爲」在て、

暫く御休息 被」遊、御物語の内に、あてきほどあ

たらぬ物はなし、かくあたらずては、吾も世の中

の慷慨者の部類に入ることよさ、御笑ひ被」遊け

ぬことよ、古人の詞に、人をとりたてんする時、

必ず悪説出来て、其者を捨る事あり、大義を小詞

の出づるにすつる事、痛き哉といふ事あるなり、誠

に大切の前には、小悪を見ては、勝碁はうたれ

物と見えたりと被仰き、

古城貞吉重校

宇野東風校

高瀬武昭しるしぬ

文化某のさし

りに秘するは、抑々末なる事ぞと被仰き、

一君御代に即せられ時、御雪隠の下に、稲のもみ

のぬかのらきてありけるを、御覧被」遊て、もしも

米もやまじりつらん、其畏あれば、行向砂にかへ

よさ、御意被」避けるとなり、かえる事迄にも、御

心を用ゐられ事の、御厚き事を知るべし、

一成時の御咄に、人の悪事を聞きて、よろこぶ色あ

りて、人にも言の葉に、ほのさきこほれるやうに

花を咲かせ、眸子の定まらぬ者は、必らず表裏の

る者なり、大事を謀る内には入れ難し、必らず密

事を漏す媒なり、又眸子の沈み過ぎたるは、姦悪

の相なり、然れども人を見るは、酒座にて見よさ

一或時誰か申上げん、今日は御煤取被仰付候由を

申上ければ、不」怪御笑被」遊て、蝶にまで御の字

はいるまじきに、念の入れる事なりと被仰き、

一或時の御咄に、正直は馬鹿の唐名と云事のあるは、

うはばしりの才智めかす者の云始めたる詞なり、

又此頃聞~に忠孝は愚鈍の門にありと云ふ事をき

けり、か~る事を云者は、 忠孝嫌ひさいはぬ斗の

事にて、よきつらの皮にて、申出づるものかなさ

被仰き、

一或時論語御會の節に、小過をゆるし賢才をあげよ

と云ふ章を、けしからず御歎息被遊て、被仰け

るは、誠に小過をのみか、小惡を勘辨せねばなら

一或時の御意に、かくまでも人の惡き事を聞事よ、

五歩々々には、人の善事もあるらんものを被

仰き、

き、

一或時の御咄に、他人のよき仕合せを見て、あの者

はまへつかた、何々の事したりなごいひて、其人

をいひさますは、聞きよからぬものなりご被仰

一或時の御噺に、終日物語をして、弓矢のさた
たらぬ咄斗にては、さても退屈なる物なり、然れ
ども古き軍咄は、そこ取りそこ出し合せて、首尾
のつかみ物なり、咄の類にふれて、萬事に變化せ
ざれば其益を得る事少し、吾好きの事さて、一片
の咄をすれば、聞くものは吾好き程はなくて、 退
屈出来て、そのちはおもしろき變化の咄にはな
り難き物なりと被仰き、
は、うべなる申ごさ~思ひあたる事あり被仰

1011

御机にか~らせられて、御枕をも安く被」遊ざり

事、三ヶ年の間之事にて、其間は夜の差別なく、

一箕暦御改革の時は、君みづから御精魂を被」盡候

一本三十三ヶ年二作

し、

其事を御内聽にいれければ、よく、銀平には

吾より申聞する筋あり、急ぎ銀平に出候様に申遣

べしと仰有りければ、頓て銀は御前に罷出けり

然る處君怪からず御叱被遊て被」仰けるは、銀平

は役儀を断らんこす、汝が如き馬鹿者は、外様に

出ての付合は、一日もなるべからず、よくも馬鹿

事を申出づる物かな、吾使へばこそ、馬鹿なが ら

も通れり、手づかへなき様に、今日より勤むべし

御叱遊されければ、銀平は誠に何さも申上る詞

もなく、難」有事身に餘りて、御前をさがり申け

る、かくまでの君の御恩の忘却して、不所存を申

出たり、今日よりはたさひ身は粉にくだくるさて、

君だに御仕ひ被」遊ば、死するまでは、御ははな

れまじと感涙を流し、不所存の段を、重々御爵を

申上で、共日より、直に出て勤めけるとなり、誠

に此の事を開者ごとに、感涙をもよほさぶるはな

とりて眠らざりしに、是よりは心安く眠るべしさ

被仰き、斯る事、時夜數有りさなり、

M

しとなり、其御一存にて、御決せられがたき事

は、翌日を御待不」被遊、夜もいはず、御役人

を召れて、御相談ありしとなり、或時夜半頃に、

俄に蒲地喜左衛門を召れけるに、急ぎ御殿に出

ける、折節夏の頃にて、君には御帳に被」爲」入

て、御机の傍に御座被」遊、喜左衛門を御傍近く被

召ければ、喜左衛門は御蚊帳の外にひかへ届ける

に、此蚊帳の内に入るべきよし、御意被遊けれ

ども、喜左衛門は恐多くて、御意は千萬 難」有は

奉存候得共、此儀は幾重にも御免被」遊被下べき

旨を、申上ければ、君の仰には汝も人じゃもの、

蛟にくはれてよきものか、汝が心をおきては吾も

心をおきて、相談はならぬと云物なり、心障りな
くてこそよき分別もつく物なれ、是非〻〻仰あ
りければ、夫にては御辭退申上るは、返て畏多し
さて、御蚊帳に入りて、さまぐの御相談申ける
となり、偖東じらみにもならば、然らば退出致
んと申ければ、これにて心おちつきたり、氣にか
一或時の御咄に、事は足らぬの足るを、つさめても
知りたき事なり、よき烟草を得たる時は、よき畑
管につめたき事を思ひ、よき鳥を得れば、よき籠
を得て入れたき事を思ひ、よき硯を得れば、よき
筆紙墨を思ふは、人情の常にて、よきによきの對
する事、心のまにせば、際限なき事なり、際限
ある金銀を以て、際限なき事をなすは、愚者の愚
こも申べし、大名のおほやうは、大方此愚者の部
類に入る事多ければ、吾はよき事の對する事を、
深く戒むるなり、忘れたらば心をつけ呉よさ仰せ
る時、安否とは、安否とこそいふべき筈の字音な

れぎもと仰せられき、

アンフ

アンセ

一或時御取次に何某、御安否を窺ひ奉る由を申上げ

一或時の御意に、流水はよき物なれども、流水斗に

ては行はれず、ごちやうのすむたまり水も、な

てかなひがたき事なり、ごちやうものな

ば、よそには見られず、事を執る者には、心得あ

ることなりさ、仰せられき、

死後、剛柔の論は定まるべしご、仰せら

れき、

或時鳥井銀平心に快からぬ事の有りて、御近習の

秘儀謝し奉らんと決断を定め、出勤をも引きて、

頭に内意を申ければ、頭よりもそれは不所存の

事なりさて、しひて留めけれ共、思ひ定めたる事

なれば、是非々々御役を不奉」では難叶云

募りければ、組頭もあつかひ兼ねて、止事を得す

れき、

一或時の御咄に、大名には成間敷物ぞ、蛟を一ッ打

殺しても、鬼の首を取様に、御手柄なり誉め

そやされて、太郎冠者の拍子にのる事よさ仰せら

一或時陸奥様と御馬事被遊候に、陸奥様には、御厩

の小者にも、御直にいろ!~被仰付事の有りけれ

ば、君それを被聞召て、被仰けるは、御家にはよき

御仕付ありて、御小者にも御言葉を直にかけられ

候事、御羨敷事なり、私は家の仕付あしくて、 小

者抔には直に物を申事を、家來共より許しませぬ

故、不自由成事多し、返す!)も御家には御

敷御仕付なりさ仰せられき、かくて御改めなきは、

御心に任せられぬ所ありしにや、

られき、

けれ、然るに世の異風雅人は、 家居器物唐物に
てはりまして、強ひて風雅にひを求め、常に
唐物の外物に心牽かれ、物ほしがりに心いそがは
しく、終には物を玩びて志を失ひて、おごりを極
めるにいたる、心をして學ぶべき事なりと被仰き、
一或時經書御會の後の御咄に、聖經の會は、解し難
き所を互に出し合せての相談なり、然るに机をた
~き、目をいからかし、彼に負けじと互に云ひ募
るは、いさかひさも申べく、善を求る心は何れに
あるやを不知、義理にニッはなけれども、常人は
義理は申次第の様にあれば、つまり水懸論成事
多し、其論の替りめを聞くに、一人は内よりして
外さいへば、一人は外よりして内といひ、又一人
は修行の場よりいへば、一人は修行成就の所にて
いふなり、物をよくいひ覺ゆるの稽古とも成べけ

れども、不理をも、理にこりなし覺えては、人の

謝を拒むにいたるの畏れあるなり、被仰き、

一又或時御會の時御咄に、人の剛柔論定きる所ほど、

これ難きものはなし、今の世の人の、剛染を論定

するを見るに、多くは言葉だたかひの上につきて、

何某は剛なる者、何某は柔なる者と、人の事をみ

だりに論する、あるまじき事なり、言葉戰に勝つ

を見て勝させんか、又負くるを見て柔させんか、

世の諺に道理をこのけ、無理が通るぞさいふ事あ

り、まけて居る人こそ、よはしと思ふなども有り

て、言葉の上のいさかひにては、聲の高い者が、

勝利を得る者なれば、口先のりきみ斗にては、剛

しさも定め難し、世には、朝の言葉は夕に其し

ると見ゆる故、身に覚えなき口先のりきみをなす

者は、稀なりき、自慢勝に成りたるは、治世の弊

なり、口は劒の如くあれごも、人にすがりて立身

出世を求むる者があり、是柔の柔なる者なり、「權

現様の御詞に、智者の患者あり、愚者の智者あん

智者の患者は、逃るに心あり、愚者の智者は、逃

るに心なし、事に臨んで平日の言葉に遊ぶほど、

見ぐるしきはなし、平日の言葉よりも、まして事

の出来るは、其人おくゆかしく思はれて、一きは

見よき物なりの給へり、故に言葉にてりきまん

よりは、行にてりきみたきものなり、事にあたら

すしては、生き身ほど、油断ならぬ者はなきなり、

九九

一或時、宇土侯期御殿に被成御出候節、様々の御

噺の内に、當時面白き唄を覚え候、 これは八代萩

原の塘普請に唄ひ候由にて、未だ其ふしは御聞被

成まど、御前にて一節唄ひ候半さて、稲津彌右衛

門様は佛か神か、死ぬる命を助けさすさいふ唄を、

くり返して高らかに御唄ひ被成候へば、君には不

怪御機嫌に被爲入、御笑ひ被遊て、其様と云言葉

は耳立故、夫ははぶきて唄ひてよ、御意被遊け

れば、其様と云言葉をとりましては、唄のごろが

あしくなりまして、唄はれませぬこありて、御笑

に成けるとなり、其御笑ひ聲、御唄共に手に取様

に、表御番の詰間まで、よく聞えけるなり、かく

までぬびやかに、御くつろぎ被遊たる御様子、誠

誇りふを聞くに、多くこちの長所を、彼が短所

にあて そしり笑ふ事なり、それを思へば、脇よ

bは聞くに片腹いたき物なり、たこへば山の獵師

を海の漁師が、海にて勇氣なしさ笑ひ、海の漁師

を山の獵師が、山にて勇氣なし笑ふが如し、笑

ふは却て笑はる」の種なるゆゑ、智者は戯にも言

葉を演む者ぞ被仰き、

一或時、御詩會の席の御咄に、眞の詩人の風雅は學

度事なり、多くは詩人のを見て、其習はしを風

雅さ覺えて、世俗に劣りたる異風雅の學者多し、

眞の詩人の情は、韋物が詩に、獨無外物牽

此幽居情と云ふ心ばへこそ、真の風雅さはいふべ

一或時君御咄の内に、吾此頃よき學問をしたり、頃

日厩の小者共、吾馬の善悪を評論したるよにて、

思々に其者共の、受持の馬に贔負ありて、さかく

人の受持の馬に苦情つけて、いひ落さんさして、

後はこゑ高にいさかひたるさなり、其内一人よ

り其評論に加らざるものあり、申けるは、最負目

に目なしさいふ事は、か~る評論をやいふならん

さ云ひすて~立けるとなり、吾其心を聞きて、つ

くぐ思ひみるに、人を使ふさても、最負目には、

尤がつきやすく、目の見えぬ事のありて、脇目入

目の責を受ん事のおそろしさよ、吾はよき學問を

したりさ被仰き、かく匹夫の言をも御捨不被遊、

御身に行はせらる事の難有さよ、

に恐れながら、つかへ奉り易き御事にて、難有さ

申も畏れあることなり、

九八

一君の御居間の出入口の御敷居、年久しくなりて、

そここ〜のくひぁひゆるみて、出入の時、少しに
ても御敷居にさはり候へば、御唐紙一同にたふる
る事度々にて、或時御火入など打返し、恐入たる
事の多かりければ、御近習の人々申合せて、か
くては何とも恐多し、御作事に被仰付て然るべか
らんさ、奉伺けれども、何共御意なかりければ、
其後七八度も御様子伺ひけるに、其時御意被遊候
は、汝は不入事を気にかける者よ、此唐紙がたふ
るれば、何程の事かある、未だ吾心をしらぬと見
えたり、吾れ國の主たれば、是しきの敷居を替へさ
するは、いと安き事なり、然共是しきの事、是しき
の事と申せば、際限有べからず、今國中の敷居のゆ
るみは、唐紙も立ぬ程にあれば、これほご吾身に
さて耻敷事はなきなり、それを思へば、吾居間
の敷居は、是にてもまだよすぎたる事にて、少し
もとは思はぬ故、夫は無用の事と被仰き、
一或時御客様の時分、御咄に世の中は嫉妬にて固め

たる物なれば、人を使ふに心得ある事なり、被

一或時御近習の人々に御教訓被遊候は、人各長所短

所の無きものはあらず、世の中の人の、人の事を

一君未だ御部屋住にて被」爲」入候時分、内山又助御

傍に久敷勤居けるに、 或時君御意被遊候は、汝は

年久敷精勤致故、何がなさらせ度思ひ、心を配れ

ごも心に任せず、こ~に袴一具はあれども、是を

やれば、跡は白衣にて暮すより外なしさ被仰けれ

ば、又助は涙を流し、 誠に御品を頂戴致したるよ

りも、難有段を御禮申上退出しぬ、又或時何方に

か御出被遊候時分、御鼻紙不被在御持合、御迷惑

被近候時、御傍に木原惣兵衛居候が、恐御用に

立可」申さ、惣兵衛持合の紙を差上げるとなり、

又或時御蚊帳に、多く蚊の入候て、御自身に糸

にてそこころを、御膳ひ被遊候て御凌被遊候故、

下情によく御達被遊候て、難有御事共の多きにや、

一君かねて少にても反古紙の白き所は、御切ぬき被

遊候て、物に入被」置、心の書付は、これにて足

りぬべし、あたら白紙を切崩さんは、國土の費な

御心を被用き、

仰き、

一ある時の御鷹野先にて、いましこやしをかけたる

畑の畔に、むざくさ御腰をかけられ、御書飯を

君殊の外御機嫌損じて、吾を大切に思はど、か~

る柔弱なる心は付けまじきなり、汝等が言の如き

故、大名といへば柔弱にし、病気者になるなり、

のみ度時は金汁の様なる水も、毒とはならぬ物ぞ

被仰て、召あがりき、

w

一成時の御鷹野先にて、小き井手川の流の水を、御

手にてすくひ給ひ、召上らんこ遊しけるを、御傍

の衆より、其水はむさく御座候、其爲にこそ御茶

辨當も、御持せに成申なれ、もし御中り被遊ては、

大切成事なり、暫く御待被遊よかしさ申上げれば、

に頼む事とてはなし、我がまつぽりの若き者共を

導きくれるには、一所に橋をかけぬ様にして、

向の河岸に渡しくれよ、川上の者は川上の橋を

渡り、川下の者は川下の橋を渡り行かば、其者共

廻り道なしに才能をなすべし、とにもかくにも、

河向の孝悌忠信の道にさへ橋をかけてもらへば、

吾用には立つべし、其の橋の掛所は、汝が心にあ

るべしさ被仰き、

なる中に、岡田多喜平、中西格助両人、漸く

御次に屹下ひかへ居て、息しけるは、唯今にも、

君の御大事からんに、腰のぬけるては、何の働も

成難からん、多くの御人も、か~る時は用立者の

少き事の、かなしさよさつぶやき、君には如何し

ておはしますらんと、御次より静に伺ひけるに、

君には少も御平生の御色に幾らせられぬ御様子に

て、それを拝せしより、両人はいやましに氣を引

立て、一騎當千の思ひをなし、御次にひかへ居ければ、君にも御頼敷御意なごありしなり、作畏是にてかねての御氣象のほど、推してるべきな

一君御難船の時、御座船に乗居候人、皆人の色ある者とてはなく、或は打臥、或は吐にまみれ、さま御取寄被遊、そこにて召上らんこ被仰ければ、御傍の人々、そこは唯今にもこやしをかけて、むさく御座候、外の所に御座をかへられ候様申上げれば、汝等は愚なる事を申すものぞ、こやしを嫌候はぶ、野菜は一切くふ事はなるまじきなり、今こ~にてくふさて、こやしの飯につくものにてなしさ被仰て、そこにて召あがりき、

九六

一或時の御嘶に、吾勝手向は五拾四萬石なり、然ごも五拾四萬石の心を持ちては、立所に貧困すべし、我は二拾萬石の大名と思ふ故、其心得を以て諸事を取斗ふべしと仰られき、

一成時の御咄に、世の人の能申事にて、大抵其人に兩三度應對致せば、其人の位は知れるものなりさ、聰敏めかして申事なれども、われは可笑事に思ふなり、蒲池喜左衛門を、初め傍近く申付置候、初三ヶ年斗は、愚人の噓の様成者にて、物の用には難」立からんさ、吾先きさして思ひ、誰も同じ目利にて、既に役をもゆるし申筈の噓、つくぐおもふに、筆て不直なる筋もなき者を、さむも、人を使ふ道にあらず、堯舜は九年迄、人を試みられし事もあれば、きりにしては、あしかりなんと、思ひ居る内に、存外内には大成物のある事を知れり、夫故人程思の外なる者はなし、手綱をくれざれば知れぬ者なり、あぶなき事に、惜き男を誤りのけて、損せんせんなりさ、仰られき、

銀臺拾遺 一名肥後落穂集

一或時秋山儀右衛門を被」召て、四方山の御咄被遊候時、御意被遊候は、汝は國家の大工殿やが、外

九五

一初め時習館を被」興候て、諸事御心を被盡内に、

或日難有御意被遊候は、今度申付候學校の役間に

は、勘定の帳面抔に、無用の事にすべし、諸事入

用次第と被仰ければ、御家老を始め昔々目と目を

見合せ、是は殿には如何なる思召ぞや、斯ては諸

事尻を結ばぬ糸の如くして、御意不可然、 是其役

人共を、私欲の淵に落すさも申べしさ、申上げれ

ば、君仰有けるは、成程汝等が申所、一理無きに

しもあらず、然共我こに思ふ仔細あるなり、學

校は外の役所違ひ、皆家中の若き者の出席

致所なれば、算用らしき事を見聞致させては、お

のこ生立者共の心に、卑劣なる事共の移りては、

行向吾損になるべき事は、いか斗の事かと思へる、

費の多からん事は聊の事なり、たこひ勘定の帳面

ありても、私欲をする者は、私欲はするぞ、少々

は損もせざれば、大なる益はなきものなり、我は

若き者共の生立をおもふ故に、かくは申付也さ

被仰き、

源太書 九四

不置、因以所聞私錄之、稍積爲卷云、余頃者求取而見之、未嘗不掩卷而嘆息焉、

衛武公古之賢君也、而其事業不過年已踰六十、猶克學問、抑々自做、常恐不聞其

道爾、詩人尚且美之、曰有匪君子、終不可諼兮焉、 如吾靈感公、恭儉持己、任

賢不貳、大崇儒術、覃思治道、設校育人材、文敎日興、風化大行、至今民受其賜

哉、其不可緩者、孰大焉、雖然、自今以往數十年、倘其去古已遠、老成人已沒、

而小子後生、欲問知先君之平生嘉言善行、德之所本、風之所自、國無其人、則維

與適從、是人事之或然者、武昭錄而傳之、其所志於斯乎、余深嘉其志、爲謄寫一

本、而藏之於家、命曰銀臺拾遺、李先生既有遺事之作、併讀此書、則足以往觀其

不可諼者云、

高瀨武昭、每侍遊山翁膝下、翁常深感嘆先君靈感公之盛德、而時々談住事

銀臺拾遺序

安 山 房

銀臺拾

遺

文政紀元戊寅除夜

于 壽 同姓丹右衛門儀、此度御知行被下置、重御役

被 仰付、難有仕合奉存、且估奉恐入候、

處御知行の儀、私ゟ御加祿之節奉願旨趣配以、

此節も奉辭度奉存候、每度願ヶ間敷儀、千萬奉

恐入候得共、丹右衛門同樣奉願候間、御知

覺

一平太左衛門嫡子堀丹右衛門儀、御知行千五百被下

置、座席御留守居大頭同列被召置、大御目附被

仰付旨、寬政元年三月四日、於 御前、御用番申

渡有之候、此篩右御知行の儀、御斷申上度奉願

候書付、左之通、

、何分加保養相勤、辭職の儀奉願問敷亡の

儀迄も相達、懇切の願に付、其趣意共に達

尊聽候處、委く被 聞召屆、存立の筋。尤!被思

召上候、第一老人達芼之願、猶灭押難被仰

付、其上辭職の存立止5候:有之儀、甚被遊御

滿足候、旁以此節性、思召の旨在被爲托、願之

通被 仰付候、追而 思召之旨有之候、此上彌

以加保養相勤候樣L亡被思召上旨、被遊 御意

候事、

右の書付九三

公邊 御褒詞之 御意候段、松平越中守殿被申

開、冥加 S 至、於我等古難有事候、此段申遣候、

宇野 東 風 校

古城貞吉重校

一寬政元年十月廿四日、爲御使者橋本惣左衛門、江

戸より平太左衛門宅え來着、申聞候御意の趣、

其方儀從

三月八日

丹右衛門儀、此間御知行被下置候處、御知行

儀御斷申上度段、父子占5奉願候通、達

尊聽候處、厚之存念の通、委細被 開召屆、則

願之通、御知行千五百石、御米千五百俵!!御

直心被下置旨被 仰出候、以上

但此節病氣!不致出席候、

、同席中远差出候處、同日平野新兵衛、

左之通之書付、其宅入持参致相達候事、

三月八日

堀平太左衛門

行は被召上、相態の御渡方を以被召仕下候は

打重疊難有可奉存候、此段於私奉願候條、何分

可然槎奉願候、以上、

此度拜領被 仰付候御加祿奉辭候趣意、被遊

御尋候由奉畏候、乍恐 君意は下命の通に可

被爲在處、於私奉存候は、數十年來御勝手向之

儀、御任せ被爲置候中、御損毛者御物入等打

續、不得止御積り前さは乍申、是は臨時之儀に

て、御勝手向之基本、未相立候故、御家中の御

渡方乏く、一統困窮仕候儀に候得ば、乍恐御政

も相調候とは難申上奉存候、然るに於私者、

抜群の御加禄を拝領仕候儀、御家中に對し面皮

無御座候、君上よりは數十年の苦労、又は臨

時の御手賦、兎や角相調候儀を以下命有之候

さ、乍恐奉存候得共、臣下の情においては、又

別段の儀奉存候、殊に往古も御加禄奉辭、或

は大禄を指上、被召上候例數多有之、此等は

其人々の心次第の儀に候得ば、御賞罰に係り候

儀とは不奉存候に付、奉願儀に候、何分可然

申達候處、其段達 御聽、段々御疑問の儀有之候

に付、右御断申上候旨趣、不奉憚御機嫌をも、左

之通書付に相認め、同役中迄差出候、

奉伺置候處、此度の御加禄拝領仕、夫限りに默

止候ては、老年の進退、御加の有無に抱か

樣相聞候に付、此度の御相叶不申候はど

恐速に辭職仕にて可有御座候、且再應の御意

を戻り奉り、恐入候儀に付、此節の御斷、御取

上被下候はゞ、此上老衰を重候までの内は、御
斷不申上、奉職可仕さ奉存候、右兩樣は奉恐入
候得共、御替物に被仰付被下候樣、奉願度由、
但書付には差加かたく、口達仕候、
候默平太左衛門儀、多年之功勞旁を被賞、御加祿千
五百被下置候處、右御加祿御斷申上度趣、書付
を以申上、右御断の旨趣、文面に難顯内存の趣
も、重疊相違、無餘儀存念、且去秋の時分、辭
職の御内意をも申上置候得共、右願被立下候は
右の通に候處、同十一日被召出、左の通蒙
御意候、
以
私身分之儀に付而は、去年七月、委細書付を以
乍外に口達仕候趣、左之通、
樣に奉賴候、以上、
正月

一當御代、寛政元年正月七日、御禮後、被召出、

段々御愁の御意を蒙り、其上 御筆の御書附、

御手自被遊 御渡候、御書附左の通、

二月五日

に而、萬端無覺束時節、平太左衛門引入

候ては、當惑せしめ、依之役人共存寄迄も相

尋候處、夫々書付の通候條、乍大儀今暫者相勤

候様、委細を同役共より可申聞候、以上

光

御前久被召出、御役御断の趣、被爲聞召屈、

御留め可被遊旨、左の通、御筆の御書付を以被

仰渡、御手自 御腰物 ㎝ 拜領被 仰付候、

一天明七年二月、老年罷成、御家老職御備頭共に難

相勤、乍恐御斷申上度奉願候書附、同席中美出

侯處、同月五日、

七月十日

持せ候十文字の鍵遣之候、以来國中は先鏡に持

せ、子孫にも可被相傳候、以上、

平太左衛門儀、再應の願委敷聞居候、壯健には

有之候得共、老年の申立も無餘儀、殊に数十年

心勞旁以上は無理差留がたく候、然共我等家

督即下右之通にて、御加祿之御禮も早速被遊 御愛相濟

候上、御加祿之儀は御斷申上度段、同役中迄重疊

九一

正月七日

公義え申上、御機嫌の由、殊更に至ても

靈感院樣御忠功を相重、於我等本望の至に候、

且其方儀も、天下老中の噂に預り候段、是又太

慶感心不少候、附属の役人共も、常々出精之儀

さ乍申、平太左衛門儀、兼々抽忠誠候所より、

何れも致歸服相勳候故、國家の事滿足候、旁

以加祿千五百石遣之、都合五千石高に申付候、

其方儀追々取立之儀に付、縦如何體に功勞相重

候とも、此上賞美等之儀堅相斷度旨、同役共へ

申聞置候段承屆候、然共賞罰は政務の大本、於

我等存念之旨有之候に付、右之通申付候條、此

段左様可被相心得候也、

其方儀、先々代以来、政務の根本を掌り、其勳

功國中は不及申、他邦にも、普(相聞、精忠之

至誠、不堪感心候、殊に今度莫大の上納金蒙

仰、於我等甚當之處、其方工面を以、其手賦

り痰に相備り、早速上納金高も

平太左衛門儀、御加増等被下置候儀は、兼て堅

御断申上度内存の趣、 委~被聞召通候、然處

御先代以来、多年之功勞は不及申、平太左衛門

右相濟、猶又於詰間主水口達、左之通、

平太左衛門儀、御先代以來多年の功労は不及申

御代替に付而は、去冬江戸より御直書を以被

仰付候通、御政務の儀彌以御賴被 思召上候、

老人大儀の至りには候得共、随分加保養相勤候

樣、依之只今被遊御意之通、御加増千五百石被

下置候、

一天明六年七月七日、御禮後、平太左衛門儀、御加

増千五百石被下置旨、御直に被仰渡、猶又主水

申渡之趣、左の通、

長岡水殿

長岡監物殿

有吉四郎左衛門殿

十二月十三日 中務御判

人中へも可被申聞置候、將又最早老人の事に付、

掌職の内、大儀に見え候勤柄は各助合、諸事被

附心尤に候、謹言、

平太左衛門え

其方儀加祿之儀は所存有之、兼而堅相斷候段承

居候得共、此間申渡候通多年之功勞は不及申、且

他國迄も聲聞有之儀に付、何分其賞無之候而は、

安心難成、加祿道候處、又固く斷の趣、逐一

承居候、辭讓の節相立候得ば、又賞功の一端を

闕候得共、老人重々の願に付、此節は其方存念

相立、加祿の儀可任斷候、佐之我等部屋住の節、

右之通重疊難有被仰出の趣、奉辭候儀は、奉恐

入候得共、御加増の儀は御断申上度本願候處、 七

月十日被召出、御愁の御意を以、御筆の御書附

頂戴被 仰付候、則左之通、

儀は、他にも相聞候事に付、何分不被賞被差置

候ては、難被遊 御安心候、内存の趣に相違候

段は、御氣の毒に被思召候得共、旁別段を以、

此節之御加増は被下置事候條、此上御辭退不申

上、何分御請申上候機、重々可申聞旨被 仰付

候、右の段只今於 御前、一同申達筈に候得共、

事長~相成候間、猶又別段於詰間申聞候様、被

仰付候、

御書付之通、被下置旨被仰出候、乍然托て右

の通被仰付候儀、於平太左衛門は迷惑に可奉

存候、此段は御苦脳に被思召上候、右の趣、

平太左衛門儀、御加禄御斷に付、猶又被仰出

候趣は、只今申渡候通に付、厚き存念の趣、逐

一被聞召屈、被遊 御心候、然處御政務の

管轄は、格別平太左衛門へ被仰付置、多年の勤

勞数多の勳業、痰にも可被賞處、深き 思召有

之、御賞賜之儀、當時迄御差延被爲置候得共、著

き成功及御國家、不被爲賞候ては、於御政務、

重き御賞賜一事闕候に付、先躍後鑑、何分其通

に難被差置、彌以

口達之覺

右相濟、於家老詰所、助右衛門より相渡候書付、

左之通、

格別の存念に付、被建下度儀には被思召上候

得共、於御家重き動業の御賞賜を、狂而被爲

闕候儀は、平太左衛門存念御感賞、一扁の思

召にも難儀に付、御書付の通、 彌以被下置

候條、此段可申聞旨被 仰出候、以上

以新兵衛備前才助へは於此元申聞候以上、

一筆分申候、今度御遺領無相違被仰付、難

有仕合に候、先規の趣、 彌以入念可被申談候、

平太左衛門事は、御先代莫大の勤功、殊に老年の

儀に候得共、此度政務の事、猶致委任、我等未

熟之見をも加候様申遣候條、此旨被得心、役

一天明五年 大詢院様御家督の節、平太左衛門同僚

中へ被成下御直書、

さぶむ、

このおくは、大詢院様御時より今の君はじめま

で、勝名に加祿、ならひに固辭、ことさら公義

の御褒詞の御事をも、ある人の私記のま~し

右の通太左衛門儀、奉蒙結構至極之 御意、

有儀は難申上盡候處、於身分は彌增奉恐入候、依

之は奉願度所存も候得共、御委細之御ヶ條を以

て、御苦腦に被思召上候由之仰をも蒙り奉り候

上、一己の不得意にまかせ、数々奉願候ては、君

臣の分も不相立儀と奉存奉、重疊難有仕合奉存

候段、先御請申上候由、

又委細申聞候様に被仰付候、以上、

御加増地拜領之輩は、古今類多候内、拔候て別

紙の通奉願候儀は、若は名譽を貪り候なご相

響申間敷哉さ存候得共、不奉顧恐をも、奉願候

程の儀に候得ば、右の儀に孤疑可仕様も無

之御察可被下候、且又先年御加増地拜領の節も、

一旦は奉辭、再蒙 仰候節は不奉辭、 不同の儀

ご御不審も可有之哉、此儀は御役高の御軍役に

も相係り候儀さ存候に付、不奉辭罷在候、右御

長岡主水殿

長岡助右衛門殿

有吉四郎右衛門殿

三淵伊織助 殿

米田波門殿

平野新兵衛殿

口達之覺

堀平太左衛門

九月十日

と、千萬恐多、迷惑至極奉存候得共、於私身分

は、難默止存念の筋有之、奉願候、 願の趣

御取上被下候はゞ、猶更難有仕合に可奉存候、

此段何分宜様御執成奉頼候、以上、

左衛門

右平太左衛門儀、御加祿御斷に付、願之通達

尊聽候處、謙讓之旨趣、具に被爲聞召屑候、

一同年十二月二十一日、江戸三野政右衛門 7組 被

差歸、被仰越旨、於屋形長岡助右衛門申渡、左之

通、

兩通新兵衛受取、左候て翌日、御加增奉辭候存

念申者、先何程之儀に候哉、其譯大略承り不申

候ては、取次之據無之由新兵衛申候に付、平太左

衛門申述候趣、大略兼て於職掌の儀、怠慢不仕候様

に心得候共、其身之涯分にて、不行届之事多、第

一御勝手向未存候程直り不申候、御借物も左迄減

不申、御家中之扶助も、尊慮程に居候て、常~

慚愧に存居候、君者多年之勉強を御憐愍にて、被

仰出候儀にて、重疊難有奉存候得共、於其身は、

御加増拝領之面目無之由也、

九月

堀平太軍役の儀も、先年被下置候御増地の人馬の不

足も無御座候に付、此度は別紙の通奉願候儀御

座候、是等の儀は不及申事に候得共、爲念申達

置候、以上、

八八

右御書付、左之通、

平太左衛門儀、千五百石御加増拝被 仰付候、

依之 御直筆之書附被遊下候望相渡候間、頂戴

可仕旨、長岡助右衛門申渡、

一安永七年、君在江戸、熊本屋形KT、

十二月九日

此間同列迄、内達之趣聞、逐一尤之事候、其

方事、年來國事勝手向者勿論、諸事彼是精勤心苦

不大方、滿足之事汇候、此節强而留の候事、到

而無理存候得共、暫乍大儀被勤候樣仁致度候、

同列奉行共八被相談、暇日保養自愛被勤

候汶、此上太慶仁候、尤同列、申聞置候間、

左樣可被存候、以上、

一安永五年十二月、平太左衛門辭職之内願仕候節、

被下候御直筆之御書付、左之通、

廉乘彫之三所物

此品拵にも可被用かと贈候、

十月十四日

有之候:付、急調兼倆事、其外勝手向諸事心

付、太慶不斜候、以上、

八七

此度御加增地拜領被 仰付、尊筆之御書付頂

戴被 仰付重疊難有仕合奉存候、且不肯の私、

奉蒙結搆至極之 御褒賞、誠以奉恐入候、右之

通奉蒙 仰候上、鬼乜角申上候儀、猶以奉恐入

候得共、存念の儀有之候!付、右御加増地拜領

仕候儀仗、御免被 仰付被下候樣奉願候、一通

之被仰付迄にも無御座、尊筆の御書付とも頂

戴仕候上、如此奉願候儀、不敬!!先相當可申

右被 仰出之趣、平太左衛門難有儀;不及申上

候得共、御加增地の儀、存念之趣有之候汇付、

乍恐御斷申上度、左の通の書附相認、翌十日之

朝、用番平野新兵衛宅人持參差上候、

覺

右之通:付、冥加至極難有仕合奉存候段、平太左

衛門御請申上候

平太左衛門殿

越 中

年々大造!家之勳業數多有之、於我等 28.別而大

悅不過之候、依ㄒ千五百石地面相渡候、以

4

右之節、長岡助右衛門&b申渡、左之通、

今度加禄遣候處、固く辭候由尤候、然共數多

勤功有之、且謙讓之意、愈合感候、夫故固辭之

意隠任せ、役料!!直遣也、縷々助右衛門可述候、

以上、

左之通、

右御加増之儀、平太左衛門退再應御斷申上度

奉願候處、此節御直筆之御書附、平太左衛門人被

下

但當家中∠C、松井、米田、有吉三氏在一二

三家老:申候、此節涵長岡帯刀、長岡助右衛

門、濫物畋 有吉大膳也、

名也

要汇預5、連精忠弫盡ㄟ、別而者去年打續天

災之處、御家中御扶助-無支、飢民候得共、官

取救、一國之人心信服ㄟ 候段達 錞聽、御中老

!!被仰付、座席二三御家老嫡子次座、郡織衛上座

被附置、今迄被下置候御役料千石、御加増肥被

直下、外汇千五百石御役料被爲拜領、都合三千

石高被 仰付旨、被仰出候、

多年國事に付、彼是と世話とも不淺存事に候、

去々年、天草御代官所に相成、被仰出候筋も

一明和八年十月、平太左衛門江戸出立前、被下置候

御直書、左之通、

但此節、平太左衛門不奉辭、御請申上候旨趣者、

安永七年九月、御加増御斷申上候節之書付見

右之通、清水縫殿申渡、

平太左衛門儀、數年之被對勤功、被下置候御足

高之内千五百石、地方被直下、本知貳千石高

被仰付之、

1寶曆十二年十月朔日、同屋形於御前、

七月十八日

平太左衛門儀、今度御加増被爲拜領候、然處未

功成不申由、委細書附以御斷申上候之趣、

達尊聽候處、功b6千自办6識6さ,且謙讓之

意、偏汇厚志之所致已被 思召上候、依暫被

扛 思召之旨、御加増千石、御役料被直下、

合三千石之高被 仰付旨、被 仰出候條、可

被奉畏候、以上、

秩禄を以て勤勞にむくふは君の道にして、寵利を

以て成功に居らざるは臣の守なり、君の堀勝名を

擢用し給ふにつれて、賞賜度重り、辭讓常に切な

りし、是只一國の内、一時の事にして、世にもれ

ごごまるべしさは思はざりつるに、懿の好み

して、置郵の命速にして、いつしか遠きさかひま

で聞えにたりこいふめれば、あらかじめはるかな

一先年、大津表へ被遊御出、御蹄座の節、新南部村

小關申舟渡の所より、水前寺御茶屋へ被遊御出

候節、伐の御渡にて、御渡舟用意も不仕、右之所

渡舟にて被遊御渡、左候而惣御供衆渡相濟候迄、被

遊御見合候處、渡守川に入舟を押、出精仕候に付、

御目通にて、御近習衆より、鳥目八十銅被爲拜領候

由、尤年月は相分り不申候、

一川尻方角被遊御出候節は、下近見村大福寺へ被遊

御小休候處、毎度金子等被爲拜領候、

有之候得ば、歩御小姓衆を以、相の茶代度々被

爲拜領候、

但是迄御役料高貳百石、且大奉行と申役、

十年中絕、此節復舊例、

平太左衛門儀、只今被 仰出候通、御政務之機

八五

平太左衛門儀、中老に申付、加祿等道之、大奉行

直に兼掌申付る、委くは家老共より可被申聞候、

右畢て、長岡助右衛門より申渡、左之迪、

一同六年七月十八日、於熊本屋形、堀平太左衛門へ

御直に被仰渡之趣、

數

今度 思召之旨有之、平太左衛門儀御用人被成

御免、御先代へ仰付置候通、大御奉行役被仰付、

只今迄被下置候御役料之外、高八百石之御役料

被爲拜領、座配御城代の次座被仰付候、御勝

手方、御郡方共請込、御用只今迄之通相勤可申

旨、被仰出之、

一寶暦二年七月二十七日、於熊本屋形、堀平太左衛

門へ長岡監物より申渡、左之通、

る後にも残りなん事を知り、然らば轉傳の誤少

からず、眞僞のみだれわきがたからんか、爰にき

しかたの實を擧げて、かしこに行末のをさかん

となり、

一年月相分り不申、田迎村邊御放鷹の節、御先へ割

竹をたたき、鳥を追申候に付、御道筋見聞に罷出

候小頭、江子筋を走通り、鳥追を江子の内へ引落

申候處、御近習衆御出被成、御鷹野の御障には相

成不申し申候様に被仰聞、御前は脇道の

に被遊御出

一年月相分不申、秋の北の由、上無田村彌平と申者、

家根の損所を取繕居候處、江津川筋へ被遊御出、

不斗上牟田村へ被遊御入、道筋の儀被遊御尋候處、

御前を奉存不申、家根の上より、堀が御座候と申

上候、堀とは何の事かと被遊御意候内、御侍衆御

大勢御出て、御前被仰開候に付、家根より飛下

奉恐入候處、被遊御笑候、

出候處、雪甚敷降候に付、上木部村清右衛門と申

者家へ被遊御入候に付、新薬を御座所へ仕、火

を被遊御焚候、右清右衛門儀、小百性にて、九尺

に四間の堀立家にて御座候、清右衛門奉恐入、戸

外に罷出居申候處、家内に罷居候様被遊御意、難

有仕合奉存候、御座所の薬は、梁に上げ、今以大

切に仕置申候、

一水前寺御茶屋被遊御出候節、且又御鷹野の節、村

村に被遊御小休候砌、惣御供衆御百性宅へ御休足

一御出度々、御道筋造方掃除等、仕來申候得共、此

儀も被爲差止候、

一御出の節、以前は御方角の御道筋は、人留被仰付

候得ごも、人留の儀も被爲差止候、

一年月相分り不申、 水前寺へ被遊御出、臨時川筋へ

被遊放鷹候の御儀に付、御建川筋漁師竹宮下村

善八申者、御召船竿指に罷出申候處、竿を指損

し、水鳥飛去申候に付、如何程の御も可被仰付

哉さ奉恐入候處、御斧の筋は無御座、金子壹粒銀

五兩、御近智衆より、御直の拝領、難有頂戴仕候

様、御渡被成候、

一御代初之比は、御郡代衆御案内、御惣庄屋も罷出

申候處、御鷹野の節、田畑へ罷出居候者、壹人も

相見え不申候に付、耕作には如何罷出不申候哉と、

御意の由にて、御近智衆より、御郡代へ被仰達候

由の處、被遊御鷹野候に付奉恐入、耕作に罷出不

申この御返答申上候處、此後は御出獵遠慮不仕、

耕作に罷出候様に被仰付候、

一美服を厭はせ給ふことは、常の事なり、或時、御庭
あちらこちらと被遊候時、近くありけるものの
うちに、きらびやかなる服にて候ひしかば、それは
何共不被仰、人は天運を守る事じゃさ、再三仰有け
る故、御側より、其故を奉伺候へば、運さ云事大切
なり、我は運強き故、今日迄寒さも見ず肌もせず、
結構なる事也さ御意、又かたへより、何故に御前
の飢え寒え可被遊哉と申上候へば、いやさよ、天
道は盈つるを缺くさこそいへ、衣食住其外何にて
一何方にても御出の時、御供揃候よし申上候て、御
仕舞一二番被遊候由、是御供揃ひたるさは申なが
ら、萬一不揃になご候ては、越度の者可有之との
思召にて候へごも、左も宣はず、御くせのやうに
被遊候ひしとなり、
なれば、是程の埃は見えもせず、掃はんこも得い
ふまじ、見えたるごみも、見えざるごみも、かは
る事はなし、人も亦同じ、人目に見ゆる悪は改め

安し、人目に見えざる事は、我も悪敷と思ひなが

ら、一日々々と暮し候へば、こりも直さず是惡人

なりこの御意なり、

一年月相知不申、雪降被遊御放鷹、木部邊、被遊御

一水戸宰相様に、度々御招き被成候へごも、御痛足に

て御斷被仰進候事多く候ま~、御關まで御乗輿

被成候への御事にて、其後は御門内まで御染込

被成候、讃州様大學様にても、右御同様と覺申候、

これよりおくは、あやしの農夫樵者の、むかし

の御事を、おのかご~語りあへるを、かたへの

もののかきつけて、えさせたるなり、

一學校盛に行はれ候と申を被聞召、誰々は左傳がす

みけるかと御意被遊候間、右の人、左様の思召に

あらせられ候や、誰々なご、いかでか數を申上べ

き、數多の事にて候と申候へば、合點ゆかぬ、一

部の書をすますといふは、不容易ものなり、現や

左傳をやと被仰候、

も、内輪なる時は天の惡みを受ず、これ運を守る
なり、我は大國を被下置、何不足もなき身なれご
も、家を扶助して、非常に備ふる役なる故、常
の心得は、不飢不寒さへあれば、事たるといふも
の也、然るに服をかざり美味を好むなどは、穢は
しき心得なりこの御意有之候、
一君若くましましける時、弓を強くひかせ給ひしは、
代々
人の知る所なり、或時、黄檗山萬福寺の住僧
唐僧
御招請有之候に、御床に妙應公御肩入の壹す貳
歩の御弓あり、信心中に、是は普通にあらじ、飾
物なるべしと思ひけるにや、御對面以前、挨拶
ければ、暫し默し給ひて、やよ夫は一己の存亡を
いはど、むべならんか、武士と云は、大身も小身な
るも一つ詞なるべし、大将は國の存亡を辨へす
すし

ては本意とはせど、か様の意味を、中務や喜十郎

などにも、合點させ度とのたまひて、又他事に及

び、御機嫌うるはしかりきさぞ、

き方ながら、死に慮するの難きを申にて候はん、

死をよく押辨へなば、存亡ともに、さまでのは

あらざらましか申上るに、死を辨ると云ふを、委

しく申上べき由被仰、されば武士戦場のみさほは

いふも事より候ひなん、所詮一度の用に死すべき

を、豫め覺悟を極めん事、誰か疎に存じ候はんや、

左あらばますます愼みて、平常の勤に怠りな

これが居る所に安んじ、身を全くして、非常の爲

に備へてんこそ、死を辨へたるにて候ひなん

一時不圖御敷舞臺へ入らせられ候間、御側よりご

み見え候間、ぬぐはせ候はんと申上候へば、いや

さよ、板敷なればこそ、わづかの埃も見ゆれ、疊

(付紙)此儀實也、玄路直に拜見仕候なり、

一君は至て御きせうに被爲在候と、申上る者ありげ

る時、何條きせう等あるべき、今程の事も、 愛甲

十右衛門が蔭じやと御意、又或時は十右衛門より

貴られたる事は、今に忘れず、斯る事も十右衛門

の蔭じや、夫も十右衛門の蔭じやなど、度々被仰候

由、御幼君の砌、右十右衛門御部屋附にて居候に、

朝六時過比より御讀書、御飯後御習書、御武藝、

御夕飯後御馬、夜に入御會讀、其透々に御鞠、御

仕舞なご被遊候、右文武の御業は、刻限を以て十

右衛門極置、少にても怠らせ給へば、嚴敷申上候

間、常に御おそれ被遊候由、

に出たるものに咄の内に、少し破れたる詞有け

る由被聞召、無程御對面の時に、座興にもてなし

給ひ、右の弓御肩入被遊、御見せ被成候、唐僧我

を折りたると語る人あり、まのあたり不奉何事故、

虚實はかりがたし、

八

一於御國、御上下被爲召候節、木綿之御上張、御白

無垢に、黑之御襟御袖口を懸け、被爲召候事、

一御拜領之御小袖、御平日には不被爲召、於御國御馬御披め、又は公邊に懸り候節、被爲召候事、

一言語に清濁を第一に心を可用と被遊御意候、古より讀癖有之今難改、詩歌を讃候も、清濁句讀を第一に心を用べしさ、被遊御意候事

一被遊御書成、日々被遊候事も、御次第御座候事、

一言語之事、必多度被遊御意候、言語は物毎に心を可付、文字に叶、又拙き事さへ無ければ、何國にても通用す、京都の音を似せる事ば、難き道には非ず、音は風土の然らしむるこころ、言語拙ければ文章迎も同前なり、其の人の心も知るなり、心を付候様にさ、被遊御意候事、

一或時御意に、近習に差置候者も、主人之心行き次第には、勤苦敷事も可有之候、別て短慮之人の側に居候者、自然不慮之儀に逢候ては、不便之事、被遊御意候事、

何とも不被遊御意候、左候得ば罷出候者安心之爲
被思召上候事、
一御病後御直書、御側之者より御代筆被仰付候、御
文章之下書相認候にも、紙に認奉入御覧候、書
損じ候所は墨にて消し、其側に書入候、清書候
にも、御國製之紙に認候、近來納入之紙に認候人
も有之候得ば、御讀兼被遊候と、被遊御意候事
一御側にて、不圖相仕、御側之衆を以奉伺候得ば、
御心附不被遊、又は不被遊御構と、被遊御意候事
一君御幼君の時、附奉りし愛甲十右衛門景甫と云ふ、
北越流の軍理に熟して今も其流を汲もの多し、君
も十右衛門に因學ばせ給へり、年經て後、治年
君に近仕せる者の内に、彼門下多年の者あり、然
るに天明五年二月、治年君御暇給ひて、國に帰ら
せ給はんとするを、祝せらるべしさて、同十三日、
白金の邸に渡らせられ、御盃なんご事おへて、暫
休はせ給はんこのうち、御傍には少小君を初め奉

り、御老女御醫師なんご侍りける折節、右の何某、

御次の間に侍らひけるを召れ、兵學の事抔のたま

ひて、必竟武士は存亡の二つなり、爰をいかにさ

心得たるぞと問せ給ふ、御受に傳書に死の萬般を

押といふ事のみえて候、死は様々有りて、先は易

八一

一江戸龍口御屋敷御殿御小姓役詰所、次之御間より

一御近習御目附不寢御番之節、長夜寒氣之時分、不

御番、別候と被思召上、煙草被遊御免候、

御取次御小姓役も、御人少にて書夜御用多相詰申

候に付、同様に烟草被遊御免候事、

一江戸御屋敷御門他行之儀、月に三度之御法定にて

御座候處、七十才以上之老人は、暑中抔御長屋に

て凌候間、涼にも御門外へ出度存立候ても、

六過迄の御門限にて、頭より之達彼是にて、

他出相止候事も可有之候間、七十才以上は、老人

の事故、書夜共御門限無しに、他行不苦候様被仰

付候事、

一御風呂に被爲召候節、御風呂番、單の浴衣にて、

御風呂上ヶ來候處、御風呂屋、御國、江戸共に切

石にて、寒氣之節は、老人などは寒へ申候に付、

綿入之浴衣に被仰付、被爲拜領候事、

一御平日御衣裳、御召、御書召御客樣へ御對面召

被近御極、御行儀に被爲召替候、尤御寢名には、

島類三ッ桐御紋は被爲召候得ざも、九曜の御紋は

不被爲召候事、

一御近習に被召出、爲見習始て御前に出候者には、

一御側に被差置候書物、其外御雜品に至る迄、御平

日御用に相成候御品は、御押入之戸に、讀安き樣

に御書付被仰付、又は御引出等に、イロハの御記

有之、御小坊主へ被仰付候にも、何之御引出被

遊御意候は相分候事、

一御鷹野に被遊御出候節、幼少之男子共兩人罷出、

畑を打居申候を、兄弟にて候やこ御尋ね被遊候處、

兄弟之由申上候、又被遊御意候は、親共は如何程の譯にて出不申候やさ、御尋ね被遊候へば、父は痛居申候に付、兩人參畑耕候樣に申付候田申上候處、被遊御感、鳥目何程申儀は分り不申候得共、兩人の者へ被爲拝領、精出し候樣にこの被遊御意候、

御表御玄關筋之御廊下二拾間餘、御次之玄關迄之御廊下筋、不殘拭板に被仰付候儀は、御近火之節、御奥御女中外<逊出候節、表御住居存知不申候事に付、右之板敷へ參候得ば、御表御次共に外へ之ロに被出候間、兼て御奥御女中へも、申聞置候樣に被仰付候事、

秋のみのり收納まで、民は安き心もなく、風に梳り雨に浴し、炎暑寒天のきらひなく、千辛萬苦をして作り出し、仕上候能き米は年貢に致し、却て其身は雜穀の内にても、至極食を致し、常に飽候事は無之、只今か樣に飯に成候迄、幾人の

手を經候哉、御領内之民の作り出し候米、御心な
しに被召上候儀にては曽て無之候、か様の事を思
ひ候て、一粒にても捨らるるものにはないさ、
御意被遊、其人は勿論、御側に居候者、悉難有奉
存候氣色にて御座候、
上にての事にては無御座候、誰奉承知候而も、同じ
心に可奉存儀さ奉存候、左様に奉存、退てつらつ
らじ候へば、赤塚にて小山田高家が討死、其外
殊恩を奉蒙候近臣の殉死致候は、さる事と感慨仕
候、惣て右躰の御儀、數へ難き様被爲在候、
一限庄方御放鷹之時、多田の中に筵を被爲敷、御辨當
被召上候、御小姓役御茶碗に飯を移し、茶に漬し
差上候、誤て御飯筵之上に少しこぼれ候を、手に
て拂ひ捨候に付、御見咎被遊、此飯の大切成事を
不存候哉、春田を耕種を蒔き、田を植ゑ草を取
一何の比にて候哉、御膳被召上候時、御汁か御煮物
にか、蠅入居候を、御箸にて御膳に御取捨て被遊

候を、御取次見上、奉恐入候段まで申上候へば、

唯今飛込候て、いまだ活て居るこ御意に付、皆々

安氣仕、相濟候て御膳を見候處、蠅は腐爛して

有之候得共、右之御意にて、當番の者を始め御臺

所御役人まで、無事に相濟候故、諸人難有奉存候

事無限候由、

七九

西牟田方御放之前、雅のしろ有て、隼を急に御

据被遊、御より被遊候處、井手に渡り無之、其内

には雁見候様子、御心被爲急候得共、近所にも

渡り無之、足入りの井手に付、御左右より致し方

なく、三井彌内泥中に入、手を上に啓き、

此うへを御踏被遊候様に、外の者も御申上候處、

御家來にても手を御踏み被遊候儀は、御遠慮に被

思召上さの御意にて、兎や角致候内、は飛去候

へ共、御機嫌は益々宜しく、後には彌内足を出す

様被仰付、足を御踏越被遊候、此時彌内顔色に心

を付見申候處、誠に難有、一命にても軽く差上げ

そうなる様子に御座候、

に致吟味候へと被仰御揚り被遊候、夫より毎之通

御道具取片付させ、部屋に参り候處、當番之同僚中

西格助罷出候に付、御意の通咄候へば、格は常

に孟子を尊信致居能覺居候に付、承候と其儘孟子

孟子と申て笑候に付、慥に存候故吟味も不仕罷出、

格助に承候處、孟子の内に有之候由、相違有御座

問敷と申上候得ば、御笑被遊、格助が好きそふな

る語とばかり御意被遊候、孟子などは能く御覺被

爲在候に、如何なる御尊意にて御尋被遊候や、

格助申合候へ共、御尊意難斗何にてもか様の語

を御感被遊候處有之やうにて、御意被遊候は、能

々存じ廻し候へば、難有事と兩人申合候、

一中西格助は亢直にて、果敢決断の人と被存候、同

僚の時分、用人御取次などに對し、自己の意を枉

候事無之、上下同僚に至る迄、悉憚候様に有之候、

御前に向ひ奉り候ても、己が意を質直に申上候、
吾臍の心にて候は、一人の僕が申事も、程次第
に怒を發し候儀に御座候處、上には常に御寛格
何事も能御容被遊候、夫故難有御意を承り候が、
申上候儀を能御容被遊候へば、涕泣仕有難がり申
候、奉職の事に付心底に任不申、度々引籠辭職を
願候、或時病さ稱久々引込居候、同僚参候ても
不肯、組脇など色々申向候へ共、承引不仕、皆々
夫なりに致し置、間にはよさ事と存じ候者も多く
有之候様子御座候處、御浴湯に侍し居候節、御尋
被遊、申聞候様にこの御意にては無之候へ共、奉
公はおれ一人に致して相濟事、能加減に出候得ば
能候御意被遊、誠に難有奉存、外にも何とか骨
髄に徹し候様なる御意を奉承知候てもねじ事を致
候哉と申候へば、面色火の如くに成、両眼より玉
の如くなる涙を流し、今日夕番より出勤可仕由に
て、一言も不申俯伏仕候に付、私ももらひ泣を致

こ罷蹄候、貴賤差別なく人に向ひ候へば、人の胸を
刺候様なる男にて候得共、常に彼をよく御寛裕を
以て御容れ被遊候に付、股肱之力を盡し候心にて
常に居候さ相見候、右之外にも、御浴湯之節、御
意之筋は覺え不申候得共、難有奉存候事度々有之
候、左様之節は、君のヶ様なる御意を蒙り、難有さ
のり、唯今御大事にても出来たらば、白を踏み
候て御爲にも死し申度心に幾度も成申候、身分之
七
一御側にて、何某は馬鹿々々と御織度々有之候へ共
内監を御誹謗被遊候事は、一向不承候、其北同僚
にも、長短得失悉有之候得共、御目代申所を被
思召上候哉、何れ御慮有之候事と奉覺候、
一或時、御小姓役詰所にて、數人雜話仕候、其内に
名失念、一人咄候は、何某は腰ぬけなり、何某は
臆病者なりさ申候を、御立聞被遊、事之外御叱被
遊候、日本の風俗にて、昔より武士は臆病腰抜を

一靈院様御代、私二十三歳にて、始て御奉公申上、御近習御目附役相勤候、二十年之間、奉伺候御容子、平常は至面温潤に被爲在、不調法なる者も、御意に御請申上よく、乍恐あまへ奉る心も出來候やうに被爲在候、さやうかさ奉存候ば、御禮服にて御出座、又は御登城なご申折柄見上候得ば、儼然として不覺頭御疊につき候、子夏の話に君子有三變と申事存當り候、温潤に被爲在候事は、人の口に無之事に御座候、右之通私一人奉存候かさ、日比心を付見候得ば、常は御前にて、手一ぱいふるまふ人々も、年始など御禮申上候節汗を流し、或は御禮を仕損し候事度々有之候、

一或朝、御浴湯被近候節、御浴室に侍し艦は、居候處、何か御微音に被誦候而、被爲入候中も被誦候に付、奉伺候處、君之䚕臣如草芥、則臣視君如寇讎、さ數篇被誦、此語は何れの書に有之かさ御尋被遊候に付、覺不申、左傳などには無御座候哉さ

申上候へば、いやいや左傳之語とは不被思召、後

七七

一御面躰三齋様に能被爲似候、或時御茶道方風入に、

御花畑御敷舞臺先之御槍之間にて、御代々様御書

像掛り候を奉巡拜候處、北の方に三鷹様御肖像被

爲掛候處、至極被爲似候に付、十日程も風入有之

候に付、明番、晝詰、夕詰等にも、度毎に參り奉

拜候處、彌被爲似候に付、小堀全順其外之人々に

も咄候得共、何も申人無御座候、

恥さ致し、人より左様に被申候へば、武士は捨り

申候さ存候事、今日迄もその通にて、戯にも申さ

ぬ事に候へば、御前にも被召仕候者共を、常に御

戯被遊、皆々折にふれては、腹も立候事も可有之

被思召候へ共、能考へて見よ、終に腰ぬけ臆病

者とは、御家來之事をも御意不被遊候、 是にて能

合點致せ、御意之儘被爲入候、

んがごとしさぞ、しかあれごも、耳にきく古をのみえたひて、目のまへの御事の、名残なく消え行きなん

事、世に口惜く覺えて、あながちにこひもさめしかば、そのうちのひざりふたり思ひ出でたる事あり、萬の

一にもあたらざれごもさて、かき付けておこせたりしを、一字をたがへず、そのまゝしるしてこ〜に附け

君の御時、年久敷なれつかふまつり人々の許に、つねづねの御嘉言善行、さこそおほくわたらせ給ひつ

らめ、はしはし承はらばやさ申て侍りしかば、いやさよ朝夕見奉り聞奉る程の事、皆有難き御事のみなり

ければ、つねの事に思ひなして心にもしるさず、今更何事をかあげて申べしても覺え候はず、雨雲のたえ

まの星のきらきらしうして、人もまがふかたなくはるる夜の空は、いづれをいづくとも思ひわけ

銀

七六

臺 附

右ノ外數個條候ヘドモ、御政事ニカル事ニテ

憚多ク省キス、

心得違ナット御呵ナリ、八ヲ使フベキノ、下ナ

ルワザヲスルか、テ御嫌ナリ、斯ル事記シ置

度モノカ、

小姓役ヲ指揮スル役ナリ、自ラ余ヲ抱テ斯スル

七五

リ、然

レドモ其祿ヲ傳、二代三代ニ至テ、大方

鹿ナリ、大祿ノノ子斗愚ニ至ル譯無之候

ヘドモ、家來ノ手ニソダチテ、人情ヲ知ラズ、自

然ト弱々心愚ニナリ候、今御足高ト申六、其身一

代高祿ニテモ、子孫本知ニカヘリ候ナリト申上

リ

マス(強クナリ、上ノ成サレ候事、彼申上候

テ取計候ナド申候テ、君德薄クナリ申候、御用

不亅立愚八ナリト人ノ云、予が本望ト存ズル

ナリ、必ズ加祿シ給フォト勿レト申上ルニ、功二

隨と勤ニ因テ、フ壇店進ル君ノ道ナリ

玄路申上候、君ノ御惠、其人二應ゼラレコ

ト第一ナリ、於玄路器量モナク才智モナシ、御

々食禄ノ大恩ヲ報ジ奉ラン爲二、見聞ノ趣、

ノ儘=申上候ナリ、是功ト云ニモ非ズト申上候

ヘバ、何が有」之候ト御尋ナリ、若ャ長壽ニ

テ隠居候、微禄子孫、養彙可」申候、其節

惠給ヘト申上ケレバ、必五十ロヲ扶持給ハン事

ヲ約シ玉フナリ、予命ッレナク、其約果シ給

ズシテ、途=空シク成給フナリ、此時ノ御咄二申

上候、今大功アル人、大禄給フ事ナ一熊本ニテノ事ナリ、天草ョリ鰹ヲ酒漬ニシ御取寄

召上ラレ候、皆人御留メ申上ケレドモ、御聞入ナ

クラサシミニ仰付ラレタリ、玄路一番御試仕候

テ、暫アリテ倒伏不覺ナリ、君モ御醗ナサレ、餘

程御ナャミナリ、御手水ニスラセラレ候節、須佐

美九大夫奉」抱、御手水二奉」入ルニ、御病中=御

眼ヲ開カセ給ヒテ、九大夫用人ヲ申附置タルニ

忘レタリヤ、個様ノ時、吾二替リテ取次者、

キリンナラバ、獪以御政事ヲ助ケラルベキコト

ナリ、堀殿田ヲスク役ニ非ズ候ナリ、個様

ノコトカリニモ御意無キコトナリ、

一松洞老ノ條下二、平太左衛門同様召仕レ候テ可

然ト、脇ヨリ申上ケレバ、麒麟田ハスカセラレ

ヌトノ御意ノ事、虚説ナリ、御省き可」然候、

ルニ、左マデモナラヌモノナット御意ナリ、

一御シラベ御遺事ノ内、御書寐ヲ遊サレズトアル個

條、御省キ成サレ可」然候、毎度御書寐遊バサ

レナリ、シカモ御床敷、何時ヨリ何時迄ト云御

究ニテ、其時刻い申上候ナリ、誰々モヨク存ジ居

ルコトナリ、

七四

バ、固ヨリ虚説ニテ、一々ニ答明白ナリ、勝名斯

實ヲ正

ク糺シテ見申サン、若嘘ニテ候御疑玉ヘ

若實事=候が、路其席ニテ指違ヘ申サント申

上ル、爾豪氣ナリ、爾コソ事ヲマジケレ、必豪

氣ヲ止メヨト御意アリ、支路奉」命 名小屋:

參ル 夜中、御不審ノ個條ヲ、有ノ儘=申述ベ

夜中、

ハ

落涙仕候御覽ジ、賴モシキ心ナリ、爾、後マデ其

心ァズマジキ歟、我眼ニ恥フカ、スナト御意ア

リ、玄路謹デ領掌シ、命ヲ限ットト仕ルベットト申上候

ヘバ、サラバ本心ヲ語り聞セン、ツラ(此國ノ

人見ルニ、名利慾專ニシテ、始末ットグベキ

ハナシ、モシャ委任ノ人アラン歟ト御意アリ、玄

路申上グル、多年心ヲ付テ、遠キヲ開近キニ交

候=、一人モ候ハズ、堀平太左衛門勝名、

勝貞

魂ノ交リヲ致候、此八ナラデ、始終ヲ不變ニ

爲スベキハナシト申上ル、開シ召テ余モ左思っ

ナリ、シカシ個様!ノ事アル曲聞、イカミヤ

有ント宣フ、玄路申上ヶルで、左様ノ事ヲ申人

虚俗ナラン、思ウラ不言トキ、其事晴ル時

シ、一人ヲ目附=指添給ラバ、玄路參テ虚ヲ呵り、八ノ惡キ事ヲ、目前=恥ヲ與ヘル様

ノ事可愼、ロッ守ル事如」瓶セヨト御呵ナリ、サテ

此頃、爾カ事ヲョク云、推擧スル者多シ、加祿

升進事ヲ聞、爾イカミ 思フット御意アリ、玄

路上ル、人トシテ 加祿升進不望のアルマジ

キナリ、然シナガラ、君ノ御爲ニ、命ヲ捨テ祿

モ捨ッベキナリ、今玄路ヲ御取立ナサレ、厚祿

ヲ給リ候が、専身ノ爲ニサマぐ二上テ

御意入候ナド 諸人目ヲ附テ、様々ノ事ヲ風説

致スペシ、人傑ヲ得給ヒテ、大祿給ル時代、

人心者是=目ヲ附テ、重ズルナルペン、玄路如き

ノ愚味ナル者、大祿ヲ給リ候、八ノミ

七三

二

一年月覺エズ、爾カ事ヲルモノ多、サマーニ

申ス者、個様々々ノ事ナル歟ト御アリ、難有事

ナリ、夫個様々々、是無き事ナリ、是實ナ

リト、明白=申上クレバ爾豪氣ノ者故、不思

ル虚名ヲ蒙ル事、全ク自身行屈カヌ所アルニョリ

テナリ、宜クト御請申サヌナット、怒ノ色

り、早速其由ヲ申上ル、夫ョリ君ノ御心を解サセ

玉フ、

8

關 内

六月十五日

古法に而候、此道れ候得ば、人の心輕薄に成り

得ば、人の心輕薄に成り、

我一分の建立を専さして、甚敷は人をおさえ、我

上らんと思ふやうなる、 淺ましき事に成行候、玄

路は堀老進められる次第、誠に其身の秩禄を解

申されたる事、稀代の美事にて、さすがに御家久

しく被召仕候家筋の御侍、御頼母敷事にて候、

依」之兩家相並て、先祖を申出候、先時被仰聞

候、御遺事五冊、御付紙之儘差出申候、且頃日御

内意申候通、此内の御政事の儀、公邊御遠慮のヶ

條迄、相省不苦筋の儀は、被差置被下度相願

申候、御存知被」成候通、國史を書候者も、事によ

りてば、君、太夫之命をも愛不」申儀御座候、此意

味御含被」成可」然、御周旋被下度奉」存候、密に得三

御内意」置申候、

一賢能の人を進擧候人は、其賢者より重く貴候事、

書テ、御直=聞シ召サレ候や申上ント、小川貞

之丞ヲ以テ差上ル、夫ョリ夜毎召出サレ、子丑

ノ刻迄、聞召サレシュト數月ニ及ブ、御次ニラ、

身上事申上候歟、又ョカラヌ事ァ御申上

ルニャト、或疑と或い恐ル・渚アリ、玄路申上

候左様ノ事=非ズ、御先代ヨリ、御國ノ風俗、

郡村ノ事、御役人ノ贔負ヲ以テ、其任=當ラザえ

人ヲ御用とニナル事、賄ヒテ我勝ニシテ立身スル

類、共事實ヲ擧テ申上ル、玄路手ノ廻ラザル事、

同志ノ人アリテ助ヶ告知スル者アリ、寛延四年、

何月ヵ不」覺、政事御咄折節、不慮大國領

セラレ、今更御行當ナリ、中々御身様如き御氣

キ上、御病サヘアラセラレ候ヘバ、御政道ナドノ

事、難き御事ナリ、マジハナラセラレズト、御

嘆息ナリ、玄路申上ケル、夫ハイカナル思召=

候ャ、御氣薄、御病身トラ、御自身ノ御働ハナク

トモ、人ヲ撰と、夫ニ委子ラレ候へバ、何事カ難カ

ラン、頼奉リシカヒモナク、マシノ御心カナト、

一寛延三年七月、封事

一寛延三年七月、封事ヲ奉リシナリ、數多ノ個條ヲ

竹原玄路書付寫

七二

一八代洪水の一條は、雜歌も数多書乘候、是又無益

之事と相見可」申、然共民情事勢を見候は、詩歌に

しく物なく候、口上言抔は、飾候事にも成候

得共、詩歌は偽りのならぬ物にて候、依之古へは、

國々のはやり歌をとりて、天子に奉り、夫にて國

政風俗の善悪を被」考候事、聖人の法御存の通御

座候、我朝にては、殊更是を専させられ、神武記

姑、代々の記に、多く歌謡を乗せられ候は、此

譯にて御座候、禁裏歌所被」置候世には、此事彌委

(相成候、國々より年貢米を運び候馬方共がう

たひ候を、催馬樂申候は、文句は今の世にうた

ひ候馬子歌にて、餘り替らず候、たこへば、あかゞ

りふむな、あさなる子、我も目はあり、先なる子、

此類の事にて、夫を詞につくろひ、字数を合せて、

撰集にも入れらる事に候、扨此八代洪水、古今

の珍事にて候、下民昏熱の折から、御仁政を喜び

夫の不幸過之事無御座候、無念至極に可」有 御

座候、然處 靈感院様御餘にて、先祖の様

子、世上に相知れ候は、大夫の恥辱を雪ぎ、乍

恐御冥加にも叶申べき哉さ奉」存候、

勇み候、民の情を顯はし候は、此ざれ歌にさえま

り候、田沼氏執政の時、誰かは追従尊敬せざらん、

然共、イヨサノ善サラ血サンサとうたひ候にて、

うさはて、御子息の横死を悦候、實情全く顯れ

候、ヶ様に善悪かくされぬところ、歌謡の甚深術

妙に候、詩經を經典の内に入られたる、聖人の深

意、凡夫の了簡の外に面候、右の例は不遑

舉候、御刑法一條の儀も、笞墨徒は律書にも有

之、誰も存候事に御座候へ共、御國の如く、徒刑

の共、往々良民に成候様に、委細の御德被立

候所は、他國には不]及承申候、然處荒々書置

候は、殘念の事に御座候、惣而此御遺事は、御德

義を候迄にても無御座諸の法にも成候様

に有御座」たく奉」存候、乍」然前々申候通、國是

時宜可有三御座候間、此長文、強而最初の通、

被成置、申事にては無御座候、世間文明

の運にても候間、職分の事故、文事の通筋を、一

通り得貴意候事に御座候、惣御衆へ、御演舌

等は、思召次第之御事奉」存候、以上、

六 月

一此内に御家臣の行狀を、数多書乗候事は、惣て人

君の德は、専用らる~人により見え候、歴史に本

記、世家、列傳是あるが如し、本記は、常代の

事を、善悪共に分明には書れぬ事有」之候故、事を曲げたるものに候、され共列傳にて、用ひられたる人を考候得者、其時代の政事の得失、風俗の善悪まで、かくる所なく候、夫故に假にも人君の事蹟を書候ものには、臣下を加へ候、左無」之候へば一分の質素倹約ぐらの事は、人君も匹夫同様にて候、西山遺事など、文雅飄は、格別の御事に候へご靈感院様は、多くの異能異才を御用被王の徳を申さんさて、思齊大任文王之母と申出候、依」之 史漢の類、本傳には、父母兄弟の事、毎有」之、先兩親の徳行を逃候にても、此意味相分是には聖賢の意味、深く有事と被存候、されば先儒も稱人之善、必本父兄師友厚之至也と有之候、近き頃出候烈公遺事にも、新太郎様の御母堂、照翁主の婦徳を述たる所御座候、文明に成候に付ては、世間の人も筒様の事に心付候哉さ覺申候、

一堀丈夫竹原の兩家、先祖迄書出候は、區々の微意
御座候き、惣而人たるもの善を行ふは、父母を顯
さんがため、惡をせざるは父母を辱しめん事を恐
る故さ、聖賢の数は御存にて候、殊更我朝にて此
道を第一とす、甚深き譯御座候、されば昔の武士
は、戦場に臨で、川を一つ渡しても、桓武天皇九
代の後胤、首一つ取りても、山田の庄司何某が孫
など名乘申候、今の世にては、合戦の最中、長
々敷先言立無用、至極あほふの沙汰に思はれ候
は、武士の氣象、次第に軽薄に成候故にて候、扨
堀大夫の事、他國にては、足輕より御取立被」成、
父は無名無刀の人にて有つる、専申觸候、已
に先年大坂御町奉行小田切出雲守様も、左様御聞
被成候、彌にて候哉さ、御問被」成るよしに
候、堀家の御先祖は、御存知の通、類稀なる忠臣、
追腹迄めされ候、其血脈れてこそ、太夫もあの
通り被」在にて可有御座候、然る噓御自分の名

高くなられ候程、父を下の者さ唱候へば、大

遊候事、所謂濟々多士にて、他の君公に卓越の所

を知らせ候にて候、

御遺事之内、省候ヶ條之串、別紙之通、時宜國是

靈咸院様御德義奉」稲候は、能人を被遊御存知

堀大夫に被」任候事任賢不貳申、人君第一の御美

德にて被」遊御座候、大坂の中井善太、肥後孝子

傅の序に、恭儉持」已任」賢不」貳さ奉』稱候、學問を

仕、目少明候者は、數百里の外より、鏡にかけて見

通奉り、二句八字に、御德義を申盡候、文明の世

の中、恐敷事に候、然るに御遺事、此ヶ條省候得

ば、餘り恭儉持」己申たる一句計の事に相成、他

所侯の考にも、却て省候得ば、折角御遺事御差出に

相成候詮も無三御座候、其上已に台諭も有」之候

大夫にて候得ば、何ぞ御憚にも反申間敷儀歟さ、

乍」恐奉」存候、尤御家老にては、御自分方の身に

被」受候事故、御御尤なる義に御座候、其境得斗

御考被」成、思召次第には、尊慮御伺被」成候様

有御座」度奉存候、

一乍恐

銀臺遺事の事に付高本敬藏

紙面之寫

一部證院様御儀を、事長に申候を、一通の論にては、

此御遺事の中には、無用の事と相見可申歟、併

是は編述の格例有之事に御座候、先詩經に、文

六九

可大受御器量は、陰伏仕候、

靈咸院様御盛德を奉伺候に、所謂不」河三小知

而可大受君子にて被」遊三御座候、茂次郎ごと

も申合奉りたる事に候、近來諸名公の遺事に、御

超過被」遊候處は、全此處に被」爲」在候、然處御

之稜は、取省候得ば、小知の御行狀斗に相成、

一乍恐

を、御詮儀御座候さ奉存候、太左衛門殿一件

之外は、強而兎角可申達様も無御座候、御付紙

の通可仕候、併常の消息達書なご~違、假初にて

も、冊子に仕立候物は、一部の開闔、隠見有」之

候事御座候、然處、所々取除申候ては、たこへば

作立たる家の柱を、彼是拔取候様の物にて、見る

者の見候ては、正職もなきものに成行候、此位は

御存知の前にて候得共、承之分職に居候得ば、一

通は其意味、御役方にも不二申達ては、難相

濟得三貴意」候

一此君常に名譽の質に過なん事をいさひ給へり、む

かしある人、國の中のいみじき事ごもを、世に

しらせまほしく、梓にもちりばめんさて、書きつ

ぐる事のありけるを聞しめされて、この事をな

せそ、さしたる物ちりもてゆかば、我が治敢よか

りけんなご、世にうたはれん事、人をあざむき、

身のさがをかさねるわざなりて、いたく制し給

ひ、御氣しきさへよからざりき、しかはあれども、

茗溪雲亭宋紫岩謹拜艸

越王賢々風雲會、飄々鳳、王朝崇倚望、

仁德慶琱鐫、

市駿慕奇權、屢挈珊瑚網、頻抽玳瑁編、慈祥

瞻弼敎、簡註考大全、北極淸光被、東華碩望

悪、蓬瀛裁衆、王府領群仙、邦國新籌畫、兵

民仰策鞭、便須調鼎鼐、原不問金錢、繁祧添

芳版、嘉禾貢市田、列卿成九寂、恩賜日三千、

久矣忠誠貴、美哉風度妍、玉堂仍故里、金鑑

毎新研、御仗邀榮近、宣揚拜手專、高階億世

並、明府百僚先、喜色盈朝野、歡聲動陌阡、

爭歌陬魯聖、永

銀

古城貞吉重校

宇野東風校

事 終

臺

かしこくありがたかりし事ごもを、語りつぎいひ

つぐ人もなからましかば、 うたかたのあわざきえ

なん事をかなしみて、もしほ草、かきあつむるに

つけても、いますが如きの冥慮をあふぎて、も浮

きたる事なく、かならずたしかなる跡を尋ねて

おそれみ!)筆をさりぬ、

へば明和八年の頃、家士綾部孫助さいふもの、

役にされて、肥前の國長崎にありけるに、其頃

しも同じさまなる諸國の留守居さいふものを、唐

人ごも己が旅館に請する事ありしに、孫助も行き

ぬべき由、兼て聞ければ、唐人共な~めならず

悦びて、遊勳さいふものこさぐしく招狀を書き

て送りぬ、共日はきらびやかによそほひ、うるはし

きあるじょうけなど、例の事なれども、いつより

もすぐれて、よろこべる氣しきにて、黄維幹、王

世吉なざいふもの、さまぐもてなし、おのが國

の樂奏してなぐさめたり、詞はもとより聞知るべ

筑紫のはてにして長をたち、短を補ひたらんに、

方三四十里には過ざるべし」然るにいみじき御聞

えのもろこしまでおよびけるこそ不思議なれ、

なり

一九星の鶴は整天に聞え、一室の言は應千里と有り

となん、君の保ち給ふ國は、日本の内にさりても、

る。

いと心細く覺えけり、其の月の廿日頃よりは、

大輔殿をはじめまゐらせて、老臣どもを、ひたす

召て、御跡の事をぞねんごろにおほせおかれけ

六七

肥後侯德政、五言三十韻、拜祈 敢正之、

柱石隆千古、嵩山祇九天、三台呈炳耀、百

綴班聯、霖降蒼生喜、雲施紫海連、若爲群物

望、願得志言詮、肥本名都秀、阿蘇箕尾踞、

君才看鳳舉、水潤繞龍眠、閥閱東京著、文章

南國傳、書詩乘編、業表雲畑、武藥門材

盛、雕弓世澤綿、 八千禪景運、三十正靑年、

丹篆神人授、藜光大乙燃、從容趨講席、左右

侍經筵、端坐惟清慎、深情更塞淵、論賢者環瑋、

恭頌

一又ある年、長崎に来りし宋紫岩さいふ唐人、奉り

詩に日、

くもあらねども、譯者につきて申けるは、抑肥後

侯の賢明にましく、 聖の道を崇み、學校を建て

させ給ふ事なご、もろこしまでもかくれなし、お

のれら幸ありて、其國の人にあひ見奉りぬ、異い

きに帰りて、斯と語らんには、何の家づとか、是

にしかんさて、ぬかづきてよろこび座敷にさふら

一本むらかれて

ふなどのもの、皆孫助がかたにのみむかはれて、こ

さかたはすさまじきばかりなりきさぞ、

なりさて、其理をかよはして書かせ給ひしものあ

一本作

り、是も名なごはなし、紛問録さて、むげにいや

しきことわざを、筆のすさびに、書きあつめ給ひ

けれども、みぐるしきものなり、あなからこ、人

になみせそ、さくやき拾よは宣ひおかれき、

一寶暦九年八月廿日、御先祖幽齋君、百 五 十 回 忌

に當らせ給ひければ、竹原勘十郎玄路に仰せて、

そのかみ土佐光興がえがき奉りし、寫眞の御影を

一御著述さて、したりがほに政道の事など、書かせ

給ふ事はかりにもなかりき、只歴史のうちに、面白

くゆかしき事ごもを、蒙求の標題のやうにつぶら

せ給ふ事有しかごも、未だ終らねばさて、名をだ

に付給はざりき、又鷹を馬とは、同じほどの

見世人、眞足下之益友、而不校所畏也、又善國

士遇仲英、觀其與仲英書、剛直自持、不阿所好

碌々儕輩、豈易交乎、答書亦愷悌可喜、仲英不

墜家聲、可謂南郭先生無子而有子矣、献春朝覲

畢、上鑑湖臺、重臨篠池、同顧菱芙藥鴻雁、

以與觀於賢者之樂焉、則亦復愉快如何、時暑酷、

伏惟自玉、需有嗣章、昭諒不備、

さても此てには、何とかゆ~しく聞えければ、人

しぐるはあかり障子におとばかり

一天明五年の秋のはじめより、御所勞重らせ玉ひ、神

無月の頃、はや頼みずくなくならせ給ひけるに、

時雨の音しければ、

一御年老いさせ給ひて、十人の唱和九人はなしと申

斗になりにければ、常さへつれぐにのみまし

くけるに、折しも秋の夜長うして、ありがたく、

濁り欄干に寄りて、月を詠め給ふに、夜風身にし

みて、いさぶむかしをおもひ出で給ひければ、

龍溝邸第夜將闌、明月西風獨倚欄、筆似木華東
海賦、樓同庾亮武昌看、昔時高調空歌罷、今也
朱絃誰復彈、獨坐蕭條懷舊處、秋來白髮不堪寒、
右懷舊

袖はなみだの秋の夜の月

うつさせ、都にのぼせて、有栖川職仁親王に、幽

齋君の和歌三首の染筆を請給ひ、風早三位公雄卿

も、歌なごり給ふ事ありし頃、寄月懐舊さいふ

事を、人々にすめ給ひて、御自らもかく、

くもりなき影にむかしのしのばれて

六六

一御年だけ給ひても、夜の読書怠らせ給はざりしに、

燈の影にて、やう(文字もさだかならずならせ

給ひしかば、燭を點せさせられけるに、噛みじか

くなりぬさて、度々さしかへんは、ゆるわざな

さて、木にて同形を作らせ、蠟や~みじかくな

りぬれば、夫にさせて、本まで残りなくもゆる

やうにはからひ給ふ、常にも近侍の者共、さりぬ

べき仔細ありて、蝋燭あまたもしつれば、宣ふ

事もなし、只其事はて、しばしもいたづらにさ

もし置く事を、いたく制し給ふ、 かりそめの事の

やうなれごち、是は君の物を用ひ給ふ節度ならん

さこそ登ゆれ、一切のものは用をふめなれば、

大名の御許などにて、事にあたりて用ふべきに、

もちひざらんは、 なるべし、唯事なからん時

に、いたづらに費やさしめざるを、倹約はいふ

しみの程、難有御事ならずや、臣思うやくしく

おもひみ奉るに、是は時にさりての御答のみには

あらずして、常々の御心ざの、おのづから御詞

に出でたるなるべし、政の主要何事か是にしか

ん、

六五

東都分手甚艸々、不能盡慇懃、至今瞻望不已矣、

盖浹旬而歸徹邑、驛路山川悉足觀也、唯憾不使

足下見之耳、九州斗大、無足與話者、益思足下不

置也、越子聽計已還家矣、不知有書疏奉左右者

耶、爲勞致意耳、足下高誼、不隱肺腑、告以經

國事要、而辱有造于不佑也、繼之風雅篇什、陽

春之調、幾乎寡和、不佞負詩債日久矣、愧之愧之、

伊達侯豪氣未除、磊落魁偉、在百尺樓上、白眼

呈樂山公子

一御年若かりし程は、かなたこなたに、書牘の往復

せさせ給ふ、夫がうちひとつをあげて、こゝに

記す、

べし、君の御心おきのごとくならば、萊公燭涙の奢

もなく、公孫布被のそしりもまぬかれ給ふべし、

一君の字は子明、始めの御名は紀雄、又は利渉と遊

したるものもあり、世に銀臺侯とも、熊本俠こも

申奉る、御俳名華裏雨と記し給ふ、江都龍口の館

に表海樓、鸞嘯閣あり、肥後熊本のおま所を、

豪濮園、披雲閣と名づく、南郭服翁、大川上人な

ご寄題の詩ありき、

一むかし登城の御歸るさに、白金の御曹子の御許に

けるも、うべならずや、君此事を深くうれへさせ

給ひて、世にはいみじき聞えましくけれども、

御心には事ゆかずさのみ、常に思召たる御氣色な

りき、あるさき懐中袋のそこねたるを、修理せさ

せて用ひ給ひけるを見奉りて、近侍の者共御大名

の御物には、あまりに見苦敷候、新らしく取かへ

て登らせばやさ申しかば、いやさよ、家中の者

共が、貧窮にうきめみるらんに宣へば、夫をば貧

ならざるほど、物給はらせられ候へ申し〳〵か

ば、夫が心に任せねばこそさて、うちしほれさせ

給ひしこそ、ありがたかりし御事なれ、か～る御

心のそこを知り奉らぬものは、此君の倹約は、

に過ぎたり、逼下さやらんに近かるべしなど、

ぶやく事も有りぬべし、冥慮おそろし、

「一何國にか有りけん、御年若き大名の、才學優長に

して、萬にいみじくましますよ、 近侍の者共語

あひけるを聞しめして、誠に今の世の俊才なり、

たゞし韓非子などをや好み給ふらんさ、ゆる所

の有るぞさよさなん、」

渡らせ給ふべきにて、御まうけなどありて、巳刻

斗より待たせ給ひけるに、はるかに日だけて渡ら

せ給ふ、いかで例に違ひてかくはさ、人々いぶか

ければ、けふとも營中にも、やむ事なき御方め

されしかば、御部屋に参りて、御物語に時移りぬ、
いたうこうじたり、先装束ぬぎてこそさて、御袴
の紐さくく、さてもけふの御方、政をば如何心得
させ給ふべき、ふさ問はせ給ふ、のどかなる程
ならば、いかにも申なんつれごも、かくさしあて
~とはれまひらせて、一言にはいかぶ答へ奉らん
と、思ひわづらひつれざも、申さでやむべきなら
ねば、兎にも角にも人を得させ給ふべうもや候ひ
なんと、こたへ奉りき、いかぶありつる事ぞ、いさ
おぼつかなくこそこ宣へば、さふらふものごも、
かしこう聞えさせ給ふものかなと、感じ申ければ、
人々もさ思へば、ひが事にてはあらざりつるよな、
さても我も罪ゆるされぬべして、御氣色悪から
ず、抑此御答のめでたき事は暫くおきて、君の御
聰明にて、夫程の事答へさせ給はん事は、いさ
やすかるべきをかくまでおそれ思召つる御つ

御歸さまに、御目さく見咎め給ひ、誰かかるよ

しなき斗ひをせして、以外に御氣しき損じ、

折ふし堀本一甫老、あたりにさふらはれけるに、

向はせ給ひて、いかに一甫、是みられよ、疊のや

れたりさて、何かくるしかるべき、我常につひえ

をしりぞくるを、近習のもの心得ずして、我には

知らせず、や〱もすれば、か〱るふるまひをする

事の口をさよ、さいへばあまりに吝嗇するやう

にもあらんずれても、我一生のほどは、かばかり

心を盡したればこそ、此頃の年にも、領分の民

共、餓死をばさせざりしが、今はやみほれて心も

とどかず、唯いはでこそやみなめさて、いぶから

せ給ひき、かく宣ひとは、九月の末の頃なり、

に次の十月の末に、かくれましくき、あはれ此

御諚をば、此國の民ごも、家ごとにかくげおきて、

朝夕に拜み奉らば、冥加にも叶ひなんかし、

一妙應院殿、をさなくおはせん頃、東にて、時の

執權の御許に、家老長岡勘解由延之を召て、御物語の席に、故肥後守殿、國用さもしくして、物多くかりたりきと宣ひしが、今はさやうの物をも償ひはて、國もゆたかになりつるやと問はせ給ふ、延之謹てさん候、今とても償ひも待仕らず、國もまづしく候と申す、何さてさやうには有りつるかと、重ねてさひ給ふ、延之申けるは、六丸いとけなく候に、大國を附置き給へば、いかなる不思議も候ひなん時は、おもふ程の忠勤をも仕候はんさて、分に過ぎて家子郎等を扶持置候、夫に凶年うちきて、何年も力に及び候はずさ申しかば、公務軍役などの爲めに、そこばくの用途を取わけおかれき、故守殿宣ひぬ、夫は今も有りけるやと問はせ給ふ、誠にさ様の内々の事をも殿にはつきます聞え奉りたるよし、肥後守候ひ時申てければ、げにも其料は今も候へごも、年をおひてへる事は候へども、増す事は候はずさ、

延之こたへけりなん、夫より此かた、君の御時

まで、代は四世、歳は百三四拾年ばかりにもやな

ぬらん、其間に新知加祿たびたる事、またいく

ばくぞや、君のはじめより、世滅のおきてありつれ

ごも、なほ物の数にもあらで、誠に國の高には悪

せざりけり、されば時々の扶助のゆたかならざり

六三

一或時松のをかしき木ぶりしたるを物候、御庭に

移植ゑ候なんやと付ければ、夫は天然か、作れ

る木かご、間はせ給ふ、作りたるにて候さ申けれ

ば、我は作れるものはきらひなりこ寛ひき、實に

や人も氣質はさまぐにかはれごも、直だにあれ

ば、みづからの御物好をたてず、相應に用ひ給ひ

き、只り作れるものをば、いざきらひ給ひき、

いまだ侍従にてわたらせ給ふ頃、常にへだてなく

かたらひ給ふ國主の、そこの御勤も年久しくなり

候ひぬ、今は少將に望をかけ給ふべうもやと、あ

りしかば、いやさは、家中の仕置だに、いまだ思

ふ様に調ひ候はねば、轉任なご望むべき身にて候

はずさ、こたへたまひき、其後少将に任じ給ひて、

又年つもりければある國の主、中將になし奉んさ

出し給ひ、いたぶき給ふ様にしてはきもひて、命じ

給ふには、汝等必ずぐ直す事なかれ、士たる者

のすべき業にあらず、我手してはきつらんに、何

かくるしかるべき、おして宣ひつれごも、捨置

くべきにあらず、直しさ~げり、會釋なしにはは

き給ふ事は、更に一度もなかりき、

て、さまぐ斗ひ給ふ事などありて、今は事さげ

ぬべくなりぬ、されごも殿の御家には、宰相は先

ありしかご、中將なかりければ、そ表さ

給へと、の給ひければ、表文をばいかゞ書かせ

候はんやさ問はせ給ふ、別の事も候はず、数年勤

候間、轉任を仰付度と書かせ給へと宣へば、夫は

思の外なる事に候、さ様にはえこそかせ申まじ

けれ、某何の功労もなくして、みづからす~め候

はん事、世の謗も恥しく候、且はさる事仕て候は

んには、家中のもの共が、われも!)と、立身加

禄をみづから望申さんに、何とか沙汰仕候ひなん

や、そこの御情はさる事にて候へども、其表文な

うしては、かなひ難き事に候は、いつまでも少將

にてこそ候はめさ宣ひしかば、其事はやみにき、

一天明五年、御所勢いたく重らせ給ひて、御おきふ

こも、左右よりたすけらする頃、御寢所の疊の

やれて、御足にさはらん事のうたてければ、取か

へまほしさ、近習のもの共いひひけれども、さ

申さんにはよもゆるし給はじさて、用所にましま

~程に、ここ所の疊さりかへて敷きたりしを、

六二

一紀伊中納言治貞卿、いみじくましします御聞えあり

ける頃、紀州に麒麟、肥後に鳳凰なご、市童ごも

申ふらせを、ある時近習のものでも、世にばか~

る諺の候、申もはてざるに、何條肥後に鳳凰
めんさて、さふらふ人々を御まへに召して、酒給
ひければ、皆々ゑひて笑ひさざめき、君も深く興
に入らせられける時、いかなる顔の事かありけん、
堀平太左衛門勝名、龍口より馬をはせて參れり、
近習其由申ければ、忽ち御形を改め給ひ、夜もふ
殊に寒きに、老人はるぐ參りたれば、さこそ
つかれつらめ、しばしやすらはせて召せて、御
座を正しくして待ち給へば、ありあふ人々いきを
つめて、ひそまり居たり、やがて御前の人を退け
て勝名をめし、このやうをきかせ給ふ、や~久し
くして、御暇たまはりて、龍口に踊りぬ、すべて今
胃勝名參りしより罷出づるまで、諺にいふわきた
らん湯に、水さしたらん樣に、雑人ばらまで、ひ
そさ鳴をしづめたり、君の老臣をうやまひ給ふ事
如此なりしかば、勝名に委任し給ふ事、三十年ば
かり、中をさ~ゆるものもなかりけり、

一常の御座より、表海の御座敷へ参り給ふあはひに、

少しの庭ありて、沓をはき給ふ所あり、其度毎に

次番の侍など、沓をすぐ様なをし出せば、必御手

*一

オニナシ

「一奥にて何事かありけむ、いそがはしく立ありき給

ひけるに、そこにさふらひける女のひざに、そこ

御足さはりければ、御手をいだして、いたぶき給

ふよし、させられけるを、女のこをもつたいなし

さて、かしこまれば、いやさよ、同じ人なるもの

をご宣ひきとぞ、」

一.或時微禄なる近習のものに、汝は父母ありやさ、

問はせ給へば、老たる母をもちて候と申す、それ

はめでたき事なり、されごもさこそまづかるら

め、總て老いたる親もちたるものは、其養ひに力

を盡すを詮さすれば、さのみ倹約をもならず、か

ならずまづしかるべし、されども其貧窮は、楽し

き事なるべしと宣ふ、

るべき、近頃は年打きて、家中の扶助をすら、

心に任せざりけるものを、さ様のうきたる事は、

いひもつたふまじき事なりさて、以の外御氣色損

じたり、

一叉國の菩提所妙解寺にて、寺主あるじまうけせら

れけるに、花豆腐さいふものを登らせたり、それ

は豆腐ををかくことらへて、紅にて色縮なごし

て、興ある物なれば、下法師などは、是をけふの

設の詮おもひたるに、君御覧じて、か〜るひな

のはてまで、喰物にいたづらのたくみをして、財

をもいさまをも、つひやす事こそうたてけれ、い

かにしたり共、味はかはる間敷ものをこのたまへ

泰イニ

壷井ィニ

り、又此寺にまうで給ふには、鹽屋町さいへる市

を通り給ふ、そこの店に、あらひこさいふものを、

などをしたる紙の袋に入れて賣けるを、ある時

君駕の内より御覽じて、我領内にも、か~るもの

を賣かふばかり、はや華奢になりたり、これ國の

まひき、

ほくなりてたうべんに、何かくるしかるべき、さ

れば常には初物なごいふもの、ゆめ(ちさむべ

からず、されごもまろふざのもてなしには、志の

ほごをも見せまゐらせんずれば、其限りにあらず

さて所のもの共に申示したり、けふそこ來

り給はすば、いかでか~るものたうべんど、のた

給ひける、ある夜わたらせ給ひ、つれぐなぐさ

君イニ

一明和九年二月の火災に、瀧口の屋形焼亡して、白

金に移り住せ給ひける頃、そこに「富士見の亭さ

て」かたばかりの亭のありけるに、大輔殿住ませ

一同じ寺にて松洞さいへる遁世者、侍食する事のあ

りしに、此頃は當國の豆腐の制法、委しくなりて、

都にもゆめ おさるまじう覺え候と、賞申し

かば、君聞しめして、我は夫をうたてしく思ふ

なり、いなかはいなかにてあらんこそ、よけれさ

その給ひし、又或時の御物がたりに、此國の若者

共、何とやらん、ものにうつろひ安き風情の見え

ぬるは、人の心の輕薄になり行くにこそさ、いさ

口をしさのたまひき、松洞退いて、したしき者にい

へらく、むかしつかへてさふらひし程は、朝夕に

徳音をうけ給りけれども、常の事におもひなし奉

りて、過つる事のくやしさよ、今隠遁の身となり

て、たまさかに御談承りては、心肝に銘するもの

さて、此二ヶ條ぞあける、

まづしからんもこぬなりさのたまひて、うれへお

それ給へり、

ふたをして立ちたり、我しばらくこに有りて、

一江戸にてある國主の館に、わたらせ給ひけるに、

供膳進められ時、御箸さらんこし給ひけるほど

に、ふとあるじに向ひて、年の寄りて候へば、こ

ばしも用をしのびかね候、無骨御免候へさて、つ

こたちて、障子の外に出給へば、配膳のもの、案

内申さんさて、御跡に付きてまわりけるを、側近

く召して、誠は用をかなへんさにはあらず、 唯今

飯椀のふたをさりたるに、いかざしたりけん、い

まだ飯をもらぬにてありしかば、本のま~にそ

ぶさくやく事あれば、御耳にひどくさて、御目を

覺し給ひし故、黄門光國卿、かくおはせして申者

あり、いかなる故にか、

一御寝所にいらせ給ひつる時も、宿番のもの共、 聲

高くの~えるを、かしかましなど、 制せられ事

は、一度もなくて、やすらかにいねさせ給ふ、

小聲に

わざなれ、然るにさまの物取り出で、わづら

はしく進めむは、尾籠のふるまひなりと、ある老

人の申されこそ、心にく~覺えきさなん、のた

まひき、

一本武田長春院トアリ イニしめやうに見参せんとて訪ひ来り

一或時柳川城主立花殿見参し給ひける、御まうけに、

卯月頃にやありけん、茄子を供しければ、あな珍

し、今ほご世にあるべしさも覺えぬにて、興せ

られしを、君聞き給ひて、誠にけふは其このさく

にて、重賢も珍ら敷物たうべたり、總て物の世に

珍しき頃は、價殊に高し、しばらく日を経て、お

五九

る、

座敷になほらんする時、物替ひえはてつらんさ

て、なんじ取かへて参らすべし、あなかしこ、

主の殿にならせ奉りそ、かくさしり給ひたらん

には、 けふのまうけ承りたるもの、つみかうふる

事もやあらんと、さやき給ひければ、仰のま

に斗ひたり、かしこの侍共、ひそかに此事聞傳へ

て、難有御情なりけりさて、皆涙流しけり、其内

に何某さいへるもの、次の日龍口の屋形に参りて、
近習につきて、きのふのかしこまり申て、今にも
不思議候ひなば、譜代相傳の主に、一命を奉らん
ずる事は、言にも及ばす、それにさし續きては
物の用には立たずとも、北殿の御ためにこそ、
ひふんをもつくさめて、誰々も申あへりこぞいへ
一箕暦の頃にや、武具薬器ならざらん雑具に、金銀
用ふべからずと、家中に出し給うて、御身もお
ごそかにかしこく守らせ給ふ、或時御傍に宿番つ
一常にのたまひけるは、世の中に多きものを、水火
さぞいふなる、されば水をば、いか程つかひても、
妨げあるまじけれども、其水をおほくつかひすつ
るものは、なべての物をもつひやす事、必多きも
のなり、能く心得べしさなん、又料紙もたやすく
求めらるものなれども、さうさてゆめ!おろ
そかにすべからずさて、物を包みて奉りたるをも、
なく其儘さりおかせて、内々の御消息などは、

それにかゝせ給ふ、又近のもの共、帳など綴

ぬる事あれば、其たちはしを、かならず竹釘にさ

ゝせて、御かたはらに置きて、かりそめの事は、

みなそれに書かせ給ひき、

の残りにて事たりぬさて、冷飯まるりたり、

一藥方の役人といふもの、昔より定めありけるを、

君きこしめして、こさぐときわざなり、薬を服

せん時は、茶屋などにて事たりなんさて、夫をも

やめられたり、

一あるじまうげしたまひける時、肴のしな、無下に

すくなかりければ、用人等、斯てはおろそかなる

やうにや候ひなん、今すこしは加へて参らせばや

申しかば、いやさよ、大名はこのましき物を

ば、わが宿にていかさまにもめしなん、人のかたへ

行きては、しづかに物語せんするこそ、心なぐさむ

かふまつるものでも、用心のためさて、ひねりさ

いふものを作らせける、其かざりに銀をもちふべ

きかさ申しかば、君聞しめして、夫は武具のたぐひなれば、さもありぬべし、たぶんそれにもちひん料をば、われたくはへもちたれば、あたふべして、袋戸の内より、一つの箱を取出粉ふ、見奉れば、銀にて作りたるこはさいふ物を、あふると斗もりたり、さてのたまひけるは、若かりし時より、鼻紙ぶくろ、たばこ入なごいふものに、此こはせ付きたるがあたらしく覺えしかば、常に取置きたりけるが、今かる事にもちふるばかりつもれりとて、たびたりけるに、ゆたかに其ものに用ひてもあまりありき、質に露ばかりの物も、いたづらになす間じき事なり、

五八

「——させ關東の館にて、蹴鞠の遊せんさて、物の用にたつまじき、ゆがみたる木細竹にて、か～りをしつらはせられたり、常に心安く參られける人々君にむかひて、此頃松平何がし殿に、蹴鞠に參り

て候ひしに、かしこのか〜りは、うるはしくこそ
候ひつれ、君は夫にはまさりたる、大名にてわた
らせ給ふに、あまぁに見ぐるしく候、御内の人々
に仰せて、作りかへさせ給ふべうもやと、申され
ければ、君うちうなづきて、斯くまでへだてなく
聞え給ふ御心ざしは、悦入候、但某國貧しくして、
家中の者共をさへ、おもふやうに扶持し候はず、
か〜る遊び事に結構を盡し候はん事、おもひもよ
らず候、少しにてもごくづきて候は、家來共に、
物をも心能く俺はせたしと、存る斗りに候と、の給
程なく上使を門送りして、立かへり給ふやいなや、
長右衛門さめす、長右衛門おそれ、御まへに参
たれば、よかりつるぞ、間にあひたり、さてもあ
やうき事なりき、然れどもいそがはしき時は、か〜
事もあるならひぞ、くやしくなおもひそこの給
ひて、御氣色常にかはらせ給はざりき、
一先々殿の御飯は、二釜づかしざ、其内出来のよき

を奉り來りしに、君聞しめして、かしぎ損じたらん時は、兎もかうもすべし、常に其用意したらんは、奢らしきわざなりさて、一釜づ~に定めらる、又夜の物もかならず、其時いさなみけるを、夕げ

五七

しく付けられたり、君御覧じて、此事は費をすくはん爲めなれば、それがこには、鐵炮なご入れたらん古き皮袋の、用にた~ざらんを取りて付させたり、然るに人々は、新しき革をもさめて、付けられたりさ見ゆれば、費はなかまさりなんさて、わらはせ給ひぬ、

一常に鷹をすゑ給ふ袖に、革をたせて、縫付けさせられけるを、或時公義の御鷹匠、何かしさかいひける人、見參らせて、何の御ためにかくはさ申されければ、別の事なし、やもすれば、鷹の喰やぶるが、うるさきにこのたまへば、げにくかしこき御はからひなり、今よりはおのれも、かうこそ

仕らめて、重ねて参られける時は、誠には
ひしかば、申しょ人も、しばしば言葉なくて、感
涙を流されけり、」
一御養生のためにやありけむ、桑の飯さて、桑の若
葉を加へてかしぎたるを、このみまゐりければ、
夫をだにさて、旅行の宿々にても、割子取まかな
ひけるものごも、かならずいとなみてす~めける
に、一させ木曽路にて、其ものまねるまじきよし、
仰ありければ、御供の者共、たしみは誰とても限
りあるならひ、今はあかせ給ふにこそこ、さぶやき
けるに、二宿三宿程過ぎさせ給ひて、又参らすべ
申ものもありけれども、かうやうのもの、先
祖に超過せんは、よからぬ事なりさて、用ひ給は
ざりき、少將に任じ給ひければ、御宿札にも、肥
後少將と書せ申さん、通例しかなりさ申もの
けるに、ほこらしき事なせそさて、もとのまゝに
書かせられたり、

りけ

さて、持傳へて候て、とり出し御覽せさせしに、

まがふかたなきものながら、今の世國主達のせき

札さいふ物には、はるかに長おとりたり、扈従の

ものに仰せて、其寸尺をとらせて、今より後は、

此式に可仕よしおほせつく、東海道などの客館に、

家々のせき札かけおきたらん時、見ぐるしかるべ

ぬぎかへて出で給ふ、長右衛門大きに恐れて、近

習の長に、いかはせんこはからへば、君の世にす

ぐれて、上使なごうやまひつしみ給ふ程は、御

邊も兼てしりつらん、常は兎もあれ、けふにあたり

て、か~るふしぎ仕出たらんには、いかなる御か

うむるべきも斗がたし、まづ畏り居よごいへば、

長右衛門彌おそれて、とある所にひそまり居たり、

一ある日、台命の御使、あるべきにて、さくより禮

服かひつくろひて、客殿に出て待居給ひけるに、

や~時刻うつりければ、こづけ參るべきよしのた

まひて、急ぎ奥の方に入らせらる〜に、村松長右

衛門さいへる近習のもの、強飯もて參るさて、大

廊下の曲途にて、はたさ君に行奉りて、御胸の

わたりより、こづけをした〜かに打かけたり、其折

もはや上使只今なりと告げれば、あはて御衣

きよし仰ありけり、事のやうをつらくかんがふ

れば、其參らざりけるあたりは、専ら蠶飼をわざ

とする里なりき、さてはかりにも民のわざをさま

たげりごとの事ならけるよ、はじめて思ひ知ら

れたり、

五六

一殿の御座船は、むかしより聊も節なき材をえらび

て作れり、さばかりの大船の材は、うちまかせて

も、たやすかるまじきに、まして節なからんを求

め出ん事、さうなき大事なり、さればつねに天下

にもこめ、たま式にあひたる材あれば、數千

金をなげうち、必かひえて、不時の用に備ふ、君

此よし聞し召して、従者共の船をば、いかどはす

る間はせ給ふ、それは節をえりぬきて、 あさを

補ひ候と申しゝかば、さらば我が船も其定にせよ、

さりとてもたやすくそこねはせじ、節ある材は、

かならずあやふき程ならば、従者共の船をも、皆

節なからんをもてこそ作らめ、さらでは従者共を、

あやうきものにのせて、われひとり堅固にかまへ

ひき、

ひたらんは、むげに力なし、それすら水主、揖取、

心をあはせ力を盡さば、つ~がなくもなりなん、

た船の修覆、おろそかにして、朽そこねたる所

あらんは、みづからまねくわざわひなり、常に心

を盡して、ゆめおたこるべからず、此旨船手の

もの共に、よくささしおくべしさなんのたま

いつの年の參勤にか、 木曽路をうち過ぎ給ひける

に、ある客館にて、あるどの男、むかし御先三齋

君の御宿に點せられ事の候ひし、其時の御名札

五五

一君の御月代に参りたるものには、いつもあやまち

して、血あへてもくるしからぬぞ、月代のきずは、

はやくいゆるものぞと、のたまひき、

「一いづくにかありけん、やん事なき御方、や~もす

れば、御内のものを手討し給ふよし、君きこしめ

して、同じ人なるうへ、主従とまで頼みつれば、

わきてふびんにこそし給ふべかめれ、何さてかく

までつれなくは、わたらせ給ふらん、そこに召しつ

かばるものでも、さこそいぶせかるらめ、され

ごも累代の主君なれば、義をおもひて、えはなれ

奉らぬなるべし、よ所に聞くも、胸ぐるしきわざ

なりさて、そぶろに涙をおさし給ふ、」

たらんは、何心地かせん、もしふありても、あ

やうからずば、今までのやうに、いたづらに財

をつひやして、國のわづらひなぁなん事、おご

りの沙汰なるべして、夫よりは御船の材も、ふ

このきらひなく用ひさせられたり、

候、たゞし食事は、かたのごさく仕て候と申上けれ

ば、さらばさて立出でたまひけり、昌之誠はいま

だ食せざりけれども、さ申さんには、食事のほご

待たせ給ふべき御氣色なりければ、かくは申つこ

ぞ、そこより烟をたてし所までは、十四五丁もや

ありつらん、夫を引きて踊る程またせ給ひつれご

も、となる事なしさ聞しめしては、さくした~

せ給ふべきを、小臣の食事の上を、思召わすれ

給はざりける事の、心肝に銘じてかたじけなく覺

えつさ、涙をぬぐひけり、此物語なほざりに聞き

ては、さばかりの事は、世の常のことなり、昌之

が感激、あまりなるやうにもきくなさるれごも、

すべて大名の御内にては、外様のものは、常に君

の御あたりにさむらう事もなく、たまくか~る

御情を身にうけては、さこそおもひつらめ、され

ば人の君れるかたは、一言の下に、人の心を得さ

せ給ふ事、重禄厚賞にもまざれり、それをいかに
といふに、重禄厚賞は、定れる式もありなん、た
ぶかりそめの御詞のはしにこそ、御情の程は顯は
るれ、さては一言の下に、人の心を失ひ給ふ事も、
一参勤の折からは、常に豊後國の内、君の領分鶴崎
さいふ所より御船出し、播州室津に押渡して、
より陸路をうたせ給ふ、御供の船は、播摩の沖を
おひて、難波につくる定なり、安永四年、例のごと
室津に付け給ひし時御船の指揮つかふまつる野
間文左衛門、鏡寛治さいふものをめして、いつも
難波につきぬべき御供船は、君の船におくれ奉ら
じさ、雨風もいはず、おこわたるさか聞しめす、
志の程は、誠に神妙なれども、かくてはいかなる
あやまちもやあらんずらんと、御心いため給ふこ
さ一方ならず、船路のならひ、雨風にさへられて、
おくれ奉らんは、何かくるしかるべき、今よりは
相かまへて、よく空のけしきも見定めて、船

出すべき旨命じ給ふ、又常にのたまひけるは、郎等ごもの難波に渡海せんに、おもはざる難風にあ

五四

なぞらへてしるべし、抑將たる人は、士卒未だ食せざれば、飢ゑたりさも、敢てくらはずさこそ承はれ、太平の御代には、御狩などにこそ、か〜る事もおもひ合され、「此君の御心ばせのごさくならましかば、誰かは死を軽くせざらん」、

一家士不破萬平昌之、常に語りけるは、安永の頃、山鹿の郡代つかふまつりしに、君わたりに、三日四日おはしまして、狩し給ふ事のありき、山鹿は國府より、はるかにへだ〜りたれば、か〜る事はいこまれなり、殊更職務もいざまあるほどなりしかば、御ゆるしかうふらば、日毎に御供につかふまつらん、もし頓の事も候はんには、御狩場にても、御いとまたびてんさ、近習につきて申し〜かば、仔細あらじ、但職事もかりそめの事は、御

前にて裁判つかまつれなど、いざもねんごろにの
たまひき、或日十三部原さいふ所を狩らせ給ひて
ぬれ(ゆかんに、我ひとり傘さすべき理なしさ
て、めさず、又ひめもす狩行ひ給ひては、さこそ
つかれ給はんづれごも、たごぐしき夜の道を、
五里も六里も必歩より歸らせ給ふ、風雨はげしき
夜など、今宵ばかりは、馬にも駕にもなし奉らん
と、御供の者共ひたづらに申せごも、つかれたる
は、我も人も同じさまの事なり、ひとりやは、さ
やうのものにのるべきさて、つひに一度もめさぶ
りけり、

かれいひまいらんさて、猿川塚かいへる渡に、
しばしうちやすみておはしに、原のあなたに、
烟おびた~しくたちたり、火炎にやあらんずらん
と、いぶからせ給ひて、誰かある、見て参れており
ければ、近習のもの、萬さくはせ、むかつて候
さ申す、心早きものなり、さありつらんさて、御

氣色よかりき、のちに承りぬ、ほどなくはせかへ

りて、別の事も候はず、畑のもの〳〵、からをやき

捨つるさて、山のごさくにつみて、火をかけたる

にて候、あたり近く君わたらせ給ふもはどからず、

けふこもかる事出で候こそ、おそれ存候へ、か

つは臣等もいましめおろそかなるに似たちご、近

侍につきて畏りを申しかば、農民ごもの、おの

がわざをいさなまんに、何のはどかりかあるべき

さて、御けしき彌々よかりき、きる程に其萬平は、

糧つかひはてたりや、見て参れて、近習のもの

を遣はさる、其者はせ來りて、かく申しかば、

こくつかひはて〳〵候と申けれども、おぼつか

やおぼしめんげん、たしかにうけたまはれさて、

重ねて遣はされければ、昌之謹みて、誠に難有御掟

五三

一御鷹のみにはあらで、さかしき山の狩、廣き

原のおひ鳥狩など、数多度の事なりき、それは家子

郎等共の、歩立の達者、馬上の自由の程を、見そ

なばして、武事におこたりなからしめむさなり、

其狩場かけひきのさま、誠にいさましかりき、事

ながければもらしつ、

て、近侍の、あやまりて鷹の足緒に、そこさはり

ければ、大きなる御脛にて、 こさたいしくしから

せ給ひき、此二條をおろかなる心にかんがへ奉る

に、外様のものは、御氣色そんする程ならば、恐

れおもひて、畏りを申すべし、近侍は馴れ奉りて、

つねの事におもひなし奉れば、御心おきなかりけ

るにこそ、かりそめの事にも、かく御遠慮の程、

大かたならざりき、されば御供のものも、皆勞

をわすれたり、或時鷹匠御をすゑて参るさて、

細道の所にて御供の侍共に行きあひて、御鷹にて

候ぞ、そこのき給へと申ければ、御待候ぞ、そこの

き給へさぞこたへける、君問近きほごにて、この

問答を聞し召して、打笑はせ給ひ、さがめ給ふ御

氣色、いさゝかもなかりき、

一御狩にて俄に雨のふりらん時、侍共御傘なご申

せば、わればぬれたりとも、ぬぎかふべきものも

乏しからず、供さふらふ下郎ごもは、きる物一ツ

をだに、得もたぬものもおほかりなん、それすら猶

一殿の狩に出で給へる時、其所の郡代必ず御供につ

かうまつる定りなりこを、郡代は民を治むる職な

り、民の事はしばしもゆるすべからず、遊獵に従

ひて、もし職務闕如せば、はかりなき民のわづら

ひなるべしさて、君の御時より、此事ながくさぶ

めらる、又阿蘇さいふ所にて、山がたつきて、狩

くらし給ひければ、其わたりの民ごも、手に手に

綱松さして、星のごとく出来たりしかば、いかな

る事にかと、所の長にはせ給へば、かゝるさき

には、君の御かへるさをあかし奉らんさて、昔よ

りかくつかふまつる掟にて候さ申しかば、夜晝

しばしのいさまなき民を、我狩のためにわづらは

さん事、ゆめくあるべからざるわざなりさて、

みなくかへんやり、例の提燈ばかりにて、かへ

らせ給ひ、やがて國中にふれて、此事をもなが

こぶめられたりけり、

五二

イ=靈雲院殿の御男子、都て八人なれども、四

人は亡失、爰には後迄御存生の數を擧げて

四人と記す、

なら、やがて其年の十二月にこれも身まかり給ひ

ぬ、紀休主も、うつ~なき御心にて、ひたすら君

の御別を、なげき給ふなご聞えしほごに、御病も

いやまして、同七年九月、むなしくなり給ひ、壽

鏡院の御方は、君に一させ先だ~れき、天明四年

二月の頃なりき、

がひけん、御鷹の折のやうに、やりをふさ立て

しかば、鶚おごろきて飛去りぬ、あはや御けしき

そんじぬべしさ、見奉るほどに、 からくさわら

はせ給ひ、整はいらざりけるものをさて、御臂の

網をおろさせ給ひければ、人々うちごよみ笑ひて

やみぬ、其日の夕ざり、やすらはせ給ひける所に

五一

一御鷹野にて鳥の落草を打かこまんさて、御供の侍

ごもを、もよほさる〜には、かならず走りてくれ

よ、急ぎてくれよさのたまふ、是は侍のものを

遊獵のために、おごそかにさしっかひ給はん事を、

はぶからせ給ふなるべし、又外様のもの~心ばせ

をも、しろしめさんにやありけん、御狩のたび

ごさに、かならず番方を、一組二組宛めしぐせら

る、或時書のほど、しばし鷹をやすめておはせし

に、そこに鶉の候さ申ものありければ、たはぶれ

に投網にて、 さらせ給はむさて、御臂にかけて、

しのびくに立寄らせ給ひ、はや間近くなりける

時、かたへにありける番方のもの、いかゞ心得た

節イ

銀臺遺事〔四〕

ごもの役は、器量をはかりて申付る事に候、其片

山は、此度の役に遊ぶべくおもふ仔細候間、御旨

に任せがたう候、抑姉君の~たまふやうこそ、心

も得候はね、總て女の身にて、國務の事、兎にも

角にも、ないろひ給ひそさこそ、兼ていさめて候

ひつるを、いかでさる事宣ひつらん、重賢が身に

さつても、面目なうさ、のたまひつかはされけ

る、御はらからの御事さへ、かくいさめ給へば、

御内の女房達、うべもおそれつ~しみけり、

一をのこの御兄弟は、隆徳院殿をはじめにて、御身

共に四人わたらせ給ひき、さし次の御弟紀体主は、

御心地世の常ならずして、 はやうより引籠りてま

します、季の興膨主は、御一族の家をつがれたり、

御姉妹は、數多ましくけれども、かづ!~君に

先だち給ひて、東に清源夫人、常に壽鏡院の

御方までに、見なし參らせられしかば、本より友

愛深き御心に、狩更他事なく思召けり、一させ清源夫人、此國の歌枕をも見ばやさて、くだらせ給ひければ、君の御よろこびなのめならず、もろさもに、かなたこなたにわたらせ給ひき、これや老つひに關東にて卒し給ひければ、其もふけもいたづらになりて、興膨主のなげき、いはんかたらくの御おもひ出なりけん、君の國のほごは、興膨主絶えず見參し給ふに、いかに寒き頃なりとも、君の御爐の遊には、さすがに恐れをなされければ、客殿の方に火燵しつらはせて、休息の所と定めおかれたり、一族の家をつがれては、おのづから君臣のたぐひにて、うざくもならせらるべきに、少しも御へだてなかりし事、大かたたぐひなかりき、されば興膨主も、一すちにうやまひ奉らる、ことにあはれなりし事は、天明三年、君關東の御首途の程にや有けん、興膨主に向はせ給ひて、おことの許に、茶室しつらはせられよ、やがて歸

来て、かならず給ふ所をもみん、其折茶給は

らばやさのたまひしかは、興膨主、難有御事にこ

そこて、なめならずよろこび、程なく茶室いと

なませられ、おもふま~に出来にけれども、君の

わたらせ給はん時、 はじめていれ奉らんさて、其

身ばかりにも立入られず、明幕御歸國の程を待

けるに、御所勞ありて、滯府ましく、同五年十

五〇

召し給へと、あながちにいさめ聞え給ひけれ

ば、此井と申す女房をめして、この腹に御世つぎ

生れさせ給ふ、今一人は、かもんさて、女の童に

ていけなきより、なれつかへ奉りけるものは

らに、男子生れ給へごも、三歳と申に、世をもは

やうし給ひ、いく程なく、かもんも身まかりにけ

り、此二人の外には、御側近くめしたる女房もな

し、さても世には、かるたぐひには、碌多くた

びて、榮耀を極めさするならひもありけるに、君

の此女房達を、扶持し給ひけるこそ、えもいはすかすかなりし事なり、初めのほどは、二人扶持に、金拾両にもみたざりしが、御子うみ奉りては、聊加頃より、御目を頃はせ給ひて、さま療治を盡させ給ひけれども、其しるしなく、つひにしひさせ給ふ、されども君、聊もすさぶる御けしきましまさず、偕老の契たがへさせ給はざりしかば、小君も亦婦徳ましくて、御みづからは、日月の光をも、見奉らぬ御身とならせ給ふに、君未だ御子をもわたらせ給はねば、いかならん女をも、さくふ、いかなる御事にや、御年さかりにま

四九

一君の御姉、ある國の守の許に住給ひけるに、年久しくつけ參らせられたる、片山何某さいへる侍、一させ君の御はからひにて、役をうつさるべかりけるに、守殿、年頃なれつかへけるものなれば返し給はん事、心うくやおぼしけん、御使して、

今しばらくはか~へておかせ給へ、妻にてわたり

給ふ御姉君も、さこそのたもふものをと、いはせ

られければ、君の御返事に、仰承り候、但し家士

き、

へられきさは、きこえけれども、こもしかりき

大輔殿、御世嗣にさだまり給ひてこそ、やうく

貳拾人扶持に、五拾兩なご~聞えつれ、それすら

世のためしにくらべては、九牛の一毛なるべし」、

一もろこしにも、婦に長舌ありなごいへるごとく、

大名の側近くめし仕はる女房は、口さかしく、

人の上をもいひ、はては仕置をも、うち!こり

はからふためし、なきにしもあらず、君深くかぶる

事を悪み給ひければ、此女房達はいふに及ばず、

御内にさふらふものは、はしたものまでも、常に

いましめて、かりにも人の上など、 いふ事なかり

て、御旨にまかせ給ふかくて安永二年の冬にも、

なりしかば、君の御使して、堀平太左衛門を、

大夫人の御許に参らせられて、ありつる事もはや
五年の期過ぎて、このさんの暮よりは、むかしに
かへし奉るべき由を、仰せ遣はされければ、大夫
人より滕臣草野兵太夫御使にて、仰かたじけなう
承りはべる、たゞし此五年の間、雨風なごさはる
事多して、御領の貢も豊ならず聞え侍り、又さ
りし頃焼けうせたりし瀧口の屋形、ふた~び作り
出され、きのふけふまでに、やう事はてぬる
に、白金の御曹司を、公方の御所の見参に入れ奉
るべき御催し、御元服の御くはだてさへありて、
めでたき御事うちつごひたり、されば共用意い!
ばくぞや、か~る折しも、分料昔に返し給はらん
事は、ゆめ(侍るまじき事になん、たど此程の
ま~にてこそ侍らめと、申させ給ふ、君謹みて聞
しめし、重ねて平太左衛門を参らせられて、仰の
旨かしこまり、誠に難有御情に候、この上はさか
く申さんここは、其恐れからず候へごも、此度

はこさかたの分料、みな返し遣候に、御母公の御
「一小君は、久我内大臣通兄公の御女にてわたらせ給
許のみ、もこのまゝにて候ひなん事は、孝養の道に
も違ひ、冥夥の程も、そらおそろしく候へば、ま
げて御ゆるしかうふりて、本意のま~に仕度こそ
へと、のたまひ遣されしかば、大夫人も、辭譲
の御詞なくやおばしけん、共旨に任せられたり
されごも御身の分料さて、あなかしこ外にすぐべ
からすさ、平太左衛門に仰付させ給ふ、又一させ
君中風の御心地さて、御足なやませ給ひける頃、
物事御心みじかく、近のもの共にのたまふ事も、
例にかはりてあはたしかりければ、大夫人其由
聞し召して、身にやまひつきては、誰もさるなら
ひにては侍れごも、召仕はる~ものごもく、いたは
しきに、今少し御心せさせ給ひ候へかしざ、いさめ
させ給ひければ、君大に恐れつ~しみ給ひ、引き
かつてのごやかに、昔のまゝにならせ給ふ、其頃

は御齢も、はや六十に近くわたらせ給へごも、兒の親を恐れたらんやうなりき、か~る事見もし、聞もし奉るもの、この子この母といへる本文に、おもひあはせて、感涙をぬぐひけり、

四八

好み給ひ、かたへの女房達には、ひそかにさきても聞かせ給ひけれども、女の身にて眞名讀み給ふ事、ふかくつ~み給ひて、御内のものにも知らせ給はざりき、殊につくしみ深くましくて、隆徳院殿うせたまひし日にあたりては、月毎に蔬菜をもまらず、又諸寺諸社に代參さて、御内のものをつかはされては、其もの~踊り来るまでは、茶セばこの類をもたち給ふ、初の程は、それさえるものもなかりけれども、度重りていちじるしかりければ、女房達、いかなる御心にやさ、ひ奉りけるに、女の身にて度々ものようでせんも便なければ、代を登らせたり、さればころばかりは、み

づから拜み奉る思ひをなすなりとぞ、いらへ給ひ
けるこぞ、昔より家老、用人なご、小君にまみえ
奉れば、手づから熨斗を賜る式なりけるを、男女
はみづからさづけずさこそ聞えつれさて、かなら
すものに入れて給りぬ、かく物事に正しくまし
・て、君聊も過ちあれば、かならずいさめ給ふ、
君も内の政は、常に此御氣色を伺ひて、はからひ
給ひけり、

くだぐしけれども、此大夫人の御事、又おもひ出
でたる事あり、明和五年の頃、非常の事ごも、さ
また打續きて、國用ほさんご乏しからんさす、
此事等閑に打過すべからず、いでや主従艱苦をご
もにせよさて、今年より五ヶ年を限り、さらに儉
約して、君の御はらからを始め、したしき方々の分
料家、中の賜ものまで、押渡して其数を減せらる、
唯大夫人の御方のみ、親にて渡らせ給へば、其沙
汰なかりけるに、大夫人きこしめしてか〜る際に

は、我とても、もれぬべきかは、なみに減じ給

へと、ひたすらにのたまへば、君もいなみがたく

四七

一安永九年秋の末、常國にましくける頃、静證院大

夫人、御なやみ以外の曲聞ければ、君大きに

驚き給ひ、急ぎ關東へ使者を参らせて、営のた

め罷下度よしを愁訴し給ひ、従者共もみな旅支度

して、使者のはせかへるを、今やくさまちける

ところに、はや十月四日、かくれさせ給ふ由告來

ければ、君の御なげき、申もなか(おろかなり、

つれぐさ喪にこもり給ふ頃、御句にかく、

枯芦の塒も寒夜の鶴

鳥の内に、こめたるものなれば、下部らにくらは

しめん事は、勿體なして、清浄ならん所に納る

にてこそ候はめて申しょかば、いやこよ人の食料

にせんに、まさりたる清浄なる事やある、か~る事

申汝等も、心得たがひたりさて、彌御氣色あしく、

以後のこらしめに、其小豆を捨てしものごも、急
度愼み居よさ、申付べしさありしかば、みなく
籠り居る事七日ばかりして、やう(御ゆるしか
うふりけり、常にも供膳の事に付て、あやまちせ
事はさまぐありけれども、聊もとがめ給ふ事
はなかりき、或時御一族の人、侍食せられけるに、
其膳の箸、末そこねてありしかば、配膳のものに
取かへて来べき由を申されければ、君きこしめし、
いやさよ、それは本を末になして、用ひられよ、
あらはにいはんには、脂部などの罪かふくらん
は、不便なるにこのたまふ、又昔より殿の御膳の
料は、稲の品定りて、領内よりみつがする掟なり
しに、かくては下のわづらひざなりなん、只よの
つねの貢の中にて、しかるべきを登らすべしさ、
仰付られたり、又或時朝夕のものに、白き眞砂の
多くどりたる事のありけれども、いろまがひぬ
れば、膳部も見とがめず、其ま~参らせしに、配

膳のもの目をもしのびて、ひそかに眞砂を御袖
に入れられて、知るものなかりしに、御衣の事と
りまかなふもの、いつも、御袖のそこに、かる
眞砂あるにこそあやしけれさ、中に心つきて、御
膳まゐるさまを、よく心付けて伺ひ見て、は
じめてそれさえられたり、總て米穀は、粒々辛
苦なる理を、ふかくしろしめしけるにや、一粒な
りさも、いたづらになる事を、恐れつくしみ給ふ、
あるとき御鷹野にて、柴折りしきて、かれいひまわ
りける折から、一二粒地にこぼれたれば、小堀治助
爲貞といふ近侍のもの、ひろひていたざきたうべ
けるを御覧じ、甚だ御感あり、すべて米穀の、人
の口に入るまでは、いかばかりか民の辛苦をつむ
らん、汝よく此理を辨へたりと覚えて、誠に神妙
なり、我も常に疊に落たるをば、かならずひろひ
てくひぬ、盤にこぼれたるは、膳部のもの、よも
捨つまどさ、其ま~おく事もありこのたまひき

一右に申つる大夫人、婦徳ましくて、 常に經書を

四六

——させ領内柳水と云所より出たる馬を、頓て其名

に呼びて、ここに愛し給ひ、参勤に引かせられけ

るに、川を渡す所にも、船嫌ひせしかば、馬役、

口取、數多打寄りて、兎角しけれごものらず、君

御覧じて、初めに悪く取なせば、永くくせになる物

なり、そこ退き候へさて、御自ら口取らせ給ひぬ

れば、すらくこ乗りたり、斯る業まで、いつな

れさせ給ひけるにや、人皆驚き合ひたり、

一靜證院大夫人は、紀州大納言宗直卿の御女にて、

隆徳院殿に嫁し給ひ、君の御養母にてわたらせ給

ふ、御齢は同じ程の事にましくけれども、うや

まひつかふまつり給ふ事、誠の御母の如し、此國

にましますす年は、厳寒の頃、かならず御鷹の鴨を

なり、乗人桃尻ならば、暖足を要な、されば我

は其馬の程々に随ひて、性分を盡させん事をのみ

心さすれば、馬の善悪は、さまで思はずさて、代料二拾両に過ぎたるをば、求め給はざりけれども、皆々足色をかしかりき、質にや人を仕ひ給ふにも、夫々の器量のほどを盡させられたり、其御心の物にも及べる成べし、

登らせらる、其鴨ははらをわりてわたをぬき、小豆をすきまなくつめて、口にもふくませなごす、かくすれば、日を経ても味替らずさなん、たこへば、鴨ニッ参らせられんには、先づ四ッかの如(しつらへ、二ッを飛脚にて江戸へ参らせ、其飛脚のもてつかん日数をかぞへて、残るニッを調せさせ、うやくく座してきこしめす、是大夫人に侍食し給ふ御心ばへにして、且は味のそこねもやすると、恐れこゝろみ給ふなり、一とせ例のごさく、こ~ろみ給ひけるついでに、配膳のものに向ひて、是にこめし小豆をば、 いかどはすると問はせ給ふに、こるものなかりければ、調味せんも

のにさへさて、問はせらる~に、いつもすて候さ

こたふ、其由申上ければ、たちまち御けしきかは

り、なんてうさる奇怪のふるまひするやうやある、

それ小豆さいふは、五穀のたぐひならずや、これ

天の人を養ひ給ふたなつものなり、然るをいたづ

らにはふり捨るともがら、天罰のがるまじさいか

らせ給へば、御前に何候せし用人ごも、それを粗略

にするにては候まじ、君の拳にて、 さらせ給ふ

四五

十に餘るまで、一さしてならえたりと思ふ事なし、

さりとても 心はなきものを、ましてなんぢら

は、行末はるかなり、學ば何事かはならざらん、

事を左右によせてせざらんものは、にくさげなら

さ、常にささり給ひければ、近侍のものごも、

の程をもいはず、諸饗をまなびぬ、或時何がしさ

いぶ近習のものに、杭の職を命じ給ひけるに、共

者もこより其事に不堪なりければ、辭申けれご

も、ゆるし給はず、同職の者をもおきて、日ごとに
これにのみ梳らせらる 一日のうちにゆるぎさけ
なぎするを、いく度もその人にはせられしかば、
あるもの何さて彼にのみ命じ給ふぞ、堪能のもの
も候に申しかば、實にかれは不堪なり、され
ばこそひたすら梳らすれ、すべて若きものは、
毎にしならふが能きぞこのたまひき、後にはは
してかここうつかふまつりたり、おほよそ髪をば、
不堪のものにゆはせたらんは、心煩はしく覺の
るならひなるを、たへとのびてかくはからはせ給
ふ御心ばせのほごは、萬事えせぬ事さて、おもひ
すてまじき由を、若きものごもにささし示し給ふ
一馬を好み給ふ事、世にすぐれたり、草飼口取の
まで、委しく知ら召たり、されごも駿足を求めず、
常に宣ひけるは、馬は乘人だに能ければ、たさひ
鶴馬なりさも、共生れ附きたる程の業は出づる者
一下のものをさしてわれてよぶは、賤しき詞なれ

ごも、今はやむ事なき人も、おのづからのたまひ

けるに、此君はかりにも、さばのたまはず、 近習

のものをも、かならず名を呼び給ふ是は其初め、

秋山定政が、我こは自らを呼ぶ詞にて、人をさす

べき詞に非ずさ、諫め申を、御生涯守らせ給

ひきさぞ、

いまだいさけなくおはせし程より、書寐し給はず、

日長き頃などは、いたくつかれ給ひては、書をひ

ろげながら、ルによりて、しばしまごろみ給ふの

みなりき、馬めし給ふべき日など、晝のほど、事

しげくしてかなはざれば、たてあかしをさせて

夜中にも乗り給ふ、総て學び給ふ程の事は、必ず

熟し紛玉、及其程より勤倹は、古の人のをしへと

いふ事を、ふかく執し給ひきさぞ、

御心なりけんと難有こそ」

四四

「一江府にて雨のふりける日、登城し給ひけるに、御

傘に參りたるもの、あやまりて傘の爪を御ぐに

打當てたり、下城ましくければ、供頭、御前に

出で~けふの御傘の者を、いかゞ申付候はんや

伺ひければ、今日は常より、時刻おくれたりご

覺えければ、急ぎ參りしほごに、我あやまちたる

にてこそあれ宣ひき、又御鷹野にて、調度もち

たりし下部、いかにけむ尊びて、調度をさんざ

んに打損せしかば、御氣色いかどあらんご、近習

のもの、恐れ! 其由申ければ、其ころびたる下

部は、怪我はせざりしやさのみ仰せられき」

一御手跡は、はじめ細井文三郎號を九皇さいひも

の、御手本參らせたり、藍より出るさかや申べか

らん、或時水戸治保卿、此君の人となりをしたは

て、例のやうに御酒參らせたるに、いかにして取

違へけん、調味に用ふべき七年酒を登らせけれご

も、こかくの仰もなし、其殘を近習に賜りて、は

じめてそれを知りぬれば、臺所に其よし告けるに、

膳部大に驚きて、畏りて申ければ、いや我のみた

るは、毎の酒さこそ覺えつれて宣ひき、

四三

一近侍のものどもに、其事彼事を學べなごおほせ

ある時、生質さることにうざく、齢も程過候、

よりはいかでかなご申せば、さこそおもふらめ、

されごも唯ひたすらにまなび候へば、我も一切の

事にささからず、然れども八十たびすれば、己百

たびすさいへる理りをおもひて、若かりし程より

物に怠らず、かたのごとくつこめぬれごも、今六

せ給ふあまりにや、常に給ふ所の額の文字を、

あつらへ給ひけるに、辭退ましくけれども、あ

ながちなりければ、玄々亭と遊して參らせらる、

其頃かる事、是のみならずありけれども、こひ

給ふ方の御名も文字も、わすれたればかひなし、

「一寸陰を～しむさいふ本文、常にのたまひ、しばし

もいたづらにましまさず、御よはひかたふかせ給

ひても、日課怠らせ給はず、御内のものども、宿番つかふまつる程も、なす事なくてはあるべからずさて、書を讓み手習はせ、さる事もえせざるものは、せめて網を結ふわざをもせよ、やむにはまさりなんさ、おきて給ひければ、宿番する程も皆おのれ)がわざをしけり、」

にはせんすべなくて、其儘参らせしに、君は露はぢらひ給ふ氣色もなし、やがてまろうと、わりごさり出てもてなし給ひけり、夕さり踊らせ給ふすがら、さてもけふは、客人達の御もてなしにて、味能ものたうべて候、去ながら、今より後は

一或時園東にて、御身にひさしき大名二三人ともなひ給ひて、君の別荘に遊び給ひしに、所わりごは、さまぐのものさりしたくめて、きらくしかしに、君のは例の二品なりければ、従のものごも、いかぶはせんなごいひぁひけれども、

一殿の御服の料は、都の呉服所にて撰びて、上の品

を奉らする定なりしを、君の御時、次の品を参らす
べき曲仰遣さる、君常には、細木綿をのみめしけ
るを、御年老い給ひ、御病さへつきぬれば、人々
いさめて、やうく世の常の縞なさいふたぐひ
を奉りたり、それも垢つけば、あらばせてめしけ
其えらびやみにき、又梯の下など、聊も不用の所
あれば、棚をしつらはせられ、少しもいたづらの
所なからしめむとなり、
一御参勤のほどにてやありけん、或宿にて夜になり
一或時大輔殿の方にて、御酒参らせられければ、是
は能き酒なり、常に是を参らんは、過分にや候べ
きの給ひ、しばしありて、去ながらおこさは鷹を
好み給はねば、是程の事はゆるしてもありなんか、
我は鷹のつひへもあればさ宣ひき、
か～る事、ひぇくさやめ給へ候へかし、我も人
も、家子郎等数多ちて候へば、箇様の事に奢をし
りぞけてこそ、心よく扶持をもし候はめて宣ひけ

る、此たぐひの事、常にありしかば、其頃の大名

達、此殿に見參ありて、歸らせ給ひては、家老用

人なごめして、各も承り候へ、けふも細川殿、

かくこそ申されつれ、かくこそふるまはれつれ、

是なん賢人さいふものならんなご宣ふは、いつも

のこさなりきとぞ、又見參の時も、此殿をば先生、

親父さまなご~あがめ給ふかたぐ多かりき、

「一墓所の一月の料を、兼て定めおかれて、もし其料

つきぬる時は、客人招請などをも、しばしさぶめ

て、更に倹約し給ひ、其さだめをこえぬやうにし

給へり、」

四二

り一里ばかりへだて、水前寺村さいふ所に、成趣 -

園さて、致景勝れたる別荘あり、砌より活き泉わ

き出で、やがて焼きわたりとなり、舟をもうかべ

たり、向には富士の形に芝山をつきなざして、當

國の内にはたぐひなき所なり、君も此景趣をば殊

にので給ひ、政事のいさまには、常にこ〜に遊び、

前の道すがら、他所の勝景を御覧じても、わが

水前寺にはいかどあらんなどのたまはせしさぞ、

かばかり執し思召せば、こと所はいかにもありな

ん、ことばかりは、つくりもみがされぬべう覚えけ

るに、おもひの外、むかしよりありける廣き別館

を、皆こぼたせ、たゞ酔月亭さて、いさ〜かなる亭

のありけるをのみ残されたり、それも水のうへに

をかしく作り出したる所をば、こぼたせられしか

ば、なみの人の心には、無下に間敷くぞ覺

えける、是につけておもひあはせたる事あり、一

させ參勤の道に、江州醒ヶ井にやごらせ給ひける

に、其宿いたく荒れて、わびしき所なりければ、

大野萬さいふ近のもの、今宵の御宿のいぶせ」

さよ、何さてかる所には黙しけんさいふを、聞

一國主の常に居給ふ所は、おほむね金銀珠玉をもて、

かざりもあるべうなるに、この殿のありさまこ

そ、思ひの外なりつれ、壁をば澁を引きたる紙をもて張らせ、疊のへりも、やがて澁布を用ひらる、欄まなごいふ所には、雲閣水紋などをする事、常の事なるを、こには何のやうもなく、この竹を間遠にうたせたり、一させ江戸瀧口の館焼亡して、新にいさなませられける時、客殿の柱などは、節なき材をえらび、 用ふべしさ申ものありしを聞めし、唯堅固ならん事をおもふべし、見かけのうるはしからん事をおもふは、よからぬ事なりとて、しなり、

しめして、さなおもひぞ、魏て人は衣食住の三ッさへたりぬれば、其上をねがふは昔おごりなり、衣は寒暑をしのぎ、食はうゑをやめ、居所は雨露にぬれざる程にだにあればたれり、今宵の宿も、それには餘りあり、何かいぶせく思ふべき、兎にもかくにも、人はおごりを制すべきことわり、よくく心得べしさささし給ひき、か～る御心にて

ましければ、うへも峻宇彫牆の御好みなかり

盆とは好まず、世には鳥よりは籠、植物より

は盆をこのむ人多きぞと宣ひき、是や櫝を買うて

行くさまを御覧じけるに、はては蝶になるものお

ほかりけり、此岡を躍淵海錯など、部類を分けて

數十巻ちやあらん、されどもかやりの事につけて、

財費し給ふ事聊もなし、或時大名のこぶらひ來

まひて、物語のついでに、飼鳥の事になりしか

重賢りかたのごさく好みて候、是にいらせ給へと

ておくのかたにさもなひて、数多の鳥ざも見せ参

らせらる、次の日其大名のもとより、きのふは珍し

き見物して入候、たゞし籠のあまりおろそかに、

覺え候に、折節こにひけるて、美しき籠十

二三參らせられたり、其籠は、皆朱にぬりて金を

ちりばめ、色々の紐をつけて、心もおよばず結構

せり、君御覽じて、御志の程添うさて、使を遣

し、頓て庫に納めさせて、一ツも用ひ給はず、其

後珍しき鳥求め出候へごも、籠の候はぬと申人の

ければ、此籠を取出して、三ッ四ッたびぬ、 其

餘は今も御庫にありさなん、常に我は鳥をかひ、

草木を植ゑさせて、其さまを見る事をこのめども、

一此君土木の好み聊ちましまさず、今其一ッニッを

あげてるす、領内なみ野さいへるは、方六七里

ばかりの萱野なり、むかしは筑紫野さて、武藏野

さ、東西に名をならべたりなど、所の人はいひ傳

へり、君の參勤には、いつも其野を行きかひ給ふ

に、しばし駕をとどめ給ふべき陰もなければにや、

笹倉さいふあたりに、むかしより旅館をうけた

りけるを、御覽じて、御身ひさつのためにに、民を

わづらはして、此館をたておかん事、恐れあるわ

ざなり、道行つかれたらんには、芝草のうへにて

事たりぬべしさて、暦四年、名妓なくさきのぞ

けらる、又國府の屋形南面に、三階に作りかさね

たる樓ありて、遠望れてよかりしを、不用のも

のなりて、同じ六年こぼせらる、殊に國府よ

玉を返すのたさへならん、猿楽し給へるにも、

物など御内のものつかふまつり、其内には堪能

もありけれども、それによりて糖質かうふりしも

の一人もなし、たゞ文武の業をつむるものは、

御覺えも深く、殊に御恩かうふりし事、さきにい

へるが如し、

一御力つよくして、武藝をもさまぐ習熟し給ふ、

中にも弓馬は、すぐれさせ給へり、いまだいだけな

くおはせし頃、御殿父霊雲院殿より、附け参らせ

られたる侍に、木原惣兵衛正明さいふものあり、

一常に御けしきさはやかにして、晴わたりたる空に、

朝日のさし出でたらんがござくなりき、一させ披

雲閣の會集に靑天開鎮西遊したるや、よく御氣

色にかなひぬらん、

けれども、細川殿は、今の世の賢き國主にて、老

をよく養ひ給へば、並みにいふべきにあらずさて、たゞ此殿のみにぞ、絕すまうで來ける、身まかりし後は、其妻子わびしき住居して、事問ふ人もなかりしに、君のみありし世の事わすれ給はず、常に音づれさせ、其孫のいさけなくてありけるに、五人扶持をさへあたへ、大輔殿のおろしの御衣をも、年每に賜りなごして、つひには御家の士の養ひ子さなし給ふ、又蘭亭が娘も、はやく父に別れて、よるかたなかりしを、小君の御許にめさせ、あはれみはぐくみ給ひて、今は畑になされた「一猿樂俳諧をなぐさめにし給ふ、いづれも堪能なき、又物產を知る事を好み給ひ、鳥獸草木の、すこゝもさまかはりたるを、皆うつし縮にせさせ給ふ、虫などは、かひおかせて、日にそへてかばり

三九

「常には七步五厘ばかりの弓を引かせ給ひけれでも、まことには強弓にてまし!き、其よしは

附録にみえたれば、こ〜に略す」馬は大坪解龍二流

のおくぎをきはめ紛ひ、世の馬のさて、それを

業にしたるものも及ばぬ際なりき、

竹林流の射響に達したりしかば、君十年餘り、お

こたらず是に學び給ふ、漸々二十をも過させ給ひ

元文五年の頃、此惣兵衛、身にいたはる所あ

て職を離し、肥後に帰るべかりしかば、君さし

頃の名残を惜み給ひ、重ねてあふまでのわすれが

たみに、手並の程をも見せばやさて、家士溝口三

五さいふ者を手つがひにて、 八寸的を矢數百五十

射させ給ひけるに、百四十九筋常りて、たゞ一す

ぞあだ矢はありけりなん、惣兵衛老の後は歸

雲といひけるが、つねに此事をかたりて、感賞し

奉りき、

一若くましくける程より、學文を好み給ひ、常に

書籍を遠ざけ給はず、狩に出で給ふにも、かならず

もたらしむ、日ごとに朝御膳すみては、かならず

書を御覧あり、又月に六度の會業ありて、近侍の

人々を召つごへてよみ給ふ、およそ識は、あら

かじめよみおきてこそ、其甲斐もあれさて、した

みといふ事を、一度もおこたり給はず、されば御

身一代に、會識ありける書籍、經史子集數白巻に

およべり、其内論語、詩經、書經、左傳、漢書、

などをばくりかへし、あまた~び讀み給ふ、もし

會の甘さはる事あれば、かならず日をかへて、六

度の數を滿て給ふ、其の難儀をば、皆考へて、

一君常に公義をうやまひ給ふ事、世に勝れたり、新

春節はいふにおよばず、月次の慶賀、御廟の参

拜など、數十年も怠り給はず、殊に有德公の御

徳をしたひ給ふ事ふかくりき、事にふれて、徳廟

はかくこそ遊しつれ、さはなかりつるなど、宣ふ

事多かりき、

銀 臺 遺 # (111)

一詩を好みて作らせ給ふ、遺稿數巻あり、樂泮集に

もいさかのせたり、御年若くましくしごき、

服部元喬、高野蘭亭など召して、詩會度々ありき、

此人々をば、先生とてみ給ふさま、もろこしにい

へる、布衣の交りのためしなどにやさ覺えき、殊

に元喬は、詩のみにはあらで、萬の事をもさひは

からせ給ひければ、肥後侯序さて、心をつくし

て、昔たるものなどもあり、其文集にのせて、あ

まねく人のこる事なれば、こ~に略す、號を南郭

さて、其比天下に名高く、かなこなたにもて

されしものなり、身いたく老いかどまりては、世

のまじらひも、ものうしさて、いづくへも參らざ

一經書を尊さみ給ふ事殊に深く、かりにもた~みに

置給はず、常にもろ!)の書を、うづたかくつみ

置かるにも、かならず絶書を上におかせらる、又

すべての次第をみださず、つませられしかば、

近習のもの、開き夜にも、そくさくずしても、

さりたがへざりき、

手づから書加へ給ふ、今も文庫に手澤の残れる

數しらずありこなん、

て、後鳥羽帝第三の御子、順徳帝同御弟也、寂

山にて出家し、台数をきはめ、改めて道元禪師に

岬をまなび、ふた〜びまで入宋して、名師碩徳に

あひなごして、たぐひなき智識なりければ、亀山

帝、殊に御信仰ありて、紫衣震翰を賜はり、官寺

になされけり、世に之を法皇長老とぞいふなる、

しかりける後は、世々紫衣の一本寺にて、京の五

山なご、同じ程の事なりしに、關東御治世のは

じめ、いかゞしたりけん、其由いひあげざりけれ

ば、寒巖より七十七世の住持白堂、参内せんさて、

京へ登りしを、越前永平寺よりさ〜へ申事ありて、

むなしく歸寺し、御蒙りなどして、八十八世

龍谷和尚は、永平寺の下につけられ、常時の御掟

のま〜にして、和尚位にのぼる事になりぬ、斯て

九十一世太初和尚、君の時に常りて、さばかり

古跡なれば、常恒會をおこなひなん事を願ひて、

關東におもむくて、 君に共由うつた へ申けれ

ば、君殊に執しおぼし召、寺社御奉行、及關東の借

鉄達に、御使ありて、念頭に賴聞えさせられけれ

ば、途に発牘給はって、太初本意さげたり、すべ

三七

てかるたぐひひひたる資財は、おびた~

しき事ならき、御身は常におごりをしりぞけて、

此際の事には、いさらかも客ならざりけり、是唯

事の疲れたるをおこし、絶えなん事を憂ひ給ふ、

御心ばへにして、神にへつらひ、佛にまよひたる

ふしは、露ばかりもましまさず、さればいはれざ

る祈禱、よしなき追隔をば、みな永くさざめられ

たり、まことに寺院のに、酒を用ふる事を、

一切禁じ給ひつるなど、風俗のためにも、いさめ

でたかりき、

れ、いたづらにこもり居たるを」君の御代になり

て、郡目附さいふものになし給ひければ、はたして
其任に叶ひ、かえる際にもたやすく功なりにけり、
一こに阿蘇大宮司さいへるあり、神武天皇の第二
の御子、綏靖天皇の御兄を、神八井耳命と申奉る、
天が下ろしめさるべかりけれども、事のよしあ
て、御弟綏靖天皇にゆづり奉つらる、此命の第
六の御子、健盤龍命、火の國の國造にくだらせ給
ふ、是則阿蘇太神也、景行天皇、筑紫巡狩し給ひ
時、太神御夫婦、阿蘇津彦、阿蘇津媛さあらは
れ給ひしかば、太神の御孫、惟人命に勅して、其
祭を司らしむ、是れ大宮司の元祖にして、今惟典
に至るまで七十九代、連綿さして絶えず、後奈良
帝の御宇までは、岡郡數多領し、勅をうけて、内
裏造營などをもつかふまつり、時の大宮司惟豐宿
禰、従二位に經のぼり、目ざましき事なぁに、
天正の頃にや、従四位惟種宿禰、世をはやらして、
世艦の子いまだ幼なかりし程に、世の引き、

家たちまちおさろへて、矢部さいふ山の奥に、身
を隠し居たるを、前國主加藤主計頭清正朝臣、
いく程もなく

三六

さめ出して、かたばかり所領をよせて、其家をつ
がしむ、か〜りけれども、さすがに皇別神孫のたぐ
ひまれなる家なれば、代毎に鷹司殿の奏にて、
五位よりす〜みけるに、今の曽蒯正四位友隆宿禰、
久しく都にありて、なれむつびけるゆゑか、吉田
連の執奏にて叙位せしかば、其後何となく、よ
ねの祇司はふり子などの様に、人も思ひなし
たるを、今の惟典宿、あながちになげきて、古に
返さまほしき由を、君にうつたへ申たりければ、
君領掌ましくて、さまぐにはからひ、鷹司殿、
輪門の宮などに愁訴し給ひ、年を重ねて、からう
じて事なりぬ、さればこそ惟典思ふま〜に、鷹司
家の奏にて叙任し、君の御代に従四位迄經のぼ

り、其子のいきなきをも寂して、伊豫守にな

されけり、又妙解寺、泰勝寺さて菩提寺あり、こ

の住持を、皆紫衣の和尚さなし、中にも妙解寺は、

代々公卿の君達を下して、嗣法となし、其外神護

寺なぎさて、必信綱にのぼる寺院あまたあり、そ

れらもみな先規のま~に沙汰せらる、中にも大梁

山勅賜大慈禪寺といへるは、開凪寒巖和尚さ

其の頃は

是は文字をはせたれば、歌めきたり」 あのやい

なづさまは佛か神かしぬるいのちをたすけさすな

どこぞうたひける、此事はてのち、君こさに悦

びおぼ召され、頼勝にさまぐ恩賞を賜りけり、

あるときの家の宴に、君自ら此うたをうたはせ給

ひけるよしを、頼勝傳へ承りて、難有かたじけな

さて、涙をこぼし、老の後まで、是を思ひ出に

して、凡君の臣たるもの、此國にみちたれご

も、まさしく其名をさまとよばせ奉りしものは、お

ちとせのすゑも波はこさじな

塘つき終りて、松を植ゑられける時の歌、

山となる磯のつゝみに松うゑて

つくはこがねの堤なりけり

うみの石山の土もてつくめれぞ

かくて民の力を盡けるを、稲津の神いたくあはれみて、公に申て、御くらの錢を出して、民にあたへられしかば、皆よろこびて、此塘は、海山の石を引きもて築きたわざ、公の金の塘なりといへりければ、

耕すたみのちからつくして

そらくは我のみならむと、人にもかたりて、よろこびあへり、此彌右衛門勝さいひつるものは、世々三百石を領したる侍也けるが、天性心だけくして、しかも智恵あり、隆徳院殿の御時、領内の租税さぶこほりて、國用足らざりけるに、賴勝自ら薦めて、臣に此事を任せ給ひなば、三年の内に

は、ゆたかにな奉らん、若其時にいたりて、申

しぇ事違ひなば、腹つかふまつらんと、あながち

に申しかば、郡頭さいふ役になされけるに、

みづから國中を打廻り、庄官などの邪なるものを

推問し、中にも谷の重きものを、數人からめさせ

て、首きりたりければ、共類のもの共、雀の鷹に

あへるごさく、皆息をつめてかどまり、今日は彌

右衛門此あたりに來べしなご聞えては、色をうし

なひて、うつし心もなかりき、日頃それらが爲め

にいためられし民共は、よろこびの聲、ちまたに

みてり、されば濁れる水の、俄にすみたらん

地して、物事あらたまりぬべく覺えた「る程にい

かなる故かありけん、いまだ二年も經ざるに、郡

頭の役をやめられ、頼勝も番方と云ふものになさ

三五

稲津某の下司に、いさはらあしき男なん有ける、

兎もすればほらだちて、杖をふり立てつえ、いか

りけるに恐れて、うたを作り、それが名をばけ

にけちさなん呼びければ、うたの頭におきて

川わたれば人わらへなり

神さやいはん佛さやいはん

今よりは紙このて~ら身につけじ

心地よげにもおさしてしがな

しにもいきも君が心にまかすれば

甘きもちひを贈りてしがな

わざもこがおくりしちちの甘ければ

からきしわざもこられざりけり

はね馬にねたき男をうちのせて

うたのこゑきけばなづかしから衣

たちぬふ手さへわずれてぞきく

わがせこがからき思をなぐさめて

けふいくかくしげの小櫛とりも見ず

身を八代のつ~みつくいも

ぬるいのちいくさしいへば佛さも

神ともなごか仰がざらめや

みつぎものまたどこほる秋もあらじ

心にされるたみはあらじな

なみのうへ磯遊のつ～み今よりは

うごかぬくにのかためにぞつく

つ～みてふつ～みはあれご嬉しさを

袖につ～むはこれのはぎはら

のの末に山のきはみにすむ民も

みなおり立ちてつくつ～みかな

かみつ瀬の清き流をくむからに

いなつの神さいふ事を頭に置きて、

いたづらにしなるいのちをながらへて

嬉しき世にもあひにけるかな

杖ふり立て～いかるきみかも

になひかね引きかねにける石よりも

君がころの角ぞはげしき

けづるさもあくるこもなきくの髪の

さけぬうらみはいふかひもなし

ちはゝの撫え我身ぞあらちをの

あらきたぶさのつゑなふれそね

けはしくも晝飯くふ間もあらせじさ

三四

ともつきは、堤つきなるべし、堤を、さもさい

君聞召て、ふかくなげかせ給ひける除りに、誰か

この水ををさめてんやさ、のたまひければ、稲津

某が承りて、ぬるを弔ひ、いけるを憐みつ、

堤を築きて、田畑のあれたるを正して、よくご

のへければ、民みなよろこびて、神の如く、佛の

やうにぞうやまひける、則ちうたへる歌を、萩原

堤築の歌といふ、其歌にいはく、

或日父はゝを流し、妻子をうしなひ、ある

ははらから友だちなぎ流し、一かたならず、

かなしめるひとの心なるべし、

ははのすみかさきくはまこさか

わだつ海のもくづさならばもろともに

我も水泡さけなまものを

ゆく川のこの水そこはちょの里

いはにくだけてふせる子はたぞ

浪のうつ磯遊の芦のあしも手も

たらちねのゆく方をさへばしら浪の

八百の汐合に立さわぐみゆ

なみのそこなる岡の心のまつ

白糸のよるこそきぬをたちぬはめ

つ~みつく日はいくかもあらじを

三三

人目づみをなかにへだて

あけのたすきあるのだれ誰さだに

こられぬ人をかけて戀ひつ~

わざも子はけふもつとみをつきはぎの

ころもたちぬふひまやなからん

萩原のつ~みつくさやたをや女の

はなすり衣まくり手にして

たをや女の我身にしあれざいぐひ打

石をも引かむせなによりては

あなたふと君は神かもほとけかも

ぬるいのちをすくひ給へば

萩原やつまこひかねてなく鹿の

こゑきくらんかつ~みつくいも

あはれなり妻懸かねて鳴しかの

ぬるいのちをたれかたすけん

秋の田のいなづの神のなかりせば

へるは、此國の民の言葉にして、つ〜みこも、

こもこもっていへるになむ、

定にて」 日毎にあたへければ我もさきほ

ひ集る男女數萬人なり、頼勝遠慮を廻して水際よ

三四十丈こなたに本のサ貳拾餘、いたぶき

の品にしたか

錢を

に申ふれ、其強弱を三品にわか「つたさへば、

男 上 百五 銅 中 八拾四銅 下 七拾 銅

女 上 八拾四銅 中 七拾 銅 下 五拾六銅

ち

川は、木綿柴川さて世に聞える大河なるが、しかも球摩の高山より落ちて、流れの急なる事矢をいるがごとく、萩原の堤は共的になぞらへたれば、是を築きさめむ事又なき大事也、前國主加藤肥後守忠廣朝臣の時、加藤右馬允正方さて文武兼備の老臣心力を盡して築立たり、今の世には正方程のものあるべくもなし、如何せんこあんじわづらひたるに、稲津彌右衛門頼勝さて郡目附なりけるもの進出で、其正方とても鬼神にては候まじ、同じ人ならんには、それがしたらん程の事何條得せぬ事の候べきこ云、實に此男は言葉に恥づまじきものなりさて、君に其由告げ奉りければ則ち頼勝に任給ふ、頼勝承りて凡男女年十五以上、土をは

こび石を負ん者には、皆錢をこらすべき由、郡中

右のまつ江の城は沖のなかじま

熊川やゆふ葉のつ～み水こえて

いづれの年にか有けん、卯月さつきの雨久しく

降き、萩原の堤崩れにければ、松江城岡の里

皆淵瀬もわかずなりにけり、 家を流し身をなが

したる人、いくら斗ともしらず、 いにしへにも

かかるためしは、いまれなる事になん、

熊川の水かさまさる五月雨に

四丈五尺ほどの堤を数十丁築きたり、斯てこそい

かなる大雨にも、水あふれずして、川ぞひの里人も

夜を安くいね、おもふまに農業をいさなみたり

けれ、此堤を築くさて、頼勝夜はせめぐりて下

知をなし、かの門を過ぎて入らずといへる様なり

ければ、民も悦び勇みて顔て頭を作りて、口々に

うたひく、土石をはこぶ「こ～に伊形庄助、名質

字大素さて高名の詩作りあり、是を聞きて、詩經

の雅頌のたぐひなりさて、韻語にうつして湯々

章とす、既に樂津集に入れて、世に梓行せしかば

にはもらしつ、又され歌に取なしたるものあり

左に記す、

11111

五百六人

一溺死男女

參千八百貳拾貳本

一流木

一流 家

貳千百拾八間

一右同八代蜜柑木之内

貳百四拾本餘

一右同辻堂

八ヶ所

一右同社

貳ヶ所

一流失番所

威ヶ所

艘

一流 舟

百壹拾七ヶ所

一井

壹萬九千一往還道筋

百五拾五ヶ所

一山岸崩所

一水除柵

八百五拾間

一水除石垣

八萬七千八百九拾九間

一井手堤

拾參萬貳百九拾間

一川塘

參千四百拾五間

1

一鹽濱

内貳萬千七百五抬叁丁餘畑七千六百貳拾五丁餘、

壹萬九千五拾七間

四千貳百八拾七間

壹萬七千百四拾參間

九拾七町五反

七百四拾六間

百八やうく水は落けれども、沸々たる曠源となりて

又もや雨ふり水かさまさらば、わたりの里人は

皆魚の餌となりぬべくぞおぼえたる、されば此堤

速に築かすんばあるべからず老臣評議す、抑此

三

右損毛破損の儀、水引以上相改、國許留守居

の者45申越候、右損所郡村の内、芦北郡球

摩川筋有之候瀬戸石山、高尹貳百間、横百五

拾間程崩落、川迎L有之候山仁、右之崩之之、

高貳百間、横百間程突上、是又崩落、球摩川

突埋候間、洪水却而逆流仕、水加之參四拾間

程、磧上小山抔、山上水打越候程の水勢、

半時餘ﾄ右の通仁、無程右突埋候所、洗

切押落候水勢、一同川下溢候故、塘上道

幅拾五間餘、根張四拾間程有之候塘筋、悉崩

申候、右者先祖越中守入國以後、遂..無之損

所にて、別て水先の村に及亡所、溺死の者も

多有之候由、注進士候仁付申上候、以上、

寶暦五年八月五日

五拾八疋

一溺死牛馬

一怪我人

五拾六人

ば、なまじひにゆるし給ひ、家をば其子につがせ

て、老を養ふ料さて、八拾人扶持賜ひけり、か

~りし後は、みづから松洞さ號して、西山のほと

り、水石をかしき所に、幽棲をかまへ、避竹園さ

名づけ、風に哈心月にうそぶきて春秋を送り、城
下も頓て見渡すばかりの所なれども、年を経ても
出です、節々の屋形の慶賀も、人して申させけり、
助右衛門妻は、君の御妹なり、其許に渡らせ給ひ
けるとき、あながちにめしければ、からうじて参
りたり、君うち見させ給ひて、いかにやいかに、
なんぢは誠の隠居にてありけるよさ、くりかへし
讃嘆し給ひて、上段なる所に召す、恐をなして登
らざりければ、いや仕へてありける程は、さもあ
りぬべし、隠居の身なれば、我上に坐したりとも、
何かくるしかるべきさて、しひて御側に召して、
盃たび、のごやかに物語し給ひ、興じ給ふ事な~
めならず、其時詩の續集を参らせよ、枠にもえら
せんなど仰らる、君の寛大にして、人を愛せられ
事、此たぐひにこそ、「抑此波門、いまだ仕へて
ありける時、事にふれてほめさせ給ふを承りて、
一高貳拾参萬五百六拾餘石潮入石砂入洗剥山崩此

か、たちまち崩れて、球摩川をせき留めければ、

川浪さかまきて、山をつまみ、陵に登るいへる、

いにしへのさま、眼前に見えける程に、やがて其

せきをおしながら、一時に川下の方へ打出でけれ

ば、八代の萩原さいふ所の堤數十丁、忽ち切れて、

田も畑もみをになり、神祇佛閣をはじめ、数多の

人家流れうせ、溺死するもの數百人、目もあてら

れぬ有様なり、今年は君東にましければ、急ぎ

其由を注進す、君則公義に言上し給ふ、其状に日、

私領分肥後國の内、六月朔日より同九日まで

追々強雨洪水、山崩損毛破損の覺、

水、みなあふれけるに、芦北郡の瀬戸石山さ

一賓暦五年、當國の洪水こそ、おびたぶしかりつる

事なれ、六月朔日より降出たる雨の、このたば

ねてつくがごとく、九日までをやみだにせず、 川

あるもの、さまでいみじく候はんに、なご平太左

衛門にならべて、國務を任給はざりしかと、申

たければ、いやこよ麒麟に田はすかせられぬは

と宣ひき」

三〇

名愨、字子厚、朝陽、孤山と號す、さきに申つる

市太郎が弟也、父を久左衛門弘篤、號を愼庵さい

ひき、同時に大塚丹右衛門久成、號を孚鷲、致仕

して退野さいひものあり、此二人心を合せて

程朱の學を研窮して、すこぶる精奥を極めたり、

其文集を愼庵遺稿さて、世に梓行す、 茂次郎兄弟、

助けなきより庭訓にならひ、 家學を傳へ、教授に

なりし時は、年いまだ三十にたらざりき、是より

學徒彌盛にして、餘所の國より来て、物學ぶも

のも多かりしかば、君の老臣計ひて、教授が許に

塾を建て、遊學のものをすゑたり、隣國の教職儒

臣、此門より出でたるものあまたありき、家中

の例として、本家ありて、別に子弟を召仕はる

ものは所領を賜はぬならひなれば、愨にも年毎に

稟米五百俵をたび、物頭の一に座せしめたり、君卒去の後、狩加へ給ひて、六百俵、番頭格さぞ聞えける、其次に助あり、訓導あり、皆程々に随ひて、所領を賜ひ、物頭格にもなれり、句識師は、・専ら其役なるものあり、又は番方さて、暇ある侍共の器にも、遊悴を加へ用ひらる、今の世一米田波門是著は、藝能多きものなり、弓馬、軍役皆奥儀を極め、殊に幼げなきより學問を好みて、詩の道を南郭に學びえて、其名高し、君命じて家集を梓行せしむ、四時園詩集さて、世に流布せり、書印まで人に勝れ、しかも心静にして、きはめて無欲なり、長岡助右衛門是麗さて、壹萬五千石領せし、譜代家老の弟なりしを、例の貳千俵賜ひて、中老までなされたり、年若き程に妻をうしなひて、二たびめさらず、唐の王維などが風情してぞ有りける、君も又なきものにして、御覚えからざりき、歳すでに六十を過ぎぬれば、幽閉を

たのしまほさて、わりなく致仕を望み申しか

二九

のならはし儒者を家業として、薬師、茶道にたぐ

へたるものとすれば、此國もしかなりけるぞ、儒

の道は人の道なり、何かたへの家業とさだむる

法あるべきさて、武士も任になし、交儒も武職

に通はして用ひ給ひき、「かくいへば、おこがまし

けれども、 はづか一國の家中に、かばかり儒道を

もてなし給ひたる事を、朝鮮のえびすごもにしら

せて、ひげ口ふたがまほし」

權正さいはんがごとし、さらに常分役あり、かり

もおそれつゝしみて、虎の威をかるべうもなく、

の鼠のそしりもたえて、政のすちみだれざりき、

一朝廷には、位階官職のすちをわけられて、官位相

當せざるは、位署にも、行守と申なぎひそかに承

及びぬ、夫になぞらへ云ふべきにはあらねど、

一國一家の内にても、役と席の二ッは、さすが

に定められずしては、事整ひがたかるべし、され
ば此家中には、家老、備頭抔の席の外は、昔よ
大概段格を四品に分つ、着座、物頭、平士、輕
輩さいへり、君の御時に、夫が中の等級をわけて、
座に上、中、比あり、物頭は元來足輕五十人の頭
より、十人の頭まで次第す、平士は所領あるもの
と、中小姓といふものとの遊びあり、是を大概に
して、輕輩まで、程々の等級を定めらる、其役を
命せられて、其席につくは、常の事なり、或は席
上りて役下り、あるは役上りて席下り、又は共職
に遊ひたるものは、役をかへずして、席をすくめ
抔せられしかば、選舉の道自在にして、大方は、
其人其職に適へり、又役によりて本役副役
「一朝鮮のもの、我朝に聘使たらん用意を書きたる
日觀要考といふものに、我國の事を評して、庠序
もなく、四禮もなし、 良知のりこても、いかでか
道をわきまへんらん、士農工商の外は、醫を上さ

す僧これにつぐ、儒を末とす、たさひ祭酒たら

ん人も、尺寸の地なしなど、あくまであざみた

るは、我朝の風をとらぬ夷共、おのが國に引きく

らべて、口にまかせて、荒涼いひちらすとは、お

もふ物から、いはどいひぬべきふしなきにしもあ

らざるべし、然るに」當には、學館をたて給ひ

ける事は、さきに申たるがごとし、前授秋山定

政、一名儀、宇子羽、玉山と號す、高名のものなり、

君ことに寵遇ありて、東參勤の度にも、かなら

す召具えなごし給ひて、ひたすら教育すべき暇も

なかりき、斯て暦十三年、身かりにければ、

藪茂次郎といふものを、教授となし給ふ、茂次郎

し、

に其役につけて、器用の程をこころみ、適はぬを

ばのぞき、かなひたるは、五年三年を経て、のち

定役に命ぜらる、唐土に攝兵の沙汰あるがごと

一明和七年冬の頃、君の寵臣、いさ～か不正の事ぁ

りければ、つみ給ふべき曲、家老、奉行抔申け
れども、御ゆるしなくして、其の年もくれぬ、法
は人によって狂ぐべからず、あながちに申行ひな
んさて、明和八年正月十一日、奉行職のもの、朝
さく参りたり、其朝しも、夜深く鷹野に出給ひて、
辰の刻計に躊らせ給ひ、いまだ御湯をも引かせら
れぬ程なりけれども、近習の者につきて、それが
御旨何はんさて、参りたりと申させければ、御
前の人をのけて、さくさ召す、奉行則事のよ
しを申けれども、狩うけひき給はざりければ、
たすらに諫めて、御詞にあらがひ奉る事あまたた
び、つひに申かなへて御前を立ちけるに、けふし
も、御具足の鏡餅参らすべきにて、次の間には近
は俺に貳百石を加へ賜び、合せて四百五拾石のみ
にて、君の御代を過しつるは、いかなるゆゑなり
こぞといぶかるものもありけれども、はじめて
勝名をすくめける時、玄路申上る仔細ありて、

まで加禄を辭申たりこぞ、其人今職にあれば、

例の委敷はしるさず、

一溢れる世のならひ、 君と臣さの間、おのづから遠

ざかりて、國の老臣杯は、君の御前に召さる~事

も間遠になり、側近き用人なごいふもの、御旨を

受けたりさて、萬の事を取計ふこと、諺にいふ虎

の威をかる狐さなりて、おもふま~にふるまへご

も、君のあたり近きを恐れて、制するものもなき

を、凪の鼠にたこへたるは、唐も大和も同じ程の

事也君ふかく此わざはひを恐れて、仕置の事、

近習外様のへだてなく、皆老臣に任し給ひ、月に

六日宛、用日と定めて、家老はじめて、奉行、目附、

郡頭、勘定頭など、替る(御前に登りて、其職

職の事を、たぶちに申て、御旨を受く、又近習の

ものには、側近く召仕ふさて、外様のものに無禮

すべからずさて、朝夕いましめ給ひければ、何れ

きさぞ、

習のもの共、膳具するゑならべて、評議の終るを、

今やくさまち居たる風情を見て、うちおどろき、

日影をみれば、はや午の刻ばかりなり、御鷹野の

帰り、夫まで朝御膳をもまゐらざりけれども、い

かり給ふいろ、うみ給ふ色も、見えさせ給はざり

一君御家臘せ給ひし前に、いかでさるべきものを得

て、家中の仕置をも任せてんやと、おちひめづら

ひ給ひける頃、竹原勘十郎亥路さいふもの有ける

が、堀平太左衛門勝名こそ其任に叶ふべきものに

て候、さく!厚をあたへて、あけ用ひ給へさ

す~む、及或者今一人をす~む、君もうちくは

今一人の方に、御心ひかれける、玄路あながち

に執し申ければ、御氣色損じて、つと奥に入らん

さし給ひけるに、御袖をひかへて、いさめ奉りし

事、二度まで有ければ、つひに玄路が申に任せて、

大奉行といふ職になし、政事を任せ給ひしより、

年月につれて、其いさをしあらはれ、世にほまれ

ある國となれり、是をや管仲が叔さいふべき、

此玄路が先竹原下總惟政までは、常國阿蘇の累

代の家人にて、侍頭したりけるが、天正の頃、阿

蘇相良さの戰に、嫡子勘五左衛門惟房と共に討

死す、惟房が子上總宗守、 ゆゑあつて阿蘇の家を

退き、薩摩の國に往きて住む、 文珠四年、幽齋君、

豊臣家の仰せを受けて、薩摩に渡らせ給ひし時、

に随ひて、いみじく召仕はれたり、

世に多能のものなりければ、君の御時、用人に

なされ、参勤のたび毎に、かならず召具せられ、総

て御側に恪勤せん事、三十年餘、賢をすくめては、

上質を蒙るさいふ本文によらば、更に殊なる加恩

もあるべきに、役料こそ千石にもみちぬれ、所領

島津義久入道龍伯の御許にて、連歌ありけるに、

宗守が嫡子市藏惟成、齢に八歳にて、執筆し、

すぐれて利根のものなりければ、幽齋君、御ある

びにこひうけ、召具して丹後國に歸り、所領百石

たびて、側近く召仕ひ給ふに、萬にかしこかりけ

れば、天下に隠れなき幽齋君の歌道を、此ものに

傳へ、書札式をもをしへて、常に筆代さし給ひ、又

武田宮内少輔信重主

の姉、此主より弓馬故實、

「御営家に相續せらる事ながければ略す

の弟子に付られて、弓馬故實、残りなく受傳へ、

更に仰をうけて、伊勢流の仕付方を、一色一遊齋

に學び庖丁の術を、大草氏に學ぶ、皆奥儀を極め

たり、所領加へ賜ひて、貳百五拾石、後には致仕

して墨齋さ號し、玄可と名付く、夫より此かた、

右の品々の道をもをも傳へて、玄路まで六代に

及べり、歹路家の道は云ふに及ばず、才學もあり

二六

一仁愛の御心を以て、仁愛の政を行ひ給ひければ

民の竈も、年に増して賑ひ、誰す~むとはなけれ

でも、賓暦の中頃より、家ごとに殿様祭さいふ事
をはじめて、年に一度、かならずしけり、古の紀
傳博士ざもが、いかめしく申傳へたる、生祠なぎ
いへるも、かるたぐひにやさ覺えぬ、其祭、定
れる日はなくて、たぶおのが暇あるべき程をはか
りて、一里示し合ひ、餠をつき酒を作るなど、 其
身の程に、随ひていさなみ、それを神に奉るごさ
く供して、共月は一里のもの、おのがわざをせず、
是にはいかでまさるべきこ覺えたり、かく老いた
る親、助けなき子をさいなまれて、ぬえは涙にく
れながら、富家に向ひて、手をすり物を借り求む
るなど、申もむねつぶる~有まさなりき、君此由
を聞召して、大に驚き給ひ、おもはざりき我國に
さまで修酷の事あるべしとはさて、速に仰ながし
て、永く此事を停止し給ふ、 かくちけれども、民
の貢はなか滯りなく、いちはやく納めけり、
爰にしる、民を責めさいなむは、愛しいさをしむ

にしかざるを事を、

一ある國の主、年若くおはしまし~が、召仕ふものをば、いかにえらび候はんかさ、問ひ給ひければ、別の事も候はじ、我物好をたてず、人のよしさ申さんものを、私なく用ひ給ふべうもや候はんと答へたまふ、常にも誠によからん人をば、我は天に誓ひて、捨てまじとおもふなりこの給へり、か~る御心ばへなればこそ、あまねく人の器用を盡されたり、たこへば藪市太郎安さいひつるものなごは、堅固の昔うごにて、今の世に叶ふべしさは、誰もおちはざりしに聞召す所や有けん、奉行になし給ひてこそ、器用のほごもあらはれたれ、此たぐひ数多あれごも、今世にある人は、おもふ所あれば、もらしつ、又昔御曹司にてましましける時、念頃にもてなし奉りたるものあり、惡敷あたりたるものも有けれど、御家繼せ給ひては、少しも差別給はず、念頃なりしものも、不法あれば、速

にしりぞけられ、 つれなかりしものも、器量の程

二五

酒呑うたひて、君の御代に、生れあひたる身の

よろこびをのべ、一日の楽に、百日の夢をなぐさ

めけり、

一民の租税を納る事、年により所によりて、みのり

よからずして、定式のま~に事ゆく間じきは、檢

見をのぞみ申事あり、此檢見こよなき大事なり、

聊もからければ、民くるしみ、あまりにゆるみぬ

れば、民おこたる、鳥の子を握りたらんやう る

べんごぞ、されば君の御代に、様々の心を盡され

て、見つもりためして、二品の法を立て、 兼用

ひさせらる、たこへば見積りて田面はる見渡

一稻のいまだ熟せざるにかりさぁて、編米さなす事

いづくにもある扉なるを、明和六年の頃、此領内

には、停止せられたり、されども所領の主、先祖

祭抔に備ぺん料ならば、稻熟してかり納めん時、

初穂をすみやかに貢ぐべしとなり、足は殊更聊な

お渡しては、其費少からす

るものなれども、領内に「て年ごとに貳千石ばか

りは、其物になりたりこぞ」 誠に凶年には、一束

をだにたやすくえまじき稲の、色づくをもまたす

して、いたづらなる物にせん事、空恐しき業なり

民をうるほして、春雨のあまねき悪の如し、民草

の生茂るも、うべならずや、

して、其賦を沙汰す、誠におほさかなる法なり、

かくしても民うけひかず、あらがひぬれば、畝を

分けて、みのりをためす、其法いたりて細やかな

り、おほよそ民の事には、かく寛弘の度ありて、

精密の規なんばあるべからず、良法さいふべし、

委敷は短き筆にのべがたければ、もらしつ、

一民の家宅は、地の善忠によらず、なべて其渡の上

田になぞらへて、賦枕を出すならひなりしを、古

は一夫ごさに、五畝の宅をあたへきと聞く、抱け

では叶ふまじくば、せめて地の程に随ひて、物

を出させてよ、過分に責こらんは、すぐれたる不

法なりさて、此御時より、制をあらためられたり、

「一いつの頃よりか此國の民、年貢合せざるもの

は、所の庄官、親族を召捕りて、水牢さいふに

入れて、資はたる習なりき、其牢のさまこそ、む

けにいたはしかりつれ、四方に将を、きび敷結ひ

延し、内に膝を過る斗、水をたゝへたり、逋税の民

あれば、其父母妻子を、是にこめて、水の中にた

しむ、厳冬の頃なれば、雪の夜、霜の朝、堅泳は

だをつらぬきて、かの紅大紅連のくるみも、

二四

衛三井孫兵衛 七十八歳

高安 是竹 七十三歳

馬場 孝義 七十三歳

門

衛兵

衞門

衞

五郎兵衞

平

雜人七人

成有馬寺田 百庵 八十三歳

筑後イニ

御

臣

客

るに壽字を文にかせて、夫を蒔縮にしたる杯

萬歳杯と名附、おの 引出物として、下の

ものには、金子にこの日の駕の料まで添へ賜ふ、

さてまた御内の女の、其飴なるをば、小君のもと

にめして、同じさまにもてなされたり、

備後守殿 七十九歳

柳生播摩守殿 八十二歳

津輕 良策老 七十六歳

森 宗 乙老 七十二歳

森 雲 禎老 七十一歳

戸田 五助殿 七十九歳

水上楠左衛門殿七十三歳

林 宇兵衛殿七十一歳

瀬 尉内 八十一歳

野坂 源助 七十六歳

遠山瀬兵術 七十二歳

奥田五郎助 七十一歳

桂 助四郎 七十歳

蒲野 助七十九歳

白井 平治 七十九歳

吉澤 要助 七十二歳

林 庄五郎 七十二歳

吉ばりあたへて、それを田にさして虫をのぞかしむ、

其料も又幾干ぞや、是等の物、おのづから領内の

二三

一民に賦税の二ッは、 いにしへよりある事にて、 式

令にも、租庸調なご沙汰せられしにや、されば當

國にて、賤き詞に、か～り物さいふは、賦のたぐ

ひにやあらん、其品數多有けるを、君聞しめして、

民の苦しみは、賦の重さにより、いかにもして、

それを軽くせよごて、有司に仰せて兎角にはから

はせ、三品までのぞかれたり、其米一年に一萬五

千石斗なり、かく云へば、聊なるやうなれども、

寶暦四五年の頃、此賦ゆるされて、君卒去の天明

若干

五年まで、三十二年ばかりの間、高「算ふれ

ば、四十五萬石你」なり、獪行末は計なかるべし、

「又郡代の職務に用ふる料紙筆墨は、其郡の民共辨

ふる定なりしを、安永七年よりは、其料を皆國府

より下し賜ひて、聊も民よりは出さしめず、 是も

年毎に、鈴三千貫計の物にやあらん」、田に虫多

生ひて、苗をそこなら年は、鯨油をあまねくく

谷口 櫻川 七十九歳 女 十九人

又一年天下凶荒して、家中の扶助など、例のやう
にあらざりける頃、朝の物に、例の味噌香の物、
参らせければ、其内一品を取のけ給ふ、御前に侍
ふもの共、倹約も限りは有べうもや候ひなん、夫
まではあまりにやさ申ければ、いやさよ、今程は
家中の者共、難義たらんに、せめてはか〻る事を
もして、艱苦をともにせんとおもふなりと、宣ひ
しぞありがたき、

右之通の御様子は、當時の御定規にて、御保
の爲にも可被爲在候へども、て飲食の奢
侈を被遊御意候に付、御誡め労の思名にも可
被爲在さ、難有儀に御座候、乍恐右の御様子、
御家中の面々不及申、末々に至るまで奉存
候はど、外々の心得にも可相成候に付、今年
柄の儀、彼是組々へも急度寄々被申聞置候様
存候、以上、

一種にて、御酒被召上、御夜食は御香の物、

御焼みそまで、

一御夜食前、御吸物の外に、御有台の続き御肴銀臺遺

一夕御膳は、御一汁、御一菜

たまものあり、又百歳以上は、年ごとに是を賜ふ、

初は年の六月、此事行はれけれども、夫までは又

半年なり、老木の風をまたぬためしもあれば、命

の内にこそさて、総て正月十一日を、定例さなさ

れたり、又一年關東にて、尚會さて、七十歳以

上の人を招きて、終日饗應あり、御内の者共、其

齢なるをば、みなくめして酒賜り、三井孫兵衛親

和さて、其頃高名の能書あり、是も七十餘なりけ

者あれば、其人の品に隨ひて、衣服金銀の

りこより、風移り俗易り、恩賞に預るもの、年々

に多くして、四十年計の間に、ほさんご六百人に

及べり、中村忠亭といふもの、其行釈を書つぶり

て、肥後孝子傳前後編として、世に流布せしかば、

爰には略す、又年老いたるものを、ここにあはれ

み給ひて、士にもあれ、農商にもあれ、齢九十に

業の者にいたるまで、其程々に随ひ恩賞あ

一忠孝を賞せらる~は、珍しからぬ事なれども、

入のはじめ、先づ善良の民をたづね、孝子忠臣よ

事

(11)

1111

一飲食を菲し給ひし事は、世にたぐひあるべしご

もおぼへず、天明二年の頃、家中に儉素をす~む

さて、老臣達申傳へたる事あり、左に記す、

諸事質素に可相心得旨はて被仰付置候通に

處、今年は非常の不作に付、四民共に困窮の年

柄に付、彌以稠敷勘略仕候樣被仰付、左の通、

一明和七年の頃、熊本城下度々火おこりしかば、

頭に命じ、組の歩卒を引具し、火を防ぐべき出立

して、夜晝さなく打廻り、盜賊ふせいのものあれ

ば、問ひなどり、からめ抔しければ、城下火もし

づまり、盜も少くなれり、是より定例さして、物

頭の内にて、三人宛えらびて、其年此役を勤むべ

き曲を、かならず正月十一日に命ぜらる事にな

て、今もしかなり、又衣服の制度を犯せるもの

をも、此後より糺問せしかば、法令能(行はれた

に其式をつたへ、夫より歩小姓に殺へさせられけ
れば、堪能のものあまた出來、はじめて貝吹の役
をおかれたり、是等はみな治世に武を忘れの設け
なるべし、

11 1

一太守様被召上物、朝御膳は御茶漬の飯、御香

の物、御焼味噌、梅干之類にて被召上、御料理

物は不及申、御汁も不被召上候、

右に添へたる覺書あり、

一音信贈答、親類の外、一切無用の段、 先年相

達置候通彌堅可被相心得候、旅行の節、餞別

土産も、同前たるべき事、

十一月

一衣服の品、彌~質素可被相心得候、御制度を

被相寄候上は、仔細無之事に候へごも、其内

にも品を擇び、着用の間々有之、小祿の面

々は、以不都合の至に候條、家類々々之衣

服でも、急度其心得有るべき事、

一平日の出會、以輕くいたし、酒宴ヶ間敷儀、

一切無用之事、

吸物肴二種、料理は一汁二菜を限り、酒

宴長せざるやう可被致候事、

も

も、此節は又心を附、辨可有之事、

一年始五節句、其外麗事に付、一類中集會候と

一平日の飲食、奢ヶ間敷儀は、有之間敷候へご

君謹で領掌あり、速に家中に申給ふは、夫武士

たらん者、程々にひて、物の具打物など、誰

かは備へ置かざらん、然ごも溢れる世のならひ、

家子郎等まで、出立せんには事たらぬものなきに

しもあらざるべし、異の船は、今もや漂着せん

すらん、か～る仰をかうふりては、片時も油断す

べからず、速に用意仕れ、然ごも家貧しからん輩

は思ふま～には、力に及び難き事もありなんか、

さあらん際は、用途興ふべし、但弓矢執る程のも

の、武具全たからざるよし、若しあらはして申さ

ん事は、ふかく恥ぢおもふべければ、其組の頭、

ひそかに承りて取計ふべしさ、世に難有御情に、

みな!\勇み立、馬の口取、陳具はこぶ雑人に至

揖斐十太夫、當分御預所、肥後國天草郡之儀離

島に付、唐船漂着等の節、其外人數船等入用の

砌、且御用に付十太夫致渡海候節、往來船等、

同人より申達次第、被差出候様可被心得候、光平

日指出被置候には不及候、以上、

一明和六年九月、台命を松平右近將監武元君傳へ給

ふ、其詞に云、

行所に納む、是より組々の差別も、いちじるしく、

且は事厳重になりて、人々の心も怠りあへず、又

此家中には、むかしより軍合の螺吹者を定め

ず、時にさりて領内の修験者などを、用ひらるべ

ここ聞えけれども、今は山伏共、其道はかぐこ

く、得たるものなかりしかば、家士横田勘左衛門

景一さて、兵學に達したるものに命じて、 先山伏

一家中の番方數百人、其外に組々の指物の事、先々

は人々、私にわきまふ定なしに、かくてはひさ

しからぬ方も有りなんさて、明和七年悉く公物を

もて制せさせて、一人々々にさずけ置かる、もし

替り、或は死なごすれば、速に組頭受取て、奉

るまで、思ひくに支度しぬ、さて用意調ひたら

ん者をば、かつぐ名のらせて、着到に記す、 明

れば明和七年よりはじめて、年毎に一備宛、此手

常を定められたり、はるかに程へて、天明三年、

天草郡を島原城主に御預けありて、今は此事をや

むべかりしを、治久しき世には、武備おろそか

になりやすし、此月日の旨を守れさ有しかば、

今以おこたらず、

して「江戸殊更に甚しく、肌にのぞむものもあり

て、物さわがしかりけるに」、此家中のみぞ、其う

れひ、なかりける、さてこそ君の遠慮の程もあら

明和六年の頃よりは、此國の米を運酒してる事

になれり、凡人の情事の改る際は、うけがはぬ

ならひなれば、はじめは兎に角に、つぶやく者も

ありけるに、君卒去の後、天明七年、米の價騰貴

諸家難澁しけれど

一國侍の江戸に勤番せるものには、月々の扶持米を、

時のあたひをはかり、金子をもてたびれる、

一本暦の頃

三月十一日

太守様にも、此節は不被遊御出御事に付、彌以

右之趣奉承知、鷹の網に不限、張網等にも罷

出不申様、觸支配方へも、可被達候事、

春作盛長之頃に成候は、鷹の懸け等に出

申間敷旨、被仰出趣相觸候通に付、此節に至候

ては、何れも罷出不申にては可有之候へごも、

作方の隙をも被思召、

本

鶉なごうちしきるをも、皆餘所に聞なして、立

よらせ給はざりき、されば此事、家中にも制給

へば、寶暦十三年、老臣申ふれて云、

「一侍の乗馬持たる者は、其所領におほせて、馬草の

料を納めさする掟なりければ、所領少きものは、

民のわづらひとならん事を、いたはりおもひて、

心ならず馬をも飼ひおかぬ者多く、百姓ごも〜まる

た、己れが主の分限に随ひ、料を出す事ひさしか

らず、又新たに馬をもさめたらん人の所領は、き

のふまでなかりし事の、伐に出来にければ、心ま

ごひとけるに、明和八年の頃より、あまねく國中

に沙汰し、家中の所領のものには、少しつぶ此料

を出させ、夫を勘定役の者請取て、馬もちたらん

侍には、年の八月十二月にわかちあたふ、所領の

高に合せて、馬の数も定ありけりさぞ、かく改め

て掟ありけるにより、小身の者も、心安(馬を飼

はせ、民もわづらひなかりけり、凡かやうの物、

おし渡して出すべき程定りければ、民も兼て支

度をして愁訴もなし、 野路の時雨の、所をわきて

伐にふり來らんやうなるは、立寄るかげなき心地

して、民のわづらひ大かたならず、か~る理りを

ふかくしらせ給ふにこそ、

一九

はれ、ありがたかりと事ならけれ、

御家中家來、諸事相愼候様、主人~より

被申付儀は、勿論之事に候、別御家老中、御

老中は、御役柄之儀に付、家來も、て稠

敷御申付有之事に候へごも、間には心得違の者

も可有之哉、外向にての儀は、右屋敷!)へは、

不相知儀も可有之候條、右家來(、町在其外
にても、萬一法外の事有之候はど、下々は勿論、
刀差たりとも、總て無用捨、其筋に随ひ、手強く
取計、事により候ては、其所に押へ置、如何體
にも取計、右屋敷(へ相知候は、早速役人
罷出、引取申にて可有之候、其外輕き事たりご
も、相替儀有之候は、善悪によらず、其所の
この筆役なごいふもの、いたうしたり顔にて、君
の家士の進退をも、おのが手に握りたる風情して
うちは財をもむさぼりしに、かく改正有りけ
ればさる事ひくさ、やみたり、又其頃は其家
の下部迄もいきほひ猛にふるまひて、人のわづら
ひとなりしを、おとな達、心うき事に思ひて、
暦九年、時の奉行に示し合せて、國中に申流し~
事あり、左に記す、
御供の者共をば本道をうたせて、近習はつかを召
具せらる、夫もかならず畔ったひして、彼にも田

畑の内に入間敷よし、又本道をうつものは、待遠

にあらんすれば、そこの村、かしこの小屋に、やす

ひてもあれよか、但茶一椀にてもこひたらん

所は、かならず代をあたふべしさ、深くいましめ

給ふ、無下に間近く渡らせ給へごも、菘るもの

らず耕すものやまず、道に行きあひ奉りて、君

もこらず、打過ぐるものもありけれども、狩装束

は主従同じさまなれば、誰も見わかぬこそこさ

はりなれて、ものさがめし給ひし事、一度もな

し、又春の物のび立より、秋の實のりかり納むる

までは、川ぞひは鷺なごを羽合せし、粟の穂風に

一鷹を好み給ひて、御庭にも所々に、さやをしつら

ひ、朝夕もてあそび給ふ、されごも狩に出給ひて

稼穡のさまたげとなりなん事をおそれ給ひて、

前の役人、遠慮可仕譯は無之事に候、此段内

意申達置候間、支配(へも寄々可被爲知置候

事、

役力より、内々相知候様、御役柄と申候ても、

一此國の民は、むかしより蠶飼の業にうさかりければ、寶暦十年の頃、領内に申觸れて、桑を植ゑさせ、蠶飼の事をすくめらる、されども糸を取べきすべを、しらぬもの多かりければ、繭にてもちて參らん者には、價を給ふべしと思ふれ、城下の市中に、糸取機織る所をさだめて、やうく見習ふやうにし、又島巳さて、本は志賀小左衛門さいひし侍、今は致仕してありけるが、兼て此道に心ざしあるよしを聞しめして、事の様委敷傳へて來れさて、京へ登せらる、巳分京より近江にくだ斯くても、かねて田畑抔も持たざりけるものは、さまよひければ、國府のかたはら白川のに、假屋しつらひてすへ置き下司をつけて、粥をさせ、朝夕くばりあたへ、もし病むものあれば、弊師をして薬をあたへしむ、「すべて此料は、右の員数の外なりき」

右天明癸卯甲辰兩年分」

錢壹萬四百九拾參貫文餘

蕎麥四拾貳石餘

大麥四石武斗

粟千百參餘

拾石餘

銀貳拾貫目七

一おさなたち、家にて國務を沙汰したりし程は、そ

一領内の山々を司る者、木を植うべきよしは、むか

しより掟ある事なれども、年々にきりざる事はし

げく、植うる事はおのづから、ゆるがせなりしに、

水足五郎兵衛重房といふ侍、兼て栽培の道に、委

しかりけるよし聞しめして、是に命じ給ひければ、

たえず打めぐりて、其土地相應の木を植ゑさせ、

養ひそだつる道まで、細やかにをしへささしけれ

ば、皆よく生へんげれり、又城下よりはじめて、

道ばた川岸なぎにても、いさ~かの空地あれば、

檀なごいふ木を植ゑさせ、夫れの役人をた
つかさざらしめしかば、年々に生茂りて、國
用のたすけさなれり、
て、緑工をも召ぐして来りぬ、其後又糸をざる
に堪能なる女を三人迄、近江より呼下して、岡中
の男女に、其業々をまなばしむ、されども城下よ
りき所の者はなほ習ふに便なからん事をおぼし
て、折々已分を差廻して、をしへさせらる、かく
まで御心を盡されければ、今は領内のもの、あま
ねく此業を知りて、いとなむ事になれり、
一貨暦八年の頃より、領内におほせて、租税の内を
はじめ、あらため記されたり、夫よりこのか
た百餘年、いたづらに文庫に収めおけるを、君の
御時、取出られたれば、虫くひやぶれくらて、物
の用にたらず、これなくては、いかで經界を正さ
ん、されごも悪敷はからはど檢地にやまかふべ
からん、すべての廣狭をいはず、たぶ其名をの

み正すべしさて、 田添源次郎さて、此道にかしこ

き男に命じ給ふ、源次郎打廻りて、沙汰しけれご

も、さすがに届き領内なれば、暦七年よりはじ

めて、明和六年まで、十三年の星霜を経て、やう

'事はてたり、かくてこそ經界正しく、租税ひ

さしく、畔を犯すのうれへなかりけれ、

の御掟に、検地をふかく禁じ紛ふ、雞有仁政なり、

抑經界を正さんとするに、古の井田は、畝數定あ

れば、わづらはしからざるべし、今はさる事なけ

れば、田ごさに名を付けて、夫をもってわけなん

こす、其名しるしたる物を、おほやけの御岡帳にな

らひて、見岡帳さぞいふなる、常國は前加藤氏

の見圖帳有りけるを本として、妙解院殿所領さ

粄五萬八千九拾石餘

「米五百貳拾石餘

一此凶荒に、久やみさへうちそひて、民うゑになや

みしかば、あまねく物を分ち給ひて、すくはせら

若干あ

る、「左に注す

一六

程々に随ひ、籾ながら貢せて、凶荒の備さえ給へ

り、されごも一所にたくはへ置ては、頓の事あら

ん時、便なからんここをはかりて、そこに倉

を立て納め置せらる「其數九拾七ヶ所さなん」上に

いざなはる~下なれば、百姓ごもおのが物のうち

をも思ひくにさげて、倉に納めおく、かく

て凶年は云ふに及ばず、すべてのみのりなど、

おもふやうならで、夏秋の種乏しき所々へは、此

籾をあたへて、民のうへをすくふ、又米の價たか

くして、商人くるしむ時は、殿の御倉の米を取出

價をいやしくしてうりあたへらる、されば天明の

頃、天下凶荒なしにも、此國の民は、餓死する

ものなかりけるこそ難有けれ、扨も此板をたくは

ふやうこそたやすからね、惡敷取はからへば、却

て民のわづらひさなり、又は虫ばみなどして、徒

になりゆく、かやうの事まで、細かなる掟あり、

一何月何日、爲江戸詰、此許被差立、何月何日、

江戸着仕、當前之御奉公、或は笛樣之儀相勤、

當何月何日、江戸被差立、何月何日、此許に着

仕、何日より出勤仕、當五月晦日迄の内、箇樣

私儀何御役、去六月朔日より、當五月晦日迄、

日勤又は隔日罷出候内、當前一日も無懈怠出勤

仕候、又商談々々の儀にて、日漱何日不參仕候、

忌中にて何日出勤不仕候、

覺

四月

一今迄御奉公差出被相達來候衆、當正月より同五

月二十九日迄の御奉公之趣は、是又被相逹來候

見合之通、差出相調、來年六月、前條之通、書

付一同に可有御達候、以上、

各當六月朔日より、來年五月晦日までの内、御

奉公の趣等書付來年六月朔日より、三日までの
内、可被相達候、尤以來年々不及沙汰候間、每
年右之通、可有御達候、被相達樣之文案、則別
紙相添候、

て日、

一仁政は自經界始さは、孟子の金言なり、誠に田の
境界さだかならずんば、いかで賦租もひさしかる
べき、されごも又後の世の暴君汚吏は、検地さい
ふ事をして、除畝をさぐり、求めて、それに租税
をせめはたらんさす、此二つは、事のさ似たれ
でも、誠に仁さ暴さのひあり、さればおほやけ

一五

斯くて三年の内、一日も怠らず、恪勤せし者には
未が末に至るまで、かならず物賞あり、其程に随
ひて、家の紋の服をもたび、銀鏡をもこらせたり、
是よりして、其身々々はいふに及ばず、子弟もい
よく、文武の業をおこたらざりき、

何之何某殿

何之何某

右之通御座候以上、

何年六月

仟何之何某、當年何歳に罷成申候、稽古事何

々、何某之弟子にて、 時習館両榭に罷出箇様々

一當年何十歳に罷成申候、

一兩親有無年月付共に、

箇様、

「一民の租税、さきは其年の内に、三の二を納め、

いま一ツは、明の年の七月を限りて、貢ぐ事なり

き、世くだり、民の心も直ならざりけるにや、近

き頃は、其一は春夏のほどに用ひっくし、七月に

なりて、にわきまへんだすれごも叶はず、租吏

責めさいなめごも、誠に無き物なれば、せんすべ無

く、上下のなやみとなりければ、宝暦六年より、

定其の年の内に、殘なく納めさせらる、おはよ

そ民の情は、物のあらたまるをうけひかぬならひ、

其後暦十年に重ねて公義より、向後出奔候とも、

其子家督相縮幷他へ養子に遣候儀も、不苦さの御

觸ありけり、されば公も私も、御心を合せ給ひて、

有がたかりける御代なりけり、

公義御觸有之、御家中へも及沙汰候、然處御觸

紙面は、大昭之趣にて、御家中の面々は、一概

に右之通可被仰付様も無之候に付、右體の儀有

之節は、右の父子真子さんに、始末の様子、委

細書付を以、頭々支配にも、如何相心得可申哉

之趣、其時々可相達候事、

右之通先年從

「一家中の者の恪勤の程をも、つまびらかにしろしめ

さむさて、乜丑の年、被仰付旨あり、老臣傳へ

一箕暦七年の頃、役々の目をさづけ給ふ、其役た

らん者、是を旨として守るべしとなり、されごも

是をあからさまにしては、あさくしくなりなむ

事をおそれて、其後の者、封じてふかく秘し置、

あらたに役につかんものには、まづ是れを見せし

め、又其役のぞかりては、封のま~に、奉行所に

納る抔細かに作法を立てられたり、是よりして役

もの、詮する所をして心まごひなく、職

に死するの守あり、

ことに今迄のごかなりけるを、伐にきはくしく

おきてなんこと、 いかぶありなんて、上中おも

ひわづらひたれごも、此頃は例の賦など、軽くな

りける折からなればにや、兎に角にいなむ者もな

くて、やすらかにこさ行はれけり、か~りければ

冬の程は、誠に事繁けれども、春にもなりぬれば、

民の心ものどかにして、一筋に耕えくさきる業を

勤めけり、これらや姑息をとどめて、誠に仁政に

も叶ふさいふべからん、

一四

是も人倫を厚くせんさの御事なるべし、但常國に

ては、身を暇さいへり、又養子に娘をめあはする
事は、さらでもありなんこおもふものから、今は
天下のならはしとなりぬれば、あながちに禁じ
六月
士席以上、養子願書付、奉達尊聽、願之通被仰
付、養方に引取候上、御暇奉願、如願被仰出候へ
ば、何方へも無之、實方へ差返、別人養子奉
來候へごも、一度父子の致契約候上は、病氣
たりさも、容易に實方へ返候事は、有之間敷儀
こ被思召候、向後養子病氣等にて、御奉公難相
勤體に候はゞ、其旨書付を以て御暇奉願、同居
難成、久離に成候は、右之旨趣、前以双方よ
り、書付を以可被相達候以上、
其事以制其食べといへる本文の心にや、かとう
ければ、これらも家業を、ます(はげましけり、
一家中の侍男子なうして、人の子を養子にしつれ
ごも、さりがたきよしありて、共養子に家をつが

せざらん者の事につけて、寳暦六年の頃、被仰旨

あり、老臣家中に傳へて云、

一三

は出奔いたし、行方不相知、其子部屋にて罷

在、縦ひ幼少にて、右の譯不存こも、家督相續之

儀は難成候、尤他へ養子に遣候儀も難成候事、

但母、家女にて候は、其沙汰に不及候、右

之趣寄々、可相達候、

一往し延享四年の頃、出奔の子は、家督相織、又

は他の養子に遺候事も難成由、公義の御掟定めら

れし後は、むつきのうちの子も、母かくるまさな

きふるまひとつれば、罪に及されて、一生沈落せ

しを、君ふびんにおぼし召して、暦六年、家中

に命し給ふ旨を、老臣へて云、

明和五年六月

男子無之、聟養子被相願候而々、今までは往々

娘さ嫁壢仕らせ度段、被相願候事に候處、右之

通にては、間々存違の輩も有之様子に付、以來は聟養子に仕度さ、可被相願候、此段支配方へも可被達以上、

11

ふべうもなし、其内にても、名義のかえるこころ

をやおぼしめしけむ、明和五年、老臣傳申御旨に

士中知行代々相之事、大體常國の高に應ど、

古代之定有之處、中古より我等に及まで、新知

加祿等も総て世に申付、常國不相の高に至

り、後年勳労之者有之さも、可賞祿乏く、數世

前代の本意に背候依之慶安二年以前之知行は、

奮故の家に付、無相違相せしめ、右以後之新

知加は、代々相綏之高を斟酌して可申付候、

尤其身抜群の功労によつては、舊故の家に進し、

或子孫の材藝によつては、あながちに世滅すべ

からず、新加祿之儀に付、近年申渡置候趣も

有之條、何れも爲存知申聞くるものなり、

此條有來つる祿を減給ふ事を、君の御心には、

はち恐れ給ふなご承りし事もあれごも、誠に節度

なくては叶ふべからず、古の敵を世々にせしも限りありての事なるべし、此君一代の内、人の器用にしたがひ、相應の敵をあたへて擧げ用ひ、又は昔より功勞ありしもの~、子孫不背にして、所領放たれたるを、ゆかりをたづねて扶持し、召仕ひしめさる旨を、みづから書きてさづけ給ふ、其文に日、

一右の條定められて後、慶安三年より此かた、御被官になされたる家は、親致仕をこひ、又は死にたる時は、家をつぐべき子の行狀は、いふに及ばず、文學武藝の程を、委敷封事にして、組頭より奉る、父の功勞と子の材能さをはかり、抜群の者には新とても滅せられずして、親のま~給はり、さあらぬかぎりは、譬へば千石の所領、九百石、八百石抔、程々にしたがひて給ひければ、懲いちじるしく、家中の子弟はぢらひ、勤め學びて怠らず、大かたは交學にもうさからず、武藝も二品三

品、奥儀を極めたり、殊に師、馬役などは、技

藝をもつて奉公するものなれば、世祿すべからず

さて、皆廩米を給へり、家をつぐ千不育にして、

つたなければ、魏に口米をあたへ、 道を學

ばしめ、年を経て、上達するにしたがひて、敵を加

へらる或は親にまさりて、堪能なるものは、家督を

つぐ日、親の敵に倍してひたもあり、是は稽

給ひたるたぐひ、あげてかぞへがたし、初に此條

の掟なかりせば、いかでこれらの事、心に任せ給

ふべき、されば善政さいはざらめや、

有けるに、或時鷹野に呉し給ひて、此犬しばし牽
びて沙汰する事もあり、議や~定りて家老に告
げて、大事をばかならず、君に申て、御旨を受け、
小事は家老裁判す、家老、中老の座に大目附、奉行
座には目附そひ居たり、家老の附に佐貳役あり、
奉行に根取あり、何れも物書あり、かくてこそ奉
行所も事調ひけれ、おほやけの職員、もろこしの
周官抔は、天下の御政にて、 はしぐの國々にて
准へいはん事は、かたはらいたけれども、有可を
先にするこの、聖のをしへには叶ふべくもや、此時
の奉行共の議定したる事は、今も人の口にありて
目出度事多かりき、中にも志水才助は、世々
三百石を領したる士なり、満は父金右衛門致仕
し、清冬家督したる日、すなはち奉行役に命じ給
ふ、はたして其職に叶ひ、後には大奉行になされ、

所領加賜ひ千石になし、役料貳千石をそへて、

三千石の高にて、中老となれり、又蒲地喜左衛門

正定は、世禄百石の侍にて、 隆徳院殿の御時より

吹番といふことを務め

近侍し、君の御代になりては「納戸役の事を司りて

けるに事に溺れて圭にのみ言ひければ

11

一同じ年のこさに、諸臣を屋形に召集めて、ささしきてよごありければ、犬は犬率にこそひかせらるべしさてひかす、又あるさき御かたはらを掃くきよし宣ひければ、それは掃除坊主にこそ申付めさてはかず、かく何事もむくつけにいひければ」おのづから御覺えもよからぬ様に、人も見なし、其身も役を辭退なごせんに、いく程なく、役料五百石の高たびて奉行になし、後は所領くはへたびて三百石、納役料六百石添へて九百石の高になされ、ゆ~しかりしに、身にいたはる所ありて、辭職しければ、六百石の高賜りて、やすらはせたり、改政の時、殊さら心をつくして、此にては平太左衛門と共に、高名なりき、大かた度量ある人にて、物語多き事なり、すべて此頃より、人の器用ゑらびてあながちに祿の多少、族の盛衰によ

らず、元より士たらんものは、いふにや及ぶ、緒

方何がし田添何某さいふものは、農民なりしかご

も、其道に委しかりければ、侍さなして、領内の

農を司らしめ、後は所領をも紛ひたり、か～る

頼あげてかぞへがたし、

植ゑて、物産を知る便りあらしむ、是仁慈の御

心より出で～、病惱を救はしめむ爲めなり、

一此國のおさな達、昔より月番さいふことを定めて、

番に溢りたる人、其月の國務を沙汰す、又君國に

ましします時は、日毎に屋形に、出仕をもしつれご

も、江府にしませば、家にのみ居こもりて、家中

の者の賞罰をも、家にめして申渡抔せしを、かく

ては事の體たらくよからずさやおぼしけん、奉行

所さて城内に局務の所ありけるに、暦六年五月

より家老ごも、日毎にそこにまうで、萬の事を

も沙汰すべきよし仰付らる、か～りし後は、おさ

なたち、月番をやめて、日ごとの番をさだめ、一

人二人宛、必奉行所にようで、さて君の在國在

府をいはず、侍以上の褒美のたぐひは、皆屋形に

て申渡し、貶罰のみをぞ奉行所にて申渡しげる、

かくてこそ國務もいよく滞りなく、事の體も所

を得たりけれ、抑此實曆六年の頃、領内の仕置を

改められしこさげてかぞへがたし、是を此家中

にて曆改正と云へり、此頃君の御心盡されける

事、いはんかたなし、勝名以下心あひたる者がら、

一此奉行所さいふは、むかしより有りけれども、さ

きくは奉行所を、物頭の乗帶などにせしことも

ありて、おろ!しきさまなりき、又勘定奉行、

郡奉行抔をはじめ、其下の役迄、奉行の名を付

しに、此改正のころ、もろの役の奉行さい

ふ事をこめて、専ら此役の名し、段格抔も進

めて、蒲地喜左衛門、清田新助、村山何某、志水

才助抔いへる才ある者共を、ひたくさあげて此

職に補し、撰擧、刑法、勘定、郡村なご~、職掌

を分けられ、皆日毎にまうでしめて、其職分々々

の事を議す、又郡頭、勘定頭の局をも、やがて作

りつけたり、たさへば家中のもの、いかなる事

もありて、申状をさぐれば、組頭持ちて、こ~

に来て奉行に渡す、奉行取りて、家老の座にもち

行きて、事の様を申次ぎ、評議すべき由を家老申

せば、奉行退いて根取なごいふ者をめして、例

をかんがへさせなごし、又は勘定頭、郡頭抔を呼

さまぐ書付物などもて参りて、夜中にも御旨申

請ければ、まどろみ給ふ間もなくて明けはてける

事常にありきさぞ、

10

にはせくだりけるに、はや卒去ありて、御領に葬奉らんさて、御のならせ給ふ道にて行あひ奉り、悲歎の涙をおさへ、御柩に向ひて申けるは、此ま〜御供仕べう候へごも、今暫しながらへて、御跡の事をも、慥に見届参らせて、三年と申さん頃、必殉死仕りて、事のやうをも地下に告奉らんさて、其身はおつすがうて江戸へ下りぬ、其由聞えければ、此國の老臣ごも大いにおどろき、吉勝か日頃奉公のさま、此家中に並ぶものなし、今守殿卒去ありて、御世次いけなくましますゝ、か〜る時節吉勝なくては叶ふまじ、急ぎはせ下りて、なだめ候へさて、番騎衣笠形右衛門さいふ侍を江戸へ差下し、書曲をも寄せてさまぐに申さざめけれども、用ひずして、身に承りたる職務を、夜書さなく勤めて、今は事はてさて、慶安四年三月

二十四日、殿の菩提寺妙解院にて、腹切りて本意
を遂げたり、遺言にまかせて、所領を子供に分ち
給ふ、嫡子丹右衛門勝安、三百石、後加増して五百
石、其子次郎太夫勝行、其子平太左衛門勝名なり
君の御家をがせ給ひける頃、勝名未だ小姓組の
一暦六年の頃にや、郭外の角井さいふ所に、醫學
此寮明和六年郭
寮を建て再春館と名付
村井見朴、
内にうつさる
岩本原理を師として、領内の者に醫學を勧めら
る、また業吟味役さいふ役を立て、領内の
者共、年々療治せるうちに、大病奇疾は、醫案を
書き、よのつねの病は、たゞ芸人數をしるし、正月
ごさに、かならず醫業吟味の許に遣すべし、お
きて給ふ、是より醫師も、盆~書籍をかんがへ、
業を勵む事になりぬ、扨又道を學んもの、草の

やう知らではあるべからずさて、建部といふ所に、

薬園をひらきて、繁滋園で名付さまの薬草を

九

頭にて勤仕ける、用人に移され、いく程なく

寶暦二年七月、ぬけ出して大奉行になし給ひける

より以来、一國の仕置、此人はからひ給はざる

事なく、遂に中老を経て家老になし、所領をも加

へ賜ひて、三千五百石に至り、國の政事を委任し

給ふ事、凡三十年計、君の人を知らせ給ふ事の明ら

かに人に任し給ふ事の専らなり事如此、勝名か

其任にへたる程は、此國の政事に付けて、おの

づから見えければかならずしもいはず」

罪の軽きは、笞刑のみにてやむ、や~重きは、既

に笞ちて刺墨し眉をそり、或は一年、或は三年、

徒役に付く、是を徒刑さなづく、徒刑のものは、

あるかざり一ッ小屋に養ひおき、日ごとにの

五月

如此共罪戾、彼ニ非ズシテ此ニアリト謂ハザ

ルコトヲ得ズ、是舊典ナリトイヘドモ、治平久

シク、今ニ至リテ、時勢人情ニ齟齬シ、處置

ノ當ラザルコトアリ、於此、君候嚴命ヲ下、

革メンコトヲ議セシム、大ナル哉、民き恤ム!

徳、封内=布クコト、永々不朽善政ト云ァベ

シ、蓋シ今綿密律ヲ作ラシメ、國ニ施サル

コト、其美言フベカラズトイヘドモ、恐頓

カニ行ハレ難カルベシ、故先ヅ的大 救

シメベ、其餘類推スベシ、臣愚ナリトイヘド

モ、敢テ固辭スルコトヲ得ザルノ職二列ス、故

今ノ刑法ョ増損、コレヲ簡易ニシテ、僅ニ

數條左=録シ、シテ執政府下二呈ス、

其精詳ナルコト大明律ノ如き、伏シテ後ノ君

子ァ俟ット云爾、

寶暦四年甲戌夏堀勝名頓首謹言

「一此堀平太左衛門は、曾祖を平左衛門吉といひ

て、本は越前の者なりしを、君の御先祖妙解院殿、
忠利公未だ豊前におはし~時、御家人になされ、御
子光丸御曹司に付置かせ給ふ、此國に移らせ給ひ
ては、所領二百石給り、其後加増して七百石にな
て、光丸君家督ましく、肥後守光尚君にならせ
られしかば、いよ!恪勤けるに、慶安二年、
吉勝當國にありける頃、守殿東にて、御所勞以
の外なる由聞えければ、取物も取りあへず、關東
者引連れて、辰ノ刻匠作の所に至り、工匠の助け
になるべきことをいとなませ、未の中刻には、ま
た警固のもの連れて小屋に帰る、扨一日の賃錢を
さだめ置きて、其内三ッのニッは、其日(にあ
たふ、今一ッは止め置きて、其者の年季満ちてゆ
るさる時、都合してさづく、小屋のうちにてく
つをうち、むしろを織るなぎ、己々が業をして、
市にうることをゆるされ、年限満ちて歸る者は、
さづけ給ふ賃錢と、己が手業の代をたくはへもち、

是を本にして、かたのごとく世渡るわざにつき、

前非を悔いて、良民となるものおほし、

省く

一此國にて人をつみなふには、死刑、追放のニッの

みを用ひ来れるを、 五年の頃より、笞徒曌の

刑をはじめ給ふ、家臣堀平太左衛門勝名、御旨を

請けて、刑法草書一巻をつぶって奉る、其序に云

夫刑、一人ヲシテ萬人ヲ治ル道ナリ、一人

ヲ殺スコト至重ナットイベトモ、化ヲ梗リ俗ヲ

敗ルノ徒、其天誅如何故唐虞三代以來、

刑法アリテ、聖人ノ最モ重スル所ナリ、古墨

劓、宮、大辟/五刑ニシテ、異罪同罰、合セテ

三千條也、漢ノ相鬬蕭何、律九篇ヲ造り罪ノ輕

重細微分チ、音樂ノ調、十二律外出デズ、

度を仰付らる、されごも事にしては、中々下々

のわづらひさならん事をおぼして、今より三年の

間は、あり來りのま~にてもあれよか、寅の年

より、堅固に守るべしとなり、たこへば侍の衣服

は、總て表は紬木綿を用ひ、裏は帛をもゆるす、

其外は裏表ともに布木綿たるべし、女の衣服も、

大やう是に准ふ、たゞし七十以上十歳以下、幷醫

師、出家は、制外たるべしさぞ、こまかなる制

あれども、事げれば略す、

七

本朝公家ノ代、淡海公藤原不比等、和律十二巻

ヲ作ル、其後武家ノ世トナリ、此律モ陵夷シテ、

海内戰國/餘風=因循シテ今ニ至ル我藩二

死刑追放ノ二刑アリテ、盗者ノ初犯ヲ専ラ追放

二行と、郭外方幾里、或幾郡上限り、禁錮遠

近ノ差アリテ、一旦懲悪=似タリト云ヘドモ、

禁以外地テ、衣食便ヲ失フォト彌切ナ

レバ、縦悪ラ改悛セント欲スル者モ、肌寒

堪ヘザルノ愛已ムコトナク、盗心=復生シ、

所在地ノ害トナル、如此ナルトキが、何ヲ以

テ惡ヲ懲シ、何ヲ以テ害ヲサランャ、唯一國中
ニ於テ、害ノ處ァ遷スノミナリ、是白圭が水ヲ
治ル、都國ヲ以テ壑トスルニ近カラズヤ、然レド
モ初犯死ヲ宥メ、再犯死ニ處シ、其差アリ
トイヘドモ、已ムコトナキノ再犯ヲ死刑二處ス
ルトキ、則チ是ァニ陥レテ殺ス=リタリ
正各和スルト云フニ比シテ、律ト云フ名始メ
テ起レリ、歴代損益アリトイヘ圧、大櫱此九篇
二本ヅクト云ヘリ、近代ニ及ビラ、大明律尤
モ其精詳ヲ極々、
一實暦七年、同十三年、館榭において、子弟の文武
聞せられ、又参観のかごいで前、歸のはじめに
は、先登城有りて、直ちに學校に入らせ給ふ、か
(みづから勤めて導かせ給へば、其下たらんちの、
誰かは志をはげまざらん、されば講日の聴衆など、
年月に数そひて、所せまくなりたりければ、資曆
十年六月、重ねてかう!しき堂を建て、是を講堂

さして、尊明閣と名付、君みづから筆を染め、仰

止さいふ字をかせ給ひて、扁額させらる、月の

三八の日、講師一人、經書を爰に講ず、共日は家

老一人、かなら席にのぞむ、忠英老を告げられ

後は、足を総数さ定む、備頭、番頭、奉行、目

附なごいへるたくひ、役毎にかならず一人宛出で、

東席に別坐す、老臣の嫡子以下、皆北面して講を

聞く、其出入坐作を使番指揮して、威儀を正し、

ものいふことなからしむ、講師の座には能を設け

たり、君入らせ給ふ日は、託をば徹すれども、な

ほ君ささし向ひて坐せしめらる、是先王の道を君

に告ぐるに、北面せすさいへる禮を、おもひ給ふ

なるべし、

一箕暦五年亥の二月、諸士を御前に召て、衣服の制

の業を、みづからこゝろみ給ふ、是をさして、

其後も折々御覧あり、江府にまします年は、春の

末夏のはじめに、總かならず是をこくろむ、か

くて、皆々勤め励むうちに、殊に勝れたるを、年
に一度、講堂に呼集めて、總教其聞え有るよしを
稲携す、又其中に勝れたるを撰びて、君に告奉る、
質暦十三年正月十五日、講堂に召て、君の褒賞に
預るもの、百十人に餘れり、其うち五十餘人は
家の紋の服を給ふ、是よりして或は、二年三年の
内には必此事あり、人数もひたすらに増して、今
は年毎に勘賞を賜る事になり、すべて此家中の
子弟、才不才によりて、巧拙はあれども、形のご
さく文武の業を、ならはざるものなく、或は經書
詩文に長じ、或は武装に名を得るもの~多くなり
たるは、まさしく此君の恩徳なり、されば安永六
年の頃、國中の詩を集めて、楽洋集と名付て、梓
行せしに、作者貳百餘人なりき、一瞬の集には多
しやすくなしや、今は其數をニッ合せたるばかり
はありなん、

ならんは、いか計のなげきぞや、こし

せられて、

但右自殺之節、難通始末有之候は、病亂紛

無之候も、斷絶被仰付筈候事、

亂心にて自殺之跡目、前々より相續不被仰付事

に候へども、畢竟病氣之儀に付、此以後跡目相

續可被仰付旨候事、

一狂氣にて自殺せし者は、昔より子孫相續をゆるさ

れざりしに、君ふびんに思召て、賓暦三年、命じ

給ふ事あり、其旨を老臣傳へて、家中にしらしむ、

其詞に云、

ければ、暦の頃文式を作りて組頭抔にさづけら

る、元服婚姻よりはじめて、其事々々の文案あり、

又公事の消息に用ゐる殿文字の品を分けて、うち

見にも、其段其格さしらせたり、はじめはくだけ

たるやうに、人も思ひつれざも、顚てならはしさ

なりて、事よくさくのへり、

誠に氣血うけたるもの~、病におかされんをば、

如何がはせん、然るに自殺せし跡々は、老いて子

にはなれ、幼くて父にはなれ、偕老の妻の夫には

なれ、悲しみのうちに、所領をさ

寄方なき身と五

Fi

一箕暦四年、熊本之城二ノ丸の内に、學校を建て給

ひ、文を學ぶ所を時習館名付、一族長岡内膳忠

英を總、秋山儀右衛門定政を敢授として、訓導

師、句讀師なごいへるもの十餘輩あり、武を習ふ

所を、東榭西榭と名付、数多の武藝の品を分けて、

それの師有り、其數後は八十餘人に及べり、

家中にて侍ほぎの者の、年者からんをば、みなみ

な爰において文武の事をならはしめ、其内に分

きて秀でたるを、常に前中に居らしめ、居寮生と

名付け、是をひて、専ら勤學せしむ、たさひ農

商たりさも、俊秀ならんものは、館榭に入る事を

許さる、明れば暦五年正月七日、君學校に入ら

せ給ひ、定政孝經を講ず、畢りて文武の師を御前

にめして、ねんごろに、ねぎらひ聞え給ふ、是を例

にて、在國の年の始には、かならず入りて講談を

かるに、此君の御情によりて、か～る不幸にあひ

ても、人なみに所領たびて、行末めで度召仕はる

～もの、今までもいくばくぞや、それらは子々孫

々に申傳へて、此君の仁恩、しばしもわする間敷

事なり、

被相澆候、若相違之儀有之又は後年ともに沙汰

右之條々支配の寺々より可被申渡候、畏候書:

由來之書附をも、五月十五日限不洩樣差揃、

一元祿年中改之節書出に洩れ、又は其後いつにな

く庵室を構へ、在中に居住仕候坊主之事、

右は急度其所引拂可申事、

一在中心前夕小社小堂有之、堂守等之坊主据置

度由、尤寺號唱不申、佛壇も不仕佛事説法も仕間

敷山、下方より依願、御免被成置候坊主之

右は其社内、若は其堂趾之近邊に、小家を建居

住之分は、今迄之通、堂社も遙かに隔て之居

住は雅叶候間、社内に僞地有之は其社内に、品

地無之は共近邊にて、和之所柄に家を移し可

申候事、

但右之内、往古より譯有之庵室は、相續可被仰

付候條、右類の庵室、二間梁に七間以上は停止

之、且又相續以後、庵室に妻子は不及串、女人

之居住可爲無用、尤相續之僧、當時住僧之子に

て、母姉妹之類有之は、共節に至り相達次第、

遡吟味及沙汰害、

一家中之者之申狀、思ひくにして、一定ならざり

御發駕前、監物殿へ御意有之候は、惣體御家中

之面々、座席又は役方に對し、餘り敬過候歟さ

被思召上候、依之は自然とへつらひヶ間敷風俗

も夫に應じ可申被思召上候、尤人により、當

時まで程能相心得候も有之、又は無禮之體之者

も可有之候へごも、敬不申樣偏に申間候はんこ

にては無之候、彼是見合候て、心を付候やうに

御意有之候、此段承置寄々申開候樣に、去三

日監物殿へ御申聞候事、

かくて今迄違犯之者貳百人餘を、或は本寺或は師

の房に返しやり、六十八除は住居其身を限る抔沙

汰せしかば、還俗して農民になるもの多かりき、

一禮は尊卑を分つものなり、うやくこうして禮な

からんは、いたつがはしく、はてはへつらひにな

り行きなん事をやおぼしけん、賓曆三年三月、有

司申傳へける事あり、

筋相背候僧は早速其所を追立候筈に候、惣て支

配之寺々より兼て委敷可被申付候、違却於有之

は、支配之寺々にも、可爲越度事、

四

一新規の寺社建立停止のよしは、おほやけの御掟な

れば、領内にてもこより厳重に沙汰有けれども、
殺間敷者を殺しては、再び生くべからず、天道の
恐是に過ぎたることなし、せめては、所領もちた
らん侍に申付て、共司させよさて、暦元年、平
野權九郎、村上市右衛門さいふ侍にぞ命じ給ふ、
是ぉしていよく推問私なくして、無實の罪かう
むるものなかりけり、中にもこの檻九郎時成さい
ふもの、殊に其任に堪へたり、或時壹人の囚、白
狀極まりて、此上はいか様の厳科に處せらるさも、
恨なきよし、手墓をもしければ、首切らるべきに
究りけるに、權九郎いかゞ思ひけん、此囚の罪決せ
らる事、今しばらく待ち給へごいふ、時の奉行、
如此罪明白なるうへ、何事をかまへつべきざい
へば、權九郎いやく、思ふ仔細有りと、あながち
に申せば、共旨に任せたり、夫三年計ありて、
はたして首罪のものあらはれて、初の囚は命たす
かりぬ、扨こそ權九郎見る所有けるよさ、人皆咸

心しけれ、總て君の人を召仕ひ給ふに、各器に

あだれる事如此なりき、

三

真宗寺通寺と名付、在中所々に有之、又は往古

寺跡で申傳候由を以て、致居住候坊主之事、

右は元祿十五年寺武本末改之節何方通寺と書出

其通無仰付置候儀畢竟小庵を御免無成置候、

處自然と堂合數を建、門徒も有之内證其寺號を

唱候由相聞、不屈之至に候、依之此節は所を引

拂可被仰付候へごも、數年致居住急に参向きも

有之間敷候條、當時之住僧一代は今迄之通御免

被成候、後人相續難叶事、

右は其僧一代之居住は御免被成候、跡入相續難

叶候事、但隱宅等之儀も右同斷、

一依願在中居住追々御免被成置又は前々よりの住

所、川塘之障に相成、中興所替被仰付置候坊主

之事

在中に居住之坊主之儀に付、先達て寺院一統及

沙汰候處、段々願之趣も有之、今以不相究儀有

之條、左之通、

いかさまにこしらへて、寺院めかしき所出来る

絶えざりしかば、暦三年四月、有司御旨をう

けて、本寺々々に印傳へける、牒書

一在中風俗不宜、今以下役人熱計之内不直之儀

も有之趣相聞え候、定郡奉行ども委く心を付

申にては可有之候へごもはき改候程之事も無

世

八月

其日、老臣もまた申傳へたる事ありことに注す、

御歸國以後御國中の儀、追々被開召候處在中之

儀も、未だ抄方待斗無之様被思召上候、去々年被

仰出候趣に付ては各委く心を付被申にては可有

之候へごも又怠なく取計、追々相改り候様可

被仕旨被仰出候、別紙頭書之御書付、各へ急度

被仰渡にては無之、拙者可申閉旨にて御直に

被遊御渡候付、寫之相渡候間拜見被仕、彌以無

油斷取計可被申事、

在中之儀、郡奉行共心得次第、抄方精粗可有候

郡村之風俗は、其所々に違も可有候條預置候郡

〃村は、一統の見合せなく、銘々存寄抄方可申付

候事、

かふまつる家士を、皆御前にめして仰らる旨あ

り、云、

一此國にで囚人を糺問するものを、穿鑿役と名付て、

昔より徒の者の職なり、其身いやしければ、もろ

こしにいへる獄をひさぐ類なきにしもあらざらけ

るに、此役は大事の役なり、もし聞誤つことありて

「夫民は邦の本なれば仕置のはじめ、ことさら是を

こそ沙汰し給ひつらめ、夫いよ!本かたくし

て邦やすかりき」

以上

省

但新役古役之差別無之、隨分無覆藏可申談候

一事を恐れ無事を好み、身かまへまでを仕候ては、

支配行屈可申樣無之候此儀何れも覺悟之前たる

べき事、

一郡奉行ごも執計之儀下々之儀を委く不存知候て

は間違之儀も可有之處、平生權高に心得候て下

方の儀に疎く下役人之申立計を據さして、執計

申者も有之にてはなく候哉さ候へば不將之至に

候事、

之段は、未だ何れも心懸薄き故にては無之候哉

其上善悪を糺候樣成儀も不相聞候はき在々の

事に候故、旁不審候事、

二

諸事清廉に取計可申段は、先代よりの趣之事に

候、然る處、近年ま~不直の輩も有之、難差通

儀に付、其段申付候、此儀人の撰よろしからざ

君の別館、芝の白銀臺にありしかば、世に銀臺

侯こも申き、此冊子の名、それをかれり、

一寛延元年の夏、初めて入國し給ひき、 共冬家中諸

役者心得べき條々、自ら書てしめさせ給ふ、

其第一の箇條に、

細川越中守源重賢君は、霊雲院殿 宣紀君 第五の御子

なり、御兄隆徳院殿 宗孝君の御養子として、延享四

年、封を襲ぎ、肥後の國弁豊後三郡の内、都て五十四

萬石をしろしめし、従四位下に叙し侍に任じ、明

和六年、左近衛權少將に轉任し、國を保ち給ふこと

三十九年、御年六十八歳にして、天明五年十月二十

六日、卒去ましくき、武州品川東海寺中妙解院に葬

奉り、御墓に靈感院殿前林將中太夫徹巌宗印大

居士と題す。

銀臺遺 事〔1〕.

都て我意を立て、權を箏ひ、 功を奪ひ候は、未練

の至りと、深くいましめ給ふかりける後は、

聊も存寄ある者は、皆封印の書付を奉りけ「れば

下の情も能上に通ひ、役々の司なごいふものも、

皆恐れつくしみて、不法の事なかりけり」

一同役数多あるもの、事を同じやうにせむさすれば、

互にためらひて、職掌を如し、賢愚の分ちも見

えず、おのづから世のおさろへさなり行く事、も

ろこしにいへる陵夷のたぐひなるべし、か~る理

をや思召けん、寛延三年八日の頃、領分の郡代つ

役頭を恐れ、無是非不訴出候に付、第一我

等爲に相成不申候、依て此以後、軽輩たりこも

志有之者は、其人の高下によらず、支配々々

で、存寄封印を用ひ差出可申候、隣政の儀は、我

等存念計にても不相行候、貴賤一和をもつて、

治國に至候に候、何れも可相考事

るは、我等不育に候哉、又は役頭々々の依怙贔

負よりの申立により候哉、正道を取失ひたる儀

存候、兎角私欲の筋にて、申付置たる筋道

違ひ候故、末方の者及迷惑候へごも、末方の者

締了公御付箋 存在者姓名出し不苦候

當時政府の附 此遺事中御家來中之姓名を出し候儀巳に果候者は苦かる間敷當時存在之人は貴賤無差別一切姓名出し被申間

敷候其外此節之しらへに可相省儀夫々付札之通可被相心得候

一松井、米田、有吉三氏はいつれも萬石以上を領して譜代家老なりその外時の家老中老な嘉謀嘉猷さ

こそはおほかりつらめしかれても帷の機密は末臣のしるへきにもあらすしるすへきにもあらすた

た堀勝名らか擢用のしたいはあらくしるしぬ

一身よりして家々よりしてはきはまりたる弟なるにことには國の政務を首にあけたるは世のあま

ねくれるところをさきにせるなり江河の浩々たるをみん人のやうやく濫觴をたつねんことを思ふ

のみ

一此冊子政務にあらはれたる事はすこぶる年のしたいによりてしるす先後する所をこらしめんとなり

その餘は思ひ出るま~にして詮次なし

凡例

银臺遺事

志能數多禮七卷

二 葉集抄二 卷

祭禮通考一卷

時習館學規一卷

玉山詩集六 卷

玉山遺稿十二 卷

官職制度考五卷

官銀臺拾遺一卷

一

臺附錄四 卷

卷：

銀臺遺 銀

肥後文獻叢書第一卷目次

銀銀.......

1

五一七頁

五四六頁

四一一頁

三六二頁

三四九頁

三五六頁

二二〇頁

一〇五頁

九四頁

頁頁

頁七六頁

*

編

明治四十二年五月

概園、灭田翁等の家號、元治元年正月二十一日、七十三歳歿せ、

五

纂員識

惟典卿は、和漢の學に通じ、特に和歌に長せん人なり、寛政五年九月二十六日、年六十二にて歿せり、

このすたれは中島廣足の歌集なり、一より六までは板本あるも、第七巻はいまだ上木せられずあり

彌富濱雄氏の藏本に由りて、本巻

本巻に登載したり、足は通稱を市太郎と云ひ、後に太郎と改む、

玉山詩集、玉山遺稿は、ごもに玉山の著に係る、詩集はその生前に、遺稿は死後に上木せしものなり、

二葉集抄は、従四位上阿蘇大宮司惟典卿の歌集にて、其子惟馨の集めたるものなり、もと十二巻なる

を、浩瀚なるが故に、宇野東風その十一を抄録せしものなり、

時習館學規は秋山玉山の撰する所にして、藩學時習館の學則なり、玉山は名を定政、字を儀右衛門さ

稱す、玉山はその號なり、祿百石を食み、藩學の建設に力を致し、その教授と爲れり、寶暦十三年十

二月十一日、六十二歳を以て歿せり、

本書は古城貞吉藏本を原本とし、帝國圖書館本を以て、校訂を加へたり、

昔陽は名を禍、字を公炊と云ひ、重次郎さ稱す、昔陽はその號なり、明和七年に江戸に出で、漢唐注

疏の學を以て生徒を敢授せり、兄愛日に嗣子なかりしかば、その後を継ぎ、江戸定詰外様御儒者と爲

りしが、文化三年四月朔日、七十歳を以て歿せり、

本書は河島豊太郎氏藏本を底本として熊本物産館本、及び武藤嚴男藏本を以て校訂を加へたり、

祭禮通考は古屋陽の著にて、經義に據りて祭禮を考へたるものなり

、

四

四

一瑞は名を昌榮、通稱を儀太夫と云ひ、致仕の後一瑞さ稱す、可申、又松濱と號せり、加藤家の臣森

本儀太夫の後なり、細川家に仕て世祿百五十石を含み、北條流軍學師範役たりしが、安永十年に老を

以て致仕し、天明四年十一月朔日、八十歳にて歿せり、

古城考は森本一瑞の撰にて、肥後及び豊後の内、細川家所領内なる古城二百七十五ヶ所につき、その

所在、城主、及び事蹟等を考へたるものなり、

本書は井田幸男氏藏本を原本さして、熊本物産館本、及び河島豐太郎氏藏本を以て之れを校訂したり、

垣塚文兵衛は名を尹長、字を成章と云ひ、東皐と號す、 步段より奉行所書を経て根取に進み、祿百

石を賜りたるが、文政九年七月十三日に歿せり、

官職制度考は、垣塚文兵衛の撰に係り、熊本藩治の要領、官制組織、吏員の職務等を記逃せり、行文

晦澁なるのみならず、誤寫極めて多きも、肥藩曆の改正、其の組織制度を見るを得べきもの、 獨

本書あるのみなれば、その僧値亦頗る大なりす、

銀臺拾遺は、吉山壽安の序に由りて、高瀨武昭の撰なるを知るも、武昭の事蹟は明かならず、序に『高

瀨武昭每侍遊山翁膝下』 記せるが、遊山さは高瀨文正の號にて、遊山に武隆、 武陳、 武毅、武

敷、隆輝、武綱の六子ありて、武昭の名見えず、姑らく後考を俟つ、

自ら其間に於て窺ひ知ることを得べし、

銀亭附録も亦高木紫溟の撰に係る、序文を接するに本文は都べて紫の筆に成りしものにあらず、紫

淚は人々より得たる材料を、其儘按俳したるに過ぎざることは、本文中に特に一格を下げて、これよ

り奥は云云と記し、又秩祿を以て云云と記したるを見て、これを知るべし、附録と名づけたる意も、

紫溟は、名を順、字を子友さ云ひ、敬臟を通稱せり、紫溟はその號なり、和漢の學に通じ、世祿二百

石を食めり、風に世を厭ひ阿蘇山中に隠る、阿蘇惟典迎へて賓師とせんが、重賢公の世に召されて藩

學訓導となり、後に教授と爲る、文化十年十二月廿六日、七十六歳を以て残せり、

紫溟の意見書、及び當時用人たりし竹原勘十郎の書付は、均(本書撰進の際に於ける實情を窺ふに

足るべきものなれば、参考のためこれを附載せり、

銀臺遺事は、細川重賢公の事蹟を撰述せしものにて、著者は高本紫溟なり、紫溟藩命を奉じて本書を

撰し、寛政二年を以てこれを上る、齊公思召ありて、所々削除したまふ、紫溟乃ち意見書を常路に

上りて、微意の存する所を條凍せんが、途に定本たるに至らざりしもの~如し、原本は現に細川家の

北岡文庫に残せらるが故に、本書はそれを底本として、公の削除あり所は、括弧を加へてこれを

示せり、

考一巻、時習館學規一巻、 玉山詩集六巻、玉山遺稿十二巻、二葉集抄二巻、志能數多禮七巻、都合

十一種を輯録したり、その解題大要は、即ち左の如し、

11

1

一本書第一巻には、銀臺遺事四巻、同附銖一巻、同拾遺一巻、官職制度考五巻、古城考三巻、祭禮通

一本書は、もと三四同人の計畫に成りたるものにて、編纂の方法も、亦當初より一定の體例を立てた

るにあらず、探逸輯散、得るに随ひて、これを按排し、以て巻を成したれば、雜駁にして大序なき

の議は、固さより編者の甘受して餅せざる所なり、

一文字上に於ける訛誤に對して、臆改を加へざるが如く、事實上に於ける誤謬にしても、亦假合ひ

明かにその誤謬たるを知るものと雖、赤敢へて反駁を加へず、唯時として一二の注意を示したるは、

讀者の考察に便にせんが爲めに過ぎず、何となれば、事實を顕彰せんが爲のに、古人を捨擊するは、

固より本書の目的にあらざればなり、

以て志とせり、書中時として疑はしき點ありさしても、敢へて私意を以て改竄することを爲さず、

務めて疑ひを以て疑ひを傳へんことを期せり、故に假名遣、語格、字句等に於ける誤謬の如きも、

多くは奮に仍りて、之れを改めず、其の最も疑はしきものは、時に旁注を加へたり、思ふに轉々抄

寫の際に於て、訛誤を重ねものも、必らず少からざるべし、

一本書は、も肥後の文獻を保存するを以て、起見したるものなれば、專ら古人の遺書を検刊するを

三

ものあり。然れば本叢書の世に出づる、一面に於ては以て古人樸學得力の處

、其の精神氣魄の如何さを窺ふを得べき同時に、又他の一面に於ては、往

時の風俗、制度、文學、歴史、教育、技藝等の大較、その源委を察するを得

るの便あり。世上有心の士、本叢書に對して反覆沈潜せば、自ら其間に於て

幾多の史料、幾多の教訓、幾多の趣味を發見するに難からざるべし。本書第

一巻成る、乃ち當初世に發表したる趣旨書を節録して首に冠す。明治四十

二年五月武藤嚴男宇野東風古城貞吉同序

に聞ゆる所なきに至らんこす、豈亦哀しむべからずや。是に於て吾等後輩、不

背を顧みず、背謀りて古人の遺書言行を蒐輯し、次第排印し、以てこれを不

朽に傳へんご欲す。爰に名けて肥後文獻叢書さいふ。敢へて自ら肥後の文獻

制度、集成して此に存すゞ謂はざるも、後の君子、若し肥後の歴史、風俗、制

度、文學、教育、技藝等に於て其信を考ふるあらんこせば、赤必らず此に於て

捜羅するの最も捷徑なるを信ずるなり。由來肥人の俗樸茂を尚びて浮華を喜

ばざりしが故に、其碩學鴻才亦多くは其の著述を世に公にすることなく、

たら一生の心血を筐底に滅して、空しく蠹魚の蝕に飽かしめたるのみならず、

後世子孫、赤以て幽德の光を登場するここを力めず、其遺書流落散亡して復

た見るべからざるに至りももの、極めて少しさせず、其の幸にして今尚子存

するもの、多くは寫本に係るが故に、その流傳、甚だ弘からず、僅かに一

二好古家に珍藏せらる~ のみにして、一般の讀書家に神補する所鮮く、世人

は全く其書の内容如何を知らず。 甚しきに至りては其書目をすら聞知せざる

1

元和偃武の後、徳川氏意を文教に用ゐて其治を輔けしより、大小の諸藩、亦

これに倣ひて多くは學校を興し、學者を重用せり。元祿より寛政の際に至る、

此間百餘年、罐虞の治、最も其盛を稱す。是の時に當り諸藩明君賢宰、前後

其人に乏しからず。中に就きても我肥後靈感公の世、治化休明、多く其人を

得たりしが如き最も其のを見ざる所にして、或は政事經濟を以て稱せられ

たるあり、或は德行道義を以て顯はれたるあり、 學術文藝を以て知られたる

あり、其他武技醫方測算等に至るまで特才異能の士彬々輩出して各~其技を

獻えたり。而して肥人樸實の風、此時に於て最も盛にして、忠厚の俗、實に

此時に成れりさいふべし。然れども世換り時移りては功利の見、詭遇の思、赤

其間より生出せずこせず。明治維新の後に至りて又一變し、其流風遺繹の人

に在るもの、嘉言懿行の載記に存するもの、亦均しく將さに湮滅して世

肥後文獻叢書序

細

川

成書

故

國

文

獻

故國文獻

7bw

肥古城武

東京

隆

宗

後

獻

野藤

貞東嚴

吉風男

同

編

食

書

箴

一卷

版

肥

古宇武

城野藤

貞東嚴

風男

后

編

京

獻

隆

文

館

版

1